
ノスタルジア

塚原宏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノスタルジア

【Nコード】

N0435B

【作者名】

塚原宏樹

【あらすじ】

トレジャーハンターの少女エレノアと、人造人間の少女ロゼッタの二人の友情の物語。古代遺跡でロゼッタと出会ったエレノアが彼女を取り巻く1000年越しの因縁に巻き込まれていく。果たしてロゼッタの正体とは？そして失われた記憶を探す旅がここから始まる！少女達の織り成す楽しくもどこか切ない、バトル&ダークファンタジーです。

第一章 ファーストコンタクト（前書き）

初めまして、作者の塚原宏樹と申します。この度は今まで自分の中で温めてきた物語を小説として皆様にかけてもらおうと思い、この作品を執筆をさせていただくことにしました。全くの初心者ではありますが、暖かい目で見守ってくださいと作者として幸いでございます。それでは、ノスタルジアの世界をどうぞ堪能ください。

第一章 ファーストコンタクト

…なんだか妙に腕がかゆい。私は腕のかゆみに目を覚ました。ゆっくりと開いた目には朝日がまぶしく映った。私は寝袋からはい出てテントを出ることにした。テントを張った場所から少し歩いた場所にある小川で顔を洗い、それから今自分がこれから何をすればいいのか小川のせせらぎと小鳥の歌声を聞きながら考えた。まずは虫刺されでかゆい腕をなんとかしたかったが薬なんて持つてゐるわけがなかった。しかたなしに小川の冷たい水で洗ってみた。…効果はもちらんなかった。

私はエレノア。トレジャーハンターとしてあちこちの村や町を転々としながら旅をしている。トレジャーハンターとゆうのは遺跡や洞窟といったダンジョンでお金になりそうな宝物を捕って生計を立てる職業だ。つまり、悪く言えば一種の泥棒だ。泥棒といっても山賊や海賊みたいな人殺しの盗賊連中とは違う。人殺しはしない、それが私のポリシーだ。

「さてと、まずはテントを片付けるとするか。あーあ、ちゃんと蚊取り線香を用意しとけばなあー…こんなかゆい思いしなくてすんだのに！」

そんな文句をブツクサ言いながら荷物をまとめ、ついでに朝ごはんも食べてみた。

「今日の朝飯は干し肉と川の水か。たまにはまともな飯が食いてえなあ。そもそも、こんな栄養素のケケラも無いようなもんばっか食ってるからいつまでたっても胸が小さいままなんだよ私は！うん、きつとそうに違いないんだ！！」

こんな感じでマズイ飯と女としてのコンプレックスを無理矢理関連させてみるが別に誰が聞いてるわけでもなく、悲しい独り言になってしまった。

「…っと、こんな事してる場合じゃねえや。今日はこの森の南の古

代遺跡に行ってお宝をちょうだいしなくては！」

先日を訪れた町の人の話によると町の南の森のさらに南、つまり今私のいるこの森の南の奥地にかつて栄えた古代文明の遺跡があつて、そこには『とんでもない』お宝があるらしい。私はそれを探しにわざわざこの居心地の悪い所に来たのだ。だが目的地まではそう遠くはなかった。幸いにもお昼前には遺跡にたどり着くことが出来た。

「コイツはすごいな…」

そこは遺跡と言うより森と一体化した芸術作品と言つた方が正しかった。もつとも、私は芸術などにはまったく興味はなかつたが。とりあえず遺跡の内部に入らなければ始まらない。しかし、遺跡は長い年月の間に森の緑に埋もれてしまつていてどこから入つていいのかさっぱりわからなかつた。私は腰にぶら下げていた鞘から刃渡り30cm程度の大きなナイフを取り出した。

「とりあえずコイツを使って入口探さないといけないな。てゆーか誰か草刈りぐらいやつとけよな！」

自分はなんだか最近どうでもいいような独り言が多くなつたような気がした。

草刈りを始めてから一時間あまりが経つた頃、ようやく中に入れそうな入口らしき穴を探しあてた。

「ココが入口か、なんだか薄気味悪いな。まあ、ここまで来て帰るわけにはいかないからな。さつさとお宝をいただきますか！」

独り言でテンションを無理矢理上げてから私は遺跡の中へと足を踏み入れる。

遺跡の中はとにかく暗かつた。懐中電灯の光も一筋の光に過ぎない。だが私だつて一応プロのトレジャーハンター、従つてこうゆう状況には慣れていてもりだ。手元にある地図によると遺跡の中にはいくつかの部屋があり、私は一つ一つ物色していくことにした。しかし、いざ探してみると見つかるのはガラクタばかりだった。以前に誰かが盗みに入っていたのかそれとも元々なかつたのかはわからない

いが私の期待していたような金銀財宝は一つも無い。

「畜生！なんだよこの遺跡は！貧乏にもほどがあるぜまったく！」

私は怒りを抑えられなかった。近くにあった石ころを蹴飛ばした。

「こんな苦勞して来たのにあんまりだよ！こんなことならわざわざ迷彩服なんか着て来なきゃよかったんだ。そもそも…」

そこで独り言は止まった。背後に何者かの気配を感じたからだ。振り向くとそこには黒っぽい犬のような動物が牙をむき出しにしている。なっていた。

「…モンスターか」

モンスターとは動植物のなかでも人間に危害を加えるものの総称だ。なかには人型のものや物に命が宿ったものなど種類は様々だ。

「今はあまり戦う気分じゃないんだけど」

そう言いつつも私は腰のホルダーから愛銃の44マグナムを抜いた。次の瞬間、跳びかかってくる相手の額めがけて銃弾を撃ち込んだ。

構えた両手に発砲の衝撃が伝わった。相手の頭は粉々に砕け散り、辺りに血と脳みその破片が飛び散った。相手は地面に倒れて動かなくなった。

「さて、何かしら金になるものを見つけないと…タダ働きはゴメンだからね」

銃をホルダーに戻し再び遺跡を探索することにした。

「これ以上モンスターと遭遇しなきゃいいけど」

私は心から願った。

…どのくらい奥深くに進んだのだろうか？私は地図には掲載されていない部屋にたどり着いた。そこは遺跡の最深部のようだった。

「ここは…？」

その部屋は厚そうな二枚の扉に閉ざされていた。扉にはなんだか不気味なドラゴンや悪魔が描かれていた。

「あと調べてないのはこの部屋だけだし…でも地図にも載ってないなんて…お宝の二オイぶんぶんって感じ！」

私は無性にワクワクした。試しに扉を押ししてみると以外に簡単に開いてくれた。部屋の中は驚くほど広かった。まるでオペラを上演する大ホールのようなだった。そして部屋の奥に何か光る物体があることに私は気付いた。

「あれはなんだろう？」

ここからではそれが何かわからなかった。私はその物体に近づいてみた。

「……！！」

私は言葉を失った。それは人間の女だった。いや、正確には『人間の形をした何か』だった。それが巨大なカプセルのなかで透明な液体の中につかっている。カプセルの下からは沢山の泡が吹き出していた。

「コイツは驚いたな……」

大抵の事では驚かないつもりだったがこればかりは驚かざるを得なかった。私はしばらくそれを見つめていた。性別も体格も共に私と同じぐらいで、髪は赤く肩より少し長い。

「色白で綺麗な肌してんなあこの娘。……胸も何気に大きいし」

なんとなくぼーっと彼女を眺めていたその時だった、彼女の目が半分ほど開いた。その真紅の瞳はまるで私に何か語りかけるかのようはこちらを見つめている。

「ココ カラ：ダシテ：オネガイダカラ」

不思議な声は私の頭の中に直接語りかけてきた。

「え？う、うん。わ、わかったよ ちよつと待てって」

私は正直少し怖かったが彼女をこのままにしておくわけにもいかなーいと思い、カプセルを開けようとした。しかし、どうやって開ければよいかでんでわからぬ。

「少し手荒になるが：仕方ないな」

私は愛銃^{マグナム}をカプセルに向けて構え、一発おみまいしてやった。カプセルは凄まじい音と共に割れ、中の液体が勢いよく吹き出した。私はその液体をモロにかぶってしまった。

「うえっ！なんじゃこりゃ！しょっぱいや！」

…なんだか濃いめの味噌汁みたいな味がした。

するとカプセルから這い出たその少女は私にこう話しかけてきたのだった。

「いやあく助けてくれてありがとうねえ！ホントあなたわたしの命の恩人だよお！名前なんて言うの？何歳？好きな食べ物は何？なんでここに来たの？友達になつてくれるの！？」

目の前の赤髪の少女の質問にどう答えていいか困った。

「はあ？えつとお…とりあえずさ、服着てからゆっくり話さないか？落ち着いてくれよ頼むから」

さすがに相手が素っ裸では話にならない。

「うん！そ〜だねってなんでわたし裸？」

赤眼の少女は自分の体を見渡してそう首を傾げる。

「そんなこと知るかよ！とりあえずなんか着ろよ！」

「ええ〜そんなものここには無さそうだし…とりあえず葉っぱ三枚で大事なところを…」

やってられない。私は荷物から一枚の大きな布を取り出し彼女に渡した。

「わあい！ありがとう〜！これ着ればいいんだよね？」

「こんなボロ布で喜ぶなよ！いいから早くはおれよっ！ハア…」

私の口からはついついため息が出た。

懐中電灯下部にに付いてる蛍光灯が放つ薄灯りの中、私たちはお互い話し合ってみることにした。最初に赤髪の少女はこう切り出す。

「はじめまして！わたしロゼッタってゆうの。あなたは？」

私はこう答える。

「私はエレノア。突然で悪いがお前は何者だ？少なくとも人間じゃねえよな？」

そりゃそうだ、色んな意味でこんな人間がいるわけがない。私は彼女が何者か知りたかった。

「ピンポン！大正解！実はわたし、人造人間なのです！」

「人造人間…？なんじゃそりゃ？」

私がそう聞くと少女は、

「えっとね…つまりは簡単に言うと人間に造られた人間ってことかな？」

と笑顔で答えた。

「その人造人間がなんでこんな昔の遺跡にいるんだよ？」

私が少し怒ってそう聞くと、

「そりゃ〜昔ここに住んでる人がわたしを作って…あれ？それでどうしたんだっけ？」

少女はそう首を傾げた。

「どうしたんだっけて…じゃあお前なんでここにいいのかわからないのか?!」

ロゼツタは少し考えてから少し悩んだ表情でこう言った。

「よく思い出せないの…確かなんかの理由で大昔このカプセルに閉じ込められたような…理由は忘れちゃったけど」

そんなことを言われても、正直答えになっていない。

「忘れちゃったって…なんて能天気な野郎だ」

私が心底呆れていると、

「ねえねえ…えっと…エレノアくん？エレノアちゃん？何歳なの？」
彼女はそう聞いてきた。…エレノアくん？私はその言葉に正直少し

傷付いた。

「私は17歳の女だよっ！私をなめてんのか?!」

すると彼女は笑いながらこうも言った。

「ゴメンゴメン！だって女の子の割にはガッツで胸小さくて」

私はグサツときた。

「やかましい！ガッツはともかく胸は大きなお世話だっ！」

何の悪気もなさそうに言うところが余計に腹立たしい。

「てへへ…またまたゴメンゴメン！まあ、こんな所で世間話もなんですから遺跡の外に出るとしますかぁ」

…どうやら完全にロゼッタのペースに翻弄されてしまったようだ私は。だが確かにロゼッタの言う通りだ。私としても早いところ外に出たかった。

「…わかったよ。さっさとこんなところ脱出しよう。」

早速ロゼッタの提案通り、私はもと来た道を戻り始めた。もちろん彼女も一緒に。

「まったく…なんで私こんなについてないんだろう。最悪の日だよ今日は！」

「そんなことないよ！だってノアちゃんはわたしと出会えたんだしさ。友達増えてよかったじゃん！」

「お前に出会っちゃまったこと自体が災難なんだよ！てゆうかなんだよノアちゃんって！勝手に人さまの名前省略すんなよ！」

「だってエレノアちゃんじゃあ言いづらいんだもん。それとわたしのことはお前じゃなくてちゃんとロゼッタちゃんって呼んでねノアちゃん」

彼女はケラケラ笑いながらそう気安い態度で私に話しかける。

「誰が呼ぶかつ！っ！かその呼び方やメロって！」

…まったく先が思いやられる。

「もうすぐ出口だ。平和な場所でもよかったよ。モンスターもザコが一匹いただけだったし」

私がそう余裕をかましていると、ロゼッタが顔色を変えてこう言い出す。

「それはどうかなあ？なんか近くに魔物の気配がするんだけど？」

彼女はそう言うのだが、目の前に広がる暗い通路には何もいない。

「？そうか？私は何も感じないが…」

「今にわかるよきつとね」

そう彼女は不適な笑みを浮かべる。…ロゼッタの言う通りだった。

さっき私が入ってきた穴の近くに巨大なモンスターがいた。あえて言うなら馬鹿でかいイノシシのような姿をしている。向こうは鼻息も荒く明らかにこちらに殺意を抱いていた。私は銃で応戦しようとする。

してあることに気付いた。…火薬が湿気で使えなくなっていたのだ。そう、カプセルを破壊した時に大量に水をかぶったから。

「畜生！こんな時に…！」

残る武器はナイフだったがあんな大きな魔物をナイフ一本で殺せる自信は無かった。

「あれえ？もしかしてノアちゃんお困りかなあ？」

ロゼッタ彼女がまた不敵な笑みでそう聞いてくる。

「だからその呼び方ヤメ口って！ああそうだよ！メチャクチャ困ってるよ！」

「じゃあさ、もし無事にここから出られたらわたしのお友達になってよ！それでノアちゃんって呼んでもいいことにしてよね！」

こいつはいつたいこんなときに何を言いだすんだ！？そう思いつつも私はこう言った。

「あたりまえだ！無事に生還出来たら友達でも奴隷でもなんでもなつてやるよ！とにかくここは逃げるぞ！」

私がそう言うと、

「逃げる？何故？」

ロゼッタは相変わらずの不適な笑みを浮べてそう言った。

「はあっ！？なぜって…お前モンスターに食われたいのか！？」

私がそう言っても彼女は全く動じる様子が無い。

「まさか…要はあのモンスターを殺せばいいんでしょう？」

そう言うと彼女は魔物に向かって歩き出した。と同時にモンスターも彼女に猛スピードで向かってきた。私は確実に彼女は死ぬと思った。きつと誰だつてそう思ったに違いない。

「やめっ…！」

そう叫ぼうとした瞬間、目の前に戦慄の光景が広がった。彼女はモンスターの攻撃をヒラリと避けた。と、同時にサイドにまわりこみ五本の鋭い爪で脇腹を引き裂いた。おびただしい血が吹き出し内蔵がバラバラに飛び散り肋骨が粉々に粉碎された。…モンスターは二つに引き裂かれ息絶えた。

…私は驚きと恐怖のあまりその場に立ちつくした。

「ああーあ、もう終わり？つまらないなあー…これでいつけんらくちやくだよねノアちゃん？」

「あ、ああ…」

私は声が出なかった。ロゼッタの手の爪は元に戻っていたが血で真っ赤に染まっていた。そして何より、彼女はどこか嬉しそうだった…。

その後、私達はなんとか遺跡の外に無事生還した。気が付けば辺りはすっかり暗くなっていて空には月と沢山の星々が輝いている。

「うーん久しぶりの外の空気はやっぱりサイコーだね！」

先ほどの豹変振りからはとても想像できないくらい彼女は能天気になんかそう語る。

「お前…ものすごく強いんだな」

私が言うと彼女は、

「まあこれが人造人間の實力かな？確かに戦闘能力は高いみたいだね」

そうまるで人事のように答えた。

「それで？これからどうすんだよロゼッタは？」

私が聞くと意外な答えがすぐに返ってきた。

「もちろんノアちゃんに付いてくよ！せっかく出来た友達だもん！それに…」

「それに？」

「なんだかあなたといると忘れていた自分の過去がわかるような気がするの。だから…」

ロゼッタは俯き加減にそう答える。…どうやらこいつには何か深い事情があるらしい。そんな彼女を私は放っておけなかった。

「…わかったよ。まあ、もとはと言えば私が勝手に遺跡に侵入してあんたに出会ったわけだしね。こうなったら最後まで付き合いますよロゼッタさんよ！」

「さっすがノアちゃん太っ腹！これからも死ぬまでどうぞよろしくおねがいます！」

ロゼッタがそう冗談交じりに言った。

「ハハハ！それは大げさ過ぎるって！」

そうやって2人して笑う。意外とこいつとは気が合うのかも知れない、そう思った。そしてこれからは二人の旅が始まることになる。

そう思うとなんだか不思議な気持ちになった。もう独り言を言うことも無くなるだろう。

夜空からの優しい光が私達を祝福するかのように照らしてくれていた…。

第一章 ファーストコンタクト（後書き）

この度はノスタルジアを読んで抱いて誠にありがとうございます。
まだまだ未熟者ですが、今後ともどうぞよろしくお願い致します。
感想、ご意見等お待ちしております。

第二章 赤い悪魔（前書き）

《前回までのあらすじ》

トレジャーハンターの少女エレノアは古代遺跡で宝探しをしている最中、謎の少女ロゼッタと出会う。襲い掛かる魔物を簡単に撃破するほどのパワーを秘めたロゼッタは自分が人造人間と名乗るが、過去の記憶を失っていた。記憶を取り戻すため、ロゼッタはエレノアと行動を共にすることにしたのであった。

第二章 赤い悪魔

窓の外から聞こえるにぎやかな人々の声：なんだか久しぶりに聞いた気がする。

ここを最後に訪れたのは6日前、この町の南にそびえる古代遺跡に宝探しに行くために立ち寄ったのだ。…まったく、まさかあんな災難にあうとは夢にも思わなかった。とにかく、私達は安宿の二階の一室に落ち着くことにした。

「わあ〜大きな町！すごいねノアちゃん！なんて名前の町なの？」
赤眼の少女が窓の外の景色を眺めながらそう言った。

この妙にテンション高めの少女はロゼッタ。私が古代遺跡で見つけた人造人間だ。

「この町か？ムールだよ。今から5年くらい前に元々原住民しかいなかったこの辺に共和国政府が建設した町さ」

「へえ〜ノアちゃん物知りだ！」

ちなみに『ノアちゃん』は私エレノアにあだ名らしい。ホントはちゃんとフルネームで呼んで欲しいのだが。とにかくこの一週間は今までで一番疲れた気がした。

「とりあえずこの世界で生きていくのに最低限の知識は教えておかないとな。ロゼッタ、なんかわからないことがあるなら聞いてみな？」

私がベッドに腰掛けながら聞くと、

「基本的には大丈夫だけど…そーだ！今の世界状況について教えて！」

そう彼女はニコニコしながら答えた。

「…お前以外にマニアックだな」

そう言いつつも私は世界情勢について説明することにした。

この世界には二つの大きな大陸が存在し、東側の大陸を共和国、西側の大陸を帝国が支配している。二つの政府は遙か昔から互いに争

つてきた。今もそれは変わらず兵器の開発や軍隊の強化にしのぎを削っているのだ。そして私は東の共和国側の人間で今いるムールは最東端の町である…などなど様々な事柄を彼女に話した。

「ふう〜ん、そーなんだ。つまり世界中が戦争してるってことだね！」

そう彼女が自分なりの言葉で総括する。

「ま、そうゆうことだな。私には関係ないけど」

「あれれ？他人事？」

「戦争なんかアホらしくてやってらんねえよっ！人殺しはしないってのが私のポリシーなんだよ！」

「そうだ、殺人は罪に問われるのに戦争が合法だなんて絶対に間違っている。」

「へえ〜、初めて聞いたよそんなこと。なんかノアちゃんってカッコイイね！」

ロゼツタが尊敬の眼差しで私を見る。

「そ、そうか？へへっ、なんか照れるな」

「そうやって照れ笑いした私にロゼツタはこんなキツイ一言も。」

「でも胸はわたしの方が大きいけどね！」

「なんでそーなるっ！っーかお前私のことからかってんだろ?!」

「あれ？ばれちゃった？」

彼女は何の悪気もないような顔でそう言った。

「きっ、きさまあ〜」

「キヤハハ、怒らない怒らない！」

「そう言っつてロゼツタは私の肩をポンポン叩く。」

「…ったくお前ってやつは」

「でもわたしたちって結構イケてるコンビだよな？」

「勝手にコンビ結成すんなっ！」

「なんだか真面目な話しのはずが漫才になってしまったよっな…。」

…その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「エレノアさん？町長が呼びます。町役場まで来てください」

ドアを開けてそう言ってきた男性は見たところ町の役人の下っ端のようだ。ここで変に逆らっても仕方ない、私は素直に支持に従うことにした。

男に連れられた私は役場の町長の部屋に通される。ちなみにロゼッタは部屋に置いてきた。…話しがややこしくなるのは御免だ。部屋の奥にある大きな机には小太りの男性が座っていた。どうやらこいつが町長らしい。

「はじめましてエレノアさん、私は町長のアーノルドです。どうぞやら無事に遺跡から生還したようですね」

アーノルドと名乗るその男は不適な笑みでそう私に問いかける。しかし、その質問は初対面の私に対しては不自然極まりなかった。

「…どうしてそのことを知ってるんです？」

私がそう疑問を投げかけるとアーノルドは落ち着いてこう答える。

「町の人々の間では噂になっていましたよ？少女が一人で遺跡探索に行ったと」

噂…何か引つかかる気がした。

「それで？ご用件は？」

私が改めてそう聞くと彼は少し間をおいてこう切り出してきた。

「…遺跡で何か見つけませんでしたか？」

「ああそれなら…」

私は素直にロゼッタのことを言おうとして一瞬考える。…この展開はおかしい。まるで向こうは最初から何もかも知ってるような、そんな気がした。

「…いいえ。特に何も」

私はあえてそう答えた。

「そうですか…それはおかしいですねえ？」

この不自然な態度…こいつは明らかにおかしい。

「本当に特別な物は何も…私は忙しいのでこれで失礼します」

そう無理矢理話を切って私は足早に町長室を飛び出すと、そのま

ま急いで宿に帰った。

間違いない、町長は…いや、共和国政府は確実に口ゼツタを知っている。そして理由はわからないが彼女を探している。彼女を引き渡せば全て事がつくはずなのに不思議とそういう気持ちにはならなかった…今は戦乱の時代、政府が彼女を何かに利用するのは目に見えている。

とりあえず私は彼女にこの事を報告することにした。

「嫌な予感がする…」

久々に独り言が口をついた。

《町長の狙い》

「…なかなか賢い小娘のようだ。だがどうやって遺跡を見つけ封印を解いたとゆうのだ？まあ、そんなことはどうでもいい。とにかく小娘が『ヤツ』を入れたのは確かなようだ。早速本部に報告せねば。ククク…あれさえ手に入れば世界は我が共和国のものになるのは時間の問題だ…！」

この時、世界を揺るがす大事に関わりを持ってしまった事にエレノアはまだ気が付いていなかったのである。運命の齒車は既にその一部を動かし始めていた…。

《彼女の本性》

宿に帰ると私は彼女に例の話^{口ゼツタ}を報告した。

「…とゆうことだ。お前本当に心当たりないのか？」

そう私は詰め寄り気味に彼女に問い質す。

「全然ないよ！てゆーか自分でも自分が何者なのかもわからないのに…また一人ぼっちになんかなりたくない！」

ロゼッタはそう困惑した様子で答えた。どうやら本当に何も知らないらしい。

「とにかくこの町にいるのはマズイとみた。…ここから北に大きなマンバと言う街がある。その大図書館なら何か古代遺跡やお前のことがわかるかも知れない。今からそこに向おうと思う。いいな？」
そう私は提案する。

「もちろんオツケー！さっそくレッツゴー！！」
そう何の迷いも無く彼女はその提案を承諾する。こんな深刻なときでもこのテンション…まさに究極の楽天野郎だ。

マンバまでは徒歩で丸一日かかるが特に装備には問題なかったの
宿をチエックアウトして早速町の出口に向かった。…が、そこで思
いもしなかった歓迎を受けた。町長のアーノルドと近衛兵が待ち受
けていたのだ！

「これはこれはエレノアさん！何処へ行かれるのでしょうか？」
アーノルドが腕組みしてそう私を睨みつける。

「何処へ行こうと私の勝手でしょうが！そこをどいてくれませんか？」

私がそう言うと、彼はこんなことを言ってきた。

「ええ、もちろん。そちらのカワイイお嬢様を渡して頂ければ今すぐにも！」

やっぱり私の勘は正しかったようだ。

「…イヤだと言ったら？」

私は銃のホルダーに手をかける。でも、そんなことしても無駄だと
本当は分かっていた。

「そうですか。それでは残念ですが…あなたにはここで死んでもらいます」

町長の合図で近衛兵が私に向けてライフルを構えた。全部で七人。
とてもかなわない。しかも私には人間を殺せる度胸はなかった、そ
して死ぬ度胸も…。私は死ぬのか？そう思った時、誰かが私の目の

前に立ちほだかる。それは口ゼツタだった。

「これなら殺せないよね？だってわたしが死んだら困るのはあなたたちだもんね？」

彼女は不敵な笑みを浮かべてこう言い放った。

「それでは私共と来てくださるのですね？」

その瞬間、アーノルドの言葉に対して彼女は豹変すると同時に静かにこう言った。

「…ふざけんなよアンタ。わたしは誰の命令にも従う気はない。ましてやお前らはわたしの大事な友達を殺そうとした。…みんな死ぬ…！」

次の瞬間、場の空気は氷ついた。あまりの殺気に全員が動けなくなった。彼女の爪は鋭く変形していた。口からは鋭く上がった牙が顔をのぞかせている。

「あ、…あ…」

凄まじい殺気で言葉を失い動けない近衛兵達に彼女は容赦なく襲い掛かる。あつという間に私の目前には地獄絵図が広がった。彼女の鋭い爪が近衛兵達の体をズタズタに引き裂いた。肉と内蔵が引き裂かれ骨が砕け散る音と共に血しぶきが飛び散り辺りは血の海と化した。あちこちに肉片が散乱した。…ものの数分で近衛兵七人は挽き肉のようになつてしまった。すると全てを片づけ終わった彼女口ゼツタは町長にゆっくりと詰め寄った。

「ま、まってくれ！なんでも言うこと聞くから…い、命だけは…！」
「あつそう。…じゃあ死んで」

彼女は町長の喉笛に喰らい付いた。鋭い牙が突き刺さり血が吹き出しだした。同時に凄まじい顎の力で首の骨は瞬時に噛み砕かれた。こうして彼女はアーノルドの息の根を止めた。

…あまりのシヨックに私はその場に座り込んでしまった。

「ノアちゃん大丈夫？」

血で服が真っ赤に染まった彼女が戻って来た。

「…ああ、多分な…」
シヨックで声が出ない…なにせ目の前で殺人を見たのは初めてだった。しかも八人も…。
「なにボケっとしてんの！早いところここから逃げないと！町の人達に見つかるかとマズインでしょ？！」
座り込む私を無理やり立たせながらロゼッタがそう言う。
「…んなことはわかってる！…行くぞ！」
私達はその場から逃げるように町を後にした。

《マンバの町》

…もうどのくらい歩いたのだろうか？私達はマンバへ行く途中の林道で休憩していた。

「だいぶシヨックだったみたいだね…ゴメン」

ロゼッタが珍しく真面目に私に話しかけてきた。

「いや、お前が謝ることはないさ。むしろありがとう、助けてくれてよ」

私はそう気にしていない素振りを前面に押し出す。

「わたし…敵だとみなしたものは何でも殺したくなるみたいなの。

だから、人殺しはしないのがポリシーのあなたがホントにうらやましい」

ロゼッタは俯き加減にそう話す。どうやらこの娘は嫌なことがあると人から眼を背ける癖があるようだ。

「なるほどね。政府が欲しがらる訳だ」

これだけの戦闘能力があれば小隊くらいなら瞬殺できる。

「だからね、ノアちゃんとの旅を通じてわたしちゃんとした普通の人間になりたいの。ノアちゃんみたいなカツコ良くて優しくして人殺しなんかしないような…」

ロゼッタ
相変わらず俯いたままそう彼女が言う。

「そうか…でも大丈夫さ！お前ならきつと立派な普通の人間になれるさ！だって現実にお前は私の命を救ってくれたじゃないか！これって素晴らしいことだと思っぜ！だから自分に自信を持って！ほらほら！元気出して！お前らしくないぞ！」
私はそう言っただけで彼女の肩に手を添える。

「…うんっ！ありがとう！なんだか元気出たよ。ノアちゃんって胸無いのになんかぶんすごいこと言っただね！」

「…前言撤回」

いつも一言多いのも彼女の特質なのだろうか？

とにかく、私達は再びマンバに向かつて森の中を歩き出した。やがて私達は森から開けた草原に出た。向こうの丘の上に街が見える。

「マンバだ。太陽は地平線に沈みかけあたりは暗くなり始めていた。黄昏時ってやつ？綺麗だねー！」

ロゼッタの赤い瞳は夕日を反射してより赤く輝いていた。

「そうだな。…なんだか心が和むよ」

そんな会話をしながら私達は街へ入った。とりあえず宿に入って落ち着いてから私達は日用品を買いに行く事にした。

「まずは…服だな！血まみれになっちゃったからな」

ロゼッタが今着ているのは私の服だ。だけど彼女には私のTシャツは少々キツイようだ。

「そーだね！さすがに迷彩服はマズイよね。」

彼女が私がつも着ている迷彩柄の服を指差して笑う。

「悪かったな迷彩服で！」

そこまでバカにしなくても…せめて作業服と呼んで欲しかった。

やがて私達は街の洋服店に着いた。久々の買い物だ。私の私服はもっぱらジーンズにTシャツだ。これが一番動きやすい。彼女は白いワンピースが気に入った様子。私には彼女の好みが理解できなかった。よってジーンズとシャツ、ワンピースや靴下そして下着などを何枚か購入した。食料品店では旅には欠かせない保存食などを買っ

た。

「え〜っ、ノアちゃんっていつもこんな石ころみたいなもの食ってるの？わたし食べられないようなこんなの。だってわたしグルメだもん」

今までに見たこともないような不機嫌な表情で彼女がそう言った。

「やかましいわ！だったらそこら辺の草でも食ってる！」

私が少々怒って言うと、

「なるほど！これがホントのみちくさ！なんちゃって！」

いまだきあり得ないダジャレのカウンターを受けた。

「…。」

つまらないと言うか…なんちゅうくだらないオチだ！

その後も彼女の要望でファンシーシヨップなどにもよったがこれが以外に結構楽しかった！

「うわあ、このぬいぐるみカワイイなあ…！」

実はこの私エレノアはこう見えても結構カワイイもの好きである。

「…！？ノアちゃんがぬいぐるみを抱きしめっ…！」

ロゼッタは私の態度にドン引きしているようだ。

「な、なんだよ！なんか文句あんのかよっ…！ハア、幸せ」

「…人は見た目によらないんだね…」

ロゼッタはそうつくづく思った。

なんだかんだで私達は宿に戻り食事になることになった。私にとっても彼女にとっても久しぶりのまともな夕食だったのは言うまでもない。

「うーんこのお肉おいしい！なんかワインかなんか欲しい気分だね！」

そう言っつてロゼッタは大きな肉にかぶりつく。

「お前未成年だろーが！」

とにかくロゼッタはよく食べる。少しは支払い担当のこっちの身にもなっつて欲しい。

「あれ？そう言えばぬいぐるみ買わなかったの？」
ロゼッタがそう聞いてきた。

「う、うるさいっ！確かにメチャクチャ欲しいけれど旅の荷物は最小限にしたいの！」

「ノアちゃん、そんなに力一杯リキまなくても…」

「だって、ぬいぐるみ欲しかったんだもん！」

「…へえ…ノアちゃんも意外と乙女チックなんだね」

この時ばかりはロゼッタと私の立場がいつもと逆になっていた。しばらくして久々のまともな食事を終えた私達はシャワーを浴びることにする。

「お風呂空いたよー！気持ちよかったあ！」

先に入っていたロゼッタが濡れた赤髪を拭きながら出てきた。

「そりゃよかったな。んじゃ、私入ってくるから」

すると、ロゼッタから意外な一言が。

「…覗いてもいい？」

「は！？いいわけないだろ！」

「冗談だよ冗談！」

「お前が言つと冗談に聞こえないんだよ！」

…どうやらこいつは少々レズ風味の性格なようだ。

入浴後、私達は早々に寝ることにした。部屋にはベッドが一個しかなかったので私はソファァで寝ることにした。

「ゴメンねえ…ノアちゃん、ベッド占領しちゃって」

ロゼッタがすまなそうにベッドの上から話しかけてくる。

「べつにかまわないさ。ソファァも悪くないよ」

「…明日図書館でわたしのことか調べるんだよね？」

「そうだけど？どうした？なんか元気ないぞ？」

私がそう気になって言うと、彼女は布団から顔を半分だけ出してこっつ答えた。

「なんだか…自分の過去がわかるのが少しだけ怖い。今さらって

言うのはわかってるんだけど、わたし…少しだけ昔のこと思い出したの」

「…で、何を思い出したんだよ？」

私が聞くと、

「よくわからないけど…なんだかわたし昔にとてもいけない事した気がするの。それが何かはわからないけど。だから過去を知るのが怖い」

彼女はそう声を潜めて答えた。

「そんなに怖がるなよ。…もう寝るぞ」

「うん…そだね」

ロゼッタはそれ以降もう何も言葉を発しなかった。…そう、こいつは確かに人造人間だ。あの戦闘能力や時に凶暴な性格を見る限り彼女は人間ではない。だが何かには怯えたり私と話している時の彼女は明らかに人間的だ。きっと彼女には何かとんでもない秘密がある…。そんなことを考えながら私は眠りについた。

《マンバの図書館》

次の朝、私達は図書館で文章と格闘していた。なかなか遺跡に関する文献が見つからない。

「何が書いてあるのかさっぱりわからん！ハア、マンガだったら楽勝なのに…こんな分厚い本なんか読めないよまったく！」

そもそも当時のことを記した文献が少ない上に使われている言語が今のものとは違うもの多い。

「わたしもこうゆうの苦手かも…新しい本を探してくるね！」

そう言つてロゼッタは図書館の奥に消えて行った。

「え〜と、だいたいいろんな所を探してみたんけどなあ。あとさがしてないのはっ…」

その時、彼女ロゼッタは一つの部屋の存在に気が付いた。

『重要文献保管につき関係者以外立入禁止』

「…これって怪しくない？」

彼女は図書館の係員に見つからないようにその部屋に足を踏み入れた。電気をつけて部屋を見回してみると以外に広いことがわかった。「こんなに沢山の中から探せつての？いや…なんだろうこの感じ？誰かがわたしを呼んでる？」

ロゼッタは不思議な力に導かれるままに部屋の一番奥の本棚の前に来た。そこには一冊の本があった。ロゼッタはその本に他の本にはない何かを感じた。

「…これだ！！」

ロゼッタは直感的にその本を持ってエレノアがいる図書館のロビーに戻った。

「あつたあつた！これだよこれ！見つけた見つけた！」

何やら分厚い書物を持ってロゼッタが騒ぐ。

「わかったから落ち着けつて！」

私は彼女を落ち着かせてからその本を開いた。…私はその本の表紙に見覚えがあつた。それは、ロゼッタが閉じ込められていた部屋の扉に描かれていたのと同じ絵だった。ドラゴンと悪魔が描かれた不気味な構図が脳裏をよぎった。だが、古い本のようで何が書いてあるか読めない。

「ダメだ、こんな文字みたことないぞ。なんて書いてあるんだろ？」

「なぜこの本を？」

私がそう聞くと彼女は怪訝な表情でこう答える。

「この本に呼ばれたの。…なんかだか狐につままれた気分だよ」

「よくわからんが…表紙を見た限りこの本で間違いなさそうだな。でも肝心の中身がわからないんじゃないかなあ」

すると、私の目の前で驚きの現象が起きた。

「…歴史は繰り返す。ここに書かれていることは全て真実である。

…だつてさ」

ロゼッタの言葉に驚いた。彼女は本に書いてある文章をいとも簡単

に読んで私に聞かせたからだ。

「お前、その本の言葉が読めるのか?!」

「うん。なんか知らないけど読めるみたいだね!」

どうやら彼女自信もちよつとびっくりしている様子。

「続きは?」

「えつと…続きはねえ…」

彼女は続きを読み始めた。

…あるとき、人類は大きな過ちを犯した。生命を創ることを許されたのは神だけである。だが…、彼らは神に逆らい、命を創り、無から有を産み出してしまった。それも『悪魔』を…。あるとき『悪魔』は我々人類に牙を向けた。『悪魔』は全てを破壊し全てを焼き尽した。その時、世界は火と血の海に覆われ、夜空の月までもが真紅に染まった。我々はヤツに憎しみと敬意を込め『赤い悪魔』と呼んだ。我々はヤツに立ち向かった。だがヤツに多くの仲間が殺された。だが、勇敢なる四人の聖人により『赤い悪魔』は自らの生まれた地へと封印された。…ヤツを復活させてはならない。『赤い悪魔』が真の姿を現した時、世界は再び絶望と暗闇に包まれるだろう…!

「…だつてさ。なんだか理屈っぽくてよくわからなかったけど」

ロゼッタがそう深いため息混じりに言う。

「なんかスケールめっちゃ大きいな…でもさ、この『赤い悪魔』って何者?どうやら相当危険なヤツみたいだけど」

すると彼女は、

「さあ?でも、わたしとなんかしらの関係はあると思うよ?」

何か知っているような言いぐさで私にそう答えた。

「なんでそんなことわかるんだよ?」

私がそう尋ねるとロゼッタはこう言う。

「本の表紙に描かれた悪魔…これって『赤い悪魔』なんじゃないの?わたしがいた部屋の扉と同じ絵みたいだし」

「でも悪魔はとにかくドラゴンは?話しにはドラゴンなんか登場してないぞ?そもそも、あの遺跡に『赤い悪魔』が封印されてるみた

いな感じで書いてあったけど、そんなものはなかったぞ?」

「でもさ、わたしがいたよね?」

ロゼッタが意味深にそう静かに呟く。

「何が言いたいんだロゼッタ?」

「簡単だよ。わたしが『赤い悪魔』ってこと!これなら全部説明がつくよね?」

私の疑問に対して彼女は^{ロゼッタ}キツパリとそう言い切った。

確かにそうだ:彼女が『赤い悪魔』だとすれば全て説明がつく。彼女には過去の記憶が無い。つまり、文献通りの悲惨なことをやらかしていても本人には自覚が無いわけだ。それに彼女は人造人間:つまり『創られた』人間でありカプセルに『封印』されていた。全て文献と一致する!そして何よりロゼッタの髪と瞳のカラーは真紅の赤色:『赤い悪魔』の色だった。

「まさかお前が...?!」

「でも、いくらわたしでもこんな酷いことしなれないと思うけどなあ?」
ロゼッタは首を傾げる。

「当たり前だろうが!それにまだお前が『赤い悪魔』って決まったわけじゃないぞ!」

「そりゃそうだね!それより...」

「なんだ?」

「わたしなんだか疲れちゃって...今日はこのぐらいわかればいいんじゃない?...どう?」

ロゼッタはそう苦笑いして見せる。

「賛成だな...。もうクタクタだよ」

私も彼女の意見に賛成だ。

「じゃ、帰宅ってことで!」

結局、話が解決しないまま慣れないことへの疲労に負けて私達は宿へと戻った。

《絆と友情》

宿屋に戻った後も、私達は図書館で見つけた本の話題で持ちきりだった。

「なんだか話しが大きくなっちゃったね、ノアちゃん？」
少し不安な表情でロゼッタが言った。

「まったく…、ややこしいことになってきたぜ」
私としても少々頭が痛い問題だ。

「これからどうします？」
ロゼッタがそう聞いてくる。

「どうするもこうするも…とりあえずこの本に書かれていることが
真実かを証明しないと…」

「本…盗んできたんだ」

私の持つている本を見てロゼッタが少し呆れた様子で言った。

「ちよつと借りただけだよ！…バレル前に街を出るか？」

「うんうん、それがいいや！」

本の盗難はもとより、いずれにしる一箇所に残まるのは危険だ。

「ハア…金も無いし…そろそろ仕事探さないとな」

「そだね！胸も無いしね！」

…人が真剣に悩んでいるときに限ってこれだ。私もこればかりは
ちよつと我慢ならない。

「…お前つゝいい加減にしろっ！」

私は怒って彼女に詰め寄る。

「キヤハハ！怒った怒った！逃げる逃げる！」

でも、彼女は私の何倍も速くその身をかわす。

「待てこの野郎！捕まえて乳揉んでやるっ！」

「キヤー！ノアちゃんのエッチ！スケベ！ヘンタイ！」

「なっ、なんだと〜！！」

最初は私も本気で怒って彼女を追いかけたが、あまりにも彼女
が楽しそうに逃げるものだからそのうち段々どうでもよくなっ

まった。…この後、一時間ほどみずいらずの楽しい追いかけて続いた。

…追いかけてこの後、私達は宿の屋上で仰向けになって星を眺めていた。

「…なあ、ロゼッタ」

「なあにノアちゃん？」

追いかけてこの後で息を切らしながら語りかけた。

「私は今までずっと一人だった。両親が死んだ時からずっと。でも、それが当たり前だとばかり思ってた。だから、ずっと今まで一人でトレジャーハンターとしてやってきた。そしてこれからもずっと一人で生きていくんだろうと思ってた。だけど、お前と出会ってわかったんだ。人間は一人じゃ生きていけないって…お前といるとなんだかとても楽しいんだ。その…なんつーかな…上手くは言えなけれど…お前と出会えて本当によかったよ。その…ありがと…かな？」

そうやって照れる私に彼女はこう優しく答えた。

「わたしも！ノアちゃんに出会えてとてもよかったと思うよ！だから、わたしたちずっと友達…いや、親友でいようね！」

「そうだな…！」

私は何だかとてもくすぐったい気持ちになった。だけど喜んでばかりもいられない。旅の資金も少なくなり、そろそろ仕事を見つけたことにならない。それに本の内容も気になる。とにかくやるべきことがいっぱいで大変だ。だけど、もう一人なんかじゃない。私を助けてくれる仲間がいてくれる。だから頑張れる。私はそう思った。

星空の下、気が付いてみれば隣ではすでに友達がいびきをかいて眠っていた。だけど私には不思議とそれが心地よく聞こえた。

…大事な親友だから…。

第二章 赤い悪魔（後書き）

物語が進むにつれてむしろロゼッタの謎は深まるばかり。そして忍び寄る大きく暗い影：果たして彼女は何者なのか、それが分かるのはもう少し後のことになりそうです。

第三章 灯台の魔法使い（前書き）

《前回までのあらすじ》

ロゼッタを連れてムールに戻ってきたエレノア。しかし、そこで何故かロゼッタを狙う町長アーノルドの襲撃を受ける。ロゼッタによる攻撃で何とか町長達を退けたエレノア達はマンバへと向かい、その図書館で赤い悪魔についての文献を見つける。さらなるヒントを求めて彼女達の旅は続く。

第三章 灯台の魔法使い

心地よい潮風が髪をなでる。波の音と海鳥の鳴き声が聞こえた。地平線には大小様々な船が浮かび、穏やかな時間が流れていた。

ここは海辺の静かな港町サルパ。人々は主に漁業で生計を立てている。私達がマンバを出たのは半日ほど前、サルパ行きの貨物トラックに乗せてもらうことができた。サルパに別に用事があるわけでもないが、マンバと距離が近かったことと、たまたま親切なトラック運転手に出会ったので今にいたっている。

《少し前：ある魔法使いの噂》

トラックの運転手は陽気だった。

「お嬢ちゃん達、サルパになんか用事でもあるのかい？」

そう笑顔で運転手の男は後部座席の私達に話しかける。

「わたしたちお金ないの〜！おじさん、なんかいい仕事ないですか？例えば悪人退治とか？」

「私はトレジャーハンターなんだけど…まあいつか。なんかそつち系で仕事ありませんかね？」

私とロゼツタがそう尋ねると男は少し考えてからこんな話をする。

「そうだな…サルパには古い大きな灯台があるんだが、そこに魔法使いがすんでいる。なんでも政府に3000000もの賞金をかけられているらしいぜ！」

「さっ…、三百万？！」

ちなみに私の平均月収が十万程度だからこれは凄い。…泥棒家業も楽じゃない。

「でもやめときなつて！なんでも灯台に入って生きて帰ったやつはいないらしいからよ」

男はそう苦笑いで警告する。…なるほど、確かに危険な仕事だ。だが金額には魅力があった。

つい数分前まではこのような会話をしていたのだ。

《港町サルパ》

「うわあ〜っ！綺麗な町だねえノアちゃん！」

ロゼッタが海風にその長く赤い髪をなびかせながらそう言った。

「なかなかだな」

確かにコバルトブルーの海も綺麗だ。

「え〜なんかリアクション薄いなあー、いつものことだけど」

「お前がオーバーなんだよっ！」

こんな所でテンション上げてても仕方ない。すでにトラックを降りて十分ほどが経過していた、これから何をするか考える。

「とりあえず、宿を取ろう。それから…」

「灯台で宝探しとマジシャン退治…でしょ？」

ロゼッタが先回りするようにそう言った。

「…よくわかってるじゃん」

どうやらずいぶんとお互いの考えがわかるようになってきたようだ。とりあえず宿を取って荷物を部屋に置いたところで早速灯台へと向かうことにした。

《大灯台攻略》

私達は町の外れにある古めかしい大灯台の前に立っていた。宿の主人の話だと五階建てで、五階には魔法使いの一族が代々住んでいるらしい。

「いいか？ここから先は何が起こるかわからない。油断するなよ？」
「イエッサー！」

ロゼッタがそう手を挙げて返事する。威勢だけは良いが本当に大丈夫か不安だ。

「なんだか心配だなあ…そうそう、中に誰かしらいるかも知れない。攻撃する前に私に聞けよな？無駄な血は流したくない。こないだみたいなのは御免だからな！」

「あれはしょうがないよ！町長が悪かったんだもん！」
私の言葉に対してロゼッタは頬を膨らまして言う。

「まあ、確かにそうだったな。あれは正当防衛だよ。…にしても政府の動きにも注意しないと、政府にマークされてる意味ではこの魔法使いと私達って似たもの同士かも」

「あれ？じゃあ、魔法使いさんをつまえても政府に引き渡せないじゃない？だってわたしたちも捕まっちゃうかもだし？」

ロゼッタのその指摘に私は返す答えが見つからない。

「…気にするな！行くぞっ！オー！」

「ありやりや、開き直っちゃったよ。あっ！待ってよう！おいてかないで！」

急に走り出したエレノアを見てロゼッタは慌てて後を追いかける。

こうして二人は灯台の中へと吸い込まれるように消えていった。

「…誰か来たみたい。果たしてここまで来れるかな？少しは楽しませてよね」

灯台の頂上で、知らない誰かがそうクスクス笑っていた…。

《大灯台一階》

「…見事に何も無いな」

私はまるで棒読みのようにそう台詞を言う。

「ないねえ」

ロゼツタも棒読みでそう返事を返す。灯台を入れてすぐに広い空間が二人の目の前に現れた。しかし特に何があるわけでもなく、殺風景な雰囲気だけが漂うだけの寂しい部屋。

「二階に期待だな」

「そうだねノアちゃん」

…何もないと会話すら寂しい。ここにいっても仕方ないので、二人はさっさと二階へ続く階段へと歩みを進めるのであった。

《大灯台二階》

ここに来て、私は久しぶりにトレジャーハンターの自覚を得ることが出来た。それもそのはず、二階の部屋には大きな宝箱が無造作に置かれていたからだ。

「おっ！なんと宝箱を発見！」

「おー！やったね！ねっ！ねっ！早く開けようよノアちゃん！」

私もロゼツタも興奮をなかなか抑えられない。

「まてまて！まあ、焦るな！それじゃ…オープン・ザ・ボックス！

！…おおっ！」

蓋を開けてみると、なんと宝箱の中には金貨がぎっしり！

「わあ！金ひかだ！」

ロゼツタが眼を輝かす。

「よっしやあ！これで当分生活に困らないぞ！」

私は思わずガツポーズする。これだけの金貨があればしばらくの間は働かなくても大丈夫そうだ。

「今日はごちそうだね！」

ロゼツタが嬉しそうに金貨を手にとって見る。

「おうよ！きつと上にはもつと凄いのが…！」

私は早くも心躍った。きつと三階にもすごいお宝があるに違いない

とそう信じて疑わなかった。

「こりゃ行くしかないね、ノアちゃん！」

「当たり前よ！」

私達はテンション高めのまま、三階に足を進めた。

《大灯台三階》

…三階に上がって早々、私達の目の前にできれば目を逸らしたくないような光景が広がる。

「これは悪夢か？」

私が質問するとロゼッタは楽しそうに答えた。

「いいえ。立派に現実だよ」

そう、モンスターの群れが私達の目の前に立ちはだかっていたのである。十匹はいるだろうか、カエルやトカゲの類の魔物のようだ。正直、大した強敵ではない。

「グルル…」

モンスター魔物達の不気味な唸り声が響き渡った。

「どうしますう？…殺っちゃいます？」

ロゼッタがわざとらしく私にそう聞いてくる。

「もちろん。そのつもりだよ」

私は44マグナムを構えた。それを合図にロゼッタの爪は鋭い殺人の道具へと瞬時に変わる。

「ギシャー！」

モンスター達が私達に容赦なく襲いかかってきた。私は撃って撃って撃ちまくる。しかし、弾を充填する時にどうしてもすきができてしまう。でも、心配は無用だった。私が充填している間にロゼッタの鋭い爪が、相手モンスターを容赦なく切り裂いてくれた。気が付けば、あっという間に部屋は死体の山で埋めつくされた。その死体が放つ血と生肉の臭いが鼻をついた。

「…アーメン」
「じしゅうしょうさま！もう行くうよノアちゃん」
それぞれが死体の山に向かってお悔やみの言葉を述べてから、私達は次の階に駒を進める。

《大燈台四階》

「…なんだろう？この部屋は…？」

四階に上がってすぐの広い空間、そこは今までの部屋とは明らかに雰囲気違っていた。…何か嫌な予感が漂う。

「ねえねえノアちゃん！床に何か書いてあるよ！なんだろうねこれ？」

ロゼッタが灰色の石造りの床に白線で書かれた大きな模様に気が付く。

「これは…！」

…昔、私はそれを本で見たことがある。それは魔法陣に間違いなかった。魔法陣は主に召還獣を召還するためのものだ。

「やっぱり嫌な予感がする…！」

私がそう思った時、高い天井の辺りから何者かの声がある。

「…よくここまで来れたね。歓迎するよ。歓迎の印に貴方達の願いを一つずつ叶えてあげる。ただし、これから私が召還するワイバーンを倒せたらね…！」

そして不思議な声が聞こえなくなると同時に魔法陣の光の中から巨大な翼を広げた魔物が姿を現した！その魔物の黒い巨体はドラゴンにも似ているが、前足が大きな翼になっている。大きく裂けた口には鋭く長い牙が規則正しく並んでいた。

「おいおい…！冗談だろ！？」

まさかこんな化物が召還されるなんて…少し見縊っていた自分が甘かった。

「笑えないジョークだねえ！キャハハ！」

しかし、ロゼッタは特に慌てる様子もない。

「笑ってる場合か！」

「いつでも笑顔を忘れない！私のポリシーね！」

私が真面目に怒って言っても彼女は全く真に受けてくれない。いく
ら彼女が強いとは言え相手が悪すぎる。

「今はそんなポリシーなんか忘れる！てゆうかいつそんなポリシー
作ったんだよ?!」

私がいちおうそう聞いてみると彼女からこんな適当な答えが。

「いまさつきかなあ？」

「はやっ！」

こんな時でもついつい突っ込みを入れてしまったのは言うまでもな
い。

「シヤアアッー!!!」

もたもたしているとワイバーンが物凄い勢いで襲ってきた！ワイ
バーンは巨大な翼を私達めがけて叩きつけてきた！

「うわっ!?!」

「ほいつ！おつとつとお！」

私達は間一髪のところまでワイバーンの攻撃をかわした。…と思った
瞬間、ワイバーンは身をひるがえし、長い尾をムチのように鋭く振
り下ろしてきた！私は避けきれずに一撃を喰らった。

「がはっ…!!」

私は地面に叩きつけられた。…痛くて体が動かない…気が遠くなり
そんな気分だ。

「ノアちゃんっ!…きさまあっ！」

その様子を見たロゼッタが血相を変えてワイバーンに飛びかかる！
…が翼で弾き飛ばされてしまった。しかし、彼女はすぐに体制を立
て直しそのまま攻撃に転じる。

「…ザコがっ！死ぬっ!!殺してやるっ!!!」

彼女は完全に凶暴化していた。『敵とみなしたものは何でも殺した

くなる』…彼女のその言葉通りだった。

「このわたしを怒らせたことを後悔するがよい…！」
彼女の鋭い真紅の眼光が、ワイバーンの動きを一瞬止めさせた。その一瞬でワイバーンの翼は引き裂かれ、次に尾が食い千切られた！最後に、翼を失いもがく相手の脳天に彼女はフルパワーでパンチを叩き込んだ。凄まじい力の前に、ワイバーンの頭は頭蓋骨もろとも粉々に砕け散った。私の前に彼の眼球が落ちてきた。…相手はそのまま床にひれ伏した。
…しばらくして、呼吸を整え落ち着いた彼女が私のそばにやってきた。

「大丈夫？怪我は？」

血にまみれた右手を舌でペロペロ舐めながら私にそう話しかける。

「大したことはない…お前こそ大丈夫かよ？」

少し体が痛かったが、どうやら軽い打ち身で済んだようだ。

「うんっ！全然大丈夫だよ！さっ！次の階に行こっ！」

私の問いかけに彼女はいつもの明るい口調で答えた。

「ああ…そうだな。いよいよ魔法使いとご対面だな」

そんな会話をしつつ、私達はワイバーンの死体を背に最上階へと上って行った。

《大灯台五階》

階段を上がって見ると、驚いたことにそこには今までとは全く違った空間があった。綺麗な家具に絨毯の床…まるで普通の家の中みただった。そして部屋の真ん中に机と椅子があり、誰かが座っている。

「…いらっしやい、待ちかねたよ」

そこには色白で白銀の髪をした少女が座っていた。

「あなたが魔法使いさん？」

ロゼツタが聞くと少女は静かに答えた。

「…そう、私はミーシャ。一応魔法使いかな…」

そのミーシャと名乗る少女の態度があまりにもドライなので、

「おいテメエ！お前のおかげで危うくこっちは死にかけたんだぞ！」

私はそう彼女ミーシャに向かって怒鳴った。すると、意外な言葉が返ってきた。

「…ゴメン…でも私、捕まりたくないからつい…」

ミーシャはそう哀しげな表情でそう頭を下げた。

「え…あ、いや、その…別にもういいんだけどね…あははは…」

あまりにもミーシャがすまなそうな顔をするもんだから私としても怒るに怒れなかった。確かに勝手に人の家に入り込んできた私達を追ひ払おうとするのは当然だ。

「そうだよ！すんだことだし気にしない気にしない！」

ロゼツタに至っては今までであったことなど特に気にしていない様子。

「…でも、なにかお詫しないと…悪いし」

ミーシャは相変わらず首を垂れながらそう言った。

「じゃあさ、私達の願い事を叶えてくれよ！」

私の記憶が正しければ頂上までたどり着いた暁には願い事を一つ叶えてくれるって話だったのを思い出したのである。…でも、その期待はすぐに崩れ去る。

「それは…できないよ」

ミーシャはそう小さな声で、でもハッキリとそう述べた。

「は！？なんでだよ！！？話が違っじゃねえか」

「えっ！なんでなんで？」

二人して喰い気味に詰め寄る。落ち着いてミーシャの話の話を聞いてみると彼女はこんなことを言う。

「実は…わ、私まだまだ未熟な魔法使いつて言うか…そんな凄い魔法は…まさかここまで辿り着けるなんて夢にも思わなかったから」
そうミーシャは答えた。

「でもお前スゲー賞金かけられてるじゃん？」

私がそう尋ねると、

「え…そ、そうなの？私そんなこと知らないよ？」

ミーシャは少し驚いた様子で言った。…どうやらコイツも何らかの理由でロゼッタ同様、政府にマークされているようだ。

「あの、こんな所で立ち話もなんですから…表の喫茶店にでも行ってゆっくり話さない？」

ロゼッタが珍しく機転を利かせてそう言ったので、その提案に私と少女は賛成することにした。

《新しい仲間》

私達三人は海に見える喫茶店にきていた。夕日が空と海をオレンジ色に染めている。私はコーヒー、ロゼッタはメロンソーダ、そしてミーシャはミルクティーを飲みながら色々話を続けていた。

「…なるほど。つまり、貴方達は『赤い悪魔』について調べていてそっちの赤いのが…その『赤い悪魔』かも知れないと？」

「ロゼッタだよ！」

ミーシャに対してロゼッタがちょっと怒って言う。どうやら彼女はロゼッタ赤い悪魔呼ばわりされるのが嫌なようだ。

「まあ、そうゆう感じだ。正直なところ、ただ単に旅してるだけだ…」

私としては職業柄、あちこち放浪しているだけのつもりなのだが。

「つまり目的は特にはないよ！楽しいから旅してるだけってカンジかなあ？」

ロゼッタのその意見も私から言わせればちょっと違う気もするのだけれども。

「…貴方達ってホントお気楽ね」

ミーシャが紅茶を啜りながら少し呆れた様子で言った。

「私も?!」

「ハハハツ！わたしと同類だつてさノアちゃん！」

「うるさい！何がそんなにおかしい！？」

こんなお気楽野郎と同類にされて良いわけがない。

「あの〜…」

ミーシャが何か言いたげそうに声をかける。

「ん？なんだミーシャ？」

私が聞くと、

「私その…まだお詫びをしてないから。何かできることがあればぜひ…」

そうミーシャは言った。

「んなこと言われてもなあ…金は山ほど手に入れたし…」

ミーシャの話によるとあの宝箱の金貨は彼女が住み着く前から灯台にあった物らしくて、別に私達が貰っても良いとのこと。金貨まで貰っちゃった上に何かを望むことなどちよつと図々しくお願いできかない。私が腕組みしてあれこれ考えているとロゼッタが、

「じゃあさ…わたしたちとお友達になってよ！それなら問題ないよね、ノアちゃん？」

気さくな彼女らしい提案をする。まあ、小学生の発想だが悪くない。

「お前、ホントに好きだなそーゆうの！まあ別に問題ないだろうよ、私もそれに賛同して深く頷く。」

「え…本当にそんなんでいいの？」

ミーシャの方はちよつと拍子抜けした様子。

「当ったり前じゃん！友達は何にも代えがたい大切なものだからね！」

ロゼッタが満面の笑みでそう答えた。

「…ありがとう。改めまして、ミーシャって言うの…よろしくね」
ミーシャが少し照れくさそうに自己紹介する。

「わたしロゼッタ！よろしくね！」

「エレノアだ。よろしく頼む」

「え〜っ、ノアちゃん挨拶堅いよ〜！」

どうやらロゼッタの感覚からすると私の挨拶は気に食わないらしい。「じゃあなんて言えばいいんだよ?!」

私がそうロゼッタに手本を求めると、

「わたしエレノア、ガサツで胸小さいけど立派な女の子です!よろちく!…みたいなの?」

あられもないくらい恥ずかしい手本を示された。

「うっ、うるさい!私はサーカスのピエロかつ!」

そう言っただけで私は軽くロゼッタの頭を叩く。

「えっ…エレノアって女の子だったの?私てっきり男の子だとばかり。シヨタってやつ」

まさかこの期に及んでそう言われるとは思わなかった。

「ミーシャまで!いいよいいよ!どうせ私はガサツで胸小さくて女の子らしくないですよっ!」

…コンプレックスとは辛いものである。

「キャハハ!メンゴメンゴ!」

「ご、ゴメン…」

ロゼッタとミーシャが程度は違えどそう謝る。まあ、別に構わないのだが。

「そうだ!そんなことよりさあ、今日はレストランかどっかでパッとやるうぜ!もちろん三人で!」

私はそう提案する。せつかくのこうゆう機会だ、楽しくやらないと損だ。

「さんせい!いっぱい食べるぞー!」

食いしん坊のロゼッタは大喜びだ。

「…御馳走になります」

ミーシャもちよつと嬉しそうに微笑む。

「よし!そうと決まればレストランに突撃だっ!」

私は席を立つとそのまま勢い良く喫茶店を飛び出す。

「イエッサー!エレノア大将!」

「…あつ、待ってよお」

ロゼッタと遅れながらもミーシャがそれに続く。

…夕日のなか、私達は海辺の道を走っていた。三人の長い影も嬉しそうに私達を追いかけていた。とても楽しくて穏やかな時間が辺りを流れていた…。

第三章 灯台の魔法使い（後書き）

《キャラクター紹介》

『ロゼッタ』

人造人間の女の子。普段はお気楽で優しい性格だが、戦闘時には凶暴化する。長くて鋭い爪と牙が最大の武器。また怪力の持ち主でもある。エレノアをからかうのが大好き。『赤い悪魔』と関係あり。

『エレノア』

一応、本編の主人公。ガサツで男勝りの性格だが、ぬいぐるみが大好きだったり、意外と女の子らしい側面もある。トレジャーハンターだが腕はまだまだのようだ。ナイフと44マグナムが武器。

『ミーシャ』

魔法使いの女の子。恥ずかしやがり屋で口数は少ない。非常にクールでドライな一面を持つ。今回初登場のため詳細は不明。

第四章 NIGHTMARE（前書き）

あなたには『大切な友達』はいますか？友情や愛情にはきつとお金では買えないほど素晴らしい価値があると僕は考えています。そのことを考えながらこの物語を読んで頂ければ、もしかしたらあなたの友達への考え方が変わるかも知れません。

第四章 NIGHTMARE

…波の音と潮の香りが心地よい。ここはサルパの大灯台五階、すなわちミーシャの住む部屋だ。窓からは青くすみきつた空と海がよく見える。

「…朝ごはん持ってきたよ」

ミーシャはそう言ってパンと紅茶をテーブルの上に置いた。

「なんか悪いなあ。泊めてもらった上に朝飯までもらって」

私がそう言つと、

「気にしないでエレノア、私から誘ったんだから」

相変わらずそう彼女は静かに返事をした。

「それにしても昨日は楽しかったね！なんかお泊まり会みたいで！」

「いやいや、実際に泊めてもらってるから」

ロゼッタのボケにはなぜだか知らんがいつもツッコミたくなる。

昨日は大量の金貨のおかげでレストランでたらふくディナーを食べる事ができた。その後、ミーシャに自分の家に泊まりに来ないかと誘われたので宿をチエックアウトしてから彼女の部屋にお邪魔した。それから私達は他愛もないお喋りをして楽しい時間を過ごした。

「知ってる？シャケって身は赤いけどホントは白身魚なんだよ！びっくりしたでしょ？」

昨日の夜中はそんなロゼッタが得意とする生物の雑学で大いに盛り上がった。

「マジで？！それは知らなかった！あの鮭が白身魚だったなんてねえ」

ロゼッタはどうも生き物や自然のことに關しては知識が豊富なようだ。

「…私そのこと知ってたよ？ちなみに鮭と鱒は同じ仲間なんだよね」
ミーシャがそう補足する。

「そうなの！？さっすが魔法使い！物知りい〜！」

ロゼッタが感心する。

「関係なくね？」

私がそう関連性を否定すると、

「…私もそう思うけど」

ミーシャも深く頷いた。

「じゃあさ、ミーちゃんとノアちゃんは紅茶に何を入れる派？わたしは、お砂糖もミルクもたっぷり入れるよ！」

「シヤケから紅茶って…まあ、私はミルクだけだな」

ロゼッタが話の話題を急に変えるのはいつものことなので、私は慣れた口調でそう質問に答える。

「私は…ストレートかな？」

ミーシャが少し考えてから言った。

「なんかみんなバラバラだねえ！個性豊かってカンジ？」

確かにロゼッタの言う通りではあるが…。

「お前が一番個人的だと思うけど。いろんな意味で」

「…同感だよ」

私とミーシャがほぼ同時にそう指摘したのは言うまでも無いことだろう。

「キヤハ！ほめられちゃった！」

「いや、誉めてないから！」

照れるタイミングのずれているロゼッタに私はそう突っ込んだ。

「要するに、昨日はこんな感じでくだらない話しをしてから眠りについたのである。」

現在、時計の針は午前九時を指していた。

「…で、これからどうすんだよロゼッタ？」

私がパンをかじりながら聞くと、

「わからないよそんなの〜！だからノアちゃんが決めていいよ！
そう紅茶をすすりながらロゼッタは答えた。

「それよかミーシャ、お前はどうするつもりなんだよ？」

私はミーシャにそう聞いた。

「…友達になるって約束したし、貴方達と一緒に旅に出ようと思うの。また一人になるのは嫌だから」

ミーシャがそう答える。

「つまり…また仲間が増えることになるな」

「イエーイ！旅の仲間ゲットだよっ！」

彼女はとても嬉しそうだ。私としても旅の仲間が増えるのは心強い。ロゼッタ

「それでだ…今後の予定だがそんなに焦る必要もなさそうだしもう2、3日この町でのんびりしてもいいと思うんだ。居心地もいいしね、どうかな？」

私がそう提案すると

「…いいんじゃない？」

「わたしもアちゃんにだいさんせー！」

二人はこれを快く承諾した。海も近いし…私も久々に海水浴でもしてのんびりすることにしよう。

《共和国 首都シランド 国家保安部隊本部》

エレノア達がミーシャと知り合ってから数日後…ここはサルパから遠く離れた共和国の首都シランドの国家保安部隊本部、その一室で何やら密会が交わされていた。

「例の件はどうなっている、シユナウザー？」

高価なスーツに身を包んだ男がそう部下に尋ねる。

「はい。彼女達はどうかやら現在サルパに潜伏中の模様です、コロツサル様」

部下はそう状況報告を行う。

「ムールのアーノルド町長はどうした？連絡はついたのか？」

「町長は何者かに殺されました。首を切られていたそうです」

「小娘共め…！遺跡の調査の方は？」

「やはり封印が解除されました。…どうやら『赤い悪魔』は既に復活しているようです」

「…報告にあったトレジャーハンターと一緒にいる赤髪の小娘が『赤い悪魔』と見て間違いないだろう。恐らく町長を殺したのも奴の仕業か！」

コロツサルは歯を食いしばる。

「おそらくは…死体の引き裂かれ方が普通でなかったのも説明できません」

「しかし、あの封印は伝説の四聖人が施したもので…解除できるのも彼らの血を受け継ぐ者だけのはず。まさか…！」

「つまり、そのトレジャーハンターの少女が聖人の血を受け継ぐ者だと？」

シユナウザーがそう尋ねる。

「確信は無いが…。しかし幸いなことに、まだ自分達が何者なのかは知らないらしい」

「ですが…先日にもマンバの図書館で目撃されてますし、おまけに超古代文明の歴史が書かれた重要な文献である『ナタリア帝国の悲劇』も盗んでいます。『赤い悪魔』について何かを探っているようですし…気付かれるのは時間の問題かと」

「…それはわかってる」

シユナウザーの指摘にコロツサルは声のトーンを落とす。

「最新の情報だと奴らはサルパ大灯台の魔法使いと一緒にいるようです」

「…おそらく次はラーゼに向かうはずだ。サルパからは一番近い。

シヤクマを呼べ、奴をラーゼで捕獲させる」

「かしこまりました」

コロツサルの命令をシユナウザーはそう受託した。

「アゲハ…まさか再び現れるとはな」

コロツサルがそう呟く。

…ロゼッタの存在が意味する重大な事柄をエレノア達はまだ知らない

い。

《ワイバーンの背中》

「うわあ〜！高い！速い！すごいや！」

眼下に広がる様々な景色を見てロゼッタがはしゃぐ。

「…あんまりはしゃいで落ちないでよ？」

ミーシャはロゼッタが落ちやしないか気がでないようだ。

「そうだぞ！ミーシャがワイバーン召還してくれなかったらこんなことできないんだからな！」

少しはミーシャに感謝しろよ！」

私もロゼッタを落ち着かせる意味も含めてそう言った。ミーシャの召還術が私達の旅に大きく力添えをすることは言うまでも無い。

「はあーい！だって風が気持ちいいんだもんっ！それに、わたしって人造人間だからもしかしたら空飛べるかもだし??」

ロゼッタが冗談交じりにそう言う。

「ハハ、だったらスゲーな！」

「てゆうーかだったら自分で飛んでよね…」

笑う私に対してミーシャは至って冷静にそうロゼッタに言うのであった。

私達はワイバーンの背中に乗って目的地であるラーゼを目指していた。目下には緑色の大地が広がり心地よい風が私達の髪を撫でていく。

「それにしても海水浴楽しかったね！みんなのセクシーな水着姿も見れたしね！」

ロゼッタの思い出し笑いが妙にリアルと言うか意味深だ。

「なにがセクシーだよ。気持ち悪い！」

やはりと言うか、この娘は同性愛者レズビアンじゃないかと本気で思ってしまった。

「やっぱしミーちゃんやわたしと比べてみても明らかに小さいんだよなあノアちゃんは」

ロゼッタがそう言った。

「何がだ？身長か？」

私が尋ねると、

「ううん、心とおっぱいが！」

彼女はそう何の躊躇もなくキツパリと答えた。

「お、おっぱいって…レデイの前でフツーに言う言葉か?!」

その下品な単語を目の前で言われて私は恥ずかしくてたまらない。

何せこの私エレノアのトラウマなのだから。

「レデイ？わたしの前にはそんな人はいないけどなあ？」

ロゼッタがそう皮肉を込めたような言い方をする。前からそうなのだが、どうやらロゼッタは私を良い意味で困らせるのが好きみたい。

「やかましい！私をこれ以上惨めにするなっ！」

「…ぷぷっ…」

「そこ！笑うなミーシャっ！」

まさかミーシャにまで笑われてしまうとは…我ながら恥ずかしいと言っか情けない。

「キヤハハ！ノアちゃんのミニマムおっぱい！」

そんな私の心情を全く考えていないような止めの一言をロゼッタがふざけて発する。

「きっ、きさまっ！待てっ！この野郎っ！！！」

この際だから一発くらい殴ってやろう、そう思っ私は彼女の体を捕まえようと両手を繰り出す。

「キヤー！逃げろっ！」

しかし、これも毎度の事ながら素早い彼女は体を上手くしならせて私の手を避ける。

「…狭いんだから勘弁してよね…」

ミーシャが半分呆れてそう言った。座ったままの行為とは言え、背中の上で騒がれてワイバーンにとって相当迷惑だったのは言うまで

もないだろう。

「…あ、ラーゼが見えてきたよ」

ミーシャが斜め前方を指差して言った。遙か向こうに町が見える…あれがラーゼだ。しばらく飛んだところで私達は町から離れた森の開けた場所に降り立った。

「…ご苦労様、またよろしくね」

ミーシャがワイバーンの頭を優しく撫でる。ワイバーンはミーシャに擦り寄った後に静かに消えて行った。

「…このくらい広ければ大丈夫だよね」

ミーシャは辺りを見回すと、おもむろに小さな家のおもちゃを取り出した。

「わっ！カワイイ！」

「ドールハウスってやつだな」

その精巧な造りのミニチュアハウスを見て私とロゼッタは感心する。「ちよつと待っててね…」

そう言つてミーシャが何か呪文を唱えると、さっきまで小さかった家がみるみるうちに巨大化して実物大の立派な二階建ての家屋になった！

「すごいすごい！何今の！？魔法！？」

ロゼッタは驚きと興奮でピョンピョン飛び跳ねる。

「はあ、ずいぶん立派なお家なこと」

私はむしろその家の豪華さに驚いた。こんな家をまともにおおうと思つてもおそらく私の稼ぎじゃ一生買えないだろう。

「…それほどでも。魔法デパートに行けばこんなのいくらでも売ってるよ」

ミーシャがちよつと照れくさそうに言った。

「早く入る！」

ロゼッタがそう言い終わらないうちにもう玄関の扉を開けていた。

「お邪魔しますぜ」

私もそれに釣られるように家の中に足を踏み入れる。

「…ちゃんと靴脱いでよ？」

ミーシャがそう念を押す。入って見ると、家の中はきれいに片付けられていた。一階には大きなロビーとキッチンがあり、二階には部屋がいくつもあった。

「今日はもう疲れたから好きな部屋でくつろいでいいよ。ラーゼに行くのは明日にしよう…」

ミーシャが大きく背伸びしながら言った。普段から眠そうなミーシャがそう言つと妙に説得力がある。

「そうだな。ああーあ！もうクタクタだよ！」

私も慣れない移動でもう疲労困憊だ。

「わたしも…！…ちなみにこの家っていくらしたのミーちゃん？」

ロゼッタがそうさり気なく聞くと、

「…それは秘密だよ」

ミーシャもそうさり気なく苦笑いで答えるのであった。

気が付けば空は少しずつオレンジ色に変わりつつあった。とりあえず私達はそれぞれ気に入った場所にくつろいでから、少し早い気もしたが二階の部屋で各自眠りについた。

《ロゼッタの部屋》

…その日の夜中、ロゼッタは不思議な悪夢にうなされていた。

「ここは…？」

わたしは燃え盛る炎と死体の中に立っていた。わたしの手のひらは血で真っ赤に染まり、古めかしい建物の間を人々が逃げ惑っている。この景色、遙か昔に何処かで見たような…？その時、わたしの前に四人の人影が現れた。そのうちの一人に見覚えがあった。その少女はノアちゃんにそっくりだった…！

「あなたたちは…？」

「我々は貴方を葬り去るためにやってきた者です。…わかって頂け

ますね？」

わたしの問いにそう向こうは答えた。

「わたしはいつたい何を…？わたしはいつたい何者なの…？」

わけが分からない、頭がどうにかなりそう。でも…何故かわたしは何か知っている気がした。

「…やはり覚えていないのですね。貴方はナタリア帝国が科学の全てを注いで製作した生体破壊兵器です。しかし、あなたは自らの強大な魔力を制御出来ずに暴走しました。その結果、ナタリア帝国は滅び、今や世界の半分以上が火の海と化しました」

そう四人の中の一人が言った。その言葉にわたしは耳を疑う。

「わたしが…世界を滅ぼした…！？」

世界を滅ぼすなんて、わたしは一体何を…！？

「どうやら正気を取り戻したようですが…あなたの存在は世界の存亡を脅かします。残念ですが…貴方を封印します…！」

その瞬間、わたしの体を光の刃が貫いた。…遠のく意識の中、かすかに声が聞こえる。

「…千年後、世界に『黒い天使』が降り立ち世界を滅ぼすでしょう。その時、私達の血を受け継ぐ者が貴方を復活させるでしょう。彼女を倒し、世界を救えるのは『赤い悪魔』である貴方しかいません。世界を救いし時、初めて貴方は過去に犯した罪から解放されるでしょう…」

串刺しにされながらも、不思議とその言葉だけはわたしの頭にクリアに響いて聞こえた。

「…ヤメロオオー！！」

そこでわたしは目を覚ました。着ていたパジャマは汗でぐっしよりに濡れていた。

「ハアツ…ハアツ…夢…なの…？」

夢…いや、違う。半分は事実で昔わたしが経験したことのあるような気がした。やがて騒ぎを聞き付けたのか、ノアちゃんとミーちゃんが部屋に飛び込んで来る。

「なんだなんだ?! どうした!」

泥棒が入ったとも思ったのが、ノアちゃんは右手に何故かバットを握り締めていた。

「…何事?」

ミーちゃんは相変わらず落ち着いた様子でそうわたしに聞く。

「ううん。なんでもないの。ちょっと悪い夢を見ただけだから…」
さすがにこんな状態ではあんな夢の話はできない、気がどうにかなりそうだ。

「驚かすなよ! まったく!」

睡眠を邪魔されたノアちゃんはちよつと怒っていたが…無理もないか、彼女はわたしが情緒不安定なのをまだよく知らないみたいだから。

「…ドンマイ」

ミーちゃんは特に気にする様子もなくそう言った。…この娘とわたしは何処か同じニオイがすると出会ってからずっと感じていたけど、今はその辺の散策はするべきじゃないか。

「ホントにゴメンね…おやすみ…」

わたしはそうやって2人に謝った。

2人がそれぞれの部屋に戻ったことで再び夜の静寂が戻る。

「…すっかり忘れていたみたいだけどやっぱりわたしが『赤い悪魔』なんだね。完全に思い出したよ。…明日ちゃんとみんなに話そう。そしたら、みんなわたしのことなんて言うのかな?」

わたしはそんな不安で眠れず、やがて朝日が部屋に差し込んだ。

《ロゼッタの告白》

次の朝、ドールハウスのリビングでロゼッタの告白を聞いた私達は驚きを隠せなかった。

「おいおいマジかよ…」

そんな素っ頓狂な話をいきなりされても私達には返す言葉が見つからない。

「多分、封印のショックで記憶喪失になってたみたいんだけど…… やっと思ひ出したの。間違いなくわたしの正体は『赤い悪魔』なんだ」

ロゼツタがそう珍しく真面目な顔でそう言った。急に言われても、封印とかその辺のプロセスがさっぱりだ。

「『黒い天使』とか再び世界が滅びるとか、わからないことだらけだな…… しかも私か実は聖人の子孫だったなんて信じられねえよ！」 それにまさか千年前に私のそっくりさんがいたとは…… しかもロゼツタの推測が正しければそれは私の遠いご先祖様らしい。

「……そんなに簡単に世界は滅びるものなの？」

ミーシャがそうロゼツタに尋ねる。彼女はそこそこ疑り深いようだ。「さあ……？でもこのわたしが千年前に世界を滅ぼしたんだから、きっと他の誰かが同じ事をして不思議じゃないよね」

ロゼツタのその言葉に、しばらく沈黙が続いた。……やがてエレノアがその沈黙を破る。

「でもよお、別にだからなんだよって話だよな？私はただのトレジャーハンターでミーシャはただの魔法使い、ロゼツタはただの赤い悪魔……それだけじゃないか。お互いに何者なのかなんて大した問題じゃないと思うぜ？」

「……いいこと言うね」

私がそう自分の考えを述べるとミーシャもそれを聞いて深く頷く。その二人の言葉にロゼツタはかなり驚いた様子で聴き返してきた。

「あなたたち本気でそんなこと言ってるの?!わたしが恐ろしくなっているの!？」

どうやらロゼツタはあたかも自身が未知の化物であることを強調したかったようだが、私は改めてこう彼女を諭す。

「全然！確かにお前は『赤い悪魔』かもしれないよ？だけど私達にとっては大事な友達でそれ以上でもなければそれ以下でもないんだ

よ。…心配しなくても、私達はお前の友達であり続けるよ。…つかさ、これってあくまでも夢の中での話しだろ？別にお前を疑うわけじゃないけど夢と現実が必ずしも一致するとは限らない。ましてや千年も前の話なら多少の誤差は出るだろうよ」

私がそう言つと、

「そうだよ。あとの細かいことは…その時が来たら考えればいいと思うけど？」

ミーシャもそんな気楽な言葉を添える。すると私達の言葉に、彼女は真つ赤な瞳に涙を溜めながらこう言つた。

「みんな…ホントにありがとう…！わたしとっても嬉しいよ…みんな大好きだよお！」

そのままロゼッタは座り込んで号泣し始めてしまった。

「わかつたからもう泣くな！ほらっ！お前らしくないぞ！」

「…嬉し泣きつてやつ…かな？」

私とミーシャがそうロゼッタの肩を叩いたりハンカチで涙を拭いてあげると、

「…うんっ！もう泣いたりしないよ。さ、昨日の予定通りラーゼの町に行つてみよう！」

彼女から今までの沈んだ空気が嘘のような返答が帰ってきた。

「やつぱしそうじゃないとな！お前は！」

人間にはそれぞれの持ち味があるが、やはりロゼッタの場合こうじゃないと。

「…切り替え速すぎ」

ミーシャは少々呆れ顔だが、同時にちよつと嬉しそうでもあった。

《ラーゼの町、少女達の秘密の願い》

ロゼッタの一件でどんよりした空気になってしまったが、気を取り直した所で私達はラーゼに向かうことにした。ラーゼは特に何もな

い小さな町だが教会とお寺が同じ町中に存在している珍しい町だ。
「特別やることは無いんだけど…とりあえず教会にでも行ってみるか？」

私がそう提案すると、

「お祈りするところだよねノアちゃん？」

「正解…かな？」

ロゼッタとミーシャもとりあえず賛成してくれた。特に探すことをしなくも教会はすぐに見つかった。教会は小さなものだったが、どこか気品がある。教会に入るとすぐにシスターが出迎えてくれた。

「ラーゼの教会へようこそ。貴女方もぜひ神にお祈りをしてください。…神のご加護を」

シスターに言われるがままに、私達は壁に掲げられた大きな十字架の前で神に祈った。

「みんなはなんてお祈りしたの？」

お祈りが終わって早々にロゼッタがそう私とミーシャに尋ねる。

「そう言うお前は何をお願いしたんだよ？」

私がそう質問を切り返す。

「わたしはあ…みんなとずっと仲良しでいられますようにって！ノアちゃんはなんて？」

今度こそはとばかりにロゼッタが何か見透かした表情で私を見る。

「え！え〜と…わ、私は…」

そんなこと聞かれても困ると言うか…私がドギマギしている間にロゼッタはこう言った。

「わかった！胸が大きくなりますように、でしよっ？」

「うっ…ち、違うよっ！旅が上手くいくようにお願いしたんだよっ！」

もちろん嘘じゃない、でも一番にお願いしたことはロゼッタの言う通りだったから恥ずかしい。

「え〜ホントかなあ？」

ロゼッタはニヤニヤと不敵な笑みを浮かべる。

「ほつ、本当だよっ！」

もうこの話は終わりにしようって意味で私はそう念を押しした。

「…教会って本当は懺悔する所なんだけど別にいいか。私も一人前の魔法使いになれるようにお願いしたしね」

ミーシャは神の像を見つめながらそう呟いていた。

教会を出てから、せつかくなので近くのお寺にも行ってみた。三人同時にお賽銭箱にお金を投げ入れ、手を合わせる。

「今度はなんてお願いしたんだよロゼツタ？」

今度は私からそうロゼツタに質問する。

「さっきのお願いが叶いますようにっ！」

そうロゼツタは笑顔で答えた。

「…それってお願いなのか？」

私がそう首を傾げていると、

「あ…私も同じことを」

ミーシャがそう気まずそうに言う。

「…お前ら二人ってもしかして天然なのか？」

思わずそんな単語が私の口から出る。

「自然体ってやつ？」

ロゼツタがそう答えたので、

「…意味違うと思うよ？」

ミーシャがそう鋭く訂正する。しかし…まあ、この二人には神様仏様も困ったものだ。とりあえず巡礼ごっこも終わり、私達はさっさとドールハウスに戻ることにした。

「まだ夕飯までだいぶ時間あるな…一眠りでもするかな」

昼寝なんて時間の無駄遣いと言えばそうかも知れないが、私にとつてはある種の日課みたいなものだ。

「…私は読書でも」

勉強家のミーシャはそう言った。

「じゃあわたし散歩！」

今帰ってきたばかりじゃないか、って言いたかったがどうせ言っ

も聞くまい。

「あまり遅くなるなよロゼッタ？日が暮れる前に帰ってくるんだぞ！」

私はそうロゼッタに門限を告げる。

「ラジャー！」

ロゼッタはふざけて私に敬礼の真似事をするそそくさと表に出て行った。…ちゃんと彼女が時間通りに帰ってくるのか私は少し心配だ。

《ある教会裏の墓地、ロゼッタと謎の刺客》

日が暮れて間もなくの頃、ノアちゃんとミーちゃんに散歩に行く
と告げて外出したわたしはラーゼの町のある教会の裏手の墓地に
来ていた。…さつきから何かただならぬ存在を感じていたから。

「さてと…せっかく一人になってあげたんだから、そろそろ出てきて
くれるもいいんじゃない？」

わたしは気配の主にそう言った。

「…流星は赤い悪魔。気配を消してもダメみたいですね」

すると、墓地の奥の方から音もなくスーツに身を包んだ男が現れる。

「さつきからずっと付きまといっ…あなた何者なの？」

わたしが聴くと男は落ち着いた様子でこう答えた。

「私はシャクマ。政府から貴女を連れてくるよう命令を承けて来ま
した」

シャクマ…見た目はごく普通の紳士風の男だがこいつからは人間の
匂いがしない。おそらくその正体は何か別のものだろう。

「なるほどね…だったらさっさと出て来て攻撃するなりすればよか
ったのに」

私がそうシャクマに言うつと、

「騒ぎを大きくしたくないもので。他の二人は後でゆっくり料理します」

彼はそう不敵な笑みを浮かべる。この男、ノアちゃんとミーちゃんに危害を加えるつもりなのか？

「…二人は関係無いでしょ？」

わたしはそう声のトーンを落として言った。

「いえいえ。聖人と大魔法使いの子孫、共に生きていられては我々の計画に支障がでますから…」

シヤクマの言葉を聞いてわたしはピンときた。

「大魔法使いの子孫…ミーちゃんに賭けられた多額の懸賞金の意味がやっとわかったよ」

「政府は貴女がおとなしく我々に協力するなら、二人の命は助けてもいいと言っています…どうしますか？」

協力？イマイチ趣旨が飲み込めないけどそんなに簡単に従う気はこれっぽっちも無い。とにかく相手のいけ好かない態度がわたしの気に障る。

「そんなの決まってるじゃない…あなたをあの世に送ってあげるのよ！」

「…そうですね。ならば仕方ありませんね。貴女には消えてもらいます。協力しない以上、貴女も計画の妨げになりかねないですからシヤクマがそんなことを当たり前のように言うのでわたしはさらに機嫌を損ねる。」

「消えるのはあなたの方だよ。…まさかわたしに勝てると思ってるの？」

わたしは脅迫と威嚇ついでに爪を鋭く伸ばす。

「確かに…でもこれならどうでしょう？」

そう言っただけでシヤクマが指を鳴らすと、地面の下から無数のゾンビ達が湧出した！

「！」

「私、こう見えても仲間からは『シャーマン』って呼ばれているん

ですよ？」

シヤクマがまたわたしの気に障るような不適な笑みを浮かべる。

「死体を操る、か…墓場を選んだのは失敗だったか…！」

気が付けばわたしはたくさんの生ける屍たちに囲まれていた。

「今さら気付いても既に遅いですよ。降参する気になったらいつでも申してくださいね…！」

「く…！」

とにかく近づいて来るゾンビ達を片っ端から切り裂いた。…が、まるで切りが無い。やがて疲れきったわたしにゾンビ達は容赦無く噛みつき、ひつかいた。

「ぐあつ…！」

傷口からは鮮血があふれ出す。…しかし、不思議とあまり痛みを感じなかった。何だろ…この感覚…何か熱くて邪悪な物が心の奥から湧き上がってくる感覚を覚えた。

「ふふふ…辛そうですねえ！貴女がどうしてそこまであの二人にこだわるのかわりませんが、さっさと降参したらどうです？仲間をなんか捨ててしまえばいいものを…！」

わたしにはシヤクマのその言葉が許せなかった。

「ハアツ…ハアツ…ふざけるな…みんながわたしを信じていてくれる…そんな大切な親友を裏切れるかあつ…！」

怒りが募るほどに心の奥底から何かがわたしを呼ぶ…急に目の前のものに対する考えが変わった気分だ。

「くだらないことを！死になさい！」

シヤクマがそう言った…その時、わたしの中で悪魔が目を覚ました。

「ふ、ふふふ…ふはははははは…！」

わたしは何故か急に気分が高揚し、思わず高笑いする。

「?!。…何がおかしいのです？」

急変したわたしの様子にシヤクマは驚きを隠せない様子。

「あなた…それで勝ったつもりなの？」

わたしはシヤクマにそう言う。急に彼の存在が小さくなった気がし

た。

「なに!？」

わたしは魔力を体中に込め、背中から普段は体内に格納している翼を出した。その真紅の翼を広げて大空に舞い上がり、同時に魔力によつて傷口がみるみる回復する!

「なつ…ばつ、バカな!なぜ…!!」

一瞬で全快した上に空に浮かぶわたしにシャクマは目を見開いて驚いていた。

「なかなか楽しかったよ?…だけど友達を馬鹿にするやつを許すわけには行かないんだよね。さよなら、無事にあの世に行つて来てね!」

どうしてだろう、分からないけど…物凄く楽しい、そんなわたしがいた。

「たつ…助け…!」

目の前で怯える相手を見て最高に愉快だった。…そして余計に殺したくなつた。もう理由なんてどうでもいい、とにかく目の前のものを全てを破壊したくてたまらない衝動にわたしは駆られる。

「喰らえっ!フレア・レーザーツ!!!」

凄まじい轟音と光と共に高温の赤い光線がわたしの掌から放たれ、目下の全てを焼き付くした。辺りは焼け野原に変わり全てが灰へと変わる。無論、ゾンビ達は墓石もろとも薙ぎ払われた。…しかし、なぜかシャクマの立っていた一角だけは燃焼を免れていた。

「…いったい何のマネですか?」

シャクマがそう聞くとわたしは不気味に笑いながらこう答える。

「わたしねえ…最近人殺しを控えるようにしてるの忘れてたの。だからここは見逃してあげるよ。わたしはあなたたちに協力する気は無いって、政府にせいぜい伝えておくことね」

…そう、わたしがレーザーを放つ直前に何故かノアちゃんの顔が脳裏に浮かんだのだ。あの娘が無意味な殺戮を嫌っていることは知っている。だからわたしはシャクマを殺すことを今回は見送ることに

した。そうでなければ、きっと彼女の思いを裏切ることになるから。……わかりました、私の完敗です。いつか私を生かして置いたことを後悔させて見せます。それでは、またの機会に……！」
そうわたしに皮肉を込めるように言うと、シヤクマは墓地の奥へと静かに消えて行った……。

「それにしてもあの感覚……わたしはいつたいたい何を……？」
わたしの中に残るこの感覚、何処かで同じような体験をしたような気がしてならない。……そしてそれが恐ろしいものであるとも。記憶が少しずつ戻るにしたがって忘れかけていた何かがわたしを揺さぶった。

《夕食の席にて……エレノアの願い》

「遅い！どこほつつき歩いてたんだよ？！こっちは飯作って待ってるってのに……！」

すでに時刻は夜の9時を告げようとしていた。いつもならとつくに夕飯を済ましている時間なのに……予想していたとは言え、ロゼッタが玄関から入ってきた時にはもう怒りが収まらない。

「ふえ〜ん！ごめんなさい〜！……ちよつと野良犬とケンカしてて……」
ロゼッタはそう私に謝った。野良犬と喧嘩……？ちよつと不可解に思いつつも私は深く言及しないことにした。

「なんじゃそりゃ？まあ、とにかく飯食うぞ！こっちは腹ペコなんだからさ……！」

そう言っ私は洗面所でロゼッタに手を洗わせてからテーブルに共に座る。

「はあーい！いっただきま〜す！」

ロゼッタはそう言うのと早速目の前のご馳走にかぶりつく。

「……今日はエレノア作、マカロニグラタンだよ」

ミーシャがそう言った。

「えっ！？ノアちゃんって料理できんの！？」

口の周りにグラタンのホワイトソースをたっぷりつけながらロゼッタが目を丸くする。

「当たり前だ！料理は私の趣味だよ！」

確かにそのことについては言っていなかったが、何もそこまで驚かなくても…。

「へえ〜初耳…でもこのグラタン、とっても美味しいよノアちゃん！」

「味、見た目…共に完璧ねエレノア」

ロゼッタとミーシャはそう口を揃えて私の料理を褒めてくれた。

「そ、そうか？なんか照れるな！」

私はちよつと照れ笑いしてみる。

「きつといいお嫁さんになれるね！」

「え？そ、そんな…お嫁さんだなんて」

ロゼッタが急にそんなことを言うものだから私はなんだかとても恥ずかしくなった。

「もちろん、相手が見つければの話だけどね！」

案の定、ロゼッタは台詞の最後にそう余計な一言を付け加えたわけだが。

「どーゆー意味だよ！」

私がそう聞くと、

「…貧乳だから…？」

「あっ！それわたしのセリフなのに〜！」

お決まりの台詞をミーシャに盗られてロゼッタが頬を膨らます。

「そんなに言うならさあ…お前らの少しはわけてくれよホントに」
私はもう諦め半分でそう言った。

「じゃあ、おっぱい大きくする手術すれば？」

ロゼッタがそういらん提案をする。

「豊胸手術…だね」

そしてミーシャが意味の無い要約をする。

「お前らに相談した私がバカでした…」

当たり前だ、手術するってことは自らの貧乳を認めることになりかねない。

「でも昼間、神様にお願いしたから大丈夫だよきつと！明日にはDカップぐらいにはなってるって！」

「それって…超常現象じゃん」

ロゼッタの根拠の無い素っ頓狂な話にそうミーシャがつっこむ。

「三人が私の胸以外の話題で盛り上げられますようにってお願いすりゃよかったよ」

私がそう言つとミーシャが最後に一言、こつ言つた。

「…うまいオチだね」

暖かい食事と柔らかい雰囲気の中、私達は何気無い会話を交わす…これ以上の幸せが何処にあるのだろうか？『この幸せがいつまでも続きますように…』私は改めて神に祈りを捧げていた…。

第四章 NIGHTMARE（後書き）

最近、社会では悲惨な事件や普通では考えられない事故が増えているように感じます。これも人々の心が病んできている結果なのか？ そう考えると意気消沈してしまいます。やはり世の中が便利で豊かになるほどに人々の心は反比例して寂しくなってしまうものなのでしょうか？ 実はこの小説のキーワードは人の心のやりとり、つまり『人間関係』なのです。この小説を通して人間関係を見つめ直してみてください。きっと何かに気付くはずですよ。

第五章 ホワイト・スノー（前書き）

人は時に恋をします。きっかけや結末はどうであれ人は生きている限り何かに恋こがれて生きています。恋ができなくなった時、それが人の死だと思えます。何かを愛する力こそ生きる原動力なのです。みなさんもちよつと自分の恋愛について考えながら読んでくださると幸いです。

第五章 ホワイト・スノー

…辺り一面の銀世界が広がっていた。

「温かいココアが飲みたいなあ」

私はそう呟いた。

「雪男さんに頼んでみれば？」

するとロゼッタがそう言ったので、

「そのくらい親切な雪男だったらこんな所に退治しになんか来るか

よ！」

と、私は彼女ロゼッタにつっこむ。

…遙か後方には町の灯りが小さく見えた。私達がノーザングレイトに到着したのは2日前。そこで町の北にある山に住む恐ろしい雪男の話聞いたのである。もう何人も襲われているらしいが、最北の町とゆうこともあり政府もなかなか策を打ってくれないらしい。あまりにも可哀想なので、格安料金で雪男退治を引き受けたのである。

「ハックシヨン！あゝ寒い！なんでこんなに寒いんだよ！これじゃあ冷凍人間になっちまう！」

私は寒さを紛らわす意味でそんな冗談を言ってみる。

「キヤハハ！冷凍ノアちゃんだ！」

「…冷凍ミカンじゃないんだから…」

ミーシャがロゼッタにそう冷静に言った。

「雪男は山奥の洞窟に住んでいるらしい。早いところボコして帰るぞっ！こんな所で凍え死んでたまるか！」

「ラジャー！！！」

「…それってつまりリンチじゃん…」

何はともあれ、防寒対策もほどほどに私達は裾野の雪原から雪山への登山を開始することにしたのであった。

《雪原の追跡者》

…そんな吹雪のなか、三人を遙か後方から密かに追跡する男の姿があった。髪は雪と同じ真っ白で金色の瞳をしている。男は寒そうにぼやいた。

「寒い…寒すぎる！なんで政府直属の特殊部隊『エフェクト』のメンバーの俺があんな小娘共のお守りなんか…『赤い悪魔』だか何だか知らんが、さっさと始末して帰ろう！」

男は前の三人と距離を置きながら、後を付けて行った。

「それにしてもあの三人…カワイイなあ！あの赤い髪の娘がシヤクマを負かした『赤い悪魔』だなんて信じられねえよ！でも俺の好みはショートカットのあの緑の髪の娘なんだよねえ…そそられるなあ。ちよつと政府に引き渡すにはもつたいないような気もするなあ」

男は双眼鏡の向こうに映るエレノアを見ながらため息をついた。そしてこつ本音を漏らす。

「政府は信用できないからな。何考えてるかわからないし…」

《運命のコンタクト》

雪山に早めの夕刻が迫る中、三人は小さな洞窟で暖をとっていた。

午後から天候が急に悪化してこれ以上歩き回るのは危険だとエレノアが判断したからである。

「今日は吹雪がひどいから、続きはまた明日だ。もう寝るぞ。体力を温存しないとな」

エレノアがそう言った。

「疲れた〜！」

ロゼッタが大きく伸びをする。

「…疲労MAXって感じ」

いつも死んだ魚のような目をしたミーシャだが、今日はなおさらだ。

やがて疲労困憊の三人は寝袋に入った。が、疲れているのにも関わらず寒くてなかなか寝付けない。

「…ねえ、みんなは好きな人とかいるの？」

眠れないでいるとロゼッタがそう話かけてきた。雑談の女王のおでました、暇つぶしには丁度いいときつとエレノアもミーシャもそう思ったに違いない。

「そんなもんいるわけないだろ？私は男には興味無いんでね」

エレノアがそうキツパリと答える。

「…私も…今のところは」

ミーシャもこの話題には大して興味が無い様子。

「え〜、なんかつままないなあー！…かとゆうわたしもいないけど！」

ロゼッタがそう笑いながら答える。

「だったら聴くなよ！」

「…ダメじゃん」

エレノアとミーシャがそう言うと、ロゼッタは真面目な顔でこう話始めた。

「でもさ、わたしたちも女性としていつかは赤ちゃんを産むことになるわけだね？…それに関してどう思う？」

「それは…今は何とも言えんが…もし結婚したら赤ちゃん欲しくなるだろうよ…多分」

エレノアは少し照れ気味にそう答えた。

「…生き物の本能だもの…必然的だよ」

ミーシャはそう相変わらず淡白な口調で言う。

「あはは、二人らしいや！…もう寝ようか？」

話が真面目な方向に傾きすぎるのを避けたかったのだろうか、珍しくロゼッタの方からそう眠ることを促す。

「それもそうだな…おやすみ」

そう言ってエレノアは寝袋に首まで潜り込む。

「…おやすみなさい」

ミーシャも寝袋のチャックを上まで閉める。

こうして三人は眠りについた。エレノア一人を除いて…

「…私もいつかは『お母さん』になる…か」

そんなことを考えるとエレノアは寝るに眠れない。…恥ずかしいことと何故か股間の辺りが疼いた。

…その頃、洞窟から少し離れたところで男はカチカチに凍った食料と格闘していた。

「ああ…俺も洞窟の中に入りてえ…。暖かい食事にカワイイ女の子達が…って、いかんいかん！危うくあの世に逝くところだった！」

男は自分に言い聞かせる。彼は洞窟から少し離れた岩陰で吹き荒ぶ吹雪を何とかやり過ごしていた。どうやら彼自身、寒さにはそれなりに強いようである。

「そうさ！相手はしょせん女！この俺様の敵ではない！…にしてもやっぱり寒いなあホント…」

そんなことを考えてとにかく眠らないように彼は頑張った。

…やがて訪れる夜明け前、東の空が白けてくると同時に吹雪が段々弱まってきた。

「吹雪が弱くなってきたか。明け方には奴らも動き出すだろう…こんな調子で大丈夫かなあ俺は？」

男は少々不安そうに言った。

日の出から数時間後、一方のエレノア達は清々しい朝を迎えていた。吹雪はおさまり白銀の大地が太陽の光を反射してキラキラと輝いている。

「よし、今日こそは雪男を退治して町で暖かい食事を食べるぞ！お前らっ！用意はいいか？！」

エレノアが威勢よくそう言つと、

「おー！」

「…うん」

ロゼッタとミーシャがそれに応える。

「それじゃあ出発！」

三人は気合十分で雪男退治を再開した。

…が、お昼を過ぎててもいつこくに雪男の住む洞窟は見つからない。この広い雪山である目標物を発見することがいかに難しいか、どうやらトレジャーハンターのエレノアでさえあまり理解していないようだ。

「クソ！ いったいどうなってんだよ！？ 本当に洞窟なんてあるのかよ？」

短気なエレノアは足で積もった雪を蹴り飛ばす。

「…地図だとこの辺りのハズなんだけど？」

ミーシャは地図を見ながら頭を掻いた。

「わかった！ きつと雪男さんは、どこかにお引越ししちゃったんだよ！」

ロゼッタは現状を分かっているのかいないのか微妙な冗談を言う始末。

「なんでやねん！」

エレノアが彼女にロゼッタそう言ったのは言うまでも無い。

「もうお昼だし…そろそろお弁当にしない？」

ミーシャが何となく不穏な空気を察してそう提案する。

「そうだな。腹が減っては戦もできぬからな」

エレノアもその提案には賛成のようである。

「わーい！」

ロゼッタは大喜びだ、この娘はとにかく食べるのが好きだから。

「雪原ピクニック…なんちゃって」

ミーシャがそんなことを言うので、

「なんかさあ、お前最近そういうジョーク増えてないか？」

エレノアがそう手痛い突っ込みを入れる。

「気のせいだよ…多分」

ミーシャはそっぽを向いて知らない振りをした。

とりあえず彼女達は適当な岩陰で荷物を広げ始めた。雪原のど真ん中でお弁当を広げる奴らなんてきつと彼女達くらいのもだろう。…そんな時だった、近くにあった岩の上から突然に人影が現れた。「ハハハ！この俺様の前でんきにランチとはいいい度胸だな！」突然現れてはそんなことを言う見知らぬ男の登場に三人は驚いた。

「誰だてめえ?!」

エレノアが喧嘩腰に前に出る。

「俺はティティス。政府の連中に言われてお前らを抹殺しに来た！」

男はそう単刀直入に言った。

「政府のアサシンか!…てゆーか昼飯の邪魔すんなボケ！」

ただでさえ気性の荒いエレノアだが、機嫌の悪い今はなおさら暴言に磨きが掛かる。

「そーだそーだ！」

「…厄介者」

ロゼッタもミーシャも招かれざる客に不服の様子。

「う、うるさいって!問答無用!いざ、陣上に！」

男は岩の上からエレノアの目の前に飛び降りた。…が、ティティスが着地した瞬間、二人の立っていた地面が崩れて大きな暗い穴が口を開けた!

「うわあああ!?!?」

そのまま二人は深い暗闇へと吸い込まれていった…!

「ノアちゃん!！」

「エレノア!」

ロゼッタとミーシャは慌てて二人の落ちた穴に駆け寄る。しかし、まるで底の見えない深い穴を前にどうすることもできない。

「な、なんでこんなことに!?!」

ロゼッタは半ばパニック状態だ。

「…そうか、吹雪のせいで洞窟の入口が隠れていたんだ」
対照的にミーシャはそう冷静に状況分析する。

「えっ!ミーちゃん、洞窟ってまさか…!」

「…そうだよ、つまり雪男の家」
ミーシャがそう分かりやすい表現で現状を伝えた。二人の顔から血の気が引く。

「ど、どうしよう！ノアちゃんが食べられちゃうよ！」
慌てるロゼッタにミーシャは冷静にこう言い聞かせた。

「落ち着いてよロゼッタ。…この穴からは入れそうもないし他の入口を探してそこから助けに行くしかない」

「う、うん。わかったよミーちゃん！」

冷静なミーシャの対応を見てロゼッタも少しは落ち着いたようだ。

「…大丈夫。彼女かなりたくましいから。それに…」

「それに？何なのミーちゃん？」

ロゼッタがミーシャにそう尋ねると、

「…もう一人身代わりのエサもいるし」

ミーシャは意味深な薄笑いを浮かべた。

「あつ、なるほど！」

ロゼッタもその意味を何となく理解したようだ。この二人、どうやらテイティスの安否はどうでも良いらしい。

「とりあえず二手に別れて探しましょ…そっちの方が効率いいから」
ミーシャがそう作戦をロゼッタに伝えた。

「了解！…雪男め、ノアちゃんに何かあつたら絶対殺す！」

ロゼッタは血に飢えた獣のような目でそんなことを言う。

「…私は雪男より貴女の方が怖いけど…？」

ミーシャがそんなことを言うのも当たり前だ。

とにかくここからは時間との勝負でもある、二人はそれぞれ駆け足で雪原に繰り出していった。

《氷の洞窟》

「イテテ…ここは…？」

ティティスが目を覚ますと辺り一面が氷の壁だった。天井からは雪と氷を通して光が届いており、意外と明るかった。

「どうやら洞窟のようだな…そういえば、あの娘は…？」

ティティスが見回すとさっきの娘がうつ伏せで倒れていた。

「おい！大丈夫か？」

ティティスが仰向けに抱き抱えて声をかけると、その娘は目を覚ました。

「…きゃあっ!？」

ズドガッ!!

驚いたエレノアのグーパンチがもろにティティスに入った。

「ゲホッ?!…いきなり殴ることはないだろ?!しかもグーで！」

ティティスは苦しまぎれに言った。

「そ、そっちが勝手に近づいて来たからでしょっ!？」

エレノアが距離をとって構えながらそう言う。

「なんだと?人がせつかく助けてやろうとしてやったのに！」

ティティスがちょっとムツとして言うと、

「頼んだ覚えはないんだけど！」

エレノアはそうキツパリと答える。

「あっ!コイツ!ちっ!可愛く無いの！」

ティティスはそう舌打ちした。

「可愛くなくて結構!…それよりここは？」

エレノアが聞くと、

「さあな?一応、洞窟みたいだぜ」

ティティスは首を傾げながらもそう答えた。

「洞窟?…って、まさか雪男の?!」

エレノアは直感的に今いる場所が危険であることを悟る。

「なんだって!?!あの人食いつて有名な?こんな所で食われるのは御免だね！」

ティティスは少々驚いた様子でそう言い切った。

「私だって嫌だよ！」

エレノアも食われたくない気持ちは同じだ。

「どうやら…ここは協力して脱出するしかねえな」

ティティスがそう言った。それを聞いたエレノアはびっくりしてこ
う言う。

「協力して?!冗談でしょう?!だってお前、私達を殺しに…」
すると男は意外なことを言い出した。

「ああ…その話だけどき、無かったことにしといてよ。俺、女の子
殺すの趣味じゃないからよ!」

「なんじゃそりゃ?まあそっちの方がいいか…」

エレノアは呆れ顔でそう呟いた。

「決定だな。俺、ティティスってんだ!ま、仲良くしよ。あんたは
?」

「…お前なんか名乗る義務はないけど?」

どうやらエレノアはこの馴れ馴れしい態度の男が気に食わないよう
だ。

「あんたホント可愛く無いなあ…。じゃあオトコオンナでいい?」

ティティスがそう言うので、

「いいわけないだろ?!…エレノアだ」

エレノアは渋々そう答えた。

「へえ…なかなかカワイイ名前してんじゃん!それじゃ、よろしく
ねエレノアちゃん!」

「ちゃんは付けるな!」

「…はいはい」

妙に強気なエレノアにティティスは苦笑いするしかない。

「とにかく!さっさと先に進むぞ!」

「進むってどっちに?」

ティティスにそう聞かれたエレノアは少し考えてから、

「…知るかつ!適当にだつ!」

そう乱暴に吐き捨てた。元々、彼女にこれといった計画性など無い
のだから。

「…君、ホントに女の子なの？」
「う、うるさいっ！黙れティティス」
そんなやり取りをしながらも、二人は洞窟の先へと進んで行った…。

《雪原》

…そのころ、二人は洞窟の入口探しに疲れて座り込んでいた。

「だ、ダメだ…！いつこつにみつからないよ〜！」

ロゼツタがそう弱音を吐く。この悪環境では彼女の優れた五感でもエレノア達を見つけ出すのは難しいらしい。

「…雪積もり過ぎ」

ミーシャが雪山ならば当たり前のことをそう口走る。

「なんかノアちゃんなら助けなくても平気な気までしてきたよ」

ロゼツタがそう冗談交じりに言った。

「同感…」

ミーシャが軽く頷いた。

「もしかしたら…意外とあの男の子と、うまくやってるかもね！」

ロゼツタがニヤニヤしながら言う。

「…有り得る。あのタイプの娘は惚れっぽい傾向にあるからなあ」

何か思い当たる節でもあるのだろうか、ミーシャはそう呟いた。

「もしかしてそのままエツチな展開に！…キヤー！」

頭の中が大変なことになっているのか、ロゼツタは興奮して雪を掻き毟る。

「…妄想しすぎ。でも、なんか面白そうかも」

ミーシャもあれこれ考えてみてからそう言った。

「でも逆に尻に敷いてたらウケる！」

ゲラゲラと笑いながらロゼツタがそんなことを言う。

「…そろそろ探さない？なんか相手が可哀想になってきた」

妄想で暴走するロゼツタにミーシャがそう言った。

「…うん。そだね！」
結局、二人は再び洞窟の入り口を探すため雪原を歩きだした…。

《雪男の襲撃》

「ハッ…ハックション…誰か噂してんな。てゆうかあの二人が」
エレノアが鼻を嚙りながらそう呟く。エレノアとティティスの二人は広大な氷の洞窟をさまよっていた。

「どうした？寒いのか？」

ティティスがエレノアにそう聞く。

「別になんともないよ…！クチュンツ！」

そう強がってはみるものの、こんなに長居をする予定じゃなかった薄着のエレノアはさつきからくしゃみやみと鼻水が止まらない。

「やっぱし寒いんじゃないか。…ホラ。これ着てるよ」

ティティスはそう言って徐にコートを脱ぐと、エレノアの体にコートをかけてあげた。

「な、なんだよ？」

エレノアは驚いた。こんな経験はもちろん初めてだったから。

「これで少しは暖かいだろうよ」

ティティスがそう爽やかな笑顔で言う。

「あ、ありがとう…！で、でも礼は言わんぞ！」

エレノアは少し恥ずかしそうに言った。気が動転してもう自分が何を喋っているのか分からない。

「今言っただじゃん」

言葉の矛盾をティティスがそう指摘する。

「う、うるさいな！」

エレノアの顔は自分自身でも分かるくらいにもう真っ赤だ。

「お前、面白いな」

ティティスは慌てるエレノアの様子を見てクスクスと笑う。

「わっ、笑うなっ！」

恥ずかしすぎて寒さも忘れるくらいにエレノアの体は熱くなった。

「お前なあ、せっかくの美人なんだからもうちょっと女の子らしくしてみたら？絶対カワイイってホント！」

半分は冗談だったのかも知れないが、ティティスがそんなことをエレノアに言ってきた。

「え…？」

その言葉にエレノアの表情が一瞬変わる。そんなことを異性から言われるのは生まれて初めてだった。

「あれ…？もしかして照れてる？」

ティティスが興味津々にエレノアの顔を覗き込む。

「てっ、照れてなんか…」

「じゃあなんで顔赤いのかなあ？」

彼はさらに顔を近づけてそう尋ねる。

「こっ…これは…その…えと…あの…」

あまりにも突然に予想外の言葉を言われたので、エレノアは完全に慌ててしまった。

「ハハハ。冗談だよ！べつにいいよ、無理に答えなくても！」

悪戯に満足したのか、ティティスはエレノアから顔を離れた。

「…お前、私をからかってんだろ?!」

今度はエレノアが怒ってそうティティスに詰め寄る。

「もちろん。でも本当にカワイイと思ってるけれどね？」

ティティスは意外なまでにあっさりそう答えた。

「…それも冗談か？」

エレノアが念を押すと、

「さあ、どうだろうね？」

彼は笑いながらそうエレノアに答えた。

「なんだよそれ…。あ、それより一つ聞きたいんだけど…」

エレノアが話題を逸らすようにティティスに話かける。

「ん？なんだよエレノア、改まっちゃって？」

「お前ら政府のアサシンって何者なの？」
「何者って…シャクマから聞いてないの？」
「は？誰それ？何言ってるのテイティス？」
エレノアには何のことかわからなかった。
「あれ？このあいだ赤い悪魔と闘っているはずだけど？エレノアはあの赤い娘とは仲良しなんだろう？」
「…ロゼッタのやつ、さては内緒にしゃがったな」
ようやくエレノアはロゼッタが自分達に隠し事をしていることに気がついた。

「…で、当の本人はなんて？」
テイティスがそう質問する。

「野良犬と喧嘩したんだってさ。ロゼッタはそう言ってた」

「野良犬扱いなんて…シャクマ、ドンマイ」

エレノアの言葉にテイティスは苦笑いするしかない。

…その時、洞窟の奥から何か聞こえてきた。それは地響きのような、でも一定のリズムを刻んでいる。

「…何の音？」

「足音：みたいだな。気をつけるエレノア」

二人は耳を澄ました。…それは何か大きなものがこちらに近づいてくるようだった。

「私達の他に誰がいるのか？それともまさか…」

「なんか嫌な予感が…」

二人は互いの顔を見合わせる。…嫌な予感は的中した。やがて氷の壁のむこうから身長三メートルはあるつかとゆう大きな雪男が現れた！

「…!!!」

雪男は白い息を吐きながら突然こちらに向かって突進してくると二人にその大きな拳をふりおろした！

「うわぁっ！」

「うおっ！」

二人はとつさに身をかわした。雪男の拳が、氷の床にめりこんだ。

「やりやがったな！この野郎八千の巣にしてやるっ！」

ホルダーから銃を抜こうとしたエレノアをティティスが止めた。

「まあ待て待て。どうだ？ここは俺に殺らせてくれないかエレノア？」

「あいつは私達の獲物なんだけど！」

エレノアは怒ってそう言った。

「わかってるよ。だけど、このままかえるのは釈に触るんでね。大丈夫、タダだからよ。」

ティティスは余裕の表情でそうウインクして見せた。

「タダより高い物は無いって言うけど？」

もちろん、こんなチャラ男を信用できるほどエレノアはお人好しではない。

「まあ気にするなよ。たまには女の子らしくおとなしくしてても悪くはないだろ？」

そんな痛いところを彼が突くので、

「なんだよそれ…もう好きにしてよね！」

エレノアは渋々それを承諾した。

「ああ…最初からそのつもりだよ」

会話が終わるとティティスの目の色が変わった。彼の雪男を見つめる視線は、今までにエレノアが見たことのないぐらい冷たかった。

「やれやれ、こんなことになるなんて俺もどうかしてるよ。…つららミサイル！」

彼は冷たい声でそう呟いた。次の瞬間、洞窟の壁一面に生えていた何本もの氷の柱が雪男に向かって飛んで行きその体を貫く。雪男の白い体と氷の床は一瞬で赤く染まり巨体が氷の床にひれ伏す。…雪男はもうそのまま動くことはなかった。

「…俺、実はこう見えても氷使いでさ。仲間からは『ブリザード』って呼ばれてるんだぜ？」

急な出来事に啞然としているエレノアにティティスは笑顔でそう言

った。

「っ、…強い…！」

彼が何をしたのかエレノアにはまだ理解できなかった。魔法…いや、もつと何か違った能力ちからであることだけは確かである。

「まだまだこんなものじゃないさ、戦闘組織『エフェクト』の強さは」

「エフェクト…？」

ティティスがそんな聞き慣れない単語を口にするのでエレノアは首を傾げる。

「おつと、ちよつと喋り過ぎたかな？」

ティティスはそう言っつて顔を逸らした。

「？…それよりなんかさつきより寒くない？風があるって言うか…」
エレノアは何処からか吹いてくる風を顔に感じていた。

「そりゃそうさ。ホラ、あそこ！」

ティティスの指差す方向に視線をやると、そこには出口がぽっかりと口を開けていた。

「やった！出口だ！」

目的の物を見つけてエレノアは喜びを隠せない。

「やれやれ…やって出れるな俺ら」

ティティスもホツとした様子だ。

それから出口から外に出た二人は久しぶりに外の空気を吸うことができた。

「やっぱ外の空気は美味しいな！エレノアもそう思うだろ？」

「え…う、うん。そうだね」

子供のような笑顔でティティスにそう言われてエレノアはまた顔が赤くなる。

「ちなみにコートは記念にやるよ！生還できた記念だ」

そう言っつてティティスがエレノアの肩を叩いた。

「え？いいのティティス？」

「エレノアにちよつとしたプレゼントだよ。…いらないうらいいけ

ど？」

「ううん！いらなくないって！」

エレノアは首を横にブンブン振りながらそう言った。さて、二人がそんな会話をしていると…

「おーい！おーい！無事なの〜！」

雪原の遙か向こうに小さな人影が二つ見えた。

「…どうやら迎えがきたようだし俺はもう行くよ。また機会があったらそんなときはよろしくな！」

ティティスはそう言うのとエレノアに背を向けて歩きだす。

「ティティス！」

エレノアが彼を呼び止めた。

「なんだ？」

ティティスが振り返ると、

「色々ありがとう…コート…大事にするね！」

エレノアがちよっと照れくさそうにそう言った。

「おう！ちゃんと洗濯しろよ！」

そう言い残すと、ティティスは静かに雪原の中に去って行った…。

《雪原の夜》

日もすっかり暮れたノーザングレイへの帰り道、エレノアの様子がいつもと違うことにロゼッタとミーシャは不思議な面持ちでいた。

「ど、どうしちゃったんだろうノアちゃん？」

「…心の病？」

「さっきだって、貧乳雪女ってわたしがからかったのに反応がイマイチだったし」

ロゼッタが不思議そうに首を傾げる。

「…ハア」

エレノアはさっきから溜め息ばかりつく始末。いつもの威勢の良さ

は何処へやら。

「…さつきからずっとこの調子…」

ミーシャも少し心配そうである。するとロゼッタは少し考えていた何かを思いついたようにエレノアにこんなことを聴いた。

「…もしかして、さつきの男の子と何かあったでしょ？」

「えっ！べ、別にそんなことは…」

エレノアはドキッとした様子。どうやら図星のようだ。

「うそ！顔にちゃんと書いてあるよ！さあ！正直に喋っちゃいなさい！」

ロゼッタが喰い気味にそう迫る。

「…コートももらっただけだよ」

エレノアは視線を少し逸らしてそう答えた。

「男の方はなんて言うてくれたの？」

「寒いから着てるよって…最終的には記念にしてくれた」

ロゼッタの質問に相変わらず声を潜めてそうエレノアは答える。

「あれれ〜？ノアちゃん、わたしたちそっちのけでいいカンジじゃん？」

「…抜け駆け」

ロゼッタとミーシャは疑惑の眼差しでエレノアを見つめる。そんな二人に対してエレノアは顔を真っ赤にして反論した。

「なっ、だっ、誰があんなやつ！」

「キャハハ！照れちゃって！ノアちゃんカワイイ〜！」

「…赤面してるよ」

「〜っ！」

いくら弁明しても二人はまともに相手にしてくれない。エレノアは顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

「よかったね！おむこさん候補が見つかった！」

「だから違っつて！」

しつこいロゼッタに声を荒げてエレノアが否定する。

「…まさかもうニヤンニヤンしたとか？」

「してない！断じてしてない！」

同じくミーシャの疑問系にも食って掛かる。

「凍てつく氷の洞窟内でのあつゝい愛の営み…キヤー！ノアちゃん
だいたーん！！」

「…処女消失？」

容赦なくからかってくる妄想魔のロゼッタとストレートなミーシャ
に、エレノアはついにキレた。

「お…お前らあゝ…！言わせて置けば好き勝手言いやがってえゝ！
もう許さん！ボコボコにして雪原に埋めてやるっ！」

エレノアが二人に迫ってきた！

「キヤー！いつものガサツなノアちゃんに戻っちった！逃げろゝ！」

「…じゃ、このままノーザングレイまで競走」

二人はそう言つて慌てて逃走した。

「こらあ、待てえ！ロゼッタ！ミーシャ！」

「キヤハハ！やっぱりノアちゃんが世界で一番怖いようゝ！」

「何よそのオチ…！」

結局、三人の熱のこもった追いかけっこは町に着くまでしばらく続
くのであつた…。

どうやらエレノアの恋患いとこのネタでのロゼッタのちよっかいは
しばらく続きそうです。

T o n i g h t t h e s t a r s a r e s h i n n i n g
o u t b r i l l i a n t l y a g a i n s t a b l a c
k s k y .

第五章 ホワイト・スノー（後書き）

《コラム・政府の狙い》

何かと政府に付け狙われる彼女達ですが、そもそもの狙いはロゼッタの捕獲及び軍事的利用等を目的としているようです。しかし、それにしてはわざわざ刺客を一人ずつ送り込むなど聊かやり方が回りくどいような気がします。どうやらもう少し踏み込んだ理由わけがありそうですが、それが判明するのはだいぶ先の事になるでしょう。

第六章 塩の砂漠（前書き）

「死海」とゆう湖を知っていますか？塩分濃度が極端に高いために、人が水面に簡単に浮かんでしまう不思議な湖です。このように、地球には様々な自然が存在しています。この小説ではそんな美しい自然も重要な構成要素です。今回の舞台はそんな不思議な「砂漠」です。

第六章 塩の砂漠

「なかなか泣けるねこの小説…ヒロインはどのお話でも最後には死ぬ運命なんだけど」

冷たい空気が辺りを包んでいた。ここはノーザングレイのホテルの一室。ミーシャは窓から差し込む月の光で本を読んでいた。エレノアとロゼッタの二人はとつくに寝ている。

…最近の小説などの物語は残酷なものが多い。いや、それが本来の物語の真髓なのだ。有名で平和的な昔話も、原作を見ると意外と残酷なものである。物語は我々人類に何かしらの警鐘を鳴らしているのかも知れない。…ミーシャはそんなことを考えるのが好きだった。

「…明日はどこか暖かい街に行くんだよね」

午前三時、ようやくミーシャは本を閉じベッドに入った。

「…小説も現実も起こることはたいして変わらない。真実はいつも残酷なんだ…そう、人間の歴史が血と争いで創られてきたように」
意味深な言葉を残し、彼女は眠りについた。

《ノーザングレイ郊外》

「それじゃあ、出発するか！ミーシャ、頼む」

緑の目と髪をした少女がそう元気に言う。旅の支度を整えたエレノア達はホテルを出て町から少し外れた雪残る緩やかな丘の上に来ていた。これからミーシャの呼び出す召還獣に乗って少し離れた目的地に向かうのだが、さすがに街中で召還魔法を使うわけにはいかない。

「…わかった。おいでワニガワ！」

ミーシャが予め地面に書いておいた複雑な魔方陣に向かって何やら

難しい呪文を唱えると黒い光の中から大きな翼を持ったトカゲのよ
うな生き物が現れた。ちなみにワニガワとはこのワイバーンの愛称
らしい、ミーシャのネーミングセンスには凄まじいものがある。

「ガルル…」

ワイバーンは何となく悩ましげな表情でミーシャに頬ずりする。

「ワニガワはなんて言ってるのミーちゃん？」

ロゼッタがそう質問した。

「…今さらながら三人は重いからなんとかしてくれだつてさ」

ミーシャはそう答えた。

「そりゃあ、気持ちわかるけどさ…じゃあ、どうすんだよ？」

エレノアが怪訝そうな表情で言う。他に良い案が思いつかなかった
からだ。

「そうだ！ノアちゃんが降りればいいんだ！」

ロゼッタがそう冗談交じりに提案する。

「は！？じゃあ私はどうすんだよ？」

「ノアちゃんはあ、走って追いかける！」

ロゼッタは屈託のない笑顔でエレノアにそう告げる。

「ふざけんな！なんでそーなる？！てゆーかお前が飛べよ！」

もちろんエレノアはそんな無茶苦茶なことは承諾できない。

「え〜、かつたるいからやだ！」

もちろんエレノアは冗談のつもりで言ったのだろうが、実際に飛行
可能なロゼッタは本気で嫌な顔をする。

「…しょうがない。もう一匹召還するよ、ちよつとつるさいけど」

そう言つてミーシャは木の枝で地面にさつきとは別の魔方陣を書き
始めた。

「お前、まだ召還獣いるのか？」

エレノアは魔方陣を書くミーシャの様子を真顔で見ながらそう言う。

「さすがは魔法少女！」

お気楽なロゼッタは手を叩いてミーシャを称える。

「まあ、召還獣はたくさん存在するからね。いくよ…グリフォン召

「還！」

ミーシャが呪文を唱えると、魔法陣の中から鷹の頭と翼を持ち獅子の胴体をした獣が現れた。

「お久しぶりですミーシャさん！…なんだか前よりもにぎやかになつてみたいですね？」

ちよつとテンポの速い喋りでそうグリフォンは主人ミーシャに尋ねる。

「…うるさいなあヤキトリ。別にどうでも良いでしょそんなこと」

ミーシャはあからさまに嫌な顔でそう答えた。

「…その名前何とかしてくれませんか？」

グリフォンは呼び出されてから早々に意気消沈の様子。ヤキトリとはこれまたミーシャの神的なネーミングセンスがもたらした彼の名前のようだ。

「妙にリアルな名前だな」

「ミーちゃん、すごひどっ！」

ロゼッタとエレノアもこれには苦笑いするしかない。

「で？俺には誰が乗るんです？ちなみに一人乗りだから、そこところよろしくです」

「…そんなのちゃんとわかってるから、このお喋りオウム」

ヤキトリの言葉にミーシャがそう言った。

「鷹です…」

どうやらお喋りのヤキトリは無口なミーシャにとっては喧しい存在なのかもしれない。

「じゃあ、わたしがのつたげる！」

新しいものの好きのロゼッタがそう立候補する。

「おおっ！なんと積極的な！指名されたからには乗り心地は保証するぜです！」

ヤキトリはそう嬉しそうに言うのだが、

「うん！よろしくね！えっと、カラアゲ君！」

「…ヤキトリです」

あっさり名前を間違えられてしまった。どうやらロゼッタにとって

彼は『食べ物の名前をした誰か』に過ぎないようである。

「決まりだな。それじゃいよいよ出発だ！」

「出発ってどこへ？」

ロゼッタがそう聞くとエレノアはこう答えた。

「…塩の街ソルヴィーノさ」

《某日、共和国首都シランド大統領府》

ここは共和国の首都シランドにある大統領府の一室、そこでは様々な議題に混じってとある重要事項の話し合いが行われていた。

「赤い悪魔の行方は？」

やや若いが貫禄のある細身の男がそう担当者に聞く。

「それが…特殊部隊エフェクトのシャクマと交戦後、行方がわからなくなっております…」

担当者はそう資料を見ながら答える。

「テイティスは？」

「奴らとは遭遇してないと…いかがなさいますシュナウザー様？」

担当者は答えに少し困っているようだ。

「そうか…わかった。ご苦勞、諸君は他の議論を続けてくれたまえ。

私はこれから大統領閣下に報告に行く」

そうとだけ言うと、シュナウザーは席を立ち部屋を出て行った。

大統領のいる部屋までそれほど時間は掛からなかった、シュナウザーはある一室の前でその足を止める。

「大統領、シュナウザーです」

「シュナウザー將軍か…入れ」

シュナウザーがドアをノックすると部屋の中からそう低い声が答えた。

「例の件について報告に参りました」

「そうか。で、赤い悪魔はどうなった？」

二人は顔を合わせるなりそんな会話を交わす。

「それが…どうやら見失ったようで…」

シユナウザーはやや申し訳なさそうに答えた。

「…まあよいわ。それより『オメガ計画』はどうなっている？」

「はい。順調でございますコロッサル様」

「よろしい。…くれぐれも内密にな。人間共に我々の正体を知られては困る」

「承知しました」

そう言つてシユナウザーはコロッサルに深々と頭を下げる。

「…『赤い悪魔』め。最強兵器『レクイエム』が完成した暁には…その時がお前の最期だ」

コロッサルは嬉しそうに不敵な笑みを浮かべた。

エレノア達の知らないところで確実に魔の手が迫っていた…！

《塩の沙漠上空》

ソルヴィーノの町を目指して真っ白な沙漠の上空を飛行する三人と二匹を砂漠の乾いた空気と焼けつく太陽が襲っていた。

「暑い！暑すぎる！こないだは冷凍地獄で今度は灼熱地獄かよ！」

エレノアは団扇を仰いでみるが顔に当たる風は熱風ばかり。

「ノアちゃんは暖っかい所って言つてたけど…暖か過ぎ…あつっ！」
ロゼッタが汗だくで言つた。

「まさかこんなに暑いと思わなかったんだよ！」

エレノアがそう怒鳴ると余計に暑く感じた。

「そりやないですよ！我々召還獣もたまつたものじゃないですよ！」

「ガールウ〜！」

ヤキトリとワニガワも舌を出して熱そうだ。

「もう少しだから頑張つてよ…」

暑さでまいりそうな召還獣達をミーシャがなだめる。

「そりゃわかつてますがね。ホントに焼き鳥になりそうですよ！」
ヤキトリがそう冗談交じりに皮肉を言うと、

「キャハハ！ローストチキンだ！」

ロゼツタが笑いながら言った。

「ロゼツタさん酷すぎ……」

どうやら皮肉に関してはロゼツタの方が一枚上手のようである。

「それにしてもなんでこの砂漠白いの？」

ロゼツタが目下の白い大地を見下ろしながら首を傾げた。

「大昔、ここいらは巨大な塩湖だったらしいけど気候変動のせいで干上がっちゃったらしい。それで大量の塩だけが残ったってわけさ

！」

エレノアがそう答えた。

「さすがノアちゃん！物知りだね！」

ロゼツタがそう褒めると、

「ちなみに、これから行くソルヴィーノはその塩を輸出して生計を立てている街なんだ」

エレノアがさらに得意気に言う。

「…着いたよ。ホラ、あれ」

ミーシャがそう下を指指した。目下の白い砂漠の真ん中に大きく立派な街があった。

「うわあ！大きな街！」

ロゼツタが感嘆の声を上げた。

「ソルヴィーノは塩のおかげで豊かなんだよ」

エレノアが言った。

「…どうでもいいから早く涼もうよ」

ミーシャがホントにどうでもいいような顔でそう言った。

「…それもそうだな」

エレノアが相槌を打った。

街から少し離れた所に降りると召還獣達をしまつて、三人は街へと砂の上を歩きだした。ソルヴィーノの街は大規模な砂漠のオアシス

をイメージして頂ければ間違いないでしょう。街に入ると大きな噴水が三人を出迎えてくれた。

「うーん！マイナスイオンってカンジ！」

ロゼッタは噴水の水しぶきを浴びて気持ち良さそう。

「まさに砂漠のオアシスだな」

エレノアがそう言う、彼女は行き交う人々の表情を見ればその町の豊かさが手に取るように分かるのだ。

三人はさっさとホテルにチェックインすると部屋の中であつろぎ始めた。部屋は三人で一つだったが、大きくて立派な部屋だった。

「とりあえず探索は涼しくなる夜まで御預けだな」

荷物の整理をしながらエレノアが言う。

「ふかふかベッド〜！」

ロゼッタはベッドの上を飛び跳ねる。

「夜までヒマだね…」

ミーシャが大欠伸ばしながら言う。とりあえず、三人は思い思いのことをしながら夜を待つことにした。

《エフェクト本部》

ここは共和国の首都シランドの某所。豪華な部屋の中で三人が丸テーブルを囲みながらポーカーをしていた。

「まったく、こないだはとんでもないめにあつたぜ。寒さで凍えるかと思つたよ」

白髪の少年がそのようにぼやく。

「それで？例の赤い悪魔にはお会いになれたんですか？」
「かつちりとしたスーツ姿の男が聞く。」

「本人はちらつと見たただだよシャクマ」

「それは残念ですねティティス」

そんな短いやり取りをカードを見ながらするのであった。

「ふん：仕事に失敗したとゆうのにずいぶんと楽天的ですわね」
高そうなドレスを着た女性が少し呆れた様子で言う。

「そんなに怒ることもないでしょうエリー」
シャクマがそう宥める。

「相手は小娘なんでしょう？それも殺れないなんて：どう説明するんですのシャクマ？」

「貴女も会ってみればわかりますよエリー。赤い悪魔の強さがね」
エリーの問いにシャクマはそう何かを示唆するように薄笑いした。

「そうそうシャクマ、赤い悪魔の友達から聞いたんだが赤い悪魔はお前のこと『野良犬』だつてさ。まあ、ドンマイだな」

ティティスがそう苦笑いする。

「貴方もバカにされたものね」

エリーは涼しげな視線でシャクマを見る。

「今は構いません。いずれ後悔させますよ」

そう言うときシャクマは手札をテーブルに広げた。

「ロイヤルストレートフラッシュ：ですね」

「やるな」

「：やりますわね」

呆気にとられる二人に対してシャクマはどこか不気味な笑みを浮かべていた：。

《ソルヴィーノの夜》

日もとつぷりと暮れたソルヴィーノの町、華やかなネオンの光と音楽の中を三人は歩いていった。

「にぎやかな所だねノアちゃん！」

「流石は豊かな国ソルヴィーノだな、塩は金なりつてか？」

エレノアも口ゼツタも華やかな町の雰囲気は視線が落ち着かない様子。

「…それより仕事どうすんの？」

浮かれるエレノアとロゼッタにミーシャがそう冷静に質問する。

「ここは宝といても塩しかないし…やっぱし荒仕事しかないか」
エレノアがそう言った。

「よおーしっ！暴れるぞおー！」

「まだ仕事見つかってないから…」

腕を振り回すロゼッタにミーシャがそう一言。

三人はすぐさま役場に向かった。そこは役場と言うよりはまるでちよっとした宮殿のようでロビーにはシャンデリアやら高そうな絵画や置物があつた。エレノアはそれをうらやましそうに眺める。

「あー、盗んじゃダメだぞノアちゃん！」

ロゼッタが笑顔でそうエレノアをからかった。

「わかつてんよ！」

もちろんエレノアにそんな気は少しも無い…はずなのだが。

「…怪盗エレノア？」

ミーシャがボソッとそんな風に呟いた。

三人は役場の係員に、何か仕事はないかと訪ねてみた。すると…

「ものすごく危険だけど…サンドワーム退治でもしてみるかい？」

役人はそう三人に言った。

「サンドワーム？」

「ミミズのお化けだよ。塩を採集しに行った商人が何人も食われている。もちろん、退治すればそれなりの礼金は出るはずだよ」

質問したロゼッタに役人は少し脅かすような口調でそう告げる。

「要はミミズ退治だろ？楽勝だぜ！」

エレノアはそう意気込む。

「楽勝って…君達女の子だし、一体何者なの？」

ロゼッタが役人の素朴な質問にこう不適な笑みで答えた。

「普通じゃないってことだけは言っておくよ」

「…コラコラ」

ミーシャがそれを見て苦笑したのは言うまでもないが。

三人は役場の係員に頼んで四輪駆動のバギーを借りると、早速ながら暗闇が支配する塩の砂漠へと走らせた。エレノアはバギーのハンドルを握っていた。月明かりを浴びて白銀に輝く砂の大地がどこまでも続く。

「すごいすごい！ノアちゃんって運転できたんだ！」

助手席に座るロゼッタが感心する。

「まあな。たいていのことはできるようにしてるからな」

エレノアが得意気に答えた。

「…で、運転免許は？」

後部座席からミーシャがそう聞くと…

「…無い！」

エレノアはそうキツパリと答えるとバギーのアクセルをめいっばいふかせて、三人を乗せたバギーは塩の砂漠を爆走していった。

《塩の採掘現場》

車を走らせること一時間余り、三人は様々な機械の置いてある場所へと来た。ここは塩の採掘現場、しかしサンドフォームが出現し始めた一ヶ月前から採掘作業は中断されている。とても静かな夜だ。塩の砂が月の光を反射して不気味に光っている。…まるで時間が止まっているかのような空間だった。

「なんだかんだで予定より早く着いたな」

エレノアが腕時計を見ながらそう言った。

「ノアちゃんがとばすからだよ〜！」

車酔いでもしたのだろうか、ロゼッタは少し気持ちが悪そう。

「そうかな？私はあれで普通のつもりなんだけどね？」

エレノアそう素っ気無く答える。

「スピード狂だ…」

ミーシャが苦笑いした。

「それより、どうやってミミズを倒すかだよな…相手は地面の下だし」

エレノアは腕組しながらそう言った。

「…もしかしてノープラン？」

ミーシャが思わず溜め息を漏らす、何か作戦を立ててから行動するのが当たり前だと彼女は思っていたから。

「とりあえず相手をなんとかして誘き出さないとなあ…地面の上にさえ出てきてくれればコイツをブチこんで終りになるのによ」

そう言うと、エレノアはバギーのトランクから取り出した大きな黒い筒のような物体をを組み立て始めた。

「…何ソレ？」

ミーシャがエレノアに尋ねた。

「ロケットランチャーだよ。さつき役場で借りてきた。コイツをおみまいしてやるのさ！」

組み立て終わった砲身を肩に乗せながらエレノアが言う。

「物騒だねえ！」

ロゼッタが嬉しそうに言った。

「だけど相手が地面の下じゃなあ…困ったもんだ」

エレノアが困っているのと、

「わたしにいい考えがあるよ！」

ロゼッタが手を上げて言った。

「どんな？」

「それはねえ…」

十分後、エレノアとミーシャはワイバーンの背中にいた。下を見るとロゼッタが上空の二人に向かって手を振っている。白い背景の中、月明かりで彼女の赤い髪と瞳はまるでルビーのように輝いていた。ロゼッタが提案したこの作戦は至って単純だ。ロゼッタがエサとなり相手が出てきたところを上空からロケットランチャーで仕留める。

万一相手が死ななかつた場合はロゼッタがトドメをさす…とゆう寸法だ。

「よりによってロゼッタがエサだなんて、サンドワームもついてないなこりゃ」

「間違いなくズタズタにされるね…」

エレノアとミーシャはそんな冗談を言ってみる。

「まあ、そうなる前にロケットランチャーでくたばってくれればいいけど…」

その頃、エレノア達の心配をよそにロゼッタは砂漠の塩の上で暇をもてあそんでいた。

「ヒマだなあ〜！早くミミズさん出てきてくれないかなあ？」

足の先で砂を蹴り上げて遊んでいた…その時、彼女^{ロゼッタ}は足元にわずかな震動を感じた。

「…来たね」

次の瞬間、ロゼッタの背後の地面が土煙をあげそこからまるで丸太のように太い巨大なミミズの化物が飛び出して来た！

「ギシャアー！」

鋭く上がった歯の並んだ巨大な口がロゼッタに襲いかかった。しかし、ロゼッタは攻撃をさらりとかわす。エレノアは上空からサンドワームの口に狙いを定めた。…だがサンドワームはすぐに地面の下に引っ込んでしまった。

「…くそっ！あいつ地上には出てこないつもりか！？卑怯なやつめ！」

エレノアがそう悔しそうに言った。

「人のこと言える立場かなあ…？」

ミーシャがそう思わずばやく。そんなことを何回か続けていたが、サンドワームはなかなか素早くいっこうに上手く行かない。

「あ〜もうつ〜ムカツクなあ〜！…こうなったら最後の手段だ！」
ついにロゼッタが痺れを切らす。再びサンドワームが地面の下からロゼッタに襲いかかった。…が、その時ロゼッタはあえて攻撃をよ

けなかつた。サンドワームの鋭い牙がロゼッタの右腕に喰らい付き彼女の右腕からはおびただしい量の血液が流れ出す。しかし、そんなことはお構いなしだ。そのまま獲物を地面に引きずり込もうとするサンドワームをロゼッタは持ち前の怪力で逆に引きずり出す。ようやくその全貌を現したその怪物は長さ20m、太さはドラム缶ほどもあつた。

「今がチャンスだよノアちゃん！」

ロゼッタが空中の大きな黒い影に向かってそう叫ぶ。

「ばかやろう！…無茶しやがって！くたばれミミズ野郎！」

彼女の無茶を咎める暇はない、エレノアはすぐさまロケットランチャーの照準を合わせ引き金を引いた。凄まじい轟音と共にロケット弾が放たれ、次の瞬間にはサンドワームの胴体に命中していた。爆発でその体は二つに分断され緑色の液体が白い砂の大地に雨のように飛び散る。サンドワームはしばらくの間のたうちまわっていたが、やがて動かなくなった。

「…ま、しよせんはこんなものだよね」

ロゼッタは右腕からサンドワームの頭をひきはがしながらそう溜め息混じりに言った。

間もなく二人が上空から降りてくる。

「お帰り！ご苦労様！」

ロゼッタがそう笑顔で迎えると、

「このバカっ！」

ゴチン！エレノアは再会するなりロゼッタの頭にゲンコツをくらわした。

「痛っ！？な、何すんのさあ！」

ロゼッタが頭を手で押さえる。最初、彼女は自分がどうして叩かれたのかを瞬時には理解できなかったようだ。

「相手に自分の腕を食わせる奴があるかっ！…心配させやがって」

エレノアのその言葉を聞いてロゼッタもようやく自身が無茶をしたこと悟る。

「ごめんごめん。でも心配しないで…ホラ！」

見てみると、ロゼッタの腕の傷はすでに治りかけていた。

「わたしの再生能力はとても高いから…ホントに心配しなくても大丈夫だから」

正直、ロゼッタからしてみれば相当な痛手を負わない限り問題ではなかった。自身の感じる痛みなど、もはや苦痛ではなくなっていたのである。

「そーゆー問題じゃないんだよ！私はただ…友達が目の前で傷付くのを見たくはない」

でもエレノアはそうは思っていない。いくら治癒力が強くてもそれに任せてやれば良いわけではないと彼女^{エレノア}は考えていたからだ。

「ノアちゃん…」

「だから…もう無茶しないと約束しろ。お前ばかりに苦しい思いはさせたくない…私もミーシャも同じ気持ちなんだ」

「…そうだよ。苦しみもちゃんと三人で分かち合うべき」

エレノアとミーシャはそうロゼッタに告げた。

「…確かにそうだね。回復するとは言え、やっぱり怪我したらちよつとは痛いし苦しいからね。みんな…ありがとう！ごめんね、心配かけちゃって」

ロゼッタがそう首を垂れて二人に謝った。

「わかればいいさ。…さあ、もう帰ろうぜ」

あまり過去を振り返らない性格のエレノアらしく、そう話を明るい方へとさり気なく変えた。

「うん！今度はわたしに運転させて〜！」

ロゼッタもそんな空気を察知したのか、そんな本気が冗談か分からないことを言い出す。

「…絶対死ぬね、うん」

ミーシャがそう顔を少し青くして言った。エレノアもミーシャの言う通りだと思ったのは言うまでもないだろう。

《帰りの車内》

サンドワーム退治の帰り道、役場に証拠として持ち帰るサンドワームの頭を隣に乗せた後部座席でロゼツタはスヤスヤと寝息をたてていた。

「ムニヤムニヤ…もう食べられないよ…」

何かよほど美味しい物を食べる夢でも見ているのだろうか、ロゼツタがそんな寝言を漏らす。

「ハハハ。いい夢見てるみたいだな」

運転席のエレノアが言った。

「夢の中で彼女は何を食べてんだらうね…?」

助手席のミーシャはバックミラー越しに彼女の寝顔を眺めて言った。

「ギャハハ！見るよミーシャ、ロゼのやつヨダレたらしてやんの！」
エレノアが笑う。

「…私達ってまだ出会って少しの間なのにものすごく仲良くなれた気がするね」

ミーシャが唐突にそんなことを言い出す。確かに、見ず知らずの間同士ではこんな和やかな雰囲気にはならない。

「気のせいじゃなくて、実際に仲良くなってるよ…でもさ…」

「…何？」

急に真面目そうな顔をするエレノアの顔をミーシャが覗き込む。

「もし私がロゼと出会わなかったら…この三人で旅をすることも無かったと思うんだ。彼女と出会えたからこそ、いろんな人々に会って様々な経験が出来たと思う。なんだかロゼには世話になりっぱなしだなんて」

どうやらエレノアは自分の非力さに少し劣等感を感じている、ミーシャから見た彼女はそう映った。

「確かにそうかも知れないね…でも今はこうしてお互い助け合ってる。一人では出来ないことも仲間となら出来る、これって素晴らしい」

いことだと思っけど？」

ミーシャは理路整然とそう語る。

「そうだな。ロゼは確かに強いけど運転は出来ないし、私は銃は撃てるけどミーシャみたく魔法は使えない。お互い得意不得意があるからな」

エレノアがそんなことを言う。

「結論から言うと…友達つてすごくいいものだったこと」

「ああ、まったくそのとおりだなミーシャ」

そう結論付けた後、しばらく沈黙の時間があつた。その時の二人が何を考えていたか誰にも分からないわけだが、しばらくしてミーシャが話題を変えるようにこんな質問をエレノアにする。

「…それより『ロゼ』ってロゼッタのことだよな？」

「そだよ。こっちの方が呼びやすいと思って」

エレノアが頷く。さらに、

「なんならミーシャにもあだ名つけようか？ん〜そうだな、普通のじゃつままないし…そうだ！『無口』なんてどうだ？お前あんまし喋らないし！」

そう言つてゲラゲラ大笑いする。

「エレノアつてネーミングセンスないね。てゆーか、ストレート過ぎだよ…」

ミーシャが少々ムツとした表情で言った。

「ミーシャには負けるよ！よっヤキトリ！」

「…それは言わないで…一種のコンプレックスなんだから」

エレノアにかからかわれてミーシャは恥ずかしそうにそっぽを向く。

「ハハハ、冗談だよ。お前だつてちゃんと喋つてんもんな！…てゆーか口さえあれば、そりゃ誰だつて喋るか」

「え…何そのオチ」

ミーシャは何だかエレノアに上手く丸め込まれた気分になる。でも、不思議と気分は悪くなかつた。

地平線が明るくなり始め、もうすぐ白い砂漠に朝が来ようとしていた。白い塩の砂は朝日を浴びキラキラと輝く。三人を乗せたバギーは純白の大地を太陽に向かって走って行った…。

第六章 塩の砂漠（後書き）

人は必ず誰かに支えられて生きています。家族、親戚、友達…挙げたらきりがありません。物を食べるにしても、それを生産する人や店に運ぶ人、料理をしてくれる人…実に様々な人々がお互いに関係しあって生きています。つまり私達は「生きている」のではなくお互いに「生かされている」のです。自分が今「生かされている」「ことを感謝し、他人を敬うことを忘れないことが現代人にとって重要だと僕は思っています。そうすれば軽率な殺人や戦争、イジメや差別などはきつと起こらないでしょう。

これからもこの小説を見守って下さるようお願いします。

… to be continued!

第七章 OVER KILL (前書き)

1888年ロンドン、これが何を意味するかあなたにはわかりますか？そう、あの有名な殺人鬼『切裂きジャック (Jack the Ripper)』が連続殺人を起こした年と場所です。彼は売春婦を無惨に切り刻んだにも関わらず事件は迷宮入りし、未だに謎に包まれています。…人は皆、心の闇を持っています。その闇を制御できなくなった時、人は犯罪に走ります。そう、あなたにもいつか『切裂きジャック』になる日が来るのかも知れないのです。

第七章 OVER KILL

ここはシランドのとあるファミレス。白髪の少年と鎧を着た大男が食事を楽しみながら何かを話していた。

「それでよくまた面白いんだよこいつが！男勝りの性格のくせにちよつとからかうとすぐ赤くなるんだぜ？カワイイよなあそういうつて！」

ついこないだ出会った緑髪の少女のことをそう楽しそうに話すティイスに反対側の席の大男は半ば呆れて答える。

「…わしはやつぱり大和撫子なおながええでござるな」

ベンケイの食い付きがイマイチなのでティイスは少し話の確信を告げる。

「でもそいつ赤い悪魔の友達なんだぜ？」

「赤い悪魔に魔法使いにトレジャーハンター…なんだかもすごいパーティーでござるな」

あの凶悪極まりないと考えられていた赤い悪魔に友達がいることなど現在の普通の人間には想像できない。

「やつぱりそう思うよなあベンケイ。一体どんな関係なんだか…？ティイスはそう頭を掻く。」

「それで？そのショートのおなごとは？デートなどとしてはどうでござるか？」

「…なんでそうなるんだよ？」

ベンケイにそう突っ込まれたティイスは少しドギマギしながら答えた。どうやら自信のことに突っ込まれるのは苦手な様子。

「ワツハツハ！冗談でござるよ！」

ベンケイはそう笑った後、大きな肉の固まりを飲み込んでから静かにこうきりだした。

「お主、まさかそんなことでこのワシを呼び出したわけではないでござるう？…例の事について何かわかったのでござるか？」

「…ああ、赤い悪魔の件も『オメガ計画』もここ最近の共和国の不信な動きはやはりシユナウザー將軍と大統領の差金だ」

ベンケイとティティスはそう声を潜める。

「それでは…やはりあの二人が」

「おそらくは…このままでは再び帝国との戦争になる。それだけは阻止しないと…」

「だがワシら二人だけでは…何か作戦でも？」

深刻な顔付きのベンケイにティティスはこう言う。

「仲間はこれから増やせばいいさ…問題は赤い悪魔達がジャックに勝てるかどうかだ」

「まさかエフェクトで一番危険なあの殺人鬼を一人で行かせたのでござるか!？」

ティティスの情報にベンケイは驚きを隠せない表情で言った。

「それだけ早く赤い悪魔と仲間を始末したいんだろうよコロツサルは…レクイエムにとって怖いのは赤い悪魔だけだからな」

ティティスはそう自分なりの分析を加えて言う。

「こりゃ一般人に死人がでるでござるな」

ベンケイがそう言うのも無理は無い、ジャックと言えば人殺しなど何とも思わないどころかそれを遊戯のようにやってのける凶悪な男だからだ。

「俺は今からジャックの潜伏しているレトロシティに向かう。…情報だと彼女達もそこに向かっているみたいだからな」

「…助太刀でござるか？」

ティティスの提案にベンケイがそう念を押して尋ねる。

「いや…ちよつと見学してくるだけだよ。現時点ではエフェクトのみんな、特に姉さんには…マーベラスには内緒にしとけよ？色々詮索されると困るから！」

ティティスはそう手を合わせて懇願する。

「…承知した」

ベンケイもそれを快く承諾した。

「この世界を化物共には渡さない…絶対に…！」

《レトロシティ》

三人はレンガでできた家々が立ち並ぶ町の塹の上を歩いていた。その風貌はまさにレトロの名前に相応しい哀愁を漂わせている。しかし、なぜか真昼だというのに人影はまばらだ。

「おかしいな…？この前きた時はにぎやかだったのに」

エレノアは町のおかしな状況に首を捻った。

「きつとノアちゃんが怖いんだよみんな！」

気楽なロゼッタがそう冗談を言ってみる。

「は！？なんでそうなる！？意味わからん！」

「ちよつとからかいたかったただだよ！」

ロゼッタはそう言った。

「あっそう…それにしても静か過ぎる」

「え〜ん、ノアちゃんが無視した〜！」

「やかましい！お前も考えろ！」

だだをこねるロゼッタにエレノアは少しキツイ口調でそう言った。

どうやらロゼッタは町の状況がどうであれエレノアにかまってもらわないと気が済まない様である。

「多分…あれのせいだと思うよ？」

そう言うミーシャの指差す方向には人ばかりができていた。人混みの隙間から警察と真っ赤に染まった髻が見える。…どうやら殺人事件のようだ。

「どうしたんですか？」

エレノアが警官の一人に訪ねた。人混みをかき分けて近付いてみると、血液と死体の放つ独特な臭いが鼻をつく。

「連続殺人事件だよ…可哀想に。殺されたのはまだ十二才の少女だ

よ…ナイフでズタズタさ」

警官が指差す冷たい石畳の上には見るも無残な死体が転がっていた。はらわたは剥き出しになり顔も目玉や舌を抜かれているのか原型が無い。言われなければもとが何だったのか見当も付かないくらい酷い有様だ。

「ひでえ…！」

「かわいそう」

「…」

三人は言葉を失う。はっきり言ってこうゆう場には慣れているはずだったがそれでも吐き気を堪えるのが精一杯の状況だ。

「3日前に老夫婦が殺されてからこれでもう十人目だよ…夜の間にも何人も殺された。今日も全部で三人殺されたよ」

警官は頂垂れながらそう呟く。

「なんだって!？」

それを聞いたエレノアは驚いた。

「おかげで誰も通りを歩かなくなっちゃったよ…早く犯人を捕まえたいんだけど目撃者はみんな死体にされてるから…」

要するに死人に口なし…そんな状況である。

「とんでもない奴がいるんだな…許せん…！」

エレノアは拳を堅く握りしめた。

「ねえ!じゃあわたしたちがその殺人鬼をやっつけようよ!」

ロゼツタが突然そう提案した。

「…もちろんそのつもりだぜ!」

エレノアがこの提案に乗らないはずはない。

「鬼退治…だね」

ミーシャはいつも通り乗り気ではないが、それでも今回は普段より大きな声で賛成の意思を示した。

「えっ!?!そ、それは危険過ぎるよ!?!」

警官がそう言うので、

「大丈夫。私達プロですから!」

エレノアはそう答えた。確かに普段から大型のナイフと拳銃を所持している人間はそういない。

「ホントに!? そ、それじゃあ、お願いするよ! とりあえず警察署まで来てよ!」

その後、警官に連れられた三人は警察署まで行き殺人鬼退治のことを話す。すると署長は喜んで承諾してくれた。

「いやぁ本当に助かるよ! ホテルを手配しておくから殺人鬼の出没する夜までゆつくり寛いでくれたまえ。…期待しておりますぞ!」

この難事件を解決してくれる期待なのだろうか、三人には非常に良い待遇がなされた。

「…一っだけ聞いてもよろしいですか?」

帰り際、エレノアがそう尋ねる。

「はい、なんなりと」

「殺人鬼の命の保証はしませんが…それでもよろしいですか?」

「…!」

署長は黙って頷いた。三人の眼光の鋭さが、その本気具合を物語っていたから…。

その後、三人は手配してもらった良い感じのホテルで殺人鬼退治の作戦を立てた。…と言っても、ただ通りで待ち伏せして三人でボコボコにするだけだが。

「私、ちよつと買い物行ってくるよ。弾が残り少ないんだ。…なんか他に頼み物あるか?」

まだ作戦決行までは時間がある。愛銃を布で拭きながらエレノアがそう言うのと、

「わたし、ジュースとお菓子とマンガねノアちゃん!」

「…小説『ラスト・プレリウド』、もちろんおごりでエレノア!」
ここぞとばかりにめんどくさがりの二人がそう叫ぶ。

「…全て却下!」

もちろんそんな物を買って来る気は無い。二人の適当なお願いを断ったエレノアは町へと出ていく。…日はすでに傾きかけ、町をオレンジに染めていた。

《彼との再会》

いつしか、エレノアは町のガンショップに来ていた。

「おいおいお嬢ちゃん！ここは君みたいなのが来る所じゃないよ！」

エレノアが店に入るなりガンショップの主人はそう言うが、

「…これでもか？」

エレノアがカウンターにマグナムを置くと、その態度が一変する。

「…！」

店の主人は黙って三割引きで弾を譲ってくれた。こんな馬鹿デカイ銃を使いこなせる女性は非常に珍しい、実際エレノアもこの銃を使いこなせるようになるまでには相当な苦勞をしたようである。それを見極めた店の主人が彼女のことを高く評価してくれたようだ。

「さて、そろそろ帰らないと日が暮れて…」

ガンショップを出てすぐであった、ふと目線が向かいのおもちや屋のショーケースに止まった。…カワイイぬいぐるみがたくさん並べてあった。

「うわあ…！」

エレノアはそこに駆け寄るとガラスに張り付くようにしてぬいぐるみを見つめていた。

「やっぱりカワイイなあー…特にあのクマさんのなんて…もうメロメロってカンジ！」

本当はエレノアだって実に女の子らしいのだ。でも、その決して幸福とは言えない彼女の生い立ちがその一面を隠してしまっていただけなのである。彼女が時折見せる一種の甘えのような行動は仲間に恵まれた今だからこそ表面に出てきているのかも知れない。

相変わらずエレノアがショーケースに釘付けになっているその時、後ろから誰かが声をかける。

「へえー…お前にそんな少女趣味があったとは驚きだなエレノア」その聞き覚えのある声にエレノアが驚いて振り向くと、そこに見覚えのある男が立っていた。

「テイテイス！」

「よ！久しぶりだな」

テイテイスはそうエレノアに気さくに話しかける。

「あ、あんた！こんなところで何してんだよ！」

不意を突かれた形のエレノアは慌ててそう尋ねる。

「別に？ただ立ち寄っただけさ。それよりお前こそなにぬいぐるみ見てニコニコしてんだよ？」

「べつ別に私の勝手でしょ?!」

まさか素直に自分の少女趣味を彼に言うわけにはいかない。

「フフ、相変わらずのツンデレぶりだな」

テイテイスがそう言うが、

「?、何それ？」

エレノアにはその意味が理解できなかったようである。

「まあ、こんな所で立ち話もなんですから喫茶店にでも…もちろん俺のおごりで」

「お…おごつてくれるなら…」

優しい彼の態度にエレノアはいついそそれを承諾してしまった。

やがて二人は小さな喫茶店にやって来た。エレノアはコーヒーを、テイテイスはグリーンティーをオーダーした。…エレノアにとって彼は警戒すべき敵であるはずだが、何故か彼女はそんな気にはなれなかった。

「（エフエクトは私達の命を狙っているはずなのに…コイツはなんでこんなに人が良いんだ？）」

心の中でエレノアは少し彼を疑っていた。

「どうした？黙っちゃって？」

「い、いや…なんでもないよ」

ティティスに尋ねられたのでエレノアはコーヒーを啜りながらそうはぐらかす。

「それならいいけど…お前ちゃんと飯食ってるのか？」

「は？なんで？」

急に質問が変わったのでエレノアがそう聞き返す。

「だってお前随分スリムじゃん。正直なところ筋肉質だろ？」

「…それって、私が胸小さくて男っぽいって言うてるの？」

この男は急に何を言い出すのだろうか？エレノアは少しからかわれた気分だ。

「別にそんなんじゃないさ。それにそうゆうカツコイイ女ってなかなか好きだぜ俺は？」

「…！」

彼のその言葉がどこまで本気かは知らない。けれども、エレノアが生まれて初めてそのような好意的な言葉を異性から言われたのは間違いないかった。

「どうした？また黙っちゃってさ？」

「…あなた変わってるって言われない？」

「よく言われます」

エレノアの問いにティティスはそう苦笑いする。彼の女性^{ティティス}遍歴は恋

愛経験の少ない彼女にも何となく分かった。

「…私そろそろ帰らないと、これから仕事だから」

エレノアが席を立とうとするとティティスがこう言った。

「…殺人鬼退治か？」

「…！」

なぜ彼がそのことを知っているのか、それも驚きだったがその後の言葉が彼女をさらに驚かせる。

「さつき町の警官から聞いたよ…殺人鬼は俺らの仲間だ」

「えっ…！？」

「話せば長くなるんだが…今、共和国政府内部では大変な事が起き

ている。俺はそれに一枚噛んでいるんだが…要するにお前らに殺人鬼を殺して欲しいんだ」

「殺して欲しいって…仲間じゃないのか!？」

急なお願いにエレノアは困惑を隠せない。

「訳あって今エフエクトは水面下で二つに分裂しているんだ…奴は俺らのグループとは反対のグループなんだよ」

「水面下でつてことは…つまりあなたは殺人鬼に手が出せないと？」

「その通りで」

要領を得たエレノアの問いに彼は深く頷く。

「それはわかつたけど…『大変な事』って何？イマイチ話の流れが理解できないんだけど？」

エレノアがそう聞くと、

「今はまだ話すべき時ではないんだ…いずれ話さなくちゃいけない日があるから、それまで待つてよ」

ティティスはそう言葉を濁す。

「うん…わかった」

エレノアはただそう言うしかなかった。

「言ってみれば俺は敵でありながら味方つてわけだ。…他にも俺らのグループが何人かいるが、いずれもお前らには危害は加えない」
ティティスはそんな交換条件のようなことを言う。

「それで？代わりに協力しろと？」

「まあそゆこと！詳しくはまだ話せないがな」

相変わらず話の核心部には彼は触れようとしなかった。

「…とりあえず私もう行くね。もう日が暮れるから」

「ああ、じゃあな。近々また会いに行くから。いいか？俺と会つことは他言無用だからな！特にシャクマにはな。…気をつけて行けよ？」

席を立つエレノアにティティスがそう念を押す。

「そっ、そんなのわかってんよっ!…じゃあねっ!また今度ねっ!」

エレノアは喫茶店を出ると軽い足取りでホテルへと帰って行った。

彼の『近々また会いに行くから』の一言が彼女にとってはなんだか嬉しかった。

「いよいよか…なんだか気が思いなあ」

一人残されたティティスが先の事を考えながらそう呟いていると、

「お客様、お会計を…」

店員から伝票を渡された。

「…おサイフは軽くなる一方なのに…はあ…」

彼は皮肉を込めてそうぼやいた。

《ホテルの一室》

午後九時半、ホテルの一室で三人は殺人鬼退治に向かう準備をしていた。

「いいか？相手は異常者だ。油断するなよ！」

手入れを済ましたマグナムをホルダーにしまいながらエレノアは言った。

「大丈夫だよ。だってわたし、八つ裂きにされても死なないし…」

あつ、これ本当だからマジで真面目にね！」

ロゼッタはそう自分の強さに自信を見せる。

「お前の再生能力は半ば反則だからな」

エレノアが言うと、

「そうだといいいんだけどねえ…残念ながらわたしにも一つや二つくらいは弱点があるんだよ」

そう苦笑いしながらロゼッタは答える。

「弱点？どんなのなんだよ？」

興味津々にエレノアが聞くと、

「それはねえ…ひ・み・つ…だよん！」

ロゼッタはウインクしながらそう言った。

「なんじゃそりゃ！まあ、普通はそうなんだろうけど」

エレノアがそう渋々納得する。さすがに他人に弱点を教えないところは隠れ策略家のロゼッタである。

「ノアちゃんの弱点は貧乳でしょ？」

今度はロゼッタがそう言い出す。

「うるさいなっ！それは弱点じゃなくて身体的特徴って言ってよ！」

「それもどうかと…」

エレノアの台詞に透かさずミーシャが突っ込む。

「そう言えば、ミーシャはなんか苦手な物とかあんのかよ？」

「ピーマンとニンジン…あと苦い食べ物かな？」

エレノアの問いに珍しくミーシャはそう素直に答えた。

「…お前はお子様か？」

エレノアもロゼッタも思わず笑う。いつものことだが、今回も仕事前の緊張感はやっぱり無かった。

《メインストリート》

その男は銀色に輝くナイフをちらつかせながら通りを見つめていた。

「ケケケ…今日は何人殺せるのかなあ…早く殺してえなあ…！」

その時、男の視線が三つの影を捕える。

「あれが今回のターゲットか…女の子…クク、最高の獲物だぜ…！」

…男の影は町を包む闇に紛れた。

街灯のまばらなメインストリートを三人は歩いていた。エレノアの腕時計は間もなく午前零時を指そうとしていた。

「情報によるとそろそろ出てくる頃だが…みんな気をつけろよ！」

「…」

珍しくロゼッタはエレノアの言葉に対して黙っている。

「おい、ロゼ！聞いてんのか？」

エレノアがそう聞く。それでもロゼッタは通りの陰、ある一点を見つめて黙っている。その真紅の瞳孔は細長くなり彼女が静かに興奮していることを示していた。…やがて、何か確信を得たのか彼女はこう切り出す。

「おかしい…この気配はどうやら人間のものじゃないみたい。ねえ、殺人鬼さん…そこにいるんでしょう？」

ロゼッタがそう言った。…すると目の前の街灯の影から一人の男が現れた。

「ケケケ…流石は赤い悪魔！全てお見通しのようだ」

地味な茶色のコートに身を包んだその男は目深にかぶった帽子の下に僅かに笑みを浮かべる。

「お前が殺人鬼か！」

エレノアがそう怒鳴った。

「ああ、そうとも。俺はジャック、通称『殺人鬼』…エフエクトの闇さ」

憤るエレノアとは対照的に男は冷静そうな口調でそう答える。

「どうして関係無い人達を殺した！？」

エレノアが相変わらず怒りの表情で聞く。すると男は嬉しそうに答えた。

「どうして?! ケケケ! そんなの殺したいからに決まってんだろ!

下等な人間共をなあ!」

ジャックの放ったこの心無い一言がエレノアの正義の心に火をつけたのは言うまでも無い。

「きつ、キサマツ…! 許さん!!」

エレノアのマグナムの銃口が火を吹く。正確な狙いのもと三発の銃弾が男に命中した!…が、男はなんとピンピンしているではないか! 「!???」

エレノアは驚く、確かに命中したはずなのに…ジャックからは目立

つた出血も見受けられないではないか。この時、初めて相手が人間ではないことにエレノアは気が付く。

「ケケケー！そんな玩具じゃ俺は殺せんぞ！…死ぬっ人間！！」

男はそう言うと同時に上着から鋭い刃物を抜きそれを素早く投げつける。ジャックの投げたナイフがエレノアの脇腹に容赦なく突き刺さった！

「ああっ！」

エレノアはその場に倒れてしまった。痛みで顔が歪む。

「上手く急所を外したな…だが、早くなんとかしないと死ぬぜその子？」

ジャックがそう言った。エレノアが寸でのところで急所への直撃を避けていたことを皮肉を込めて褒めるかのように。

「ノアちゃん！」

「エレノア…！」

ロゼッタとミーシャの二人が慌てて駆け寄る。エレノアの呼吸が荒い…一刻を争う危険な状態だ。

「ど、どうしようミーちゃんっ！ノアちゃんが死んじゃうよ！」

パニックになりそうなロゼッタに対してミーシャは冷静だった。

「…落ち着いてロゼッタ。彼女エレノアは私が絶対に助けるからあなたはあのイカレタ殺人鬼を倒す事に集中して…いい？わかった？」

そうミーシャはロゼッタに今後の方針を伝える。

「わ、わかった！絶対に助けてね！約束だよっ！約束だからねっ！」

ロゼッタがそう念を押すと、

「任せてよ…！」

ミーシャは笑顔で答えた。

「ケケケ、お友達を傷付けられた気分はどうだ？赤い悪魔さんよお！」

「うるさいなあ…雑魚のくせにわめくなよ…！」

ジャックの挑発的な態度にロゼッタは戦闘モードに入った。…鋭い

爪と牙が伸び、瞳は真っ赤に染まった。

「さあ…楽しい血祭りシヨ一の始まりだっ！」

ロゼッタが牙を剥き出しにしてまるで獣のような表情でそう宣戦布告する。

「これが赤い悪魔…クク、面白くなってきたぜっ！」

ジャックはコートの下からダガーナイフを取り出してロゼッタに切りかかった！ロゼッタは爪で応戦する…ナイフと爪がぶつかりあって火花が飛び散った！

二人が激しい戦いを繰り広げてる脇ではミーシャが傷付いたエレノアを看病していた。ミーシャはエレノアからナイフを引き抜いた、同時に傷口から大量の血液が流れ出る。

「私…死ぬのかなあ…」

エレノアがそう呟いた。

「バカなこと言わないでよ…今死んだら間違いなく地獄行きだね」
ミーシャがそう冗談交じりに話しかける。とにかくエレノアに意識をしっかり持ってもらわないことには話しにならない。

「…それもそうだな」

虚ろな表情ではあったがエレノアもそう返事を返す。

「今、回復魔法で治してあげるから…リペアー！」

そうやってミーシャの手から放たれる魔法の優しい光がエレノアの傷をあつというまに治してしまった。

「傷が治った…サンキュー！お前スゲーよ！」

「そう…元気で何よりだね」

あまりにも急に元気になったエレノアにミーシャが少し皮肉るように言った。

「…にしてもあの野郎！今度こそ蜂の巣に…」

「ダメだよ…傷口塞いだけだから。また痛い目みたいの？」

そう言つて、怒りで興奮するエレノアをミーシャはなだめた。

「でっ、でも…ロゼッタが…」

「大丈夫…彼女、強いからさ。今は応援してあげよう」

「そうだな…いけー！ロゼ！ぶつ殺せ！」

「頑張つて…！」

エレノアとミーシャはそうロゼツタに声援を送った。もちろんロゼツタがそんな二人の声援に黙っているはずが無い。渾身の鋭い爪の一撃が、ジャックの右腕を手に持ったナイフもろとも吹き飛ばした！

「ギヤアアアッ！」

右腕を失ったジャックは思わず後退った。

「ふふふ…どうしたの？もう終わり？」

ロゼツタは嘲笑うかのごとくそう言う。その雰囲気はいつもの彼女からは程遠い、狂気に満ちたオーラを醸し出していた。

「赤い悪魔よ…なぜそこまでして人間に味方する…？」

そう言うとジャックはみるみるうちに、おぞましい鬼へと姿を変えた…！

「なるほど…やはり魔物だったのね」

ジャックのその恐ろしい姿を見ても、特にロゼツタが動揺することは無かった。

「人間なんかよりお前や我々魔物のほうがずっと高等な生き物のはず…そう、これからは我々魔物の時代のはずなのに…なぜ貴様は人間なんぞをかばうのだ…！」

冷静に自分を見つめるロゼツタに対してジャックはそう怒鳴りつける。しかし、ロゼツタは相変わらず冷めた様子でこう吐き捨てる。

「さあて？なぜでしょう？よくわかんないな？…ただ、わたしはアントアより高等なのは確かだよねえ？」

「ほざけええー！！八つ裂きにしてやる！」

巨大な鬼はロゼツタめがけて突進してきた。

「八つ裂きになるのはアントアだよ…デス・クローツ…！！！」

ロゼツタは魔力を込めた爪を振り上げた。赤味を帯びた凄まじい衝撃波が一瞬でジャックの体をバラバラに切り刻んだ！

「ギヤアア！バカな…この俺…が…！」

…鬼は黒い灰になって夜空に散っていった…。

「ス、スゲー…！」

「…まさに一撃必殺…だね…」

あまりにも見事なロゼッタの技に二人が驚いていると彼女が駆け寄ってきた。

「ノアちゃん！…よかったあ無事で！」

そう言うロゼッタの表情はいつものように優しかった。

「お前もな！…でも私が助かったのはミーシャのおかげだよ、ありがとうミーシャ」

エレノアがそうミーシャの活躍を強調する。

「私はただ…みんなの役に立ちただけ」

ミーシャは得意になることも無くただそう言った。

「キヤー！ミーちゃんカッコイイ！」

ロゼッタがそうミーシャを褒め称える。

「エへへ…」

ミーシャはちよつとだけ照れくさそうに笑った。

「…ジャックを倒すとは…赤い悪魔はやはり強いな」

屋根の上から一部始終を見ていたティティスがそう呟く。

「あれを仲間にできれば…大統領を倒すのも夢ではない。今日は良いことずくめだったな」

ティティスは漆黒の闇へと消えていった。

どうやら彼の目的が明らかになるのはもう少し先の事になりそうである…。

《レトロシティ》

…あれから3日、町は平穏な日々を取り戻していた。エレノアの体力も回復したので、三人はこの町を後にすることにした。三人が町

を出ると聞いて、多くの人々が町の出入口に集まった。

「本当にありがとうございます。この恩は一生忘れません。またいつでも来てください。歓迎させていただきます」

町長からお礼の言葉をもらい、多くの人々に見送られて三人は再び旅立っていった。

「いやあ、やっぱり良いことした後は気持ちがいいなあ！」

エレノアが上機嫌で言った。

「キャハハ！なにいつてんの！ノアちゃん死にかけてたくせに！」

「う、うるさい！それを言うなロゼ！」

エレノアはそう痛いところをロゼツタに突かれてしまった。

「それより、そのクマのぬいぐるみは何？」

ロゼツタがエレノアの抱えていたぬいぐるみを指差しながらそう聞いた。

「こ、これは…入院中にもらったんだよ！」

「え、誰から誰から？」

そう照れ顔のエレノアにロゼツタは詰め寄る。

「だっ、誰でもいいだろっ?!」

「も、ケチ！だからいつまでたっても胸小さいんだよ！」

「関係ねえだろーが！」

いつものことだが、全く関係の無い方向に話がいつてしまった様子。

「ノアちゃんもわたしぐらいおおらかになれば、ナイスバディになれるのにね！」

ロゼツタが得意気に自分の胸を触るので、

「お前も高々Bカップだろーが！」

そんな負け惜しみとしか言えない様な言葉をエレノアは言った。

「あー言ったなあー！Aカップ未満のくせに！」

ロゼツタがそう言い返す。すると傍からその会話を聞いていたミー

シヤがこう一言、

「私…Cカップなんだけど？」

まさに二人にとっての痛恨の一撃を言った。

「…マジで？」

「…ミーちゃんが？」

エレノアとロゼッタの二人が絶句してると、

「ふっ…勝った…！」

ミーシャは胸を張ってそう言った。

ちなみに、エレノアのクマのぬいぐるみにはこんな手紙がついていた。

【親愛なるエレノア様へ ティティスから愛を込めた贈り物】

エレノアは大事そうにそのクマのぬいぐるみを抱きしめていた…。

第七章 OVER KILL（後書き）

今回は少々残酷で血生臭い展開になってしまいましたが、次回は少し観点を変えまして三人の平穏な日常と美しい自然を中心に書いていこうと思います。基本的にはダークなお話ですが、時には心温まるストーリーも必要でしょう。

第八章 番外編 花鳥風月（前書き）

こんにちは、塚原宏樹です。今回はダークで血生臭い本編とは対象的に、三人の穏やかな一日を書いてみました。三人の美しい自然との触れ合いと心の成長、そしてなんと入浴シーンも書いてありますので少々長いですが、最後まで読んで頂けると幸いです。それでは…三人の穏やかな一日を覗いてみることにしましょう。

第八章 番外編 花鳥風月

見渡す限りの青い空と海

深緑色の雄大な山々

潮風の匂いと咲き誇る花々の香り

風と波の心地よい音色

大自然の雄大なパノラマがそこには広がっていた。

「んん〜！やっぱりいつ来ても最高だなここは！」

新緑のような緑色の髪と瞳の少女がそう外に広がる景色を眺めながら伸びをする。

「いい景色〜！よくこんな隠れ家的な所見つけたねえ〜！」

赤い髪と瞳を持った少女は家の中を見渡しながら言った。

「私も初めて来た時は感動したぜ！まあ、和風家屋付きの別荘地ってところかな？」

「…てゆーかただの空き家だけだね」

空のように青い瞳と雲の様な白い髪の少女は得意気なエレノアにそう容赦なく突っ込む。

ここはとある海辺の空き家。海辺と言ってもバツクには雄大な山々がそびえており、ちよつと視点を変えれば様々な美しい自然を堪能できる特等席だ。昔、一人旅だった頃のエレノアが見つけた秘密の場所でもある。空き家は和風でところどころ綻びも見受けられるが、三人が数日暮らすには十分だった。周囲には他の家も人影すらもない。つまり、美しい自然を三人だけでゆっくり満喫できるわけだ。いわゆる贅沢な別荘とも言えるかも知れない。エレノアはどうしてもこれを友人のロゼッタとミーシャに見せたかったようで、要するにしばらくこの場所で休息と言う名のバカンスを楽しむ計画だ。

「さて、まずは食料だ！ミーシャ、例の物を」

エレノアがそう催促する。何せこの隠れ家には食料など無い、三人

が快適に暮らすためには全てを現地調達しなければならないのだ。幸い、目の前には豊かな海とその磯が広がっている。

「了解…」

そう言つてミーシャは懐から小さな袋を取り出した。彼女達はこれを通称『魔法の袋』と呼んでいる。何でも、ドールハウスと同じく魔法デパートでミーシャが購入した私物らしい。この不思議な袋はどんな大きな物も入つてしまふ便利な代物で、しかもいくらでも物を入れることが可能だ。普段、彼女達の旅の道具はこの袋に収納されているわけである。

「…はい、これ」

ミーシャは袋から不釣合いなほど長い釣竿を取り出してそれぞれに配る。

「これつて…釣竿？」

「そうさ。これから釣りに出かける！」

釣竿を見て首を傾げるロゼッタにエレノアが言った。

「どこへ？」

「もちろん海さ！」

同じくロゼッタの質問にエレノアが答えた。

エレノアに言われるがまま、三人は釣竿とバケツを持って海へ向かう。空き家から海へ続く小道を十分も歩くと、波の穏やかな岩礁地帯に着いた。

「よーし！これから釣りをするわけだが、ただ釣つても面白くないので誰が一番釣れるか競争することとする！」

そうエレノアがまるで学級委員長のように指揮を取る。負けず嫌いのエレノアらしいと言えばらしいが。

「よーし！負けないぞー！」

ロゼッタがそう元気に言った。基本的に彼女は何にでもノリが良い。「半袖半ズボンにサンダル、麦藁帽子…しかも三人お揃いつて何だか夏休みの自由研究みたい」

ミーシャがそう言う。ハイテンションな二人とは対照的な性格のミ

「ミーシャにとってはあまり都合の良い遊びでは無さそうである。何はともあれ、三人の少女はそれぞれ釣糸を垂れて当たりを待った。

「…釣れねえなあー」

釣り糸を垂れて早々にエレノアがそうぼやく。どうも彼女はせっかちでいけない。

「キャハハ。まだ五分もたってないよノアちゃん！」

ロゼッタがそう笑う。

「人生焦ってもダメ。待つことも時には大事だよ…」

そうミーシャが何かを諭すかのようにエレノアに言った。

「いったいお前は何歳なんだよミーシャ？」

「…200才くらいかな？ほら、私 魔法使いだから」

もちろんエレノアは冗談のつもりで言ったのだが、ミーシャはあっけなくそう本当のことを言う。そう言えば、この三人はお互いのことを実はまだよく知らないのだ。

「すごい！大先輩じゃん！」

「そうでもないよ…魔法使いは千年生きてやっと一人前だから」

ロゼッタに褒められてミーシャは少し恥ずかしそう。

「そんだけ長生きできりゃあ、焦らなくても大丈夫だよなそりゃ」

エレノアがそんな冗談なのか本音なのかよく分からないことを言う。その時、ミーシャの竿に当たりがあった。

「来た…！」

ミーシャの竿を持つ手に力が入る。

「おっ！先をこされたか！」

エレノアがちょっと悔しそうに言った。

「ミーちゃん頑張れ！」

ロゼッタはそう声援を送る。

「…おりやつ！」

ミーシャは思いつきり釣竿を引いた。…驚くなかれ、釣糸の先には小指程の魚がついていた。

「うわー…近年稀に見る小物だなこりゃ」

エレノアがそう苦笑いしながら言う。

「でも第1号だね！おめでとー！」

ロゼッタはそう拍手した。

「このサイズだと、あと百匹は釣らないとダメだね……」

ミーシャは相変わらず冷静な皮肉っぽい台詞を言う。小魚はそのままバケツの中に放りこまれた。

それから一時間……二時間……いくら時間が経ってもいつころに魚は釣れない。

「……ダメだなこりゃ。しょうがない、作戦変更ー！この辺で各自テキトーに食べれそうな物持って来て！」

釣りに見切りをつけたエレノアがそう指示を飛ばす。

「ラジャー……！」

こうして三人は別々に磯で食べれそうな物を探し始めることにしたのである。

《エレノアとタコ》

二人と別れたエレノアは大きな潮溜まりに目をこらしていた。

「どうせ捕まえるなら大きいやつがいいよなあ……なんかいないかな

……っと」

その時、岩の隙間で何かが動いたのを彼女の緑色の瞳が捉えた。

「ん？獲物発見か！？」

エレノアはとつきにその岩の隙間に手をつ込んでみた。すると手が何か柔らかい物に触れた、と同時にその物体に凄い力で吸い付かれた！

「ひゃっ！？なんじゃこりゃ！？このっ！負けてたまるかつ！」

負けじとエレノアが渾身の力で引っ張り出すと、大きなタコがその姿を現す。

「おおっ、これは！美味しそうなタコじゃないか」

陸上に上げてからもタコはなおも彼女の腕に吸い付いている。

「ハッハッ！どうだタコめ！エレノア様の力を思い知ったか！キサマが私に勝つなど百年はや…」

調子に乗ったエレノアがそんなことを言っていると、

ブブーッ！！

…タコはエレノアの顔面めがけて墨を噴射した。

「…流石はタコ…敵ながら天晴れだよ…」

エレノアは真つ黒な顔でそう言った。

《コツコツと…》

その頃、ミーシャはひたすら下を見ていた。

「私、運動オンチだから…でもこれなら簡単だね」

そう言つて、岩に張り付いた小さな貝を器用につまんでバケツへと入れていった。

「確かに楽なんだけど…いつになったらバケツ一杯になるのかな？
てゆーか私って地味だなあ…最近いつ活躍したっけ？…存在感薄い
なあ私つて…ハア」

なんだか岩に張り付いて動かない地味で小さな貝と自分を重ね合わせ
せては悲しくなるミーシャであつた。

《狩猟本能》

「キャハハ待て待て！」

二人からはだいぶ離れた所、ロゼツタは持ち前の俊敏な動きでとにかく目の前を動き回るものを片っ端から捕まえてバケツに放りこん

でいた。

「楽しいなあ〜！もうだいぶ捕れたかなあ、とりあえず生き物なら何でも食べられるよね？…なんかよくわからないのもいるけど」
彼女の持つバケツの中では何やら得体の知れないものがモゾモゾと動めいていた…！

《結果発表》

一時間後、三人は磯の一角に集まりそれぞれの成果を発表することになった。

「じゃーん！どーだ！立派なタコだろー！」

エレノアはそう得意気にタコを見せる。

「クスクス…そんな薄汚れた顔で言われてもね」

ロゼッタはエレノアの顔が可笑しくてしょうがない様子。

「お前らは？どうだったんだよ？」

エレノアがシャツの袖で顔を拭いながら二人に聞く。

「…私はこんな感じ」

ミーシャはそう言ってバケツ一杯の貝を見せた。

「おっ、大量じゃん！味噌汁にでもして食うとするか」

「タコはたこ焼ね…」

エレノアとミーシャはそう嬉しそうに顔を見合わせる。

「ロゼは？…まさか遊んでたなんて言わないよなあ？」

「まさか！ホラ、この通り大量だよっ！」

ロゼッタはそう言ってバケツを差し出す。バケツの中はまるでこの世のものとは思えないほどすごい事態になっていた…。

「…お前、これを私達に食べると？」

バケツの中の色々と混じってとんでもないことになっている物体を指差しながらエレノアが真っ青になって質問する。

「あれ？好き嫌いは良くないよ？」

ロゼッタがそう嫌味としかとれないような台詞を返す。

「まあ… にはともあれ大量みたいだし、せつかくだから砂浜にでも行ってみるか！」

エレノアがそう提案する、どうやら彼女には何か考えがあるようだ。三人はすぐ隣の砂浜へと移動した。日はすでに沈みかけ、空と海をオレンジ色に染めていた。普段は意外にロマンチストなロゼッタが感動の声をあげた。

「わあ！ 本当に綺麗… なんだか不思議な感じだよ」

「ああ… 綺麗だな」

それにエレノアも便乗する。

「黄昏どきつてやつだね、ちょっと感動…」

きつとこの光景を見て何も感じない人間など存在しないだろう。波の音だけが響き渡るなか、三人はその後しばらく沈みゆく太陽を見つめていた。

「…さて、日も暮れることだし、そろそろ帰還するか？」

西の空を除いて辺りがほとんど暗くなった頃、エレノアがそう言った。

「うん。今日は楽しかったね！」

ロゼッタがそう言つと、

「フフ、まだまだお楽しみはこれからさ。風流ってのは夜の世界の方が際立つんだよ」

エレノアがまだこの先があることを示唆する。

「えっ、そうなの？」

「私がそう思ってるだけだけどね！」

ロゼッタの問いにエレノアがそう笑って答える。

「ダメじゃん…」

言葉の意味と使い方に細かいミーシャがそう突っ込んだのは言うまでも無い。

《虫の音》

日が暮れた頃、三人は空き家へと戻って来た。畳の心地よい香りと風鈴の音が彼女達を出迎えてくれる。

「わあい！畳だ畳だ！」

ロゼッタは畳の上に寝転がると手足をバタバタさせる。

「はしゃぐなよ！ほこりがたつから！」

エレノアがそう注意する。

「…ゴホゴホ…」

ミーシャがあまりにもわざとらしい咳をするのでエレノアがこう一言。

「…わざとだろ？」

するとミーシャも。

「…ばれた？」

とりあえず三人はしばらく部屋でのんびりとすごすことにした。畳の上でゴロゴロしてみたり縁側で風にあたってみたり…そうしているうちに、やがて日はすっかり暮れて大きな月が顔を出す。縁側で風にあたっていたエレノアがおもむろにこう言った。

「今日は満月か…どおりで明るいわけだ」

雲一つ無い夜空に浮かぶ満月が、電気の無い空き家の中を明るく照らしてくれていた。

「なんか楽しいことないの？ノアちゃん？」

いい加減、畳の上を転がりまくる遊びにも飽きたのかロゼッタがそう聞く。

「もうご飯にする…？」

ミーシャがそう提案するが、エレノアがこう言った。

「ご飯にはまだ早いだろミーシャ。そう言われてもなあ、ここにはテレビもラジオも無いし…そうだ！ちよっとみんなついてこいよ、いいものがあるんだった！」

何か思いついたのか、エレノアが目を輝かせる。

「え？なにになにそれ？」

ロゼッタがそう尋ねると、

「それは着いてからののお楽しみさ！」

エレノアはそうウインクしてみせた。

三人は空き家を出るとエレノアを先頭に裏山の方へと歩きだす。月明かりのおかげで懐中電灯などはいらなかった。小道を歩いていると美しいカエルや虫の鳴き声が聴こえてくる。

「いい音色だね」

ミーシャがそう耳を濟ませる。

「そうだな。でも、もつとすごいものが見れるからよ」

エレノアはそう言った。空き家を出発してから約15分後、やがて三人は小さな小川に辿り着く。

「この小川がそうなの？確かに綺麗だけど…」

ロゼッタが怪訝そうに首を傾げる。

「そうじゃないさ。…まあ待て待て」

エレノアがそう言う。しばらく待つとやがて水辺の空中や草の上にポツポツと小さな明かりがともり始めた。小さな光は段々と数を増し、空中では光の帯を作り出す。

「これは…？」

ロゼッタが目を丸くしてそう尋ねる。

「ホタルさ。綺麗なもんだろう」

エレノアがそう答えた。ホタルは恵まれた自然環境でないと生息できない種類が多く、科学技術が目覚しく発展する今の世の中にあつては生息域が限られている。そのためホタルを一度も見ることなく生涯を終える人もかなり多い。

「…綺麗ね」

ミーシャもどこかうっとりした様子でその妖艶な光を見つめる。

「なんだか星空の中にいるみたい」

「お前、なかなかいい表現使うなあ」

ロゼッタの風流な表現にエレノアは少し感心したようだ。ホタル達

は三人のまわりを光の帯を引きながら飛び回る。…それはまるで三人を歓迎しているようにも見えた。

「ホタルはな、成虫になってからは水しか飲まないんだ。それに… たった一週間しか生きられないんだぜ？」

エレノアがそんなうんちくを披露する。

「なんだかちよつと可哀想…」

ミーシャがそう言った。

「ホタルの光はオスとメスのラブコールで、メスは水辺のコケの上に卵を生むんだ。…短い一生を愛の為だけに懸命に生きているんだよ」

「ほ〜、ホタルも健気だねえ〜…」

エレノアのうんちくを聞きながらロゼッタはそう何回も頷く。

「それにしてもホタルの光と言いつい虫の音と言いついなんだか幻想的だね」

ミーシャがそう素直に感想を述べる。三人はホタルを眺めながら虫の音にも耳を傾けていたのだが、

…グウウ〜

そんな聞き覚えの無い虫の音まで聞こえてきた。

「ん！？今のは…?」

「エへへ、今のはわたしの腹の虫の音！」

エレノアにロゼッタがそう照れ笑いする。

「…そういえばお腹空いたね」

ミーシャもそう言った。

「夢中になっててすっかり忘れてたな。それじゃあ、夕飯にするか！」

エレノアの音頭のもと、三人はすがすがしい気分で空き家に戻っていった。

《夕食の時間》

空き家に戻った三人は早速今日の収穫を前に台所に立つ。

「キヤー！ノアちゃんのエプロン姿、カワイイ〜！」

どうやらロゼッタにはエレノアの普段の立ち振る舞いとギャップがたまらないらしい。

「うるさいなあー！私がエプロンしちゃ悪いのかよ！？…とにかくこれから料理するわけだが、私はたこ焼作るからお前ら味噌汁作れ！わかったか？」

エレノアがそう指示する。

「たこ焼に味噌汁だけって…まあいいか」

ミーシャがそう言うのも無理はないが…とにかく三人はそれぞれ調理に取り掛かる。

流石は料理上手のエレノア、料理人も顔負けの手捌きで手際良く調理を行う。

「タコをさばいてぶつぎりにして…っ」と

あつと言つ間に下ごしらえを済ましてたこ焼き機に各種材料を流し込む。もつとも、このくらいの作業工程を料理が得意な彼女は料理だとは認識していないかも知れないが。

「よし！後はひたすら愛情込めてひっくり返すだけだ！いくぜっ！料理は愛情だっ！」

…まあ、あながち間違っではないでしょう。

一方こちらは料理なんてしたことのない二人組が悪戦苦闘していた。「これ食べられるかなあ〜？わたしは何でも食べれるけど…どうかかな？フナムシなんか？」

ロゼッタがそう指につまんだフナムシをまじまじと見つめる。

「却下…そんなゴキブリの親戚みたいなの食べれないよ」

どうやらミーシャはフナムシを見るのも嫌なようだ。思わず顔を背

ける。

「じゃあこれは？ゴカイさん！」

今度はゴカイを手の平に乗せて見せるロゼッタ。

「そんなミミズみたいなの…って、釣りの餌じゃん…私達は魚かっ
ての」

ミーシャはそう突っ込む。

「クラゲさんは？キクラゲは食べれるから大丈夫だよきつと！」

「ほとんど水分じゃん…てゆーかキクラゲはキノコだって」

無残にも形が崩れて原型の無いクラゲを手で弄ぶロゼッタにミーシヤがそう正しい知識を教えた。それから苦戦しながら二人は何とか食べれそうなものを並べてみる。

「ところでミーちゃん、お味噌汁ってどうやってつくるの？」

食材が決まったところでまた新たな疑問が浮かぶ。

「さあ…私も詳しくは」

ミーシャは長生きだが生活面は無頓着なのでろくに料理などしたと無い。ミーシャは味噌の入ったパックを手にとって書いてあることをそのまま読み上げる。

「あわせ味噌、昆布とカツオのだし入り米こうじ配合、香り豊かで深い味わいが楽しめます…だって」

「…だから？」

ロゼッタがそう聞くので、

「えーと…つまりこの味噌は完璧かつグレートな味噌だから安心してお使い下さい…ってことじゃないかな？」

そんな適当な答えを返すしかなかった。

「あっ！なるほど！」

ロゼッタも頷いて納得する。もつとも、その意味を何も理解していないわけであるが…。

「小さな具はそのまま入れればいいけど…ウツボさんはどうする？そのままダイブするの？」

ミーシャが他の具を鍋に放り込みむ中、ロゼッタがウツボと睨めっ

こしながら言う。

「そりゃダメでしょう…テキトーに切ればいいよ」

ミーシャがそう答えると、

「うん、分かった」

ザクザクツ！ドカカツ！ブチイツ！！

ロゼッタは鋭い爪でウツボを八つ裂きにした。

「はい！任務完了！！」

「…」

ミーシャにもはや返す言葉は無かった。

《三人の夕食会》

…エレノアの前にはウツボの頭がそのまま入った味噌汁が置かれていた。

「この味噌汁…食べても大丈夫だよな？」

端の先でウツボの頭を突きながらエレノアが尋ねる。

「うん…問題無いよノアちゃん」

「味の保証はしないけどね…」

ロゼッタとミーシャは半分自信無さ気に答えた。

「…とにかく！自然の恵みに感謝しまして…いただきますっ！」

「いただきますーす！」

「…いただきます…」

そう感謝の言葉を述べ、三人は美味しく楽しく夕食を食べた。エレノア作たこ焼きはもちろん絶品だったが、ウツボ入り味噌汁が意外にも美味しかったことに三人は驚く。

「まさか、ウツボがこんなにも美味しいものだったとは…！」

エレノアも流石にその美味しさには驚いた様子。

「ウツボもノアちゃんも見た目によらないね！」

ロゼッタがそういつもの調子で言った。

「どーゆー意味だよ！」

「狂暴に見えて意外に少女趣味だったり……」

「……うるさいミーシャ！」

詳細を説明しようとするミーシャにエレノアがピシヤリと言う。

「てゆーかわたしたちなんか大事なもの忘れてない？」

ロゼッタが何か物足りないのかそんなことを言い出す。

「大事なもの？確かに何か違和感が……？」

エレノアもなんかこういつものアレが無いような気がしてちゃぶ台の上を見渡す。

「わかった……私達お米を……ご飯を忘れてた」

いち早く気が付いたミーシャがそう言った。

「あっ！」

「しまったあ！主食を忘れるなんて！」

ロゼッタとエレノアはそう頭を抱える。食べることが大好きな二人にとっては致命的なミスだからだ。

「ま、別にいいんじゃない？……量的に問題無いし」

ミーシャが味噌汁を啜りながら冷静に言う。

「それもそうだな」

「キヤハハ！現実逃避ってやつっ？」

こうなつては二人も納得するしかないだろう。あつと言う間に三人はおかずだけの夕食を残さずたいらげた。後には、魚の骨とカニやエビや貝の殻しか残らなかった。

「……ごちそうさまー！」

「……ごちそうさまでした」

「……ごちそうさま」

そう言つて三人は満腹になつたお腹を抱えながら、こんな雑談を話し始めた。

「昔この家には誰が住んでいたんだろーね？」

知りたがり屋のロゼッタがそう問題定義する。

「そんなの私知りたいよ。確かなのは、今は誰もいないってことだけだよ」

エレノアが薄暗い室内を見渡してそう答えた。

「こんないい場所なのにね…どうしたんだらうね？」

ミーシャも不思議そうな顔をして室内を見渡す。

「さあな…人間ってのは色々な事情を抱えて生きていけなくっちゃいけない生き物だからな。この住人も私達と同様に何か事情を抱えていたのかも知れないな」

エレノアが珍しくそんな意味深い言葉を口にする。

「なんか意味深…」

ミーシャがそう下を向く。何でも深刻に考えてしまう彼女の悪い癖だ。

「あんま深く考えるなよ空気が重くなるから！」

エレノアがそう仕切り直す。

「えっ？空気がって重くなるものなの？」

ロゼッタがそんな訳の分からないことを質問する。

「違っつて！雰囲気が暗くなるって言っただよ！」

「あ！なんだそんなことか〜！もう！ノアちゃんのお茶目さん！」

エレノアに説明されてロゼッタはようやくその意味を理解した、と言うかこれはエレノアの気を引くためにわざとやったことかも知れない。

「…ロゼッタって自然だよね」

「それを言うなら天然だろミーシャ？」

エレノアがそう突っ込む。もちろんミーシャはわざと間違えたわけであるが。

「よかった…ちゃんとツツコミ入れてくれて。ちゃんと存在感あるんだ私」

ミーシャはそう胸を撫でおろす。

「…お前、何か勘違いしてないか？」

そんなミーシャを見てエレノアが苦笑いしたのは言うまでも無い。そうやって他愛も無い話をしている間に夜はふけ、月も段々と高くなってきた。

「さてと、そろそろ温泉にでも入りますかな」
エレノアがそう言う。

「え?!ここって温泉まであるの!?!」
ロゼッタが驚く。

「ここから少し歩いた山の中にあるよ。露天風呂で源泉かけながしさ!」

これまたエレノアは得意気に答えた。

「すごい!早くいこっいこっ!」
いてもたってもいられないのか、ロゼッタは立ち上がってそう急かす。

「ハハハ。そんなにはしゃぐなよ!」

まるで子供のようなロゼッタを見てエレノアが笑う。

「…ここは健康ランドですか」

思わずミーシャはそんな独り言を言う。

なにはともあれ話が決まれば早い、三人は入浴道具を持って山の方へと出かけて行った。

《山中の露天風呂》

三人は山中の露天風呂にやって来る。天然の温泉からは湯煙が立ち昇り、上空には月と星で装飾された空が広がっていた。

「わあ!すごいすごい!ホントにホントの温泉だ!」

風呂好きのロゼッタはもう嬉しくてたまらない様子。

「前に来た時は一人で入ったけれど、今度は三人だからにぎやかだな」

エレノアがそうしみじみと言った。

「覗きとかでないのかなこ…?」

「誰がこんな田舎に覗きに来るんだよ?」

ミーシャの余計な心配にエレノアが逆にそう質問する。

「そうそう!もし覗きが出ても見せるもんじゃないしね!」

「えっ?それはどうゆっ…??」

ロゼッタの必殺の一言にエレノアもミーシャも言い返す言葉が見つからなかったのは言うまでもない。

…三人は入浴のため服を脱いでいきます…

「あっ!新発見!ノアちゃんのブラジャーはピンクでした!」

ロゼッタがそう大声で意味も無く言うものだからエレノアはたまつたもんじゃない。

「な、なんだよ!わ、私がピンクじゃおかしいのかよ!?」

「違っつて!ノアちゃんがブラジャーしているのが新発見なんだつて!」

「そ、そこまで小さくねえっ!」

エレノアはそうロゼッタに反論するがけっして自分の胸が大きいとは間違つても言えなかった。コンプレックスをここまでいじつてくる相手もそうそういないだろう。

「ところで…エレノアは何歳からブラ着けてんの?」

ブラジャーネタに便乗してミーシャがそう尋ねる。ここまできたらもはや下ネタでもなんでもない。

「14からだよ。ミーシャはどうなんだよ?」

「10…勝ったね」

ミーシャはそう意味深なガッツポーズを試してみる。

「キャハハ!ノアちゃんの敗北決定!」

それを見ていたロゼッタは素っ裸に近い状態で腹を抱えて笑う。

「フ、フフフ…いいさ。どうせ私は万年貧乳女さ…だが!私は負け

ない！そう！こいつらが私のことを貧乳とあざけ笑う限り、私はこいつらと闘い続ける！この我が貧乳に誓って！」
そうエレノアは天に向かって吼えた。どうやらエレノアは完全に開き直った様子。

「…どうでもいいから早く温泉入る」
ミーシャがそう冷静に言う。

準備ができたところで三人は湯煙の中に消えていった。

《入浴中です》

「ふい〜…生き返るようだぜ〜！」

「ほえ〜…サイコーの湯加減だねえ〜！」

年頃の娘がするとは思えない言動でエレノアとロゼッタは温泉を満喫する。

「この温泉の効能ってなんだろ…？」

研究熱心なミーシャはしきりにお湯を手ですくってみる。

「さあ？多分…肩こり、腰痛なんかには効くんじゃないかな？」

エレノアがそう答える。もちろん本当にそうなのか彼女は知らないが。

「ふーん、貧乳には効かないの？」

ニヤニヤしながらロゼッタがまた言葉のちよっかいをエレノアに出す。

「そんな温泉あつてたまるか！」

「だよね〜！そんな温泉があつたらノアちゃんだって今頃はねえ」

怒るエレノアをすかさずようにロゼッタが言う。しかし、エレノアも黙っっちゃ無い。

「ほほう…言ってくれるじゃないか。お前にはバカの治る温泉にぜひともつかってもらいたいもんだな」

「む、珍しく言い返された…やるわね」

予想外の展開にたじろぐロゼッタ。そんな二人の会話の間に忘れ去られたミーシャが口を挟む。

「…なんの戦いこれ？てゆうーか…私を忘れないでよ」

「あつ…悪い悪い」

エレノアがすまなそうに謝った。その後、しばらく沈黙が続くがある台詞が沈黙を破る。

「ん…やっぱし気のせいじゃないよね？」

ロゼッタがエレノアの胸を眺めながら言った。

「なんだよっ！人の胸ジロジロ見やがって」

エレノアがそう恥ずかしそうに言うと、

「…ノアちゃんって初めて会った時より胸大きくなったよね！」

笑顔でロゼッタは答えた。

「えっ！？そ、そうかな…？」

唐突に寝められたエレノアは少し戸惑っているようだった。本当はきつと嬉しかったに違いない。

「短い間柄とは言え、みんな少しは成長したってことだね…」

何かを思い出すかのようにミーシャが言う。

「色々あつたからなあ…ま、今となっては良い思い出…かな？」

そんな台詞をエレノアは嬉しそうに言った。

《空き家の縁側と夢時間》

月は空高く上がり夜風が三人の座る縁側を通り抜けていく。目の前の草の海からは虫の音が絶え間無く聞こえてくる。そんな風流な雰囲気の中、風呂あがりの三人の少女は縁側でくつろいでいた。

「いいお湯だったね！」

タオルで長い髪の毛を器用に拭きながらロゼッタが言う。

「そうだな！おかげでリフレッシュできたよ！」

そんなことを言うエレノアの短い髪はもうすっかり乾いていた。

「…お肌ツヤツヤ」

ミーシャは頬を触りながら嬉しそうに呟いた。

三人は入浴で暖まった体を縁側の冷たい空気でもどよく冷ましていくところ。そしてそろそろ眠くなってくる時間でもあった。

「今日は楽しかったなあ…わたし、今日のことは一生忘れないよ！」
ロゼツタが少々大袈裟ではあるが嬉しそうに言った。

「確かにいい思い出になったなあ！」

「…最高の一日だったね」

この意見にはエレノアもミーシャも文句無く賛成の様子。

「じゃあ今日をみんなの思い出の日にしようよ！どうかな？」
気を良くしたロゼツタがそう提案する。

「記念日か…悪くはないな！」

「ナイスアイデア…」

ロゼツタはさらにこう続けて言った。

「それと…もし今の状態が落ち着いたらみんなで一緒にここに住もうよ！それでね…ずっとずっと友達でいようね！」

「ああ…そうだな。でも、何があっても私はお前の友達だけ？私はお前らと友達でいることに誇りを持つてるからな！」

エレノアはそう誇らしげに宣言する。

「みんなといると…なんだかすごく楽しい。私からもお願いするよ、ずっと友達でいてくださいって」

ミーシャもそんなことを口にした。

「まっ、当たり前のこととをちよつとだけカッコつけて言ってみただけなんだけどね！…さ、明日も早い。もう寝ようか」

エレノアのそんなちよつと格好良い台詞でこの話題は閉められた。

…三人はそれぞれの布団に入って本日最後の会話を交す。

「おやすみ、みんな！良い夢を！」

「お前もな…おやすみロゼ、ミーシャ」

「…おやすみなさい…エレノア…ロゼツタ…」

その日の夜、彼女達がどんな夢を見たのか知る者はいない。しかし、これだけは言えることがある。…今の彼女達の心の中は『幸せ』で満たされているに違いないと…。

第八章 番外編 花鳥風月（後書き）

ここではメインの三人のプロフィールを紹介させていただきます。
ストーリーの参考にしてみてください。

ロゼッタ

身長：163cm

目の色：ワインレッド

髪の色：レッド（ロングヘア）

趣味・特技：運動

特筆事項：非常に高い魔力と再生能力を持つ。

エレノア

身長：161cm

目の色：グリーン

髪の色：ライトグリーン（ショート）

趣味・特技：運動、料理

特筆事項：愛銃は実は命の恩人からの貰い物であり形見でもある。

ミーシャ

身長：159cm

目の色：スカイブルー

髪の色：ホワイト（ミドル）

趣味・特技：読書

特筆事項：見た目は10代後半だが本当は200歳。

第九章 雲影の都・前編（前書き）

今回は前編と後編に別けて話を進めていこうと思います。前編では特に戦闘シーンなどはありませんが、三人の心情や美しい自然の景色を中心に書いてありますので楽しみながら読んで頂けると幸いです。また、後編の展開を予想しながら読むといっそう楽しめると思います。

第九章 雲影の都・前編

ここはアランド高地のふもとにある町、スピス。建物はまばらで人影もそれほど多くはない。おまけに気温は年間を通して低く、冷たい風が町を吹き抜ける。…そんな寂しい町中を三人の少女が歩いていた。一人は凜々しい顔つきで髪の短い少女、もう一人は白髪で物静な感じの少女、そしてもう一人の少女は真紅の髪と瞳をしていた。三人とも防寒用に黒い布をはおっていた。

「なんだか寂しい町だねえ… ホントにこんなところに宝物なんてあるのかなあ？」

赤髪の少女が怪訝そうに言った。

「この町にはお宝はないよ。宝物があるのはあの雲の上さ！」

髪の短い少女が答える。少女の目線の先には巨大な山がそびえていた。頂上の方は雲に覆われていてその姿を確認することはできない。

「…あんな高いところまで登るの？かなりの重労働だね」

白髪の少女が溜め息混じりに淡々と言った。

「まあそう言うなって。旅の基本的な目的はこうやって宝探しすることなんだからさ！」

「あれね？そうだったんだ！わたし知らなかったよ」

「私も初耳…」

エレノアの発言にロゼッタとミーシャの二人がそう口を揃えて言う。「ぶつちやけ、旅の目的なんてないのかも知れないな…ただ私は色々な世界を見てみたいし、働くのが嫌だからトレジャーハンターをやってるわけだよ」

そんな本音を今更ながらエレノアが言う。

「そして、わたしとミーちゃんは友達としてノアちゃんと一緒に旅してるってわけだね！」

ロゼッタがそう補足した。確かにロゼッタとミーシャには現時点でエレノアと一緒にいる大した理由が無いのは事実。友達だから、た

だ単にそれだけである。

「…まあ、最終的に楽しいから旅してるってことだね。細かいことは気にしない気にしない」

意外と大雑把なミーシャがそう言う。人が常に刺激を求めると言うのはこうゆうことなのだろう。

「そうゆうことだな。…だから相手は誰であれ旅の邪魔をする奴は叩きつぶすだけだ」

エレノアがそう意気込む。道中そう簡単には前に進めないことを彼女が一番良く分かっているようだった。

「キヤー！ノアちゃんおつかない！」

ロゼッタがそうケラケラ笑いながら言うてみる。一番おつかないのはおそらく彼女本人なのだが。

「お前に言われとうないわ！」

「…同感だよ」

エレノアとミーシャがそう言うのも無理はないだろう。

「まあまあ！旅の目的も確認できたし、さっさと宝探しに行こーよ！」

「相変わらずロゼはのうてんきだな」

相変わらず能天気と言うかテンションの高いロゼッタに最後は主導権が移ってしまうのはいつものこと。

…と、ゆうわけで三人は山へと宝探しの冒険に出るのですた。

《アラランダ山》

三人はアラランダ高地へと続く山道を登っていた。地面は岩だらけで草と低木がわずかに生えているだけである。眼下には小さくなる町が見えた。

「ねえノアちゃん、山の頂上には何があるの？」

ロゼッタがそんな質問をする。

「さあ、私はただお宝があるとしか…」

エレノアはそんな曖昧な答えを返す。そもそも彼女の情報源は風の噂程度だから確信を持ってないのは仕方ない。

「もし何も無かったら…どうするの？」

ミーシャのその問いかけにエレノアは少し考えてからこう答えた。

「その時はその時だよ…そんな悪夢は願って避けただけど」

そう、確かに頂上に何があつてそこに本当に宝があるのか正直なところ彼女にもわからなかった。でもそれ以上に『色々な世界を見てみたい』とゆう衝動が彼女を突き動かしていた。彼女が旅をする理由…それは自らの好奇心を満たすための旅なのかも知れない。

「急に黙っちゃってどうしたのノアちゃん？気分でも悪いの？大丈夫？」

「無理しないで少し休憩しようか…？」

二人が心配そうに何か思いつめた様子のエレノアに声をかける。

「あ…いや、大丈夫だよ心配すんなって！」

理由なんて関係ない。今の自分には共に笑い共に泣いてくれる仲間がいてくれる…そう考えるとエレノアは無性に嬉しくなった。

…その時、ミーシャが突然何かを思い出したかのように叫んだ。

「…あー！！」

珍しく大声をあげたミーシャに二人は驚いた。

「なんだなんだ!？」

「どうしたのミーちゃん?!」

するとミーシャは半ば呆れたようにこう言った。

「…もつと早く気付くべきだった。なんでワイバーン達に乗っていかなかったんだらう私達…」

確かにこんな山道を登らなくても召還獣の背中に乗って頂上まで飛んでいけばそれでよかったのだ。

「あ…そういえば」

これには口ゼツタも開いた口が塞がらない様子。

「じゃあ私達のこれまでの苦勞はいつたい…?」

エレノアもがつくりと肩を落とすしかない。しばらくの間、妙に嫌な沈黙が続いた。

「ま、まあ…ドンマイだよドンマイ！ホラ！まだちょっとしか登ってないし…それにホラ！運動って体に良いことだし！今からワニガワちゃんとヤキトリちゃんに乗って頂上に行っても遅くはないだろうし…」

沈黙を破りロゼッタがみんなを慰めるようにそう言った。

「まあそりゃそうなんだけど、なんで誰も今まで気付かなかったんだ？」

「永遠の謎だねこりゃ…」

エレノアとミーシャがそう首を傾げても後の祭りである。とりあえずミーシャはワイバーンとグリフォンを召還することにした。早速、魔法陣の光の中から二体の召還獣が姿を現した。

「グルルル…」

「こちらこそよろしく頼むよワニガワ」

そう何やらミーシャとワイバーンが会話する。どうやらミーシャにはワイバーンの言葉が理解できるようだ。

「はあい、みなさんお元気ですか？早速目的地に参りましょうか？」

「うん！よろしくねヤキトリちゃん！」

ロゼッタはグリフォンにまたがりながら言った。

エレノアとミーシャはワイバーンに、ロゼッタはグリフォンにそれぞれ乗ると二体の召還獣は空へと舞い上がった。二体は山の斜面に沿って上昇していった。…そのうち段々と霧が濃くなってきた。

「どうやら雲の中に入ったみたいですよ」

お喋りだけ物知りなヤキトリが言った。

「ところで皆さん、どうして頂上に行くのに最初から我々をお使いにならなかったのですか？なにもわざわざ山の中腹まで歩かなくて毛…」

ヤキトリがそんなことを言い出したので、

「うるさいな！ただ単純に思いつかなかったんだよ！山って言った

ら山登りつてイメージだったからよ」

エレノアがそうムキになって答える。

「正直気付かなかった自分が情けないよ…」

「そんなことないですよ！人間なら、誰しも忘れることぐらいありますよ！」

「そうそう！前向きにいこー！」

落ち込むミーシャをロゼッタとヤキトリが慰める。

「お前ら元気だなあ」

「…ホントに」

エレノアとミーシャは思わずため息をつく。その時突然霧が晴れ視界が開ける、雲の上に出たのだ。目に入った頂上の景色を見て一行は驚きの声を上げた。

「うわあー！」

「これは…！」

「…なんか夢みたい…」

「どうやら何かの遺跡みたいですね」

「ガルル〜！」

広大な山頂の草原には数々の古代の建物がまるで時間が止まっていったかのようにそこにあった。感動もそこに三人は遺跡の前に降り立つ。

「まさかこんな所に遺跡があるとは驚いたな！」

エレノアは辺りを見渡しながら言う。

「草ボーボーだけどね…」

「おそらく遙か昔には繁栄を極めていたことでしょう…今はご覧の通りですが」

ミーシャとヤキトリがそんなかつての繁栄を皮肉るようなことを言った。

「ねーねー！みんな見て見て！わたし達、雲の上にいる〜！」

ロゼッタがそう嬉しそうにステップを踏む。景色に目をやると、沈みかけた太陽が目前に広がる雲海をオレンジ色に染めていた。

「さしずめ、雲の上の都…ってところかな？」

エレノアが遺跡にそんな洒落た名前をつけてみた。

「…もう夕方だね」

ミーシャは特に表情を変えることなくそう言う。

「どうするノアちゃん？このまま遺跡探索するの？」

「いや、今日はここで野宿だ。遺跡探索は明日、日が昇ってからやる」

ロゼッタの質問にエレノアがそう答える。夜間の散策が危険なことをエレノアはよく知っていたからだ。

「だってさ…二匹共ご苦労様」

「いえいえ、またいつでもお呼びくださいな！」

「ガルル〜！」

二匹の召還獣はミーシャと挨拶を交わすとそのまますーっと消えていった…。

《高原の夜》

その日の夜、三人は野営用のテントの中にいた。ここでは建物が邪魔をしてミーシャのドールハウスを建てることができなかつたのだ。三人は寒さで眠れずにいた、テントの中でもうっすらと息が白い。

「うー、寒いね〜！」

ロゼッタが身を縮めながら言う。

「標高が高いからなあ…あーさぶっ！」

エレノアが身震いする。そこそこの防寒対策を施しても眠る際にはどうしても周りの環境を敏感に感じてしまうのだ。

「…眠れないね」

ミーシャがそう率直な感想を述べる。

「だったらさ、ちよっと外に出てみない？確かに寒いかも知れない

けれど…何もしないでいるよりはマシでしょ？」

ロゼッタがそんな暇つぶしの方法を提案する。確かに外は寒いが上着を着ていけば大丈夫であろう。

「それもそうだな」

エレノアもそう頷いた。そのままの流れで三人はテントの外へ出てみる。今日は新月の日、星の光が支配する空の下で雲海が青白く不気味に輝いていた。

「わぁーい！草のベッドだよー！」

ロゼッタはそう言っただけで草の上に寝転んだ。彼女の赤い髪が濃い緑色の草の絨毯の上ではよく映える。

「まったく、ホント気楽なやつ…まあ、こつゆつのも悪くはないけれどね」

「意外とフカフカで気持ちいいかも…」

続けてエレノアとミーシャの二人も草原の草の上に寝転ぶ。上空には雲ひとつなく月すらも姿を消した純粋な星空が広がっていた。そして三人を澄んだ空気と満天の星空の光が包み込んでいた。

「雲も月も無い星空なんて…なんだか不思議な光景だな」

エレノアがそう言った。確かに雲の上の世界にいること自体が珍しい。

「そうだねえ！こんな光景は多分ここでしか見れないんだろうな」

ロゼッタがそんな風に嬉しそうに言った。

「時代が移り変わっても…人々の心が変わってしまったてもこの星空の光は変わらないんだろうね、きっと…」

ミーシャが静かに淡々と言った。

「だろうな。千年前も千年後も星と月と太陽は変わらない姿で私達を見下ろしているんだろうなあ…」

エレノアもしみじみとそう言う。

「人間は生まれ、成長し、いずれ死ぬ…常に変わって行くものなのにね。宇宙の歴史から見れば私達の一生なんて微小なものに過ぎないんだろう」

ミーシャが言った。そんな二人の意味深な言葉を聴いてロゼッタは大きなあくびをしながらこう言う。

「ノアちゃんもミーちゃんも難しい話が好きだねえ…わたしにはよくわからないよ。…難しい話を聴いてたらなんだか眠くなってるよ。やった、もう寝ない？」

「まったく…単純なやつだなあロゼは。正直、いつでも気楽なお前がうらやましいよ」

エレノアが溜め息混じりにそう言った。

「いやあー、それほどでもないよ」

「誉められてないと思うよロゼッタ…」

ミーシャがロゼッタに冷静にそう突っ込む。

ひとしきり夜空の美しさを堪能した三人は再びテントの中へと戻って行った。そしてそれぞれ眠りにつくのだった…。

《遺跡探索当日》

朝日が照らす中、三人は遺跡の中でも一番大きな城のような建物の前に立っていた。

「宝探しの基本はまず大きな所から探すことだ。大抵、遺跡のこういう建物には何かしらあるものだからな！」

エレノアがそんな風に得意気に説明する。

「それはわかったけど…その手に持つてるのは何？戦争にでも行くつもりなのノアちゃん？」

「自動小銃…？」

ロゼッタとミーシャが不思議そうに尋ねる。それもそのはず、エレノアの手には黒光りする高性能の自動小銃マシンガンが握られていたからだ。

「ああ、これか？マシンガンさ！レトロシテイで殺人鬼と闘った時に自分の攻撃力不足を痛感したからな…これって破壊力抜群なんだ

ぜ？トレジャーハンターは命がけだからな。ある意味『戦争』ってことだ」

「ノアちゃんったら、物騒なんだからもあ〜！」

「やれやれ…」

ロゼッタとミーシャが苦笑いする。何となくエレノアの気合が空回りしているようにも見えなかつた。

「いよいよ遺跡内に潜入だ！いくぞ！お宝目指してレッツゴー！！」
「おー！！」

「…テンション高いなあー…も〜」

いよいよ三人は目の前の建物に足を踏み入れる。建物の中には薄暗い廊下が続いていた。窓から入るわずかな光が、かろうじて建物内を照らしていた。

「なんだかジメジメしてて嫌なところだねえ…」

ロゼッタがしきりに辺りを気にしながら言う。

「しかも薄暗いときた…気味が悪いな」

エレノアは自動小銃を構えながら前に進む。

「私…カビ生えそうかも」

ミーシャはそんな冗談を言ってみるが、誰も反応はしてくれなかつた。足元をよく見て見ると空の箱や壺の欠片、それに混じって小さな金貨がたくさん落ちていいる。三人は前に進みながらその金貨を一枚一枚拾い集めた。これも立派に旅を続けるために必要な作業なのである。

「だいぶ散らかっているねえこの遺跡」

ガラクタの破片を手に取りながらロゼッタが言う。

「この様子だと…私達の他に誰かが来たのか？」

「でも…だったらなんで金貨が落ちてんの？しかもこんなに…」

エレノアの推理にミーシャがそう疑問を投げかける。

「わたしたちのために残してくれたとか？」

「アホッ！んなわけあるかつ！」

相変わらず冗談しか言わないロゼッタにエレノアがそう言った。

「じゃあ、なんで…？」

ミーシャは首を傾げるしかない。

そんな三人の疑問は廊下をさらに奥へと進んだ所で明らかとなることになった。廊下の突き当たり…T字路になった所に人の白骨死体が五体も転がっていたからである。

「これは…！」

エレノアは一瞬たじろぐ、骸骨の空っぽになった瞳が何かを訴えるかのようにこちらを静かに見つめていた。

「キャハハ！すごい、ガイコツだー！」

ロゼッタは特に驚くこともなくそう珍しそうに白骨死体を眺めていた。

とりあえず三人は恐る恐る死体の側へと近づいてみる。…その死体達はポロポロになった服を着ていた。肉などの組織は腐って完全に無くなっている、この湿度では腐敗も速いようだ。

「服の状態から考えて…死後数ヶ月程度ってところか」
エレノアがそう推理する。

「でも、なんでこの人たち死んじゃったんだろうね？」

そんなロゼッタの質問にミーシャが答えた。

「状況から考えても…何者かに殺されたって考えるのが普通でしょうね」

確かに、これだけまとまった人数が一箇所で死ぬのはいささか不自然ではある。

「でも誰に？わたしは何も生きてるものの気配は感じないけど？」

ロゼッタが瞳を細くして言う。彼女の感覚器官は非常に優秀であるから、おそらく言うことに間違いはないはずである。

「ロゼが気配を感じないってことは…こりゃトラップの可能性があるな」

エレノアがそんな可能性を示唆する。

「トラップ？」

「…畏なことだよロゼッタ」

ミーシャが首を傾げるロゼッタのためにそう説明する。

「そう、こういった古代の遺跡には宝物を盗られないようにするた
めの罠が無数に仕掛けられているんだ」

「つまり古代版のセキユリティーシステムってわけだね」

エレノアの説明にロゼッタは大きく首を縦に振る。どうやら彼女は
頭が悪いわけではなくむしろ飲み込みは早い方の方ようである。

「とにかくこれから先はトラップに注意して進まないと…さもない
と…」

そう注意を促しながらエレノアが前に進もうとすると、

…ガコン

エレノアが一步踏み出した所の床のブロックが少し沈みこんだ…。

「ん！？何か踏んだ…」

その嫌な感触に彼女が気が付いた時にはもう後の祭りである。

ゴォー！ガラガラー！

その瞬間、三人が立っていた床が音を立てて一気に崩れた！

「うわぁー！」

「わぁぁぁー！」

「…キヤアア！」

三人は五体の骸骨もろとも暗い落とし穴へと吸い込まれていった。
遺跡内には再びいつもの静寂が支配する世界が戻る…。

第九章 雲影の都・前編（後書き）

最後にミーシャの二体の召還獣を紹介しておきたいと思います。

ワニガワ（ワイバーン）

ドラゴン的一种で大きな翼が特徴。飛行能力に優れ、鋭い牙が最大の武器。大きな翼で風を起こして攻撃することもできる。

ヤキトリ（グリフォン）

鷹の頭と翼、獅子の胴体を持った魔物で鋭い嘴と爪が武器。ちょっとお喋りだが、一方で物知りな一面もある。

ちなみに召還獣は一度倒されても次の日には生き返って召還可能になります（ワイバーンは一度ロゼッタに殺されている）。

それでは召還獣について学んだところで今回はお別れです。また次回もお会いしましょう。

第十章 雲影の都・後編（前書き）

前作に続き雲影の都、いよいよ後編です。前作とは異なり激しい戦闘シーン満載でお送り致します。どうぞ最後まで楽しんで読んでください。

第十章 雲影の都・後編

《銃と魔法》

「…痛い…ここは？」

ミーシャが目を覚ましてみると、辺りは真っ暗で何も見えない。

「とりあえず明かりをつけないと…シャイン！」

ミーシャがそう呪文を唱えると、彼女の半径十m程の円内が一瞬で明るくなる。辺りを見渡すと明かりの中にエレノアが倒れていた。

「エレノア！大丈夫？」

ミーシャが声をかけながらエレノアの体を揺ると、彼女はうつすらと目を開けた。

「ん…ミーシャ…ここは？」

「わからない…私達、落とし穴に落ちてね。多分…遺跡の地下だと思っけど」

エレノアの問いにミーシャはそう答える。

「ロゼは？あいつはいないのか？」

そう言っつてエレノアは辺りを見渡すが、明かりの中にロゼッタの姿は無い。

「ロゼッタはいないみたい…どこか別の場所に落ちたのかも」

ミーシャはそう言っつた。それを聞くとエレノアは起き上がり自分が無傷であることを確かめる。そして近くに落ちていたマシンガンを拾い上げそれを肩にかけた。

「ミーシャ、怪我は無いか？」

「うん…私は大丈夫だよ」

「そうか…それじゃあ行くぞ」

お互いの無事を確かめるのもそこそこにエレノアがそう言っつ。

「何処へ？」

「決まっただら！…ロゼを探しに行くんだよ」

ミーシャの問いかけにエレノアは躊躇せずに応えた。

二人はミーシャの魔法の小さな明かりを頼りに暗闇の中を進んで行く。どこまでも続く暗闇の回廊を二人はあてもなくさまよった。

「ロゼッタは大丈夫かな…どう思うエレノア？」

ミーシャが心配そうに聞いた。

「あいつは大丈夫さ。そんなに簡単にはくたばらんだろうよ…多分」エレノアが答える。しかし、その返事には何処かいつもの自信が感じられなかった。…そんな時、二人は目の前に何かの気配を感じた。「ロゼッタのことはやっぱり心配だね。でも…その前に自分達の心配をした方がいいみたい」

「ああ、どうやらそうみたいだな…！」

二人の前に広がる暗闇の中から体長1m、一つ目で多脚のクモ型のガーディアンが数体現れた。その比較的長い脚を巧みに動かしてゆつくりとこちらに近付いてくる。どうやらこちらの出方を見ているようだ。

「ガーディアン…大昔の優れた文明が作り出したってゆうあれか」エレノアがそう言った。ガーディアンとはいわゆるロボットのようなもので正式には知的機械生命体と言う。自信で考えて動き、多少の自我を持つため非常に動物に近い動きをするがプログラムには従順だと言われている。

「シンニユウシャ ハッケン…シンニユウシャハ、ハイジヨスル！」
どうやらエレノア達は敵だと見なされたようだ。数体のガーディアン達が鋭い爪で二人に襲いかかってきた！

「くそっ！この野郎！」

ガガガガガガッ！

エレノアのマシンガンが火を噴いた！銃弾を浴びたガーディアン達は乾いた音を立ててバラバラになる、意外と個々の防御力等は低いようだ。…だが、ガーディアンは後から後から湧いて出てくる。

「次から次へと…きりがないぜ！」

これだけ数が多いとさすがのマシガンでも歯が立たない。弾切れになるのは時間の問題だからだ。

「私に任せて…呪文を唱える間の援護をお願い！」

ミーシャが袖まくりをしながらエレノアにそう叫ぶ。

「おう！任せませ！」

ミーシャは呪文を唱え始めた。その間、エレノアはマシンガンを撃って撃って撃ちまくる。ガーディアン達は次々とスクラップに変わっていった…だが、そのスクラップの山をガーディアン達は次々とふみこえてくる！

「ミーシャまだか！？」

銃弾の残量を気にしながらエレノアが少し焦る。

「…準備完了。喰らえ…ファイアエクスプロード！！」

ミーシャがそう呪文を唱えると突然ガーディアンの群れの中心で爆発が起こった。その熱と爆風でガーディアン達はあつと言う間に粉々に吹き飛ぶ！残骸が火の子のように辺り一面に散らばった後には何も残らない、ガーディアン達が湧くこともなくただ静けさだけが再び戻ってきた。

「ひとまず安心していいみたいだね」

「…私達も意外と強いみたいだね」

とりあえず敵を撃退した二人はホッと胸を撫で下ろした。

「銃と魔法のコンビもなかなか悪くないのかもな」

「…そうだね」

二人は顔を見合わせて思わず笑う。

「さてと…ロゼを再び探しに行くとしますか」

エレノアが言う。二人は黒コゲのスクラップを踏みながら再び暗闇の中を進んで行った。

《コントロールルーム・マザーコンピューター》

「…コンカイノシンニユウシャハ、ナカナカテゴワイヨウデスネ。タカラヲネラウオロカモノメ…イキテハカエシマセンヨ。シカシ、コノヒガイジヨウキヨウ…イツタイナニモノナノダ…？」

《破壊と葛藤》

ドガアッ！

ガチャン！

ザシユウツ！

バキィッ！

「…ピピ…ガガガ…」

暗闇の中、何か粉砕されるような不気味な音が辺りに響き渡る。

「ふう…暗闇でも目が見えるのはお互い様みたいだね。ざっと百匹つてところかな？ いったいなんだろうねこいつら？…まあ、弱いから別にいいんだけどな」

エレノアやミーシャとは別の場所に落ちたロゼッタは無数のガーディアンと戦っていた。暗闇でも良く見える暗視ゴーグル並みの性能を持つ彼女の瞳はうごめくガーディアンを正確に捉え攻撃を仕掛けられる。しかし、その戦いは一方的なものであった。この蜘蛛型のガーディアンは対人間用のものなのか彼女にとつてはさほど強力な敵ではないようだ。

「シンニユウシャハハイジヨ…」

「もー、うるさいなあー」

突進してくる相手にロゼッタはめんどくさそうにその爪を振りかざす。

ズシャアッ！

「ピッ…」

ガーディアンのは一瞬でバラバラになる。ロゼッタの鋭い爪の前ではガーディアンは装甲など紙切れ同然だ。

「つまらないなあ…もつと楽しませてよね？」

闇の中でロゼッタは真紅の瞳を爛々と輝かせながら言い放った。彼女に恐怖の感情は微塵も感じられない、むしろ目の前の相手をなぎ払うことを純粹に楽しんでいるようにさえ見えた。

「ハイジヨセヨ！」

こちらに向かってくるガーディアン達に対して、彼女は情け容赦なく鋭い爪を振りかざした！

ズシャア！

ギイイイ！

バキイイ！

ガシャーン！！

「ハハハハハハ！！機械の分際でこのわたしに勝つことなど不可能なんだよ雑魚があつ！！」

ロゼッタはまるで気が狂ったかのように高笑いする。五分としないうちに百匹近くいたガーディアンは全てスクラップに変えられてしまった。辺りには千切れた手足とオイルが散乱する。

「あゝ楽しかったあ！！」

目の前の敵を全滅させて満足したのかロゼッタは笑顔で言った…が、オイルまみれになった自分の掌を見て何故か彼女の表情が急に暗くなる。

「楽しかった？…いや、違う…なんだろうこの虚しさは…？」

それから彼女は、なんだかとても悲しい気分になってきた。ロゼッタの精神状態は非常に不安定である。肉体的には強くてもその内面は非常にナイーブで繊細だ。時々こうやって気分が滅入ることもし

ばしば見受けられる。

「もしもこれが機械じゃなくて人間だったらわたしの掌についてるのがオイルじゃなくて血だったら…わたしは…わたしはいつたい何者なんだ？」

彼女の真紅の瞳には涙が浮かんでいた。敵を目前にした自身の豹変振りを我にかえった彼女は急に恐ろしく感じたから。

「そういえばわたしはいつたいなんのために生まれてきたのだろうか？何かを破壊し殺すことを『楽しい』と感じ人々に『赤い悪夢』と恐れられるために創られ生まれてきたとゆうの？わたしには…普通の人間として生きる資格が無いとでも？いつたいわたしが…わたしが何をしたとゆうの…?!」

彼女の頬をひとすじの涙が濡らした。いつかはこの恐ろしい感情が大事な人に向けられるんじゃないか、そんな恐怖が彼女の脳裏を過ぎる。

「わたしは…この世に生きていてはいけない存在なのかな…」
そう言うと彼女は自分の左胸に自らの鋭い爪をつきつけた。

「そうだ…自分で自分を殺してしまえばもう誰も殺さなくていいんだ…もう二度と苦しまずにすむんだよ…！」

そんな唐突な自殺感情に駆られるロゼッタ。そもそも簡単には死ねないこの体、そして本来の自然の摂理からは許されぬ自身の存在…その精神状態も常人には理解しがたいものに違いは無い。しかし鋭い爪に力を入れようとした瞬間、脳裏にエレノアとミーシャの顔が浮かぶ。…彼女は左胸からその手を離れた。

「…いけない、だめだよそんなこと。わたしには…わたしを必要としてくれる友達がいる。わたしのことを何よりも大切にしてくれる素晴らしい友達が…。自殺なんてしてる場合じゃない！早く二人を探しに行かなくちゃっ！」

何とか正気を取り戻した彼女は涙を拭くと暗闇の中を走りだす。そんな彼女の赤い瞳には何か強い意思が宿っているかのようだった。

《コントロールルーム》

「…どうやらガーディアン達はこの部屋に私達を追い込みたかったようだな」

エレノアがそう視線を上げて言う。エレノアとミーシャの二人は巨大な部屋の中にいた。青白い明かりで照らされた部屋の中心には何やら巨大な物体が居座っている。その物体からは無数の触手が生え、不気味にうごめいていた。部屋の奥にはいくつもの宝箱が無造作に積んである。

「お前がこの遺跡の親玉か…！」

エレノアが言うとその物体はこう答えた。

「イカニモ。ワタシハココノシステムヲツカサドルマザーコンピューター…シンニユウシャハ、ハイジヨシマス…！」

巨大なマザーコンピューターの頭部が点滅すると背後から無数のガーディアン達が姿を現す。

「ちっ！数が多すぎる…やれるかミーシャ？」

「わからない…魔力がもつかどうかだね」

多数の敵を前に自分達が不利なのは明らかである。

「だがマザーを壊しちまえばこっちのもんだ！雑魚は私に任せて、お前はマザーを頼む！」

「了解…！」

エレノアはマシンガンでガーディアン達を牽制し、その間にミーシャが呪文を唱え攻撃の準備を整える。

「いくよ…ファイアエクスプロード！」

部屋の中で大規模な爆発が巻き起こりその衝撃でガーディアン達はこっぴみじんに吹き飛んだ！

「やったか！？」

エレノアはマシンガンの照準を逸らす…が、次の瞬間には煙の中から無数の触手が伸びてきて二人に巻き付いた！

「なっ!?!」

「きゃっ…!?!」

二人はそのまま触手に吊り上げられるように空中に持ち上げられてしまう。…目の前にはマザーコンピューターの姿があった。マザーはまるで無傷だ。

「なんでだ!? 確かに攻撃は命中したのに…!」

エレノアがそう言うとマザーが不気味な声で答えた。

「フフフ…シールドヲハツタノデスヨ。ザンネンデシタネ…シニナサイ!」

ギリギリギリギリ…

二人は触手にもの凄い力で締め付けられた!

「ぐあ…!」

「キャ…!」

二人は息ができない…気が遠くなるのを感じた。

しかし二人が気を失いかけたその時、誰かが二人の名前を呼ぶ。

「ノアちゃん! ミーちゃん!」

ブチブチイッ!!

部屋に飛び込んできたロゼッタの爪が二人を締め付けてる触手を引き裂いた! 二人はそのまま床に落下する。

「痛えっ!」

「痛い…!」

床に落ちた二人のもとへロゼッタが駆け寄る。

「二人とも大丈夫!?」

ロゼッタがそう聞くと、

「大丈夫なもんかよ!…まったく心配かけやがってコノヤロー!」

「…おかげで尻餅ついちゃったよ!」

エレノアとミーシャは頭やお尻を手で撫でながら言う。そんな二人の余裕そうな表情を見てロゼッタはホッと胸をなでおろした。

「二人は休んでてよ…後のことはわたしに任せて」

ロゼッタが言う。とエレノアがこう言った。

「一人でカツコつけてんじゃねえ…って言いたいところだけど正直、体中が痛くて動けそうもない…頼んだぜロゼ」

するとミーシャもこう言う。

「私も魔力を使い果たしちゃって…頑張ってるねロゼッタ」
申し訳なさそうな二人の言葉にロゼッタは笑顔で答えた。

「心配しないで。わたしが…絶対に二人を守るから」

二人に背を向けると目の前の巨大なマザーにロゼッタは歩み寄る。

「ナンダカヨクワカリマセンガ…サンニンマトメシニナサイ！」
マザーの触手が再び襲いかかってきた！

「こいつ！あなたの相手はわたしだよっ！！」

ズシヤア！

ザシユウツ！

ロゼッタは軽やかな身のこなしで向かってくるマザーの触手を片っ端から蹴散らす。そのままマザーの懐に突進しついにマザーの本体がロゼッタの爪の射程圏内に入った！

「終わりだよっ！！」

ロゼッタが右腕を素早く振り上げる。

「…ソレハドウデスカナ？」

…ガキインツ！

ロゼッタの爪は見えない壁に弾かれた。

「！！？？」

ビュッ！バシーン！！

次の瞬間、ロゼッタは鋭い触手の一撃を受け地面に叩きつけられた！硬い床に彼女の体が少しめり込む。

「ロゼ！大丈夫か！？」

「ロゼッタ…！」

エレノアとミーシャの二人が心配そうに叫ぶ。するとロゼッタはむくりと起き上がった。

「大丈夫、心配しないで…ちょっと鼻血が出ただけだから…」

そう言うと彼女は右手で鼻血を拭いた。ロゼッタの頑丈さは半端ではない、しかも痛点が鈍いのでこれくらいは平気なのである。しかし、マザーを切りつけた右手の爪は全てへし折れていた。

「ドウヤラアナタノマケノヨウデスネ…！」

そんなマザーの言葉に対してロゼッタはこう言った。

「…どうやら少し甘く見すぎてたみたいだね。わかったよ、だったら…こっちもそれなりに本気でいかせてもらうよ…！」

ロゼッタの目の色が変わった。瞳は赤みを増し巨大な真紅の翼が背中から生えてきた。彼女の体からは真紅の光が放たれ、異様な空気が辺りを包み込む。

「まさか機械相手にここまで魔力を使うとは思わなかったよ…さあ、どこからでもかかってきなこのポンコツ野郎！」

豹変したロゼッタが牙を剥き出しにしてそうマザーに吼える。もはやそこに可愛らしい少女の面影は無い、野生の本性を剥き出しにした猛獣の姿がそこにはあった。

「ホザキナサイ！」

マザーの触手がロゼッタに襲いかかった！

「ふん…無駄なことを！」

彼女の体から放たれる赤い光に触手が触れた瞬間、触手は粉々に砕け散る！

「?!」

驚きのあまりマザーは触手を引つ込める。

「貴様ごときがわたしに触れることなど不可能…機械め、力の差を知るがよい」

そう言い終わるか否かのうちにロゼッタは空中に飛び立った。そして左手に魔力を込めた赤い光の球を作り出す…！

「さあ、今度こそ終わりにしようかマザー？」

不敵な笑みを浮かべながらロゼッタがそう言う、まるでマザーを見下すように。

「チョウシニルナア！シールドガアルカギリワタシハムテキダアア！」

マザーも負けじとそう言うが、ロゼッタには何処吹く風だ。

「無敵？笑わせるなよ…わたしの前では無敵な奴など存在しないんだよっ！くたばれえっ！クリムゾン・バーン！」

ロゼッタは渾身の力で光の球をマザーに投げつけた！珠はシールドをいとも簡単に貫通しマザーに直撃する！その瞬間、辺りが閃光に包まれたと同時に凄まじい爆発が巻き起こり爆風と衝撃波で全てが吹き飛んだ！

「うわあっ！」

「…キヤア！」

あまりの爆風にエレノアとミーシャは壁際に吹き飛ばされてしまった。

「バ…カナ…ナ…ゼ…」

それがマザーの最期の言葉になった。爆発の後には何も残らない。

マザーが立っていたところの後ろの壁には大きな穴が空き、穴の奥に青空が見えていた。

「イテテ…大丈夫かミーシャ？」

「な…なんとか…」

エレノアとミーシャはそう互いの無事を確かめ合う。

「危うく味方に殺されるところだった…」

そうエレノアが呟くのも仕方ない。すると壁ぎわでひっくり返って

いる二人の所にいつもの雰囲気に戻ったロゼッタがやってきた。

「キヤハハ！みんな吹き飛ばしちゃった！わたしって凄くない？」

笑いながら言うロゼッタ。するとエレノアが怒りをこらえながら言った。

「お前…私達や宝物まで吹っ飛ばしやがって！少しは加減しろよっ！」

そう、砲撃のあまりの威力でマザーもろとも後ろにあった宝物まで全て吹き飛ばしてしまっていたのだ。これでは遺跡に来た意味がない。

「あれ？十分加減したつもりなだけだなあ？ごめんなちゃい！」

「…お前、ちつとも悪く思っただろ？」

反省の色が全く見られないロゼッタにエレノアがそう言う。

「てへっ！」

「てへっ…じゃねえっ！」

エレノアがどんなに怒っても吹き飛んだ宝物は戻ってはこないだろう。

「…ロゼッタ恐るべしだね」

ミーシャがそう静かに呟いた。

その後三人はロゼッタがブチ開けた横穴を通って外に出てみた。…

出てきたのは雲の下、つまりは山の途中の斜面だった。

「結局、いつもと変わらない景色の中に戻ってきちまったわけだ…」

エレノアが沁々と言った

「…やっぱり雲が頭の上にないと落ち着かないね」

ミーシャが嬉しそうに言った。

「山の中腹ぐらいだね…ここからなら半日歩けば町に帰れそうだな」
エレノアが目下に見える小さな町影を見て言う。どうやらマザーのいた部屋は頂上の遺跡の相当地下深くにあったようだ。

「これでちゃんとした夜ご飯が食べれるね！」

「…ばんざいだね」

ロゼッタとミーシャは顔を見合わせて笑う。もうみんなお腹ペコペ

コだ。すると町の方向を指差してエレノアが元気よくこう言った。
「よしっ！美味しい夜飯を目指して、下山開始だっ！！」

燦々と輝く太陽と青い空、そして流れる雲の下を三人は元気よく歩
きだす。いつもと変わらない平穏な風景がそこにはあるのです。

第十章 雲影の都・後編（後書き）

雲影の都・前編、後編、いかがでしたか？皆さんのおかげで十章まで執筆できました。今後ともよろしくお願い致します。それでは…
またお会いしましょう。

第十一章 コロシアン（前書き）

毎度ノスタルジアを読んでくださって誠にありがとうございます。さて、今回はミーシャが大活躍します。普段は地味な彼女ですが、今回はなかなかカッコいい場面もあるので最後まで楽しんで読んでくださいな。

第十一章 コロシム

《エフエクト本部》

「どーゆーことなのよティティス、ちゃんと説明しなさいよ！」
黒髪で短髪の若い女性が少し怒ったように言った。

「だから！大統領や将軍やジャックまでもが実は魔物だったって言うてんだろ？」

ティティスがそう言うつと、

「そうじゃなくて、どうして今まで私に内緒にしてたのそんな大事なこと！」

彼女はこんどは面と向かって怒る。

「それは…だつて姉さん口軽いし」

「なによ、私だつてそんなに軽くないわよ」

ティティスの説明に彼女はイマイチ納得のいかない様子。するとその横で話を聞いていた大男が仲介に入った。

「まあまあマーベラス殿、抑えて抑えて！」

「まったく…ベンケイもベンケイよ。興味本意とは言え、弟と二人して大統領と将軍の話盗み聞きするなんて。ま、おかげで魔物達の策略を事前に察知できたんだけど」

半ば呆れながらも、マーベラスは弟に一定の評価を示す。

「そうだろ姉さん？全ては俺とベンケイのおかげだつて！」

「調子に乗らないのティティス！…それで？これからどうするつもり？この事を知ってるのは私達三人だけなんでしょう？」

「そりゃあ、仲間を集めて大統領達を倒すしか…」

その言葉を聴いてマーベラスはため息をついた。

「はあ…やっぱり貴方達には任せられないわ。いい？まず政府内の誰が魔物なのかもわからないのにどう行動出来るの？」

「うっ…それは…」

ティティスは何も言い返せない。確かに全てはマーベラスの言う通りであった。まずこの信じられないような事実をどのくらい信じて良いのかも分からない、ましてや誰を信じて良いのかも分からないのだから。

「でしょ？まずは人間と魔物を見分ける方法を探すのが先決だと思うけれど？」

マーベラスがそう得意顔をして言う。するとベンケイが感心したようにこう言った。

「流石マーベラス殿！才色兼美ですなあ！」

「ティティスとベンケイが単純過ぎるだけだと思っけど？」

「それはあんまりでござるよマーベラス殿」

率直なマーベラスの感想にベンケイはがっくりと首をうなだれた。

「…で、俺らはどうすればいい？」

なんだか話が脱線しそうな雰囲気ティティスがそう聞き返す。

「ティティスは文献等で人間と魔物を見分ける方法を探してちょうだい。私とベンケイは赤い悪魔を見学しに行くから」

そうマーベラスが指示を飛ばす。マーベラスはマイペースではあるがリーダーシップには長けているから仲間内での信頼度は抜群であるから、この指示にメンバーが逆らうことはまずない。

「情報だと赤い悪魔達はバッドシティに向かっているらしい。…あそここのコロシラムのチャンピオンは確かエリーだったな、こいつは一騒動ありそうだ」

彼の言っているバッドシティには非法法の闘技場があつて誰でも気軽に参加でき、賞金目当てに様々な連中が集まってくる。エリーはお小遣い目当てとは言え、そのトーナメントの頂点に君臨しているのである。

「ま、そうゆうことで私達はバッドシティに行つて来るからね。…エレノアちゃんによるしく言っておくねティティス！」

マーベラスのその言葉にティティスは驚いた。エレノアのことにはベンケイにしか話していいはずなのに…。

「なっ?！どこからその情報を…ベンケイ、さてはお前!」
「すまぬ、ティティス…マーベラス殿にしてやられた…」
「ふふ、あまり私をなめないことねティティス」
「どうやら姉貴の勘はティティスの想像以上に鋭かったらしい。」
「姉さん…はあ…」

ティティスは恥ずかしそうにため息をついた。別に構わないのだから、彼女を意識していないと言えればそれもまた違ったから。

《バッドシティ》

ここはバッドシティ、通称『犯罪人の町』だ。治安は世界最低で、もちろん犯罪なんて日常茶飯事である。そんな危険な町中をちよつと変わった雰囲気の三人の少女達が歩いていた。

「なんだかボロくさい町だねえ…おまけになんだか恐そうな人達ばかりだし、こんな町のどこが楽しいのノアちゃん?」

赤い瞳の少女が頬を膨らませながら不満そうに言った。

「まさか、楽しいどころかむしろその逆だよ…だけどこうゆう町には金になる仕事があるからな、そんなに悪いもんでもないさ」
清閑な顔つきの少女がそう余裕の表情で答える。

「…どうやら政府に追われてる私達には都合がいい町だしね」
白髪の少女が他人事のように空を仰いだ。

「それで?本日のお仕事はなあにノアちゃん?」

ロゼッタがそう笑顔で切り返すと、

「ふふふ…コイツさ!」

エレノアは一枚のポスターを差し出した。

《バッドシティコロシウムバトル参加要項》

『ルール指定は特に無し。ただし、銃などの現代兵器は使用不可。予選を勝ち抜きチャンピオンに勝ったものには賞金百万円を渡す。』

…なお、命の保障はいたしかねます』

「私はナイフを使って戦えるからもちろん参戦するぜ！…お前らはどうするんだよ？」

エレノアがそう意気込みながら聞いた。

「わたしはもちろん参戦するよっ！」

ロゼツタが元気よく答えた。

「…私はパス」

その場のノリにそぐわないそんな答えをミーシャが興味無さげに言う。

「そうか？…まあ、開催日は明日だから気が変わったら言ってくれよ」

ちよつと意外だったミーシャの態度にエレノアは一瞬だけ動揺するが、まあ彼女らしいと言えはそうかも知れない。だからエレノアは参加を強制するようなことはしなかった。

「…うん」

ミーシャもエレノアの言葉に静かに頷いた。

「ハハハ、ミーちゃんらしいや。とにかく早くホテルに行こうよ！」

「わかったわかった！だから押すなって！」

だいぶせつかちなロゼツタに促されるように、三人の少女達は宿を探すことにしたのであった。

《ミーシャの決意》

その日の夜、三人はおんぼろ宿屋の一室にいた。

「ブー！なんでこんな薄汚いところしかないの〜！」

「文句言つなよロゼ！なんなら外で寝ようか？」

「うっ…それはさすがにやだなあ」

綺麗好きのロゼツタが文句を言うのも仕方ないが、こんな治安の悪

い町に綺麗な宿などあるわけが無い。

「文句言わないのロゼッタ。…私はちよつと本屋へ行つてくるけど夕食までには帰ってくる」

「気をつけるよミーシャ？外はもう暗いし…そうじゃなくても危ないんだから」

「…心配無用」

エレノアの言葉にミーシャは静かに頷き部屋から出て行った。狭い部屋とは言え一人いなくなると随分と寂しくなる。

「なあ、ロゼッタ」

二人だけの部屋でエレノアがロゼッタに尋ねた。

「ん？なあにノアちゃん？」

「今さらなんだけど、ミーシャって不思議な奴だよなって思つて…無口で恥ずかしやがり屋さんのクセになんか、こつ…妙にオーラがあるような感じが…」

エレノアから見たミーシャはとにかく不思議に見えるらしい。そんなエレノアに対してロゼッタが微笑みながらこつ言つた。

「確かにね、ミーちゃんは無口で恥ずかしやがり屋さんだよ。…でもね、何かを表現するのが苦手なだけで、本当はわたしたち以上に色々なことを考えているのかもしれないね」

珍しく真面目な答えを返したロゼッタにエレノアは少し驚いた。

「…お前、熱でもあるんじゃないか？」

エレノアがロゼッタのおでこに手を当てながら真顔で聞く。すると彼女ロゼッタはサラリとこつ答えた。

「残念、全くの平熱だよね」

その頃、ミーシャは本屋でお目当ての本を購入して宿屋へと帰る途中であった。

「ふふふ、ラスト・プレリウド…ようやく手に入れたよ」

ミーシャは嬉しそうにその本を抱えていた。傍から見ればどうみても怪しい人にしか見えないが。

「やめてください！」

「うるせえ！このガキ！」

そんな時、路地裏で誰かが言い争っているような声が聞こえてきた。
「なんだろう…？」

ミーシャは路地裏に行ってみることにした。基本は無関心な彼女もこの時は何故か珍しく行ってみようと思ったのである。

「オラこのガキ！さっさと金出しな！」

路地裏に行ってみると、どうやら小さな男の子が男にカツアゲされているようだった。

「あ、あの…」

恐る恐るミーシャが男に声をかけると、

「あんだてめえ！？お前も痛い目…」

「スタン！」

バチバチバチイツ！

「ギヤア！？」

男はミーシャの魔法で痺れて気絶してしまった。正当防衛と言えばそれまでだが、彼女のことだから最初からこうするつもりだったのだらう。

「今時カツアゲなんて流行らないのにね…」

ミーシャが淡々と言うと、その小さな男の子がミーシャの元へ駆け寄って来た。

「あ、ありがとうございます…おかげで助かりました。…あ、あの…お名前を聞いてもよろしいでしょうか？」

「ミーシャ」

小さな男の子に聞かれるがままにミーシャはそう答える。

「あの…ミーシャさん？もし、よろしければ家にいらっしゃってください。お礼…と言ってもお茶ぐらいしかだせませんが」

「わかった」

とゆうわけで、ミーシャは男の子の家にお邪魔することにした。本当は寄り道しないで早く買った本を読みたかったのだが、男の子の善意を無下に断るのも心が痛むから仕方ない。

「あ…申し遅れました。僕は、ヘンリーといいます。母さんと二人暮らします」

ヘンリーの家に向かう道中、二人は互いの自己紹介を兼ねて色々と話す。ミーシャは不思議そうにこう聞いた。

「ヘンリー、貴方は何歳なの？」

「僕ですか？十二才です」

「ホント、しっかりしてるねえ…私の相方達とは大違いだよ」

「…？」

しっかり者のヘンリーを見ていると何故かミーシャは本当に泣けてきた。この時ミーシャがついた大きなため息の意味をヘンリーが知るはずもないが。

「あつ、着きましたよ。ここが僕の家ですよ。どうぞあがってください」

案内された先にあった家はとても質素で小さな家だった。その家の中にミーシャは招き入れられる。

「ただいま母さん！今日はお客さんが来てるよ」

ヘンリーが呼びかけると、部屋の奥から声がした。

「おかえりヘンリー。すまないねえお客さん。何も無い家で…せめてゆっくりしていつてくださいな」

「…おかまいなく」

そう淡々とした口調でミーシャは応える。

「ミーシャさん、今、お茶いれますから座って待っててくださいね」
そう言って、ヘンリーは机に紅茶を持って来た。…それから、ミーシャとヘンリーは机に座ってお茶を飲みながらしばらく色々話していた。

「ミーシャさんは魔法使いなんですか？」

「…どうしてそう思うの？」

ヘンリーの質問に対してお茶を飲みながらそうミーシャは問う。

「だって、さつき魔法使ってたじゃないですか？」

「魔法を使っけていても魔法使いとは限らないよ…確かに私は魔法使
いだけどね」

するとヘンリーは何を思ったか、深呼吸してからミーシャにこう切
り出す。

「だったらお願いです！実は母さんは病気なんです…魔法で病気を
治してください！お願いします！」

もちろんそう言われても困る、ミーシャは黙ってしまった。今の自
分には病気を治せるような高等魔術を使えるだけの魔力はない。…
しかし、ミーシャはどうしてもこの子の力になってあげたかった。

「ごめん…それはできない。…魔法以外に治す方法はないの？」

「町の病院で手術を受ければ…でも、お金が…僕の稼ぎでは生活が
やっとで…」

「…」

それを聞いてミーシャは再び黙ってしまった。

「ごめんなさい…無理を言っけて。そうですね…魔法で病気が治せ
るなら医者はいりませんよね」

ヘンリーの目に大粒の涙が浮かんだ…。

宿への帰り道ミーシャはある決心をしていた。

「私は無力だ…だけど…必ずあの子の力にならなければ」

彼を助けて何を得るわけでもない。ただ、遙か昔に忘れてしま
っていた何かを取り戻せるような気がしたのである。

ミーシャは宿へ帰るとすぐに自分の考えを二人に告げた。

「自分勝手だっけてのはよくわかってる…だけど、それでもわたしは
ヘンリーの助けになりたい。私も精一杯頑張るから…お願い！一生
のお願いだから…！」

必死に懇願するミーシャの話をエレノアとロゼッタは黙って聴いて

いたが、とくに相談することも無く笑顔で意外な答えを返した。

「お前がそこまで言うなら…断わるわけにもいかないよな。まあ、人命第一だからな。百万円ぐらい安いもんだよ！」

「そうそう！友達にはちゃんと協力しないと！」

「みんな…ありがとう…！」

こうして、三人はコロシアムの賞金をヘンリーの母親の病気を治すための資金としてヘンリーに寄付することに決めたのであった。

「…とゆうことで、明日は絶対に負けられないね！戦いに備えて、今日もいっぱい食べてぐっすり寝るぞお〜！」

「お前はいつもそうだなー、少しは進歩しろよなロゼ」

ロゼッタの相変わらずの能天気な態度にエレノアは苦笑いする。

「そうだね〜！…でもノアちゃんの胸もちっとも進歩してないよね」

「クスクス…！」

「笑うなミーシャっ！」

エレノアは恥ずかしさのあまり顔を赤くしながらそう叫ぶ、これも相変わらずだ。

ミーシャが三人の絆の強さを感じた今日この頃であった。この時ミーシャはなんだかとても嬉しい気持ちになった…。

《コロシアム》

その次の日、三人は早速コロシアムの受付に立っていた。

「それではエレノア様、ロゼッタ様、ミーシャ様、三名一組のエントリーでよろしいですね？」

「はい！」

受付嬢の確認にロゼッタが元気よく答えた。エントリー後、特にやることもないので時間まで三人は控室で出番を待つことにする。強面の出場者達の中にあつて三人は確実に浮いていた。

「うわあ〜！みんな強そうだねえ〜！」

「何言つてんだか…お前ホントはちつともそんなこと思つてないだろロゼ」

とにかく戦えることに目を輝かせるロゼッタを横目にエレノアは苦笑いするしかない。

「まあ、予選はわたしがテキトーに片付けるからさあ、ノアちゃんとミーちゃんは決勝に向けて体力を温存しといてよ！」

「テキトーにやるって…相手が一人とは限らないんだぞ？」

エレノアがそう言つても、

「キャハハ！相手が何人でも同じだよ！敵は全てなぎ倒す…もちろん、死なない程度にね！」

鋭い牙を剥き出しにしてそうロゼッタは大笑いするだけ。

「うわー…あ、悪魔だ…」

ミーシャが思わずそう言つた。そしてロゼッタの言葉と殺気に控室の参加者達が青ざめたのは言うまでもないだろう。するとその時、三人を呼び出す放送が流れてきた

「…いよいよ第一回戦だな。予選は全部で三回あるから無駄な体力は使つなよ…って、お前らにとっては愚問か」

「そうそう！よし、がんばるぞー！」

「絶対に勝つ…待つててねヘンリー」

三人はそれぞれの思いを胸に、観客の声援が響き渡るバトルフィールドへと足を踏み入れる。

しかし…予選の結果はロゼッタの言う通りになったことは想像に難くないだろう。

《観客席》

予選終了後、コロシアムの観客席にマーベラスとベンケイの姿があった。

「…どう思うベンケイ？」

「何がでござるか？」

「赤い悪魔のことよ！あの赤髪の娘がそうみたいだけど…あの強さ、普通じゃないわ！…もっと凶悪な奴かと思ってたけど」

すっかり血飛沫で赤く染まったバトルフィールドを見つめながらマ
ーベラスが冷や汗混じりに言う。

「確かに…そうでござるな！なかなかのベツピンさんでござる！」

「そうゆうことじゃないでしょ！決勝戦はエリーとあの三人の戦い
…この勝負でエリーが人間か魔物かを見極めない！」

どうやらマーベラスはこの戦いで赤い悪魔の正体とエリーが魔物じ
やないことの証明の両方を確かめるつもりだったようだ。彼女の策
士ぶりには頭が下がる。

「しかしジャックが魔物であったようにエフェクト内にも果たして
魔物がいくついるのやら…エリーが人間であることを願うばかりで
ござるな」

ベンケイがそう神妙な面持ちで言った。

「そうね…ティティスによると、赤い悪魔には魔物と人間を区別で
きる能力があるみたい。今はそれに頼るしかないけど…いずれティ
ティスが方法を見つけ出すはず」

「そうなれば、誰が魔物かそうじゃないかがわかるはず。もしかす
るとエフェクト内…いや、政府内で人間と魔物が殺しあうことにな
るでござろうな」

「何にせよ、血を流す結果になるのは避けられない…か」

二人は複雑な気持ちで、観客席から誰もいないバトルフィールドを
見つめていた…。

《サンダー・レディ》

その頃、決勝戦前の控室で三人の少女が反省会も含めて何やら話し
ていた。

「まったく…あれほど手加減しろって言ったのに相手を全員病院送りにするとはどーゆーことだよロゼ！」

「だってさ〜面倒くさいんだもん！まあ、死人が出なかつただけありがたいと思わないとね」

さつきまで相手を容赦なく引き裂いたことなど微塵も気にしていない様子のロゼッタ。

「まあまあ……」

ミーシャが実はどうでも良さそうに場を宥める。実際に勝つたのだから他の事を云々議論するのは確かにこの場面においてはナンセンスだろう。

「そうだな…次はいよいよチャンピオンとの対決、気を引き締めていかないと」

エレノアがそう意気込みを語ったその時、係員が三人の元へやって来た。

「エレノア様、ロゼッタ様、ミーシャ様、決勝戦の準備が整いました。バトルフィールドへどうぞ」

係員に案内されるがまま、三人はバトルフィールドへと続く扉を開ける。バトルフィールドに現れた三人を、観客席いっぱいのお客達の大きな声援が迎えた。そしてフィールドの中央を挟んで反対側にはドレスを身にまとった金髪の女性が立つ。その手には黒くて長い鞭を持っていた。

「これはこれは、はじめまして…私、エリーと申しますのよ。予選ではずいぶんと派手にやっていたらしてましたねえ、赤い悪魔さん」
金髪のエリーと名乗る女性がそう挑発的な態度で言った。

「どうしてその名前を…！」

ロゼッタのことを知っていたエリーに驚いたエレノアが聞く。

「いい質問ですわね、トレジャーハンターさん。わたくしがエフェクトのメンバーと言えはわかるかしら？」

エレノアの問いにエリーは不敵な笑みを浮かべる。

「なんだと！？それじゃあお前は私達を…！」

「お察しの通り…貴女方を消させて頂きますことよ！」
エリーのその言葉と同時に闘技開始の合図がバトルフィールドに鳴り響く。

「まずはトレジャーハンターさん、貴方からですわっ！」

エリーの鋭い鞭の一撃がエレノアに襲いかかってきた！

「…っノアちゃん！」

とつさにロゼッタがエレノアの前に立ち塞がった…鞭が彼女の体に触れた瞬間、凄まじい電流が彼女を襲った！

バリバリバリバリッ！！

「ふぎゃあいやー！！」

閃光と聞いたことのないような電流音の後、ロゼッタはプスプスと煙をだしながらその場に倒れてしまった。

「ロゼー！！」

「…大丈夫！？」

「きゅー…」

エレノアとミーシャが慌てて声をかけ体を揺するが、どうやらロゼッタは完全に伸びてしまっているようだ。

「アハハ！言い忘れてましたけど、わたくし電気や雷を自由に操ることができますのよ。…うかつに近づくと人間なら簡単に感電死してしまいますわよ？」

エリーが得意気に高笑いしながらそう言い放つ。

「くそっ、いつたいなんだよあいつ！デンキウナギかよっ！？」

エレノアは頭を抱える。確かに迂闊には近づけない、ナイフを使った白兵戦は無理である。

「…こうなったら私達二人で戦うしかないね」

「だけど…どうやって近づくんだよ！？」

ミーシャにエレノアが尋ねると、

「近づけないんだったら…一定の距離をとって魔法で攻撃すればいい

い

そうミーシャが言い終わるか否かの間に、みるみる彼女の手の中で炎の球が形成されてゆく。

「！」

その様子にエリーは身構える。

「私達はここで負けるわけにはいかない…ファイア・ボム！！」

ミーシャの放った大きな炎の球がエリーに直撃、凄まじい炎がエリーの体を包み込んだ！

「やったか！？」

エレノアがガッツポーズする。しかし…火柱が収まった次の瞬間、なんと炎の中からエリーが現れた。

「とつさに電磁波のバリアを張ったつもりでしたのに…流石です、ドレスが少々こげてしまいましたよ？ただど遊びはおしまいですわよ！！喰らいなさい、ライトニングフラッシュュ！！」

エリーの体に瞬間的にチャージされた電気エネルギーから放たれる凄まじい光と電磁波が二人を容赦なく吹っ飛ばす！

「うわああー！！」

「キヤア！！」

吹っ飛ばされ地面に叩きつけられた二人はそのまま気を失ってしまった。

「さて…あとは止めをさすだけですわね」

気絶して無防備な二人に止めを刺すのは簡単なこと。しかし、エリーは戸惑った。

「大統領の命令とは言え…こんな普通の女の子達まで殺しているのです？これじゃあ、まるでただの殺人じゃありませんこと？」

その時、悩むエリーの耳に不気味な声が入ってきた。

「なるほど…同じエフェクトのメンバーでもレトロシティのモンスターとは違うわけだね」

エリーが驚いて振り向くと、目を覚ましたロゼッタがそこに立っていた。

「赤い悪魔！モンスターって…貴女いつたい何を言ってるのですか？まさか、わたくしの同僚に魔物がいるとでも？」

再び起き上がったロゼツタに驚きながらも、エリーはそう率直な疑問を投げ掛ける。

「まあ、そうゆうことだね。それより…あなた人間みたいだし、わたしの友達を殺さないでおいでくれたから…できるだけ優しく勝ちたいんだけど降参してくれないかなあ？」

「誰が降参するのですか！」

ロゼツタの傍若無人な態度にエリーが怒って言うと…

「…これでも？」

次の瞬間、エリーの視界からロゼツタが消えた。

「?!消えた…」

「…ここだよ」

気が付けば、ロゼツタはとても信じられない早業でエリーの背後から鋭い爪をエリーの首筋につきつけていた。

「降参するよね？」

「…完敗ですわ」

勝ち目が無いことを悟ったエリーはその場に膝を着く。それと同時に観客席から大きな歓声が巻き起こった。

《医務室》

「…ん…ここは…？」

エレノアが目を覚ますと、ロゼツタが嬉しそうに声をかけた。

「気がついたみたいだねノアちゃん！」

「ロゼ…ここは？」

「コロシウム内の医務室だよ。ノアちゃん、まる1日寝てたんだよ？」

「そうか…って！？決勝戦はどうなった！？エリーは？！…負けた

のか？」

思い出したかのようにエレノアが慌てて聞くと、

「ハハ、まさか！わたし達が負けるわけないでしょ？それにエリーも殺さずにすんだことだしね…ほら！このとおり優勝トロフィーも…そう言つて彼女は金色に輝く大きなトロフィーを見せてくれた。」

「そうか、勝つたんだな…よかった」

エレノアが安心したように言った。

「わたしは勝つたことよりもノアちゃんとミーちゃんが無事だったことが一番嬉しかったんだけどね」

「フフ、カツコつけやがってコノヤロー…それよりミーシャは？」

「ミーちゃんは…ヘンリーの救世主になるべく家に行ったよ」

ロゼッタは笑顔でそう言った。

《ヘンリーの家》

「本当になんとお礼を言つたらいいか…ミーシャ様には感謝の言葉しかありません」

ヘンリーの母親が深々と頭を下げて言った。

「本当にありがとうございます、ミーシャさん！これで母さんの病気も治ります。これは…ほんのお礼です、受け取ってください」

するとヘンリーは青い石を繋げて作った手作りのブレスレットをミーシャに手渡した。

「ありがとう…大事にするね。じゃあ私…もう行かなくちゃいけないから。さよなら…機会があったらまた会おうね」

夕焼けが作りだすオレンジの世界の中、ミーシャはヘンリーと母親に見送られながらエレノアとロゼッタの二人が待つ医務室へと戻つて行く。ミーシャの心には喜びと達成感に満ち溢れていた…。

「…なるほどね、こうゆうことでしたの。降参しといて正解でした

わね」

遠くからその一連の流れを見ていたエリーが言った。

「それより…さっき私が話した事についてどう思うのエリー？」

一緒にいたマーベラスがそう聞いた。

「どう思っつて…もちろんびっくりしましたわよ！それより、このわたくしを魔物と疑っていたのはあんまりじゃなくて？」

「まあまあエリー殿。疑いは晴れたことだしよいではないか」

ベンケイがエリーをなだめた。

「とにかく…大統領を敵にまわすわけで大事になるのは間違いないですわね。もつとも、魔物に世界を渡すわけにはいきませんことよ」

エリーが言った。

「エリーが仲間に加わってこっちも頼もしいわ！とりあえず…テイテイスが魔物と人間を見分けられる方法を見つけてからが本番になりそうね」

マーベラスが力強く言う。

未だかつて無い危機から世界を守りたい…エフェクトの三人はそんな決意を胸に夕日を眺めるのであった。

第十一章 コロシアン（後書き）

ノスタルジア第十一章コロシアン、いかがでしたか？複雑に絡み合う登場人物同士の思惑が所々に見え隠れしています。このお互いの駆け引きが最後にどのような結果を生み出すのか…それはまだ誰にも分からないのです。

第十二章 バイオレット・アイズ・レクイエム（前書き）

物語が進むにつれて謎が解き明かされて行く中で同時に新たな謎も生まれるはず。今後の展開にも注目してみてくださいね。今回はメインの三人はあまり活躍しませんが、ロゼッタの意外な弱点も書いてありますのでぜひ探してみてください。

第十二章 バイオレット・アイズ・レクイエム

月明かりに照らされた草原の真ん中にポツンと一軒の家が建っていた。そんな家の窓からは明かりと楽しそうな声が聞こえてくる。

「みてみて！ジョーカーが残ったよ！」

ロゼッタがランプのジョーカーを手に笑顔で言った。

「アホ！お前の負けだよっ！ばばぬきでジョーカーが残って喜ぶやつがいるか！」

「…まったく…ロゼッタってホントお気楽なんだから」

エレノアとミーシャが半ば呆れて言った。

「アハハ…でも不思議だよねえ。どうしてランプのジョーカーは二枚あるのに大抵のゲームでは一枚しか使わないんだろうね？」

ロゼッタが不思議そうに聞いた。

「そりゃあ…そう言えばなんでだろうな？」

エレノアが少し困った顔で言った。

「ジョーカーは切札…つまりは強力なカードだからね。一枚あれば十分なんだけど…なんでだろ、私にもわからないや」

ミーシャが静かに言った。

「もしかすると…光と闇、生と死、悪魔と天使…みたいにジョーカーもこの世の多くが対になって存在してるのと同じことなのかもね」
ロゼッタが珍しくそんな意味深な言葉を口にした。

「確かにジョーカーにもカラーとモノクロの二種類あるしな。てゆーかただの予備だったりして」

「あ、それはありえるかもね！」

そうやって変な形で納得しようとするロゼッタとエレノアにミーシャがこう突っ込む。

「そんな用意周到な…てゆーか、カード無くしたらジジヌキできないじゃん」

ドールハウスの中で三人はいつもとなんら変わらない、楽しい時間

を過ごしていた。

しかし、この時悪魔に対抗すべく創られた邪悪なる天使がまもなく完成されようとしていることを誰一人として知る者はいなかった。そう、『黒い天使』の誕生を…！

《秘密の研究所》

ここは共和国首都シランドの大統領官邸地下三階研究所…通称『オメガ計画』の本部である。

「どうだ？レクイエムの…スマイレの様子は？」

大統領が研究主任に聞いた。

「はい、順調でございますコロッサル様。外形はほぼ完成しましたが…目覚めさせるにはまだ時間がかかるかと」

「結構…今見ることはできるかね？」

「ええ、もちろん。こちらです」

大統領と研究主任は研究所の奥へと進んで行った一番奥の部屋には数台のコンピュータとそれを管理する研究者が数人いた。…そして部屋の中央にそれは存在していた。

「素晴らしい…！」

「そうでしょうか？こんなに美しい女性はそうそういないでしょうね」

「フッフ…完成が待ち遠しいばかりだ」

部屋の中央に置かれたカプセルの中には美しい女性が入っていた。

髪はアメジストのごとき紫色で、肌は雪のように白い。そして、透き通った二つの紫色の瞳が二人を見つめていた。

「ここまで成長させるのには苦勞しましたよ。だけど苦勞したかいはありません。おそらく彼女の破壊能力は神をも超えるでしょうから」

「神をも超えた存在か…これで人間共を滅ぼし、我々魔物の世界を新たに創ると言うわけだ」

「それよりコロツサル様、人間共は本当に我々の目論見を察知してはいないのでか？…ジャックの件もありますし」

「気にするな。知ったところで何ができる？私は大統領…言い換えれば国民全員が我々の人質と言うわけだ」

「しかし…エフェクトの人間のメンバーが何やら不穏な動きをしているようですが？」

「心配するな。エフェクトにはシャクマがおる。…地上のことは私とシユナウザー將軍に任せて、お前ら研究者はレクイエムの完成に努めていればよい」

「…わかつてます」

「ククク…人間共め。赤い悪魔もろともレクイエムの餌食になるがよい…フフ…フハハハハ！」

薄暗い研究所の中を不気味な笑い声が響き渡った…そしてその様子をスミレの紫色の瞳が静かに見ていたのだった。

《ファミレス会議》

ここはシランドのとあるファミレス。男女四人がドリンクバーをつまみに、何やら話し合っていた。

「まったく…このわたくしをこんな庶民の店に呼び出すなんてどうゆうつもりなんですのテイティス？」

エリーが不機嫌そうに言った。

「ふん。庶民の素晴らしさがわからん金持ちめ。安い！早い！美味しい！三拍子揃った庶民の味方なんだよファーストフードとファミレスは」

テイティスが言い返す。

「そんなことはどうでもいいでしょ？早く本題に入ろうよ」

マーベラスが二人に言った。

「マーベラス殿の言う通りでござる」

ベンケイが相槌をうつ。

「わかつてるよ…実は魔物と人間を見分ける方法が見つかったんだ」
「それで？どうゆう方法なのティティス？」

「焦るなよ姉さん、ちゃんと説明するから。…古い文献によると『
真実の鏡』ってのがあつてさ、それを使えば人間に化けた魔
物の正体を暴けるってことだ」

「じゃあ、その鏡を手に入れば問題解決ってわけですわね」

「そりゃそうなんだけど…実はその鏡がある場所ってのが西の大
陸周辺のどこからしんだ」

「西って…帝国領つてことござるか？」

「困つたわね、共和国の治安を守るのが仕事の私達が国を離れるわ
けにはいかないし…」

「それなら…わたくしにいい考えがありますことよ」

「どんな考えでござるエリー殿？」

「赤い悪魔とその仲間達に探してもらいましょ！いずれわたくし達
の仲間に加わつてもらおう予定でしたし…ここいらで少しは協力して
もらわないと」

「名案だわ！彼女達ならきつとやってくれるに違いないだろうしね」

「ち、ちよつと待てよ！確かに名案かもしれないけど…いくら強い
とは言え、彼女達三人で行かせるのはあまりに危険じゃ…大統領が
刺客を送り込むかも知れないし」

「うーん…確かにそうかもね。…よし！ティティス、あなたが一緒
に行きなさい」

「…は！？なんで俺なんだよ姉さん！？そんなこと言つたら姉さん
が行けよ！」

「何言つてんの！女の子三人だけじゃあ不安だから男のアンタが行
くの。それにアンタが一番仲良しじゃない。それとも何？姉さんの
言う事がきけないのかしら？」

「…こつこつうのつて脅迫つていいいますことよ」

「マーベラス殿…恐るべしでござる」

エリーもベンケイもその考え方自体には賛成である。当の本人であるティティスはしばらく考えた後にこう言った。

「…わかったよ、俺が行けばいいんだる俺が！」

「これで決定ね！大丈夫、国内のことは私達三人に任せておいてよ！だけど…シヤクマは信用できないから気をつけないとね」

「エフェクトのメンバーで大統領と一番親交があるのはシヤクマですし…これは何かありますことよ」

「奴も魔物である確率が高いでござるな」

エリーとベンケイがため息をつく。身内が敵側である可能性が残っているのは非常に厄介な問題ではあった。

「とにかくティティスは三人にことの全てを説明して、西に行つて鏡を探してきて。全てはそれからなんだから」

「はいはい。了解しましたよ…」

もうここまでするとしづしづだるうがなんだろうがティティスはただただ了承するしかない。

「それに…エレノアちゃんどうなったかもちゃんと連絡してよね！」

「は！？」

急にエレノアのことを指摘されてティティスはギョツとした。

「ティティス…こんな大事な時に異性に興味を持つなんてどうゆうおつもりなんですこと？」

「よかつたでござるなティティス！これでエレノアちゃん殿はお主のものでござるよ！」

エリーとベンケイが口を揃えて言う。

「姉さん…ホントはそっちが目的だったんじゃない？」

改めてマーベラス姉貴の偉大さを痛感したティティスであった。

草木も眠る午前二時…ドールハウスの明かりは消えることもなく、相変わらず室内はにぎやかだった。

「キヤハハ！見て見て！ハゲの人だよ！」

そう言つてロゼツタは百人一首の坊主の札を見せた。トランプに飽きた4人は百人一首を使って坊主めくりをしているところである。

「バカ、坊主めくりで坊主が出て喜ぶ奴があるか。てゆうかハゲ言うなつて…失礼な」

エレノアがツツコミを入れる。

「手札没収だね…」

ミーシャが淡々とそう言った。

「ありゃ？もうこんな時間か…全然気がつかなかった」

エレノアが時計を見ながら言った。

「ホントだ！時間がたつので早いねえ」

「…楽しいとなおさらだね」

ロゼツタとミーシャも時計を見てそう言う。

「そうだなあ…こうゆうのってアインシュタインの相対性理論って言うんだろ？」

「アイン…なにそれ？バ○殿様の新ネタ？」

「相対性理論…アインシュタインが創唱した特殊相対性理論と一般相対性理論との総称で…うんぬんかんぬん…」

「あなさ、ミーシャ…もう少しわかりやすく説明しろよ」

「わたし…頭がバクハツしそうかも」

「…ま、簡単に言つと…時間のたちかたはその時の状況によつて違つてことかな」

頭を抱えるエレノアとロゼツタにミーシャがそう言った。

「うーん…なんだかわかるようにならないような…」

エレノアにはどうもしっくりこない。

「それつてアレ？眠っている間が短く感じるみたいなの？目を瞑つて寝た…と思つてまた目を開いたらもう次の日の朝だもん」

「まあそんなイメージかな…？」

何となく理解はしているようなロゼッタにミーシャがそう苦笑いする。それから何を思い出したかのようにロゼッタがこんなことを話し始めた。

「でもね…封印されていた間はそうじゃなかったんだよ？とても暗くて…とても寒くて…とても怖くて…なにより寂しかった…もしかしたら永久にこのままなんじゃないかって考えてた。さすがにあの時はとても長い時間に感じたよ。だけど…今は二人が側にいてくれる。だから、たとえ何があってもわたしは二人との時間を大切にしたいんだ」

「ロゼ…お前…」

「…」

その台詞を聞いてエレノアとミーシャはとても複雑な気持ちになった。

「あ…でも心配しないでね！わたしは今のままが一番幸せなんだから！」

取り繕うようにロゼッタは笑顔でそう言った。

「幸せねえ…そうゆうのってよくわからねえや、私には」

「ウフフ、ノアちゃんの幸せって言ったらあ…胸が大きくなることと、ノーザングレイの時の男の子とエツチすることでしょ！」

「なっ！？だっ、誰がティティスなんかと…」

「へえ、あの子、ティティスって言うんだ！…結構いいカ・ン・ジ？みたいな！」

「ロゼ、お前なあ…ホントその手の話好きだな」

エレノアがそう引き気味に言う。なんだかめんどくさそうなロゼッタの絡みが始まった。

「あれえ？自分は興味無いみたいなこと言っちゃって！…ホントは毎晩オ〇ニーしちゃってるくせに！」

「なっ…！」

ロゼッタの急な下ネタ発言にエレノアはたまらず赤面する。

「はは、冗談だって！…もしかして凶星？」

「こっつ、この変態女！こうしてやるっ！！」

そう言うなりエレノアはロゼッタに掴み掛かると、その手を彼女の脇の下やお腹周りに配置する。そして絶妙のリズムと力加減でくすぐり始めた。

「えっ？な、なにを？…ギャハハハ！や、やめてっ！くすぐりたい…ギャハハハ！」

「くすぐり地獄で笑い死ぬがいいロゼ！」

「ギャハハハ！わ、わたしくすぐられるのニガテ…ギャハハハ！ごめんなさい！もう言わないから…ギャハハハ！ゼエ、ゼエ…し、死ぬ〜！ギャハハハ！も、もうやめて〜！ギャハハ！許してノアちゃん…ハハハハ！！」

白旗をあげるロゼッタだが、エレノアは容赦しない。

「オラオラ！次は脇の下だっ！覚悟しなっ！」

「そ、そんな〜！…ギャハハハ！わ、脇の下はやめれ〜！ギャハハハハハハハ！」

「怒ったり笑ったり…ホント忙しい二人組だねえ…」

ミーシャが苦笑いしながら言った。

結局その日の朝まで変態とツンデレと無関心による手に汗握る攻防が続くのであった。

第十二章 バイオレット・アイズ・レクイエム（後書き）

『レクイエムとは？』

通称『スミレ』、性別は女性。コロツサルらによって創られた人造人間である。現在、製作途中であるため詳細は不明。『オメガ計画』なるものの中心的存在である。想像を絶する力を持つと言われている。

第十三章 NEGOTIATION（前書き）

貴方は自分に自信はありますか？残念ながら僕にはありません。何故ならば、人間とは出来ることより出来ないことの方が多い生き物だからです。でも、そんな僕でも人の役に立つことは出来ると思うのです。個人にはそれぞれに自分の役目があるものです。その役目を自ら発見し磨きあげれば、きっと社会でも素晴らしい実績をあげられるでしょう。最近、いじめによる自殺が問題になっています。もちろん悪いのはいじめた側ですが、それでも僕は自殺者に一言こう言いたいです。『自ら可能性を捨てるようなことはするな』と。

第十三章 NEGOTIATION

青い海に浮かぶたくさんの船、青い空に浮かぶ白い雲：そして港に立ち寄った三人の目前を大型貨物船が通り過ぎていく。ここはラージポート、共和国最大の貿易港だ。

「大きな港だねえ！あの船はいつたい何処に行くんだろうか」

真紅の瞳と髪を持つ少女が楽しげに言う。

「きつと世界中に行くんだろうなあー！大海原の旅：憧れるんだよなあ」

ボーイツシユな少女は目を輝かせながら言った。

「あくなき探求心…ってやつだね」

まるで海のように青い瞳の少女が静かにそう言った。

「それよりあの手紙のこと…どう思うノアちゃん？」

「さあな、宛先は私宛になってるけど…差出人も書いてないし目的もわからない。用心した方がよさそうだな」

ロゼッタの質問にエレノアはそう答える。

「…それでも行くのエレノア？」

「まあ一応お願いされてるみたいだし、行かないわけにもいかんのだろ」

ミーシャが心配するのも無理はないが、律儀なエレノアを静止するのも難しいだろう。

エレノア宛の手紙が届いたのは3日前のこと。内容は『重大な仕事がある。ラージポートの港の四番倉庫にて待つ』とだけ書いてあった。正直なところエレノアはこの手紙の筆跡に見覚えがあった、だからこそこの場に赴いたのだが。

「アイツ、こんな堅苦しい文章を送りつけやがって。…って、何を期待してんだよ私は」

「どうかしたの、ノアちゃん？」

「別になんともねえよ。…さっさと四番倉庫にいくぞー！」

ロゼッタの問いにそうエレノアは答えをはぐらかした。エレノアは現段階ではどうやら手紙の相手をあまり知られたくないようである。三人の少女は港の中を倉庫を目指して歩きます。…十分後、特に何事も無くラージポート港四番倉庫に到着した。

「ここね…なんだか汚い倉庫だなあ」

ミーシャがそう言うように、人気が無いどころか埃の臭いが蔓延する酷い倉庫である。三人がそんな倉庫の中を何気なく見回していると…奥の方から何者かの声が三人に話しかけてきた。

「だいぶ遅かったね、待ちくたびれたよ。…それと久しぶりだなエレノア」

「ティティス！お前、こんなところで何やってんだよ！？」

粗方予想がついていたとは言え、やはり実際に会ってみると驚くものである。

「何言つてんだよ。わざわざお前らに会うために来たんだよ！…つて、そつちの二人は始めてだったね。俺はティティス、よろしくな」

「わたしロゼッタ、よろしくね！」

「…ミーシャだよ」

ロゼッタとミーシャも特にティティスを警戒する様子は無さそうだが、人生経験豊富な彼女達の勘がそう言っているのだろう。

「さて、自己紹介も済んだことだし…早速本題に入ろうと思うんだけどよろしいかな？」

「どうでもいいから早くしろよっ！…ったく、まどろっこしい！」

短気なエレノアはとにかく早く用件が知りたいらしい。もっとも、別の意味でちよつと興奮気味なのかも知れないが。

「ちえっ、やつぱり可愛くねえなエレノアは。物事には段取りつてもんがあるんだよ」

「可愛くなくて結構だっ！今すぐそのム力つく顔面に銃弾を打ち込んでやるつか！？」

「まあまあ！二人共落ち着いてよ！」

ロゼッタがそう笑顔で二人をなだめる。この中で一番ある意味恐い

彼女がそう言うのだから、それに従わざるを得ないだろう。

「ゴホン…それじゃあ本題と行きますか」

ティティスは事の真実を全て三人に話した。今の共和国には大統領等の重要ポストやエフェクトの中に魔物がいること、それを見破る鏡が帝国領にあること、『オメガ計画』について…等々、話を聞いた三人は驚きを隠せないようだった。もつとも、ロゼッタだけは多少冷静に聞いていたのだが…きっと彼女はそこら辺の事柄もある程度知っているのだろう。

「おいおいマジかよ…私達はそんなスケールの大きな危機に関わっちまってるのか？」

「そーゆーこと！大げさかもしれないけど人類の運命は俺達にかかっているってわけだ」

驚きを露にするロゼッタにティティスは意外なほど短絡的にそう告げる。正直、スケールが大き過ぎてティティスにもまだあまり世界云々の実感が湧いていないようである。

「お〜！なんかすごいことになってるみたいだねえ！…で、これからどうするのティーちゃん？」

「ティーちゃん？…もしかして俺のこと？」

「そーだよ！ティティスだからティーちゃん！」

ロゼッタが笑顔で言う、彼女はとりあえず友達には自分なりの呼び名を付けないと気が済まないようだ。

「よかつたなティティス、ロゼに可愛い名前をつけてもらって！」

「お茶ちゃん…？」

エレノアとミーシャはクスクス笑うしかない。

「…とにかく！俺と一緒に鏡を探しに行ってくれるのかくれはないのか、我々に協力するのかしないのか、ハッキリしてくれよ！…もちろん嫌ならいいけど」

ティティスが強い調子で言った。

「そんな急に決断なんかできないよ！とりあえず、三人で話し合っ
て決めたいから一日だけ待ってくれ」

人のいいエレノアでも、さすがにこれには二つ返事でOKなどできない。あまりにも都合が良すぎるし、何よりも仲間の命が掛かっているかも知れないのに。

「わかった…それじゃあ明日の正午にまたここで会うことにしよう。いい返事を待つてるぜ？」

そう言うと、ティティスは静かに港の方へと消えて行った。

「…とりあえず宿にもどるか」

「そーだねえ」

「うん…」

…夕暮れの中、三人は複雑な気持ちで宿への帰路についた。

《それぞれの思い》

その日の夜、三人の少女は今までになく真剣に話し合っていた。

「さて、はたしてこの計画に乗るべきか否か…お前らはどう思う？」

「わたし達がなんとかしないと世界が大変なことになるんでしょ？」

「だったらなんとかしないと…そもそもわたしが事の発端だし。でも、

最終決定はノアちゃんに任せるよ！わたし達のリーダーだもん！」

「…同感だね。まあ、私は貴女達についてきただけだから。正直、

世界の行く末なんかに興味無いし…だからエレノアに任せるよ」

ロゼッタとミーシャはそれぞれそう答える。エレノアはしばらく考

えてからこう言った。

「率直に言わしてもらおうけど…私もやっぱり世界は救いたいよ？世

界中を旅するのも私の長年の夢だったしな。だけど…」

そこでエレノアは黙り込んでしまった。

「だけど？…どうかしたのノアちゃん？」

ロゼッタが心配そうに、うつ向き加減のエレノアの顔を覗き込む。

「私は…私は無力だ。今までだって、戦闘において何の役にもたたなかった。お前達二人に、任せっきりに頼りっきりで…何もできな

かった。つまり…このまま一緒に旅する資格が私には無いんじゃないかって…そう時々思うんだ。だってそうだろ？私は足手まといなんだろ？…強がっていたって、所詮私は弱い存在なんだ…」

「エレノア…」

ミーシャが心配そうに言った。無理もない、エレノアが泣くのを見たのは二人共初めてだった。いつもはあれだけ強がっていても、心の中ではいつも不安や無力感に苛まれていたにきつと違いはない。あまりにも強くて格好良い二人に囲まれて、いざという時にはいつも助けてもらっている…そんな劣等感を感じていたのかも知れない。そんな時だった…ロゼッタがエレノアを優しく抱きしめた。そして優しくこう言う。

「…いい、ノアちゃん？確かに人間は無力だよ。人間なんて、出来ることより出来ないことの方が圧倒的に多いんだからね。だけどね、人間は自分自身にしか出来ない何かを必ず持っているものなんだよ？それが何かは自分自身で見つけるしかないけど…誰だって気持ちさえあれば必ず人の役に立てるんだ。…それはノアちゃんだって同じだよ。ノアちゃんにはノアちゃんにしか出来ないことがきつとあるはずなんだ。だから…他人と比べることはないと思うよ？自分に出来る精一杯の事をやればいいじゃない！完璧である必要なんてどこにもないんだよ。大事なのはお互いに助け合うこと…互いの長所を生かし合うことなんだ。わたし達だって、ノアちゃんに頼ってることが沢山あるんだから…強いとか弱いとか、役に立つとか立たないとか…そんなの気にしなくていいんだよ？…さ、もう泣かないで…涙を拭いていつもみたいに笑ってよ」

…ロゼッタのそのあまりにも優しい言葉にエレノアはゆっくり涙を拭いた。

「…ごめん…泣いたりして…もう泣かないよ…。私は…こんなに素晴らしい友達を持って、世界で一番の幸せ者だよ…！」

「そう言ってもらえてわたしもミーちゃんも幸せだよ！…それで？」

結局どうするリーダー？」

「…リーダーがすっかりしないと…私達はエレノアのこと誰よりも信じているんだから…！」

二人の言葉に、エレノアはすっかりとした口調で答えた。

「…決まってるんだろ！私達が世界を救わないで誰が救えるものか！」

《世界救済同盟》

…次の日の正午、四人は再び顔を合わせた。

「それで？話し合いの結果はどうなったんだ？」

ティティスが質問した。

「見ての通りだ。…私達はアンタらに協力することにしたよ」

エレノアが答えた。

「そうか…今更だけど本当にいいんだな？この旅は危険なもの…やめるなら今だぞ？」

ティティスが聞くところ…

「危険？おいおい、誰にももの言ってるんだ？私達に危険かどうかなんて関係ないんだよ！」

ちよつとくらは危険じゃないと面白くねえよ」

と、エレノアが笑顔で返した。

「キャハハ！さっすがノアちゃん！デンジャーだね！もちろんわたしはノアちゃんの行く所ならどこにでもついてくよ！」

ロゼッタがはしゃぎながら言った。

「…やれやれ…私が行かないと彼女達…暴走しそうだから…それに…二人の恋の行方も心配だしねえ…」

「コッ、コラ！ミーシャっ！」

「恋の行方？どうゆうことだよエレノア？」

「なっ、なんでもない！なんでもないって！！」

「…そんなに隠さなくてもいいのに…」

「うるさいミーシャ！」

「キヤハハ！ナイスキラーパスだねミーちゃん！」

「お前も黙れよっ！」

すると三人のやりとりを見ていたティティスが笑いながら言った。

「ハハハ！お前から本当に面白い奴らだな！…お前らにさっきの質問は愚問だったようだな。これで、はれて四人で旅することになったわけだが…改めてよろしく頼むぜ！」

「おう！世界救済同盟の誕生だな！」

「キヤハハ！なんだか楽しそ〜！みんなでがんばろうね！」

「…こちらこそ…どうぞよろしくお願いします…」

「さて、早速出発！…と、言いたいところだが、帝国行き定期船は明日の午後二時出航だから…まあそれまで準備なり観光なりして時間を潰しててよ！」

ティティスのその言葉にエレノアが呆れて言った。

「観光って言われてもなあ…あんまりそういうの興味ないし…」

「そんなこと言わないでさ！常連の俺が町を案内してやるからさ！」

「ホントに！？それなら行こうよ！ねっ！ノアちゃん！」

ロゼッタがいつになく必死に言った。

「べ、別にいいけど…どうしたんだ？そんなにムキになって…？」

「な、なんでもないよ！ホラ、わたしがテンション高いのはいつものことだし…」

「…お前…もしかして何か企んでないか？」

「い、いやだなあ、そんなこと考えてなんかいないよノアちゃん！」

「？ならいいけど…」

「アハ、アハハ…（た、助かったー！）」

ロゼッタはホッと胸をなでおろした。

「じゃあ決まりだな！午後一時半に中央広場の噴水前で待ち合わせ

とゆつことで！」

…ティティスと別れた後宿への帰り道でのこと。エレノアに気付かれないようにミーシャがロゼッタに話しかけた。

「ロゼッタ…あなた、いったい何を企んでるの…？」

「決まってるでしょ？ノアちゃんとティーちゃんを二人きりにさせてデートさせるんだよ！」

「…そんなことだと思った…で…どうやってデートさせるわけ…？」「えっ、え〜とお…どうしようか？」

「…ノープラン…あなたらしいわね…。…いいわ…口止料込みで千円で協力してあげるけど…どうかかな…？」

「うーん…愛はお金に変えられないか…よしっ！その話のつたよ！」

「…交渉成立…だね…」

…二人は密かに堅い握手をするのだった。

「お前らさつきからなにこそソコソやってんだ？」

エレノアの質問に二人は慌てて答えた。

「な、なんともないよ！ねっ！ミーちゃん！」

「…うん…ないよ…」

「??…変なの」

…この時エレノアは終始キツネにつままれたような気分だった。

《教会》

ここは町を一望できる教会の屋根の上。…そこにはスーツを着た一人の紳士がたたずんでいた。

「まさか赤い悪魔達とティティスが一緒にいるとは…大統領に報告しなくてはいけませんね…！とりあえずこの私をコケにした赤い悪魔への復習は後回しです。（詳しくは第四章を読んでね！）…ここは我々の計画を何故だか知っているであろうティティスを始末するのが先のようなですね…！人間共め…我々魔物の恐ろしさを知ってもらわなくてはいけませんね…！日没の瞬間…それがティティス、貴方の最期ですよ…！」

紳士は不気味な笑みを浮かべていた。

教会の周りを冷たく冷ややかな風が通り過ぎていくのだった…。

第十三章 NEGOTIATION（後書き）

さて、今回は『交渉』がテーマだったようですがいかがでしたか？
次回は切ない恋の物語と血湧き肉踊る戦いの物語が並行して進行するらしいですよ。

第十四章 隠された真実（前書き）

前作の続きのお話です。今回はちょっとしたラブストーリーと激しいバトルシーンが同時進行しますのでわかりづらい部分もあるかも知れませんが、じっくり読んでみてくださいと幸いです。

第十四章 隠された真実

「まったく…あの二人は何を考えてるんだか…約束の時間まであとちよつとだつてのによ！」

ここはラージポートの町の中央広場噴水前。約束の一時半を目前に、エレノアは一人ベンチに腰かけていた。…広場のあちこちで一般人に混ざつて何組かのカップルも見受けられた。

「まったく…公衆の面前でいちゃつくなよ！…見てることがちが恥ずかしいよ」

エレノアが呆れてそう言った。

思えば一時間前のこと…

「わたし達ちよつと用事があるから…時間までに待ち合わせ場所に来なかつたら先に行つてて！」

と言つて、ロゼとミーシャは私を宿に一人残して何処かに行つてしまった…どうせ大した用事ではあるまい…と思つていたが、今考えしてみるとどうも不自然だ。…そんなことを考えているうちにティティスがやつて来た。

「やあ！お待たせ！待つた？」

「全然。それより…なんでアロハシャツなんだよ…しかもサンダル…」

「ラフなのが俺流なの！お前だつてTシャツにジーンズなんて…せつかくのデートなんだからもう少し女の子らしい格好してもいいのに…」

「余計なお世話だつ！…つて、デ、デート！？な、なな、なんで！

「？」

「なんでって…お前から誘ってきたんじゃないか」

「は?!」

「さっき二人が…ロゼッタとミーシャが俺んとこきて言ってたぜ? お前が俺とデートしたがってるからデートしてやってってくれって」

エレノアはこの時初めて二人にハメられたことに気がついた。

「あ、あいつらあゝ!今度顔を会わせたら絶対ぶん殴ってやる!」

「相変わらず物騒な奴だなあ…。どうする?デートすんのやめる?」

「ふ、ふざけんなっ!ここまでできてやめられるかっ! (実は必死)

こうなったら思う存分デートを楽しんでやらあ! (実はデートすることがかなり嬉しい)」

「素直じゃないなあ。まあ、そうゆうところがお前らしくて好きなだけどね」

「すっ、すす、好きて言うなっ!は、はは、恥ずかしいっ!」

エレノアの顔はもう真っ赤だ。

「まあまあ落ち着いて!それよりどう?美味しいパフェでも食べに行かない?…ついでにぬいぐるみシヨップもね!」

「だっ、誰がそんな少女趣味な所なんか…絶対行くんだからっ!」

「結局行くんじゃない?それじゃあデート開始と行きますか!」

そう言っつてティティスは手を差し出した。

「?…なによ?」

「何って…手はつながなくていいの?」

「そっ、そんなことはしなくていいっ!恥ずかしい!」

「やっぱし素直じゃないなあエレノアは」

「っっ!」

そんな会話を交わしながら、二人は町中へと消えて行った…。

「…うまくいったみたいだね…!」

「キヤー!大成功!」

…建物の陰から一部始終を見ていた二人は大喜びしていた。

「…一時はどうなるかと思っただけど…エレノアが惚れっぽくて助かったよホント…」

「これからの展開が楽しみな二人ですなあ。…ミーちゃんは二人を尾行してデートの様子を見守っててね！どうやらわたしには他にやるべきことがあるみたいだから…！」

「…え…ちよつと…」

…ミーシャの言葉を聴く前にロゼッタは何処かに走り去ってしまった…。

「…なんだろう…やるべきことって…ロゼッタって結構謎多き人だよ…とりあえず…言われた通りにしようかな…」

ミーシャは二人を尾行しようとしたのだが…

「…何処に行っちゃったんだろうあの二人…見失っちゃったよ…私って運動オンチな上に方向オンチだからなあ…ロゼッタもどっか行っちゃったし…もしかして…私…置いてけぼり？…今回も出番無しなの？…はあ…なんとかしてよ…塚原さん…」

…ごめんよミーシャ！また今度になんとかしてあげるから！by作者

《デート》

「うーん！とろける…やっぱしパフェは美味いもんだなあ！」

「お前が甘党だったなんてホント意外だよ…やっぱしお前も女の子なんだよなあ」

「う、うるさいな…アンタのおごりなんだから遠慮なく食べないとな！」

「…そりゃないよエレノア」

二人はファミレスでパフェを食べていた。…エレノアは大好きなチョコレートパフェを前にご機嫌のようだ。

「もうちよつと落ち着いてたべろよエレノア！口の周りがチョコレートだらけだぞ」

「あ…ごめんごめん！あまりにも美味しいもんだから…」

エレノアが恥ずかしそうに笑った。

「パフェ食べ終わったら次は何処に行こうか？」

「そんなのティティスが決めていーよ！…お任せするからさー！」

「そーだなあ…基本的に計画立てんの苦手なんだよ…テキトーにぶらつきながら決めないか？」

「おっ！いいねえ！なんか面白そう！早くいこーぜ！」

「ちよつと待てつて！俺まだパフェ食い終わってないし…てゆーかお前食べるの速すぎ」

「あつ…ちよつとハリキリすぎたみたい…アハハ…」

…ムム…なかなかいい雰囲気ですねえ…う、うらやましい〜！by
作者

《シャクマの逆襲》

ここは町のはずれにある廃虚と化したとある工場…天井の無くなった巨大な倉庫の中で、スーツの男が刀を磨いていた。その刀は不気味に黒光していた…。

「…いつ見ても美しい刀身ですねアヌビス…お前も早く赤い悪魔を

斬りたいでしょう？…でもその前にティティスを斬らなくてはいい
ませんね。…アヌビス、頼りにしてますよ…！」

…その時、何者かがシャクマのいる倉庫へと足を踏み入れた。

「…やはり来ましたね？ずっとお待ちしてましたよ…！」

シャクマの視線の先には、真紅の髪と瞳をした少女が立っていた。

「久しぶりだねえシャクマ…！今日は何の用かな？」

「もちろん貴女への復讐…とりたいところですが、どうやら先に
裏切り者のティティスを殺さなくてはならないみたいなんですよ？

…もちろん、ここで見つかったからには…貴女を殺すのが先決のよ
うですが…！」

「裏切り者はそっちでしょう？…人間なんかの格好してないでいい
加減正体表せば？」

「どうやらお見通しのようですね…いいでしょう。私の本当の姿を
お見せしましょう…！」

…するとシャクマの体はドロドロに溶けだし、溶けた血肉の中から
浅黒い骸骨が姿を現した…！

「なるほど…ゾンビ使いの正体もゾンビってわけだね」

「フッフ…今回は地形の関係でゾンビ達は操れませんが…今の私に
は愛剣『アヌビスの剣』がありますから…！」

…シャクマの右手に握られた真つ黒な刀身の刀は邪悪な黒い光を放
つていた…！

「…嫌な感じの刀だね…悪いけど、二人のデートを邪魔させるわけ
にはいかないの…だから…さっさと消させてもらおうよ！死ねっ！フ
レア・レーザー…！」

ロゼッタの左手から放たれた高熱のレーザーがシャクマに襲いかか
った！

「無駄な事を…！」

そう言つてシャクマがアヌビスの剣をかざすと、不思議な力によつ
てレーザーはかき消された！

「！？」

「一つ言い忘れてましたが：アヌビスの剣には魔力を無効化する力があります。…つまり私に魔法の類は効かないというわけです！」
「…つまりわたしは爪と牙だけで闘わないといけないってわけか！」

ロゼッタが指の関節を鳴らしながら言った。

「今度はこちらから行きますよ！」

シャクマは猛スピードでロゼッタに斬りかかった！

「！？速いつ！」

「今までの私だと思ったら大間違いです！…喰らいなさい！ヘル・スラツシュ！」

黒い軌跡がロゼッタを襲った！ロゼッタはバックステップでかわすが、避けきれずに刀身がロゼッタの右肩を切り裂いた！

「ぐっ…！」

すかさず彼女はシャクマと一定の距離をとった。…傷口からは鮮血がしたたり落ちる。

「流石は赤い悪魔…紙一重のところでもかわしましたね…しかし避けてばかりではこの私は倒せませんよ？」

シャクマは余裕たつぷりに言い放った。

「…っ！調子に乗るなあっ！」

ロゼッタも負けじとシャクマに鋭い爪をふりかざした！

ガキイイッン！！！！

鋭い爪と刀がぶつかりあって火花が飛び散る！！

「フハハ！その程度の攻撃ではかすりもしませんよ！」

シャクマが刀を一振りすると、凄まじい剣圧でロゼッタは吹き飛ばされてしまった！

「うわあっ！」

ドガシャーン！！

ガラガラガラッ！！

そして近くに積んであった木箱の山に叩きつけられた！

「がっ…はあっ！」

苦しそうに咳き込む彼女にシャクマが歩みより、そしてこう言った。

「情けないですねえ！所詮、貴女もこの程度のものなんですよ！赤

い悪魔…いいえ…、本名…『ロゼリアーヌ・ブラッディコア』…！」

その名前を聞いた瞬間、彼女は驚きのあまりに一瞬、声を失った…！

「…どうして…！なんでその名前を…！」

…するとシャクマは不気味な笑みを浮かべながらこう答えた。

「ここに来るまでに貴女について色々調べさせてもらいましたねえ

…こつ見えて歴史には詳しいもので…貴女の過去の行いは全て知っ

ています。千年前に暴走して世界を破滅に追いやったことも、四聖

人によつて封印されたこともね…！まさかこんな小娘がそんなこと

をしていたなんて…俄には信じがたい話ですけどね」

…その時、シャクマの話聞きながらロゼッタは反撃の方法を考え

ていた

「（コイツがわたしの本当の名前を知ってるのは気に入らないけど

…今はどうやって倒すのかを考えるのが先だ…！コイツには…今の

姿のわたしの魔法は効かないし…かと言って中途半端な威力での爪

も歯が立たない…ならば…！）」

次の瞬間、ロゼッタは翼をひろげると空中に舞い上がった！そして

鋭い爪を構えたまま、シャクマめがけて急降下した！

「普通に斬りつけてダメでもこれならどうだ！」

「なるほど、急降下を利用して威力を上げようという考えですか…

なかなか良い考えではありませんね…！しかし所詮は無駄なことです…

！」

…すると突然、ロゼッタの視界からシャクマが消えた！

「…！、消えた！？」

その時、ロゼッタの頭の上で声がした…！

「ここですよ…！」
「!?!?」

ザシユウツ!!

ロゼツタは背中側から凄まじい力で斬りつけられた!飛び散った血液が夕焼けの空をより赤く染める…!

「うぎゃあつ!!」

…悲鳴と共にロゼツタは地面に墜落した。

「私には翼はありませんが…それでも空を飛ぶことぐらいはできますよ?…それにしてもタフですねえ…いい加減死んだらどうなんです?」

…シャクマが空中から言った。

「ヴアツ…ゲホツゲホツ…誰が死ぬかよつ…ゲホゲホツ…ハアハア…!」

ロゼツタは口から大量の血を吐きながら言った。

「そうですか…それならば死ぬまで攻撃するまでです…!」

…シャクマが不気味に言った…!

しかし…この時、ロゼツタは密かにある決心をしていたのだった。

「…もう少し…もう少しなんだ…そうすれば…!そう…わたしはコイツに勝てるんだ…!危険なのは承知だけど奴に勝つにはコレしかないんだ…。大丈夫…短時間ならちゃんと自分自身を制御できるはずだよ…!とにかく…それまではなんとか持ち堪えないと…頑張れわたし!」

…そうやって自分に言い聴かせるのであった。

ここは港に隣接した公園。太陽は地平線に沈みかけ、空には星々が輝き始めていた。そんな公園のベンチに、エメラルドグリーンの髪と瞳をした少女と、白髪で金色の瞳を持った少年が腰掛けていた。

「今日はなかなか楽しかったな」

ティティスが言った。

「うん。そうだね！」

エレノアが答えた。

「でもさ、よく考えたら俺達これからしばらくは一緒に旅するんだろ？…別に今日焦ってデートしなくてもよかった気がするのは俺だけだろうか？」

「ハハ！そりゃそうさ！これからしばらくは嫌でも毎日顔を会わせることになるんだから！」

二人はお互いに笑いながら言うのであった。…しばらくの沈黙の後、エレノアがティティスに戸惑いながら聞いた。

「…なあ…お前は私のこと…どう思ってるんだ？始めて会った時から色々助けてくれたし…べ、別に変な意味で聞いているわけじゃないからなっ！」

「うーん…どうなんだろうな？エレノアは俺のことどう思ってるんだ？」

その言葉にエレノアは顔を赤らめながら答えた。

「…そ、そりゃあ…お前は良い奴だと思ってるよ？…色々助けてくれたし…わ、私のことを女の子として見てくれた時はとても嬉しかったよ…！…ま、まあ…言ってみれば良き親友ってところかな…もう少し…特別な感情はある…かも知れないけどね…」

「やっぱり素直じゃないなあ…。…まあ、俺も似たような感じかな？正直、ストレートに言っちゃってもいいんだけど…とりあえずストーカーをなんとかしないとね！なあ、ミーシャ！そこにいるんだ」

るっ?」

「…ばれちゃったみたいだね…せつかく頑張つて尾行したのに…
…そう言いながらミーシャが近くの街灯の陰から出てきた。」

「…!? なっ!? ミーシャお前!!」

「…デートがうまくいくか心配で見守つてたつもりだったけど…
…なんだかいい感じじゃないエレノア…正直…ちょっとうらやましいよ」
「ハハ! だってさエレノア! …どうやら他人から見ると俺達お似合
いのカップルらしいぜ?」

「なっ、ななな…くそ…全部見られていたのか…は、恥ずかしい
よ〜!」

エレノアは真つ赤になった顔を手で覆い隠した。

「…それより…ロゼッタの姿がさつきから見えないの…心配だし…
…二人共一緒に捜してくれないかな…?」

ミーシャが心配そうに言った。

「お前ら一緒じゃなかったのか?!」

エレノアがびっくりして聞いた。

「…途中で何処かに行っちゃったの…私を置いてけぼりにして」

「…ちっ! あのトラブルメーカー! …しょうがない、ティティス、
お前も手伝え! ティティスとミーシャは二手に分かれて住宅街の方
を捜してくれ。…私は工場地帯を捜すから…!」

「…了解…」

「元気だねえあの娘。…こりゃ捜すのはちと骨が折れそうだな」

…とゆうわけで、三人は手分けしてロゼッタの捜索を開始した。

「なんだろう…なんだか嫌な予感がする…」

…工場地帯に向かう途中、エレノアは言い知れぬ不安に襲われた…。

月明かりの下でロゼッタとシャクマの死闘は続いていた。

「フフフ…さつきから避けてばかりですが…いい加減体力の限界のようですね…！」

シャクマが余裕の表情で言った。

「ハアー…ハアー…確かに…体力的にマズイねこりゃ…」

ロゼッタが息を切らしながら答えた。…彼女の体には無数の斬り傷が刻まれ、床には所々に彼女の血によつてできた血溜まりがあつた。
「そろそろ決着をつけたいのですが…死ぬ前に言い残すことはありますか？」

…シャクマのその問いにロゼッタが答えた。

「そうだね…そろそろ決着つけないとね…！…ところでシャクマ…悪魔って何だと思う？」

「？」

「悪魔ってのは実は元々天使だったんだよ？…だけど神に逆らつて地獄に追放された…つまりそれが悪魔の始まりさ。…そしてそれから悪魔は闇の世界でしか生きられなくなつたんだよつて話だそう
な」

「…一体何が言いたいのですか？」

…シャクマの問いにロゼッタは天を仰ぎながら答えた。

「…そう…悪魔は光のあるところでは本来の姿や力を発揮することは出来ない…だから太陽の光の消える夜こそ悪魔の本当の世界…わたしの世界なんだよ…。残念だったねシャクマ…昼間のうちにこのわたしを倒せなくて…おかげでやっと真の姿を現せるとゆうわけだな…！」

その瞬間、辺りを凄まじい魔力が包み込んだ。ロゼッタの赤い髪はみるみるうちに長く伸び、漆黒の黒髪へと変化した。…そしてロゼッタは少女から大人の美しい女性へと姿を変えた…！

「なっ…!? バカな…姿が変わっただと…!?」

…驚くシャクマに対してロゼツタは不気味に笑いながらこう言った。
「どう? わたしの本当の姿を見た感想は? なかなかのものでしょ? さあ…闘いの続きをやるうか…今度こそお前を地獄に送り届けてやる!」

彼女は長い黒髪をなびかせながら余裕の表情でそこに立っていた。

…より赤味を増した血のように鋭い真紅の瞳の眼光が、シャクマをじっと見つめていた…!

「ほざけ! 姿を変えただけで何が変わります? 貴女は私に殺される運命なんですよ! 死になさいっ!」

シャクマはロゼツタに向かって走り込み、アヌビスの剣を彼女めがけて振り下ろした!

…ガッ!

「…んなっ…!?」

アヌビスの剣の刃はロゼリアーヌの左手によって受け止められていた…!

「…こんな爪楊枝ぐらいじゃあ、このわたしは倒せないと思うけど…!」

…ロゼリアーヌは左手でアヌビスの剣を受け止めながら言った。

「さてさて…まずはこの剣をなんとかするとしますか…!」

ロゼリアーヌが左手に力を込めた瞬間…アヌビスの剣は粉々に砕け散ってしまった!

「…!?!?」

シャクマは驚きと恐怖のあまり後退った。

「ば、バカな…そんなバカな…!? アヌビスの剣が…超合金でできたアヌビスの剣を片手で粉碎するなんて…! それにこの邪悪な魔力は…これが…これが『赤い悪魔』の本当の姿なのですか!?!」

恐怖と驚きを隠せない様子のシャクマに、ロゼリアーヌは淡々と言

った。

「フフフ…いいねえ…その顔…そう、恐怖に満ちたその顔だよ…最高だ…それでこそ殺しがいがあるってものだよ…もつとも、魔物より人間を殺したいんだがな…人間の血の味は最高だからね…！嗚呼…殺したい…殺したいよ…何でもいいんだ…とにかく…殺したいんだよ…フフフ…フハハ…フハハハハハハハ！…」

…牙を剥き出しにして高笑いするロゼリアーヌには、もはやいつもの優しいロゼッタの面影は無かった。…それはまさに『悪魔』そのものだった…！

「…ロゼリアーヌ…いや…『赤い悪魔』…貴女は…貴女は…一体何者なんですか…?!…」

…シヤクマの質問に彼女はこう答えた。

「…さあねえ…とりあえず『虐殺者』とでも言っておこうかな？…それより…あんまり長い時間この姿でいると自我の…理性のコントロールができなくなっちゃうから…悪いけど…手早く息の根を止めさせてもらうよ…!!…」

ロゼリアーヌの左手の鋭い爪が赤い光を放ち始める…同時にその周りを邪悪な魔力が取り巻く…！

「ククク…肉片の一塊…血の一滴…魂の存在すら残させはしない…！地獄へ落ちろシヤクマ！喰らえっ！！我が必殺のヘルシングを…！！…」

ロゼリアーヌが左腕を振りかざした瞬間、凄まじい衝撃波がシヤクマを包み込み、全てを粉々に打ち砕いた…！…それはシヤクマの断末魔の悲鳴をも消し去ってしまった。そして…土ぼこりがおさまった後には何も残らなかった…。

「…終わつたね…」

闘いが終わり、元の赤髪の少女の姿に戻ったロゼッタは、そのまま床に仰向けに倒れてしまった。…彼女の目には美しい満天の星空が映っていた。

「ふう…疲れた…だいぶ派手にやられたし…この様子じゃあ2、3日は戦えそうにないなあ…」

ロゼッタはすでに回復が進行し始めている傷口に手をあてながら言った。

「…こんなことをしていると…時々自分が何者なのか…わからなくなる気がするよ…普段のわたしと、悪魔のわたし…どっちが本当のわたしなんだろう…？もしかすると…両方本物であって両方偽物なのかも…って、わけわからないや…もうすっかり夜も遅くなっちゃったし…みんな心配してるだろうなあ…ノアちゃんとティーちゃん…のデートの結果も気になるし…早く帰りたいんだけど…ダメだ…体が動かないよ…力と魔力をちょっと使い過ぎたかな…」

…ロゼッタがそんな独り言を呟いていると、自分と呼ぶ誰かの声がした。

「ロゼッタ！おい！大丈夫か！？大きな音がしたから来てみたけど…一体何があったんだよ！？」

慌ててエレノアはロゼッタに駆け寄り、彼女の上半身を抱き寄せた。

「…ノアちゃん…よかった…やっぱし来てくれたんだね？」

「バカ！心配ばかりかけやがって！…私達がどれだけ心配したのかわかってんのか？」

「ごめんね…でもわたし…シャクマを…悪い魔物をちゃんとやっつけたんだよ？すごいでしょ？」

「やっつけたって…こんなキズだらけになっただけ…どうして私達に助けを求めなかったんだよ！？」

「だって…ノアちゃん達デート中だったし…キズつくのはわたし一人で十分だから…」

「バカ野郎！一人でなんでもかんでも背負うんじゃないやねえっ！次からはちゃんと私達にも相談しろ！…デートなんかよりお前の方がよっぽど大事なんだからよ…」

…エレノアの言葉にロゼッタは嬉しそうに答えた。

「うん…ありがとう…！次からはちゃんと気をつけるよ！…それより…わたしのことが大事なら一つ頼んでもいい？」

「ん？なんだよ？」

「わたし疲れちゃって歩けそうもないから…オンプしてくれない？できればお姫様抱っこがいいんだけど」

「そんなことできるか！…普通にオンプするから」

…とゆうことで、とりあえずエレノアはロゼッタをおぶって帰るところにしたのであった。…二人の帰り道を月と星々の光が明るく照らしてくれた（もちろん街灯も）。

「ノアちゃんの背中…暖かくて気持ちいいね…」

エレノアの背中におぶられたロゼッタが気持ちよさそうに言った。

「変なこと言うなよ。私は湯たんぽかい」

エレノアが冗談混じりに言った。

「…ノアちゃんって…実はとっても優しいんだよね…ノアちゃんのそうゆうところが…わたしは好きだよ…！」

「な、なんだよ急に…よせやい、照れくさいから…」

「ウフフ、せっかく誉めてるんだから素直に喜べばいいのに…それより…ノアちゃん、ちよつと上を見てみてよ」

「上…？」

エレノアが空を見ると、夜空には光の帯が流れていた。

「これは…天の川？」

「そうだよ？…とつても綺麗でしょ？ミルクをこぼしたようにも見えることから、英名を『ミルキー・ウェイ』っていうんだよ！」

「へえー、そうなんだ！お前、意外と物知りなんだなあロゼ！」

エレノアが感心しながら言った。

「天の川はね…実は小さな星々の光が沢山集まったものなんだよ？…一つ一つは小さな光にすぎないけれど、沢山集まればこんなにも明るく輝けるんだよ。…人間だつてきつと同じことだと思うよ。みんなで力を合わせれば、きつとどんなことでも成し遂げられるんだ」

…

「…お前…いつからそんなに博識になった？」

エレノアが驚きながら聞くと…

「えへへ…実は大昔に人に聞いたことをそのまま話したただけなの」

「なんだよそりゃ。何処かで頭でも打ったのかと思っただよ！」

「それよりノアちゃん？…デートは結局どうなったのかな？」

「そうだなあ…お前はどうなったと思うロゼ？」

「そりゃもちろん…どうなったの？ちゃんと教えてよ〜！」

「それはね…ヒ・ミ・ツ…さ！」

「も〜！ノアちゃんのドケチ〜！」

「いいじゃねえか！人間誰しも秘密にしたいことぐらいあるんだよ
！」

「…秘密にしたいこと…か…」

…急に元気の無くなったロゼツタにエレノアが心配そうに聞いた。

「ど、どうした？気分でも悪いのか？」

「え…うつん。なんともないよ！…なんだか眠くなってきちゃった
よ」

ロゼツタがいつもの調子で返した。

「そうだなあ、私もなんだか眠くなってきたよ。お互い、今日一日
何かと忙しかったみたいだからな」

「…」

…返事はない。

「…ロゼ？」

「…スー…スー…」

…返事の変わりに可愛い寝息が聞こえてきた。

「おいおい…まったくしょうがないやつだなあ……いったい…コイ
ツはどんな夢をみているのだろうか…？」

そんな事を考えながら、エレノアは天を仰いだ。…そして、天の川
に向かってこう呟いた。

「…いつか…いつの日かロゼッタが闘う必要の無くなる日が来ます
オシム」

第十四章 隠された真実（後書き）

かなり長めのお話になっていましたがいかがでしたか？文章にはハッキリとは書かれていませんが、エレノアとロゼッタの心情はわかりました？ぜひ、考えてみてください。…それでは、次回でまたお会いしましょう！

第十五章 新たなる旅路（前書き）

東の大陸を舞台とした共和国編でエレノア達旅の仲間も四人になり、いよいよここからは西の大陸を舞台とした帝国編となります。この章の前後で、ロゼッタの秘密解明に大きな進展がありますので注意して読んでみてください。きっとロゼッタと周辺の人間関係が多少見えてくると思います。彼女の秘密全てを知りたい人は…とりあえず最終回までお付き合いくださいね。

…それでは、ノスタルジア第十五章新たなる旅路をどうぞ最後までお楽しみください！

第十五章 新たなる旅路

「う、うえ〜…き、気持ち悪いよ〜…」

…ロゼツタが真つ青な顔で言った。

「おいおい大丈夫か？…まだ船に乗ってから十分しか経ってないぞ？ハア…ホントにこんな調子で大丈夫かなあ…？」

エレノアがロゼツタの背中をさすりながら心配そうに言った。

ここは共和国と帝国を結ぶ唯一の定期連絡船、『サカマタ号』の甲板。船酔いしたロゼツタを介護するためエレノアは潮風にあたりながら彼女の背中をさすってやっていた。

「うう…昨晩はキズだらけになったと思ったら今度は気持ち悪くなるし…さ、最悪だ…うええ…」

「まいったなあ…酔い止めの薬も無いし…今ミーシャが船のフロントに行つて探して来てくれるけど」

するとそこへ缶チューハイ片手に白髪の少年がやってきた。

「いやあ〜、シャクマを倒したスーパー少女も船酔いにはお手上げつて感じだな？」

「少しはロゼを心配しろよティティス！てゆうかなに酒飲んでんだよー！」

「だって俺、お酒大好き人間だもん」

「…そーゆう問題じゃねえっ！」

「…やれやれ…相変わらず仲良しなんだから…はい、酔い止めの薬…もらってきたよ…」

フロントからミーシャが戻ってきた。

「ほら、ロゼ。…これだけでいぶ楽になるはずだから」

エレノアはロゼツタに薬を飲ませると、寝かせるために自分達の部屋へと連れて行った。…甲板にはミーシャとティティスの二人だけが残された。

「…ロゼツタ…大丈夫かな…」

ミーシャが心配そうに言った。

「大丈夫だろ？彼女、赤い悪魔だし」

テイテイスが言った。

「…貴方…新入りのくせに知った口きかないですよ…ロゼツタは…普段は明るく振る舞っているように見えるけど…ここにいる誰よりも辛い過去を持つてる…私にはわかるの…彼女が自分の過去から逃げる為にあえて明るく振る舞っていることも…自分自身の力に恐怖を持っていることも…だから…今度そんなこと言ったら…私は間違い無く貴方を殺す…！」

…テイテイスはその時始めて、自分が言っではならないことを言っ
てしまったことに気がついた。

「ご、ごめん…なんとお詫びすればよいのやら…」

「…わかればいいのよ…それにしても…ホント…いい天気だね」

テイテイスが謝ると、ミーシャはいつもの口調に戻っていた。

「ホントだなあー。まさに酒日和だな」

テイテイスが空を仰ぎながら言った。…雲一つ無い青空に太陽が燦々と輝いていた。

「…貴方…まだお酒持つてる…？」

ミーシャがテイテイスに聞いた。

「あと一本あるけど…飲むの？」

「…なんだか飲みたくなっちゃった…私が飲んだらおかしい…？」

「おかしかないけど…お前、未成年だろ？…かとう俺も人のこと
言えないけどな」

「…私は200歳だよ…？…貴方の親御さんより年上なんだから」

「200歳！？…の割にはずいぶん若いなお前」

「…別に若作りしてるわけじゃないから…」

そんな不思議な会話をしながら暫し酒を酌み交した二人であった…。

《船内宿泊部屋》

「わあーい！カモメだカモメだ！カッワイ〜！！」

その頃、四人の宿泊部屋ではロゼッタが部屋の窓から外を見てはしゃいでいた。

「薬を飲んだ瞬間元気になりやがって…いつもながらホント単純なやつ…」

エレノアが呆れてそう言った。

「ねえねえ！これからの予定はどうなってるの？」

「さあ？ティティスから説明されるはずだけど」

ちょうどその時、部屋にティティスとミーシャが戻ってきた。

「あつ！ティーちゃんとミーちゃんだ！」

「よっ！すっかり元気になったみたいだなロゼッタ！」

「…回復早っ…！」

「ちょうどよかった。四人揃ったことだし…ティティス、今後の予定について説明してくれないか？」

エレノアが言った。

「りょーかいエレノア！要点をまとめて説明するとだな…」

ティティスの話はこうだった。

帝国までは一週間の船旅となる。サカマタ号は途中、『ジパング』という小さな島国に物資補給のために3日程停泊する。その間にジパングで、旅に必要な物資の調達や『真実の鏡』についての情報収集をする…という寸法だ。

「…いいか？改めて言うておくけど…油断は禁物だからな。共和国と帝国は現在戦争こそしてないが軍備拡大に力を注いでいる…まあ

俗に言う冷戦つてやつだ。スパイに間違われたら即死刑だからな。
…おまけにジパングではヤクザ者がはびこってるときた…絶対に油断するなよ!」
「はぁーい!」
「そんなことはちゃんとわかってんよ!」
「…私…別に戦争とか興味ないんだよねー!」
三人の返事を聞いてティティスは思わずこっぴどい。咳いた。
「…俺…今、人生で一番不安かも…」

《大統領の部屋》

「…そうか…赤い悪魔達は帝国に向かったか…」
「はい、大統領…いかがなさいますか?」
「…随時、刺客を送りこめシユナウザー將軍。赤い悪魔達の始末は全てお前に任せる。…私は『オメガ計画』の調整に忙しいのでな」
「…承知しました。…それともう一つ良くない報告があります」
「なんだ?」
「…シャクマが…ラージポートにて何者かに殺られました…あれ程の実力者を殺れるのはやはり赤い悪魔だけかと…」
「フフフ…そうか…あのシャクマを倒すとは…ついに本気を出したな赤い悪魔のやつめ。」
「…ずいぶんと嬉しそうですね閣下」
「そりゃそうさ…まるで自分の娘が勝ったような気分だよ…!」
「…はぁ…?」
「フフフ…今後どんな展開になるか楽しみだよ、人造人間口ゼリア

「又…旧式の分際で果たして最新式人間レクイエムに勝てるかな…？フフフ…フハハハハ！」

シユナウザーにはコロツサルが嬉しそうにしている意味が理解できなかった。そう…コロツサルの過去を…その笑いの意味を知る者は現在にただ一人しかいないのだから…！

《四人の自己紹介》

…空と海がオレンジ色に染まる頃、四人は部屋で暇をもてあましていた。

「あーあ…ヒマだなあ…ノアちゃん、なんか面白いことないの？」

「別にねえよ…この部屋、テレビもラジオも無いし…」

四人の泊まる部屋は船内で一番安い部屋だったが、ベッドだけはちゃんと3つあった。(あれ？一個足りない…)

「もう酒も無いしな」

「…」

するとロゼッタが思いついたようにこう言った。

「そうだ！ねえねえ！四人で自己紹介しあわない？お互い知らないこともたくさんあるし…新しい発見もあると思うんだ！どう？やらない？」

「おっ！なんか面白そうじゃん！やろうぜ！」

「確かに俺エレノア意外とはあんまり話したこと無いしな…仲良く

なるいい機会かもな！」

「…暇つぶしにはもってこい…だね」

…とゆうわけで、四人はそれぞれ改めて自己紹介することにした。

「じゃあ、まずはわたしから〜！わたしはロゼッタ！女の子です！趣味は美味しい物を食べることに、体を動かすことです！どうぞよろしくおねがいします！」

その後、続いてエレノアが自己紹介を始める。

「私はエレノア。年は17歳。職業はトレジャーハンターで、特技は…一応銃の速撃ちだ。趣味は…りよ、料理なんだ…よろしく」「チャームポイントは微乳だよね」

「誰が微乳だっ！」

ロゼッタのボケにエレノアが突っ込む。

「ハハハ、やっぱしお前ら面白いなあー。俺はティティス、18だ。趣味はパソコン、特技はゲームかな？」

「ティーちゃんってオタクなの？」

「んー…まあ、そうゆうことになるかなあ？」

「じゃあお前のあだ名オタクなティティス！」

「うるさい！この凶暴女！」

「なによ！アロハシャツのくせに！」

「ガサツ！」

「デリカシーゼロ！」

「…あ、あの…」

…ミーシャが二人の間に割り込む。

「…私のこと…忘れないでよう…」

「あ…ごめんごめん！ささっ！自己紹介どうぞ！」

「…ミーシャです…職業は…魔法使い…かな…？…200歳です…趣味は…読書で…特技は…やっぱし魔法…かな？…ど、どうぞよろしくおねがいます…」

「さて…これで全員終わったな…次はなんの話題にするか？」
ティティスが言った。

「じゃあさ、それぞれ始めて会った時の第一印象とかは？」

ロゼッタが言った。

「お前そうゆうことに関しては天才的だな。じゃあまずお前から話せよロゼッタ！」

エレノアがロゼッタを誉めながら言った。

「わかった〜！うーんとねえ…とりあえずノアちゃんは、最初は男の子だと思ったね。ミーちゃんは無口だなあって思ってた…ティーちゃんはカツコイイって思ってたね！」

ロゼッタが言った。

「そうだなあ…私も初めてロゼに会った時は驚いたなあ！なんてバカなやつだらうって思ったよ。ミーシャはやつぱしロゼと同じで無口なやつだなあって思ってたな。ティティスは…ちよつと変わったやつだと思ったな」

エレノアが笑いながら言った。

「俺は…エレノアはボーイッシュなやつだとは思ってたな。ロゼッタはお気楽でミーシャは寡黙だと思ってたぜ？」

ティティスが言った。

「…私は…エレノアは男…ロゼッタはバカ…ティティスは私と髪の色が同じでキヤラ被るからウザイって思ってたね…もちろん…今は違うけどね…」

ミーシャが淡々とそう言った。

「そりゃないだろミーシャ！…てゆーかみんな私のこと男々って言い過ぎっ！…そうだ、ついでに…一つ気になつてたんだが…お前のそのネックレスはなんなんだロゼ？初めて会った時からずっとつけてるけど…？」

エレノアはロゼッタの首にかかっている小さな赤い石が一つだけだったシンプルなネックレスを指さしながら言った。

「ああ…これはね…大昔に大切な人からもらった御守りだよ…わたしの命と同じぐらい大事なものなんだ…！」

ロゼッタはネックレスを握り締めながら笑顔で答えた…でも、その

笑顔はどこか悲しげだった…。

「ふーん…そうなんだ…」

その様子を見たエレノアは、あえてそれ以上言及しなかった。…彼女のつらかったであろう過去の記憶をこれ以上思い出させたくはなかったからだ。

「…そうだ！ノアちゃん！わたしも一つ気になってことがあるの！」「ん、なんだ？…どうして私の胸が小さいの？…のはなしだからなっ！」

「ちがうって！…この部屋…ベッド3つしかないけど……どうするの？」

「そんなの決まってるだろ？…一人が床で寝るのさ」

エレノアがティティスの方を見ながら言った。

「は！？俺！？」

「当たり前だろーが！それともお前は女の子に床で寝ろってのか？」

「うう…わかったよ…床で寝ますよっ」

「キヤハハ！ノアちゃんそんなこと言わないでさあ、一緒にベッドで寝ればいいじゃんティーちゃんと！…見て見ぬふりしといてあげるからさっ！」

「！！？な、なな…なんてこと言うんだよロゼっ！…！！！」

「あつ、それ名案かも」

「お前も悪のりすんなっティティス！！！」

「…それより…ゴハンまだかなあ…腹減ったなあー…」

その後、夜が更けるまで四人の楽しそうな会話が途切れることはなかった…。

ここはシラント郊外のとあるアパートの一室。マーベラスがファッシュン雑誌を読みながらくつろいでいた。

「退屈ねー…いつもならティティスがいるからそんなことないんだけど…アイツは今それどころじゃないし」

…マーベラスは写真立ての写真を手にとった。そこには幼い頃のマーベラスとティティスが写っていた。

「…なんだかアイツもすっかりたくましくなっちゃって…私ももっと頑張らないとね！」

そんなことを言いつつ、マーベラスはパソコンに向かった。

「あれ？ティティスからメールきてる！なんだろう？」

…メールはティティスがラージポートのインターネットカフェから送信したものだ。文面の最初には、パソコンを持ち歩いていないうえに海上では、ケータイの電波が通じないから当分は連絡がとれないと書いてあった。…その後には、赤い悪魔がシャクマを返り打ちにしたことについて綴られていた。

「そっか…シャクマもモンスターだったんだ…明日みんなに報告しないといけないなあ…」

その時マーベラスはふと、窓の外に目をやった。…空には明るい大きな丸い月が浮かんでいた。

「ティティス…お願いだから…無事に帰ってきてよね…」

…マーベラスは月にそう願わずにはいられなかった…。

…ここは明け方のサカマタ号甲板。エメラルドグリーンの髪をなびかせた少女が一人ぼつんと明け方の海と空を眺めていた。清みきった空気が、辺り一面を包み込んでいた。

「なんだか珍しく一人だけ早起きしちゃったな。…それにしても…朝の海と空がこんなにも綺麗だったなんて…！」

朝の潮風が、彼女の短い髪を優しく撫でた。

「いったいこれからどんな旅が待っているのか不安だけど…それ以上ワクワクするんだよなあ…！私はもっというんな世界を見たい…！いろんな人々に出会いたい…！そうやってもっとう自分を成長させたいんだ…！今日もまた一日が始まる…！太陽が昇る限り…！大切な人達がいる限り私の旅は終わらない…！」

…朝の優しい光がエレノアを照らす。彼女のエメラルドグリーンの瞳は太陽の光を受けて宝石のようにキラキラと輝いていた。そう、それは紛れもなく彼女自身の『希望の光』に他ならなかった…！

第十五章 新たなる旅路（後書き）

キャラクター紹介

ティティス

性別：男

年齢：18歳

身長：173cm

髪の色：ホワイト

目の色：ゴールド

趣味・特技：パソコン等

エフェクトのメンバーで氷や冷気を自在に操ることができる。面倒くさがりやでデリカシーゼロだが、やる時にはやる。ビジュアル的には、かなりカッコイイ。四人の中では意外にも一番の常識人でもある。しかし、意外と優柔不断なところもあつたりする。

第十六章 ジパンク（前書き）

な、ななな、なんと！普段は仲良しのある人達がケンカを！…とゆうのが今回の物語です。みなさんはケンカをしたことはありますか？たとえケンカをしてしまったとしてもそれをお互いに許し合えるのが真の友達だと僕は思います。…とまあ、難しい話はさておき、どうぞ最後までお楽しみください！

ちなみに最後の英文もぜひ訳してみてくださいね（ちょっと難しいかな？）

第十六章 ジパンゲ

《悪魔と満月》

…満月の光が降り注ぐサカマタ号の甲板に、一人の少女が立っていた。彼女は、肩より少し長い真つ赤な髪をなびかせ、真紅の瞳で月を眺めながら何やら考え込んでいるようだった。今日はサカマタ号がラージポートの港を出てから2日目の夜。乗客の多くは眠りにつき、彼女の三人の仲間も部屋で寝息をたてていた。遙か遠くには陸地の明かりが見えていた。…明日の朝、到着予定のジパンゲ国のエドの町だ。

「あれがエドの町か！暗くてよく見えないけど…いったいどんな町なんだろう？」

…もちろん応える者は誰もいない。ただ波の音だけが聞こえていた…。

「シャクマにやられたキズも治ったし、これでまたジパンゲでも暴れられるね！…それよりも…シャクマがわたしの本当の名前を知っていたってことは…やはりアイツがまだ生きてるってことだよね…まさか千年もの間生き長らえていたなんてね…おそらく今回の件の黒幕はアイツに間違いないね…」

…彼女は自分の首にかかっていたネックレスを手にとり、それに話しかけるように言った。

「…待っててね、カエサル…あなたの敵は必ずわたしが倒すから…！そうさ…1000年前の仮は返させてもらうよ…コロッサル…我を創りし我が義父よ…！」

…月明かりの下…少女は真つ赤に輝く瞳に涙を浮かべていた…。

《エドの町》

「うわあ〜！変な服着た人がいっぱいいる〜！」

ロゼツタが驚きながら言った。

「あれは着物つて言うんだよロゼツタ。この国特有の服さ」

ティティスが言った。

「へえー！なんだか妙に詳しいんだなティティス！お前この国に来たことあんのか？」

エレノアがティティスに質問した。

「まさか！パソコンはおるか、テレビもラジオもないこんな時代遅れの国なんか来ないよ！…知り合いがジパング出身で、色々きいたことがあるだけさ（てゆーかベンケイに）」

「ふーん…そうなのか…でも、にぎやかで雰囲気的には好きだよこつゆつとこる！」

「…昔…おとぎ話で聞いたことがあるよ…黄金の国ジパング…確かに華やかだけど…私はいんまり好きじゃないなこつゆつ」

「キヤハハ！確かにミーちゃんにはちよつとにぎやか過ぎるよね！」

「…ロゼツタが言うのもどうかと…」

ここは百万人都市エド。ジパング最大の都市だ。多くの民間人や観光客の間を、四人は縫うように歩いていた。道の両脇には様々な店舗が軒をつらねていた。

「あつ！みてみて！おだんご屋さんだよ〜！ねえねえ〜！買ってよ

「ノアちゃん！」

「は！？そのくらい自分で買えよ！」

「え〜！ノアちゃんのケチ〜！このひとでなし〜！」

「うるさいな！…わかったよ、ほら！早く買って来いよロゼ！」

そう言いながらエレノアは財布からお金を取り出してロゼツタに手渡した

「わあ〜い！ありがとうノアちゃん！おだんごおだんご〜！」

ロゼツタは団子屋の方へと走っていった。

「どうやらロゼツタには頭があがらないみたいだなエレノア」

ティティスが笑いながら言った。

「別にそうゆうわけじゃないよ！…だけど可哀想だろ？お腹すいてただらうし」

「へー！お前優しいんだなあ」

「…違うよティティス…エレノアはただの…お人好しなだけなんだから…」

「わ、私のどこがお人好しなんだよっ？」

ミーシャの言葉にエレノアは少々ムツとしながら聞いた。

「…だってエレノア…貴女…人殺しをしないのがポリシーなんでしょ…？…ロゼツタから聞いてるよ…」

ミーシャが静かにそう言った。

「確かにそうだけど…それがどうかしたか？」

エレノアが不思議そうに聞いた。

「…いや…別に…」

ミーシャはいつものように淡々と言った。

「みんな〜！お待たせ〜！おだんご買って来たよ〜！」

ロゼツタが三人のもとへと戻ってきた。

「うーん！甘くて美味しい〜！」

「…やれやれ…ホント…ロゼツタってうらやましいくらい気楽なんだから…」

「ハハ！まったくだぜ」

「ロゼの楽天下は天下第一品だな！」
四人はそろって笑った。

…その様子を、少し離れたところから数人の男達が伺っていた。

「白髪に青い瞳…間違いない、賞金首の魔法使いだ！…とりあえず獅子蔵親分に報告せねば…！いいか、絶対に見失うなよ！」

「へい！」

そう言うと、一人が何処かに走って行った…。

《橋本一家のアジト》

ここは橋本一家のアジト…悪名高きヤクザの本拠地である。
さつき四人を監視していた男の一人が、親分らしき体格のいい男と何やら話していた。

「それで？確かに間違いなかったんだな？」

「へい！確かにこの目で見やした！」

「フフフ、そうか…！よし…生死は問わん、奴らを俺の前に連れて来い…だが奴らは強い…だから…一人になったところを狙え…よいな？」

「わかりやした！」

アジトから大勢の男達が出ていった…。

「…ククク…愚かな人間共め…おかげでシュナウザー様にも良い報告ができそうだな…！」

獅子蔵は不気味な笑みを浮かべた。…そして、明かりに浮かび上が

った彼の影は人間のものではなかった…！

《殺人は罪か否か エレノアとミーシャの対立》

四人がジパングに来てから一日目の夜…四人は小さな旅館に泊まっていた。…草木も眠る午前二時、ミーシャは一人、部屋の縁側で目を眺めていた。

「…この200年間…いつたい私は何人の人を葬ってきたのだろうか…？」

ミーシャがぼやいていると、後ろで襖を開閉する音が聞こえた。

「…エレノア…どうしたの…？」

ミーシャが振り向くとエレノアが立っていた。

「ああ…ちよつと眠れなくてな…ミーシャこそ何やってんだよ…こんな真夜中に？」

「…ちよつと考え事…二人はどうしてる…？」

「爆睡中さ。あいつらって、結構似たもの同士なのかもな」

エレノアが少しだけ笑いながら言った。…数秒の沈黙の後、ミーシャが唐突にきりだした。

「…エレノア…どうして貴女は人を殺せない…いや…殺さないの…？」

ミーシャの突然の質問にエレノアは驚いた。

「いや…だって…それは…」

「…殺人は犯罪だから？…そんな甘い考えでよく今まで生きてこられたねエレノア…！」

ミーシャが珍しく厳しい口調で言った。

「ミーシャ…お前…！？」

「…いいエレノア？…私はこの200年の間に数えきれない程の人々を殺してきたわ…もちろん正当防衛だけど…でも、もし私が貴女みたいに殺人をしないことに誇りを持っていたとしたら…おそらく私は今現在生きていないでしょうね…第一、魔物は殺して人間は殺さないって考え自体が間違いだよ…！」

「何が言いたいんだよミーシャ！」

「…つまり、殺人を犯す勇気も無いくせに危険な旅をするなんて言いたい…！貴女以外は…私も含めて口ゼツタも殺人を犯すぐらいの覚悟はできてるんだよ…そうでなければ自分が…仲間が死ぬことになるから…エレノアもいい加減目を覚ましてよ！…敵であれば人間であろうがなんであろうが殺すぐらいの気持ちを持つたら！？…殺人をしないのがポリシー？ふざけないでよ！」

…ミーシャの怒りの言葉に、負けず嫌いのエレノアがこう言い返した…！

「黙って聞いてりや言ってくれるじゃないか！いいか？殺人殺人って言うけれどよ、世の中なんでもかんでも殺せばいいってもんじゃねえんだよっ！少しは殺される相手側の気持ちにもなってみるよこの血も涙も無い冷血人間めっ…！」

「…！」

…エレノアの言葉がミーシャの心に深く突き刺さった。だが、気の強いエレノアはさらに続ける。

「そもそも、ちよつと魔法が使えるからっていい気になるんじゃ…」

「もうやめてよっ…！」

ミーシャがかなきり声をあげる。

「…私は…私はただ…エレノアのことを考えて言ったのに…エレノアのバカっ…！もう知らないっ…！」

…そう言つとミーシャは裸足のまま外へと飛び出して行つてしまつた…。

「…けっ！勝手にしやがれ！」

…エレノアはさっさと布団に戻ると、そのまま眠ってしまった。

…誰もいない真つ暗な道を、ミーシャは一人さまよつていた。

「…血も涙も無い冷血人間だなんて…ひどい…ひどすぎるよお…ひつく…えつく…ぐすん…」

ミーシャの青い瞳から涙がとめどなく溢れ出てきた…。その時、彼女の背後から何者かが近づいてきた…そして…

ドカッ！…ドサッ！

…彼女は何者かに背後から頭を殴られて、そのまま気を失つてしまつた…

「フッフ…ちよろいもんだぜ！これで獅子蔵親分も喜ぶだろうなあ」

…チンピラはミーシャを担ぐと、上機嫌でアジトへと戻って行つた…！

「どうだロゼッタ？そつちにはいたか？」

「だめ！こつちにもいないみたいだよ！」

： 四人がジパングに来てから2日目の朝、ロゼッタとティティスは姿の見えないミーシャを旅館中探していた。

「それにしても…エレノアのあの態度、ミーシャとなんかあったのか？」

「さあ…ノアちゃんったら、わたしが聞いてみても何も答えてくれないし…たぶん…ケンカしたんだと思うけど…」

「なんでミーシャとケンカなんかするんだ？」

「それは本人に聞いてみないとほんとにも…だけどあれじゃあねえ…」
二人が部屋の中に目をやるとエレノアが一人、畳の上であぐらをかいて座っていた。…彼女は朝からピリピリしているようで、とても近づけなかった。

「ああ…ありや話しかけないほうがよさそうだな…アイツ、女の割には気性が荒いからなあ…」

「なんとかしてノアちゃんとミーちゃんを仲直りさせたいんだけどなあ…： いったいどうすればいいの？ティーちゃん？」

ロゼッタが困ったように聞いた。

「とりあえず…まずはミーシャを見つけないと…もうこの旅館内にはいないみたいだから二人で手分けして表を探そう！」

「わ、わかつたよ！」

二人はミーシャを探しにエドの町へと繰り出して行った…。一方、部屋では一人エレノアが相変わらずイライラしながら独り言を呟いていた。

「…つたく、ミーシャのヤツはいつたい何を考えてるんだか…あー！ムカつく！」

そう言つて彼女は畳の上にごろんと横になった。…しかし、やがて時間が経つにつれ彼女は段々と冷静さを取り戻し始めた…そして自分がミーシャに対して言つたことに後悔を感じ始めた。

「…そうだよなあ…確かにミーシャの言う通りなんだよ…こんな中途半端な覚悟じゃいけないって自分でもわかってるんだ…だけど…これは私の命の恩人との…リスタナとの約束なんだよ…『罪無き人間を殺すな』って…誰が罪人で誰がそうじゃないかなんて…私にはわからないよ…いきたい…私はどうすればいいんだよりリスタナ…!」

…彼女の中で、怒りは悲しみと後悔の念に変わっていった…。

「…今思えば…ミーシャに対してひどいことを言っちゃったな…きつと傷付いただろうなあ…」

…やっぱし、ちゃんと謝らないと…」

その時、部屋の中に旅館の従業員が入って来た。

「エレノアさん？貴方宛にこんなものが…」

エレノアに手紙を渡すと、従業員は部屋から出ていった。

「?。なんだろう?」

…手紙を読んで、エレノアは真つ青になった。

「?!…これは…!？」

手紙には次の様に書かれていた。『貴様の仲間を一人預かった。命が惜しくは我らが橋本一家のアジトまで一人で来るがよい…!』

「…ミーシャの命が危ない…!」

エレノアは素早く迷彩服に着替えると、マグナムとナイフを腰のベルトに装備した。

「…待つてるミーシャ…必ず私が助けてやるからな…!」

彼女は一目散に外へと飛び出した。…彼女の決心にはみじんの迷いも無かった…!

…あまりの頭痛に私は目を覚ました…。

「…ここ…は…？」

…辺りを見回してみる…どうやら室内のようだ…手足は縄かなんかで縛られているらしく、自由がきかない…。

「…イタタ…頭が…ぼーっとする…」

…なんとなく鉄臭い…どうやら多少流血しているみたいだ…。

「…そうだ…私…エレノアとケンカして…外に飛び出したんだ…もしたら…急に後ろから殴られて…気がついたら…ここにいた…」

ミーシャは今までの経過を整理した。…そして改めて後悔した。

「…ああ…なんで私あんなバカなこと言っちゃったんだろ…理由はどうであれ…エレノアのポリシーを変える権限なんて私にはないはずなのに…ちゃんとエレノアの前で謝りたいよホント…もう…遅いかも…知れない…けど…」

…その時、部屋に体格のいい男が入って来た。

「気分はどうだ？…ミーシャ殿？」

「…お前は…！？どうして私の名を…？」

「フッフ…話せば長くなるが…まあ、共和国政府の雇われ兵とでも言うておくか？」

「…なるほど…狙いは私達と赤い悪魔の抹殺か…！」

「ご名答…悪いが貴様には仲間を誘き寄せるエサになってもらおう」

「…この卑怯者が…！」

…ドカッ！

獅子蔵は縛られ床に転がっているミーシャの腹を蹴飛ばした。

「…がはっ…！」

「…この獅子蔵を甘くみるなよ小娘！…用がすんだらまずはお前か

ら殺してやるからな…！」

「…ゲホゲホツ…ぐっ…！」

ダダーン！

…その時だった、何やら表から銃声が二発聞こえてきた…！

「…どうやらエサに食い付いたようだな…！」

獅子蔵は不気味な微笑みを浮かべた…。その二発の銃声を聞いたミ
ーシャはとっさに呟いた。

「…エレノア…！」

…一方、その頃アジトの正面玄関前では、エレノアが見張りのチン
ピラを片っ端からマグナム44で射殺しまくっていた…！

「…のアマッ…！」

バーン！

「ぎゃあっ…！」

見張りのチンピラ三人は全て血まみれになって倒れた。

「…どうやらここがアジトらしいな…ミィーシャ…無事でいてくれ…
！」

…エレノアは死体の横を通り、アジトの建物の中へと入って行った
…。

「誰だテメエっ！」

すぐにチンピラがエレノアを発見し、小刀や棍棒で遅いかかってき
た！

「邪魔だあっ…！そこをどけえっ…！」

エレノアが容赦なく発砲する！

バーン！

「ぎゃあ！」

バーン！

「ぐあつ！」

ドーン！

「ひぎゃあ！」

…チンピラ達は次々と銃弾の餌食になっていった…真つ白だった障子は一瞬にして血で赤く染まった。

「ふう…とりあえず全員殺つたみたいだな」

エレノアは銃弾を補充しながら言った。

…やがて、エレノアは一番奥の小さな部屋にたどりついた。

「残るはここだけか…」

エレノアは銃を構えながら扉を蹴破った！…そこには縄で縛られ床に転がるミーシャの姿があった…！

「ミーシャ…！」

「…エレノア…！」

「フフフ…罠にかかったようだな小娘…！」

二人の間に獅子蔵が割って入る。

「テメエがミーシャを誘拐した黒幕か…！」

「いかにも！俺の名は獅子蔵…シユナウザー將軍からの依頼を受けてな…キサマらを抹殺しなくてはならないのでね…まずは武器を捨ててもらおうか…もちろん、こちらのお嬢さんの命が惜しければの話だが…！」

…そう言つて、獅子蔵はミーシャの喉に小刀をつきつけた…！

「…エレノア…私のことは構わないから…早くコイツを撃ち殺しちゃつて…！」

ミーシャが今にも泣き出しそうな顔で言った。

「バカ！んなことできるわけないだろっ…！悔しいが…仕方ない」

…そう言つとエレノアは銃とナイフを床に投げ捨てた…。

「フハハ！なかなか度胸のあるお嬢ちゃんだ！」

「うるせえ！武器は捨てたんだからミーシャには危害を加えるなっ
！」

「わかつておる。…それじゃあ…まずはお前から食うことにしよう
か？」

「は！？」

「ククク…人間共め…この獅子蔵の真の姿を見るがいい！！」

…そう言つと獅子蔵はメキメキと音をたてて、巨大な双頭の獅子へ
と姿を変えた…！

「グルル…ゴアー！」

獅子は凄まじい唸り声と共にエレノアに襲いかかった！！

「！！！！」

「…エレノア！避けてっ…！」

ミーシャが叫んだ！

エレノアはひらりと身をかわした！

バキバキバキバキー！

…獅子はエレノアの変わりに彼女の背後にあつた部屋の扉を2つの
口で噛み砕いた…！！

「くそっ！なんちゆう化物だっ！撃ち殺してやるっ！」

そう言つて銃を抜こうとしたが…本来そこにあるはずのものがな
かつた。

「…しまった！さっき捨てちゃつたんだっただああ！」

エレノアが絶叫する。

「…ああ…エレノア…なんでそんな大事な事を忘れるかなあ…？」

…こんな時だとゆうのにミーシャは呆れる他なかった。

「ガルルルル…」

双頭の獅子が鋭い牙を剥き出しにして、ジリジリとエレノアに迫る

…！

「こんな時に丸腰とは…万事急須か…！！」

エレノアは死の覚悟を決めた。

「ギシャアー！！」

そして獅子が彼女に飛びかかってきた！…その時…！

バキツバキヤアツ！！

「んなつ…ロゼー！！」

「…ロゼッタ…！！」

なんと壁を鋭い爪でぶち破ってロゼッタが飛び込んで来たではないか！

「二人共大丈夫っ！？」

「なつ…バカッ！私達のことよりもまずは自分のことを…」

「グワアアー！！」

エレノアがそう言うか言わないうちに獅子の化物は身を翻し、ロゼッタに飛びかかった！

「接近戦でわたしに勝とうなんて1000年早いよ！喰らえっ！デス・クローツ！！」

ザシュウツ！！

ビシャアアツ！！

「ギャオウツ！！」

ロゼッタの鋭い一撃が獅子の片方の頭を粉々に吹き飛ばし、辺り一面に血しぶきが飛び散る！！

「グルアガアー…！！」

頭を片方失った化物はうめき声をあげながらロゼッタの空けた壁の穴から外へと逃げ出した！

「ティーちゃん！そっちいったよー！あとはよろしくねっ！！」

ロゼッタが表に向かって叫んだ。

「…りょーかい！」

すかさず外で待機していたティティスが、逃げる化物の前に立ちはだかった。

「逃がさねえぞ化物！冥土の土産にこいつをくれてやるぜ！アイス・バーン！」

ティティスの手から放たれた超低温の空気の固まりが獅子蔵に直撃した！

「グワア…ア…。」

ビシビシビシ…バリーン！！

魔物はあっという間にカチカチに氷ついて、そのまま粉々に砕け散ってしまった…。

「ふっ…一丁上がりだな…さて、問題はあの二人がどうなるかだな…ちゃんと仲直りしてくれるのかなあ…？お前はと思う？…って、聞いてないか」

ティティスは心配そうに、足下に転がった獅子の頭に向かって言うのだった…。

《仲直り》

「ごめんミーシャ！冷血人間だなんて酷いこと言っちゃって…ホントごめんな！」

「私こそ…なんだか勝手なこと言っちゃって…ごめんなさい…こんなこと言えた立場じゃないけど…それでも…私とこれからも友達でいてくれる…かな…エレノア…?」

「当たり前だろ!? 私達の友情は永久不滅だっ!…これからもよろしくなミーシャ!」

「…うん…!」

二人は仲直りの印に堅い握手を交すのだった…!

「こうして不良少女と無口な魔法使いは無事に仲直りしましたとさ…めでたしめでたし…だね!」

部屋の端で一部始終を見ていたロゼッタがそう言った。

「なんだよ!勝手にナレーション入れるなよロゼ」

「いやあ、一時はいつたいどうなっちゃうのかと思ったよ!ねっ! ティーちゃん!」

「まっただけだぜ…まあ、最終的には仲直りできたし、これでよかったんだけどな!」

ティティスが笑いながら言った。

「…とゆうわけで、二人が仲直りしたお祝いに…うな重を食べに行きたいと思います!…もちろん、ノアちゃんとミーちゃんのおごりで!」

「よっ!まってました〜!」

ロゼッタとティティスが嬉しそうに言った。

「は!?!なんで!?!」

「…私達のおごりって言われても…?」

「何言ってるの!ノアちゃんとミーちゃんのおかげでわたしとティーちゃんがどれだけ苦労し、心配したことが!」

「そーだぞ!朝っぱらから町中走り回らなくちゃならないわ昼ご飯はお預けになるで大変だったんだからな!…よって、それなりの見返りはないとなあ…!」

ロゼッタとティティスの言葉にエレノアとミーシャは顔を見合わせ、そろってこう言うのだった。

「し、ごめんなさい！ケンカなんてもう二度と御免だよー！」

∴ How grateful I am
friends! by ERENO A
to my close

第十六章 ジパング（後書き）

第十六章ジパング、いかがでしたか？

さて今回は、番外編シリーズとしてエレノアの過去を書いていきたいと思います。エレノアの知られざる過去を知りたい人は、ぜひ読んでくださいね！

…それでは次回の次回に（次回はたぶん作者は出演しないから）またお会いしましょう！

第十七章 番外編 少女と旅人（前書き）

四人がジパングに来てから2日目の夜、旅館の屋根の上に緑色の髪と瞳をした少女が寝転がって夜空を眺めていた…。

「綺麗なもんだなあ…」

するともう一人、赤い髪と瞳の少女が彼女が先ほども使った梯を登って屋根の上に来てきた。

「何してんの？」

「ロゼか…ちよつと眠れなくてな…色々考え事をしていた」

「色々考え事って？」

「ん…昔の事とか」

「昔の事かあ…そう言えばわたし、ノアちゃんの昔の話を聞いたことなかったなあ…ねえ？聞かせてよノアちゃんの昔の話！」

「別にいいけれど…ティティスとミーシャは？」

「今頃爆睡中だよ」

「そうか…恥ずかしいから内緒にしてくれよ…お前には特別に話してやるんだからなロゼ！」

「りょーかい！」

「それじゃ始めるか！…昔な、私がまだ…」

…これは、エレノアがまだ小さい頃のお話し…

第十七章 番外編 少女と旅人

…ここは、とある町外れの丘の上。降り注ぐ太陽の光の下、一面に草原の海が広がっていた。

そこに、草と同じグリーンの髪と瞳をした小さな女の子が、仰向けに寝転がって空を眺めていた。

「あーあ…今日もいい天気だなあ…」

少女は青空を流れる白い雲を見ながら言った。…少女の髪を心地よい風が撫でる。

「相変わらず平和だなあ…イタズラでもしたい気分だけど、そんなことしたらまた牧師様に怒られちゃうな。またこないだみたいにウグルのヤツを川に突き落としたら面白いんだろうな！…だいたいアイツは大げさなんだよ泳げるくせに！すぐに学校の先生に言いつけやがって、おかげで私は学校に行っていないのにも関わらず怒られるんだからたまったもんじゃないよ！…あーあ！なんか面白い事ないかなあー！」

少女は暇つぶしに日頃の不満を呟いていた…が、やはり退屈なことには変わりなかった。…そんな時、遠くから学校の終業の鐘の音が聞こえてきた。

「あれ？もうこんな時間か…そういえば今日はウグルやキャサリン達と校庭で遊ぶ約束をしていたんだっけ…？…こうしちゃいられない！早くいかないと！」

少女は飛び起きると、学校を目指して一目散に走り出した！丘を下り、小川を飛び越え、町中を通り抜けて彼女は友達の待つ学校へと急ぐのだった。

「遅いなあエレノア……」
金髪の可愛らしい女の子が言った。

「心配するなよキャサリン、どうせまた昼寝でもしてるんだろ？な
あ、ヒロユキ？」

少し太り気味の男の子が不機嫌そうに言った。

「ウグルの言う通りだよキャサリン。僕もそう思う……ほら！」

ヒロユキと呼ばれる男の子が校門の方を指さした。……緑色の髪をし
た少女がこちらに向かつて走ってくる。

「ごめんごめん！みんな待った？」

エレノアが息を切らしながら言った。

「まったく……ちゃんと時間は守れよエレノア！」

「だから悪かったって言ってるじゃないウグル！そんなに怒るなよ
……！」

「怒ってなんかかないよ！だけど、俺達はずっと待ってたんだ。早い
とこ遊ぼーぜ！」

「僕も賛成だね」

「今日は何しようか、みんな？何か意見のある人はいるかしら？」
しつかり者のキャサリンが三人に聞くと、

「私サツカー！」

「え、こないだよったじゃんエレノア！俺、他のがいいなあー！」
「僕もウグルと同じ意見です……」

「もう、なんだよ！また川に落とされたいのかよウグル！」

「こらこらエレノア！そんなこと言ったらダメだよ！」

「キャサリンの言う通りだよエレノア。平和的に解決しないと……」
キャサリンとヒロユキの言葉に、エレノアはしぶしぶ頷いた。

「それじゃあ……鬼ごっこなんてどうかな？」

キャサリンが改めて提案した。

「おっ！いいね！俺賛成！」

ウグルが手を挙げながらはしゃいだ。

「僕も賛成ですね」

ヒロユキが言った。

「わかった…よーし、それじゃあ…私が最初に鬼をやるからな！
さあ、みんな逃げて逃げて！」

エレノアが服の袖を捲りながら言った。

「よしっ！みんな逃げろっ！！」

「きゃっ！！」

「アハハ！みんな待てえっ！」

この時、午後の楽しいひとときを、四人の少年少女達は心から共有しあっていたのであった。

「ウフフ…何処を旅してみても本当、子供って元気なんだから」

学校の敷地の外から、一人の旅人らしき人物が四人の楽しそうな様子を見ながら呟いた。

「さて…今晚はいつたい何処へ泊まればいいのかやら…なんだか私つたら、町中にも関わらず野宿するハメになりそう」

旅人はそう言うつと学校に背を向け、丘の方へと去って行った。

…それからいつたいどのくらいの時間が経ったのだろうか？やがて太陽が空を紅く染める頃、四人の子供達は遊び疲れて校庭のブランコに腰掛けていた。

「あゝ、面白かった！」

エレノアがとても満足気に言った。

「そうだな…って、もうこんな時間か」

「僕らも早く帰らないと…日が暮れたら大変ですよ！」

「大変？何が？」

ウグルとヒロユキの言葉に、エレノアが不思議そうに聞いた。

「あ、エレノアは知らないんだっけ？ 今日ね、学校の先生が言っていたの。最近、この辺で人食い鬼が出るから暗くなったらお外に出ちゃダメだって！ だからエレノアも気をつけてね」
キヤサリンが答えた。

「へー、知らなかった…じゃあ、今日はみんなもう帰るのか？」

エレノアがそう言うと、他の三人がブランコから立ち上がり、さよならの挨拶を交す。

「そうですねエレノア、また今度会おうね」

「それじゃあな、エレノア！ また明日！」

「またね！」

そう言い残すと、三人はそれぞれの家路へと急ぐのだった。そうして学校の校庭にはエレノア一人だけが取り残された…。

「さて…私もそろそろ帰ろうかな？ 牧師様も心配しているだろうしね」

エレノアは校庭を出ると、教会の方へと歩みを進めた…が、しばらく行ったところで、ふと足を止めた。

「綺麗な夕日だなあ…まだ明るいしもう少しくらい寄り道しても問題ないだろう」

そう言うと、エレノアは向きを変えて丘の方を目指した。そう…彼女のお気に入りの場所を目指して…。

エレノアは頂上に向かって丘を登っていた。丘の頂上には大きな木が一本あって、そこはエレノアのお気に入り場所だった。大木が作り出す木陰は彼女にとって、とても心地のよいものだった。彼女は場所ので、様々な景色を眺めることが好きだった。そして今日もまた、美しい夕日を眺めるためにそこに向かったのだった。

「ふう、やつと頂上だよ…あれ？誰かいるみたいだけど見たことのない人だな…誰かな？」

エレノアが丘の頂上に着いてみると、大木の下に見知らぬ人間が腰掛けていた。その人間は肩まである黒髪を持ち、ボロボロの茶色のコートを来ていた。向こうはこちらにはまったく気付いてない…どうやらうたた寝をしているところのようだ。

「あ、あの…もしもし？」

エレノアが声をかけるとその人物は少し驚いた様子で起きた。けれどもすぐに優しくエレノアに語りかけてきてくれた。

「やあ、ごめんごめん！驚かせちゃったかな？君はこの町の子供？」

「うん、そーだよ！名前はエレノアって言うんだ！」

「エレノアか…とてもいい名前だね。私はリスタナ、一応旅人ってところかしら？」

「旅人さん？それじゃあ、いろんな所を旅してるんだ！」

「そうだね。まあ、別に目的とかは無いんだけどね」

「ふう〜ん…それじゃあ今後の予定は？」

「ぎくうつ…」

エレノアの質問にリスタナは顔をしかめた。

「そ、それは…実は今晚泊まる所を探してるんだけどなんてゆうかそのお金が無くて…ほら、私こう見えて無鉄砲だから、お金のやりくりはちよつと…」

リスタナが苦笑いしながらそう答えた。

「それなら私の家に泊まればいいよ！家は教会だからお金かからないし、牧師様もきつと歓迎してくれるよ！」

エレノアのこの計らいに、リスタナは嬉しそうに言った。

「ホントに？それはありがたい！早速お邪魔させてもらいます」
「じゃあ決定ね！教会はこっちだよ！」
エレノアはリスタナの手を掴むと、そのまま走り出した。
「ちょ、ちよつと…」
「早く早くリスタナ！日が暮れちゃうよ！」
「まったく…子供って元気…てゆーか、せっかちなんだからもう」
こうして、エレノアとリスタナは日没間近の丘を風のように駆け下りて行くのだった。

《教会 私の居場所》

エレノアとリスタナが教会に着いた時にはすでに日は落ち、空では金星が輝き始めていた。…二人が教会の中に入ると、大きな十字架が二人を迎えてくれた。

「ちよつと待つてねリスタナ。今、牧師様を呼んで来るから！」
そう言うと、エレノアは教会の奥へと消えて行った。

「それにしてもなかなか立派な教会だなあ」
教会は決して大きくない、むしろ古くて小さなものであったが、リスタナにはその趣きが魅力的だったようだ。

「あの子この教会に住んでいるんだよね…そうか…やっぱりあの子は…」

「…リスタナ！牧師様を呼んで来たよ！」
リスタナが何やら考え事をしているうちに、エレノアが教会の奥から戻って来た。…やがて、彼女の後ろから初老の牧師が現れた。

「この町に旅人が来るのは本当に久しぶりです…理由はエレノアから聞きました。何もありませんが、どうぞゆっくりして行って下さい
リスタナさん」

「ありがとうございます…それでは、お言葉に甘えてしばらくお世話になります」

リスタナは牧師に深々と頭を下げながら言った。

「さあ、エレノア、お客様をお部屋にお案内しておくれ」

「はい！こつちだよりリスタナ！」

リスタナはエレノアに連れられ、教会の二階の一室に通された。部屋は小さいながらもベッドやテーブルセットが完備されていて、リスタナが生活するには十分な空間だった。

「本当に私なんかこんな贅沢な部屋に泊まってもいいのかい？」
リスタナが聞くと、

「遠慮しないでいいよ！夕御飯になったら呼ぶから、それまでゆっくりしていいよ！」

エレノアがニコニコしながら答えた。

「そうゆうことなら…じゃあ私は少し休ませてもらうよ。今日は町中歩き回って疲れちゃったからね」

「うん！じゃあまた後でねリスタナ！」

そうリスタナに言うと、エレノアは一階へと降りて行った。

「さてと…とりあえずしばらくは安心していいみたいだね」

夕食まで特にやることもないので、リスタナはベッドに腰掛けると鞆の中身を整理することにした。

「整理って言っても何も入ってないんだけどね。おや？これは…」
鞆をあさっていると、底から何やら紙切れが出てきた。

「人食い鬼出没につき厳戒体制中…？ああ…確か隣町でもらったピラダ。鬼か…なんだか物騒だな…まっ、私には関係ないことを祈るけど」

そう言いながらも、彼女は腰のホルダーから44マグナムを取り出して、銃の整備を始めるのであった。

「…うん、調子は万全だね！いざとゆう時はよろしく頼むよダーリン！」

リスタナは愛銃に笑顔でそう話しかけるのであった。

…後に、この愛銃を手放すことになるうとは夢にも思わなかっただろ…

その日の夜、リスタナは質素ながらも温かい食卓を牧師やエレノアと共に囲み、おまけにシャワーまで浴びさせてもらうことができた。「いやあ、シャワーまで浴びれて、今日はなんていい日なんだろう！」

リスタナがベッドの上でくつろいでいると、エレノアが部屋へと入ってきた。

「どうリスタナ？居心地の方は？」

「もう最高だよ！…ホント、これもエレノアのおかげだね！」

「エへへ…」

エレノアが小さく照れ笑いした。

「…そうだリスタナ！私の部屋に来ない？旅人なんですよ？何かお話聞かせてよ！」

エレノアが目を輝かせながら言った。

「もちろんOKだけど…そう言えばエレノアの部屋って何処にあるの？」

リスタナが質問すると、

「屋根裏部屋だよ…ついてきて！」

リスタナがエレノアについてゆくと、教会の屋根裏部屋に辿り着いた。古いベッドと小さな本棚以外には何も無い質素な部屋だった。

「ここがエレノアの部屋？」

「うん！そしてここが私の一番のお気に入り！」

そう言つてエレノアはベッド脇の小窓を開けた。その小窓からは満天の星空が一望できた…！

「すごい…！」

「綺麗でしょ？寝る前には必ず見てるんだ！」

「こんな綺麗な景色を毎日見れるなんて、エレノアは贅沢だね」

「そ、そうかな？私はけっこう貧乏だけど…」

「そんなことないって！私なんか、今は一円も持ってないんだからそのセリフに、二人は一緒に笑った。

「ねえねえ！なんか面白いお話を聞かせてよりスタナ！私、お話し聞くの大好きなんだから！」

「面白い話かあ…ん…」

リスタナはしばらく考えると、

「…旅の途中で聞いた昔話でもいいかな？」

「うん！…で、その昔話って？」

「ちよつと難しい話かも知れないけど…」

リスタナは深呼吸すると、ゆっくりと語り始めた。

「大昔…この世界が悪魔によって滅ぼされかけた時、四人の聖なる人々が悪魔を封印したんだって。その時、悪魔から魔力の大部分を没収したらしいんだけど、聖人の一人がその一部を使ってあるアイテムを作った…そのアイテムの効果は忘れちゃったけど…もの凄い力を持っていたらしくてね…悪人の手に渡らないようにとても高い塔に隠したんだってさ！え〜と…名前は確か…『バベルの塔』とか言ったかな？今でもその塔の頂上にあるアイテムを聖人の子孫が守ってるんだってさ。…とまあ、こんな話だったんだけど…」

「ん…なんだか難しいお話だったね。…悪魔って何なのリスタナ？」

「さあ？一応魔物…なのかなあ？」

「リスタナにもわからないの？」

「そりゃそうさ！悪魔なんて見たことないもん」

「でも悪魔って悪い人なんでしょ？」

「それは会ってみないとわからないよ。会う前から決めつけちゃダメだよエレノア！」

「じゃありスタナは悪魔と友達になれる？」

「…やつぱしちよつとヤダなあ」

「ダメじゃん！」

その後もしばらく二人の会話が途切れることはなかった。…やがて夜も更けた頃、エレノアがある質問をした。

「ねえリスタナ、どうして旅人になろうと思ったの？…何か深い理由でもあるの？」

「うーん…なかなか難しい質問だなあ…まあ、簡単に言うと舐められたくないから旅に出たってところかな？」

「え？どうゆうこと？」

「私の生まれた村ではねえ、女性の地位がとても低かったの。それがとても悔しくて…見返そうと思って旅に出ようと思ったのよ。もちろん村のみんなには女の私には無理だって反対されたよ。…でもね、私は思うの…女性だってその気になれば何でもできるんだっていいエレノア？貴方にもいつか自分の夢や目的に向かって行く日があるはず。その時、例え何があっても諦めちゃダメ！自分を信じ続ければ必ず結果は出るから…！」

「うん！」

「いい返事だね！…さ、今日はもう遅いから続きはまた明日ね。おやすみエレノア」

「おやすみなさい、リスタナ」

エレノアと別れ、二階の部屋へと戻る途中、リスタナは牧師の部屋を尋ねていた。

「やれやれ、エレノアの相手は疲れたでしょう旅人さん？」

「いえいえ、とても楽しかったですよ？」

月が空高く昇る頃、牧師の部屋でリスタナと牧師はコーヒーを飲みながら世間話に花を咲かせていた。

「エレノアの手前では軽率だと思って聞けなかったのですが…あの娘の両親はやはり…」

リスタナが低い声で質問すると、牧師も同じように答えた。

「ええ…あの娘が五歳の時に共に流行病で…私が引き取って依頼五年間、彼女はこの教会で暮らしています」

「そうですか…」

「教会にはお金もなくエレノアを学校に行かせてあげることもしない…それでも彼女は文句一つ言わないのです。そんな彼女を見ていると…なんだか自分が情けなくて…」

牧師がうつ向き加減に言った。

「そんなに思い詰めないでください…大丈夫、私が見た限りエレノアは十分幸せそうでしたから」

「そうですか…ならいいんですが…」

…夜も更けたその頃、町の入口に一つの妖しい影があった…

「グルル…うまそうな肉の匂いがする…！」

やがてその影は、町の暗闇の中へと消えていくのだった…！

《大きな木の下で…》

次の日の午前中、丘の頂上の大木の下でエレノアはいつものようにのんびりと景色を眺めていた。…いつもと同じ景色、そして、いつもと同じ穏やかな時間が流れていた。

「ふぁゝあ…今日も暇だなあ」

エレノアが大きなあくびをしながらばやいていると、リスタナが丘を登ってやってきた。

「おはようエレノア！今日もいい天気だね！」

リスタナがエレノアの隣に腰掛けながら言った。

「おはようつてリスタナ、もう十時だよ？…そんなに寝てていいの？」

「旅人はとつても自由だからね。それよりもずいぶんと退屈そうだねエレノア？」

「だつてさあ…あんまりにも平和過ぎるんだもん…正直つまんないよ」

「ハハハ。エレノアはそう思ってるんだ。でも…私は好きだなあ、こうゆう平凡な日常つて！」

「え…なんで？」

「だつてさ、私はいろんな所を旅して回っているけど…こんなに平和な所は珍しいよ？そりゃあ、酷い事も多々あったなあー！何処かの町では指名手配の犯人と間違われてブタ箱にぶち込まれたし…その前の町では強盗団と殺りあったなんて事もあったなあ」

「リスタナつて…ずいぶんデンジャラスな人生を歩んでいるんだね」

「まあね…まあ、仕事上仕方ないんだけどね」

「仕事？そう言えばリスタナつてどうやって生活費を稼いでるの？…バイトとか？」

「ハハハ、だつたらいいんだけどね…」

「…リスタナ？どうしたの黙っちゃって？」

リスタナはしばらく黙っていたが、やがて静かにこうきりだした。

「私ねえ…人殺しが仕事なのよ」

「えっ…？」

「もちろん人殺しだけが仕事じゃないんだけど…悪人や魔物の殺害を依頼されて、それを殺すのが私の仕事なの」

「そんな…なんで…！」

「それが私の生きるすべだからよ…そして、これが私の生命線よ…！」
そう言つて、リスタナは腰のホルダーから44マグナムを取り出してエレノアに見せた。

「旅はとても危険なものなの…誰が、いつ、どんな手口で自分に襲いかかってくるかわからない…だから身を守る武器は絶対に必要なの。とても悲しいことだけど、この世界はまさに弱肉強食なの…そして、誰もこの原理原則には逆らえないの…私も…もちろんエレノア…貴女もね」

まるで別人のように冷酷な口調で淡々と話すリスタナの話をも、エレノアはただ黙つて聞くしかなかった。

「自分で言つておいてなんだけど…私のこと嫌いになっちゃったでしょ？」

リスタナがいつもの優しい笑顔でエレノアに言った。…すると、リスタナの予想に反した以外な答えがエレノアから返ってきた。

「例えリスタナが人殺しであつても私には関係無いよ…リスタナは私の大事な友達だから…」

それにリスタナにはリスタナの生き方があるだろうしリスタナは何も悪くないよ！でも…これだけは私と約束して…これからは出来る限り人殺しはしないつて…っ…！」

「エレノア…わかつた、約束だ！」

「うん！絶対だからねリスタナ！」

そう言つて、エレノアは右手の小指を差し出した。

「…？エレノア？」

「指切りだよリスタナ！…約束だからね！」

「…わかつてるつて」

二人はお互いの小指を固く交えたのだった。

「ところでエレノア、ずっと聞きたかったことがあるんだけど…」

「なあにリスタナ？」

「エレノアって本当に十歳なの？」

「へ？なんで？」

「だって…明らかに私よりエレノアの方が精神年齢が上みたいなんだもん！今度からお姉様って呼んでもいいかな？」

「アハハ！リスタナっておちゃめなんだね！」

「いやあ、それほどでもないよ！」

「ハハハ！」

「アハハ…」

…暖かな日差しの差し込む木陰で、二人の仲良しは一日中話して止まなかった…。

しかし、二人の友情がそう長く続くことはなかった…そう…終りは突然訪れたのだった…。

《別れは突然に…》

リスタナとエレノアが出会ってから2日目の夜のこと…それは突然訪れた…この時のことをエレノアはきつと生涯忘れることはないのだろう…。

いつものようにエレノアは自分の部屋の小窓から、満天の星空を眺めていた。…すると、誰かが教会の戸を叩く音がした

「こんな時間に…いつたいなんだろう…？」

エレノアが一階に降りてみると、教会の玄関前で何やら三人の間が話し合っていた。

「た、大変です牧師様！町中に魔物が出現しました！もう三人の人

間が殺られています！ですが退治しようにも魔物は現在行方不明で……」

「それはいけません！みんなを集めてなんとかしないと……！」

「私も手伝います！」

「ああ……本当にすいません旅人さん……とにかく魔物をみんなで探しましょう！」

「私は武器を持って来ますので、お二人は先に行ってください！」

「わかりました……！」

牧師と町人の二人は慌ただしく教会から出て行った。

「……どうしたのリスタナ？」

教会の奥に向かってきたリスタナに、エレノアが不思議そうに聞いた。

「起きてたのエレノア……実はね、町にモンスターが出たらしいのよ」

「えっ！？魔物が！？」

「私はこれからそいつを退治してくるから……いい子で待っててよ？
そう言いながら、彼女は愛銃のマグナムに銃弾を込めた。

「待って！私も一緒に行くよリスタナ！」

「ダメよエレノア。いい？絶対に外に出ちゃダメだからね！」

「うん……わかったよ……」

「大丈夫！すぐに戻って来るからさっ！」

リスタナはエレノアの頭を撫でると、駆け足で外へと出ていった……。
「私だって……もう子供じゃないのに……」

幼い少女には何もせず待つ時間が、たまらなく辛かった。

「私にだって……きつと何かできるはずなんだ……私も行こう……みんなに協力しないと……！」

彼女は小さなコートを着ると、そのまま外へと飛び出した……。外では、まるで凍てつく氷のように冷たい風が吹いていた。そんな寒さの中を、町の人々が松明や武器を持って町中走り回っていた。

「まだ魔物は見つかっていないみたい……そうだ！あそこからなら……！」

エレノアは一目散に丘の方へと走り出した。何も無い所なので誰も近づかない丘の上だが、毎日登っているエレノアには丘の上から町全体が見渡せることがわかっていたのだ。十分後、息を切らせながらも、エレノアは丘の上になんとかたどり着くことができた。

「はあ、はあ…ダメだ暗くてよく見えないや…」

目を凝らして町を見渡してみるが、暗闇の中に人々の持つ松明の灯かりが光るだけで、魔物は愚か、誰がいるのかすらわからなかった…。

「やっぱり…リスタナの言う通り、教会で待ってた方がいいかも…」
そう思つて丘を降ろうとしたその時だった…エレノアの目の前に突如、何者かが現れた…！

「おっと…これはこれは、美味しそうなお嬢さん、何処へ行くのかなあ…！」

その影は頭に二本の角を生やし、指先には鋭い爪がついていた…そして青味がかつた口元からは、鋭い牙が顔を覗かせていた…！

「…人食い鬼…！？」

エレノアには、それが最近問題になっている人食い鬼だとゆうことがすぐにわかった。

「グググ…そう…俺は人食い鬼さ…だったら話は早い…！」

鬼はじわじわとエレノアに詰め寄ってきた…しかし、恐怖のあまりエレノアは動くことすらできなかった…！

「…あ…あ…」

「クク…死ね！小娘！」

鬼は鋭い爪をエレノアに振り下ろした！

「…っ！」

エレノアがもうダメかと目を瞑った…その時…

「…あぶないっ！」

エレノアの前に誰かが立ちはだかった…！

ドカッ！

ブシャアー！

エレノアをかばったリスタナは、鬼の爪によって脇腹を引き裂かれた。そして飛び散った鮮血が草原とエレノアを真っ赤に染めた。リスタナはそのまま地面に倒れた。

「リスタナっ！！」

「……」

…返事はなかった。

「ちっ…邪魔を…！」

鬼は再びエレノアに近づいて来た。エレノアはとっさにリスタナの腰のホルダーから44マグナムを抜くと、震えながらもそれを鬼へと向けた…！

「…こ…来ないでっ…！…撃ち殺してやるっ…！」

「ほお…そんな玩具でこの俺を倒すと？いいぜ、殺れよ？どうせ当たり前なんか…」

…ドン！ドン！ドン！

「ギャアッ…！」

エレノアの放った三発の銃弾を受けた鬼はそのまま事切れた…。

「はあはあ…終わった…リスタナ…！」

エレノアは急いで倒れて動かないリスタナに近づいた。

「リスタナ！…大丈夫！？」

エレノアが揺すりながらそう問いかけると、リスタナはうつすらと目を開けた。

「…エレノア…よかった…無事で…鬼は…？」

「大丈夫！私がちゃんと退治したから…！」

「そう…よかった…エレノア…最後に大事な話があるの…いい…？
…よく聞いて…」

「何、リスタナ…？」

リスタナは最後の力を振り絞って話し始めた。

「エレノア…あなたにも…いつかきつと…大人になる日がくるはず
…だけど…絶対に私の様な大人になっちゃダメ…人殺しはこの世で
最もやってはいけないことだから…お願いエレノア…それだけは…
約束して…！」

「うん…わかったよ！私約束守るから…だから…お願い…死なない
で…！」

エレノアの瞳から大粒の涙が溢れ出る…。

「泣かないでエレノア…可愛い顔が台無しだから…ほら…涙を拭っ
て…いつものように笑ってみせて…！」

エレノアはリスタナに言われた通りに涙を拭う、とニッコリと笑っ
た。

「そうだよ…エレノア…いつも…笑顔を…忘れ…ない…で…」

「…リスタナ…？」

…エレノアの問いかけに、リスタナは目を瞑ったまま二度と応えな
かった…。

「…いやだ…死んじやいやだよリスタナ！ねえ！起きてよ！ねえ…
なんで…そんな…なんでなんだよおお！うわああああー！」

…少女は泣いた。

…大声で泣いた。

…とにかく泣いた。

…朝まで泣き続けた。

…凍てつく寒さの中…彼女の悲しみの涙が草原を濡らし続けた…い
つまでも…いつまでも…。

…それから七年の歳月が流れたある日のこと…丘の上の大木の下にある小さな墓の前に、エメラルドグリーンの髪と瞳をした少女が立っていた。

「…もうあれからずいぶん経った気がするなあ、リスタナ。実は…今日はお前に旅立ちの報告に来たんだ。お前の言ってた『夢』を探すために私は旅に出るってね。友達みんなそれぞれの道に進んだし、牧師様はもうこの世にはいない…もうここにいる意味はないし心残りもないから…。いつてきますリスタナ…今更だけど…本当に

ありがとう…！」

少女は墓に小さな花をたむけると、静かに丘を下って行った。

…心に大きな決意を抱きながら…

第十七章 番外編 少女と旅人（後書き）

「…とまあ、こんな事もあったわけだよ」

「ふう〜ん…つまりノアちゃんのお銃は元々はリスタナさんの物だったんだ。ノアちゃんにも壮絶な過去があったんだね」

「まあ、確かにそうかもな…でも、あの出来事があったらこそ今の私があると思うんだよ…私がこうやって旅してさ、お前らと出会えたのもみんなリスタナのおかげなんだよ…だから…」

「だから？」

「いつか、また墓前に花をたむけに行きたいんだ…今は無理かも知れないけどね」

「その夢…ノアちゃんなら叶うよきつと…！」

「ああ…そうだな…」

…二人の少女は満天の星空を眺めていました…いつまでも…いつまでも…

第十八章 シーサイド・バトル（前書き）

さあ、いよいよ帝国最初の町でのお話しです。新しいキャラクターも登場しますので、最後まで楽しみながら読んでくださいね！
それでは、第十八章シーサイドバトルをお楽しみください。

第十八章 シーサイド・バトル

「あつ！みてみて！港が見えてきたよ！」
赤髪の少女がはしゃぎながら言った。

「あれがポリプの港さ！帝国の玄関だよ」

「へえ〜！ティーちゃん物知りだねえ！」

「いやあ、それほどでも〜！」

「あんまりいい気になるなよティティス！ロゼはとりあえず誰でも誉めるんだよ」

「そ、そうなのかエレノア？」

「そうさ！おまけに見た目によらずの下ネタマスターなんだ」

「え？いつわたしが下ネタ言ったの乳無しノアちゃん？」

「…今言つたるーがっ！」

「…なんか久しぶりだね…貧乳ネタ…」

「やかましいわっミーシャ！」

「俺、未だにお前ら三人のことが謎だよ…」

個性豊かな少年少女四人組の船旅も間もなく終りを告げようとしていた…そして、ここから新たな旅が始まるうとしていた…！

《コロッサルの思惑…そして本当の黒幕》

ここは共和国首都シランドのコロッサル大統領のプライベートルーム…コロッサルが黒くて大きな鏡に向かって何やら話していた。

「…そちらの世界の制圧準備はどんな調子だ？コロッサルよ…」

「はい、アンゴルモア様、全てにおいて順調にございます」

「…よろしい。…レクイエムの方はどうだ？」

「それが…予定より時間がかかりそうで…も、申し訳ございません！」

「…急ぐのだコロッサルよ…こちらの準備はすでに整っておる…お前が『ゲート』の封印さえ解いておけば、いつでも軍隊をそちらの世界に送り込めるのだ」

「わかっております…しかし、『ゲート』のある『バベルの塔』は聖なる力によって守られております故…もう少し時間がかかりそうです…」

「…聖人の子孫か…おそらくそこに『真実の鏡』もあるはず…。よいか？アレを人間共に渡してはならぬ…お前もわかっているだろうが…あの鏡は人間界に潜む我々魔物の正体をさらけだす力がある…同時に『赤い悪魔』の…お前の創造した人造人間、ロゼリアーヌ・ブラッディコアの力そのもの…万が一壊されて赤い悪魔に力を取り戻されたら…！…なんとしても赤い悪魔とその一行の息の根を止めるのだ…1000年前の落とし前を着けなくてはな…コロッサルよ…！」

「承知致しました…！」

…黒い鏡は再び静寂を取り戻し、目の前のコロッサルの姿を映し出した…。

《ポリプの港町》

ここはポリプの港町、新鮮な魚の並ぶ商店街を四人は歩いていた。

「うわあ〜！美味しそうなお魚さんがいっぱい！」

「…お前ホントいつでも食べることにしか考えてないよなロゼ」

「…まあ、それがロゼツタらしいんだけどね…」

「エへへ…」

「そういえば…ティティス、お前もなんか話しろよ！…どうしたんだよ黙っちゃって？」

先程から黙りっぱなしのティティスにエレノアが聞いた。

「あ、ああ…実はさ…俺、こつゆう生臭いの苦手で…気分が…ちよつとね」

「そ、そうなのか？大丈夫かお前？」

「ティーちゃん大丈夫？」

「…」

三人がティティスに心配そうに聞くと、

「心配するな…ちよつと海辺で風にあたって来るから先に行つててよ。なあに…すぐに戻るさ！」

そう言うのとティティスは海辺の方へと静かに向かつて行った…。

「…ティーちゃん、大丈夫かなあ？」

…ロゼツタが心配そうに言った。

「心配すんなつて！一応あれでも男なんだし大丈夫だろ？さっ！私達はアイツの分まで観光を楽しまないと！」

「さんせい！わたし、うな重が食べたいな〜！」

「私はやつぱし刺身だな！」

「…私…かにみそ…」

まったく、どこまでも気楽な三人組である。

ここはポリプの港町から少し離れた所にある船着き場。昼間なのにも関わらず何故か人影は無かった。

「ふう…ここなら問題ないだろう…それで？お前は何者なんだ？
ティティスが髪を掻きあげながら言う…何処からともなく水色の髪と瞳の少女が現れた…！」

「あら、気付いてたんだ…気配を消してたつもりだったんけどなあ…」

「大丈夫、気配はちゃんと消えてたさ。…だけどそれが逆に不自然だったんだよ」

「ふふふ…なんだ、そうだったんだあ…それで気付いたってわけね！」

「それだけじゃないさ…お前、自分では気付いていないみたいだが…もの凄い殺気だぜ？」

「そりゃそうよ…だって私、貴方達を殺すために来たんだもん！」

「なるほど…コロッサル大統領の差し金か…つまり…お前も魔物つてことか…！」

「…流石は元エフェクト、察しが早いね」

「元…？俺はクビになったのか？」

「…当たり前でしょ？貴方一体何日無断欠席してると思ってるのよティティス？」

「…クビは覚悟していたが…それよりもキサマ…なぜ俺の名を…！」

「…貴方達は重大な勘違いをしているわ。…私達魔物は貴方が何をしようとしているのか全て知ってるのよ？…貴女達が不思議な鏡（名前忘れたケド）を使って我々の正体をあばこうとしていることも、赤い悪魔を使ってレクイエムを倒そうとしていることも…貴方の同士がこの件に関わっていることもね…！」

「…キサマ…！」

「ふふふ…大丈夫、エフェクトのメンバーに手は出さないわ。奴らは国の治安を守るための切札ですもの。…もちろん、我々に手を出さなければの話だけどネ…！」

「ちっ…ずいぶんと余裕だなキサマ」

「…キサマつて止めてくれるテイティス？…私はアクアだよ」

「…じゃあ聞くがアクア、なぜこの俺を狙う？…町で後をつけてる時からお前の視線は俺に向いていたようだが？」

「テイティスつてホント観察力が凄いなだね！そう…確かに今日の狙いは貴方よテイティス。…シユナウザー様がまずは首謀者の貴方からつておしゃつてね…おわかりかな？」

「ああ…納得だよ…！」

「…それじゃあ…早速始めましょうか…？…もちろん、勝つのは私で、死ぬのは貴方だけどね…！！」

「やめとけよ…俺に触ると霜焼けになるぜ？」

「うふふ…今すぐにそんなキザな台詞を叩けなくしてあげるよ！」

そう言うと、アクアの周りに水の帯が形成された…！

「水の使い手が…！」

「喰らいなさい！ウォーターカッター！」

アクアを取り巻いていた水の帯が刃となつてテイティスに襲いかかる！

「だったらこつちはこれだ…アイスクォール！」

テイティスから凄まじい冷気が吹き出し、水の刃は空中であつという間に氷の刃に変わつて地面に落下した。

「…！！」

「今度はお返しだぜ！アイスクォール…！」

今度は氷の刃がアクアに襲いかかってきた！

「ちっ…！」

アクアは軽い身のこなしで氷の刃を交した…！…しかし、コンクリートの地面に命中した氷の刃の砕け散った破片がアクアの白い肌をか

すめた！

「きやつ…！」

…アクアの白い肌についた切傷から血がにじみ出た。

「…ぐつ…まさか私の攻撃をそのまま利用するなんてね…流石に普通の人間とは格が違うと言ったところかしら？」

「…怪我してる割にはずいぶんと余裕だなアクア…やっぱり何か秘策でもあるんだろう？」

「そうね…まあ、秘策ってゆうほどのものじゃないけど…」

すると、不思議な水の力によって彼女の傷はすぐさま癒えた。

「…！」

「…見た？多少のダメージだったらこの通りすぐさま回復できるわ！つまり…この能力がある限り貴方に勝ち目はないってことよ！」
そう言いながらアクアが海面に手をかざすと、巨大な水の竜が現れた！

「なっ…！」

「行けっ！水竜よっ！この者を飲み込んでしまいなさい！」

巨大な水竜が大きくうねりながらティティスに向かってきた！

「はっ！竜の形をしても所詮は海水の塊に過ぎない！…ならば動けないように凍らせるまでだぜっ！喰らえっ！コールド・バレル…！」

ティティスの掌から放たれた冷気の弾が水竜に命中すると水竜は力チカチに凍りつき、ガラガラと音を立てて崩れた…！だが、次から次へと新しい水竜がティティスに襲いかかってきた！

「アハハッ！甘いわねティティス！私がいれば水竜は何匹でも作り出せるのよ！諦めて大人しく死になさい！」

「このっ…！」

ティティスは次々と襲いかつてくる水竜に冷気を打ち込んで撃破するが、アクアによって水竜は次々と作り出されていく…きりがなかった。

「クソ！きりがなければ…このままじゃ魔力がもたねえ…とにかくあ

の厄介な水竜をなんとかしないと……」

「ほらほら！ぼさつとしてると死ぬよティティス！」

ティティスが考えている間にも水竜は容赦なく襲ってきた！

「うわっ！」

ギリギリの所で攻撃をかわす！

「……あまり気は進まないが……やはりここは本人を殺るしか……！」

ティティスがそう考えていた時、ふと近くの看板に目がとまった。

「……これだ……！」

するとティティスは何を思ったか、海面に向かって冷気の塊を連射した！

「……！？なんのつもりよティティス！？血迷ったの！？」

「そうじゃないさ……まあ、見てな！」

するとみるみるうちにティティスの放った冷気によって、海面は広い範囲で凍りついてしまったではないか！

「……！」

「ハハハハ！どうだ！海面が凍ってしまったては流石のお前も水竜は作れまい……害虫は元から駆除しないとね」

そう言いながらティティスは看板を指さした。『ゴキブリ・シロアリ等害虫を元からしっかりと駆除します〇×株式会社』

「なっ……よっ、よくもこの私を害虫扱いしたわね！」

「あ、いや別にそうゆうわけでは……」

「問答無用よ！海水が駄目なら……空気中の水分を集めて使うまでなんだからっ！」

怒ったアクアが右手をかざすと、そこに空気中の水分が集まり水の塊を形成し始めた。

「ほお……空気中の水分をこれだけ集められるとはね……なかなかやるなお前……！」

ティティスが半ば感心して言った。

「そんな余裕を言ってられるのも今のうちよティティス！今に貴方を……」

アクアが何か言いかけたその時だった…

…ズドン！

「ぎゃっ！」

一発の銃弾がアクアの右腕を貫いた！

「この技は…！」

「…っ誰だっ!?」

二人の視線の先には銃を構えたグリーンの髪と瞳の少女、そして…その両隣には真紅の髪と瞳を持つ少女と、白髪にブルーの瞳の少女が立っていた…！

「エレノア！ロゼッタ！…ついでにミーシャ！」

「なんだかよくわからんが…どうやら間に合ったようだなティティス！」

「ティーちゃんが心配になっでずっと探してたんだよ！…なんだかジャストタイミングみたいだったけどね！」

「…せっかく助太刀に来てあげたのについては酷いよティティス…」
ティティスの仲間の登場にアクアは思わず後退りした。

「ぐっ…！」

「おっと、動くなよ青いの！…今度は外さないよ…！」

エレノアが銃口をアクアに向けながら言った。

「これで形勢逆転だなアクア！さあ、どうする？」

ティティスが軽く嘲るように言うと…アクアは眉間にシワを寄せながら答えた。

「…いいわ…ティティス、今日の所は見逃してあげるわ…だけど…刺客はまだ他にもいるんだから…それを忘れないで…じゃあねティティス…次に私と会う時が…そう、貴方の命日だよ…！」

アクアは四人に背を向けると港の奥へと走り去って行った…。

「ふう…ひとまず終わったな」

「ティティス…あの女…何者なんだ？」

「うん、大統領の使いっぱしりだってよ」

「刺客つてわけか…厄介なことになったな」

「そうかなあ？敵ならテキトーに殺っちゃえばいいだけの話じゃない？」

「…ロゼッタ…今の…ダジャレ…？」

「さっすがミーちゃん！目のつけどころが違うね！ティーちゃんもそう思うよね？」

「そうだな、確かにミーシャは笑いがわかるやつだからな！」

「…お前ら…事の重大性をまったくわかってないだろう…？」

エレノアが溜め息をつきながら言った…。

《ふりかえれば…》

ここは夜の港、港に来る貨物を収容する倉庫の屋根の上に水色の髪と瞳の少女が座っていた。

「はあ…なんだろう…なんか調子悪いんだよなあ…」

…アクアが町の灯りを眺めながら言った。

「…そういえば…ティティスのやつ…あんまり積極的に攻撃してなかったような…まさか…手加減したのかな！？…いやいや、それはないよね…シユナウザー様の話だと彼は氷使いで心も氷のように冷たい奴だって言ってたし…でも…そんなに悪い人には見えなかった

なあ…仲間にも恵まれているみたいだし…ダメだ…私の任務は赤い悪魔とその仲間を抹殺すること…余計なことは考えなくていいんだ…！」

アクアは胸元からペンダントを取り出して中の写真を見つめた。

「そう…人間は私達魔物の敵なんだ…私の家族を殺し…私自身の居場所も奪った…だから…人間を許すわけにはいかないんだ…！とにかく…アジトに帰ったら、戦況報告をしないと…シヤクマは赤い悪魔にやられた傷がまだ癒えてないから…次に奴らに接触するとしたらサイコとドリマーだな…！四対四ねえ…じゃあ…ティティスは私の獲物だね」

アクアは立ち上がり微笑みながら言った。…そして、満天の星空を仰ぎながら最後にこんなことを呟くのだった。

「…ふりかえってよくよく考えてみたら…ティティスって結構カッコイイかも…」

《バルコニーの上で…》

「へ、へつくしよーい！あゝ…誰かが何処かで俺の噂してんな…」
ティティスが鼻をすすりながら言った。

…ここは四人の泊まるポリプの町のとあるホテルの部屋のバルコニー。夜風がティティスの白い髪を撫でていた…。

「やれやれ…今日一日町で鏡について情報を集めてみたもの…これといった収穫は無かったし…あーあ…こんなことなら、アクアと戦った時に手加減なんかしないでボコボコにして泣かせてから色

々聞き出せばよかつたかなあ…って、やっぱり魔物とはいえ一応女の子だったからなあ…ちよつとだけ可愛かったし」

「…へえ、そくだったんだあ…さてはティティス…お前、あの女の子に惚れたのか？」

部屋の中からバルコニーに、エレノアが作り笑顔をしながらやって来た。

「…げげっ!? エ、エレノア!? …聞いてたのか？」

「もちろんバツチリね! そーかそーか…お前はあーゆー女が好みなのかあ〜!」

「…エレノア…もしかして怒ってるのか？」

「別にい〜? ティティスが誰を好きになろうと私は知らないもん!」

「…やっぱり怒ってんだな？」

「…そうだよ…怒ってんよ…私がどれだけ心配してたって…ティティスはそんなことちつともわかってくれやしない…今日だって…本当は私が手助けなんかしなくても平気だったんでしょ…?」

「それは違うよエレノア…あの時のお前の援護射撃で俺が助かったのは紛れもない事実さ。」

「…もしかしてお前…ヤキモチ妬いているのか？」

「んなっ…!!? べ、別にヤキモチなんか…」

「…顔が真っ赤だぜエレノア？」

「う、うるさい! うるさい! うるさい!」

「ハハハ、お前ホントわかりやすいなあ…。…でも、お前がヤキモチ妬いてくれるなんてホント嬉しいよ」

「だ・か・らっ、妬いてなんかいないってば!」

その時、ロゼッタとミーシャがバルコニーにやって来た。

「あれあれ〜? もしかしてお邪魔だったかなノアちゃん？」

「…ホント…ラブラブだね…」

「なっ、なっ…べ、別にそんなんじゃあっ…」

「そんなに照れるなよ〜エレノア!」

「…お前も少しは恥ずかしがれよティティス!」

「そうか？エレノアが恥ずかしがり過ぎんだと俺は思うぞ？」

「そーそー！さっさとキスぐらいはしないとねっ！」

「いやあゝ、それは言い過ぎだよロゼッタ」

「ああ…今更ながらなんでお前らと友達やっつてんだろうね私って…」

「…それってさ…この物語のテーマを根本から覆す発言だよね…？」

…夜風の吹き抜けるバルコニーで四人の少年少女達は何気ない会話をしていた。そんな四人には不安の色などみじんも感じられなかった。そう、なぜならば…どんな困難にもこの四人なら立ち向かえるとゆう確信を互いに信じていたから…！

…町の灯かりと、満天の星空から放たれる聖なる輝きが、四人の影を照らしていた…。

第十八章 シーサイド・バトル（後書き）

さて、エレノアの可愛らしいヤキモチ、いかがでしたか？
それではまた次回にお会いしましょう。∴補償はありませんが。

第十九章 エデンの花園(前書き)

I have no belief in God.
Do you believe that God exists?

第十九章 エデンの花園

…燦々と降り注ぐ太陽の光の下、雲海の上を二体の召還獣が飛んでいた。そして、二体の背中には、少々風変わりな四人の少年少女が乗っていた。

「ギャルウ〜ン…」

「…ごめんねワニガワ…やっぱり三人じゃちょっと重いよね…」

「すまんなワイバーン…だけどこれでも体重には気をつけてるつもりなんだぜ？」

「…あんまり関係ないと思うよティティス」

「そんなことないさエレノア。ちなみにお前体重何キロよ？」

「…どう思う？」

「そうだなあ…エレノアはスリムで胸とか無いから軽そうかも」

「こっ、このやる〜！いつかナイスバディになって見返してやるからなティティス！」

「一生無理だね」

「〜っ！」

「…相変わらず仲がいい二人だねえ…」

「ギャル〜！」

ワイバーンの背中の中の三人の楽し気な様子を、グリフォンの背中からロゼッタが笑いながら眺めていた。

「アハハ！みんな楽しそうだね〜ヤキトリ！」

「そうですね！…ミーシャ様も昔に比べてなんだか穏やかになった気もしますし、人間の友情にはまるで何か不思議な力があるようですよねロゼッタさん！」

「…そうだね。…昔のわたしからじゃあ…こんな楽しいことなんてとても考えられなかったのにね…」

何故か、その台詞を言った時のロゼッタの笑みはどこか憂いている

ようだった…。

「ロゼッタさん…?」

「…ううん、なんでもないよヤキトリ。…ところで次は何処へ行くの?」

「さあ?…なんでも情報を集めないと始まらないそうぞ…とりあえずこの先にある小さな村に行く予定だそうです」

「ふう〜ん…」

「あつ、見えてきましたね!あの村ですよ」

…雲の隙間から、緑の大地に転々と点在する小さな集落が見えてきた。

「…降りるよ…ワニガワ、ヤキトリ…」

「りょーかい!」

「ギャウ!」

二匹の召還獣は、そのまま雲の波間に消えて行くのでした…。

《この時が…》

「…つい到这里まで来たかアゲハよ…そして世界を救いし新たな聖人達よ…さあ…ここまで来るがよい…そう…エデンの花園まで…」

《不思議な場所》

四人は村長の家に挨拶も兼ねて、『真実の鏡』の情報を求めて来ていた。

「…この地に旅人が来るのは何年ぶりじやろうか…歓迎致しますぞ」
「あの…、歓迎はいいんですけど…ちょっと聞きたいことがありますまして…『真実の鏡』ってご存知ありませんか？」

テイテイスが聞くと、村長は少し考え込んでからこう答えた。

「わしは存じませんが…もしかしたら、大賢者様なら何か知ってるかも知れませんですよ」

「大賢者様…？」

「…そうです。この村の北にある『神の山』に住むと言われているお方です。…なんでも、千年前に赤い悪魔と戦った四聖人の一人だそうで…」

「…そいつの名前は？」

突然、ロゼッタが話に割り込んで聞いてきた。

「おい！失礼だろロゼ！」

エレノアが注意するが彼女はなおも続ける。

「…そいつの名前は、と聞いている…！」

ロゼッタの紅い瞳が村長を脅迫するかのように見つけた…！

「…い、いや…それが…名前までは流石にわかりませんよ…」

「そうか…」

…それからしばらくの間妙な沈黙が続いた…。

村長の家から出た後の事…明らかにロゼッタの様子はいつもと違っていた。

「一体どうしちゃったんだよロゼ？今日のお前…なんか変だぞ？」
エレノアがロゼッタに言った。

「別に？いつもと何ら変わらないけど？」

…しかし、彼女の視線は明らかにいつもよりも鋭かった。
「…！」

エレノアは、この時の彼女に恐怖すら覚えた…。

「と、とりあえずさあ、その大賢者様とやらに会って鏡についての情報とかを聞いてみようぜ？」

テイテイスがその場を取り繕うように言った。

「…それもそうだな。ミーシャ、頼む」

「…召還だね…わかった…いでよ！召還獣…！」

ミーシャは神の山に飛んで行くためにワイバーンとグリフォンを召還しようとした…だが、ここで予想外の出来事が起こった…！

「…あれ…！？…魔法が…出ない…！？…なんで…！？？」

「なに！？どうゆうことだよミーシャ！？」

「…さあ…？…私にも…わからないよエレノア…！」

「失敗したんじゃないのか？」

「…それはないよテイテイス…失敗したとしても何かしらの反応があるはず…でも…これは…まるで…！」

「まるで魔法をかき消されたようだ…でしょ？」

ロゼツタが言った。

「…え…うん…ロゼツタの言う通りだよ…」

「おそらく結界の一種だね…この地域一帯の魔力を抑制してるんだと思うよ…多分、ある一定レベル以上の魔力は無効化されるね」

「…てことは…」

テイテイスが試しに右手に冷気を込めようと試みるが…やはり何かの不思議な力によってかき消された…！

「やっぱしダメか…！」

「ロゼ、お前…何か知っているのか？」

エレノアが聞くと…

「…わたしは何も知らないよ…ただ…心当たりがあるだけ」

ロゼツタは静かにそう答えた。

「心当たり…？」

「とにかく行って見ないことには始まらないよ…さ、行こうか…！」
「行くつて…今から歩いて行ったら夜になっちまうぞロゼッタ！」
「…心配いらないよティティス…魔力が抑制されている限り魔物の類は活動出来ないし…こつちにはノアちゃんの銃もある…それに…」
「それに…？」
「…夜の闇はわたしの味方だから…！」
ロゼッタは不気味な微笑みを浮かべながら言い放った…！
「…決まりだね…行こう、みんな…」
…ミーシャがその場を取り仕切るように淡々と言った…。

《…千年前の因縁》

…四人が神の山を登り始めてから三時間余り、日は既に暮れ、星灯かりを頼りに山頂を目指していた。名前の割にはたいした傾斜や障害も無く、いつもだったらピクニク気分のところだが…辺りには重苦しい空気が流れていた…。
「今日のロゼッタ…なんだかピリピリしてないか？」
さつきから無言で先頭を黙々と歩くロゼッタの後ろで、ティティスが二人にのみみうちした。
「そんなのとづくにそう思ってるよ…！…あんなロゼを見るのは始めてだよ」
「…問題は…どうしてロゼッタがピリピリしているのかだね…なんか心当たりないの…？」
「さあ…俺はまだ知り合って日が浅いから…エレノアはどうなんだよそこんところ？この三人の中で一番付き合い長いんだろ？」
「そんなことわからないよっ…！…アイツは過去の事についてはあま

り話してくれないんだよ。…ただ…」

「…ただ？」

「…ロゼは千年前に四聖人によって封印されているんだ」

「何故？」

「理由は定かではないが…ロゼが暴走して世界を破壊しようとしたからだよ…私が遺跡で彼女を目覚めさせるまでの千年間、ロゼはずっと封印されていたんだよ」

「封印って…そんなに簡単に解除できるものなのか？」

「そこなんだよ。…実は私、四聖人の子孫らしいんだ。…だから封印を解除できた…らしい」

「らしいって…わからないのか？」

「確証が無い以上、あくまで推測なんだよ」

「なるほど…つまりロゼツタがこの山の上にいるかも知れない元四聖人の一人である大賢者に恨みを持つてもおかしくないってわけだな」

「…でも…もし…そうだとしたら…一つ矛盾が生まれるよね…？」

「どうゆうことだよミーシャ？」

「俺達にもわかるように説明してくれよ」

二人が不思議そうな顔で聞くと、ミーシャが淡々と話し始めた。

「…ロゼツタが聖人を恨んでいるとしたら…当然、その血を引くエレノア…貴女も恨まれるのが筋のはず…でも彼女にそんな素振りは無かったし…むしろその逆だったわ…ロゼツタは本当に私達と仲良くしてくれた…」

「確かに…言われてみるとそうかも…」

「…きつと…ロゼツタには…私達の想像以上に複雑な事情があると思うの…そう…それこそ今まで誰にも言えなかった事情が…！」

「複雑な事情…！？」

「…それが何かは私達にはわからないけど…この山の頂上に行けば…あるいは…大賢者様に会えば…ロゼツタに纏わる謎が解けるかも知れない…だから…今は前に進むしかないと思うよ」

「どうやら事はそんなに簡単ではないみたいだな」

「ロゼと出会ってから…アイツの秘密を解き明かすために旅を続けてきたが…ついに…この先にロゼの秘密が…！」

…エレノアの鼓動は高鳴った。

「みんな〜！…頂上に着いたよ！」

ロゼツタが後ろの三人に向かって言った。

「みんな来てみなよ！…綺麗だからさ！」

ロゼツタの呼びかけに応じて三人が山頂に向かってみると…そこには息を飲む美しい光景が広がっていた…！

「これは…！」

「…綺麗…！」

「コイツはスゲーぜ！…まるで伝説に出てくるエデンの園だな」

四人の目の前には一面の美しいお花畑が広がっていた。…咲き誇る花々が、夜空に浮かぶ月と満天の星々の光を浴びてキラキラと輝いていた。

「…よくぞ来た…聖なる血を引く者とその仲間達…そして…千年ぶりだな…アゲハよ…！」

花園の奥から白い髪と髭を生やした初老の男が現れた…！

「貴方が…大賢者様？」

「ふふふ…そのような堅苦しい呼び方はやめておくれ…わしはエンドラーズ、かつて世界を救ったと言われている四聖人の一人だ」

「貴方が…！だったら聞きたいことがあるんですが…！」

「おい…このクソジジイ…このわたしを置いて話を進めるなよ…！」
エレノアとエンドラーズの会話にロゼツタが凄まじい気迫で割り込んできた…！

「ロ、ロゼ…！？」

「…すまんの若いの…わしはこやつと話をつけなくてはならんようだ…悪いがそちらの三人は下がっていてくれぬか？…後でちゃんと

話は聞かせてもらおうから…！」

「え、でも…」

エレノアが戸惑っていると、ロゼッタの様子を見ていた二人が言った。

「…どうやら言う通りにしたほうがよさそうだぜエレノア…！」

「…同感だね…下手したら…死ぬよ私達…！」

ロゼッタは鋭い牙を剥き出しにして、赤く鋭い瞳でエンドラーズを睨みつけていた…！

「…くそっ…！」

三人は後ろ髪を引かれる思いでロゼッタとエンドラーズのいる所から十メートル程後退った。

「…よくぞここまで来たなアゲハよ」

「黙れっ…！キサマ、よくもこのわたしを封印してくれたな…！」

「…すまないアゲハ…だが…ああでもしなければお前を止めることはできなかった…。千年前の約束…覚えてるか？」

「…もちろん。わたしが復活したら世界を救う手助けするってやつだろう？」

「覚えていてくれて嬉しいよアゲハ」

「…勘違いするなよエンドラーズ…わたしがあの三人に協力しているのは助けてもらった恩があるからだ…そしてもう一つ…極論を言うと、コロツサルを殺るとゆう共通の目的があるからであって、お前との約束を守るつもりも、世界を救うことに興味を持つつもりもない…！」

「…そうか…カエサルの復讐をするのだなアゲハ…」

「…そうさエンドラーズ…わたしは…なんの罪も無かった彼を殺したコロツサルを許すことはできない…！お前ら四聖人も同罪だ…あの時…あの時お前らがカエサルを利用しなければ…彼は死なずにすんだんだ…！」

「カエサルは自ら協力を志願したのだ…お前を救うためにな…それなのにお前は勝手に勘違いをしておって…これでは天国のカエサルが

喜ばんぞ！」

「黙れ！黙れ！黙れええええ！！キサマら人間に何がわかるというのだ！？この世界の破壊と殺戮の中でしか自分の存在を見出せないこのわたしの運命を…一体誰がわかるとゆうのだエンドラズ！もう話すのはやめだ。…千年の怨み…今…ここで晴らさせてもらう！」

…みるみるうちに、ロゼッタの赤い髪は長い黒髪へと変わっていった…そして…ロゼッタは、黒い衣装に身を包んだ黒い長髪の美しい大人の女性へと変貌した…！

「…ついに正体を現しおつたなアゲハ…いや…ロゼリアーヌ・ブラツディコア…！」

「…グルル…覚悟しやがれエンドラズ…！」

睨み合う二人の様子を遠巻きに見ていた三人は、話の内容がわからずに首を傾げていた。

「…あれがロゼッタ！？信じられない…なんて美しいんだ…！」

「んなこと言ってる場合かティティス！…全然話の内容がわからない…アゲハ？カエサル？ロゼリアーヌ…？…一体何のことなんだ？」

「…そんなの私が聞きたいよ…だけど…一つ確かなのは…千年前に何かがあったこと…そして…今…私達の目前で…とてつもない戦いが始まるうとして…いることだよ…！」

「そんな…ロゼ…！！！」

今まさに三人の見守る中、悪魔と聖人との戦いが始まるうとしていた…！

月明かりの中でロゼリアーヌの真紅の瞳は爛々と輝き、夜風に吹かれて彼女の長い黒髪は大きくなびいていた…。

第十九章 エデンの花園（後書き）

険悪な空気のまま終わってしまいました。がいかでしたか？次回では二人の因縁の対決が開始されます。果たして勝つのは…？？そして千年前の秘密とは一体何なのか…？？全ては次回を見てからの楽しみです。それでは、次回にまたお会いしましょう。

第二十章 Be the puppet of fate (前書き)

皆様のおかげで、小説ノスタルジアもいよいよ二十章目に突入です！
！節目の章と言うことでオマケの話があったり、この話や後書きを
読めば物語の流れがわかるようになっていたり、内容的にかなり
充実したものになっていますので楽しみにしててくださいね。

第二十章 Be the puppet of fate

漆黒の夜空に高くそびえる『神の山』…その頂上の『エデンの花園』
で今、二人の人物が千年の因縁に終止符を打とうとしていた…！

「…その様子だと、どうやら魔力は相当回復したようじゃなアゲハ
よ」

初老の男が言った。

「ふん…まだまだ全体の三分の一も回復してないよ…だが、お前の
ような老いぼれを痛め付けるには十分な魔力さエンドローズ…！」
赤い瞳の若い女が長い黒髪をかきあげながら言った。

「わしとてお前に負けるわけにはいかんのじゃよアゲハ…手加減は
せぬぞ…！」

そう言つてエンドローズが右手を空中にかざすと、淡い光の中から
真っ白で豪華に装飾された杖が現れた…！

「…ライブベアラー…！どうやら愛用の杖は健在のようだな」

「さて、戦う前に一つ提案があるのじゃが…よろしいかな？」

「…なんだ？」

「…もしこの戦いでわしが勝つたら、お前さんには悪いが封印直前
に交した約束を守ってもらいたいんじゃないよ。…勝負で決めるんじや
から、お前とて異論は無いはず…！」

「…わたしに勝つたらだとお…？フ、フフフ…アーツハハハハハ
ッ…！！」

突然、ロゼリアー又は腹を抱えて笑いだした。

「…うわぁ…めちゃくちや笑ってるよ…一体…どうしちゃったんだ
ろっ…ロゼッタ…？」

…少し離れた所から二人の様子を見ていたミーシャが隣にいるエレ

ノアとティティスに言った。

「なんだかわからんが…性格変わり過ぎだろっアレは」
ティティスはロゼッタの変わり様に心底驚いていた。

「アレが…ロゼッタの本当の姿…!？」

エレノアは驚きを通り越して放心状態の様だ。

「アハハ！ハハハ！アーツハハハハハ！」

驚く三人とエンドラーズをよそに、ロゼリアーヌは相変わらず大笑いをしていた。

「何がそんなに可笑しいのじゃアゲハよ？」

エンドラーズがあえて冷静に聞いた。

「ハハハ…これが笑わずにいられるか。このわたしに勝つだと？笑わせるな…本気でわたしを殺せるとでも思っているのか？」

「…いつわしがお前を殺すと言った？」

「…なに…？」

「わしはお前を殺す気などはみじんもない。…第一、殺してしまえば約束を守らせることもできんからっ」

「…ではどうやってこのわたしに勝つと言うのだエンドラーズ？」

「勝つことは殺すことではない…勝利とは相手を説き伏せればそれでいいのじゃ。…今からそれを証明して魅せようぞアゲハ、いや…」

ロゼリアーヌ・ブラッディコアよ！」

「ほざけ人間風情がっ！キサマのような甘いこと吐かす奴がわたしは大嫌いなんだよ！」

そう言うと、ロゼリアーヌの爪と牙が鋭く伸びていった…！

「死ぬ！エンドラーズ！八つ裂きにしてやる！」

ロゼリアーヌがエンドラーズに向かって走り込み鋭い爪をふりかざした！

「むっつ！」

エンドラーズは素早く後ろに下がった！

バリバリガガガッー！！

ロゼリアーヌの鋭い爪による攻撃が描く弧は空を切り、地面もろとも咲き誇る花々を切り裂いた…辺りには無惨にも引き裂かれた花びらが舞い散った！

「ずいぶんと荒っぽい攻撃をするのう…じゃが、そんな適当な攻撃ではわたしには当たらんぞ？」

「チツ…避けたか…。…現段階のわたしの力では奴の結界による魔力の抑制で魔法の類は使えない…よって白兵戦でケリをつけようと思っていたが…予想以上に素早いジジイだぜ…！」

「ふおつふおつ、まだまだ体は元氣じゃよ！今度はこちらの番じゃ！喰らうがよい！ホーミング・ファイアー！」

エンドラーズの杖の先端から炎の球がロゼリアーヌめがけて発射された！

「はっ！そんなもの！」

直線的に飛んでくる炎の球を、ロゼリアーヌは軽い身のこなしでさりとかわした。

「フハハ！そんな低級魔法でこのわたしが…！」

「…それはどうかの？」

エンドラーズがそう言うか言わないかの次の瞬間、後方にそれていた炎の球がターンしてロゼリアーヌに襲いかかった！

「！…！」

ズガッ！ゴバアーツ！！

高温の炎の球が振り向きざまのロゼリアーヌに直撃した…！そして、またたく間にロゼリアーヌは燃え盛る火炎に包まれた！

「ロゼツタツ！！」

エレノアが燃え盛る火炎に向かって叫んだ。

「待ってる！今助けるからっ…！」

ロゼツタを助けだそうとエレノアは燃え盛る火炎に向かって走り出

した！

「バカ！やめるエレノア！」

走り出しそうとしたエレノアをティティスが後ろから無理やり押さえ付けて止めた。

「離せよっティティス！このままじゃロゼが…ロゼが…！」

「早まるなエレノア！彼女はこんなもんじゃ死なねえっ！それにお前がここで焼け死んだら元も子もないだろう！…落ち着くんだエレノア…！」

「大丈夫…あの娘はそう簡単にはくたばらないよ…それに…エンドローズ様はロゼツタを殺す気は無いって言ってたから…心配は無い…だと思っよ多分」

激しく取り乱すエレノアを、ティティスとミーシャが必死になだめた。

「でっ、でも…あの炎じゃタダでは済まないんじゃ…」

しかし、間もなくエレノアの心配とは裏腹の出来事が起こった。

「…やれやれ…こんなぬるい炎じゃあ火傷どころか暖まりもしないよ…」

エンドローズと三人の目の前で燃え盛っていた炎は瞬く間に勢いを失い中から無傷のロゼリアーヌが姿を現した…驚くことに、炎が赤い光の帯となり彼女の体に吸い込まれていくではないか…！

「…特殊能力…！」

「そうさエンドローズ…低級魔法なら瞬時に吸収・無効化できる…まさかそのことを忘れたわけではないだろう？」

「もちろんじゃよアゲハ…どの程度魔力が回復しているか試してみただけだが…Lv.57の炎系魔法を低級扱いしてるところをみると相当回復が進んでいるようじゃな…！」

「当たり前だ！…なんせこの数ヶ月、エレノアの愛と栄養たっぷり美味しい手料理を食べてきたんだからなっ」

するとロゼリアーヌはクルリと向きを変え、エレノアに向かって笑顔で言った。

「心配かけてすまなかつたなエレノア：大丈夫、わたしは殺しても死なない女だから。…正直言ってお前がこの姿のわたしをどう思うのか：ずっと気になっていたんだ：いつかはこの本当の姿を見せなくちゃいけないって思ってたけど…もし…それでエレノア達が…わたしの事を嫌いになったら…また一人ぼっちになったら…そう考えたら…とてもそんなことできなかった」

「ロゼッタ…」

「けどそんな心配は無用だったみたいだね：エレノアが心配してくれて…わたし…とても嬉しかった…ありがとうエレノア：大好きだよ…でも…だからこそあなたを傷つけない…だからここは下がっていてよ…ああ、そうそう…今日の夜ご飯はノアちゃん特製のハンバーグがいいなあ…これが終わったら一緒にたべようねノアちゃん！」

ロゼリアー又はそう言つとエレノアに向かつて笑顔でVサインとウインクをしてみせた。

「…ったく…お前つてやつは…わかったよ…だけどあんまり無理はすんなよロゼ」

…エレノアは笑顔で返事を返した。

「…これでロゼッタがエンドラーズ様を殺しちゃったら…私達、完全に悪者だよね…」

「おいおいエレノア！ロゼッタに四聖人の一人を殺されちゃったら世界を救えないじゃんかよ！」

二人が言つと、エレノアは静かにこう答えた。

「確かに…私達には世界を救う義務があるのかも知れない…そのために私達はこの戦いを止めるべきなのかも知れない…けど…この戦いはそれ以上に彼女の…ロゼッタ自身の戦いなんだ…千年前に何があつたのかは私達にはわからない…でも彼女がこの戦いを望むなら…それを止める権利は誰にもないと思うんだ…例えば世界を救う事が神から与えられた運命だとしてもな…！」

「エレノア…お前…」

「…時には運命に逆らうことも必要なのかも知れないね…今がその時だと言つのならば…私達は彼女を黙って見守ってあげるべきなのかもね…」

そして、三人は再び無言でロゼリアーヌとエンドラーズの二人の戦いを見つめるのだった…。そう…千年もの時を越えた戦いを…！！

《vs・召還獣》

「さて…話は終わったかなアゲハよ？」

エンドラーズが言った。

「ああ…これで心置無くキサマと戦えるわけだなエンドラーズ」

「そうじゃな…ならば、わしもそろそろ本気でいくぞ！いでよ！我が召還獣達よ！！」

エンドラーズが手を天に向かってかざすと、一瞬辺りが明るくなった。…そして、その光の中から三体の召還獣が姿を現した…！

「…あつ、あれは…めえ鷓に極楽鳥…それに…ダブルヘッドドラゴン…！！？」

「知ってるのかミーシャ？」

驚くミーシャにエレノアが聞いた。

「…うん…本で読んだことしかないけど…いずれも上位召還獣で…あの赤っぽい鳥が極楽鳥…猿の頭と狸の胴体、虎の手足と蛇の尾を持つのが鷓…巨大で頭の二つあるドラゴンがダブルヘッドドラゴンだよ…！」

「なんだかすごい名前ばかりだな…そいつらって強いのか？」

ティティスが質問した。

「…もちろんだよ…私の召還獣のワイバーンとグリフォンも一応…中級の召還獣なんだけどその数倍は強いでしょうね…ましてやそれ

を三体同時召還するなんて…やっぱりタダ者じゃないね…！」

「ロゼは…あの三体に勝てるのか？」

「…そればっかしはわからないよエレノア…おそらく誰にもね…彼女の強さにはまだまだ不明な点が多いから…でも、少なくとも彼女に負ける気は無さそうだけどね」

三人の視線の先のロゼリアー又は三体の召還獣を目の前にしてもそれほど驚く様子もなく、むしろ楽しそうにこう言った

「三体同時召還か…なかなかしゃれたことしてくれるねえ…！」

「あまり油断しない方がいいぞアゲハ…行け！」

「ギシャー！」

まず、鵜がロゼリアー又に向かって襲いかかってきた！

「…まずは一体…！」

こちらに向かつてくる鵜に対して、ロゼリアー又は大胆にも正面から切りつけた！

…ヒュツッ！バガアツッ！ビシャアツッ！

…ふりおろしたロゼリアー又の鋭い爪が、鵜の猿の頭を粉々に吹き飛ばした…！

「グルアー…！」

次にダブルヘッドドラゴンがロゼリアー又の前に立ちはだかった！

ゴオオオオオオ…！！

なんとダブルヘッドドラゴンは二つの口から灼熱の炎を吐き出してきた！

「チッ！」

ロゼリアー又は空高くジャンプして攻撃をかわした…！ドラゴンの吐いた炎が地を履い辺りは火の海と化した…！

「このっ…！邪魔だ、くたばれトカゲ野郎！」

ロゼリアー又は頭上からドラゴンめがけて落下しながら両手の爪をふりかざした！

ザシユウウウツッ！！ブシャアアアア！！

…ロゼリアーヌの左右の手の爪が、ダブルヘッドドラゴンの二つの首をそれぞれ容赦無く切断した…辺りには血のシャワーが降り注ぎ、火の海を消し去った…！

「ふう…危ないところ…」

…バサバサバサツ！

「ギエエー！」

ドガツ！

地面に着地したロゼリアーヌが一瞬気を抜いた瞬間だった…空中から極楽鳥が鋭い爪をロゼリアーヌの脇腹に突き立ててきた！

「ぐあっ…！」

ロゼリアーヌはそのまま地面に押し倒され、極楽鳥の鋭い嘴がロゼリアーヌの頭部を襲った！

ガガツ！

「ギャツ…！」

ロゼリアーヌの頭から血が飛び散った。だが極楽鳥は容赦無くもう一度その鋭い嘴をふりおろしてきた！

「…このおっ！調子に乗るなよクソ鳥！」

…ギャンツ！

「ピッ…」

ズガアアツ！！

ロゼリアーヌの会心の一撃が極楽鳥をバラバラに引き裂いた!!
「ハアツ…ハアツ…お、おのれ…」

ロゼリアーヌはフラフラと立ち上がった…頭や体から血が滴る…。

「危ないっロゼー!!」

エレノアの叫び声に驚いて後ろを振り返ると、頭の無くなった鵜が立ち上がっているではないか!

「んなっ…」

キイイーン…ドウンツ…!

残った尾の蛇の口からエネルギーの塊が高速で発射された!

「…!!!」

ドガアツ…!

「うぎゃあっ!!」

エネルギーの塊はロゼリアーヌの左半身に命中し、ロゼリアーヌは上半身の左半分を吹き飛ばされてしまった…!!

「ロゼー!!」

「ロゼッタ!!」

「…ロゼッタ…!!」

「…ぐっ…心配するな…たいしたことないから…!!」

心配する三人にロゼリアーヌは痛みを堪えながら言った…だが、吹き飛んだ左上半身は焼けただれて煙が立ち上りそこからおびただしい量の血液がポタポタと滝のように流れていた…!!

「シヤアアアア…!!」

鵜がロゼリアーヌに飛びかかってきた!

「わたしをナメるなこの雑魚があっ…!!」

ザシュツ！ドガツ！ブシャアツ！！

「ギャツ」

ロゼリアーヌは怒りに身を任せ、残された右腕を使ってこれでもかと言わんばかりに鵜を八つ裂きにした…！

「フフ…フハハハハハ！見たか！この程度の召還獣じゃわたしは倒せないんだよエンドラーズ…」

…が、彼女の視界にエンドラーズの姿はなかった。

「！？くそっ！どこに行きやがっ」

「ここじゃよアゲハ！」

ロゼリアーヌがとつさに声のする方を向くと、既にエンドラーズが自分のすぐ近くにいた…！

「…！しまっ」

「これで終わりじゃロゼリアーヌ！喰らえっ！ストライク・ワンド」

パッカーンツ！！

鋭い杖での一撃がロゼリアーヌの頭にクリティカルヒットした…！

「バカな…このわたしが…負け…た…？」

ロゼリアーヌはそのまま吹き飛ばされ、地面に仰向けに倒れた…戦いは…終わった…。

「…どうやら決着がついたようじゃな」

エンドラーズが髭をなでながら言った。

「ロゼ…！」

一部始終を見ていた三人がロゼリアーヌのもとへ駆け寄ってきた。

「ロゼ！大丈夫か！？」

「…ロゼツタ…！」

「大丈夫、気を失っているだけじゃよ」

心配する三人にエンドラーズが優しく言った。

「そうか…よかった…」
三人はホッと胸をなでおろした。
「さて…彼女が大人しくなったところでそろそろ本題に入るかのう」
「本題…って…なんすか？」
ティティスが聞くと、エンドラーズはきっぱりこう答えた。
「…世界の運命を決める話じゃよ…！」
「…！」
「とりあえずお主らに見て貰いたい物があるんじやが…様々な質問等はそこに向かう途中でもよいじやろう？」
「…わかりました…行こう…エレノア…ティティス…」
「おうよ。…行くぞ、エレノア」
ポロボロに傷ついたロゼリアーヌの横にうつ向き加減で座り込んでいるエレノアにティティスが言うと、
「…私はここに残るよ…だから…二人は先に行つてて…」
「先に行つてて…それじゃあ困るんじや…」
「…いいからっ！…私のことは構わないで…！」
「エレノア…」
「…行こうティティス…今は…エレノアとロゼッタを…二人きりにしてあげよう…」
「…ミーシャが何かを悟ったように言った。
「…わかった…」
「決まりじゃな…わしについてきなされ」
エンドラーズに導かれ、ティティスとミーシャは二人のもとを後にした…。

一面のお花畑の中を、三人は歩いていった。

「…この花はエンドローズ様が植えられたのですか…?」

「いやいやそうではない…遙か昔に古代の人々が植えたのじゃよ…このお花畑は何千年もの間、ここで咲き誇っているのじゃ」

「…実に父の葬式以来百年ぶりになりますか…お体の調子はどうなんでしょうかエンドローズ様…?」

「それは心配いらんよミーシャ。そうか…ファロウエラ先生が亡くなられてからもう百年も経ったのか…時の流れは速いものじゃな」

「…そうですね…」

親しげに話すミーシャとエンドローズにティティスが不思議そうにこう聞いた。

「あ、あのさ…二人はどんな関係なんだよ?」

するとエンドローズが答えた。

「ミーシャの父は…ファロウエラ先生はわしの魔法の先生だったんじゃよ…旧世界が滅んだ後の新世界再建に貢献した立派な人物じゃったよ」

「旧世界…?新世界再建…?…わ、わけがわからないのですが…?」

「…そうか…お主は何も知らんのだな…話してはおらんのかミーシャよ?」

「…ええ…ロゼッタにもエレノアにも…誰にも話していませんが…」

「なぜじゃ?…仲間なんじゃし…少しくらいは教えておいてもよかつたのでは…?」

するとミーシャは静かにこう言った。

「…父は…私にこの話をした時にこう忠告しています…今を生きる全ての人々は現在存在するこの世界を唯一の世界と信じている…だから…旧世界とそれが滅びた経緯は軽はずみに話すなど…!」

「…何を言っただよミーシャ…わけがわからんぜ…?」

「…この千年間…旧世界と新世界の関係を明かす事は長年のタブーとされてきました…その暗黙のルールを破ると言うのですか…エン

ドラーズ様……？」

「……確かに……この件は長年のタブーとされてきた……じゃが、これから新たな世界を切り開いていく者達には……つまり、お主達には今のこの世界が何故生まれたのか……もつと言えば、旧世界と新世界の存在を知る権利があると思うのじゃよ……何も話さなければ何も始まりはしないじゃろうよ」

「……そうですね……わかりました……ティティス……今から私の話す事を……よく聞いてね……いい……落ち着いて聞いてよ……！」

「あ、ああ……わかった……」

ミーシャの真剣な眼差しに、ティティスは息を飲んだ……！

「……遙か数千年もの昔……この世界はただ一つの巨大な大陸とその周囲の小さな島々で成り立っていたの……そして世界をナタリア帝国と言う巨大国家が支配していた……私達現代人が超古代文明と呼んでいるのは当時のナタリア帝国のことよ……そして……彼らの科学力は現在とは比べ物にならないくらい優れていた……それこそ宇宙に進出するくらいにね……！」

「宇宙……でも、なんでそんな凄い国が滅んじまったんだよ？……つーか今ある大陸は西と東の二つだし……わからないことだらけだぞ？」

「……慌てないですよ……今からちゃんと説明するんだから……ある日……ナタリア帝国はその優れた科学力の全てを注いで究極の兵器を造り上げた……それが『赤い悪魔』よ……ところがある日突然、赤い悪魔が暴走してその圧倒的な力で世界を滅ぼしてしまった……赤い悪魔の攻撃によって大陸は二つに分断され、現在の西と東の大陸になった……大陸の間にあるジパング等の島々はその時に奇跡的に残った大陸の欠片なの……この出来事以降、世界が滅びる前を旧世界、その後構成された新しい世界を新世界と呼ぶようになった……と、こんな話しよ……」

「おいおいマジかよ……それじゃあ……世界を滅ぼしたのはやっぱり……」

「……そう……ロゼッタに間違いはないよ……」

「でも信じられねえ…あんな可愛いくて良い子のロゼッタが…世界を滅ぼしちまったなんて…！」

「…私だってそう思うよ…だけど…これは紛れもない歴史上の事実…認めるしかないのよ…」

「認めるって…」

「…だけど…赤い悪魔については…彼女については知らないことが多すぎる…だから…ここに来た…」

「まさかお前…最初から…！」

「…そう…赤い悪魔の秘密を明らかにするために、直接戦ったことのあるエンドラーズ様に会うためにここに来たのよ…幸い…私は貴方達の移動手段を担っているから…思っていたよりすんなりいったよ…」

「てめえっ…！」

「…ゴメン…別に騙すつもりは無かったの……だけど…ロゼッタの前でこんなこと言えなかったから…それで…」

ミーシャはうつ向きながらティティスに詫びた

「どうかミーシャを許してやっておくれティティス…彼女は彼女なりに一生懸命にやっつたつもりなんじゃよ…」

「…別に彼女を責めるつもりはないツスよ…それより…世界の成り立ちについてはわかりましたから今度は赤い悪魔について伺いたいのですが？」

「…わかった…赤い悪魔についてはわしから話そう…」
エンドラーズは静かに話を始めた…。

《スカーレット・アイズ・デビル 破壊神シヴァのごとく》

…ここはエデンの花園の一角…花の香りに混じって血の匂いが辺り

を漂っていた…。

「…ん…あれ…わたしは…??」

ようやく気絶していた全身（左上半身無いケド）傷だらけのロゼリアーヌが目を覚ました。

「…ロゼ！よかった…気がついたんだな…！」

エレノアが嬉しそうに言った。

「…エレノア…？ああ…そうだ…確か…わたしはエンドラースと戦って…そうか…負けたのだなわたしは…。」

「ロゼツタ…」

「…ふっ…まあ、別にどうでもいいかそんなこと…それよりも…ありがとうエレノア…わたしを心配しなくて側に来てくれてたんだろっ？」

「あ、当たり前だっ！まったく、無茶しやがってこの野郎！」

「アハ、ゴメンゴメン！…それにしてもエンドラースめ、このわたしを痛めつけやがって…おかげで自慢のサラサラロングヘアは痛むし、ツルツルお肌は荒れるし…てゆうか、女の顔を殴るか普通！？しかも杖で！女は顔が命だっ！の！あのヒゲジジイ、次に会ったらあのヒゲ全部引っこ抜いてやるか」

「いや…あのさあ…普通にさ…破れた服とか…その傷の心配をした方がいいんじゃないのか」

ロゼ…？」

「ああ、これか？それなら心配ないさ！…まあ、見ててよ！」

…ロゼリアーヌの体が赤い光をおび始めるとみるみるうちに傷口が塞がり、吹き飛んだ左上半身が再生し、千切れた左腕が生えてきた…そして、それとほぼ同時に破れた純黒のドレスが元に戻っていった…！

「なっ…スゲエ…！」

「うーん、流石に血の染みと臭いまではとれないか…この衣装はわたしの魔力で作りに出したものだから傷と同じで再生可能なんだよ！

便利でしょ？…なんならエレノアにも一着作ってあげようか？サー
ビスで百万円にしといたげるから」

「いらぬよ高いから！っーか腕まで生えてくるなんて…お前はト
カゲかつっーの！」

「アハハ…やっぱりエレノアと一緒にいてくれるとなんだか楽しい
んだよね…」

「な、なんだよ急に…どうしたんだよ？」

…ロゼリアー又はしばらくの間、痛んだ髪の毛をいじくりながら考
え込んでいたが、やがて頭を一振りして髪をかきあげると、静かに
きりだした。

「…エレノアは…わたしの過去のことを知りたくはないのか？」

「…は？なぜそんなことを聞くんだよロゼ？」

「…ミーシャもテイティスも…裏ではわたしのことを何かと探つて
いる…もちろん、だからって別に二人のことを嫌いになつたりはし
ない…なぜならば…人間は知らない事を知ろうとする生き物だか
らね…なのに…エレノアはそうしなかつた…なぜなのか教えてくれ
…わたしには…理解できないから…」

「いや…そんなこと言われてもなあ…正直なところ、私だつてお
前の過去は知りたいさ…だけど…それでお前が悲しい思いをするの
ならば…私はお前の過去を知ろうとは思わないから…」

「…そうか…お前は本当に優しいんだなエレノア」

「よ、よせやい！て、照れるだろ！」

「だけど…いつまでも秘密にしておくわけにもいくまい…いい機会
だし…聞いてくれるかいエレノア？…わたしの秘密を…！」

「…もちろん…その覚悟は出来てるさ…！」

「ウフフ、相変わらずオーバーなんだから…それじゃあ始めるか…
！」

ロゼリアー又は一息置くと、落ち着いた様子で話し始めた…。

「…わたしの本名はロゼリアー又・ブラッディコア、通称『アゲハ』
…千年と少し前にナタリア帝国で…コロツサルによって創られた古

代の破壊兵器だ」

「コロツサルって…ま、まさか…!？」

「そう…共和国大統領…コロツサル・ゾルゲさ…奴はわたしを創造した義父であり…」

…そして…」

「…そして？」

「…いや…なんでもないんだ…他にも色々言うべきことは沢山あるんだが…色々と予備知識も必要だろうし…詳しいことはまた今度ね…さて と、傷も癒えたことだし…行こうかエレノア？」

「行くって…どこに？」

エレノアが質問するとロゼリアー又は鋭い犬歯を見せるように笑いながらこう言い放った。

「…宇宙への扉さ…!」

《バベルとサテライト》

ミーシャとティティス、そしてエンドラーズの三人は高さ十メートル程の円柱状の建物の前に来ていた。

「1111は…?」

「通称、『バベルの塔』じゃよ」

「塔って…なんだかずいぶんと小さいなあ…」

「…そんなの当たり前よ…だって本物の塔じゃあないもん…」

「…????」

「まあ、とりあえず建物の中に入ってから説明しよう…ささ、行くぞい」

その建物の扉は自動で開いた。…建物内部は薄暗く、一階には沢山の精密機械が置かれていた。二階に上がってみると屋根は無く、床に不思議な形をした魔法陣が描かれていた…魔法陣の中央には石でできた細長い台のような物があった。

「これは…一体…？」

「これがバベルの塔の本体じゃよ…『真実の鏡』はこの先にある…！」

「この先って…どの先…？」

「…この空の更の上に…」

「…多目的宇宙空間施設『サテライト』だろ？」

…エンドラーズの言葉にロゼリアーヌが口を挟んだ。

「…ロゼッタ…それに…エレノア…！！」

「待たせたな二人共！…真実の鏡についてはここに来るまでにロゼッタから聞いたぜ！」

「…『真実の鏡』はこのわたしを封印した際に没収した魔力を使って作り出された道具…そしてその能力は、人間に化けた魔物をあばくこと。…それと同時に『魔界』と、こちらの世界を繋ぐ『ゲート』を封印している神器であるんだ…！」

「アゲハ…何故そのことを…お前はその時既に封印されていたはず…！」

「…コイツが教えてくれたのさ…！」

そう言つて、ロゼリアーヌはエレノアの鞆の中から一冊の古い本を取り出した…！

「それは…？」

「まだわたしがエレノアと二人で旅していた頃にマンバの図書館で見つけた古文書さ…ここに全てが書いてあつたよ…！」

「…そうか…お前は千年前の文字が読めるのだったな」

「ちよ、ちよつと待って！話がめちやくちやだよ！俺にもわかるように説明してくれよ…！」

ティティスが頭をかきむしりながら言った。

「…だつてさ、エンドドラーズ…お前が説明してやれば？」
ロゼリアーヌがニヤリと笑いながら言った。

「…そうじゃな…わかった…これまでの経緯をまとめて話すとしてよ
う…！」

エンドドラーズはエレノアとティティス、ついでにミーシャとロゼリアーヌにもこれまでの話の内容をまとめて話した…。

「…なるほどなるほど…つまりロゼッタの本名はロゼリアーヌ・ブラッディコアで通称はアゲハ…千年以上前に旧世界の文明が創り出した破壊兵器で…千年前に世界を滅ぼし、その後の世界を新世界と呼ぶようになった…と、まあ…概要はこんなものか…」
エレノアが説明を反復するように言った。

「…だけど…一つ納得できないことが…『カエサル』とは一体何者なんだ…？」

ティティスがエンドドラーズに質問した。

「それはじゃな…」

エンドドラーズが何かを話そうとしたその時だった…

「キサマ…それ以上何か喋ったら…この山ごと吹き飛ばしてやる…
！！それともう一つ…カエサルの名前を気安く呼ぶなっ人間風情が
っ…！！」

ロゼリアーヌの燃え盛る炎のように赤く鋭い眼光が、その場にいた全員を睨みつけた…その瞬間、その場の空気は凍りつき凄まじい殺気に包まれた…四人は彼女の前で『カエサル』について触れることは死ぬことに同じだとすぐに理解したのだった…！

「…とにかく…落ち着いてよロゼッタ…エンドドラーズ様…その話はいもういいですから…それよりも『バベル』と『サテライト』についての話をお願いします…」

流星はミーシャ、冷静にその場の空気をなだめると、エンドドラーズに話を進めるように促した。

「そ、そうじゃな…バベルはこの星の遥か上空の軌道を回っている宇宙施設サテライトへとつながる電磁エレベーターシステムだ…そ

して…サテライトに真実の鏡はある…！じゃが…バベルを機動させるには専用のカードキーが必要なんじゃないが…そのカードキーを管理しているのはわたしとは別の聖人だったんだが…肝心のカードキーが行方不明でな…この大陸の何処かにあるのは確かなんじゃないがのう」

「…つまり、それを俺達に探して持って来いって言うんだろ？」

「…その通りじゃ少年よ…バベルは宇宙への入口であると同時に、設定を少し変えれば『魔界』への扉にも成りうる…故に残念ながらわたしはこの山を守らなくてはならない…だから…ここから離れることは出来ないのじゃよ」

「…魔界…？知ってるかエレノア？」

「私知ってるわけじゃないでしょーが！」

「…魔界って言うのは…名前の通り魔物の支配する世界で…私達の住むこの世界とは少し違う次元にあるの…でも…バベルの機能を悪用して誰かが魔界への扉を開いてしまったら…！！」

「この世界が大変なことになると…そう言いたいんだなミーシャ？」

「…そう…おそらく…コロッサルも手を出してくるはず…だから…カードキーは絶対に私達が手に入れないと…！」

「おうよ！トレジャーハンターの名に賭けて必ず私達のモノにするぜ！」

「あれ？…そうか、お前って一応トレジャーハンターだったんだっけ？すっかり忘れてたよ」

「な、なんだとっティティス！」

「ハハハ、冗談だよエレノア！…まあ、俺はお前の行く所なら何処にでもついて行くつもりだがな！」

「…頼りにしてるよティティス」

「ふおっふおっ！どうやらそちらの三人は決心がついたようじゃな…お前はどうするつもりなんじゃアゲハよ？」

終始不機嫌な様子のロゼリアー又は、しばらく腕組みしながら考えた後にこう言った。

「どーするもこーするも…負けちゃったからには仕方あるまい…お

前とな約束を守ってこいつらと運命を共にするよ…！」

「…決まりじゃな…世界の運命はお主らに掛つていると言っても過言ではない…頼んだぞ…若き救世主達よ…！」

エンドラーズの言葉に四人は決意を新たにするのであった…！丁度その時、朝日がお花畑を明るく照らし出した…すると、ロゼリアー又はみるみるうちに元の可愛いらしい赤髪の少女の姿に戻つていった…！

「ありやりや…やっぱし、昼間は仮の姿じゃないとまだダメみたいだねえ…！」

「もう朝か…そう言えば腹減つたなあ…！」

「正直言つて…朝からハンバーグ作るのは重労働だよ」

「…それよりも…これから山をくだつたら…ふもとに着くのはいつになるのやら…！」

四人が別々の意味でため息をついているとエンドラーズが笑いながら言った。

「フフフ…それなら心配せんでええよ！…ちよつとの間、目を瞑つておれ…！」

…四人が目を瞑つたその瞬間、辺りを淡い光が包み込んだ…！

《朝日と共に…》

…しばらく経つて四人が目を開いた時には既に四人は山のふもとにいた。…目の前には木々のまばらに生えた林が広がり、地平線から

は太陽が顔を出していた…。

「…エンドラーズ様のおかげで下山する手間が省けたみたいだね…
…それにしても…なんて綺麗な朝日なんだろう…」

ミーシャが淡々と、でも少し眩しそうに言った

「太陽にはあまりいい思い出はないんだけど…たまにはこうゆう
のもいいかもね!」

ロゼツタが笑顔でそう言った。

「雲も無いし…今日は良い天気になりそうだな〜!」

エレノアが嬉しそうに言った。

「あー…腹減った…」

ティティスは景色には興味が無いのか、つまらなそうに言った。

「さてと、目的もハッキリしたことだし…いよいよ今日から新しい
旅の第一歩が踏み出されるわけだ!」

「…でも基本的には何も変わらないような…?」

「そんなこと言うなよミーシャ! 大事なのは気持ちの問題なんだぜ
?」

「気持ちだけ思っても胸はちっとも大きくなれないけどねノアちゃ
ん!」

「ギヤハハ! 確かに俺もそう思うぜロゼツタ!」

「ほらほら、ティーちゃんにも言われちゃったよノアちゃん!」

「ふーん…そんなこと言っちゃうんだあお前ら…よーしわかった
! ロゼとティティスは朝ごはん又キだつ!」

「えっ!?!? でも…だってさつきハンバーグ作ってくれるって約束
したじゃんノアちゃん?!?」

「お、お前、俺達を飢え死にさせる気か!?!」

「生憎、私は今お前らの飯を作る気持ちにはなれないんだよね〜
! 私を日頃から貧乳扱いした罰さ。大丈夫、私とミーシャがお前ら

の分まで特製ハンバーグを堪能してやるからさっ!」

「そ、そんなあ〜! ヒドイよノアちゃん! 謝るからゆるしてお願
いだからっ!」

「頼むつエレノア！一生のお願いだから勘弁してくれ！なんでもするからっ！」

「じゃあ二人共一ヶ月間この私の下僕決定ね」

「そ、それはムリっ！」

「ま、まじで勘弁してくれって！」

「じゃあやつぱり朝飯又キね…私達が朝ごはん食べてる間にちゃんとお反省してねっ！」

「ご、ごめんなさいノアちゃんさま！ど、どうかお許しを…お、お願いだから朝ごはん食べさせてっ！」

「すまんエレノア！俺が悪かった！今度からお前を神として崇めるから…め、飯だけは食わせてくれー！」

「えっ、どーしよっかなっ…やつぱしやっだよっ」

「そ、そんなあ〜！」

「そ、そんなあー！」

ロゼッタとティティスは声を揃えて言うのだった。

「…ホント、騒がしい旅のパーティーだねえ…まあ…私的には面白可笑しくて…楽しくていいんだけどね…」

ミーシャがため息混じりに言った。…でも同時に彼女の口元は微妙に笑っていたのであった。彼女の200年間もの長きに渡り世界を映してきた宝石のように輝くコバルトブルーの瞳が、三人を優しく見つめていた…。

《お・ま・け》

エ 「ところで…さっきからずっと気になっていたことがあるんだが…」

□ 「なあに、ノアちゃん？」

エ 「お前の『ロゼッタ』って名前はどこから出てきたんだ？」

□ 「…知りたい？」

エ 「うん、知りたい」

□ 「それはねえ…わたしがテキトーにつけた名前！」

エ 「なんで新しい名前なんかつけたんだよ？」

□ 「うーん…その場の空気かな？」

工 「はぁ?…空気って…どんなんだよ?」

口

「温度と湿度、酸素と二酸化炭素濃度とか…かなあ?」

工

「……………???」

… To Be Next Time!

第二十章 B e t h e p u p p e t o f f a t e (後書き)

《キャラクター紹介SP》

ロゼリアーヌ・ブラッディコア(NORMALver.)

身長：166cm

体重：55kg

性別：

LV：66

HP：8700

MP：6500

攻撃力：7200

守備力：5000

素早さ：6300

賢さ：4000

運：2800

近接：4900

遠隔：3100

属性：炎・闇

通称『アゲハ』。

千年以上前にコロツサルによって旧世界の科学力の全てを注いで創り出された生物破壊兵器。

ある時、何らかの理由で暴走して旧世界を滅ぼした恐るべき力の持

ち主。

そのため人々からは『赤い悪魔』と恐れられている。
気性は荒く、敵には容赦なく攻撃する。

鋭い爪と牙はもちろん、高等魔術を自由自在に操り敵を圧倒的な強さで蹴散らす。

封印の影響で魔力が弱っているのか、普段は少女の姿をしている。

実は彼女にはさらにランクの高い最終形態が存在するらしいのだが
…詳細は一切不明である。

(関連事項 カエサル)

髪の色：ブラック(ストレートロング)

目の色：スカーレット

データは全て第二十章までのもの。

パラメーターは人間の平均値を100(レベルは10)と仮定した時の相対的な値である。

今回はRPG風にしてみました。

第二十一章 三人の刺客（前書き）

さて、今回は新しい刺客が二人も登場します！メインキャラクターだけではなく、敵キャラクターにも目を向けることでよりこの小説を楽しむことができると思います。ぜひとも幅広い視野でこの物語をひもといてみてくださいね。

第二十一章 三人の刺客

燦々と降り注ぐ太陽の光、青空を流れる白い雲、どこまでも広がる風そよぐ草原の海…そんな穏やかな時の流れの中に、四人の少年少女がいた。

「うーん…カードキーを探せばいいのはわかったんだけどなあ…果たして何処にあるのやら…見当もつかないぜ」

白髪に金色の瞳の少年が頭を掻きながらそう言った。

「やみくもに探し回っても時間の無駄だし…ここはまず首都のマンファリに行つて情報を集めるべきだよティティス」

「そうだなエレノア…つて、後の二人は？」

「さあ？多分その辺に居ると思うけど…」

「ふーん…」

「ふーんつて…なんだよさっきからジロジロ見やがつて…？」

「…下着…見えてるぞ…」

地面にあぐらをかいて座るティティスを覗き込むように上半身を下げたエレノアのTシャツの襟の間から、可愛いピンクのブラジャーと胸のわずかな谷間が見えていた…。

「あつ…」

エレノアはとつさに胸を手で押さえた。

「あのさあ…お前だつて女なんだから、そこんところはしっかりしてくれよエレノア」

「う、うるさいな！…今度からは気をつけるよ…」

エレノアはそう言いながらティティスの横に腰を下ろした。

「…ちよつと近くないかエレノア？」

「べ、別に私が何処に座ろうと勝手でしょっ！」

「なにもそんなに怒らなくてもいいのに…」

…二人の髪を風が優しく撫でる…しばらくの沈黙の後、エレノアが

ティティスにこう聞いた。

「…ねえ、ティティス、初めて私と会った時のこと…まだ覚えてる？」

「な、なんだよ急に…大丈夫、ちゃんと覚えてんよ！…あれからまだ数ヶ月しか経ってないんだから」

「…今思えば不思議な出会いだったよね…これって偶然？…それとも運命…？」

「…エレノアはどっちだと思う？」

「私は…」

…その時ティティスがエレノアの肩に手を置きエレノアを抱き寄せた…！

「…えっ…？」

「…この出会いを偶然で片付けるか それとも運命からの贈り物にするのか…それを決めるのは俺達自身だと思っぜ？」

…ティティスは金色の瞳でエレノアのグリーンの瞳を見つめながら言った…エレノアの鼓動は高鳴った…。

「ティティス…」

「…エレノア…」

…見つめ合う二人…ゆっくり、でも確実に二人の唇が距離を縮めていく…！

「…いけっ！そのままブチュツと！」

「…しっ…声が大きいよロゼッタ…」

「…??」

「…??」

…声に気がついたエレノアとティティスが後ろを振り返ってみるとそこには地面に身を伏せたロゼッタとミーシャがいた。

「んなっ…お、お前らっ…！」

「あちゃー、見られてたのか…ロゼッタにミーシャ…」

「へえ、最初っからなんだかいカンジの二人だとは思ってたけど…こんな真っ昼間っからやってくれるねえ」

「…まっただよ…ここで気付かれなきゃどこまで進行したのやら…楽しみだったのに…」

「ち、ちち、違うんだ！こ、ここ、これは何かの勘違いで…」

エレノアが顔を真っ赤にしながら言った。

「キャハハ！ノアちゃん顔真っ赤！いいわけしたってダメ！ホントはティーちゃんとキスしようとしてたくせに…！！」

「…今度からドールハウスにダブルベッドを装備しないとね…」

「う、うるさいうるさいうるさいうるさい！」

エレノアが大声で怒鳴った。

「まあまあエレノア、そんなに怒るなよ！」

ティティスがなだめる。

「こ、これが怒れずにいられるかつ！」

「何言ってるんだよ自分から誘ってきたくせに」

「は！？私がいつティティスを誘惑したんだよっ？」

「だって 下着見せてくれたじゃん（しかもピンク）」

「あ、あれはっ」

「うわあ！ノアちゃん大胆！」

「…欲求不満…？」

「おっ…お前から…いい加減にしろっ！」

エレノアの叫び声が広い草原に響き渡った。

「やれやれ…真っ昼間っから一体何やってんだか…？」

…草原の遙か遠くでブルーの髪と瞳の少女が双眼鏡を覗きながら言
った。

「…あれが…シユナウザー様の言う例の連中かアクア？」

アクアの横にいた二人の少年のうち金髪の少年が言った。

「…なんだか想像とだいぶ違うね兄さん？」

もう一人の銀髪の少年が金髪の少年に言った。

「シユナウザー様の命令でわざわざ本国から来たって言うのに…あんな弱そうな人間四人の相手をしろだなんて」

「…あまり油断しない方がいいわよサイコ。あれでかなりの実力者なんだから…ドリーマーも油断は禁物よ」

「わかってるよアクアさん…兄さんも言う通りにしようよ」

「ふん…赤い悪魔はともかくだ、その他の三人は大したことはないだろ？」

「確かに…赤い悪魔はシャクマに瀕死の重傷を負わせたほどの実力者だからね兄さん」

「もう一人厄介なのがいる…あの白髪の少年…アイツは私の獲物なんだから手を出さないでよ！」

「へいへい…で、どうするんだよこれから？」

「そうだよアクアさん…人数的に僕ら不利なんですから」

「うふふ…任せて、私にいい考えがあるの…！」

《ミッドナイト》

夜遅く、間もなく日付が変わる頃、草原の真ん中に建てられたドルハウスのロビーで三人の少女達が何やら話し合っていた。

「…帝国首都マンフアリは別名『要塞都市』。周りは高い城壁に囲まれ、半径100km圏内は常に対空用レーダーで監視されている…多分、いつもみたくミーシャの召還獣で行ったら間違いなく武装した飛空艇に捕縛されるか、下手すりゃ対空ミサイルで撃ち落とされるだろうなあ…」

…エレノアが至って真面目に言った。

「…じゃあ歩いて行くしかないの…?」

「それはちよつと…地図によると今いるこの草原はマンフアリから約120km地点…何日かかるのやら…」

「じゃあ、走ればいいんだよ!」

「アホ!120kmをノンストップで走れるやつなんか口ゼくらいしかないだろーがっ!」

「いやあ、わたしもムリなだけどね」

「じゃあ言つなよ!」

「…じゃあ…どうするの…?」

「ああ…実はティティスがさつき草原の端で壊れた車を見つけたらしくて…今直してるところなんだよ」

「なるほど!それでさつきティーちゃんが工具を持って出ていったつてわけね!」

「でもまだ直るかわからないんだとよ」

「…今後の予定はティティス次第ってことね…」

「じゃあ、ティーちゃんが車を直せたらノアちゃんご褒美あげないとねっ!」

「ご褒美?…美味しい料理とかか?」

「もお、違うよ!ノアちゃんのカ・ラ・ダ!」

「はあっ!???」

「だいじょーぶ!ちゃんと避妊すれば問題ない!」

「いや…そーゆー問題じゃあ…」

「…でもエレノア…ティティスのこと…好きなんでしょ?…だったらいーじゃん別に…」

「…そ、それは…」

…エレノアは顔を真っ赤にして黙ってしまった。

「…まあ…焦ることはない…か…自分の気持に正直にね…エレノア…！」

「何かあったら言っただけねノアちゃん！なんでも協力したげるからねっ！」

「…うん…！」

エレノアは嬉しそうに頷いた。

…ボーン…ボーン…

その時、ロビーにある大きな壁時計が午前零時を告げた…。

「…さあ…恐怖のショータイムの始まりだ…！」

…フツ！

…突然、ドールハウスの灯りが全て消えた！

「…なんだ！？停電か？」

「…それはあり得ない…何故ならば…この家のライフラインは全て私の魔力を様々なエネルギーに変換したもの…私がここにいるってことは…つまり誰かが外部から魔力の変換を妨害している可能性が大きい…！」

「誰かって…表に誰がいるかわかるかロゼ？」

「うん…感じるよ…！この気配は…魔物…？二人…いや、三人だね。一人は以前に会ったことがあるやつ…多分 コロツサルの刺客だね…！」

「マジかよ…とりあえず外に出ないと…」

「…ちよつと待って…」

ミーシャが口ウソクに火をともしると、部屋の中が薄明るく照らされ

た。

「よし！これで外に…」

…ビュッ！ガッシャーン！！

その時、食器棚から沢山の皿が勝手に飛び出し、三人に襲いかかってきた！

「痛っ！？なんだなんだ！？？」

「…！！」

「わっ！お化け！？」

驚く三人の目の前で部屋中の物が空中に浮き上がった…！

「こ、これは…！？？」

「…おそらく停電の犯人の仕業ね…ポルターガイストってところね…！！」

「外へ出て刺客を撃墜するにはまずコイツらをぶっ壊さないとね…！ミーちゃんの私物を壊すのは心が痛むけど…仕方ないよねミーちゃん？」

「…遠慮はいらさないよロゼッタ…後で全部犯人に三割増しで弁償して貰うからね…！！」

「ミーシャ…お前、悪徳業者だろ？」

「…決まりだねっ…！…エンドラーズとの戦闘で失った魔力はまだ回復してないけど…小物相手ならこの姿でも大丈夫だよ…準備はいいみんな？」

ロゼッタが鋭い爪を光らせながらそう言った…！

「おっよっ！！」

「…戦闘体制に入ります…！！」

ビュッ！シュバッ！！

室内にあった様々な物が次々と三人に襲いかかってきた！

「じゃまじゃまあー！」

ガシャーん！バキィッー！

ロゼッタの鋭い爪が飛んでくる食器や家具を容赦無く切り裂いた！

「オラオラァー！ガンガン行くぜっ！」

ドン！ドン！ドン！ガシャーん！バリーン！バカーン！！

エレノアのマグナムから放たれる銃弾が正確に的を貫く！

「…はいロゼッタ右に包丁きてるよー…エレノア正面にヤカンが…はい二人共頑張って…！」

「了解！…って、ミーシャも攻撃しろよっ！」

「…いや…だつて…魔法使ったら…家が大変なことに…まだローン20年もあるし」

「キャハハ！そりゃ確かに大変だ！」

「どーでもいいから早いとこ外に出ようぜ」

三人は襲いかかってくる食器や家具を次々に蹴散らしてようやく玄関の前まで辿りついた。

「粗方片付いたみたいだが…こりゃあ片付けるの大変そうだな」

エレノアが粉々になった食器の破片を踏みしめながら言った。

「…玄関の向こうに刺客がいるかも…気をつけて…！」

ミーシャが少し怯えたように言った。

「ワクワクするなあ〜！ いざ、戦場につー！！」

ロゼッタが勢いよく玄関の扉を開けた！

すると、目の前には見知らぬ銀髪の少年が笑顔で立っていた…！

「！」

「やあ、はじめまして…いや、おやすみかな？僕はドリーマー、俗に貴方達の言う刺客だよ」

「…お前がこの怪現象の元凶か？」

「うっん、違うよ。それはサイコ兄さんの仕事さ。…僕ら兄弟は超能力の使い手だからね！」

「なんだかよくわからないけど…私の家をめちゃくちゃにした責任…ちゃんと取ってもらおうよ…！」

「そんなこと僕に言われてもなあ…これはアクアさんの作戦だし」

「アクア？…どっかで聞いたような…??ノアちゃん知ってる？」

「知るかよっ！…そんなことよりテメエツ！ドリーマーとか言ったな！？一人で私達三人と殺り合おうとはいい度胸してんじゃねえか！」

「やれやれ…これだから野蛮な人間は…残念ながら僕は君達と殺り合う気は無いよ」

「…どうゆうこと…？」

「つまり力が全てじゃないってわけさ。…超能力の前では肉体の力なんて無力に等しいからね…！」

「ふーん…じゃあ、試してみる？」

ロゼッタが鋭い爪をちらつかせながら言った。

「アハハ…それもゴメンだね。…悪いけど君達にはここで眠ってもらうよ！…フアンタマズル！」

その瞬間、ドリーマーの目から妖しげな光が放たれた！…それを見た三人を凄まじい睡魔が襲う…！

「なんだ！？…あれ？急に 眠く…ぐー…。」

「…なん だか…眠 い…すー…。」

「ふあ…眠い…おや…す…み…。」

三人は倒れてそのまま眠ってしまった…！

「…三人共良い夢を」

ドリーマーが笑顔で言った。

「…どうやら上手くいったみたいねドリーマー」

「…ったく、てこずらせやがって…」

家の陰からアクアとサイコが姿を現した。

「お疲れ、兄さん」

「お前もなドリーマー…さて、これからどうするんだアクア？」

「そうね…とりあえずこの三人を動けないように縄で縛って貰おうかしら？」

「…殺さないのか？」

「殺すのは色々情報を聞いてからでも遅くないでしょ？…それに…」
「それに？なんだ？」

「…ティティスがないから…奴を誘き出す為の餌にするの…アイツのことだからきつと仲間を見捨てるようなことはしないわ」

「…一度会っただけなのにずいぶんと知った口をきくんだな」

「…ほつといてよ」

「アクアさん…どうして貴女はそんなにあの少年にこだわるんですか？」

「…そりゃあ…私を害虫扱いした彼が許せないからよ！…でも…それ以上に…」

「…どうしても…どうしても個人的に彼に聴きたい事があるから…！」

果たしてその言葉の裏にどんな意味が隠されているのか…サイコとドリーマーの二人にはわからなかった。…いや、もしかしたらアクア自身にもわからなかったのかも知れない。

夜風が…アクアの水色の髪を優しく撫でていった。

第二十一章 三人の刺客（後書き）

《キャラクター紹介（敵キャラ編）》

アクア

性別：

属性：水

身長：155cm

髪の色：アクアマリン（ミドル）

目の色：水色

魔物。コロツサルからの刺客の一人で水を自在に操ることができる。一度、ティティスと交戦しているが、それ以降、何かと彼を意識しているようだ。

第二十二章 水心（前書き）

さて、今回は視点を180°変えまして敵キャラクターのアクアちゃんを中心に物語を進めて行こうと思います。アクアちゃんの切ないティティスへの想いや心の内をどうか見逃さないようにしていただけると幸いです。複雑な人間関係やキャラクターの心の移り変わりをぜひ感じ取って下さいね！

第二十二章 水心

ここはドールハウスの玄関前：三人の少年少女が縄で縛られて爆睡している三人の少女の横で何やら話していた。

「…来ないわね」

「…だな」

「あれからもう二時間……やっぱり仲間を見捨てちゃったのかなア
クアさん？」

三人の刺客がドールハウスを占拠してから二時間が経過していた。
アクアの作戦で、ドリーマーが眠らせた三人の人質を餌にティティ
スを呼び寄せる予定であったのだが：肝心のティティスは未だに姿
を現していないかった。

「うーん、おかしいなあ……？」

「やっぱりアクアの思い違いじゃないのか？ティティスって言った
ら：エフェクトでもNo.2の実力者だろ？そんな奴が仲間がどー
のこーのなんて言わないと思うのだが」

「でも：そんなに悪い人には見えなかったような……？」

「…いいかアクア、お前が何を考えているかは解せんが：人間は我
々魔物の敵でしかない：それはお前が一番わかっているはずだろう？
…それを忘れるな……！」

「うん…わかってる……」

…アクアがうつ向き加減に言った。

「このままだと朝になっちゃうよ…どうするんですかアクアさん？」

「…よし！予定変更！…私が直接ティティスの所に行く！」

「だったら最初からそうすりゃよかっただろーが」

「う、うるさいな…万一、赤い悪魔が暴れた時に三人の方が対処し
やすいでしょ？…ま、今となっちゃその心配は無用みただけど」
アクアが爆睡する三人を見ながらそう言った。

「ホントによく寝る人達だねー」

「それじゃあ、私は一度ここを離れるけど…くれぐれも気をつけてね二人共！」

「ああ…今度はしくじるなよアクア…！」

「無理はしないでくださいね？」

「任せてよ…今後こそ奴の息の根を止めてやるんだからっ…！」

アクアはそう言つと、水色の髪を夜風になびかせながら草原の奥へと消えて行つた…。

《再戦…ティティスvs・アクア》

「あー…やつと修理完了だよ。…なんだかすっかり遅くなつちまつたな」

ティティスが大きく伸びをしながら言つた。

草原の端、ティティスの横にはなんとかかろうじて走れそうな程ボロボロになつた赤いバギーカーが置いてあつた。

「それにしても…我ながらよくもこんなポンコツを直せたなあー…ヨシヨシ、これでまたお前も走れるでちゅよ〜」

ティティスはバギーにそう話しかけた。

「…アンタ…一体何してんの…??？」

何処からともなく姿を現したアクアがティティスに話しかけた。

「わあっ！？お、お前は…！」

「うふふ 久しぶりだねティティス！」

「…誰だつたっけ？」

あまりにも予想外なティティスのその言葉にアクアはずっこけてしまった。

「だあーっ!!!? アクアだよア・ク・ア! こないだポリプの港で戦ったでしょーがつ!?!」

「アクア…? ああ! あの水使いの刺客のね… ってえ!?! まさかこの俺を殺りに来たのか!?!」

「当たり前でしょっ!」

「しっこいなあもぉ」

「まだ二回目だよっ!… それより… 彼方を殺る前に二つ聞いておきたい事があるの」

「…?」

「… 彼方、私とこないだ戦った時に手加減したでしょ?」

「はあ…?」

「… どうして? なんでよ?… あんな屈辱的な思いをしたのは初めてだったんだからっ!」

「いやあ… なんてって言われてもなあー ホラ、一応お前も可愛い女の子なんだし… それで… まあ単にそうゆうことだね」

「なっ わ、私を舐めてるのかティティス!… てゆーか説明になってないっ!」

「… じゃあ言わせてもらっけど… お前、宿敵と戦う時にミニスカっつのはどうなのさ?… 生足とスカートの中が気になって集中できないんだよね」

ティティスがアクアのミニスカートを指さしながら言った。

「んなっ…!?! ど、どこ見てんのよこの変態野郎っ!」

アクアが顔を真っ赤にしながら言った。

「男つてのはみんなそれなりに変態だよ。… エレノアみたいなパンツ派もいいけどやっぱしミニスカだよね」

「… もしかしてアンタ… 女好きってやつ?」

「自覚は無いんだけど… 一昔前のあだ名が変態オタクだった」

「… サイター。… だ、第一、私は魔物だよ!?! それをわかって言っ

てるの!？」

するとティティスは笑顔でこんなことをアクアに対して言った。

「…大事なのは『誰と付き合う』かじゃなくて『どう付き合う』かなんだよ。…それは相手が魔物でも同じこと。…誰と仲良くして誰を殺すのか…それを決めるのはこの俺自身さ…!」

「…それで?結局私はどっちの部類なの?」

「さっき自分で言ってただろう?俺は基本的に女好き…つまりはフエミニストだから女は殺せないよ」

「…生憎、私は彼方を殺す気満々なだけど?」

「別にかまわないよ。他人の考えを曲げるのは好かないもんでね…!」

「…もういいわ…二つ目の質問…昼間のグリーンの髪の娘…エレノアって言ったっけ?…彼方の彼女なの?」

アクアの突然の予想外な質問に流石のティティスもたじろいだ。

「はあっ!?!な、なんだよ急に…ま、まさか見てたのか!?!」

「うん。思いつきキス失敗してたね」

「なっ…べ、別にあれはそんなんじゃ…!」

「ハッキリしないわね!彼方はあの娘が好きなのかってきいてるのっ!」

「な、なんで敵であるお前にそんなこと言わなくちゃいけないんだよ!」

「さっきと言ってることちがうじゃん…。もういいよっ!殺す前に聞き出してやるからっ!」

そう言うとアクアは空気中の水分を集めて水の剣を作り出した…!

「…一つ言い忘れてたけど、こないだみたいに助けは来ないわよ?

…私の仲間が彼方の大事なお友達をホールドアップしているからね…!」

「彼女達が…!?!」

「うふふ…お友達を助けたくばまずはこの私を倒すことね…!」

「ちっ…あまり気乗りしないが…仕方ないな…!」

そう言うとティティスは空気中の水分を集めて凍らせて氷の剣を作り出した…！

「そこなくっちゃ！行くよっティティス！リベンジマッチだよ！」
アクアがティティスに水の剣で切りかかった！

「ちっ…！」

ガキーン…！！…ガチガチ…

ティティスがそれを受け止める…水と氷の剣がぶつかり合う…！

「…へえ…意外とやるじゃん！」

「…その台詞、そのまま返すぜ…！」

「うふふ…じゃあ、これならどうだっ！」

キーンツ！

「わっ…！」

「喰らえっ！ウォーター・ニードルツ…！」

アクアは、ティティスの剣を弾いて後ろに引くと、水の剣を分解して沢山の水の針を作り出した！そしてその針がティティスに飛びかかってきた！

「うわぁっ…？」

ティティスはとっさに飛んで来る針を剣で受ける…！が、全てを防ぎきれずに何本かの針がティティスの体を傷つける！

「いででででっ…！」

「…うふふ、水の針を受けた感想はどう？…こないだの氷の刃のお返しよ！」

「あほっ！お前と違って治るまでに時間がかかるんだよっ！割に合わないだろーがっ！」

「問答無用よティティス！お次はこれよっ！バブル・ボム…！」

アクアの掌から放たれる泡の爆弾が次々と爆発する！

ドーン！バーン！ドカーン！

「うひゃあつ！！」

凄まじい爆風でティティスは吹き飛ばされてしまった！

「アハハ！人間のくせに魔物にたてつくからこんなめにあうのよティティス！」

「…忠告どーも。…だけどこんなもんじゃ殺られないよ俺は」

爆風を受けたのにも関わらずティティスはおしりをはたきながらムクリと起き上がった！…左手には氷でできた盾が握られていた。

「…！盾で爆風の威力を半減させて受けたのか…！」

「へっ！女の子に負けるなんてカツコ悪いからな！」

ティティスが余裕の表情で言った。…するとアクアがこんなことをつぶやいた。

「ティティス…やっぱり強いわ彼方…人間にしておくにはもったいないくらいに…！」

「は？」

アクアは何かを決心したようにティティスにこうきりだした。

「ティティス…私達と一緒に来ない？」

「…は！？なに…！」

「私達の仲間にならないかって言ってるの！」

「…お前らの…？つまりは人間である俺がお前ら魔物の仲間になれと？」

「その通りだよ。…だってさっき言ってたよね？魔物か人間かは関係無いって…！」

「うーん…アレはそーゆー意味で言ったんじゃないけどなあ」

「彼方ほどの実力があればきつと魔物とも対等な立場になれるわ…」

！もちろん、シュナウザー様やコロツサル様…そしてアンゴルモア様もお喜びになるでしょう…！」

「…アングルモア…？」

「私達魔物の偉大なる王…人間の言葉で言えば『魔王』様ってところかしら？」

「…魔王…！？」

「…さあ、ティティス…私と一緒にいこう…！氷使いの彼方と水使いの私が組めば…我々魔物が世界を支配することに大きく貢献できる…！我々が世界を支配した暁には…全てが思い通りの世界になる…！私の…そして彼方の望みを叶えることも可能になるかも知れない…！そんな素晴らしい世界を私と…一緒に接見しましょうティティス…！」

アクアはそう言うと自らの右手をティティスに差し出した…！

「…全てが思い通りになる世界…か…確かに悪くないかも…」
ティティスはアクアに歩み寄ると、静かに右手を差し出した…！

バチンッ…！

…ティティスの右手がアクアの右手を跳ね退けた…！

「っ…！」

「…お誘いは嬉しいけど…その誘いには乗れない…悪いが断るぜ…」

「…なんでよ？私が魔物だから？それとも…私の事が嫌いだから？…訳ぐらい話さないよ」

「そりゃあ、仲間を置いて勝手に行くわけにはいかないからさ」

「…じゃあ残りの三人も一緒につて言ったら？」
「残念だけどそれも無理だね…お気楽なロゼッタや無関心のミーシヤはともかく…人一倍正義感の強いエレノアが許さないだろうからね」

その台詞を聞いたアクアは少しムツとしたようだった。

「…ふーん…エレノア…ね…。そう…残念だね。…彼方となら上手

くやっつけてくれると思ったのにね…」

「俺もそう思うぜ？…だけどなアクア、なんでもかんでも思い通りに行く世界なんてあまりにも退屈で…つまらないものだ俺は思うんだよな。…それが俺がこの件を断った最大の理由さ…！」

その言葉に、アクアは少々驚いた様子で言った

「…彼方って…ホントに魅力的な人ね…」

「…アクア…」

「…だけど…これでハッキリしたよ…彼方にはやはりここで死んでもらうわ…！」

「…そうゆうわけにはいかないよ。仲間が俺の助けを待ってるからな！…悪く思うなよアクア」

ドガッ！

「…うっ！？ あ…」

…ドサアッ…

ティティスの鋭いパンチがアクアのみぞおちを捕えた…アクアはそのまま気を失って倒れてしまった…。

「…ふう…今までのような敵と戦ってきたが…こんな個性的 とゆーかお人好しとゆーか ただのマヌケとゆうべきか…とにかく初めでのキャラクターだなコイツは。…フッー敵の目の前でしかもノーガードで話しかけるかなあ…？」

…しばらくティティスは倒れたアクアを眺めながら考え込んでいた。「…本当なら簡単に殺せるタイプの奴のはずなんだけどなあ…なんかこつ…引つかかるんだよなあー…彼女は確かに魔物だけど…どちらかと言えば友好的だし…そんなに悪いやつではないのかも知れないな」

ティティスはそう言うと、アクアを抱き抱えて修理したばかりのバ

ギーの後部座席に寝かせてあげた。

「さて…と…さっさとエレノア達を救出しに行きますか！」

ガチャ、ブルルルー！

ティティスは運転席に乗り込みエンジンをかけた。ティティスがアクセルを踏むと、バギーは勢いよく走り出した…！

《拘束された三人》

「…ん…ここ…は…？」

エレノアが目を覚まししてみると、体の自由が効かない…すぐに口ゼツタとミーシャと自分の三人が背中合わせに縄のような物で縛られていることがわかった。

「あ、目が覚めたみたいだよ兄さん」

「やれやれ…ようやくこれで仕事ができる…」

目が覚めたエレノアの所に二人の少年が歩み寄ってきた…！

「お前らは…！？」

「ふふふ…俺の名はサイコ、こっちの銀髪が弟のドリーマーだ。…お前らを抹殺すべく送り込まれた刺客さ」

「…コロッサルのか？」

「いかにも…まあ、正確に言えばアンゴルモア大魔王様の命令なんだが…」

「…アンゴルモア…？」

「アングルモア…魔界の王で…ことある度にこっちの世界を手中に治めようとしている悪の権化だよ…！」

…後ろからミーシャが言った。

「ミーシャ！起きてたのか！？」

「…そんなにいつまでも寝てられないよ…」

「アングルモア様の計画にとって君達は邪魔な存在なんだよ。…だから僕達は君達を殺しに来た…！」

「…だったらなぜ拘束する必要がある？…さっさと寝ている間に殺ればよかったはず」

「ふふふ…いい質問だ…それはお前らに聞きたいことがあるからだ」
「聞きたいこと…？」

「…バベルを起動させるカードキーについてだね…！」

「ご名答。流石は魔法使い…。そう、カードキーは何処にあるのだ？…答えようによつては命だけは助けてやってもいいぞ？」

「ふざけんなよ！私達にもわからないから今こうやって探してる最中なんだから！」

「…バベルを起動させて何を…一体貴方達の目的は何…？」

「だってさ兄さん。この人達、意外と何も知らないみたいだよ？」

「ふん…どうせ殺すんだ…だったら教えてやる…バベルを使ってサテライトにある真実の鏡を手に入れるのさ…アレは魔界とこっちの世界をつなぐメインゲートを開くための鍵だからな…！そして…ゲートのある場所は…」

「…兄さん喋り過ぎだよ」

「スマン、つい…後はあの世に行つてから自分達で考えなお三方よお…！」

「ちっ…万事急須か…！」

「…ふあゝあ…よく寝たあゝ」

…その時、ロゼッタが目を覚ました。

「ロゼ！丁度よかった！この縄を切ってくれ！」

「ほえ？なに？なに？」

「寝ぼけてないで！縄を切るんだよっ！」

ロゼッタは全身に力を込めて縄を切ろうとした…が、縄はびくともしなかった…。

「ハハハ、無駄だよ。魔力でできた縄はそう簡単には切れないよ！」

「…遊びは終りだ…そろそろ死んでもらうとするかな…！」

「くそっ…！」

「…エンド…か…」

「意外とそうでもないかもよみんな？」

その時、ロゼッタの鋭い聴覚が車のエンジン音を捕えた…！

ギヤギヤギヤァー！キキー！！

ドールハウスの前に一台のバギーが止まった！

「よっ！待たせたな！」

「ティティスっ！」

「ティーちゃん！」

「…遅いよこの色男…」

「お、お前はっ…ティティス！？な、何故ここに…ま、まさか…！」

「アクアさんは…？」

「…心配すんな。ほら、この通り無事だからさ！」

そう言うとティティスは後部座席からアクアを抱き抱えて見せた。

「アクアさん！」

「アクア…！きつ、貴様あ、アクアを返しやがれっ…！」

「もちろんそのつもりさ…ただし！俺の仲間達と交換だ…！断れば

コイツの首の骨をへし折るぜ？」

「へし折るって…ど、どうする兄さん！」

「ぐっ…悔しいが仕方あるまい…！…わかった…今縄を解くよ…！」

次の瞬間、三人を縛り上げていた縄が一瞬で消えて無くなった。

「…さて、とりあえずミーシャ、お前はドールハウスをしまつてくれ。そしたら三人共この車に乗るんだ」

ティティスの言葉に三人は少し驚いた。

「は！？なんでだよ！？…もしかして…逃げるのかティティス？」

「え〜！つまんな〜い！せつかく暴れられると思ったのに！」

「…弁償がまだ…」

「…いいから。無駄な争いは避けたいだろう？」

「わかったよ。行くぞロゼ、ミーシャ」

ドールハウスを片付けると、三人は素早く車に乗り込んだ。…ティティスはアクアを草原に寝かすと運転席に乗り込んでこう言った。

「…じゃあな〜。次はもう会わないことを祈るよ…！」

その後すぐに車はエンジンをふかして物凄い速度で走り去って行きました…。

「…行っちゃったね…兄さん…」

「あ、ああ…何だかよくわからんが…とりあえずはアクアが無事で何よりだな…」

二人が呆然と見守る中四人を乗せた車は段々と小さくなり…やがて草原の彼方へと消えて行きました…。

《アクアの葛藤》

「…ん…アレ…？私は…一体…？」

「アクアさん！…よかった、気が付いたんですね！」

「…ったく、心配させやがって」

アクアが目を覚ましてみると、既に辺りは明るくなっていた。…朝

露がアクアの水色の髪を濡らしていた…。

「…アンタ達…どうしてここにいるんだ…？ テイティスは？ あの三人は？」

「お前はティティスに人質として使われたんだよ…お前と交換で三人は解放し…四人はとつくに車で逃走したぜ」

「えっ…？」

「アクアさん…ティティス相手に無事でホントによかったですよ…一時はどうなるかと思ったよ」

「けどイマイチ納得できんな…ティティスは全身切傷だらけだったのに…アクアは無傷…一体どんな経緯で人質になつたんだよアクア？」

サイコの質問に答えるのに、アクアは少し困った…自分でもどうして今この状況にあるのかわからなかったからだ。…それにもう一つ、二人には話せない理由があつたからだ。

「そ、それは…ティティスにみぞおちをやられて…それ以上は覚えてないよ」

アクアはまだ少し痛みが残るみぞおちを撫でながら言った。

「みぞおち？ 遠隔攻撃が得意のお前が接近戦で戦つたのか？」

「…ちよ、ちよつと油断しただけだよ」

…アクアはあえてティティスを勧誘したことは話さなかった…。

「ところでアクアさん、今日のことはシャクマに報告するべきだと思います？」

ドリーマーが言った。

「シャクマかあ…正直言つて私アイツのこと嫌いなんだよね…まあ、場所だけ教えてあげようか」

「わかりました。…さあ、もう用事も無いことだし…僕達も帰りましょうか？」

「賛成だね」

「…俺は疲れた…」

やがて三人の魔物は草原を後にするのであった…。

どうしてティティスは私のような魔物を前にしてもあんなに余裕で
いられるのだろう…？

どうしてあれだけの力を持ちながら他人を思いやることができるの
だろう？

どうして…どうして彼方のことを想うと私はこんなにも心が苦しい
のだろう…？

私は…私は一体何を望んでいるの…？

∴ 第二十一章 水心 ∴ 終

第二十二章 水心（後書き）

《アクアちゃんの日記》

??年○月×日

火曜日 天候：晴れ

今日はとにかく最悪の1日だった。

上司の命令でサイコとドリーマーと共に赤い悪魔達の討伐に行っただけなのに、私はティティスにみぞおちを殴られあえなく撃沈。任務は失敗…こんな思いはもうたくさんだ。

…だけど良い事も無いことはなかった。作業着すがたのティティスもそれなりにカッコイイと思った。

今日の誘いはあっさり断られちゃったけど…次こそは必ずティティスを私達の仲間にするんだからっ！！

第二十三章 シティー・ハーツ（前書き）

人間生きていれば必ず他人に知られたくない秘密の一つや二つはあるものです。もし、その秘密を他人に話さなければならぬとしたら…あなたはどうしますか？

それではノスタルジア第二十三章シティー・ハーツをお楽しみください。

第二十三章 シティー・ハーツ

ここは帝国首都マンフアリへと続く大陸横断ハイウェイ。まばらな車の往来の中を一台の赤いバギーが走っていた。

「はぁ…流石に長時間の運転はきついなぁ…」

白髪で金色の瞳の少年が車を運転しながら言った

「…かなりお疲れのようだね…」

後部座席に乗っていたミーシャが言った。…彼女のブルーの瞳は時折、太陽の光を浴びて金色に輝いていた。

「まっただよ…あーあ…いいよなぁコイツらは」

テイティスは助手席で寝息をたてているエレノアと、後部座席で大口を開けて眠っているロゼッタを見ながらそう言った。

「…気楽なもんよね…ちゃんと自分達の置かれている状況がわかってるのかな…?」

「多分わかってないね。…まあ、思い積めてネガティブになるよりはマシだろうよ」

「…この娘達の場合少しはネガティブになった方が良いのでは…?」
やがて四人を乗せたバギーはハイウェイの最後の料金所を通過しマンファリの入口へとたどり着いた。

「噂には聞いていたが…まさかこれほどのものだとは…!」

「…壁…高い…!」

目前には頑丈そうな高い城壁が立ち並び空には武装した戦闘用飛空艇がものすごい音を立てて飛んでいた。

「うーん…なんだよ…うるさいなぁ…」

「…まだ眠い〜!」

飛空艇の騒音にエレノアとロゼッタがようやく目を覚ました。

「おやおや、やっとお目覚めのようだな」

「ん…ここは?…って、なんだこのばかでかい壁は!?!」

「うわあ〜！なにこれなにこれ！？」

「…ここが帝国首都…マンフアリだよ…」

「ここが…！流石は要塞都市マンフアリだな」

「なんか…スゴいかも！」

「おっ！ようやく入口が見えてきたぞ！ああ、そうだ…エレノア、悪いけどその腰のナイフと銃はしまつてくれないか？」

「いいけど…なんで？」

「ここは要塞都市マンフアリ…町に入るための検査は厳しいはずだ…武器をちらつかせるのはマズイだろ？」

「あ、ああ…それもそうだな」

エレノアはナイフと44マグナムをシートの下にそつと隠した…。町の入口では兵士達が待ち構えていた。番兵が身分証明書の提示を求めてきたのでティティスが免許証を見せると…

「こ、これは…プラチナライセンス！…ど、どうぞお通りくださいませ！」

意外にあつさり町の中へと入れてくれた。

「プラチナ？何それ？」

エレノアが興味津々に聞いた。

「プラチナライセンス！この世で最も偉大な免許証さ。コレを持つ者は戦車はもちろん、飛空艇や原子力潜水艦だつて運転できちゃうんだぜ！？…もつとも、手にするにはそれなりの努力が必要だがな」

「へえ〜！見た目によらずスゲーもん持つてんなティティス！」

「…悪かつたな見た目がシヨボくて」

高い壁に囲まれた街の中は今までに四人が訪れたどの都市よりも近代的であった。高層ビルが立ち並び、その間を大きな道路がまるで網の目のように走っていた。

「わあ〜！スゴいスゴい！！」

「ひえー、こりやまた凄い大都会だな！」

「…コンクリート天国…？」

「流石は帝国の首都マンフアリってだけのことはあるな！…でも共和国首都のシラントも負けてないと思うぜ？」

「…ティティスってもしかして都会っ子？」

「まあね」

「…それに比べて…私達三人はさえない田舎娘…」

「いやあ～田舎も捨てたもんじゃないと思うよミーちゃん？」

「…フォローになってないよロゼ」

三人の少女がはしゃいでいると、やがて四人を乗せたバギーは小さなホテルの前で止まった。

「調べによるとここが一番安いホテルのはずなんだけど…」

エレノアが地図を見ながら言った。

「でもちゃんとしたホテルだねえ～！」

「…ボ口旅館とは大違い…」

「お前今までどんな所に宿泊してたんだ？とにかく、チエックインするぞ」

四人はホテルの中で一番安い部屋を二つ予約した（女の子三人とティティスの部屋。お金が無いから…）その後、全員がティティスの部屋に集まって今後の予定を立てた。

「さて…いよいよカードキーについての情報を集めなくてはならないわけだが…効率の面から考えてもここは四人別々に行動した方がいいと思うんだ」

ティティスが言った。

「確かにそうだけど…でも、そうすると何かあった時にヤバくないか？」

エレノアが反論した。

「その可能性は薄いよ。ここは大会、たとえ敵がいたとしても簡単には戦闘にならないだろうよ。誰も騒ぎを大きくしたくないだろうからな」

「なるほど…確かにティティスの言う通りかもな」

「…今日一日別行動ってわけね…」

「それじゃあ…十時間後の午後九時にそれぞれカードキーやその他もろもろの情報を持ってこの部屋に集合な!…それでは以上、解散!…幸運を祈る」

「ラジャー!」

こうして、四人の少年少女はマンファリの街並みにそれぞれ繰り出して行ったのでした…。

《…11:30 メインストリート エレノア流情報収集》

ホテルを出てから30分が経ったころ、エレノアは街のメインストリートに来ていた。

「情報は足で稼げ!…って昔、リスタナがよく言ってたっけ?…けど、こんな都会じゃあまり当てはまらないのかも」

大都会のメインストリートと言うことだけあって、高級レストランや宝石店、高級ブティックが立ち並んでいた。

「うーん…どーもこーゆー雰囲気は苦手なんだよなあ…もっとさあ、コンビニとかファミレスとかないものかねえ」

エレノアはため息をつきながらそう言った。

「仕方ない…繁華街の方にも行ってみるか」

《…12:10 インターネットカフェ PCマスターティティス》

「ふーん…そうか…共和国は特に動きなしか…こっちは刺客に追わ

れて忙しい毎日です…っと、…送信！」

…ティティスは姉のマーベラスとMailで情報交換をしていた。しかし、今のところコロツサル大統領に不審な動きは無いそうだ。

「さて…色々調べてはみたものの…イマイチヒットしないんだよね…やっぱりホームページに載ってるような代物じゃないか」

ティティスはマウスをカチカチやりながらそう言った。

「こんなことしてもダメみたいだし…電気街にでも行ってみるか…暇だからパーツ買ってホテルでパソコンでも作って遊ぶか」

《…13:50 魔法使い協会本社ビル三階大図書館 ミーシャのリサーチ》

ここは魔法使い協会本部にある大図書館。山積みの本を目の前にミィシャは片っ端から赤い悪魔についての文献を読みあさっていた。

「…ふう…赤い悪魔のことについて調べれば…カードキーのこともわかると思ったのに…どれもこれも大した情報は載ってない…か…魔法使い協会本部の図書館でも流石に一般人の入れるような所に赤い悪魔の文献は置かないよね普通…」

ちなみに魔法使い協会とは…世界中の魔法使いをとりまとめる機関で様々な事を行う。例えば魔法使い試験。この試験に合格して初めて正式な魔法使いと認められる。他にも魔法使いのランクづけもする。上からAランク・Bランク・Cランクとなる。これらのランク

やはり試験を受けることで上げることができる。Aランクを超えるとマスターオブウィザード（ならウィッチ）の称号を手にすることが許されるのだ！

「秘密文章保管室になら赤い悪魔についての文献があるのかも知れないけど…あそこはAランク以上じゃないと入れないんだよね…私は…Cランクだし」

ミーシャはしばらく考えた。…何処に行けば赤い悪魔やカードキーについて調べられるのか…やがて何かを思い出したかのように呟いた。

「…そうだ…あそこなら…早速、アイツを捜さないかね…！」

《…14:55 マンフアリ中央公園 ロゼッタと眼鏡の勇者》

ここは街の中央にほど近い運動公園の一角。…赤髪の少女がベンチに力無く腰掛けていた…。

「はううう…お、お腹すいたよう…でも…お金ないし…どうしよう…このままじゃあ飢え死にしちゃうかも…ああ…」

ロゼッタが空っぽの財布を逆にして振りながら言った。

「はあ…いつもならノアちゃんからお金借りれるのに…ああ…なんか道行く人々が美味しそうに見えてきたかも…！」

いやあ、確かに貴女なら食べられるかも知れないけど…そりゃダメでしょロゼッタ姉さん。by作者

「あ、あの…なんか顔色悪いけど…だ、大丈夫ですか…？」

そんな時、ロゼッタに一人の少年が声をかけてきた。…黒髪に眼鏡の、何処にでもいるような普通の少年だった。

「アハハ…、やっぱり？…実はわたし今とても…」

…キユ…

「お腹が空いてる…ですか？」

「…そうみたい…」

「もしよかつたら一緒にランチしません？…こんなものでよければ差し上げますが…」

そう言いながら少年は、手に持ったコンビニの袋からサンドイッチを取り出して、ロゼッタに差し出した。

「えっ？いいの？」

「ええ、構いませんよ。自分のぶんはちゃんとありますから」

「あ、ありがとう！君は命の恩人だよ！」

「ハハハ…そんな大げさな」

二人はベンチに腰掛けながら昼食をとり、その間に様々な会話を交した。

「はじめまして！わたしロゼッタ！…あなたは？」

「僕はエリオット。…一応勇者なんですよ？Cランクですけど」

「勇者さん！？すごいすごい！正義の味方なんだね！」

「確かにそうですけど…Cランクの勇者なんて自分で自分が恥ずかしいですよ…」

「どうして？Cランクのなにがいけないの？」

「…あなた…勇者協会って知ってます？」

「なにそれ？農協の親戚とか？」

「違いますよ！…勇者協会は世界中の勇者を統率する機関のことで。ここの試験に受かって勇者になるのですが…勇者には大きく分けてA、B、C、の3つのランクがあります。Aが一番上で僕のランクであるCが一番下です…。ランクを決めるのも勇者協会の仕事

「なんですよ？」

「へえ〜…知らなかった！ちょっと勉強になったかも！」

「その…あなたは何を？見たところこの街の住人ではなさそうですが…？」

「うん！そーだよ！わたしたちはいろんなところを旅して回ってるんだよ！」

「わたしたち…？他にもお仲間がいらつしやるのですか？」

「うん！いるよ〜！ノアちゃんとミーちゃんとティーちゃん！」

「…？？そ、それで…旅の目的とかは？」

「それはねえ…」

「…見知らぬ人に勝手に話しちゃダメだよロゼッタ…」

その時、ミーシャがロゼッタとエリオットの会話を遮った。

「あつ！ミーちゃん！」

「…ミーちゃん！…じゃないでしょ…？…私達の目的は安易に話しちゃダメって言ったでしょ…？」

「エへへ…ゴメンゴメン！」

「…あなたはお気楽なのか否か…時々あなたのことがわからなくなるよロゼッタ…とにかく…もう少しこの旅の重要性を自覚してよね…」

その時、エリオットが驚いたようにこう言った。

「…せ、先輩！？どうしてここに！？」

「…久しぶりねエリオット…一年ぶりかしら…？」

「…あれれ？もしかして…二人共お知り合いなの？」

「…まあね…昔、勇者協会の受付のバイトをしていた時に知り合ったの…」

「バイトって…ミーちゃんの謎がまた一つ増えたね」

「…それよりエリオット…ちょっと協力してもらいたいことがあるんだけど…」

「…？協力って…なんですか先輩？」

するとミーシャは声のトーンを低めてこう言った。
「…それは……」

《追跡者くくノーイブキ》

夕暮れ時、マンフアリの街に五時を知らせる鐘が鳴り響く頃…高層ビルの上層に一人の少女がたたずんでいた…。髪は黒色、後ろで束ねたポニーテールが風になびいていた…。服装は漆黒でまるで時代劇に出てくるくノ一そのものだった。…そしてその脇には大きな白い狼がいた。

「…どう？赤い悪魔の気配はあるシロ？」

…少女が狼にそう話しかけた。

「ああ…間違いない。ヤツはこの街にいる……」

狼は天を仰ぎながら言った。

「やっぱりね…赤い悪魔の体に染み付いた血の臭いをたどってみたらここに着いた…すぐ近くにいるの？」

「…わからん。…だが向こうは俺のような魔物の気配を感知できるらしいからな…迂濶には近づけない」

狼が鼻を動かしながら言った。

「…だけど普通の人間である私なら怪しまれずに近づける…でしょ？」

少女は若干微笑みながら言った。

「…確かにそうだが…赤い悪魔はかつて大陸を二つに引き裂き世界

を火の海にした最強最悪の破壊兵器だぞ？…いくら封印の影響で力が弱まっているとは言え…お前一人で挑むには無謀過ぎる相手だぞイブキ？」

「そりゃ戦ったら勝ち目はないけど…大丈夫だよ、ちょっと交渉するだけだから！」

「…ふん…果たして赤い悪魔が我々ジパングの殿様のパシリなんぞの話の聞くかな？」

白い狼は少し嫌味っぽく言った。

「私だつて悪魔と交渉だなんておかしな話だと思つよ！…だけど上様のご命令だもの、仕方ないよ」

「…あの殿様は何を考えてるのかさっぱりわからんからな」

「なによーその言い方！まるで他人事じゃない！」

「俺はあくまで動物にすぎないからな。人間の考えや苦労はわからんよ」

「…動物の割にはよく喋るわね」

「ふん…動物や魔物が喋つて何が悪い？…それより…問題はどうかつて赤い悪魔に接触するか…奴らはあちこち移動しているから…だが、我々はこの辺の地理には疎い…どうやって見つける？」

「フフ…心配ないよ。ちゃんと道案内の目処はついてるから…！」
そう言つてイブキは一つの建物を指差した。

「世界勇者協会…困った人々の味方…これを利用しない手はないわ…！」

「隠密が勇者なんぞと仲良くしているのか？」

「…任務のためなら手段を選ばないのが隠密なのっ！」

「へいへい、そうですかー」

…二人は眼下に広がるマンファリの街を見下ろしていた。夕日と摩天楼の作り出す陰で街はオレンジとブラックのツートンカラーに染まっていた…。

ここは勇者協会資料室。二人の少女と一人の少年が資料の山と格闘していた

「なかなか無いですね…赤い悪魔関係の資料はかなり抹消されているようです…カードキーについてはそこそこありますが…それにしてもなんで僕まで手伝わされてるんですか？」

「…仕方ないでしょ…勇者協会の関係者以外は資料室に入れないんだから…」

「そりゃそうです…ちなみにこの資料は貸出し禁止ですからコピーするなりなんなりしてくださいね」

「…うん…ありがとうねエリオット…おかげで助かったよ…そろそろ行くところかロゼッタ…？」

「うん、そだね」

…ロゼッタは終始機嫌が悪かった。自分の過去を探られるのが気に入らなかつたのだ。理由は誰にもわからなかつたが、ミーシャには自分の行為が彼女の気分を害していることだけはわかっていた。

「それでは…僕はまだ仕事がありますのでこれで…気をつけて帰ってくださいね！」

…そう言ってエリオットは資料室の鍵を閉めた。

《知りたいこと…知られたくないこと…過去、現在……そして…未来》

街灯もまばらな薄暗い路地を、赤い髪の少女と白い髪の少女が宿泊するホテルに向かって歩いていった。…会話も無く、辺りは静寂に包まれていた…。

「…怒ってる…？」

…ミーシャがロゼッタに聞いた。

「…怒ってないって言ったらうそになるけど…別にそこまでミーちゃんを責める気は無いよ…ちょっとガツカリしたけどね」

ロゼッタが淡々とそう言った。

「…確かに貴女の過去を思い出したくない気持ちは十分承知してるよ…だけど…それ以上に私は貴女のことをもっと知りたいの…それに…貴女はこのままじゃいけないと思うの…」

「森羅万象…つまりは万物を知ろうとするのは人間の本質だからわたしのことを調べるのはいいとして……わたしがこのままじゃいけないって……どうゆうこと…？」

ロゼッタが怪訝そうにミーシャに尋ねた。

「…私は貴女の過去を知らない……だけど…これだけは言っておかなくちゃいけない…過去をどれだけ想っても過去は戻して戻っては来ない……どんなに強大な力を持ってしても…過去を変えることはけっしてできない……でも…未来は違う……未来は自ら作ることができる…定められた運命すらも変えて行くことができるんだ…過去を捨てるなんて言わない……だけど…それ以上に

貴女には未来への希望を持って欲しいの……そうすれば…必ず明るい未来への道は開かれるはずだから…！」

そんなミーシャの意味深な言葉をロゼッタはただ黙って聞いていた。
…そして、しばらくの沈黙の後にこう言った。

「明るい未来…か…なんとなくミーちゃんと言いたいことがわかった気がするよ…！大丈夫、もう怒ってないから…！でも…だけど…わたしの過去についてはもう少し待って…まだ心の整理がついてないから…それがちゃんと済んだら…全てを話すつもりだよ…！」
ロゼッタが言った。

「…そう…ありがとうロゼッタ……焦ることはないよ…私達ずっと一緒だって約束したもんね…！（第八章花鳥風月より）」

「そうだよ！そのためにも魔物達の野望を打ち砕いて早く世界に平和を取り戻さないとね！」

ロゼッタがいつもの明るい笑顔と声でそう言った。

「…ふふふ…ホントにせっかちなんだからロゼッタは……頼りにしてるよロゼッタ…！」

「わたしもミーちゃんのこと頼りにしているからねっ！」

辺りは確かに薄暗かったことに間違いなかった…しかし、雰囲気はとても明るかった。

二人の少女は足取りも軽くホテルへの帰路を急ぐのであった…。

《付録》
おまけ

□

「ところで…ノアちゃんとティーちゃんは今頃なにしてんのかなあ

」?

≡

「…さあ…興味無いけど…二人でイチャイチャしてんじゃないの…

」?

□

「だよなー!あの二人って最近イイカンジだもんね!」

≡

「…でもさあ…最近女の子の登場人物とか多いし…ましてやティテイスって何気にカッコイイからなあ…これは絶対何か起こるね…!」

□ 「今日もなんだかわからない女の子が一人でてきたしね。一人の男を巡る女達の血沸き肉踊る戦いつてか！」

≡ 「…今後要注意だね…！」

□ 「なんか本編よりもこっちの話の方が面白いかも」

≡ 「…えっ…いや…それは…」

□ 「今後の展開は果たしてどうなるのか！？…楽しみ過ぎるっ！！」
塚原さん！ちゃんとノアちゃんとティーちゃんをゴールインさせてくださいよっ！」

≡ 「…てゆーか…コレなんの話…？…話の中に名前出すなよ塚原宏樹…」

塚

「…まあまあ！たまにはゆるく行きましょっよー！」

≡ 「…とっつとっつ会話に混じってきたね…」

□ 「うわぁ〜！…こんなのアリ！？…」

塚

「今回は後書きをエレノアに盗られたのでここで挨拶させて頂きま
す！今後とも小説ノスタルジアをよろしくお願い致しますね！それ
では次回にまたお会いしましょう！！」

三

「…アホ作者だ…」

四

「バイバーイ！」

第二十三章 シティー・ハーツ（後書き）

私はエレノア。トレジャーハンターだ。…と言っても、最近の世界を救うために刺客と戦ったり様々なことを調べたりで色々大変だ。さて、今回は私とロゼが中心のお話らしいからな！いいかつ？絶対に読めよっ！改めて言っておくけどこの物語の主人公謙ヒロインはこの私なんだからなっ！ロゼツタもミーシャもティティスも私に比べたら脇役的存在なんだから！！…とにかくだ！次回もきっちり読破してくれよな！

それじゃあね！また次回会おうぜ！

第二十四章 幸せの価値（前書き）

さて、今回は少々難しい哲学的なお話です。特に後半は難しい内容となつていきますのでがんばって読んでください。ロゼッタの意外に知的な側面もありますので楽しみにしていてくださいね！

…それでは！ノスタルジア第二十四章『幸せの価値』を最後までご堪能くださいませ！

第二十四章 幸せの価値

「うわあ〜！人がいっぱい！お店もいっぱいある！」

赤髪の少女がはしゃぎながら言った。

「そりゃあ、縁日なんだから当たり前だろ？…まあ、流石は大都會のお祭りだな。田舎のお祭りとは規模が違う！」

緑髪の少女が言った。

「それにしても…ミーちゃんもティーちゃんも一緒に来ればよかったのにい！なんで来ないかな？せつかくわたしたちがジパングで買った着物まで着てオシャレしたのにねえ…ねっ！ノアちゃん？…なかなか似合ってるよ？」

彼女は赤い着物をみせびらかすようにその場でクルリと一度回ってから、エレノアにウインクしながらそう言った。

「仕方ないだろ？ミーシャはこうゆう人の集まる所が嫌いみたいなんだし…ティティスはパソコンいじりに没頭しちゃってるしな。まあ、たまには初期メンバー二人だけってのもありだろ？」

黒地に鮮やかな模様の着物を纏ったエレノアが言った。

「そーいえば…ノアちゃんと二人つきりになるのってかなり久しぶりだよな？」

「そーだなあ…：大灯台でミーシャと初めて会う前以来だよな？」

「なんだかんだで短い期間に色々あったよね…友達も増えたよね！…なんだかしみじみしちゃうなあ〜」

ロゼッタがこんなことを言いだしたので、エレノアは半笑いしながら言った。

「なあーに哀愁に浸ってんだよロゼ！そんなに昔のことでもないくせに！でも確かに思えば色々なことがあったよなあー…」

「そうだね…結婚相手も見つかったしね」

「なんでそーなるっ！」

「それより…こんなところにおいても仕方がない！早くお祭りのお

店にいこっ！！」

ロゼッタはさっさと話を切り換えると、エレノアの手を握って出店の列に向かって走り出した！

「わっ！？ちよ、ちよっと！何もそんなに急がなくても…店は逃げたりしないからよっ！」

するとロゼッタは振り返って笑顔でこう言った。

「ダーメツ！お店は逃げなくてもノアちゃんとの楽しい時間はどんどん逃げていっちゃうんだからっ！」

そして、二人の少女達はやがて人混みの中に吸い込まれるようにして消えて行きました…。

《忍の極意(?)》

ここは中央公園入口。そこに一人の少女と白い狼がいた。

「ふっふっふ…いるわいるわ…金のありそうな奴らがたくさん！」

「…またスルのかイブキ？お前の悪いクセだぞ？忍は泥棒とは違う」

「わかつてるよ！だけどこれから先お金は必要でしょシロ？…忍の極意、任務遂行には手段を選ばない！」

「…それがスリか？」

「そ！スリなら楽だし万が一捕まっても軽犯罪だからおとがめも軽いしね！」

「まあ、スリはいいとしてもだ…赤い悪魔はどうする？もしかしたらこの祭りの人混みの中にも知れないのだぞ？」

「まさか！悪魔がこんな楽しい場所にいるわけないでしょーが！」
「…確かに」

「それじゃあ私は仕事してくるから！いい？ちゃんといいい子で待つてるのよ？」

「そうやって俺を犬扱いするのはやめんか」

「アハハ、ゴメンっ。…じゃねっ！」

そう言うとポニーテールの少女は人混みの中へと消えて行きました
…公園の入口には白い狼だけがたたずんでいた。

《お祭り〜ザ・フェスティバルタイム〜》

今日はマンフアリのお祭りの日。祭りの行われる中央公園には多くの人々が集まっていた。公園のいたるところに出店が立ち並び、辺りには美味しそうな香りが漂っていた。その人混みの中にひときわ目立つ二人の少女の存在があった。一人は緑の髪と瞳を持ち、黒地に模様をあしらった着物を着た清閑な顔付きの少女。もう一人は真紅の長い髪と瞳で赤い着物を身に纏った可愛らしい少女である。二人は何やら楽しそうに会話をしながら公園の人混みの中を歩いていた。

「ねえねえ！今度はたこ焼き食べようよノアちゃん！」

「お前さっきわたあめ食ったばっかじゃねえか！…ホントによく食べる奴だなあ」

「エへへ…なにせ育ち盛りなものだからね」

「たくさん食べるのは別にいいんだけどさあ…ちったあお金のことも考えてくれよ。そんなに予算ないんだから」

エレノアは懐から革製の財布を取り出してその中身を覗きながら言

った。

「なんかだか中身よりお財布の方が高そうだねえ」

「…確かに」

「世界崩壊どーのこーのの前にわたしたちが破産しちゃうかも！」

「ああ…それだけはゴメンだな」

「でもある人はお金は使うためにあるんだからあるときに使えるだけ使っちゃえつて言うよね？…人間って矛盾した生き物だねえ〜！」

「…お前は哲学者か？」

「いいえ？ただの美少女だよ」

「自称とは言え美少女が口の周りに焼そばの青海苔つけてるかなあ…？」

エレノアは口ゼツタの口元についていた青海苔を指でとってあげながら言った。

「…そうだ！…それよりさあ…」

何かを思い出したように突然口ゼツタがエレノアに声をひそめながら言った。

「ん？なんだよ…？」

同じくエレノアが声をひそめながら聞き返した。

「結局、ティーちゃんとは何処まで行ったの？手えつないだ？キス？…それともあ〜…！？」

「な、なな…べ、別に私とティティスはそんな関係じゃあ…だ、第一、私達四人はい、いつも一緒にいるだろーがっ！」

口ゼツタにちやかされたエレノアは顔を赤くしながらそう答えた。

「わかんないよ〜？こないだ（第二十一章冒頭）みたいなこともあったしねー！…あそこでわたしとミーちゃんが邪魔しなきゃあどこまでいったんだろ〜ね！」

口ゼツタはニヤニヤしながらさらにエレノアに言い寄った。

「バ、バカッ！あ、あれは…その…あの…えと…」

エレノアが言い訳していたその時だった、

ドンッ！

「わっ！？」

「きゃっ！」

エレノアは前から来た何者かとぶつかってしまった。エレノアとそのぶつかった少女はたまらずその場に尻餅をついた。

「いててて……」

「だ、大丈夫ノアちゃん？」

「あ、ああ……それより大丈夫ですか？」

エレノアはぶつかつた少女に尋ねた。

「あ、はい。大丈夫です……すいません……よそ見をしていたもので……」
そのポニーテールの少女はすまなそうにエレノアに言った。

「こつちこそすいません……友達とのお喋りに夢中になってたもんで

……」

「いえいえ、お互い怪我がなくて何よりです。それじゃあ、私はこれで。祭りを楽しんでね」

少女はそう言うのとそそくさと人混みの中に去って行った。

「……さて、あの娘に言われた通りに再び祭りを楽しみますかね口ゼ！」
「！」

エレノアがおしりを叩きながら口ゼツタに言った。

「……」

その問いかけに何故か口ゼツタは応えなかった。……彼女はただ黙ってさっきの少女が去って行った方向を見つめていた。彼女の瞳はいつもより若干赤味を帯び鋭くなっているようにも見えた。……彼女は戦闘時などで興奮状態になると、瞳がより赤くなり眼孔が鋭くなるという傾向がある。私は三人の中で彼女との付き合いに関しては一番長いのでその事をよく知っていた（ミーシャやティティスも当然知ってるだろうが）

「ど、どうしたんだよ口ゼ？……そんなに怖い顔して？」

……私は彼女のただならぬ雰囲気を感じて恐る恐る聞いてみた。

「…やられたね」

彼女は静かにそう言った。

「な、何が？」

私はなんのことかわからずに口ゼに聞き返した。

「…ノアちゃんのお財布…今何処にあると思う？」

彼女は私の懐を指差しながら言った。

「そりゃあ…ちゃんとココに…あれ？…あれれ!？」

彼女に指摘されて初めて私は懐にあった財布がなくなっていることに気付いた。

「きつとさっきの娘だろうね…それにしてもあのテクニク…多分、わたしの卓越した動体視力じゃなかったらわからなかっただろうね…!」

「誉めとる場合か!とにかく犯人を捜すぞ!なんせあの中には旅の資金も沢山含まれてるんだからなっ!」

「捜すつて…この広大な公園を…しかもこの人混みの中でどうやって捜すの？」

「うっ…それは…」

私は口ゼの質問に答えることができなかった。そう、このマンフアリ中央公園はそれこそエアポートのように巨大な公園で、ただでさえ探索が難しい上に縁日の混雑で尚更人捜しなんてできる状況ではなかった。しかし、この日の私は冴えていた。すぐにこの状況下でも犯人を捜し出せるすべを思いついたのだ。

「…口ゼ、お前の鋭い感覚でなんとか犯人を捜し出せないのか？」

私は口ゼにそう聞いてみた。

私がそう口ゼに聞いたのにはちゃんとした理由があった。今更言う必要もないだろうが、彼女の感覚器官、特に視覚、嗅覚、聴覚においては人間離れした性能を持っている。故に私達が旅をする中で彼女のそれらの能力の存在は欠かせないものとなっているのだ。例えば、彼女と一緒にいる限り、彼女のずば抜けた視力のおかげで私達は双眼鏡いらずだ。…もつとも、そのずば抜けて優れた感覚器官の

せいで苦勞することもあるのだが…（彼女の嗅覚は特に人間の血液や体液に敏感に反応するらしく、生理等様々な性的プライベートがバレることも…）とにかく、私は彼女に期待して言ったわけだが、彼女からは意外な返事が返ってきた。

「あー…それはちよつと難しいんだよねえ…」

「なんでだよ？なんか不都合でもあるのかよ？」

私がそう聞くと彼女はこんなことを説明しだした。

「そりゃあ…確かにノアちゃんが言うようにわたしの視覚や嗅覚や聴覚は鋭いケド…この人混みの中じゃあ視覚や聴覚は役にたたないし…屋台の食べ物の匂いで嗅覚もきかない…まさに八方塞がりつてワケ！」

私はその言葉を聞いて少しガツカリしたが、元はと言えば不用心だった私のせいだ…彼女に頼ってばかりもいられなかった。

「そうだよな…無理言つて悪かつたな口ゼ。…そもそも財布を盗られたのは不用心な私のせいだもん…ホントは自分でちゃんと責任を取らなくちゃならないのに…」

私が自分のふがいなさに落ち込んでいると、彼女が優しく私にこう言った。

「なに言つてんの！困つた時は助け合うのが私達の約束だし今までだつてずつとそうしてきたでしょ？…だからそんなに自分を責めないで…大丈夫、きつとなんとかなるつて！」

私は彼女の励ましに少しだけ元氣を取り戻した。

「ありがとう口ゼ…！だけど…ホントにこの先どうやってあのスリ野郎を捜せばいいんだ？」

「それはねえ…ノアちゃんにおまかせっ！わたし考えるの苦手だから…！」

…彼女のこうゆうなげやりなところは正直、直してもらいたいものだ。

「うーん…仕方ない…超原始的な作戦でいくしかなさそうだ…」

「え？なにになに？どんな作戦なの？」

「…二手に分かれてさっきのスリ野郎を捜すしかないだろう」

「ひえ〜…半ばヤケクソだね！」

「いいか？この手のスリつてのは何回も犯行を重ねる可能性が高い。

…つまりまだこの公園内にいる可能性も高い！」

「なるほど！」

「えっと…今は午後八時か…お祭りが終わる十時までの二時間でなんとしてもスリを見つけ出すんだ！」

「了解！では早速…」

「ちょ、ちよつと待てよロゼ！」

犯人を捜しに行こうとするロゼを私は引き止めた。

「えっ？なあに、ノアちゃん？」

「わかってると思うけど…犯人を見つけたとしてもだ、魔法はともかく爪や牙は絶対に使うなよ！」

「…つまり、フツーの人間みたく振る舞えってこと？」

「そうだ！一般人にお前のおんな姿見せたら色々とマズイからな」

「でもお…もし反撃されたらどうするの？」

「大丈夫だって！相手は女だぜ？大したことねえーよ！」

「そだね！…ノアちゃんこそちゃんと手加減するんだよ？犯人を刑務所より先に病院に連れていくハメになるから！」

「私や猛獣かいな！」

「ハハ！…それじゃあねノアちゃん！犯人を捕まえたらまた会おうねっ！」

「おうよ！気をつけてな！」

こうして、二人の少女達は人混みの中に消えて行きました…。

ここは四人の宿泊しているホテルの部屋。…部屋ではミーシャとテイイスが今後の予定を立てていた。

「時にミーシャ、今後はどうする予定なんだい？」

テイイスがパソコンをいじりながら言った。

「…さあ…色々資料をあらってみただけ…この辺にバベルを起動させるためのカードキーがあることぐらいしかわからなかったし…」
ミーシャが資料のコピーを見て、ため息混じりに言った。

「こつちもそんなカンジだな。色々検索かけてみたがカードキーはどうやらこのマンフアリ周辺の何処かに隠されているらしい……くらの情報しかなかったぜ？」

テイイスが言った。

「…なにせ…千年も前の話だからね…仕方ないよ…」

ミーシャはやる気なさげに言った。

「やつぱし、この辺りをシラミ潰しに捜すしかなさそうだな」

「…まあ…それもアリかもね…だけど…手はまだ他にもあるよ…？」

「なんだよその手って？」

テイイスが聞くと、ミーシャが少し間を空けてから言った。

「…ドワーフ達に聞くの…！」

「ドワーフ族って言ったら…この大陸に昔から住んでいる小人の仲間だろ？なんでまた？」

「…彼らは大昔からこの大陸に住んでいるわ…もしかしたらカードキーのことや赤い悪魔のことも何か知っているかも知れない…！」
ミーシャは珍しく言葉に力を込めて言った。

「…決定だな。明日にでもドワーフ達に会いに行くと思いますか！」

「…でも…ことはそんなに簡単じゃないよ…？」

ミーシャはティティスの言ったことを遠回しに否定した。

「？」

「ドワーフ達に会うためには…東の深い森に行かなくてはならない…ドワーフ達が森の何処にいるかわからない以上、空からの探索は不可能…よって森を歩いて捜すしかない…だけど森の中には凶暴なモンスター達がわんさかいるって話だし…実際、帰って来なかった人達が大勢いる…危険な旅になるのは間違いないよ…！」

ミーシャが言った。

「危険な旅路か…このことをあとの二人に告げるのは少々心が痛むなあ…」

ティティスがパソコンを閉じながら言った。

「…そうね…これから先…戦いはより激化していくでしょうね…敵も味方も…お互いに血を流し合うことになるのは避けられないだろうね…」

ミーシャが言った。

「…なあ…ミーシャ…」

ティティスがミーシャに静かに問いかけた。

「…何ティティス…？」

「あの二人は…ロゼッタとエレノアは…よく『幸せ』について話していた…。俺は…今まで世界を救うためなら全てを犠牲にしても構わないと思っていた…だけど…いくら世界の平和のためとは言え…果たして彼女達の『幸せ』を犠牲にすることが許されるものなのだろうか…？」

「…」

ミーシャはただ黙ってそれを聞いていた…。

「お前だって本当はわかってるんだろうミーシャ？…仮にコロツサル達魔物を倒して世界に平和が戻った時には…その暁には…エンドラーズは…ロゼッタを…ロゼッタを…」

…ティティスはそのから先の言葉をどうしても言い出せなかった。

「…エンドラーズ様がロゼッタを…葬り去るのは必然的なこと…私

達にとつてはかけがえのない友達でも…世間一般からみたら彼女は『赤い悪魔』で破壊と殺戮の化身でしかない…用が済んだら…再び悲劇を繰り返さないように…彼女をこの世界から抹消する…残念だけどこれが正論であり…そして…運命なんだよ…」

ミーシャが言った。

「運命…か…果たしてエレノアが了解するかな？」

ティティスが少し皮肉を込めて言った。

「…するわけないでしょうね…だけど…例えエレノアや私達が反対しても…あるいはエンドラーズ様がロゼッタを生かして下さったとしても…東西両国の軍隊が黙ってないでしょうね…なぜならば…人々は赤い悪魔を何よりも恐れているからね…赤い悪魔の復活を知しられたら軍隊との衝突は避けられないだろうね…それだけ『赤い悪魔』が人々の心に残した傷は大きいんだよ…」

ミーシャは淡々と、少し淋しげに言った。

「そうだな…仕方ないことなのかも知れないな」

ティティスはただそう言うしかなかった。

「…世界の平和は…彼女の死によって初めて達成される…でも…だけど…例えそれが神の定めた運命だったとしても…そんなんじゃ世界が平和になつたところで…私達は本当の意味での『幸せ』を手にすることはできないよ…そう…永遠にね…」

…二人はただうつ向いて黙る他なかった。ただ時間だけが虚しく過ぎていった…。

《忍スリを捕まえる！》

祭りも終盤に差し掛かったその頃、ロゼッタは風に漂うわずかな匂いを頼りにスリを探していた。

「うーん…確かにこつちの方のはずなんだけどなあ…女の子のはずなのに…妙に隠れるのが上手いなあ…？」

ロゼッタがそんなことを言いながら公園の入口に差し掛かった…その時だった、

「あ…で…」

「！…何か聞こえる！…この声は…！」

ロゼッタの鋭い聴覚が何かを捕えた。

「…入口の方だ！行ってみよう！」

ロゼッタは声のする方向へと走って行った…

「…見てよ見てよ！これなら当分の間お金には困らないねシロ！」
…公園の入口付近でイブキが嬉しそうにシロに言った。

「…ったく…それで？もうおこづかい集めには気がすんだらう？

…さつさと赤い悪魔をジパングに連れていこうぜ？…俺は早く国に帰りたくて仕方ないんだよ！」

シロがそっけなく言った。

「もつ！そんなに焦らないですよ！…せつかくの旅行（？）…なんだから！ちよつとは楽しまないとね！…ほら、可愛い娘には旅をさせるって言うじゃん？」

「なあーに言っただか！…彼氏の一人もいねえクセによ」

「う、うるさい！余計なお世話だよ！」

イブキが顔を赤らめて言った。

「ふん…とにかくだ、それだけ財布と金が集まりや十分だろ？さつさとずらかるぞ」

「言われなくてもわかってるよ！こんなところさつさと…」

イブキがそう言いかけたその時だった…

…ガサガサガサッ！

茂みから何者かが飛び出してきた！

「!?？」

「見つけたよ！さあ、ノアちゃんのお財布を返してよっ！」

茂みから飛び出してきたロゼッタがイブキにそう言い放った！

「な、なな…なによアンタ!？」

不意を突かれたイブキがぎこちなく言った。

「わたしはロゼッタ!…あなたがお財布を盗ったノアちゃんの親友だよっ！」

「ノアちゃん…?…ああっ！アンタ！私が財布をスツた緑の髪の娘と一緒にいた…！」

「…やっぱりあなたが盗ったんだ」

「あっ…」

イブキはついつい自分が財布を盗ったことを言ってしまった。

「このバカッ…！これで何も言い訳できなくなっちゃったじゃねえかっ！」

シロがイブキに言った。

「さっ！返してよ！私達のお財布！」

ロゼッタがイブキに言い寄った。

「…だとよイブキ、どうするんだよ？」

シロが聞くと、イブキがきっぱりこう答えた。

「決まってるでしょ?…悪いけど…貴女には少し痛い目にあってもらうよ！」

イブキはそう言うつと着物の懐から手裏剣を取り出してロゼッタに投げつけた！

「わっ!？」

ロゼッタはとつさに手裏剣をかわした！3つの手裏剣がロゼッタの後ろに生えた木の幹に突き刺さった！

「ロゼツタって言ったわね？死にたくなかったら諦めて立ち去るとね！…今のは挨拶がわり、次は外さないよ？」

イブキがロゼツタに言った。

「忠告ありがとう…だけど…ここで逃げるわけにはいかないんだよねえ〜！…喧嘩上等だよ」

ロゼツタが身構えながら言った。

「え…あ、ああ…いい度胸してるわね…」

正直、ロゼツタの答えにイブキは戸惑った。

「（ちよつとちよつと！なんで逃げないのよあの娘！？）」

イブキがシロに耳打ちした。

「（知らねーよ！…だが…あの娘…身体中から血の臭いがプンプンしやがる…魔力も少しあるみたいだし…百戦錬魔の強者とみえた）」

「（それじゃあどうするのよ！？）」

「（俺が知るかよ！…暗殺はお前の専門だろーが！）」

「（もう暗殺の域じゃないよ！…上様から騒ぎは最小限に抑えるよと言われているんだから！）」

「あ、あの…もうそろそろよろしいですか？」

ロゼツタが二人のヒソヒソ話にしびれを切らして言った。

「よくないよ！よくないけど仕方ない！…逃げないなら泣きべそかせてやる！」

イブキは懐から小刀を取り出して言った！

「…泣きべそかくのはお前の方だよこのスリ野郎！」

イブキの後ろの方からロゼツタの聞き覚えのある声があった。

「ノアちゃん！」

「なっ…お前はっ…！」

「おっと！動くなよスリ野郎とそのペット！…動いたら風穴が空くぜ？」

エレノアは44マグナムの銃口をイブキに向けながら言った。

「私はスリじゃない！立派な女忍者だ！」

「俺はペットじゃねえっ！」

イブキとシロはそろって言った。

「あんたらが何者だろうと私には関係無いね！命が惜けりや持つてるもん全部置いてきな！」

エレノアが言った。

「は！？あんたら自分達の財布を取り戻しにきただけでしょ！？なんで有り金全部置いて行かなきゃいけないのよ！！！」

イブキが反論した。

「こちらら旅の最中で金がねえんだよ！…そう言えば…お前…忍者とか言つてたな？忍者がこんな都会に何の用だ？…まさかこんなくだらない犯罪を犯すために来たわけじゃねえよな？」

エレノアが聞いた。

「…それを聞いてどうするの？」

イブキが言った。

「別に？…ただ…私達には敵が多いもんでな、一応聞いてみただけさ。」

エレノアが言った。…すると、イブキがこんなことを話始めた。

「貴女：『赤い悪魔』って知ってる？」

「…は！？」

「私とシロはジパングのお殿様のご命令を受けて、赤い悪魔を探している…そして発見し次第赤い悪魔をジパングに連れて帰る…！」

「な、なんで…」

「これ以上は話せない…わかったでしょ？私達は忙しいの。…さっさと赤い悪魔を探さないと…」

イブキがそう言いかけた時、

「…その必要はないと思うよ？」

ロゼッタが口をはさんだ。

「どうゆうこと？」

「だって…赤い悪魔は…」

「よ、よせ！ロゼー！」

エレノアがロゼッタを止めた。

「どしたの？」

イブキがロゼッタに聞いた。

「…ううん、なんでもないよ」

ロゼッタが答えた。

「…とにかくだ、さつさと有り金置いてどっか行ってくれよ！」

エレノアがイライラしながらイブキとシロに言った。

「言われなくても…こうしてやるよっ！」

ボムツ！モクモクモク…！！辺り一面に煙が広がった！

「煙幕っ！？しまっ…ゲホゲホ！」

…やがて、煙が晴れた頃には二人の姿はもうなくなっていた…。

「く、くそ…！逃げられた！畜生っ！」

エレノアが悔しそうにじんだ踏んだ。

「まあまあ！そんなに怒らないでよノアちゃん！…ほら！」

ロゼッタが地面に落ちていたエレノアの財布を拾いながら言った。

「けっ…！一応私達の財布だけは置いていったか」

エレノアが舌打ちをしながら、でも少しホッとして言った。

「それより…あの人たちなんでわたしのこと捜してたんだろーね？

まだ正体バれてないケド」

ロゼッタが首を傾げながら言った。

「私を知るかよ！…だがどうせろくな連中ではあるまい。…心配す

るな、お前の安全は私が責任を持って守るからよ！」

エレノアが言った。

「ノアちゃん…うんっ！ありがとう！頼りにしてるからね！」

ロゼッタが嬉しそうに言った。

「さあて…お祭りも終盤だし…そろそろ行くとしますかな！」

エレノアが話の内容を変えるように言った。

「行ってくて…どこにい？」

ロゼッタが聞くと、エレノアがウインクしながらこう言った。
「…エンディングセレモニーさ！」

《夜空の華…ホワイト》

ここはエレノア達四人の宿泊している部屋…部屋には二人の白い髪
の人間がいた。

「…まだかなあ？」

…テイテイスが言った。

「…何が…？」

ミーシャが聞いた。

「いや…エレノアが夜の十時になったら窓の外をしろって言った
からさ」

テイテイスが窓の外を見ながら言った。

「…？…こんな時間に何が…？？」

ミーシャも興味津々で窓の外を見た。

…間もなく時計の針が二十二時を指した。その時だった、…ひゅる
るるるる…バーン！夜空に大輪の花が咲いた…！

「これは…花火？」

「…なるほど…エレノアらしいわね…綺麗…！」

「ああ…きつと今頃…あの二人もこれを見てるんだろっな」

「…そうね…たまには…無心で何かにみとれるのもそう悪くないの
かも知れないね…」

ミーシャがしみじみしながら言った。

「そうだな。…純粹に何かを美しいと感じて…何かを愛し慈しむ心も大事なのかもな…」
テイティスが答えた。二人はただ黙って夜空の花々を眺めていました…。

《イブキと花火》

…ドーン！…バーン！

「そう言えば…花火なんていつ見たかしら？…ジパングでも最近はずいぶん忙しくてあまり見れなかったからなあ…」

ここは中央公園の真ん中付近にあるアスレチック広場。…アスレチックの頂上でイブキがそう呟いた。

「…なんだよ気持ち悪い。花火になんか思い出でもあんのかよ？」
アスレチックの下から白い狼が言った。

「…別に」
「それよりも…なんでさつき逃げる時に奴らの財布だけ置いてきたんだよ？」

「あの二人…明らかに赤い悪魔について何か知っているような口調だった…奴らを遊がせといて後をつければきつと赤い悪魔に会える…そう思ったの」

イブキが言った。

「なるほどな」

「勇者協会で助っ人を捜して…奴らを尾行する…今後の予定はこんなカンジかな？」

「悪くねえ」

「…ねえ、シロ…」

…イブキが淋しげにシロに問いかけた。

「ん？なんだ？」

「忍つてのはさあ…やっぱし孤独じゃなきゃいけないものなのかなあ…」

「…さあな…」

「なんだか…さっきの二人…とっても幸せそうだったよね？…お互いに助け合ってたさ」

「そうだな」

「…あつ…別に深い意味はないんだよ？私にはシロがいてくれるし…私はそれで十分幸せだから…！」
イブキがシロに言った。

「…俺は所詮獣の類だ…人間の代わりにはならんよ…もつとも、お前に人間の友達なり恋人なりができるまではできる限りの範囲で代わりを努めるつもりでもあるがな」

…シロが言った。

「シロ…アンタ…」

「…特に深い意味はないがな」

「…ったく、アンタってホントひねくれてるんだからっ！」

一人の少女と一匹の白い狼はお互いの存在価値を噛み締めながら夜空の花火を眺めていました。…静な、でも幸せな時間が流れていました…。

…ひゅるるるるる…ドーン！…バラバラバラ…

「わぁー！すごいすごい！きれいな花火！」

ロゼツタがはしゃぎながら言った。

「綺麗だろロゼ？…まあ、お祭りの最後は花火って相場決まってるんだがな」

エレノアが言った。

「へえ…そうなんだ！でも…なんだろね？うまくは言えないけれど…こうやってノアちゃんと一緒にいるとなんだか…幸せなんだよねわたし…例え決まりきった物事の流れの中でもね」

ロゼツタが少し淋しげな笑顔で言った。

「…ロゼ…」

「昔カエサルがよくこんなことを言ってたよ…人は失って初めてその価値に気づく…家族、友達、恋人、楽しみ、幸せ、喜び…失うものは人それぞれかもしれない…だけど…失ってしまったものはもう二度と戻らない…失ったものの価値に気づいたときにはもう手遅れなんだ…そこにあつて当たり前だったものが突然消えて無くなってしまう…そう…悪夢はいつも突然なんだよ…かつてのこのわたしがそうであつたように…」

ロゼツタが言った…。

「…ロゼ…お前…」

エレノアが心配そうに言った。…だけどエレノアはどう彼女に接してよいのかわからなかった。…彼女とカエサルに何らかの関係があるのは薄々理解していても、時に落ち込む彼女をエレノアはどんな言葉で励ませばよいのかわからなかったのだ。

「…だけどねノアちゃん…わたしわかつたの」

…突然ロゼツタが座っていたベンチから立ち上がった。そして天を

仰ぎながらこう言った。

「人は確かに失うことを恐れずには生きては行けない。生きていけばいつか必ず何かを失う運命にあるからね。…けれど…わたしは人は失うものがあるからこそがんばって生きていけるんだって思ったの。…だってそうでしょ？失うものが無ければ守るものも無い。守るものが無ければ何もなくていい。…うまくは言えないけれど…そんな生き方は間違ってると思うんだよ。…極論を言えば生きていく意味が無い。…生きることの根本はそんなカンジだとわたしは考えてるよ？…今…思えば…昔、わたしが暴走した理由の一つは…『守るもの』を失い、『生きる意味』を失ってしまったからだったのかもしれないね…」

ロゼッタは呼吸を整えてからさらにこう続けて言った。

「かつてのわたしの『守るべき大切な人』は…カエサルはもうここにはいない…だけど今のわたしにはノアちゃんが…みんながいる。みんながいてくれる。…わたしはそれだけで十分幸せなんだ。…そして…わたしは悟った…この幸せを…みんなを守ることが…わたしにかせられた義務であり運命であると…そして…それがわたしの『生きる意味』そのものであると…！」

…ロゼッタの熱弁を聞いていたエレノアはただ呆然とするしかなかった。

「な、なんとなく言いたいことはわかったけれど…とにかく難し過ぎるんだよっ！お前は哲学者かつ！？？」

エレノアが逆ギレして言った（せつかくいい話だったのに…）。

「…ゴメン、わたしもよくわからないや！」

ロゼッタがコロツと言った。

「なんじゃそりゃ！？」

「結局、わたしたちみたいなおバカさんにはこんな小難しいお話は無理でしたってことで！」

「なんだそのいい加減な後始末は？！…っーか私はバカじゃねっつーの！」

エレノアが言った。

「キヤハハ！…あ、花火…もうすぐ終わりみたいだよノアちゃん？」
ロゼツタが空を指差した。

大量の花火が一気に打ち上げられ空に無数の華が咲いた。…やがてその華も夜空の中に消えていきました…。

「…終わったな」

エレノアが言った。

「そだね〜！」

ロゼツタが応える。

「さて、やることももうないことだし…帰ろうか？」

「さんせい！…わたしお腹すいちゃってさ〜帰ったら晩ごはんね
！」

「はあ！？お前、祭りであんだけ食ったのにまだ食うのか！？」

「うん。余裕！」

「…よおーし、わかった、夕飯作ってやってもいいが…」

エレノアはそう言うのと突然走り出した。

「なっ…ノアちゃん？」

「私よりも先にホテルについたらなっ！」

エレノアがそう言うつてウインクした。

「あっ！そんなのずるい！先に走り出すなんて！だけどわたしだって負けないよお〜！！待てえっノアちゃん！！」

ロゼツタもまけじとエレノアの後を追った。

…しかしこの時の二人にとって勝負の行方などどうでもよかったのだ。ただ単にこの遊びを通してお互いの幸せを確かめ合いたかっただけだったのだから…

第二十四章 幸せの価値（後書き）

《イメージカラー》

ロゼッタ…深紅（真紅）

情熱・闘志を表す。本作では血と炎の色から破壊と殺戮の象徴。

エレノア…緑

主に優しさ・思いやりを表す。本作では旅人のイメージを持つ。

ミーシャ…白

無・清純を表す。本作では無関心な心や空白を主に表す。同時に冷たさのイメージも持ち合わせる。

アクア…青（水色）

流動・清を表す。本作では静けさ、川のせせらぎや海辺の風景など水に関する自然情景の象徴でもある。

イブキ…黒

闇・悪意を表す。しかし本作では悪意よりもむしろ隠し事のイメージが強い。夜の景色の代名詞。

レクイエム…紫

悲哀・混沌を表す。本作中では最もマイナスイメージの強いカラーでもある。未知の境地の象徴。

第二十五章 ドワーフ・フォレスト（前書き）

いやあ、やっと大学受験が終りまして、久々の更新をようやくすることができました。

待ってた人も待ってなかった人もぜひ楽しんでお読みくださいね！

第二十五章 ドワーフ・フォレスト

…ザアアアアア…

その日、灰色の空からは大粒の雨が降り注いでいた。ここはマンフアリの遙か東にある森林地帯。森の中は薄暗く、地面は降り頻る雨のせいで半ばぬかるんでいた。昼間だというのに小鳥や獣はおるか生き物の姿すら見えなかった。ただ草花や木々の葉が雨に打たれる音だけが辺りに響いていた…。そんな森の中を四人の少年少女達が歩いていた。…四人は何やら会話を交しているようである。

「…あーあ…雨かあ…こうジメジメしてると気分まで湿気ちまうよ」
緑の髪と瞳をした、迷彩柄のレインコートを身につけた少女がため息混じりに言った。

「まあまあエレノア。たまにはこういうのもいいんじゃないか？そもそも天気なんて晴れか雨くらいしかないんだし」

傘を持ちながら白髪と金色の瞳をした少年がそう言った。

「…そうかな…？…雪とか台風みたく風と雨と雷の混じったやつとかもあるけど…」

…白髪でブルーの瞳の少女が淡々と言った。少女はごくフツートのピニール傘をさしていた。

「あーん！そんな話どうでもいいよ！わたし雨は大嫌いなのおー！！わーん！」

髪と瞳と同じ赤色をした唐笠をさした少女が肩をすくめて言った。

「なんだよロゼ？確かに雨は嫌だけど…そこまで必死に雨を嫌悪するかフツー？」

エレノアが言った。

「だってえ〜！髪は濡れるし肌は汚れるし体は冷えるし…もう最悪だよーっ！」

ロゼッタが自慢の赤いロングヘアを撫でながら言った。

「…そっか…ロゼッタは綺麗好きだもんね…濡れるのを嫌うのも頷けるよ…」

ミーシャは納得気味にそう言うのだった。そう、実はロゼッタはその清潔感溢れる可愛らしい容姿からもわかるようにかなりの綺麗好きであるのだ（戦闘時、鋭い爪と牙をふりかざして相手を切り刻んで血まみれになる彼女からは想像もつかないが）。彼女は大切な髪のお手入れには余念がない。自分専用のヘアブラシを五本も持っている。入浴はなんと二時間！シャンプーとリンスはもちろんボディーソープまで何種類も使い分けている。風呂から出たら出たで長い髪を乾かすのに一時間もかかる。…おまけに暇さえあれば髪をいじくってみたりお肌を撫でてみたりする普段のロゼッタの行動を見てもわかるように彼女はとにかく綺麗好きなのだ。もちろん、エレノア、ミーシャ、ティティスの三人はそのことをよく知っていた（ロゼッタ本人にはあまり自覚は無いようだが…）。

「お風呂に入りたいよー！なんとかしてよノアちゃん！」
ロゼッタがダダをこねた。

「知るかつ！そこら辺の水溜まりで我慢しろよ」

エレノアが苦笑いしながら言った。

「いやー、そりゃないでしょエレノア」

ティティスが言った。

「…どうでもいいけど…雨が強くなってきたねえ…」

ミーシャがホントにどうでもいいように無表情で言った。

「もおー！みんなヒドイや！…いいもおーん！ドワーフの隠れ里についたらお風呂に入れてもらうもんねー！」

ロゼッタがホッペタを膨らまして言った。

「そりゃ無理つてもんだろロゼ？なにせドワーフって言ったたら小人数だから…私は昔話でしか聞いたことないけど…風呂もさぞかし小さいだろうよ？」

「…お前の胸みたいにか？」

エレノアの発言に対してティティスが冗談混じりにからかった（限りなく事実だが）。

「あっ、手がすべった。」

ポカッ！

エレノアのゲンコツがティティスの頭を殴った。

「いてっ！？何すんだよこの暴力女！」

「うっさいよ！アンタがからかうからいけないんだろーが！」

「俺は事実を述べただけだよ。」

「なっ、なんだと！？よ、よくも人が気にしてることをぬけぬけと

っ！」

「あれ？気にしてたんだ。」

「黙れっ！この変態オタクめっ！」

エレノアのその言葉にティティスが少しムツとしてこう言った。

「俺はオタクじゃねえって！…結構そのあだ名気にしてるんだから

やめてくれよマジで！」

「ハハハ！や〜い！変・態・オタク！」

エレノアがわざとはやしたてた。

「やかましい！この貧乳男女！」

「なによ！この不良少年！」

「短気！」

「怠け者！」

ギャーギャー！

「…まあ〜た始まったよ…」

ミーシャが呆れ顔で言った。

「いいんじゃない？仲がいいほどケンカをするってね！」

ロゼツタが笑いながら言った。そう、エレノアとティティスのこんなやりとりは日常茶飯事なのだ。決してお互いのことが嫌いなわけではなく、むしろその逆でただ単にお互いの気を引きたいだけなのかも知れない。…要するに二人はお互いのことが好き…と、ロゼツタとミーシャは考えているわけである（そう考えるのは誰でも当た

り前だが」。

「…はいはい二人共、…じゃれあいはそのままでにして…早いとこ前に進まないと夜になっちゃうよ…」

ミーシャが二人のじゃれあい(?)を止めさせた。

「だ、誰がじゃれあいだよミーシャ！」

エレノアが恥ずかしそうに言った。

「そ、そうだぜミーシャ！誰がこんな色気のないやつなんかとじゃれあつかよ！」

ティティスも顔を赤らめながら言った。

「どうせ私は色気なんてないよーだ！…そもそもアンタから仕掛けてきたんじゃないかよー！」

「うっせーよ！お前が言い返さなければいいだけだろーが！」

「まあまあ二人共！」

ロゼツタが二人をなだめに入った。

「ふんっ！」

「けっ！」

二人は言い合いこそやめたが、お互いにそっぽを向いてしまった。

「あらら…ケンカしちゃったよ…」

「…大丈夫だよロゼツタ…どーせいつもみたいに明日にはまた仲良くなってるんだから…」

ミーシャが冷静にロゼツタに言った。

「…それより…早く歩こうよ…このままだと本当に日が暮れちゃうよ…」

ミーシャが言った。

「わかってんよ！さっさと行こうぜ！」

エレノアが少タイライラしながら言った。

「…うっ…そんなにピリピリしなくても…」

「あれれ？もしかしてノアちゃんやつあたりした？」

「してねーよ！…行くぞっ！」

エレノアはそう言ってさっさと歩き出した。

「やれやれ…ホント世話の妬ける奴だな」
ティティスが言った。

「…お前もな…」

ミーシャがそうツツコミを入れたのは言うまでもなかった。

《…魔界 魔王の城》

…ブルート…それは無数に存在する世界の中で最も邪悪な世界の名…そこには光も希望も無くただ闇と混沌だけが支配していた…これはそんな世界にたたずむ一つの不気味な城の一室での出来事…。

「…時にコロツサルよ…ガイア征服の進み具合はどうだ？」

一人の男が言った。

「ふん…まあまあだ。…お前はどうかんだルーインよ？」

コロツサルが男に言った。

「先日セレスティアを掌中に治めてきたところだ…これからアンゴルモア様に報告に行く」

男がそう応えた。

「ほう…そいつはご苦労だな。それより…久々に帰って見たはいいが、ネビュラスとサキュバスの姿が見えんのだが？」

コロツサルが言った。

「サキュバスはバスバロナク…ネビュラスはラータンズの制圧に行っている…アンゴルモア様は最近是世界征服に力を注いでおられる…この城に我々四天王が滞在しているのも珍しくなったものだ…」

ルーインは言った。

「やれやれ…四天王も楽ではないな」

コロツサルがため息混じりに言った。

「…ずっと気になっていたんだが…何故お前はそこまでガイアにこだわるのだコロツサルよ？」

ルーインが聞いた。

「あの世界には数え切れん程の未練があるからな…だが…今回は前のようにはいかない…！」

コロツサルは窓の外を眺めながら言った…。黒々とした厚い雲が空を覆っていた…何処までも…果てしなく…。

《ドワーフの村》

…お昼過ぎ、雨も小降りになった頃…エレノア達四人は小さな家々が立ち並ぶこれまた小さな村にたどり着いていた。

「これは…」

「小さいな…」

「そだね」

「…」

四人は驚いていた。小さな村の小さな家々や小道を小さな小人がちょこちょこ歩いていたらだ。

「うわっ！？人間だ！」

「ホントだ！珍しいねー！」

ザワザワ…

ドワーフ達はエレノア達に気がつくのと、とたんに騒ぎだした。…どうやら彼らにとって人間は珍しい存在であるようだ。ドワーフの身長は一メートル前後。まるで絵本に出てくるような可愛らしい服を着ていた。体が小さいこと以外は人間と何ら変わりなく村人には男も女も大人も子供もいた。

「…歓迎…されてるのかな？」

エレノアが言った。

「どちらかといえばそーみたいだね」

ロゼツタが答えた。

「ねえねえ！どこからきたの？」

「こんな森の奥まで…大変だったでしょう？」

「なにしにきたの？散歩？観光？」

ドワーフ達はエレノア達に興味津々で近付きまるで知り合いかのようになら声をかけてきた。

「えっ？えーと…その…何から話せばいいのやら…」

エレノアはドワーフ達の質問攻に困った。

「…なあ、ミーシャ。ちょっと話が違わないか？」

ティティスがミーシャに言った。

「…何が…？」

ミーシャが言った。

「お前の話だと、ドワーフ達は人間に対して警戒心が強いんじゃないか？…真逆じゃないか？」

ティティスが言った。

「は？そうなのかミーシャ？」

エレノアもドワーフ達に足下を囲まれながら言った。

「…私にもわからないよ…だいたい昔の文献に書いてあったことだけ

ら…ドワーフ達の考え方も変わったのかもね…」
ミーシャが答えた。

「そんなものなのか？」

ティティスが言った。

「いいんじゃない？だってこんなにカワイイんだし！」

ロゼッタがドワーフ達と楽しそうに戯れながら言った。

「な、なあ、とりあえずこの村で一番偉い人と話をさせてくれないか？色々聞きたいことがあるんだけどさ？」

エレノアが足下にたかるドワーフ達に頼んでみると…

「あ、そうなの？どうするみんな？」

「うーん…別にいいんじゃない？」

「だよー！せっかくこんなところまで来てくれたんだしね！」

「じゃあ決定ね！…ささ！村長の家はこっちだよ！ついてきてね！」

ドワーフ達は四人を後押しするようにとある場所へと連れて行ってくれた。…空は相変わらず曇っていたが、雨は既に止んでいた。そんな曇天の中を四人は沢山のドワーフ達に囲まれながら村の中を進んで行った。

「なんだかホンワカしてていい村だねえ！」

ロゼッタが言った。

「そうでしょ？私達は自給自足を中心に生活してるの。」

「とっても平和でいいところよ！」

ドワーフの一人が嬉しそうに言った。

「なんだかずいぶん珍しがられてるけど…そんなに人間が珍しいのかい？」

エレノアがドワーフ達に聞いた。

「そりゃもう！おそらく百年ぶりくらいだよ！…多分、今まで人間に会ったことのあるドワーフは村長くらいだと思っよ。」

別のドワーフが答えてくれた。

「…百年前って…村長さんは一体何歳なの…？」
珍しくミーシャが興味ありげに聞いた。

「さあ？でも多分百歳とちよつとだと思つよ。」
また別のドワーフが答えた。

「…ああ、そう…私の方が歳上だ…」

「え？」

「…いや…なんでもないよ…」

ミーシャがいつもの淡々とした口調で言った。

「あ…着きましたよ。ここが村長の家です」

その家は周りの小さな家よりも多少大きい程度の赤い屋根の家であった。

「ちよつと待つててくださいね。今から村長にお話してきますから
そう言つて数人のドワーフ達がその家に入つて行つた。

「…でつけー家！…なのかな？」

ティティスが冗談混じりに言つた。

「こら！失礼だろ！」

「…そうだよティティス…大事なのは大ききさうんぬんじゃないでし
よ…？」

エレノアとミーシャに注意されて、ティティスはちよつと落ち込んだ。
だ。

「な、なんだよ…冗談だよ冗談」

するとドワーフがティティスに笑顔でこう言つてきた。

「アハハ、あんまり気にしないでよ。事実、僕達ドワーフはあなた
方人間よりもかなり小さいからね。でも小さくても幸せに暮らすこ
とはできるよ！」

ドワーフはそう言つた。

「そっか…そうだよな。大事なのは中身と心意気だよな」

ティティスが妙に納得したように言つた。

「どしたのティーちゃん？…何かあつたの？」

ロゼッタがティティスに聞いた。

「あ、いや。なんでもないさ」

ティティスが答えた。この時、彼の脳裏にはアクアの姿が一瞬浮か

んでいたのだが。

…その時、村長の家のドアが開いた。

「村長の許可がありました。どうぞ中へ」と、言いたいところが、なにぶん狭いもので…誰か代表で一名様限りお入りくださいまし」

ドワーフがそう言ったので四人は早速、代表を決めることにした。

「誰がいいかなあ？」

ロゼッタが言った。

「さあな。だけど少なくともお前はダメだよロゼ」

エレノアがロゼッタに言った。

「ええ〜！なんでなんで??」

「そんなの決まってるだろうが！トラブルメーカーのお前が行ったら色んな意味でややこしくなるからだ！」

「うーん…確かにわたしはトラブルメーカーかもしれないけど…ノアちゃんも人のこと言える立場かなあ？」

「う、うるさいな…いいよ。ここはミーシャに行ってもらおうから」

エレノアがミーシャの方を見ながらそう言った。

「…え…なんで私…？」

ミーシャが不思議そうに言った。

「だってそうだろ？この中じゃあ一番小柄で入り易いし、頭もいいし…一番理に叶ってると思うんだが」

エレノアがミーシャを推薦した理由を説明した。

「なるほど確かに…大事な話を聞くんだ。俺らよりは経験豊富なミーシャが行ってくれた方がいいかもな」

ティティスがエレノアに賛成するようにそう言った。

「…というわけでミーちゃんに付けてーい！…みたいだよ？」

ロゼッタがとりあえず頑張って話を合わせた。

「…そう…ぶつちやけめんどくさいけど…わかった…私が行って話を聞いてくるよ…」

ミーシャはしぶしぶ了解したようだ。

「頼むぜミーシャ。…後で何か上手いもん作ってやるから！」
エレノアがミーシャの肩をポンポン叩きながら言った。
「…それじゃあ…アップルパイでも頼もうかな…」
ミーシャはそう言つと小さな家の小さな扉をくぐって行つた…。

《会談》

この段落はミーシャの視点でお楽しみくださいね（…が多いけど）
。 …ドワーフの村長さんの家の中に入って見たけど…とにかく天井が低い…歩くのはおろかまっすぐに立つことすらできやしない…なんて面倒な役を引き受けたんだ…と、私はそう思わずにはいられなかつた…。

「村長、お客様をお連れしました」

「…うむ、お入りなさい」

…狭い廊下を進んだ先にあつたドアに向かって案内役のドワーフが話かけると、ドアの向こうからしわがれた声が聞こえてきた…流石に村長ということだけあつて年配者のようだ…。

…まあ…そんなことはどうでもいいのだが…。

「…失礼します…」

…私がそう言つて中に入つてみると…そこには小さな老人が一人…椅子に腰かけていた…白い髭を蓄えた…村長と言つよりはむしろ長老と言つべきだと私は思った…。

…ま、正直どつちでもいいし…。

「ようこそ人間さん。ささ、とりあえずお座りくださいな」

…老人が私にそう勧めたので、とりあえず床に座ることにした…。しかしそれでも、老人があまりにも小さいので、私が彼を見下ろす

感じになってしまった…。

…気まずい…かな…？

「さてさて…お客様は紅茶でいいですか？」

…老人がそう言ったので私は

「…いえ…結構です…それよりも…ちょっと伺いたいことがあつてここにきた諸行であります…」

…と、丁重に言った…（…つもり…）。

「はあ…それで、一体何をお聞きになりたいのですか？」

…老人が不思議そうに聞いてきたので…私はこう言った。

「…実は…私達はこの土地にあるとゆう『鍵』を捜しています…理由はちよつと言えませんが…この辺りの土地に詳しい貴殿方に聞けば分かると思ひまして…」

…私が言うつと老人は

「鍵…ですか？…残念ながらそのような話は聞いたことがありませんが…？」

…と言った。

「…そうですね…」

…私は少々ガツカリした…知らないと言われても…それじゃあ…正直困るんだけど…ねえ…

…と、思っていたらドワーフの村長の口からこんな言葉が出てきた…。

「…あ、そういうえば…鍵かどうかはわかりませんが…ここから南にだいぶ行ったところにある古代遺跡には様々な宝等があるそうですよ。…もしかしたらその中に貴女方の捜している鍵もあるかもしれません」

…と、言ってきた。

「…なるほど…だいぶ参考になりました…」

…と、口では言っておいたが…正直あまり良い情報ではないなあ…結局、いつものように風潰しに探すかなさそうだ…。

「…色々ありがとございまして…それじゃ私は先を急ぐのでこれ

で……」

……そう言っただけで私が立ち上がるうとする……」

「あつ……ちょ、ちょっとお待ちください！実は……我々もちょっと貴女方に聞きたいことがあります……よ、よろしいでしょうか？」

……聞きたいこと……？なんだろう……？？」

「……聞きたいこと……？……なんでしょう……？」

……正直あまり興味はなかったが……まあ、嫌と言うわけにもいかないからね……一応……そう言っておいた……」。

「……貴女方は旅人ですよ？最近……なにかおかしいと思いませんか？」

「……？……」

「あ……いや、すいません変なこと聞いてしまつて……だけど……我々は感じているんですよ……ここ最近の魔物の凶暴化に……異常気象諸々……まるで……この世界そのものがおかしくなつてきているように感じてもらえないんです。……風の噂では赤い悪魔が復活したと言つ話もありますし……一体……この世界はどうなつていのですか？……旅の道中で何かお聞きになりましたか？」

……村長が言つた。……私はその言葉に少しドキツとした……赤い悪魔の復活……すなわちロゼツタの存在が噂とは言え……情報が既に世の中に流出しているなんて……いずれはこうなることは覚悟していたが……こんなにも早いなんて……予想外だ。……とりあえず……赤い悪魔のことについては何も知らないことにしよう……。しかし……世界中の異変については私も感じているし……これについては話す価値がありそうだ……」。

「……確かに……おっしゃるとおり……今現在の世界はどこかおかしいと私も思います……どの町や村の人に聞いてみても……魔物の凶暴化は確かな事実のようです……それに……干ばつや水害といった自然災害も昔に比べて著しく多くなつた気がしてなりません……原因はわかりませんが……もしかしたら何か重大な危機がこの世界に迫っているのかも……知れませぬ……」

……私がそう言つと……」

「やはり…何か重大な危機が…恐ろしいことです…。…いたい…この世界はどうなってしまうのでしょうか…?」

…村長が疲れ気味に言ったので…

「…だいぶお疲れのようですね…今日はもうこのぐらいにしておきましょう…ありがとうございます…」

…私はそのように言った…。

「ああ…すまんもう…最後にこの年寄りから一つアドバイスじゃ…何があっても前向きに生きなさい…そうすれば必ずや道は開けるじやろつに…」

…村長が私に言ったので私は…

「…覚えておきます…」

…と軽くそう言っておいた。…私は村長の家を出る時つくづく思った…事はそう単純ではなさそうだと…。おそろく…今まで生きてきた二百年間で…最も謎と危険に満ちた時間になるであろうことを…私は…感じずにはいらなかった…。

《サウス・オーロラ》

四人がドワーフの村を訪れたその日の真夜中のこと…四人は村から少し外れた開けた所にいつものようにミーシャのドールハウスを建てて泊まっていた。昼間の雨は完全に止み雲一つ無い夜空が広がっていた。そして…この暖かい地域には不釣り合いな程大きく美しいオーロラが夜空にかかるカーテンのように輝いていた…。そんな異常とも思えるオーロラを白髪の少女が一人、黙ってドールハウスの屋根の上に座って眺めていた…。

「…こんな南方の地域にオーロラがでるなんて…やっぱり何かがおかしいよ…」

ミーシャが独り呟いたその時、

「ほお…まさかこんなところでオーロラが見れるとは…夢にも思わなかったな」

後ろから聞き覚えのある女性の声がした。

ミーシャが驚いて振り返ってみると、そこには漆黒のドレスを身に纏い、長い黒髪を風になびかせた女性が一人立っていた

「…ロゼリアー又…！」

ロゼリアー又とはロゼツタの本当の姿(?)である。性格はわりかし凶暴で、悲観的な考え方の持ち主でもある。

「ふふふ…そんなに驚きなさるなミーシャ。…別に捕って食いはしないからさ。それと…わたしのことはいつもみたいにロゼツタでいいよ」

ロゼリアー又はそう言いながらミーシャの横に腰かけた。

「…どうしてわざわざその姿で現れたの…？」

ミーシャがロゼリアー又に聞いた。

「わざわざって…一応これがわたしの本来の姿だよ。…夜には太陽の光による魔力の抑制が無くなるからね…それこそわざわざ子供の姿をしている理由がないよ。」

ロゼリアー又がそうミーシャに答えた。

「…そう…それもそうだね…」

「だろ?…ところでミーシャ、お前はいつもこうやって夜中に起きて何かしらやってるのかい？」

ロゼリアー又が珍しく不思議そうな表情でミーシャに聞いた。

「…ハハハ…まさか…もう午前三時だよ…?…毎日こんなじゃあ体がもたないよ…。今日は…ちよつと気になることがあって…それでちよつと考え事をしてたんだよ…」

ミーシャが珍しく笑いながら言った。

「気になること…?」

ロゼリアー又が首を傾げながら言った。

「…ねえ…ロゼツタ…最近おかしいと思わない…？」

「何が？」

「…最近…魔物が凶暴化しているように思えるの…おまけにみてよ…こんな南方でオーロラができるなんて…それに…異常気象諸々の異変等が頻発している…まるで…この世界そのものが…崩壊に向かっているような…」

ミーシャが真剣な眼差しでロゼリアー又を見ながら言った。

「…さあ…？気のせいじゃないか？たまたまだよ。そう、たまたまたま…」

ロゼリアー又はまるでミーシャの視線を避けるように夜空に輝くオーロラを見ながら言った。

「…嘘だね…ロゼツタ…貴女…何か知ってるでしょう…？」

…ミーシャが言った。

「ほほう…何故そのように思うのだミーシャ？」

「…貴女のような自信家が話相手と視線を合わせない時は何か隠し事をしている時だからに決まってるでしょ…？」

ミーシャが淡々と言うと、ロゼリアー又は…少し間を置いてからこう言った。

「…ハハハッ！…わかったよ…教えてやるよ…今、この世界で何が起ころうとしているのかをな…！」

「…！…」

ミーシャは息を飲んだ。

「…とまあ、偉そうなことを言っではみたが実のところわたしにもよくわからないだよ」

「…え…なに…そのおまぬけな答えは…??？」

ロゼリアー又のその言葉にミーシャは啞然としてしまった…。

「…だが…一つだけ言えることがある」

急にロゼリアー又が真面目な表情で次のようなことを言い出した…。「…ここ最近なのだが…この世界全体の魔力の流れが乱れているよ

うなんだ…お前も魔法使いなら知ってるだろ？この世界には魔力の流れというものがあって、それが様々な自然現象や生き物の生理現象をコントロールしているってことを…今現在起きている異常事態はこの魔力の流れの乱れで全て説明できる…ただ…

「…ただ…？」

「その原因がわからないんだよ…仮に…いや…そんなはずはないか…」

「…？…何…？…どうしたの…？」

「…いや、なんでもないんだよ…とにかく、何かしらの異変が起きているのは確かな事実だ…そしてそれは…」

「…私達にも関係してくると…？」

「そうだ…ついでに…この際だから率直に言っておこう…全ての元凶はおそらくアングルモアだ」

「…！…」

「わたしも詳しい事はわからないのだが…奴は千年前…この世界の外からやって来たと言われている…つまり我々の言う魔界だな…そ

してこの世界を支配しようともくろんだ…アングルモアには何人かの直属の部下がいて…実は…コロッサルもその一人なんだ」

「…えっ…！？…それじゃあ…ロゼッタ…貴女は…！」

「そうさ…わたしはかつてこの世界を支配するために創造された破壊兵器…本来ならばわたしやその他の兵力によって世界は魔物の…

アングルモアの手に渡るはずだった…しかし、わたし自身が暴走したことによつてこの計画は頓挫した……ただ…コロッサルが今現

在こつちの世界にいるということは…再びアングルモアがこの世界の支配に乗り出したと考えて間違いないだろう……そして最近の魔力の流れの乱れはそれに関係していると考えるのが自然だろうよ」

ロゼリアー又はそう言った。

「…だいが難しい話になっちゃったね……だけど…これでハッキリしたよ…私達が倒すべきはアングルモアだつてことがね…！」

ミーシャが言った。

「ああ…そうだな」

「…なんだか眠くなっちゃった…だから…私はもう一眠りしてくるよ…。…おやすみ…ロゼッタ…また明日…っていつか後でね…！」

「…おやすみミーシャ」

ミーシャはそう言うのと天窓から家の中へと戻って行った…。そして屋根の上にはロゼリアー又だけが一人残された…。ロゼリアー又は天を仰いだ。…相変わらず美しいオーロラが夜空に輝いていた。オーロラはまるで風になびくように七色に変化しながら輝いていた…。そんなオーロラを眺めながらロゼリアー又は独りこづきくのであった…。

「事故だったとはいえ…かつて世界を滅亡に追いやったこのわたしが…今度は世界を滅亡から救うハメになるなんてね…こんなことをカエサルが知ったら…きつと笑われるんだろうな…。会いたい…会いたいよカエサル…だけど…貴方はもういない…ごめんねカエサル…わたしがあの時…貴方を殺していなければ…今頃は一緒に天国に行けてたはずなのに…。…ああ…いつたい…この気持ちを何に…誰にぶつければいいの？…わたしは…この先いつたいどうすればいいの？…千年経った今でも…わたしは貴方のことを愛しているのに…貴方は応えてはくれない…そう…貴方は死んだから…例え…コロツサルやアンゴルモアを倒して仇を打って世界を平和にしたって…貴方は…カエサルは…もうわたしのものには帰ってきてはくれないでしょうね人を愛するというのは…どうしてこんなにも辛いのだろうか…？わたしには…わからないよ…」

第二十五章 ドワーフ・フォレスト（後書き）

小説題名『ノスタルジア』の真の意味を知るためには最終回まで読んで頂かないといけません。

…それでは！次回もお楽しみに！

第二十六章 DEATH VALLEY（前書き）

さて、今回はエレノア達四人とはまた別の旅のグループが登場致します。いずれも今までに登場したことのある人物なので、どんな組み合わせなのか楽しみにしてくださいね。

それでは、第二十六章をどうか堪能ください。

第二十六章 DEATH VALLEY

ここは帝国首都マンフアリから内陸に900km程入ったところに広がる乾燥地帯…そんな乾燥地帯のほぼ中央を巨大な峡谷が走っていた。そこは通称『デス・バレー』と呼ばれていた。…この谷には3000年以上も昔の文明の墓地が多く点在しており、墓の内部には山のような財宝が眠っているという伝説が存在していた。しかし…その宝を狙って入った者は死者の呪いを受けると言われ、人々は呪いを恐れ誰も谷には近付こうとはしなかった…。そんな恐ろしい峡谷に四人の人影があつた…。

「…ヒューー！噂には聞いていたが…さすがにここまで大規模な峡谷だとはな！」

エレノアが関心したように口笛を鳴らしながらそう言った。

「…あんまり喜べないよエレノア…この広大な土地を探索しなきゃならないんだからね…そもそもカードキーがここにある保証はないんだし…」

ミーシャが淡々と静かに言った。

「確かにそうだよなあ…あまりにも広いからバギーを何処に駐車するか迷ったし」

ティティスが冗談混じりに笑いながら言った。

「ん……空気がカラカラに乾いているからかなあ…お肌の調子が…」
ロゼッタが手鏡を覗き込みながら言った。

「確かに相当乾いた土地だよな。…水や食料は大丈夫かティティス？」

「ああ、バッチリさ！水も食料もたっぷり一ヶ月分はあるさ。…もちろんガソリンもな！」

ティティスがエレノアに笑顔で答えた。

「うん。装備は万全だな…で、問題はこれからどうするか…だな」

エレノアが言うのと四人はそろって谷底を見下ろした。…谷は想像していた以上に深いらしく、谷底は暗くてよく見えないほどだった。四人が立っている位置から一步踏み出せば、谷底へは一直線…もちろん、生きては帰れないのだろうが。

「まずはどうやって降りるか…だよな」

エレノアが腕組みしながら言った。

「えっ？そんなのヤキトリちゃんとワニガワちゃんを使えばいいんじゃないのノアちゃん？」

ロゼッタが当たり前のように言った。

「…そう簡単には行かないよ…谷底がどうなっているかわからない以上…むやみに降りるのは危険だよ…それに…ヤキトリもワニガワも翼開長が10m近くもあるんだ…谷底が狭いと着地はともかく…帰る時に上手く飛び立てないんだよ…」

ミーシャがそう説明した。

「そうそう。…それに帝国軍の飛行艇がいつ巡回してくるかも知れないしな…召喚獣を使う時は慎重にやらないと！」

ティティスが頭上の青空を見ながら言った。

「うーん…まあ…議論してても始まらない。…とりあえず状況を調べてみるか！」

そう言うのとエレノアは側にあつた小石を拾い上げ、それを谷底に向かって投げ入れた。

ポイツ ヒュ〜ン……………シーン…。

「…で？何がわかったのノアちゃん？」

ロゼッタがニコニコしながらエレノアに聞いた。

「…いんや、何も…」

エレノアは谷底を覗き込むようにして答えた。

「とりあえずこれでこの谷が相当深いってことはわかったな」

ティティスがヘラヘラしながら言った。

「…要は何もわからなかつた…と…」

…ミーシャの鋭いツツコミに皆黙ってしまった。

「ふう…もお…しょーがないなあ…いいよ、わたしが行って谷底の様子を見てくるからさ！」

ロゼツタが大きく伸びをしながら言った。

「え？いいのカロゼ？」

「うん！いいよ！みんなはその間に作戦なりなんなりを決めておいてくれればいいよ」

「…そつか…ロゼツタには飛行能力があるし…小柄で機動力もあるから偵察役には最適だね…！」

「だけど…ホントに大丈夫カロゼツタ？」

「へ？なんでティーちゃん？」

「いや、一応いわくつきの場所だしちょっと心配だなと…そうだからこれを持って行ってくれよロゼツタ」

そう言うとティティスは鞆の中から何やら黒い物体を取り出した。

「なあにそれ？」

「じゃーん！お手製のトランシーバーさ！いいか？この脇のボタンを押している間は相手に対して話せる。相手の会話を聞く時にはボタンを離せばOKだ。…わかつたカロゼツタ？」

「うん！わかつた〜！」

「へえ…いつの間にそんなもん作つたんだよティティス？」

エレノアが興味津々にティティスに聞いた。

「マンファリの電気街で買ったパーツで作つたのさ！…俺って結構凄くないか？」

「…オタクだ…」

「ミーシャ…そりゃないよ」

ティティスが自慢気に言うと、ミーシャがそれに対して冷たい一言を浴びせたのだった。

「アハハ！ま、元気だしてよティーちゃん！…それじゃあ、わたしはぼちぼち行ってくるからね！」

「気をつけて行けよロゼ！」

「大丈夫だよノアちゃん！パパッと行ってサッと帰ってくるからさあ〜！」

「何かあったら俺のトランシーバーで連絡しろよロゼツタ！」

「りょーかいっ！…それでは！いつてきまーすっ！！」

ロゼツタは三人にそう言うと言いつ赤な翼を広げて、一度大空に舞上がった後に谷底に向かって急降下して行った…。

「…行っちゃったね…」

「大丈夫さミーシャ。…ロゼは基本的に面倒くさがりだからな、すぐに帰ってくるさ！」

「そうそう！…さあて、俺はバギーの整備やらなんやら色々やることがあるから…今後の予定は二人で決めておいてくれよな」

「はいはい」

「…面倒…かも…」

こうして三人は近くに駐車しておいたバギーのもとへと一旦引き返すことにしたのであった…。

《谷底探索》

乾いた風が吹き抜ける谷底を、まるでグライダーのように一つの赤い影が飛んでいた…。

「…はあ…どこを見ても石と砂ばかり…退屈だなあ〜」

ロゼツタは欠伸をしながらそう呟いた。

彼女が現在飛んでいるのは谷の深さ350m地点、谷底から約10mの高さである。谷底は意外と狭く、翼開長5m弱の彼女ですら通

るのがやつとだった。…しかし、なるべく詳細に谷底の様子を調べ
る為に彼女は低空飛行を続けていたのだった。

「…わずかだけど…風の流れに乱れがあるね…きつとこの先に何か
あるはず…！」

ロゼッタは優れた感覚をフルに使って辺りの様子を探っていた。す
るとやがて彼女の予想通り、谷底をしばらく飛んでいると急に広々
とした空間が目前に現れた。

「…ここは…？」

そこはまるで劇場のように円形をした空間で、半径は100m以上
ありそうだった。そして真ん中には何やら祠のようなものが立てら
れていた。

「なんだろう？…祠…みたいだけど？」

彼女はその祠の前に降り立った。…祠は石で作られており、表面に
は何やら沢山の小さな文字が綴られていた。

「…なんだこりゃ？全然読めないよ」

しかし、ロゼッタはあることに気が付いた。

「…何？この臭い？…なんだかカビ臭いなあ…もしかして…この
祠の下から…？」

そう、祠の下からわずかではあるが風が吹いていることに彼女は気
が付いたのだ。ロゼッタはふと辺りを見回した。…すると谷底から
そそりたつ壁に階段らしきものがジグザグに掘込まれていた。

「…ははあん…なるほどなるほど…そーゆーことね！」

すると何を思ったのかロゼッタは祠の裏にしゃがみこみ、地面に耳
を押し当て、拳で地面を数回叩いてみた。…そして目をつぶって耳
をすました。

「…やつぱりね。とりあえずこのことをティーちゃんに報告しない
と…え〜と…トランシーバーを…っ」と…」

ロゼッタはポケットからトランシーバーを取り出すと、トランシー
バーに向かって話かけた。

「…もしもーし！ティーちゃん？聞こえてる〜??？」

「ザー…はいはい！こちらテイティス！何かあったのかロゼツタ？」

「うん！なんかね、明らかに人が作ったような物があつただけとさあ…どう思う？」

「ザー…人工物か？どんな感じだロゼツタ？」

「えくとね…パツと見たカンジはただの祠みたいなんだけど…何だか地下に大きな空間があるみたいなの。…それに上と谷底を行ったり来たりできるように崖面に沿って階段もあるんだよ？…わたしの勘だところが一番怪しいと思うんだけど、どうかな？？」

「ザー…なるほど…確かにカードキーを隠してあつても不思議じゃないな…よし、わかった。そこを中心に調べてみよう！…と、いたい所だが、もうすぐ日も沈むことだし、調べるのは明日からでも遅くはないだろうから今日はもう戻って来てくれていいよ。ありがとうなロゼツタ」

「いえいえ！どういたしまして！…ところでティーちゃんたちは今何してんの？」

「ザー…俺達か？さっきまではバギーの整備したり今後の予定とか話合っていたけど…今はあんこはつぶあんとしあんのどちらが美味いかで盛り上がってるぜ…ちなみにもちろんロゼツタはつぶあん派だよな！？」

「うーん…そうだね！どちらかと言えばつぶあんの方が好きかも」

「ザー…おおっ！わかつてくれるかロゼツタ！いやあ、実はエレンアとミーシャがあんこはこしあん以外にあり得ないってうるさくてさ、つぶあん派の俺としては許せないわけよ？わかる？…だから早く戻ってきてつぶあん派側に加勢してくれよ！」

「アハハ！…了解。今からそっちに戻って加勢したげるよ。通信終わりまゝす！」

…ロゼツタはそう言い終わるとトランシーバーをポケットに戻した。そして翼を激しく羽ばたかせると再び空中へと浮かび、もときた道へと飛び去って行った…。

「まあ…わたしは中に栗が入ってるあんこならつぶでもこしでもどつちでもいいんだけどね！」

《異色の二人組》

真夜中…月が高くなる頃、デス・バレーに向かって乾燥した大地を走る一台の白い軽トラックがあつた…運転席には眼鏡をかけたちよつと気弱そうな少年が、助手席には黒髪でポニーテールの少女が乗っていた…そして後ろの荷台には一匹の白い狼が座っていた…。

「あの…イブキさん？ホントにこっちにいるんですか？その…貴女の捜している人物つてのは？」
眼鏡の少年が言った。

「当たり前でしょ！？だからこうして向かっているんじゃない…
発信機が反応しているから間違いないよ」

少女が発信機の信号を捕捉する機械を見ながら言った。

「発信機…ですか？」

「そ！実は一度だけそいつらと接触したことがあって、その時にちよつかり相手の財布に発信機をつけておいたの！なかなか気転がきくでしょ？」

イブキが得意気にそう話した。

「ふん…何をたわごとを…その場の思いつきだろうが」
後ろの荷台からシロが皮肉たっぷりにイブキに言った。

「う、うるさいな…私はアンタじゃなくてエリオットにきいてるの
！」

イブキがちよつと怒りながら言った。

「ハハハ…それよりも…イブキさんが捜している人達つてずいぶん

と変わった人達ですね？」

「え？…なんで？」

「だってそうでしょ？…こんな何も無いような砂漠に来てるなんて…おまけに発信機が指し示している場所って…あの悪名高きデス・バレーなんですよ？」

「…ですばれー？…って、そんなに危ない場所なの？」

「あれ？知りませんでしたか？…デス・バレーは数千年以上も前の文明の王族の墓があるとゆう谷ですよ。…伝説ではそこに足を踏み入れた者は死者の呪いを受けると言われています。だからそのことを知っている多くの人は絶対に近付かないんです」

「ふーん…そうなんだ。…エリオットもそのことは知ってたの？」

「ええもちろん。だから正直あまり行きたくないんですが…一応お金をもらって貴女に雇われているのでイヤと言うわけには…」

「なにびびってるの！そんなの迷信よ迷信！貴方は勇者で私は超一流の忍者なんだから心配ないって！」

イブキがエリオットの肩をバシバシ叩きながら言った。

「はっ！自分で超一流なんて言ってるうちは三流なんだよ。…本物の実力者はそんなことは言わんよ。能ある鷹は爪を隠すってことわざ知らんのかお前は！」

シロがイブキにダメだしした。

「わ、悪かったわね三流忍者で…だけどこれから超一流になる予定なんだからちよつとくらいいいじゃない！」

「…ふん、さてあと何年かかることやら」

「なによシロ！私だってもう16なんだから子供扱いしないでよ！」

「…そうゆうところが子供だったの」

「うっ…！！」

「まあまあ二人共！仲良くしてくださいよ。…それよりも…貴女方の捜している人達ってどんな人なんです？一度だけ会ってらっしゃるんですよ？」

エリオットがイブキとシロをなだめた後、興味津々に聞いてきた。

「どんなって言われても…一人は緑のショートカットの髪で銃を使うちよつと乱暴な女の子で…もう一人は赤い髪の娘だけど？」

「赤い髪…？…もしかして…髪の長さは肩よりもちよつと長くて瞳も赤くありませんでしたか？」

イブキの言葉を聞いたエリオットは先日出会ったある少女のことが思い当たったのだ。

「そ、そんなに細かいところまでは…でも…確かにそんな娘だったような気もする」

イブキが答えた。

「知り合いか？」

シロが後ろの荷台からエリオットに聞いた。

「えっ…あ、いや別に…そうゆうわけではないんですけどね…」

話がややこしくなりそうなので、エリオットはあえてロゼッタとの関係は否定しておいた。

「（それにしても…どうゆうことですか？…仮にイブキさん達が捜しているのがロゼッタさんだとすれば…当然ミーシャ先輩も一緒のはず…だけど先輩は世界を救うためのカードキーを探す旅の最中のはず…つまりイブキさん達の狙いはカードキー…？…いや…だったらわざわざ先輩達に会う必要はない…だとしたらイブキさん達の目的は一体何なのでしょう…？…そう言えば…確か先輩は勇者協会の図書館で『赤い悪魔』について色々調べていました…もしかしたら『赤い悪魔』が関係してるんじゃないか…）」

「どしたのエリオット？…黙って考え込んでるじゃって？」

…イブキの声にエリオットは我にかえった。

「…えっ…あ、ああ。すいません。ちよつとボーっとしてて…」

「もう…しっかりしてよねエリオット！貴方は勇者なんだから！」

「わかってますよ。…さ！もうすぐ夜明けですし、ちよつと急ぎますよ」

エリオットがアクセルを踏み込むと、軽トラックは勢いを増して走り出したのであった…。

「…はあ…先輩が絡んでいるのかあ…これはかなり厄介なことになりそうですね…」

「ん？何か言った？」

「いや…なんでもないんです…はあ…」

「？」…しかしこの時の二人はまだ気が付いていなかったのだ…まさか…自分達がこれからとんでもない戦いの渦に巻き込まれることになるなどとは…！

《…招かれざる訪問者》

夜明け前、谷底にある祠の前に一人のスーツに身を包んだ男が立っていた…。

「ここですか…しかしながら不気味な所ですねえ。まあ、この私が言うのもなんですが。とにかく、この場所にバベルを起動させるためのカードキーがあるのかどうか調べなくてはいけません。他の三人もここ以外の遺跡を調べ始める頃でしょうし、私も始めるとしますか…！」

…男はそう言うと、祠の中に吸い込まれるようにして消えて行った…。

《秘密の入口》

朝日が谷底を照らす頃、谷底にある祠の前に四人の少年少女達の姿があった。

「イテテ…なんでまたあんな急な階段を降りなきゃいけないんだよ
…おかげで腰が痛いなのよ…」

「イテテ…」

「情けねえなあー…運動不足なんじゃないのかイテテイス？」

「う…そんなつれないこと言わないよエレノア…」

「キャハハ！ティーちゃんっておじいちゃんみたいかもっ」

「そりゃあんまりだよロゼッタ…」

「…で…この祠の何処がどうなってるのロゼッタ…？」

ミーシャがロゼッタに聞いた。

「え〜とね…とりあえずこの祠の地下に何か空間があることは確か
なんだケド…」

「…ってことはこの祠が出入口の可能性が高いわね…ロゼッタ、こ
の祠を動かせる…？」

「うん！任せてよミーちゃん！」

ロゼッタはそう言つと祠の石を軽く蹴つ飛ばした！

ドカツ！ズズーン！

祠はあっという間に倒れて横になった。…そしてその下から秘密の
階段が姿を現した…！

「隠し階段か…コイツは確かに怪しいな」

エレノアが銃をハンカチで拭きながら言った。

「…これって…つまりは…その…昔の…お墓…だよな…？」

ミーシャが恐る恐る言った。

「まあ噂通りならそうなるな。…もしかしてミーシャ、お前怖いの
か？」

ティティスが顔色の悪いミーシャをからかった。

「…いや…その…私…そーゆー…オカルト系ってダメなんだよ…マジで…」

ミーシャが真つ青な顔をして言った（真面目に）

「あ…いや、そりゃ悪かった…ハハハ…」

まさかミーシャがオカルトが苦手なんて知らなかったティティスは正直焦った。

「大丈夫！悪いお化けはわたしがみんな殺したげるからねミーちゃん！」

ロゼツタが胸を張って言った。

「そうそう！みんなで行けば大丈夫さ！前進あるのみだ！行くこうぜ？」

エレノアが三人に威勢よく言った。

「らじゃっ！」

「そうだな。さっさと行きますか！」

「…御意…」

こうして、四人は暗い階段の奥へと進んで行ったのであった…。

…その様子を少し離れた所にある岩影から伺っていた二人と一匹がいた。

「なあーるほど…あの二人には他にも仲間がいたのね」

イブキが言った。

「はあ…やっぱり先輩が絡んでいたのか…」

エリオットがため息混じりに言った。

「しかし…奴ら一体このような所になんのようにだ？さっぱりわからん」

シロが怪訝そうな表情で行った。

「さあ…私にはわからないケド…あっ！もしかして赤い悪魔があそこにいるとか？」

「それはないなイブキ。…赤い悪魔は既に復活しているらしいから

な。…ただ…」

「ただ？どしたの？」

「…赤い悪魔の気配と言うか臭いがだな…その…マンフアリで嗅ぎつけた時からずっと変わってないんだよ…臭いの濃度がさ…」

「まさか！何かの間違いじゃあないの？」

「そんなわけあるか！…少なくとも城で赤い悪魔の髪の毛だって言われて出された代物と全く同じ臭いだ…！」

「…そ、それって…つまり…まさか…」

「そうだ…俺達はこの数日間ずっと赤い悪魔の側にいたってことだ…！」

イブキはあまりのショックに黙り込んでしまった。

「…貴女方の目的は赤い悪魔だったのですね…一体どうして…？」
エリオットが少々顔色悪く聞いた。

「…今それをお前に話す事はできない…だが…一国を担う重要な任務だとゆうことだけは言っておく…！」
シロが言った。

「…黙っててごめんねエリオット…貴方も勇者なら赤い悪魔の恐ろしさは知ってるはず…嫌なら遠慮しないでここで私達と別れてもいいんだよ？」

イブキがエリオットに優しく言った。…エリオットはしばらく考えていたが、やがて笑顔でこう切り出した。

「…短い間でしたが…ここまで一緒に来たんですから…最後までお付き合いさせて頂きますよイブキさん」

「…エリオット…」

「ふん…見た目は弱そうだったが中身はしっかりしているようだな」

「ハハ…それに個人的に赤い悪魔にはちょっと興味があるものから…（先輩つながり）」

エリオットが照れくさそうに言った。

「それじゃあ決まりね…！…これからもよろしくねエリオット…！」

「こ、こちらこそ…！」

そうして二人は堅い握手を交わすのであった。

「やれやれ…人間とはよくわからん生き物だ…」

シロがそうぼやいた…。二人と一匹が無惨に倒された祠の前に来てみると、エリオットが石の表面に書かれた古い文章に気が付いた。

「古い文字ですね…残念ながら読めません」

「ドンマイだよ。…それよりシロ、赤い悪魔の臭いはどう？」

「ああ…相変わらず変わらない…いや…むしろ強くなっているような…これはまるでさっきまでここにいたかのような…」

「え…そんな…だってここにいるのは私達とあの四人だけじゃあ…」

「…考えられる可能性は二つだ。…一つは彼らが赤い悪魔と接触したことがあるか…もう一つは…あり得ないだろうが彼らの中に赤い悪魔がいるか…だ」

「彼らの中に…！？ハ、ハハ…まさかそんなわけないよ…ねえ、エリオット？」

イブキがエリオットに言った…が、エリオットは黙ってしまった…彼の顔は真っ青だった…。

「…エリオット…？」

「…あ、…いや、大丈夫です。心配しないでください…」
エリオットが眼鏡を上げながら言った。

「…で、これからどうするんだよイブキ？」

「そんなの…あいつらについていくしかないでしょっ！行こう、エリオット、シロ！」

「わ、わかりましたイブキさん。」

「へいへい」こうして、二人と一匹は階段の奥へと吸い込まれるように消えて行きました…。

《赤い髪の少女とエリオット ……今思えば……》

先日、僕はマンフアリの公園で一人の少女と出会いました。赤い髪をした、とても可愛らしい女の子でした。…僕と彼女は一緒にベンチに座り、昼食をとった。その時のことは数日経った今でも何故か鮮明に覚えています。何故ならば、彼女がとても美しい女性であったからです。それに、僕と話している間、彼女はずっと笑顔でいてくれたからです。とても気さくで心優しいいい人だと思いました。

…少なくともその時は…でも…それが…そんな可愛らしいはずの彼女の笑顔が何故か僕にはとても怖く感じたのです。彼女の笑顔は…あまりにも明る過ぎて…あまりにも純粹過ぎて…まるで…例え目の前で何が起こきようとも笑っていられそうな…そんな純粹無垢な彼女の笑顔が…僕にはとても恐ろしく感じた…それに…僕は何故か彼女と目を合わせることができなかつた…彼女の真紅の瞳スカーレットを見ていると…なんだか吸い込まれそうな気分になつた…彼女の瞳の奥からは表面的に見てとれる他人に対する優しさや愛着ではない、もっと別の…なにか邪悪とも言えるような…そんな感情が見え隠れしているように思えた…。僕は昔、赤い悪魔についての有名な著書を何冊か読んだことがあります。その中で著者は赤い悪魔について度々こんな表現を使っていました。

『…赤い悪魔とは言い換えれば純粹な狂気にしか過ぎない。しかし、その狂気を生み出したのは紛れもなく人間とそれに準ずる魔物であるのだ。そして私は思うのだ…彼女こそがこの世に存在する唯一無二の真の神であり、神は愚かな過ちを犯した者達に裁きを与えるために降臨したのだと…。』

僕は彼女の赤い髪と瞳、そして『純粹』を赤い悪魔に重ねられずにはいられなかった…。今思えば…一体彼女は何者なのだろうか？普通の人間…？もしかして魔物…？いや、そんな単純なものではない…そんな気がした。だけど…今の僕には何一つわからない…ただ一つ言えることは…ロゼッタさんが何か特別な存在であるということだけです…。

第二十六章 DEATH VALLEY（後書き）

《キャラクター紹介》

イブキ

性別：

身長：155cm

瞳の色：ブラック

髪の毛：ブラック

（ロングでポニーテール）

職業：忍者

相棒：シロ

ジパング出身のくノ一で、ある目的で赤い悪魔を追っている。かなりの行動派である。かな
大好物は納豆と何故かおから。

エリオット

性別：

身長：167cm

瞳の色：ブラウン

髪の毛：ブラック

職業：勇者

先輩：ミーシャ

勇者協会に所属する初心者勇者。基本的に臆病な性格だが、優しいので困っている人は助けないと気がすまない。ミーシャとは何故か元・バイトの先輩後輩の関係である。

第二十七章 因縁の再会（前書き）

さて、新しいキャラクターも増えて物語も複雑になってきましたね。もちろん全員作者のお気に入りですが、特に物語の最初から登場しているエレノアとロゼッタには特別な思いいれがあるものです。対照的な性格の二人のやり取りを書いていると、なんだかとても楽しい気分になります。

∴ それでは、ノスタルジア第二十七章、因縁の再会をどうぞ心行くまでご覧くださいね！

第二十七章 因縁の再会

《地下迷宮》

…何処までも続く回廊…何処までも続く暗闇…ここはデス・バレーの谷底に眠る古代王朝の墓地である。遙か三千年前にこの辺り一帯を支配していたであろう権力者達の多くがこの地に眠っているのだ。…そんな広大な地下墓地の中に四人の少年少女達がいた。彼らこそ、世界の明暗をわけるであろう人類、いや、世界の光(?)である(本人達の自覚は非常に希薄だが)。

「なんかカビくさーい！わたし、鼻がまがりそうだよノアちゃん！」
赤髪の少女が鼻を押さえながら言った。

「確かにちよつと臭うなあ…嗅覚の優れたロゼにはキツイかもな。
…まっ、気にすんなよ」
緑の髪の少女が言った。

「そ、そんなあ！」
「ハハハ、ドンマイだロゼツタ。だから早く用事を済ませてこんなところさっさと出ようぜ？」

金色の目をした少年がロゼツタを慰めるように言った。

「…ホント…正直…早くこんな不気味な場所から遠ざかりたいけど…いくら進めど何も無い…カードキーはともかく本当に何かあるのかしら…？」

白髪の少女がため息混じりに言った。四人がこの地下迷宮に足を踏み入れてから約10分、暗くて真っ直ぐな回廊が一本あるだけだった。…何処までも続く回廊をミーシャの魔法の光シャインだけが照らしてくれていた。しかし、やがて巨大な一枚の扉が四人の目の前に現れた…！

「…これは…？」

「え！？行き止まり！？…なんかガツカリ…」

「いいや違うね。間違はなくこの扉の向こうに何かあるんだ。…ト
レジャーハンターの私が言うんだから間違いないよ」
エレノアがロゼッタとミーシャに言った。

「…つてもなあエレノア…どうやってこんなバカデカイ扉開けんだ
よ？見たところ鍵穴もない…」

…ガタン！ガタガタ！…ゴゴゴゴゴゴ…！

なんと四人の目の前でその巨大な扉はまるで意思を持っているか
のようにゆっくりと一人でに開き始めた…！

…ゴゴゴ…ガチャン…！

…やがて扉は完全に開いた。

「…開いたな」

「わあーい！開いた開いた！」

「スゲー！」

「…」

四人はとりあえず扉の向こう側に行ってみることにした。

「うわあ、なんだか広そうな部屋だねえ！」

ロゼッタの大きな声が部屋全体にこだました。

「ロゼの目では見えても私達には暗くてミーシャの周りくらいしか
見えないよ！…部屋の様子はどんな感じだ？」

エレノアが暗闇でもよく見える目を持つロゼッタに聞いた。

「うーんとね…とりあえず広いね！床に何か大きな箱みたいなのが
いっぱい並べられてるケド…なんだかわからないや。壁に何か…多
分、灯りをもす台っぱいがある。…あつ、あれかな？ちよつと
待っててね！」

そう言うとロゼッタはミーシャの魔法の光の輪から暗闇の中へと飛び出した。

「ロゼ!?何を…」

…ガチャン!

…暗闇の中で何かが動く音がした。するとどうだろう、部屋の壁にあった灯台に一齐に灯がともり、部屋を薄明るく照らした! 「やったー! わたしつてもしかして天才?」

ロゼッタは意外と三人からそう遠くない壁のレバーを掴んでいた。

…どうやら灯りをともし仕掛けをロゼッタが作動させたらしい。

「おっ、ナイスだぜロゼッタ! これで俺達もよく見えるぜ!」

「…ありがとうね…ロゼッタ…」

「いえいえ! それにしても…この部屋はいつたいなんなんだろうね?」

ロゼッタが辺りを見回しながら言った。

部屋は思っていた以上に広く、何やら石でできた棺が規則正しく並べられていた。…そして、部屋の壁にはいくつかの人が通れるほどの縦長の長方形の穴があった。どうやらこの部屋からは通路が枝分かれしているようだ。

「棺桶…? 部屋の用途はわからんが…とりあえず一本道ってわけじゃあなさそうだな。」

テイティスが言った。

「確かに。思ったよりも複雑な構造をしているみたいだな。もしかしたら出入口が複数ある可能性もあるね」

エレノアが言った。

「…それよりも…この床に置いてある箱…中身はもしかして…」

ミーシャがそう言いかけたその時だった、

…ゴゴゴ…ガチャン!

四人が入って来た部屋の入口の扉が突然閉まってしまった！

「!?!」

…ガタガタ…バーン！

「…ウガー！」

そしてさらに、なんと床に置いてあった棺桶から剣と鎧兜で武装した骸骨達が飛び出してきたのだ!!

「なんだ!?!?」

「そんなのわたしにもわからないよう！」

「…少なくとも俺達の味方ではなさそうだが？」

「…そんなの見りゃわかるよ…」

「シャーアツ!!」

十数体もの骸骨達がサーベルをふりかざして四人に襲いかかってきた!!

「ちっ！誰だかは知らないが…風穴空けられたくなかったら引っ込んでなこのしゃれこつべめ！」

エレノアはそう吐き捨てるやいなやホルダーから愛銃を抜き、骸骨達に容赦無く発砲した!!

ドン！バン！ガシャーン!!

骸骨の頭蓋骨は粉々に砕け散った!!…が、頭が無くなってもなお骸骨達はこちらに向かってくるではないか!

「はっ!?!なんだコイツら!?!」

エレノアがびつくりして声をあげた。

「…邪魔だね…みんな下がって…私が一気に片付けるから…!!」

ミーシャが前に出ながら言った。

「…聖なる炎よ…邪悪なる者達を…全てを焼き尽くせ…フラッシュ・

バックー！」

ゴバアアア！！！！

ミーシャがそう唱えた瞬間、凄まじい光と熱を帯びた灼熱の炎が骸骨達を部屋もろとも飲み込んだ！！

「す…すごい…！」

凄まじい熱によって標的は瞬時に焼き尽くされ、後には灰と煙しか残っていないかった…！

「…ふう…とりあえずは安心…だね…」

ミーシャが額の汗を拭いながら言った。

「すごいすごい！！いつの間そんな凄い魔法覚えたのミーちゃん！？」

ロゼッタが目を輝かせながら聞いた。

「…いつって…こないだ…かな…？」

「こないだ？いつの間に…一体いつどこで練習してんだよミーシャ？」

ティティスがミーシャに聞いた。

「…それは…企業秘密だよティティス…」

ミーシャが不適な笑みを浮かべながら言った。

「それにしても…一体コイツらはなんなんだ？間違ひなく死人なんだろうけど…なんで襲いかかってきやがったんだ？」

エレノアが腕組みしながら言った。

「…さっきの骸骨は…ただの人形に過ぎないね…微かだけど…魔力の類で誰が操っていた形跡があるから…」

「人形って…だとしても誰が…何故私達を襲った？」

「…さあ…私もそこまでは…エレノアには心当たりはないの…？」

「心当たりなんかはないよ…そっちの二人はどうなんだ？」

エレノアがロゼッタとティティスの方を見ながら言った。

「心当たりと言われてもなあー…死者を操るなんてこんなふざけた芸当ができる奴はシャクマくらいしか思いつかんが…アイツはロゼツタが以前にぶっ殺したしなあ。そうだよなロゼツタ？」

テイテイスがロゼツタに確認するように言った。

「うん…確かにそうなんだけど…あーなんて言うか…ぶっちゃけ確証はないんだよねえ」

ロゼツタが自信無さげに言った。

「…は？どう言うことだよロゼ？シャクマは死んだんじゃないのかよ！？」

「いや…確かにあの時とどめを刺したはず…だったんだけどね、正直あの時はまだ今ほど魔力は回復してなかったしけっこうちもポロボロだったし…もしかしたら詰めが甘かった可能性があるかも…なんてね」

「…つまりシャクマが生きている可能性がある…確かにそれなら一連の流れも説明できるね…！」

ミーシャが言った。

「シャクマはエフェクトの中でもかなりの実力者だったしな…そんな簡単には死なないのかも知れないな」

テイテイスが言った。

「ごめんね…ちゃんとわたしがあの時シャクマの息の根を止めていれば…」

「何言っただよロゼ！別にお前のせいじゃないって！それに…まだシャクマが生きているって決まったわけじゃないだろう？…それよか、問題はこれから何処に行くかだよ。果たしてどの道に行くべきか…」

その時だった、

「きゃー！！なによこいつら！？こつちに来ないでよ！」

部屋の左側の通路から誰かの悲鳴が聞こえてきた！

「今度はなんだ！？」

「…どうやら私達以外にも誰かいるようね…」

「何かあったのかな？ちょっと行ってみようよノアちゃん！」

「言われなくてもそうするつもりさ！行くぞ！」

「…って、結局行く方向決まったな…まあ、俺はどっちでもいいんだけどね」

こうして、四人は焼き被った骸骨達の灰を踏みつけながら再び暗い通路へと繰り出し、部屋を後にしたのであった…。

《因縁の再会…その壱・顔見知りの面子》

「きゃーっ！何とかしてよエリオット！！」

「そ、そんなこと言わないでくださいよ！僕はまだ初心者勇者なんですからっ！！」

「おい！イブキ！なんとかしろよ！このまま骸骨共に食い殺されるのは御免だぜ！？」

イブキ、シロ、エリオットの三人は地下迷宮の一室で武装した骸骨達に囲まれてしまっていた。

「無茶言わないでよこのバカ犬っ！見てよ！コイツら頭に手裏剣刺さってるのにピンピンしてるのよ！？信じられないっ！アンタこそなんとかしなさいよシロっ！！」

「俺は狼だっ！お前こそ無茶言っなよ！見てみる！さっきから骸骨共の腕や足を噛み砕いてやってるってゆうのに奴ら全然平気じゃねえか！半端な物理攻撃じゃダメだ！なんか凄い魔法とか使えないのかよエリオット？お前勇者なんだろっ！？」

「そ、そんな無理言わないでくださいよお〜！まだ初心者なんですからあ〜！！」

三人が言い合っている間にも、骸骨達はじわじわと迫って来る！
「だ、誰か助けてえ！」

「たまらずイブキがそう叫んだ!…その時だった、あぶないっ!」

…ヒュッ!バガアッ!バキィッ!ガシャッーン!

何者かの攻撃によって骸骨達は三人の目の前でバラバラに砕け散った!

「なっ…!アンタは!」

「ロゼッタさん!」

「えっ!?エリちゃんと…お祭りの時の泥棒ちゃん!?どうしてここにいるの?」

ロゼッタはエリオットとイブキの姿を見て驚いたように言った。

「ロゼッタさんこそ!なんでこんなところに?」

「おいおいお前ら!話は骸骨共を全部殺つてからにしるよっ!」

シロが言った。…彼の言う通りロゼッタの背後にはまだ数体の骸骨達がサーベルを構えて迫つて来ていた!

「あ、確かにそうだね〜!」

ロゼッタはそう言うと、くるりと向きを変えて骸骨達に切りかかった!彼女の鋭い爪があつという間に骸骨達をバラバラに粉碎した!!

「はっ!?!」

「え…?」

「…な、なんなんだ…この小娘は…!?!」

いとも簡単に骸骨達を粉碎したロゼッタの姿に、イブキ達は驚きを隠せなかった。

「ふう…全部片付け終わったみたいだね!二人共だいじょーぶ?あ、あとワンちゃんも平気?」

骸骨達を蹴散した後、ロゼッタが笑顔でイブキ達に問いかけた。

「え…う、うん…ま、まさかこんな形でまた会えるなんてね…でもアナタ…一体何者なの?…てゆーか…アナタがここにいてるってことは…」

イブキがそう言いかけたその時、通路の向こうから三人の少年少女達がこちらにやって来た。

「おーい！なんかだか騒がしかったみたいだが大丈夫かロゼッタ？
…つてえ！？なんじゃこりやあつ！？」

ティティスが、目の前でバラバラに散らばっている骸骨達を見て驚いたように言った。

「…あー…こりやあ…また派手にやったみたいねえ…」

ミーシャがいつものように淡々と言った。

「…つたく、ちよつとは私達の走るペースに合わせるよなロゼ！つ
ーか、人前で爪と牙は使うなって言っただろうが…つて…んん！？
…ああー！！お、お前はっ！？マンファリのお祭りで私の財布を盗
んだスリ野郎っ！」

イブキを見たエレノアがイブキを指差しながら叫んだ！

「なっ…だ、誰がスリ野郎よっ！私はれっきとした忍者だつてばっ
！」

イブキがエレノアに言い返した。

「けっ、人から物を盗む忍者があるかっ！…そもそもだ、なんでお
前がココにいるんだよ？」

エレノアがイブキに対して言った。

「うっ…そ、それは…」

まさか赤い悪魔を探しに来たことなど、イブキは口が裂けても言え
なかった。

「…確かに…エレノアの言う通りだね…さて…どうしてここにいる
のか…説明してもらおうよエリオット…！」

ミーシャが、イブキの横にいたエリオットに問い詰めた。

「エリオット？ミーシャ、知り合いか？」

「…そうだよティティス…ちよつとした…まあ、後輩だね…」

ミーシャがティティスの質問に答えた。

「そ、そんなこと言われても…先輩こそどうしてこんなところに？」

「…私の質問に答えるのが先よエリオット…！」

ミーシャが少し恐い顔をしながらエリオットに言った。

「わ、わかりましたよ…とは言っても…僕はただ、イブキさん達に雇われているだけなので詳しくは…イブキさん達は先輩達を探してみたいだったようですが…」

エリオットが、イブキの方を見ながら恐る恐る言った。

「…なるほどね…で…？…貴女の目的は一体何なわけ…？」

ミーシャがイブキに問いかけた。イブキは少し戸惑っていたようだったが、やがてその思い口を開いた。

「…仕方ないわね…いいわ、教えてあげる。…私とシロはジパングの上様によつて『赤い悪魔』を捜し出し…そしてジパングに連れ帰るよう命じられたの。そんな時にマンフアリでこの野蛮な娘達に出会つてね…なんだか赤い悪魔について知つてそうな口ぶりだったからこつそり後をつけたつてわけ！」

「誰が野蛮だつ…つまりお前らが用事があるのは私達だと？」

「そゆこと」

エレノアの質問に、イブキはぶっきらぼうに答えた。

「さあ、こつちの理由は話したんだ。そちらの理由も話してもらおう！」

シロがエレノア達に言った。

「…話す義理はないんだけど…？」

ミーシャが言った。

「なっ…ふざけるなっ！約束が違うぞ！」

「そつだよ！」

シロとイブキが憤つて言った。

「別にそんな約束してねえだろーが！」

エレノアが言った。

「なによなによ！助けてくれたからつて調子に乗るんじゃないよ！」

「なんだとっ！」

「ちよ、ちよつと！やめてくださいよ二人共！」

「そーだよ！ノアちゃんもイブちゃんも仲良くしようよお！」

凄い剣幕で言い争うエレノアとイブキをロゼッタとエリオットの二人がなだめた。

「二人の言う通りだ。この状況下ではここから脱出するのが先決だろう？もちろん用事を済ましてからになるわけだが」

ティティスが言った。

「なんだよティティス！テメーはどっちの味方なんだよっ！？」

気性のやや荒いエレノアが、イライラしていたのかティティスに喰ってかかった。

「落ち着けよエレノア。…言い争いならここから出てからでも遅くはないだろう？感情的になるのは結構だが…もう少し冷静になれよ」
ティティスがエレノアをなだめた。

「ちっ…わかったよ」

エレノアがしぶしぶ了解した。

「ほら、イブキさんも落ち着いてください」

エリオットが同じくイブキをなだめた。

「わかってるよ！…要は仲良くしろってことでしょう？」

イブキが言った。

「…決まりね…それで…？…これからどうするつもりティティス…？」

ミーシャがティティスに聞いた。

「とりあえず、俺達はさらに奥に行かなきゃならないだろうが…お前らはどうするんだよ？」

ティティスがイブキ達の方を見ながら言った。

「そりゃあ…私達も奥に用事があるわけだし…状況が状況だから一緒に行くことにするよ。それでいいよねシロ、エリオット？」

「…俺は構わなんよ」

「僕も同感です」

「…それじゃあ…しばらく一緒に行動することになるね…とりあえずよろしく…」

ミーシャがイブキ達に静かに言った。

「こちらこそよろしくお願い致しますね先輩！」

エリオットが言った。

「だってさ！仲良くしよーねイブちゃん！」

「え、ええ…まあ…仲良くしようか…？」

ロゼツタがイブキの手を握りながら言ったので、イブキは少々戸惑いながらも了解した。

「…仕方ないか、まあ、仲良くしましうや。えっと…喋る犬？」

「俺は狼だっ！」

エレノアの言葉にシロが言い返した。

「よしよし！全員が仲良く（？）なつたところだし…時間もないから先に進もうぜ！」

テイティスがテンション高めに言った。

「おー！！」

ロゼツタが腕を高く突き上げノリノリに叫んだ。

「…元気だねえ…それじゃ、行こうか…！」

ミーシャが言った。こうして、新たに二人と一匹のメンバーを加えた一行は、迷宮のさらに奥へと進んで行くのであった…。

《4人+2人+1匹》

「いやあ、先輩がいると助かりますよ。松明では明るさに限界がありますから！」

エリオットがミーシャに言った。

「…松明なんて古典的な照明器具で来るなんて…ホント詰めが甘いと言つか…顔見知りとしてかなり心配だよエリオット…。」

ミーシャがため息をつきながら言った。エレノア達がイブキ達と出会ってから十分程がたっていた。一行は相変わらず暗い回廊を奥へ

奥へと進んでいた…。

「ねえねえ！イブちゃんは何歳なの？趣味は？ホントに忍者なの？」
ロゼツタは新参者のイブキに興味津津なのか、相変わらず無邪気にはしゃぎながらイブキに色々と質問した。

「そ、そんなに一気に聞かれても…私はイブキ、年は17才だよ。職業はもちろん忍者だよ！」

イブキがロゼツタに自己紹介した。

「17才？それじゃあ、ノアちゃんやティーちゃんと同じくらいの年なんだねっ！」

ロゼツタが嬉しそうに言った。

「17才で忍者かよ…お前もなかなか大変みたいだなあ…。ところで忍者って一体何をする職業なんだ？テレビでしか見たことないけど？」

エレノアがイブキに聞いた。

「うふふ、そこまで大それた仕事はないよ。まあ、簡単に言うならスパイかな？…えっと…エレノアだっけ？貴女は何をしてるの？」

「私はこれでも一応トレジャーハンターなんだ。ロゼとはその仕事に出会った仲なんだよ。いやー、流石にあの時は驚いたな。（詳しくは第一章ファーストコンタクトを読んでね！）」

エレノアがそう言った。

「そうそう！まさかあんな乱暴に目覚めさせられるなんて夢にも思わなかったよ」

ロゼツタがニコニコしながら言った。

「え？目覚めさせられたって…？」

イブキが首を傾げた。

「あっ！な、なんでもないんだよっ！こっちの話だよなロゼっ！」

「そ、そうそう！なんでもないなんでもない！アハハ…」

「…？」

エレノアとロゼツタはなんとか話をはぐらかした。

「そう言えば、ロゼツタさんとエレノアさんは先輩とはどんな出会

い方をしたんですか？」

エリオットがエレノアとロゼッタに聞いた。

「ミーシャとは灯台で出会ったんだよ。…まあ、最初はあんまり歓迎されてなかったみたいだけどな（詳しくは第三章灯台の魔法使いを読んでね）」

エレノアが苦笑いしながら言った。

「でも最終的には紅茶とお菓子をこちそうしてくれたよねミーちゃん！」

「…今考えると…なんだかちよつと照れくさいなあ…」

ミーシャは少し頬を赤らめながら言った。

「へえ、そいつは知らなかったな。…結構テキトーな旅の仕方してたんだなエレノア」

「…悪かったなテイティス！お前に出会うまではこれといった目的はなかったからな」

「目的って…さつきから聞きそびれていたんだが…そのお前達の目的とはなんなんだ？」

シロがエレノア達に質問した。

「うーん…まあ、簡単に言うちよつと探し物があるんだよなテイティスが言った。

「探し物？宝物とか？」

「残念！ちよつと違うんだよね！イブちゃん！鍵だよ鍵！」

「鍵…ですか？一体なんの鍵なんですか先輩？」

「…それは…ちよつと言えないな…ただ…とつても大事な物だとは言っておくよエリオット…！」

ミーシャが淡々と言った。

「ふーん…まあ、無理には聞くつもりはないけどね。…とにかく早く見つかるといいね」

イブキが言った。

「イブキ…そうだな。ありがとう。お前らも早く赤い悪魔に会えるといいな。…大丈夫！多分、近々会えると思うぜ？なっ、ロゼ？」

「そうそう！きつとイブちゃんにやら赤い悪魔も喜んで会ってくれると思うよ？まあ、連れて帰れるかはわからないけどねっ！」
ロゼッタとエレノアは笑って顔を見合わせながら言った。

「???…変なの…?」

イブキはなんだか狐に鼻をつままれた気分だった。…やがて一行の前に再び巨大な扉が現れた。

「ありやつ？また扉だぜ…まったく、何枚あるんだか」

ティティスがめんどくさそうに言った。

「ここまでくると…扉と言うよりはもう壁とあまり変わらん」

シロがティティスと同じくめんどくさそうに言った。

「まあ、そう言っなよお前ら。こうゆう場合、仕掛けはどれも同じなんだから！」

エレノアがそう言うってから間もなく、扉は鈍い音をたててゆっくりと開き始めた。

「ほらな！私の言った通りだろう?」

「さっすがノアちゃん！トレジャーハンターってだけは…」

ロゼッタは何かいいかけたようだったが、突然黙ってしまった。…

なぜなら…彼女を驚愕させる光景が扉の向こうにあったからだ。

「…う…そ…?…なん…で…!?!」

彼女の瞳には、一人の男の姿があった…!

《因縁の再会…その弐・生きていた刺客》

「ククク…お久しぶりですねえ赤い悪魔!…どうやら私が生きていることに随分と驚いているようですが?」

男が不適な笑みを浮かべながら言った。

「シヤクマ…貴様…生きていたのか…!」

ティティスが言った。

「フフ…そう簡単には死にませんよティティス…元同僚の貴方ならそのくらいわかるでしょう?」

シヤクマが言った。

「弱体化していたとはいえ…あの攻撃を受けて生きているなんて…!?」

「確かにあの攻撃は効きましたよロゼリアーヌ?…貴女の攻撃を受けて私は瀕死の重傷を負いました。…その痛みは尋常ではなかったですよ?」

驚きを隠せないロゼツタに対してシヤクマは淡々と語りかけた。

「ぐ…まさか…キサマごときを殺り損ねるなんてね…わたしもやはり歳にはかてないってか…!」

ロゼツタは悔しそうに歯をギリギリと鳴らしながら言った。

「え?は?…えつと…一体なんの話をしてるの?…わかるシロ?」

「俺がわかるわけないだろうがイブキ!…お前わかるかエリオット?」

「いいえ、さつぱりですよ…どうゆうことなんですか先輩?」

話のさつぱりわからないイブキ達がミーシャに質問した。

「…詳しくは話せない(てゆーかめんどくさい)けど…彼はシヤクマ…私達の敵よ…前に倒したはずだったんだけど…まさか生きていたなんてね…」

ミーシャが言った。

「おいコラ!テメエ、こんなところになんのようだよ!!」

エレノアがシヤクマに吠えかかった。

「おやおや…また随分な言い分ですねえ…決まってるでしょう?貴女方と同じでカードキーを捜しに来たんですよ」

「…なに…!??」

「もつとも、カードキーは愚か、墓荒らしに入られたのか中には何も残っていませんでしたがね。…どうやら貴女方も無駄骨だったようですね」

シヤクマが皮肉たっぷりに言った。

「ふっ…無駄骨じゃあないよ…お前の息の根を今度こそ止められるんだからね…！」

ロゼッタが少し嬉しそうに言った…！

「相変わらず血の気が多いですねえ…本来ならば私としても貴女との決着はつけておきたいのですが…残念ながら私は今忙しいのでそれどころではないんですよ」

「…？」

「今や『オメガ計画』も実行直前にまで入りました。レクイエムも不完全なようですが間もなく完成します。…後はバベルを起動させ、サテライトにある真実の鏡を手に入れ、それとバベルの裏機能を使って魔界とのゲートを開けば…！我々が今一番必要としているのはバベルを起動させるためのカードキーなんですよ。…しかし、ここで貴女方を生かしておくのもなんですから…変わりの相手を用意させて頂きます！いでよっ！我が僕^{しもへ}アンデッド・ドラゴン…！」

…ゴゴゴゴ…ガラガラガラガラ…！

「ギシャー！ウガー！」

物凄い轟音をたて床を突き破って巨大なゾンビドラゴンが現れた…！

「…んなっ…！」

「今日はこのアンデッドドラゴンが相手をします。…それでは私は忙しいのでこれで。またいつか会いましょう。…もちろん、生きていたら…の話ですがね…！フフ…フハハハハハ…！」

シヤクマはそう言い残すと煙のように姿を消した。

「シヤアアア…！」

巨大なアンデッドドラゴンは物凄い悪臭を放っていた。…身体中の肉は腐り、ところどころ骨が露出するほどだった。

「う、うえ、は、鼻が曲がる…！」

ロゼッタが鼻を押さえて涙目で言った。

「は、話はさっぱりわからないけれど…とにかくヤバイみたいだね…！」
話のわからないイブキもなんとなく今の危険な状況は理解したようであった。

「グルアーツ！…ゴオオオオオー！！！」

ドラゴンは大きく息を吸い込むとエレノア達に向かって灼熱の炎を吹き出してきた！！

「うわあっ！！？」

「…危ないっ…！！…ファイア・プロテクト…！！！」

…ブウン！ガガガガガッ！！

間一髪、ミーシャの魔法のバリアがドラゴンの炎から一行を守った！

「た、助かった…あ、ありがとうございます先輩！」

「…お礼はいいよエリオット…それよりも…どうやってアレを片付けるか…奴の炎を防ぐためにバリアを張らなきゃならないから…私は魔法を使えないし…」

「…そうだ！おい、ティティス！お前氷使いだろ！？あの炎なんとかならないのかよ！？」

「そんな！無茶言つなよエレノア！向こうの炎は数百度以上、俺の氷や冷気はどんなに頑張ってもマイナス200 が限界！勝敗は明らかだから！」

ティティスがエレノアの提案に反対した。

「あんなバケモノと戦うなんてありえないよっ！素直に逃げようよ！」

イブキが泣き出しそうな顔で言った。

「アホかつ！背中を見せた時点で焼き殺されちまっぞ！」
シロが言った。

「くそっ！やつぱり戦うしかないか…！」

エレノアがホルダーから銃を抜いてバリアの外に出ようとした。…

しかし、ロゼッタがそれを止めた。

「行っちゃダメだよノアちゃん！…あれは生身の人間が勝てる相手じゃないよ。ここはわたしが行くから、ノアちゃん達はここで待ってよ」

「ロゼ…でも…お前…」

「ふふ、そんなにしよげた顔しないでよノアちゃん。…わたしは…あくまで破壊者^{ブレイカー}としてでしか生きられない存在なんだから…。みんなをお願いねミーちゃん」

ロゼッタがちよつと悲しげな笑顔をしながらエレノアとミーシャに言った。

「…任せてよ…だけど…無理は絶対にしないでよロゼッタ…！」

ミーシャが笑顔で言葉を返した。

「ちよつ…ロゼッタ！？あなた正気なの！？あなたが強いのは私達も知ってるけど…あんなバケモノと戦ったら間違いなく焼き殺されちゃうわよ！？まともな考えじゃないよっ！」

イブキがバリアの外に出ようとするロゼッタに言った。

「大丈夫だよイブちゃん…わたしね…人間でも…ましてや魔物でもない…ただの兵器^{ウエポン}に過ぎない…ただそれだけの生き物だから…！」

ロゼッタがイブキに薄笑いしながら言った。

「ロゼッタさん貴女…一体何者なのですか…？」

エリオットのその問いかけにロゼッタは最後にこう答えた。

「この世界に存在する最も邪悪^{カオス}と純粹^{インセント}に満ちた破壊者^{ブレイカー}だよ…！」

ロゼッタはそう言うのとバリアの外へと静かに出て行った…。

《悪魔VS死龍》

「グルアガアア…！」

アンデッドドラゴンは自らに歩みよる小さな赤髪の少女に凄まじい

剣幕で吠えた！

「うるさいなあー…そんなに吠えなくてもいいのにねえ…！」
しかし、アンデッドドラゴンの迫力もロゼッタの前では全く無力のようだった。

「ハーッ！…ゴオオオオオー！！！」

ドラゴンは再び灼熱の炎を吹き出してきた！！その炎は部屋中に広がり、ロゼッタを飲み込みエレノアやミーシャの所にまで吹き付けた！！

ブウン！ガガガガガッ！！

ミーシャの張ったバリアがかるうじて一行を灼熱の炎から守った。

「…ぐっ…なかなか…強力だね…！」

ミーシャが汗だくで言った。

「ミーシャ…大丈夫？」

エレノアが心配そうにミーシャに言った。

「…平気だよ…だけど…いつまでこのバリアを保てるか…もうそんなに長い時間は…」

「安心しろよ。…ロゼならきつとやってくれるさ…ロゼを信じよう…！」

エレノアが言った。

「…って！？ちょっと！あなた達はあの娘のことはどうでもいいの！？」

イブキが燃え盛る炎の中を指差しながら言った。

「…まさか…見捨てたとしても言うのか…？」

「そんな！あんまりですよ先輩！…ああ…ロゼッタさんが…！！」
シロとエリオットがエレノア達に言った。

「心配するなよお前ら。ロゼッタはそんなに簡単にはくたばらないよ。…よく見てみな」

ティティスが燃え盛る炎に視線をやりながら言った。

「…やはり、腐っていてもドラゴンはドラゴンか…この威力の炎に耐えられる輩はそうはいないだろうね…！」

燃え盛る炎の中からロゼッタが姿を現した…彼女の服はところどころ焦げついていたが、ほとんど無傷だった…。

「…!?なんで!?どうなってるの!?」

イブキは驚きを隠せないようだった。

「あの炎の中で生きているなんて…全く信じられんぞ…！」
シロも驚愕した様子で言った。

「…先輩…ロゼッタさんって…一体何者なんですか…??」
エリオットが言った。

「…だつてさエレノア…教えてあげたら…?」

「ああ…そうだな…彼女は…ロゼは…『赤い悪魔』だよ…！」

「…えっ!?!」

「なんだと!?!」

「そ、そんな…!」

イブキ達は驚きのあまり絶句してしまった。…そして、しばらく黙ってしまつた…。

「グルアー!」

「ちっ!調子に乗るなよクソドラゴンがっ!」

そんなイブキ達を後目にロゼッタとアンデッドドラゴンの戦いは続いていった。

「このっ!死体は死体らしくしててよねっ!」

ドガッ!ザシユウウッ!!

「ギヤオウツ!」

ロゼッタの鋭い爪がアンデッドドラゴンの脇腹を引き裂いた!…しかし、肉が裂かれ骨が露出したにも関わらずアンデッドドラゴンはその鋭い爪をロゼッタに振りかざした!

…チツ！バツ！！

ドラゴンの爪がロゼッタの脇腹をかすめた！…ロゼッタの脇腹から鮮血が滴り落ちる。

「ぐっ…このっ！雑魚が意気がるなあっ！！」

ロゼッタはありったけの魔力を右手の爪に込め、アンデッドドラゴンに正面から切りかかった！

ゴッ！バキィ！メキメキィッ！ザシュウッ！！バラバラバラバラ…

アンデッドドラゴンはバラバラになってこと切れた…。

「ふう…やっと終わったよ…あーあ…この洋服気に入ってたのになあ…ガツカリ」

ロゼッタが髪をかきあげながら独り言った。

「…やっと…終わった…みたい…だね…」

戦いが終わったので、ミーシャはバリアを解除した。…するとミーシャはその場に膝をついてしまった。

「お、おい！大丈夫かミーシャ！？」

エレノアがミーシャに近寄り心配そうに言った。

「…ハアハア…大丈夫…ちょっと…疲れただけだから…」

そこにロゼッタも戻ってきた。

「ミーちゃん！…大丈夫！？」

「…私は大丈夫…それよりもロゼッタは…？」

「わたしは平気！…ちょっとひつかかれたただけだから」

「ちょっとって…怪我は大丈夫なのかロゼ？」

「うん！ほら、もう治っちゃったから！」

そう言っつてロゼッタは切り裂かれた脇腹をエレノア達に見せた。…傷は既に塞がっていた。

「とりあえず全員無事みたいだし…こんなところさっさと出ようぜ

？…おたくらは色々話したいことがあるみたいだが…それは外に出
てからでも遅くはないだろ？」

テイティスが黙っているイブキ達の方を見ながら言った。

「え、ええ…そうしましょう…」

イブキが頷いた。

「立てますか先輩？」

エリオットが疲れきったミーシャを気づかって言った。

「…ありがとう…でも…大丈夫だよエリオット…一人で立てるから
…」

そう言っただけでミーシャは立ち上がった。

「さてと…とりあえず外にでますかな！」

「さんせい！」

エレノアにロゼッタが便乗した。

こうして、一行はバラバラになったアンデッドドラゴンの肉片を後
に、もと来た回廊に歩を進めて行くのであった…。

《峡谷の夕暮れ》

夕暮れ…夕日がデス・バレーを赤く染めあげる頃…峡谷の崖の上に
いくつかの人影があった…。

「うーん！やっぱり外の空気は美味しいねえノアちゃん！」

赤髪の少女が大きく伸びをしながら言った。

「そうだなロゼ。…風も気持ちいいいな」

エレノアが風に髪をなびかせながら言った。

「…綺麗な夕日…」

ミーシャが珍しくうっとりしながら言った。

「そうだねえ〜！ホント綺麗な夕日…イブちゃんもそう思うよね？」

ロゼッタはそう言ってさっきまでイブキが立っていた方を向いた。

…しかし、そこには既にイブキ達の姿はなかった…。

「…あれっ？イブちゃん達がいらない？」

「…ホントだ。さっきから妙に静かだと思ったら…いつの間になくなっただんだ？」

ティティスが驚いて言った。

「…エリオット…ホント…いつの間になくなっただらう…？」

「っーか…あいつら結局なんだっただんだ？」

「そりゃあエレノア、忍者と勇者と犬だろ？」

「そーゆーことじゃないよティティス！一体何の目的で私達に接触してきたんだらうってこと！」

エレノアが言った。

「ああ、それなら…確か赤い悪魔が…ロゼッタがどーのこーのって言うってたな。…連れて行くとか行かないとか」

「…そうだったね…まあ私達にはよくわからなかったけど…当の本人にきいてみようか…ロゼッタはどう考えてるの…？」

ミーシャがロゼッタの方を見ながら言った。

「うーんつとね…わたしには難しいことはよくわからないんだけど

…ただ…今のところみんなと離れる意思は無いってことだけは言うておくよ」

ロゼッタが言った。

「あくまで推測だが、おそらくアイツらは再び俺達に接触してくるだろうよ。…例えロゼッタにいかなる意思があるうとなかるうとな

…まあ、詳しくはその時に問い正せばいいだらうよ。…難しく考えたり焦ったりしても仕方ないさ！もう少し楽天的に行こうぜ！」

ティティスが言った。

「…ホントは色々考えるのがめんどくさいだけでしょティティス…？」

「あー：痛いところくなよミーシャ」

「ハハハ。…でもまあ、確かティティスの言う通りだよな。今わかんないことを考えても仕方ないさ！とりあえず今日は無事に終わっただから、それでいいんじゃないかな？」

エレノアが少し笑いながら言った。

「そーそー！『明日には明日の風が吹く』ってゆづのがわたし達の基本スタイル（そうなの？）だしねえ〜！…今日はもう疲れたから帰ってご飯食べて寝よー！」

「ロゼツタ：それは…ちょっと意味違わない…？…まあ、早く帰るのには賛成だけどね…」

ミーシャがロゼツタに苦笑いしながら言った。

「…決まりだな！それじゃあ、さっさと帰ろうぜ！…あーあ、夜ご飯なにしようかな？」

エレノアが腕組みしながら言った。

「わたしグラタンがいいなあ〜ノアちゃん！」

「ええ〜！？俺はチャーハンが食いたいぜ！」

「…うな重希望…」

「…ああ…和洋中を作れって…楽天家が集まるとどうしてこう私ばかり苦労するのだろうか…？ハア…」

エレノアは空を仰いだ。…まだ薄明るい夜空に星の光がところどころで輝きを放っていた。…いつものことだが、これから帰ったら四人分の夕食を作らなくてはならない。（まだ何を作るかは決めてないが…）それを考えるとエレノアは少々気が重くなった。

…しかし、エレノアは同時にこうも思った。自分の力を必要としてくれる人達がこんなにも近くにいてくれる自分は、もしかしたら世界中で一番幸せな奴なんじゃないかと…。

第二十七章 因縁の再会（後書き）

ノスタルジア第二十七章、因縁の再会はどうでしたか？さて、次回は今までの物語の整理をするとゆう意味も含めて、これまでに登場した人物を一通り全員登場させようと思います！…あつ、でもちなみあまり物語に関係のない人は出さないかも…。

それでは、次回にまたお会いしましょう。

第二十八章 それぞれの日常（前書き）

皆さんは普段の生活をどうお考えですか？もしかしたら退屈に感じる方もいると思いますが、そんな日常の中で見つかるささやかな幸せや発見もあるものです。新しい世界に刺激や快楽を求めるのもいいですが、時には自分の日常にも目を向けてください。きっと新たな発見があるはずです。

第二十八章 それぞれの日常

「あークソツ！ダメだこりゃ、畜生、完全にイカレテリゃあ」

ティティスがバギーのエンジンルームを覗き込みながら言った。

「どうティティス？直りそうかな？」

エレノアが心配そうに横から覗き込んだ。

「ふう…ダメだな…こりゃあ修理するのは1日がかかりになるぞ」

ティティスが額の汗を腕で拭いながら言った。

「…まさか…こんな砂漠のど真ん中で車が故障するなんて…」

ミーシャがため息混じりに言った。

「キヤハハ！…でもこれだけ砂があれば砂山を作って遊ぶのには困らないねっ」

とことん楽天家のロゼツタが笑いながら言った。

「…ロゼツタ…ホントにおめでたいね…」

ミーシャは再びため息をついた。ここはデス・バレーからそう遠くない乾燥地帯のど真ん中。頼みのバギーが故障してしまい、四人は足止めを余儀なくされていた。…どうやら元々スクラップだったバギーは岩と砂の悪路に耐えられなかったようだ。

「まあ仕方ないさ。ティティスがバギーを修理している間に私達はバカンスでも楽しみますか」

「さんせーい！！」

「…砂漠のど真ん中でバカンスなんて…多分世界一過酷なバカンスだね…」

結局、エレノア達はバギーが直るまで砂漠のど真ん中で過ごすことになったのであった…。

ここは共和国首都シラント郊外にあるマンションの一室。そこはテイイスとその姉マーベラスの住む家だ。その部屋の中でマーベラスが独り、パソコンをいじくっていた。

「今日もテイイスからのMailはナシ…か。マンフアリからの連絡を最後にここ数日連絡がないけど…大丈夫なのかなあ…？」
マーベラスが心配そうに呟いた。

「心配と言えば…最近、反政府軍レジスタンスの連中が言ってたけど…政府が究極兵器クイエムを完成させたらしいし…もしかしたら、そろそろ魔物達の計画も実行される可能性があるね…一応、テイイスにこのことをMailで連絡しておいたほうがよさそうね」

マーベラスはそう言いながらパソコンのMailにそのことをカタカタと打ち込んだ。

「…送信…っと…！…さてと、そろそろ寝ようかな」

マーベラスはパソコンの電源を切ると、ベッドの中へと入った。

「…そう言えば…最近あんまりエフェクトが必要なような凶悪犯罪が起きてないような…レジスタンスの動きもあまり活発じゃないし…本来ならば喜ばしいことのはずんだけど…なんだろう……なんだか嫌な予感がする…嵐の前の静けさ…なの…かな…？」
マーベラスは不安を感じながらも眠りについたのであった…。

《魔界の日常》

ここは数多く存在する世界の一つ、プルト…エレノア達の住む世界、ガイアの住人が俗に魔界と呼んでいる世界だ……そんな魔界の

中心にそびえたつ魔王城の一室に三人の影があつた…。

「あーあ…暇ねえ…こないだアンゴルモア様に言われて征服に向かつた世界だつて、原始的な種族しか住んでいなくてさあ…簡単に制圧しちゃつた…ネビユラスとルーインはどう？最近の調子は？ウエーブのかかつたメタリックグリーンの長髪をした女性が他の二人の男性に言つた。

「こつちも似たようなものだぜ？…なんか手応えがなさ過ぎるんだよなあ」

メタリックグレーの髪をした男性が答えた。

「同感だな。もつとも、我々四天王の力を持つてしてもなかなか支配出来ない世界も存在するがな」

ルーインが言つた。

「ガイアか…コロツサルの調子はどうなんだよルーイン？」

ネビユラスがきいた。

「相変わらず苦労しているようだが…間もなく征服の準備が整うそうだ…こちらの軍隊を攻め込ませれば、流星のガイアも終わりだろうな」

「それにしても、あのアンゴルモア様が軍隊を使つてまで手に入れようとするなんて…ガイアってそんなに凄い世界なのかな？」

サキユバスが首を傾げながら言つた。

「さあ…だが、あのお方がお考えになることだ。それなりに理由があるのだろう」

ルーインが答えた。

「まあ、要は俺達四天王はアンゴルモア様の命令を実行すればいいだけなんだけどな」

ネビユラスがぶっきらぼうに言つた。

「ふうん…まあ、私はどうでもいいんだけどね。だけどガイアはとも美しい世界なんでしょ？今度バカンスにでも行つてこようかな…ついでにちよつとばかし破壊行動でもしてこようか…！」

サキュバスが薄笑いをしながら言った。

「ふっ…行くならコロツサルとアングルモア様にバレないように行くがよいサキュバス」

ルーインがサキュバスに言った。

「ウフフ…とても楽しみだね…コロツサルの作り出した兵器ロゼッタにも興味があるしね…！」

サキュバスが言った。…誰も知らないところで魔の手は確実にガイアへと迫っていた…！

《エレノア達の日常》

昼下がり、エレノア達四人はそれぞれ思い思いのことをしていた。

「キャハ、見て見て！砂で富士山を作ったよ！」

「ロゼ…お前ホント元気だなあ…あっつ〜」

エレノアがパラソルの下でうちわを扇ぎながら言った。

「…ああ…ドールハウスが使えればなあ…だけど…こんな所に建てたら砂に沈んじゃうし…なんにせよ…暑い…」

ミーシャが魔法の袋から缶ジュースを取り出しながら言った。

「あっ！ジュース！いいなあ…わたしにもちようだいミーちゃん！」

「…もちろん…ハイ、エレノアの分も…」

ミーシャはロゼッタとエレノアに缶ジュースを一本ずつ渡した。

「おっ！サンキュー、ミーシャ！…ゴクゴク…ぶはーっ！生き返るぜ！」

エレノアはジュースを一気に飲み干しながら言った。

「そーいえば、ティーちゃんはどしたのかなあ？」

「…さあ…？…まだ車の修理してると思うけど…？」

ミーシャが少し離れた所にとめてあるバギーの方を見ながら言った。
「ミーシャ、悪いけどジューズもう一本くれないか？…ティティスにもあげてきたいからさ」

エレノアが言った。

「…わかつてるよ…ハイ…ちゃんと愛を育んできてよね…」
ミーシャがエレノアにジューズを渡しながらからかった。

「なな、なっ…なに言ってるんだよっ！わ、わわ、私は別に…確かにティティスはかっこいいけど…って、なに言わせるんだよっ！ミーシャのバカッ！…！」

エレノアは顔を真っ赤にして、ジューズ片手にバギーの方へ走って行った。

「…エレノアめちやくちゃわかりやすい…」

「キヤハハ！ノアちゃんは照れ屋さんだからねえ！結婚式の日程はいつにしようかミーちゃん？」

「…いや…それはちよつと早すぎると思うよロゼッタ…」

「…ふう…ここを…こうして…ああして…と…それにしても暑いなあ…」

その頃、ティティスは汗だくでバギーの修理をしていた。

…ペタッ！

「わっ！？冷たっ！？」

ティティスの頬に冷たい何かが当たった。ティティスが驚いて振り向くと、そこにはエレノアの姿があった。

「よっ、調子はどうだ？ジューズ持って来たからちよつと休憩したら？」

「な、なんだよ、驚かせやがって…」

二人はバギーの影に座り、ティティスはジューズを飲み始めた。

「それで？修理の方はどんな感じ？」

「ああ、七割くらいは終わったかな？この調子だと日没までには終わりそうだな」

「へえ、もうそんなに直ったの？ティティスって凄いな！」

「ふふ、そうでもないさエレノア。ちよつと機械に詳しい奴ならこれくらいはちよるいものさ！」

「そうなのか？それにしても凄いよ。…私なんか何の特技もないから…」

エレノアがちよつぴりうつ向き加減に言った。

「そ、そんなことはないと思うよ？エレノアにだっていっぱい良いところはあると思うぜ？」

「…例えば？」

「えっ…そ、それはその…ほ、ほらっ！料理が上手いとかさ！」

「料理なんてやるうと思えば誰にだってできるよ…。いいんだ、自分でもよくわかってる、自分がいかに無力な存在だということはない。事実、ミーシャやティティスと違って私は魔法の類は使えないし、ロゼのように鋭い爪も牙も持っていない…銃や刃物を持って戦ってみてもしよせんモンスター相手には限界がある…要は私は強がるのが精一杯の、つまらないだだの人間ってこと！」

エレノアが自分自身をけなすように言った。

「そんなに自虐的になるなよエレノア！…お前はわかってないようだから言っておくが、俺やロゼツタやミーシャが今お前と一緒にいるのはお前を『人間的』に尊敬しているからだと思っぜ？」

「…？」

「確かにお前は俺やロゼツタやミーシャに比べれば大して強くはないのかも知れない…けどな、人間にはそんなことよりも大切なことがあるんだよ。例えば他人を大事にする心とかな。…よくわからないけど…少なくともお前は俺らにはない『何か』を持っている…そんな気がするんだ。…そうじゃなければこのメンバーはきつと集まらなかったと俺は思っぜ？」

ティティスがエレノアを元気づけるように言った。

「そうか…私って尊敬されてるの…かな?…ありがとうティティス、なんか元気が出たよ!」

エレノアが嬉しそうに笑いながら言った。

「ハハ、そいつはよかったよ」

「…それで?ティティスは私のどんなところを尊敬してるの?」

「えっ…まあ、俺は尊敬とはちょっと違ってるような気がするんだが…」

「はあ?」

「…と、とにかくだ!一息ついたところだし、さっさと修理を終わらせるとしますか!」

「あっ、待ってよ。私も手伝うよ。…二人でやった方が早く終わるでしょ?」

「おっ!そいつはありがたいな!…癒されると言つか色んな意味で」

「あ、いやいや!なんでもないって!…それじゃあ早速そのスパナとってこないか?それから…」

こうして、なかなかお互いの気持ちに気が付かないニブチンな二人は仲良くバギーの修理に取り掛かるのでした。

《イブキの日常》

ここはマンファリの端にあるとあるアパートの一室。そこに二人と一匹の狼の姿があった。時刻は午後六時…日は既に沈みかけていた。

「それで?今後どうするつもりですかイブキさん?」
エリオットが言った。

「どうするって言われても…正直、赤い悪魔があんな女の子だったなんて…今でも信じられないよ」

「ええ…まさかロゼツタさんが赤い悪魔本人だったなんて…僕もこれは何かの間違いじゃないかって」

「どうやらイブキとエリオットはロゼツタが赤い悪魔だったとゆう事実

に困惑気味のようだ。
「まあ、仕方あるまい…彼女が赤い悪魔だったとすれば全て説明がつく。…事実として受けとめるしかないだろう？」

シロが冷静に言った。
「確かにシロの言う通りね…ちゃんと命令通り連れ帰らないと」

「まったく、こないだちゃんと命令通りしておけばよかつたのに…」

「仕方ないでしょシロ？…あの時はもう何がなんだか…おかげで逃げるように帰って来ちゃったんだから！」

「まあまあ、それよりどうするんです？また追いかけますか？」
「うーん…多分、その必要はないと思うよ？」

「は？何故そう言いきれる？」
シロがイブキにきいた。

「ほら、パツと見た限り彼女達つてももの凄く軽装備だったでしょ？（実際は装備を全てミーシャの魔法の袋に入れてるだけだが…）つまり、物資の補給のために街に立ち寄ると思うの」

「だが…仮にそうだとしても他の町に立ち寄る可能性もあるぞ？」
「それは多分ないと思いますよ？この辺りで物資の補給ができるよ

うな街はマンフアリくらいしかありませんからね」
エリオットがシロに説明した。

「ぶっちゃけ、こちらとしても彼女達をずっと追いかけて回すわけにもいかないし…ここで待つてた方が確実だと私は思うんだけど…エ

リオットはどう思う？」
イブキがエリオットの方を見ながら言った。

「僕もイブキさんの言う通りだと思います。…なるべく無駄な行動

は憤りたいですしね」

エリオットが笑顔で答えた。

「決まりだな。…で、一つ聞きたいんだが…」

「？何よシロ？」

「…赤い悪魔を待つ間、俺達は何処で寝泊まりするんだ？」

「そんなの…ここに決まってるじゃない。ね、エリオット！いいよね？」

「えっ！？…いや…それは…その…」

エリオットは顔を真っ赤にしながら困った。

「何よエリオット？何か問題でもあるの？」

「…いや…それは…」

「…お前はアホかイブキ？貴様には節操と言うものはないのか？」

「節操？…何よソレ？」

「ああ…ダメだこりゃ」

シロが呆れて言った。

「と、とりあえず…僕の家に泊まるのはいいですが…このアパートはペット禁止なんで気を付けてくださいよシロさん？」

なんとか平静を取り戻したエリオットが言った。

「やかましい！俺を犬扱いするなっ」

「クスクス…ペット禁止だっさ」

「わ、笑うなイブキっ」

「はあ…やっぱリミーシャ先輩…と言うかロゼッタさんにかかわるとろくな目に会わないような…ずっとそんな気がしてたんですよね…はあ…」

エリオットは独り静かに呟いた。

…今宵は新月の夜…乾燥地の真ん中にぽつりと一個のテントが建てられていた。

「ほえー…すんげえ星空だなあー！…和むと言うか…感動すら覚えるよ…」

テントから少し離れたところでエレノアは独り星を眺めていた。元々、夜型の人間であるエレノアは夜寝つけないことがよくあった。その度に、エレノアはこうやって星空を眺めるのが子供の頃から大好きだった。

「…さて、ここで問題です。空に輝くあのモヤモヤした川のようなものは天の川ですが…英名はなんでしょうか？」

エレノアの後ろから聞き覚えのある声は何故か問題を出してきた。

「…ミルキー・ウェイだろう口ゼ？お前が教えてくれたんじゃないか」

エレノアが振り向くと、そこには漆黒の長髪と衣装に身を包んだ美しい女性が立っていた…。

「ふふふ…覚えてくれていて嬉しいよ。それにしても本当に美しい夜空の光景だなエレノア」

ロゼリアー又はそう言いながらエレノアの横に腰を下ろした。

「なんだよ口ゼ？…眠れないのか？」

「それはこつちの台詞だよエレノア。…元々、わたしは夜行性の生き物だよ」

「そうなのか？…それにしても…なんでその姿なんだ？」

「だからさあ…これが本来のわたしの姿なんだってエレノア！」

「ああ、悪い悪い…そのことでも思ってたんだが…変身前と後ではなんでこんなにも容姿も性格も違うんだよ口ゼは？…もしかして二重性格ってやつか？」

エレノアがロゼリアー々に質問した。

「あいにく、わたしの変身はジキルとハイドのそれとは違うよ。普

段エレノア達が見ているわたしは…まあ、簡単に言えば封印の副作
用で幼児化してるんだよ。…要は昼間のわたしは自身の子供時代っ
てことさ」

ロゼリアー又が言った。

「へえ、子供時代か…ずいぶんとひねくれた大人になったんだな」

「…そいつぁ悪かったな」

「ははは、冗談だよ！…でも私は今の姿のお前も悪くないと思うよ
？」

「いまさらながら、かなりの前向き思考だよなお前」

「そうか？…だって悩んだってしょうがないだろうロゼ？」

「ふっ…悩んでも仕方ない…か…そう言えば昔、イチが同じような
こと言ってたっけ」

ロゼリアー又が天を仰ぎながら懐かしそうに言った…。

「…イチ？誰だよ？」

「イチは四聖人の一人だね…千年前にこのわたしを聖剣エクスカリ
バーで倒した張本人さ」

「！」

「ふっ…懐かしいものだよ…どうして彼女に負けたのか…正直、今
の今までわからなかったが…エレノア達と旅わけをすることでその理由
がなんとなくわかったような気がするよ…」

「…ロゼ…」

「ところで…エレノアは聖人の子孫なんだろう？ずっと四聖人のうち
誰の子孫か考えてたんだけど…やっぱりイチだとわたしは思うんだ
よね。…性格全然違うけど」

ロゼリアー又が苦笑いしながら言った。

「ふうん…私はよく知らないからわからないけど…そうなのかな？
…イチってどんな人だったんだロゼ？」

エレノアが興味津々にロゼリアー又にイチのことを聞いた。

「そうだなあ…わたしも別に友達だったわけじゃないから…まあ、
一言で言っちゃえば純粋な奴だったな。何の汚れもないって言った

らちよつと大げさかもしれないが：あの時代には不釣り合いなほどのバカ正直な少女だったのは確かだな」

「はあ…変わった人だったんだな」

「ふふ、そうかもな。詳しく知りたいなら今度エンドラーズに聞けばいいだろう。あいつはイチと旅路を共にしたからな。…ちなみにな、これはわたしの憶測だが エレノアの貧乳はイチの遺伝とみた。イチも胸小さかったからな」

ロゼリアーヌがエレノアをからかって言った。

「それが事実なら…まったく嫌な遺伝の仕方をしたもんだな」

エレノアが苦笑いしながら応えた。

それから二人は結局、明け方まで他愛のない話を楽しんだ。二人の姿からは、生きてきた時間の違いや自らにかせられた存在の違いなどみじんも感じなかったのだった…。

《スミレの日常 月の無い夜と鎮魂歌》

ここは東の大陸…共和国首都シランドの中心部に建つ大統領官邸…その一室のバルコニーに一人の少女の姿があった。小柄で髪は短く紫色、しかし耳の横の髪だけは長く肩ほどもあり、細くツヤのある美しい髪をしていた。…年は十代後半ぐらいに見えるのだが、やけに落ち着いた雰囲気をかもしだしていた。…そして彼女のアメジストのように美しい瞳は、新月で月を失い、星の光が支配する夜空を見つめていた…。

「…こんな所にいのね、スミレ？…もう寝る時間ですよ？」

そんな彼女の背後から一人の白衣の女性が彼女に声をかけた。

「リンリンか。まだ私は眠くはないよ」

スミレはそう答えた。

「そんなこと言わないでくださいよ。…結局怒られるのは世話係の私なんですから！」

リンリンが言った。

「大丈夫、コロツサルはどうせ部屋にこもりつきりなんですよ？…バレなきゃ問題ないよ」

スミレがさらりと言った。

「ま、まあ そりゃそうですが…。こんな真夜中に何を見ているんですか？」

リンリンが聞いた。

「いや…今日は月が見当たらんと思ってな…こつゆつのは新月と言うんだろ？…何せまだ外の世界に触れられるようになってからまだ5日しかたつてないからね…私にとっては全てが物珍しいんだよ」

スミレが言った。

「ふふふ、そうでしたね…わからないことがあつたら何でも聞いてくださいね」

リンリンが笑顔で言った

「ああ…そうだな」

スミレが頷いた。

「…さ、今日はもう遅いですから…あまり遅くならないうちに寝てくださいよ。…あと、コロツサル様にはくれぐれも感づかれないように…おやすみなさいスミレ」

「…おやすみリンリン」

白衣の女は、スミレにおやすみの挨拶を交すとバルコニーのある部屋から出て行った。スミレはリンリンを見送ると、再び真夜中の星空にその透き通った紫色の瞳を向けた。

「…」

スミレはしばらく黙って夜空を眺めていたが、やがてこんな独り言を呟いた。

「例え何処にいたとしても…きっとそこから見える星空の美しさに

変わりはないのだろうな…姉さん…今何処にいるのだろう…？」

スミレはそう言うと、視線を下にずらした。スミレの紫色の瞳には様々な色の明かりに彩られたシランドの摩天楼と町並みが映った…。「いずれはこれらの光も消えることになるだろう…そう…例えば私がそれを望まなくてもね…何故なら…この世界を破壊することが私の存在する唯一の理由だから…」

スミレは哀しげな薄笑いを浮かべると、再び夜空を仰いだ…。

「…さて…姉さんとはいつ会えるのかな？…とても楽しみだよ…だから早く来てよね姉さん…なにせ、貴女を殺すべきか否かを決めなくちゃいけないんだからね…。待ち遠しいなあ…ふふふ…あはははは…！」

果たして最新最強兵器はこの時、一体何を思い考え、そして何を見つめていたのだろうか？…その答えを知る者は…いない…。ただこれだけは言える…『黒い天使』が、その黒翼を広げる日もそう遠くはない…と…！

第二十八章 それぞれの日常（後書き）

さて、今回は1000年前の人物の名前ができませんでしたか…いかがでしたか？

それでは…またの機会にお会いしましょう。

第二十九章 ブルーボトム・前編 海底の記憶（前書き）

皆様、お久しぶりです。最近忙しくてなかなか更新できませんでしたが、ようやく更新することができました。読者の皆様にはご迷惑をお掛けしたことをお詫び申し上げます。

…さて、ブルーボトムは前後編に分かれておりまして、今回は前編の部分になります。少々地味な作品かも知れませんが、奥の深い哲学的な部分もありますのでよく理解しながら読んで頂ければ幸いです。

それでは、ノスタルジア 第二十九章「ブルーボトム・前編」をどうぞお楽しみ下さい。

第二十九章 ブルーボトム・前編 海底の記憶

ここは砂漠と海が接する海岸線：砂漠のイエローと大海のブルーのツートンカラーがとても美しい海岸線だ。そんな海岸線の砂浜に四人の人影があつた。

「うわあ〜！綺麗な海だねっ！泳ごうよノアちゃん！」
赤い髪の少女がはしゃぎながら言った。

「アホ！海底遺跡を探索するのが先だろーが！」
緑の髪の少女が言った。

「え〜、ノアちゃんは泳ぎたくないの？」

「うっ…そ、それは…とりあえず探索が終わったら泳いでもいいかな？」

「なんだよエレノア。結局泳ぐんじゃん」

「う、うるさいティイスっ！」

「ハハハ、冗談だよ。それで、その海底遺跡とやらにはどうやって行くんだよ？まさか潜っていくとかじゃないよな？」

白髪の少年が横にいた白髪の少女に聞いた。

「…大丈夫だよ…えっと…地図によると…近くに海底洞窟につながる入口があるはずなんだけど…？」

ミーシャが地図と辺りの景色を照らし合わせながら言った。四人がここに来たのは、この海の底にあるとゆう海底遺跡でカードキーを探すためだ。もちろん、ここにカードキーが本当にあるかは誰も知らない。しかし、四人はもうあまり時間が残されていない。一刻も早くカードキーを手に入れ、魔物の侵略を阻止しなければならぬ。…なんて、多分この四人の誰もそんな危機感など感じてはいないのだから…何故なら、彼らは作者自身も書いて呆れるほどにお気楽な連中の集まりだからだ。

「…あの岩山の洞窟から海底洞窟に行けるみたい…多分繋がってる

つばいから……」

ミーシャが、少し離れたところにある岩山を指差しながら言った。その岩山はまるで砂浜にどっかりと腰をおろし、大きな口をぽっかり空けて四人を待ち受けているようにも見えた……。

「あそこから入るのか？ なんだかなあー」

ティティスがあまり気乗りしない様子で言った。

「つべこべ言つてないでさっさと行くよ！」

エレノアが言った。

「わかつてんよ……」

「わあ、なんかワクワクしてきたかも！」

「……相変わらずテンション高いなあーロゼッタ……」

こうして、四人は岩山の洞窟に向かって歩いて行った……もちろん、先客が待ち構えているとも知らずに……！

《海底への道のり》

「ここか……」

エレノアはその岩に空いた洞窟を見た……近くに行ってみると案外暗くはなく、奥の方までよく見えた。洞窟の床には明らかに人の手で作られた階段があり、それは下へ下へと続いていた。

「この洞窟が海底遺跡に繋がってるんだよね？ 宝物とかあるのかな？」

ロゼッタはどうやら歴史のロマンにはあまり興味はなさそうだ。

「……さあね……こないだの遺跡もあんなだったし……あまり期待しない方がいいかもね……」

ミーシャは淡々と言った。彼女は時折、地図を開いて位置を確認したりしていた。

「とにかく早く行こうぜ？…この洞窟はただの通路に過ぎないんだからよ」

ティティスのこの一言で、四人は洞窟へと足を踏み入れることになった。洞窟に入ってみると、中はかなりひんやりとしていた。洞窟の中では外からの風や波の音があたりに木霊していて、それはまるで恐ろしい怪物の雄叫びにさえ聞こえた。やがて、下へと降りるにつれて暗くなってきたのでミーシャが魔法で灯りをともしてみると辺りの様子がなんとなくわかってきた。階段の脇の壁には無数の灯台がついており、どうやら当時はここに灯りがともっていたようだ。ゆるやかな下り坂になっているその洞窟の幅は十メートル以上あったが、階段はその中央部分に幅数メートルあるだけだった。天井は高過ぎて灯りが届かずよくわからなかったが、視力のすば抜けて優れたロゼッタが何も言わないので特に変わったものがないことは三人にもわかった。…やがて、四人は階段が途切れ地面の平らになったところに出た。

「ふう、だいぶ降りて来たみたいだが…今のところ何もないな」
エレノアが後ろを改めて見ると、いかに自分達が多く階段を下つて来たのがよくわかった。

「ここで終わりか？」
ティティスが言った。

「…まさか…まだまだ道はあるよ…」
ミーシャはそう言うのと、魔法の灯りを前の方へ向けた。灯りの先にはいかにも長そうな、暗い横穴が続いていた…。

「ねえねえ、今思ったんだけど…わたし達って今海の下にしていることになるよね？」

ロゼッタが鼻をヒクヒクさせながら言った。彼女はどうかやら洞窟中に充満する塩の匂いが気になるようだ。

「まあ、そうゆうことだな。…しかし、地上から海底の下にこんなトンネル作っちゃうなんて…昔の人の技術にはいつもながら関心するねえ」

エレノアがロゼッタに言った。無論、彼女自身も古代のロマンなどに興味はなかつたので、言葉の最後の方は半ば棒読みだったが。

「…ホント…本で読んだことあるけれど…こんなにも凄い物だったなんて…感動…！」

一方、歴史に興味のあるミーシャはかなり感動しているようだ。…普段の無関心女王のミーシャからはとても想像できんが。

「それにしてもなあ…昔の人もわざわざこんなところにこんな建造物作らなくてもいいのにな。そう思わないかロゼッタ？」

めんどくさがり屋のティティスがロゼッタに言った。…すると、ロゼッタからはこんな意外な回答が返ってきた。

「ふふふ、確かにその通りかもねティティス。…だけどね、それが『人間』なんだよ。常に夢を追いかけ、新しい世界を切り開いていきたいとゆう想いを持ち、それに向けて努力し…そしてやがてそれを実現させる。そしたらまた次の夢を見つけ、それに向けて再び行動する…その繰り返しなんだ。詳しくはなんとも言えないけれど…人間は常に夢を考え、それを叶えることができる…それが人間と他の生き物との違いだってわたしは思うの。この遺跡だってきつと昔の人々が夢を叶えるために頑張つて作ったと思うの…未知の世界を知りたいってゆう夢をね。…だからけつして無用の長物ではないと思うよ？」

ロゼッタのそのなんとも知性的な台詞に、三人はしばし黙つて彼女を見つめてしまった。彼女が時折見せる知性的な一面は果たして本心なのか、それともただの皮肉なのか…それを知るものはいない。

「うん？わたし何か変なこと言つたかな？」

ロゼッタが黙つて自分を見つめている三人に不思議そうに尋ねた。

「え…いや別に変じゃないけどさ。とにかく先に進もうぜ？」

エレノアはあえてロゼッタの台詞の意味を問うことなく言った。再び進み出した四人の前には、何処までも続く暗闇が横たわっていた。以前は爛々と灯りをともしていたであろう灯台も、今では沈黙したままとなっている。ミーシャの魔法の光だけがその暗闇を照らして

いた。

「真つ暗だけど床はちゃんと舗装されてるし、昔は灯りをもあつたみたいだな。そこそこ広さもあるし、海底の街と地上を繋ぐ古代の海底トンネルみたいなものだったんだろっうなきつと」

エレノアが足元の感触を確かめながら言った。

「確かにそうかもな。…ところでミーシャ、俺達はあとどれくらい歩けばいいんだ？」

ティティスがエレノアに便乗した後にミーシャに質問した。

「…そうだね…もうそろそろのはずなんだけどなあ…」

ミーシャが地図を広げながら言った。

「…あ…ホラ、見えてきたよ…」

ミーシャが道の先を指差しながら言った。ミーシャの指差した先には上り階段があつた。

「階段降つて横穴進んだと思つたら今度は上りか…いったいどれだけ歩かせるつもりなんだよ」

ティティスがため息混じりに言った。無理もない。四人が海底トンネルを歩き始めてから既に一時間以上が経過していたのだから。

「男のクセに根性ねえなあー！つべこべ言わないでさっさと歩く！」

エレノアがティティスに激を容赦なく飛ばす。

「はいはい、そんなに怒鳴らなくても聞こえてんしわかってんよ」
ティティスが答えた。

四人は階段を上り始めた。階段はかなり緩やかではあつたが、さすがにさつきまでの疲れがあるので体力が無限に近いロゼツタを除いた三人には正直だるかつたようだ。

「あ…しんどい」

エレノアが手でシャツの襟をパタパタと扇ぎながら言った。

「ここまですんなりの道のりだったからねえ！私は全然大丈夫だけど…ちよつと休憩しない？お腹も減ったしね。腹が減っては戦はできない！…なあーんてね！」

ロゼツタが元気よく言った。

「大賛成。…俺もうクタクタだよ」

ティティスはそう言うと、その場に座りこんでしまった。

「…ま、もう少しでつくからね…焦る必要はない…か…」

ミーシャもティティスに便乗するように階段に腰を下ろした。

「じゃ、そう言うことでだ…ちよつと遅いがランチにでもするか！」

エレノアはそう言うと手に持っていた袋からお弁当箱と水筒を取り出した。

「あれ？…いつの間にこんなもん準備したんだよエレノア？」

ティティスが少しばかり驚いた様子でエレノアに尋ねた。

「あ？…ああ、これか？朝早くに、あんたらがまだ寝ている間に作ったんだよ。…腹が減ったらみんな困ると思つてな」

エレノアはそう言っている間にも、手際よく弁当を階段の上に広げていった。ご飯、ハンバーグ、からあげ、玉子焼き、野菜炒め、きんぴらゴボウ、e t c…お弁当の品数はかなりのもので、彩りも豊かで見ただけで美味しそうだった。

「…作つたつて…ドールハウスも無いのに…？」

ミーシャが不思議そうに言った。

「そんなに驚くことか？ご飯ははんごうで炊けるし、あとは材料さえあればカセットコンロで大抵の料理はできるさ」

エレノアがあまりにも当たり前のように言うので、ロゼッタが苦笑いしながらこう言った。

「ノアちゃん…なんでコックさんにならなかつたんだらうね？…永遠の謎だよ」

するとエレノアはあっさりと同じく答えた。

「さあ？わからん。」

その後、四人はエレノアの美味しいお弁当をキレイにたいらげ、しばし満腹になったお腹を擦りながら雑談に花を咲かせた。

「いやあ、食つた食つた！こんな美味しい料理を作れる友達が近くに居て、俺は幸せ者だなあ！」

ティティスが満足そうにそう言ったので、エレノアはとても嬉しかったし、気分も良かった。

「ありがとう、ティティス。今度食べたいものがあつたらなんでも言ってみな。作ってやるからさ！」

エレノアが胸を張って得意気に言った。

「うふふ、よかったねえノアちゃん！未来の旦那様に誉められてよっ！この料理上手！」

ロゼツタが毎度のようにエレノアをからかった。

「だ、黙れよロゼ！恥ずかしいっ！」

エレノアも毎度のように顔を赤く染めながら叫んだ。

「でも、冗談抜きでエレノアなら良いお母さんになれると思っぜ？
…赤ちゃんに母乳をあげられるかは心配だが」

ティティスがロゼツタに便乗するようにエレノアをからかった。

「…どーゆー意味だよコノヤロー」

どうやらエレノアはちゃんとティティスが何を言いたいのかを理解したらしい。

「…はいはい、じゃれあいこそまで…あんまりのんびりしてると日が暮れちゃっよ…？」

エレノアとティティスとロゼツタの脇で、ミーシャが水筒のお茶をすすりながら冷静に淡々と言った。

「それもそうだな。…んじゃ、ぼちぼち出発しますかな」

エレノアが立ち上がり、おしりを手ではたきながら三人に言った。

「らじゃっ！」

ロゼツタが元気よく応えた。

四人は再び階段を上り始めた。空気は相変わらずひんやりと冷たく潮の香りも辺りに充満していた。ところが、しばらく上ったところで、ロゼツタが急にピタリと足を止めた。

「んっ？どうかしたのかロゼ？」

エレノアがロゼツタに聞いた。

「…いや…ごめん、気のせいだったみたい」

ロゼツタは一瞬、何かの気配を感じたようだったが、果たしてそれが本だったのか、あるいは気のせいだったのか、ロゼツタ自身にもわからなかった。やがて四人は再び前に進み始めた。階段を上って行くにつれて段々と潮の香りが強くなり、かすかではあるが波の音も聞こえてくるようになった。波の打ちつける音は段々と大きくなり、辺りに木霊していた。それはまるで、波の音と潮の香りが奏でる音楽のようにも思えた。…やがて、四人は階段を上りきった。そして、そんな四人の瞳には今までに見たこともない光景が映った。そのあまりの驚きに四人はしばらく黙ってただその光景を見つめるしかなかった。四人の瞳に映った光景：それはとてもこの世の光景とは思えないくらい美しく、そして神秘的な光景であった。高い岩の天井に空いたいくつかの穴からは燦々と光の柱が立ち並び、床からはいくつもの岩で構成された建物が軒を連ねていた。辺りには波の音が木霊し、潮の香りが辺りを包み込んでいた。…まるで、洞窟の中にそっくりそのまま街があるような、そんな感じであった。

「…光？一体どうなってるんだココは？」

エレノアが首を傾げながら言った。…そう、確かに四人は今の今まで海底洞窟の中を、つまりは海の底を歩いて来たわけだ。それにも関わらず天井の穴から燦々と光が降り注ぐのはおかしいと、エレノアはそう思ったのである。その疑問に対して、ミーシャが地図を開きながら答えてくれたのは言うまでもなかったが。

「…それはね…私達が今いるのがさっきの海外から沖合7kmにある島の地下空間にいるからだよ…地下といっても実際には海の下だけ…つまり私達の頭の上は陸地ってわけ…だから天井の穴から光が射している…と思うよ…？」

つまりここまでの経路をまとめると、四人は海外の洞窟を経由して海底洞窟を通り、この島の地下、海面下に広がる空間に来たことになる。そしてこの空間に大昔、人が住んでいたであろう街があったとゆうわけである。

「まあ、ともかくだ、目的のカードキーがあるか捜さないとな。…

とは言つてもなあー…：こんだけ広いと探すのは至難の技だぞ」

ティティスが頭をばりばりかきながら言った。そう、四人が今いる地下空間はとても広く、光の差し込む明るいところだけでも相当な広さがあったし、光の当たらない暗いところにも何かしらある可能性が大きかった。また、背の高い建物が沢山存在しており、四人は空間内を立体的に搜索しなければならなかつたのである。

「仕方ない、危険かも知れないけど四人で手分けして搜そう。この空間は私とミーシャとティティスで搜索しようと思う。悪いけどロゼはこの上の島本体を搜索してくれないか？お前なら飛べるから行動範囲も広いし、視力も優れているからな。」

集合はココに二時間後！…：何か質問は？」

エレノアが三人に言うつと

「は〜い！質問っ！」

ロゼツタが手を挙げた。

「はい、なんだロゼ？」

エレノアがロゼツタを指差しながら言った。

「もし何かあつたらどうするんですかあ〜？」

ロゼツタがそう言ったので、エレノアは迷わずこつ答えた。

「なるべく自分でなんとかしてくれ。…大丈夫、何か危険なことがあつても…きつとみんなが助けに来てくれるから…！」

《ブルー・ハート》

ここはエレノア達四人のいる海底都市の入口から少し離れた所、街の中心部にある広場の一角…：今は枯れてしまった噴水と、所々が剥がれた瓷の地面だけが沈黙と共に横たわっていた。そんな殺伐とした空間の噴水の縁に、水色の艶やかな髪をした少女が一人腰掛けて

いた。

「あーあ…結局ここにもカードキーはなかったなあー…なんて無駄な時間を使ってしまったんだろう。…はあ…」

少女は独り溜め息をつくとき、そのまま立ち上がった。ほこりで汚れたミニスカートを軽く叩いてから、彼女は大きく伸びをした。その時、アクアの耳にわずかではあるが何かの足音らしき物音が入ってきた。

「なんだろう？…他に誰かいるの？」

アクアは耳をすました。

…カツン…カツン…

足音は確かに聞こえる…やはり、誰かいるようである。しかし、相手がどこにいるのかはアクアにはわからなかった。この空間そのものに共鳴してかなり遠くの音もエコーして聞こえるようだからだ。さらにとても静かな空間故にコチラの音も相手には筒抜けなわけである。…しかし、アクアには相手が誰なのか、おおよその心当たりがあった。同時に、彼女の気持ちは高揚した。

「…こんなところにまで来る奴らと言ったら、きつとアイツらくらいのものでしょね。当然、私と同じ目的で来たに違いないね。…ふふふ、ちよつとは楽しめそうだねえ…！」

アクアは軽く髪を掻き上げると、広場を後にした。

…広場には再び沈黙がもどり、濃い潮の香りと波の音だけが延々と響き渡っていた…。

第二十九章 ブルーボトム・前編 海底の記憶 (後書き)

いかがでしたか?…正直、自分は破天荒な性格の持ち主で「常識」とか「伝統」などの保守的な考え方の嫌いな人間です。だからあまり他人からの干渉は受けたくないとゆうのが本音でもあります。自分は、この作品を通して…エレノアやロゼッタを通して皆様に言いたいのです。我々人間は、常識に縛られている限りは本当の幸せを手にすることは永久に不可能だと…。

それでは、次回のブルーボトム後編でまたお会いしましょう！

第三十章 ブルーボトム・後編 Jealousy (前書き)

こんにちは皆様、塚原宏樹です。おかげさまで、このノスタルジアも連載開始から間もなく八ヶ月目を迎えようとしています。読者の皆様には心から感謝しています。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。そして今回は、記念すべき30話目の物語です。物語はいよいよ話の核心へと迫っていきますので、どうぞ最後までお楽しみください。

第三十章 ブルーボトム・後編 Jealousy

「それにしても：昔ここに人が住んでいたことを考えるとなかなか感慨深いものがあるなあ」

緑の髪と瞳をした少女はそう呟いた。：エレノアが他の三人と別れてから20分余が経とうとしていた。ティティスは街の北側、ミーシャは東側、ロゼッタは上の島本体を、そして、エレノアは街の西側を調べるようになっていた。エレノアが現在歩いている街の西側よりの通りには、たくさん建物建っていた。通りは全て贅で、建物もレンガや石を使って綺麗に建てられていた。（我々で言うところの中世ヨーロッパの街並みを想像してくださいね。）

「ちよつと冷えるな：周りを水に囲まれてるせいだろうか？なんだか湿度も高い感じがするしあんまり気分のいいもんじゃねえな」

エレノアは両手で体を擦りながら言った。

エレノアは、とりあえず通りに面した建物を覗いて周って見たが、トレジャーハンターの勘なのだろうなのか、この辺りには何も無いであろうことを早々に感じとったのであった。彼女のそんな勘は的中し、あちこち搜索したのにも関わらずやはりこの辺りには何もなかった。そして、気が付いてみれば既に一時間以上が経過していた。「ふう：我ながら無駄な時間を費やしたものだ。そりゃそうさ、私だったらこんな寂れた所に鍵なんか隠さないもん！」

エレノアが珍しく頬を膨らませながら言った。：その時、彼女の耳に何やら涼しげな音が入ってきた。

「なんだろう：まさか、この音は：！」

エレノアは駆け足でその音のする方向に向かって行った。彼女が走るにつれて段々とその音は強く、そしてハッキリと聞こえるようになった。それはこの空間の入口付近で聞いた波の音とは違う、もっと雄大で力強い音だった。：やがてエレノアはその音源の前でピタリと足を止めた。そして、目の前の光景にこう感嘆の声をあげた。

「す…すごい…まさか…こんな…なんで街の中に滝が…！」

そう、そこにあつたのは紛れもない、巨大な滝であつた。幅は10m以上、高さに至つては想像がつかないほどであつた。空間の天井に空いた穴からまつすぐに水が流れ落ち、床に空いた大きな穴に滝は吸い込まれていた。エレノアはその圧倒的なスケールに、ただ果然と流れ落ちる水を眺めるしかできなかった。

「この滝…上の島から降ってくるんだな…」

エレノアはそう呟いた。彼女はゆっくりと滝に近くと、そつと両手を伸ばして滝の水をすくいとつた。…そして、手の平の中の透明な水を自らの口に含んだ。

「美味しい…なんて冷たくて新鮮な水なんだろう…」

その清く澄んだ水は彼女の乾いた喉を優しく潤した。

「古代のマイナスイオン発生装置と言つたところか？人工の滝か、あるいは元々ここにあつた滝なのか…いずれにしろ、こんな滝が街中にあるなんてこの街の人々は水を愛してやまなかつたんだらうなあ…」

エレノアはその巨大な滝を見上げながらそう呟いた。…その時だつた…

「へえ…なかなかイイ所じゃない。まさか貴女にこんなロマンチストな一面があるなんて、正直驚きなんだよね？」

エレノアの後ろから聞き覚えのある声が彼女に話かけた。

「！？…お前はっ…！」

エレノアが驚いて振り向くと、そこには水色の髪をした一人の少女が立っていた…！

「久しぶりだねエレノア、草原で会った時以来かな（気絶してたから実際には見てないけど）」

「お前はっ……誰だったっけ??」

「えええーっ!! 覚えてないの!? ヒドイよっ! アクアだよア・ク・アッ! こないだ会ったばかりでしょーがっ! ……って、なんか前にも同じシチュエーションがあったような…」

アクアはエレノアの発言に思わず拍子抜けしてしまった。

「アクア? ……あっ! 前に港で私が腕を銃で撃ち抜いた奴か!」

エレノアはようやくアクアのことを思い出したようだ。

「そうだよっ! あの時マジで痛かったんだからねっ!」

「そんなの知るかよっ! 先に仕掛けてきたのはお前の方だろーがっ!」

エレノアは逆ギレしてアクアにそう言った。

「うるさいなっ! 人間のクセに偉そうに吠えないでよこの男女っ!」

「やかましいっ! 人間様をなめんじゃねえよこのチビ女っ!」

アクアがエレノアをけなすと、エレノアも負けじと言い返した。

「ふーんだ! 私は別に貴女に用があるわけじゃないのっ! 私が用があるのはティティスなの!」

アクアがエレノアにそう言った。

「はあっ! ? なんでお前がティティスに用事なんてあんだよっ!」

エレノアが少し驚いた様子で質問すると、アクアはこう答えた。

「そんなの決まってんでしょ? 彼が私にとって必要な人材だからよ!」

「…?」

どうやらエレノアは最初アクアが言っている意味がよくわからなかったようだ。でも、次にアクアはハッキリとこう言い放った。

「わ、私は…私は…彼のことを…ティティスのことを…愛しているからっ…!」

「なっ…! ?」

エレノアはその言葉を聞いた瞬間、頭の中が真っ白になった…。ア

クアは、さらにこう続けた。

「正直…彼に最初に出会った時から彼のことが頭から離れなくなっちゃったの…。彼はとっても優しく紳士だったし、魔物の私を差別することはなかったから…。やがて、私にとって彼は特別な存在になっていったんだよ…彼のことを想うと夜も眠れなかった…。彼のが脳裏をよぎる度に私は胸を締め付けられたよ…。私がどうしてティイスのことをこんなにも気にするのか…自分でもわからない…だけど…これが誰かを好きになることなんだって…そう気付いたの。自分でもこんなわけがわかってる…。でも…だけどね…それでも私は彼を愛してしまっただから…」

「…」
アクアの健気な台詞を、エレノアはただ黙って聞くしかなかった…。
「だけど…彼をあからさまに愛することはできない。何故ならば、私達魔物と貴女達人間は敵同士だから…。それでも…私は彼の側にいらればそれで幸せなの…。だから私は彼を私達の仲間になるように誘った…もちろん断られたよ。その理由が…エレノア、貴女にあるのよ？」

「わ、私に…？」
「そう、彼はね、貴女のことがかきつと好きだと思つたよ。だから私達の仲間になるのを拒んだ。…要するに、ここで貴女が死ぬば…エレノアさえいなくなれば…彼は私達の仲間になつてくれるだろうし、きつと私の気持ちにだって応えてくれるはずなんだ…！貴女がティイスのことをどう思っているかは知らないけど…私は彼のことを好きなんだ。…だから…恋の宿敵ライヴァルは消す…ただそれだけを考えた…そして…今まさにそれを実行する時が来たんだよエレノア…！」

エレノアはアクアの台詞の一部始終を黙って聞いていたが、やがて薄笑いしながらこう言った。

「ふっ…あいにく、私自身にもあいつのことをどう想っているかわからないよ。ただこれだけは言える…お前にティイスは絶対に渡

さないっ…！」

エレノアはそうアクアに言い放った！

「はっ！人間風情がこの私に勝つと…？面白いわ！二度と私やティイスの前に現れることのないように葬り去ってやるよっ…！」

こうして、二人のティイスに対する愛を巡る女の意地とプライドを賭けた戦いの火蓋が切つて落とされた…！！

「私をなめないほうが身のためだよアクア！風穴空けてやるぜっ…！」

そう言うと、エレノアは腰のホルダーから銃を引き抜くや否や、アクアに向かって一発発砲した！マグナムの銃口が火を吹き、銃弾が一直線に標的に向かって行く…！！

「…！」

…タタツ！ガチャーン！

アクアはとつさに横に素早くステップを踏んで銃弾をかわした…！床に命中した銃弾は髑を打ち砕いていた。

「ちっ！外したか…！」

エレノアは舌打ちした。

「貴女の銃の腕前は認めてあげるよエレノア。…だけどそんな鉛球じゃ私は倒せないよ？」

アクアが余裕ともとれる表情でそう言った。確かに、アクアに銃弾を一発打ち込んだところで大したダメージを与えられないことくらい前回の経験からエレノアにもわかっていた。…そう、アクアの再生能力の前では人間の武器など無力なことを。普段のエレノアだったら、もう少し冷静な判断ができたのかも知れない。例えば…近くの建物の陰に隠れながら狙撃するとか、敵わないとわかっていながら一旦退散するのも戦う上では重要な作戦であるはずだ。しかし、この時のエレノアには目の前の敵を正面から倒す考えしかなかった。…皮肉にも、彼女のティイスに対する気持ちは彼女の判断力を鈍

らせていた。…もしかすると、エレノアにとってティティスを失うことは何よりも恐怖だったのかも知れない。

「黙れっ！！お前なんか…お前なんか…！」

エレノアの声は明らかに震えていた。…しかし、その震えは恐怖のせいではなかった。

「ふふふ…震えているよエレノア？…遊びは終わりだよエレノア…大丈夫、すぐに楽にしてアゲルから…！」

アクアはそう言うと、手の平に大きな水の塊を作り出した。

「死ぬっエレノア！必殺、水球爆泉！！」

巨大な水の球がエレノアに向かって放たれた！！…しかし、人間であるエレノアにはそれを避けるだけのスピードも、防ぐための技術もなかった。

…ドガザバアッン！！！！

「キヤアッ！！」

アクアの放った水球爆泉は見事にエレノアに直撃した。その衝撃で辺りに大量の水がばら撒かれ、エレノアは数十mも吹っ飛ばされて近くの建物の壁に叩きつけられた！

ドカッ！

「ンアッ…！」

激しく壁に叩きつけられたエレノアは地面に倒れ込み、そのまま動かなくなってしまう…。

「…死んじやったのエレノア？」

アクアが言った。

「…」

エレノアはピクリとも動かない。

「そっか、死んじやったみたいだね。…だけど私はそんなに寛大じ

やないんだ。粉々にしないと気がすまないから…さよならエレノア、ちゃんと天国に行くんだよ?」

倒れたエレノアに近づきながらアクアは冷たくそう言った。

そして、とどめを刺すために再び手の平に魔力を込めようとした…その時だった、

「よせっ! やめるんだアクアッ!」

アクアの背後から何者かが叫んだ。

「その声はっ…! ?」

アクアが振り向くと…そこには金色の瞳の少年が息を切らしながら立っていた。

《拐われたティティス》

「アクア…お前エレノアに何をした! ?」

ティティスが珍しく声を荒げて言った。

「…別に何もしてないわよ。ただ私はやるべきことをやりに来ただけだから」

「やるべきことだと?」

「そうよ。…それが何だかわかるティティス?」

アクアが少しだけ笑いかけながらティティスにそう言った。

「この俺を連れて行くと…つまりそう言いたいんだなアクア?」

「大正解! なんだ、ちゃんとわかってんじゃないの。」

アクアが嬉しそうに言った。

「だったら…なぜ彼女を襲^{エレノア}う必要があるんだよ?」

嬉しそうなアクアとは対比的に、ティティスは真面目な顔でそう聞いた。

「そんなの決まってるでしょ？私の本来の目的は貴方達の抹殺だよ？忘れたの？…ティティスを私達の仲間に加えたいのはこの私の独断だよ」

「だったら…この俺を連れて行くのは目的違反ではないのかよ？」
ティティスが聞いた。

「もちろん…それは百も承知だよ。…だけど私にとって彼方はそれだけのリスクを侵してでも一緒にいたい…そんな存在なんだよ」
アクアがそう言った。

「…それって…もしかして告白なのか？」

ティティスがちよつと驚いたように聞いた。

「…そ、そうだよ…わ、私じゃダメかな…？」

ティティスは困った。正直とにかく困った。今までの人生の中で一番困った。ティティスが困るのも無理はない。この状況下で相手に愛の告白などされたら誰だって焦る。それが敵からの告白ならば尚更である。まずティティスを困らせたのは「エレノア」と「アクア」のどちらを選ぶかだった。

「…さ、決めてちょうだい！私と彼女エレノアのどちらを取るか！」

アクアがそうティティスに言い迫った。

「な…急にそんなこと言われても…まいったなあこりゃ…」

エレノア仲間を助けに来たつもりが、まさかこんなことになるなんて誰が予想しただろうか？…ティティスはちらつと後ろを見た。そこには相変わらずエレノアが倒れていた…。

「と、とりあえずさあ…エレノアを何とかしてから話さないか？」

ティティスはそうアクアに言った。彼としてはとりあえずエレノアを助けたかったのだが…

「ダメ！そんなことは絶対に許さないんだからねっ！」

アクアに激しく拒否されてしまった。

…この時、ティティスには選択肢が二つしかなかった。一つは、アクアを倒してエレノアを助けること。もう一つは、アクアに素直について行くことだ。しかし、傷付いたエレノアをかばいながらアク

アを倒すのは至難の技だし、アクアに素直について行ったらエレノア達だけでなく人間を裏切ることになる…ティティスの心は揺らいだ。単に「味方」と「敵」で判断するならば彼が取るべき行動は決まっていただろう。…しかし、「エレノア」も「アクア」も彼にとつては素晴らしい異性であり、敵味方とは別問題だった。正直、今の彼には二人のどちらを選ぶことなどできなかった…。

「俺は…俺は…」

ティティスがそう思い悩んでいると…

「…つたく、こんな時に何を考えてんだか…この変態バカは！」

後ろからエレノアがティティスに向かってそう言った。

「エレノア！お前…」

「ふっ、心配すんなよティティス…私は大丈夫だから…何を悩んでるんだかは知らんが…お前自身のことだ…お前が決めたらそれでいいんじゃないのか？」

エレノアは痛みを堪えながら、そして何かを悟ったかのようにティティスにそう言った。

「…エレノア…」

その言葉に、ティティスの心は揺れ動いた。…その時だった、

「…エレノア…私とティティスの仲を…邪魔しないでっ！！」

アクアはそう叫ぶと、水を圧縮して作り出した水の鞭をエレノアに向かって振り降ろした！

「危ないっエレノア！」

ティティスに迷いはなかった。彼はとつさにエレノアとうねる水の鞭の間に立ちはだかった！

「！???…っ、あのバカっ！」

アクアはとつさに鞭の方向を変えようとしたが…間に合わなかった。

バシィッ！！

水の鞭がティティスに容赦なく打ち付けた。

「ガッ…！」

ティティスはその衝撃で地面に叩きつけられ、そのまま意識を失ってしまった…。

「ティティスッ！…あぐっ！くそっ…！」

エレノアは倒れたティティスの所へ行こうとした…が、身体中に激痛が走って思い通りに動くことができなかった。

「あ、危なかった…インパクトをずらしてなかったら…危うくティティスを死なせるところだったよ…！」

アクアはとりあえずホツと胸をなでおろした。そして、彼女は気を失っているティティスの元へと近いて行った。

「ま、待てよ！そいつに何する気だよ！？」

エレノアが必死にアクアに向かってそう叫んだ。

「大丈夫、何もしやしないから安心してよ。彼は大事なお客様だからね、丁寧に扱わないと」

アクアはそう言った。…そして、さらにこう続けてエレノアに言った。

「悪いけど彼は戦利品として貰っていくよ。貴女の命は彼に免じて今回は見逃してあげるわ」

「か、勝手なこと言うなアクア！まだ勝負は…！」

「勝負なんて…死にぞこないのアナタの言う台詞じゃないでしょ？」

ティティスを私に拐われたのはアナタが弱いからなんだから…！！…それじゃあね、さよならエレノア！」

アクアはそうエレノアに言い放つと、みるみるうちに巨大な水龍へと姿を変え、ティティスをそっとくわえると、そのまま天井に空いた穴に向かって飛んで行った。そしてあっという間に水龍は大空の彼方に飛び去り、エレノアの視界からは消えてしまった…。

「…ぐ…ティティス…畜…生…！」

アクアが去って間もなく、エレノアの視界は再び真っ暗になった…。

《奪還への決意》

…ここは…何処…？私は…何を？…真つ暗で…少し冷たい…身体中が…痛い…。

「…ノアちゃん…」

…誰？

「…ノアちゃん！」

…誰かが…誰かが私を呼んでいる…？

「ノアちゃんしつかりしてよ！」

「…エレノア…！」

エレノアが気がつくくと、ロゼッタとミーシャの心配そうな顔が自分を見下ろしていた。

「…ロゼ…ミーシャ…」

「よかった…気がついたんだねノアちゃん！」

「…心配したんだから…無事で何よりだよ…」

目を覚ましたエレノアにロゼッタとミーシャが、ホツとした様子でそう言った。

「私は…確か…そうか…負けたんだな…」

エレノアは気を失う前の事を思い出しながらそう呟いた。

「ノアちゃんもティーちゃんも、あんまり帰ってくるのが遅いから

…心配して探してたらノアちゃんが倒れてて…一体何があったの？」

ロゼッタがエレノアに心配そうに聞いた。

「…さつきからティティスが見当たらないんだけど…一緒じゃな

かったのエレノア…？」

ミーシャもロゼッタに続くようにそうエレノアに聞いた。

「…」

エレノアはただ歯をくいしばって黙ってしまった。

「黙っていても何もわからないよノアちゃん…お願い、ちゃんとわたし達にも話してよ、ね？」

ロゼツタがそう優しく言うと、エレノアはようやく重い口を開いた。「…実はな」

エレノアは事の全てを二人に話始めた。アクアと戦闘になったこと…その戦いに敗れたこと…途中でティティスが助けに入ったこと…そして…アクアのティティスに対する気持ちのことも…。

「ティティスは拐われちゃったよ…私をかばったばかりにな…」エレノアが言った。

「そんな…まさかティーちゃんが誘拐されたなんて…」ロゼツタは驚きを隠せない様子だった。

「ごめん…私がおつとしつかりしてれば…もっと強ければ…本当にごめん…！」

エレノアは震えた声でそう言った。

「…エレノアのせいじゃないよ…私達も、もっと早く助けに来るべきだったよ…」

ミーシャが言った。

「とにかくだよ、こうなった以上は一刻も早くティーちゃんを救出するっきゃないよね、ノアちゃん！」

ロゼツタが持ち前の明るい感じでエレノアにそう言った。

「…ああ…そうだな」

「あ、あれ？今日のノアちゃん…なんだかノリが悪い…」

エレノアのいつもと違う様子にロゼツタは正直困惑した。…確かにティティスを誘拐されたショックはあるのかも知れないが、こういう時にこそ威勢がよくなるのがエレノアとゆう人間の特質だということ、道中の経験からロゼツタはよく知っていたからだ。

「…あのさ…ちょっとはテンション合わせてよロゼツタ…。…立てるエレノア…？…傷はさつき魔法で少しは治療したんだけど…」

ミーシャはそう言いながら床に座ったままのエレノアに手を差し出した。

「あ、ああ……ありがとう……大丈夫だよミーシャ、骨も折れてないみたいだしな」

エレノアはそう言うと、ミーシャの手をとり立ち上がった。

「……とりあえず……ここにはカードキーも無いみたいだし、居てもしよくないから……早くここから出ようか……話はそれからだよ……」

「そうだなミーシャ……ロゼも異論はないよな？」

「うん、了解だよ」

一人が欠けたままの三人は、ただ黙々と元来た道のりを戻って行った。街並みを過ぎ、階段を上り、地上の海岸へと……。その間、三人は一言も喋らなかった。お調子者のロゼツタも、この時ばかりは心配そうにエレノアを見つめることしかできなかった。……三人が地上に出てみると、辺りはすっかり暗くなっていた。

「あ……すっかり暗くなっちゃったね……なんだかわたし達の今の気分みたいかも」

「……そんなこと言わないでよロゼツタ……ねえ、そうだよねエレノア……？」

「……」

ミーシャが問いかけても、エレノアは空を見上げて黙っているだけであった……彼女はどうかやら何かを考えている様子であった。

「……エレノア……？」

「なあ……お前ら、ティティスにとっての幸せって……なんだと思う？」

「へ？きゅ、急にどうしたのノアちゃん？」

「……アイツは、果たして私と一緒に居て幸せだったのか？」

エレノアはそう真剣に言った。

「……何言い出すのよエレノア……彼は貴女と一緒にいる時が一番幸せそうだったじゃない……エレノアだって……ティティスと一緒にいる時が一番幸せだったんじゃないの……？」

ミーシャが言った。

「もちろん、私は彼といれて楽しかったよ？ただ……ずっと考えていたんだ。アイツは私のことをどう思っているかってな。確かに、ア

イツは私に対して好意的だったよ？だけど、よく考えてみたらイツは誰にでも優しいんだよな」

「ノアちゃん…」

「そうだろロゼ？…まあ、アイツは女好きだからな…。知ってるか？アイツな、アクアに告白された時にきつと一瞬私の事忘れてたぜ？所詮、私はアイツにとつてその程度の女つてことだろうよ。…アクアは本気でアイツのこと好きつて顔してた…それと比べてみるよ？私はなんなんだ？まだハッキリ好きとも言つてないじゃないか？こんなダメな女と一緒にいるくらいなら…アクアと一緒にいた方がどれだけ彼にとつて幸せか…」

「なんで…ノアちゃん…まさか…！」

「私…もう彼に愛してもらえる自信が無いんだよ…。大丈夫、彼ならきつとアクアと上手くやってけるさ…だつて…あの二人は…」
その時だった、

パチンッ！

ミーシャの右手がエレノアの頬を殴った。

「なっ…」

「…バカッ！勝手なこと言わないでよエレノア！」

ミーシャが声を荒げてエレノアに言った。さらに続けて、

「…わかつてんの？この旅は貴女だけの旅じゃない…私達の世界の運命が掛つた旅なんだよ！…？そんなくだらない理由で…大事な戦力を易々敵に渡すわけにはいかないんだ…！」

と、キツイ言葉をエレノアに浴びせた。

「ミ、ミーちゃん…それは、ちよつと言い過ぎなんじゃ…」

ロゼツタはミーシャの態度に少し驚いたように言った。

「いいんだロゼ…確かにミーシャの言う通りだから…私は自分勝手な人間だよ…。…ははっ、バカだよな私つて…初対面の男に初めてちよつと優しくされたからつて、そいつのこと好きになつちまうな

んてな…あはは、ちゃんちゃらおかしいや…」

「ノアちゃん…泣いてるの…？」

エレノアの声は笑っていたが…その緑色の瞳からは大粒の涙がこぼれ落ちていた。

「ははっ…あれ、私…なんで泣いてんだよ…？たかだか男一人いなくなっただけじゃねえかよ…なのに…なのになんでこんなにも悲しいんだよ…どうして涙が止まらないんだよお…！」

「ノアちゃん…」

ロゼッタが何とかエレノアを慰めようとした…その時、ミーシャがエレノアに近付いた。…そして…彼女をギュツと抱き締めたのだ。

「…！…ミーシャ…？」

「…バカね…最初からそうやって素直になればよかつたのに…。…可哀想に…とつても悔しい思いをしたんだね…でも大丈夫だよ…。…イティスはエレノアの気持ちをちゃんとわかってくれてるよ…。…だつてそうでしょ？彼は愛していない人間のために身を投げ売つてまで他人を守るようなタイプじゃないし…。…きつとエレノアだったからこそ彼はそんな危険なことをしてまで貴女を守りたかつたんだよ…。…大丈夫、自分に自信を持つてよエレノア…。…きつとイティスだつて貴女の迎えを待つてるから…。…だから一緒に行こう？…。…そう、貴女自身のためにも…。…イティスを奪還するんだよ…。…！」

ミーシャはそう優しくエレノアに言った。

「そうだよノアちゃん！ちゃんとイティスちゃんに自分の気持ちを伝えなくちゃダメだよ！…このままじゃきつと後悔しちゃうから…。…みんなでイティちゃんを助けに行くんだよ！」

ロゼッタもエレノアを励ますようにそう言った。

「お前ら…うん、そうだよな。仲間が連れ去られた時には理屈抜きで助けるべきだよな。…行こうみんな、彼を助けに！イティスは私達の大切な仲間だ。…だから…私はどんな状況でもイティスの気持ちを感じるよ…。…！」

エレノアは力強くそう言うのだった。

「よかったあ〜！立ち直ってくれたんだねノアちゃん！…やっぱりノアちゃんはこうじゃないとねっ！」

ロゼツタが嬉しそうに笑顔で喜んだ。

「な、なんだよロゼ、私はそんなに精神的に弱い人間じゃないよ」

「…はは…さっきまで泣いてたくせに…よく言うよエレノア…まあ、涙は女を強くするとも言っけどね…」

「う、うっせーよミーシャ！…あ、あれは海水で目が痛かったただけだ！」

エレノアが慌ててそう弁明した。

「はいはい、こちら辺の水は真水だからね。ウソがバレバレだよノアちゃん！」

ロゼツタがそうエレノアをからかった。

「…嘘つくならもう少し上手くついてよ…エレノアってホントわかりやすいんだから…」

ミーシャも苦笑いしながらそう言った。

「う、うるせー！…それよかこれからどうすんだよ？ティティスが何処に拐われたのか…何か手がかりとか探さない…」

「ああ、それなら心配ないよー！アクアちゃんの放つ気、つまり魔力はなんか特殊みたいで…とても目立つんだ。だから、わたしの能力を使って追跡すれば問題ないよー！乗り物はバギーがあるし、運転手のノアちゃんもいるしね！」

…と、ロゼツタが珍しくそう段取りを手際良く説明した。

「お、お前がそんな知的な作戦を立てると…正直ちよつと怖いよ」エレノアがちよつと驚きながら言った。

「…確かに同感だよ…ま、内容に異論はないけどね…」
ミーシャが言った。

「んじゃ、決定だね！…あ、大事なことを決め忘れてたよ」

「大事なこと？なんだよそれ？」

エレノアがロゼツタにそう聞くと、彼女はこう答えた。

「…いつ行動を開始するかだよ。…今すぐ動くか、それとも明日を待

つて行動するか…さあ、どっちだ？」

ロゼッタがエレノアの方を見ながら言ったので、エレノアは迷わずこう答えた。

「もちろん、そんなの決まってるんだろ？…明日まで待ってから行動する、だ！なあに、ティティスなら大丈夫さ。それよりも、まずは来るべき戦いに備えて元気を蓄えないとなっ！」

「…ふふ…急がば回れってやつだね…エレノアのそうゆうところを私は尊敬するよ…」

ミーシャがちよつと嬉しそうに言った。

「それじゃあ今晚は早く寝て、明日の夜明けと共に行動開始だねっ！」

ロゼッタが言った。

「ああ、そうだな。…待ってるよティティス…お前は必ず私が助けるからな…！」

エレノアは夜空に向かってそう呟いた。…静かな波間に夜空の月がまるで美しい真珠のように光輝いていた…。

《興味と野望》

ここは魔界ポルトにそびえる魔王城の図書室…そこに一人の美しい女性がいた。

「へえ…なるほどねえ…ガイアってのは調べれば調べるほどに面白い世界ね…これならアンゴルモア様が興味を持つのもわかるわ」
そう呟きながら、彼女は読んでいた本を棚に戻した。

「さて、ガイアに行くのは決定事項だとして…問題はアレが何処にあるかだね。私の野望を叶えるためには何よりアレの力が必要だ。」

…そうよ…アレさえ手に入れば赤い悪魔もレクイエムですら…フフ
…アハハッ！」
この時、サキュバスの不気味な高笑いの意味を一体誰が知っていた
と言うのであろうか？
…そう…誰も知らないところで巨大な陰謀は確実に動き始めていた
…！

第三十章 ブルーボトム・後編 Jealousy (後書き)

恋愛とは…人を愛する心とは一体何なのでしょう？人は時に恋をします…しかし、残念ながらもその恋が実るとは限らないものです。そんな時…あなただったらどうしますか？作中では、アクアとエレノアとゆう立場の異なった二人の少女がティティスとゆう一人の男に恋愛感情を抱いていましたが仮にあなたが彼等の立場だったら…あなたはどうするのでしょうか？エレノア、アクアの二人を通して、恋愛の素晴らしさ…そして難しさを痛感させられた今日この頃でありました。今後は、物語だけでなく彼等の行く末にも注目してみてくださいね。

…それでは、また次の機会にお会いしましょう。

第三十一章 番外編 When…（前書き）

今回は登場人物同士のやり取りではなく、同じ時・同じ世界の中でそれぞれの人物が何を想い、何を考えているのかを綴らせていただきます。いちおう女の子主体の物語なので、メインキャラクターと帝国編の中心となる女の子達の心中を書かせてもらいました。物語を理解する上で重要な表現がたくさん出てきますので、じっくり読んでみてくださいね！

…てゆーか、最後に登場している人はいったい何者でしょうか？？

第三十一章 番外編 When…

《大潮とアクア…真実と葛藤》

…今日は月に二回ある大潮の日だ。普通の人にとっては別に特別な日じゃない。ただ単に魚が大量になるとか、女性が出産する確率が高くなるとか…せいぜいそんなものだ。…だけど…私にとっては今晚、大潮の夜は特別な夜であり…同時に私が一番嫌いな夜でもある。私は鏡を眺める…いつもより少し長い髪に鋭い水色の瞳、ちよつとだけ大人びた顔立ち…鏡の向こうには普段は決して見せない本当の私^がいた。上半身だけ見れば普通の人間と何ら変わらないのかも知れない。…でも、人間らしいのは顔とその周辺のパーツぐらいのものに過ぎない。…ふと自らの手に目をやれば、そこには鋭い爪と蹠^{みずかき}のついた醜い大きな掌がある。鏡に向けた視線を少し下側にずらせば、鋭い棘のついた鱗と鎧のように堅い鱗に覆われた長く巨大な下半身がとぐろを巻いている…そんな自分の姿がそこにあつた。部屋中に充滿する生臭い臭いと床に散らばるガラスのように鋭く尖つた鱗…普通の人間ならばまず耐えられないだろう。いつもは魔力で人間の姿を維持していても…所詮は魔物、正体は醜いモンスターに過ぎない。…私の場合、大潮の夜には魔力が著しく増幅し本来の姿を自らの力では抑えきれなくなってしまうのである。だから、例えばどんなに嫌でも月に二回ある大潮の夜には自らの真実の姿を現さなくてはならない。…無論、人型の魔物全てが同じとは限らない。中には一生、自らの正体を現さなくても済むような魔物さえ存在する。ただし、多くの連中は年に一回か二回くらいは魔力の著しく低下、または増加する日があつて、正体を現さなくてはならないようである。…私の場合、それが大潮の日であるがために月に二回も正体を

現さなくてはならないのだからたまったもんじゃない。一般的に、人型の魔物は自分本来の姿を他人に見られることを嫌う。…多くの人型の魔物が人間を軽蔑しているのに人間の姿でいることを好むなんておかしい話かも知れないが、事実なのだから仕方がない。これはあくまでも私自身の推測だが、プライドが高く知性に誇りを持つ彼らは普通の獣型の魔物と同じ姿形をしていることを嫌うのだろう。…もちろん私自身も例外ではない。だから大潮の日には何があっても外出はしない。本来ならば海か川や湖の底などに身を潜めているが…なにせここは大都会のど真ん中、そんな場所があるわけもない。だから仕方なく、一日中この大して広くもない部屋の中に閉じ籠っているのである。

私はふと窓の方へと視線を向けた。真夜中にも関わらず、摩天楼の光が辺りを昼間のように照らしていた。流星は帝国の首都マンファリの中心街、夜でも眠らない都市…と言ったところなのかな？なんだけ最近の街の光が静まりかえった大地の緑しか見ていないような気がする。

大好きな大海原を見たのはもういつのことになるのだろうか…？コロッサル様の命令で赤い悪魔に関わってからとゆうもの、彼女達に振り回されてばかりで自分の時間がめっきり減ってしまった。シヤクマやサイコやドリーマーは元々好戦的な奴らだから、別にこの件に関わっていても苦痛でもなんでもなく、むしろ楽しくて仕方ないようだ。…けれども、私はそんなじゃない。私は別に戦いたいわけでもなければ、誰かを無益に傷つきたいわけでもない。…正直、できることならば争うことなく平和に暮らしたいくらいだ。それにも関わらず私が軍に属しているのは、両親を人間に殺された私を軍が保護してくれたからに過ぎない。そこで私は戦闘の才能を見出され、今に至っているとゆうわけだ。過去にはあまり良い思い出はない。だから、昔を懐かしんだり誰かに過去を語ることもしない。

そう言えば…彼も共和国の軍に所属していたんだよね…（もうクビになつたらしいが…）。彼は今までに一体どんな人生を歩んで来たのだろうか…？普通の人と同じように幸せに暮らしてきたのだろうか？…それとも…？いずれにしても一度は聞いてみたいな…：それにしても彼には悪いことをしたものだよ。彼をココに連れて来てから2日目になるけど…初日はともかく、私はこの通り醜い怪物に化していて今日も彼に会いに行けなかった…。まあ、この施設にある監獄の中で一番リッチな檻に入れたからまだいいけれど…：2日間もほつたらかしにされてきつと怒っているに違いない。：だから明日こそは必ず会いに行こう。夜が明ければまた人間の姿になれる。そうしたら、綺麗な服を着ていつもよりちょっとだけおしゃべりして…：できる限り可愛い笑顔で彼に会いに行こう。色んな話をして…：たくさんの楽しい時間を彼と共有しよう。…夜明けが待ち遠しいよティティス…：胸が張り裂けそうなくらいに…。

《星空とエレノア…この広い世界で…》

…眠れない…もう夜中の三時だとゆうのにまだ眠れない…。その理由はハツキリしている。私の隣でロゼがまるで嵐のような大いびきをかいて爆睡しているからだ。まったく…可愛い顔してなんちゆういびきだ！隣で寝る方の身にもなってくれよ！しかし…彼女のいびきにも驚きだが、彼女を挟んで向こう側に寝ているミーシャにも驚きだ…よくもまあこんな騒音の中でスヤスヤ眠れるなあ…：ま、ミーシャのことだから納得できなくもないけど。

…それにしても綺麗な星空だ。今日は気候もよく、特に雨風を気にすることもないので、ドールハウスもテントも使わず砂漠の小さな

岩山の陰に三人で身を寄せ合って夜を越すことになった。…不安定な砂地のためにテントもドールハウスも建てられなかったのが本当のところだが…まあ、そんなことはどうでもいいか。そのため、いつも屋根がある所には満天の星空が広がっていた。私はずいぶんと星空を眺めてきたつもりだ…けれども不思議と飽きることはなかった。それは一つとして同じ星空はなかっただろうし、瞬く星々を見ながら私は今までに色々なことを考えてきたからだ。今のこと…将来のこと…過去のこと…数えたらきりがない。…でも…今の私が考えているのは…もっと複雑で…もっと大事なこと…そう…彼のこと。彼は今どこで、何をしているのだろうか？そもそも無事なんだろうか？彼の追跡を始めてから2日が経とうとしているが…未だに行方知らずだ。彼のことだから、もしかしたら彼の携帯電話からパソコンにメールを送信していると思っただが…未だに連絡はない。恐らく携帯電話を取り上げられているか…あるいは彼自身が既に…いやいや、そんなことはあり得ないし考えたくもない。…少なくとも彼がアクアの掌中にある限りは命の心配はないだろう…彼女^{アクア}は彼に少なからず好意を抱いているからな…。

…ん？ちよつと待てよ？当たり前だが…つまりこの2日間、テイテイスとアクアは一緒にいたってことだよな？男と女が二人つきり…ってことは…まさか…まさか…！？いやだいやだ！
そんなの…そんなの認めたくなんかない！…私は…私はまだ彼とキスすらしていないのに…そんなのいやだよ…。ううん、まだそうと決まったわけじゃないんだ…正直心配で仕方ないけれども…彼を見つけないことにはどうしようもないよね…。今の私には彼を信じる他ないや…。

考えても仕方ない…もう寝よう…明日も早起きしてみんなの朝食を作らなきゃ。おやすみなさい…。

…ダメだ…眠れない…。何故だ…どうしてだ？目を瞑ってみても…
いくら眠ろうとしても脳裏に彼の笑顔が焼き付いていて…彼を想う
と眠れない…。私にとつての彼の存在はいつからこんなにも大きく
なったのだろうか？今思えば、彼との最初の出会い是最悪だったな
あ…。当時まだ敵側に近かったテイテイスと雪男の住む洞窟に落ち
てさ、そこで色々知り合っただけ…本人はあまり印象に残って
いないみたいだけれども…あの時彼がくれたコートは今でも大切な
宝物だ。それから何度か私は彼に会った。…いや、彼は私に会い
に来てくれていたんだ。その度に、彼は私を楽しませてくれた…あ
んなにも心の底から楽しかったのは生まれて初めてだった。…いつ
しか私は、そんな優しく、自由奔放な彼に心惹かれるようになって
た…それは彼が仲間に加わっても変わらず、彼といられることを強
く望んだんだ…。私は…彼に恋したことをもう少し素直に認めるべ
きだったのかも知れない…ちょっと恥ずかしいけれど…私だってア
クアに負けるわけにはいかない。彼を無事に助け出したら…ちゃん
とけじめをつけなくちゃ…。

…本当はわかってるんだ…どうして眠れないのか…別に考え事をし
ているからじゃないんだ…。そう…今日はまだ…彼を想って自分の
身体を慰めていないから…。

《イブキと摩天楼…憂鬱な夜》

…退屈だ…実に退屈で仕方がないよ。赤い悪魔と接触するためにマ
ンファリのエリオットの家に泊まってから10日…未だに彼女は姿
を現さない。このままじゃあ目的が果たせないじゃないの…ハア…
憂鬱…。もう今日みたいにアパートの屋上から見える摩天楼の光に

も飽きちゃったし…早く国^{ジパング}に帰りたいよー…。

それにしても…未だに納得できないことがある。赤い悪魔…ロゼツタのことだ。そもそも彼女は本当に赤い悪魔なのだろうか？赤い悪魔と言えば、泣く子も黙る恐怖の代名詞みたいなもの…それがあんな可愛らしい…とゆうか、おちゃらけた女の子であることにまず納得できない。それに赤い悪魔はかつて世界を滅ぼしたとんでもない化物！確かに彼女は強かったけど…赤い悪魔ならあんなもんじゃなはずだ。だいたい、そんな凶悪な奴が人間なんかと行動すること自体があり得ないような…？とにかく、彼女が何らかの形で赤い悪魔に関わっているのは間違いないよね。…てゆうか…上様は赤い悪魔をジパングに連れて来させてどうするつもりなのかなあ？あのお方は破天荒だからなあ…とんでもないことを考えておられるのは間違いないだろうけど。見せしめに群衆の目前で切腹でもさせるつもりなのかな？…いやいや、あのお方はそんな残虐な性格ではないよ。…まあ、性格が性格だからなあ…上様に関わると疲れるよ…ハア…。

あーあ、もう少し赤い悪魔について予習しとけばなあ…こんなに苦労しなかったのに！そもそも、赤い悪魔はわからないことが多すぎるんだよ。文献は少ないし、誰に聞いてみてもわからないし…そりゃあ、千年も昔のことだから仕方ないのかも知れないけど…一度世界を灰にした化物を忘れるほど人々は忘れっぽいのかなあ…？私かなんとか調べたところによるとだ…赤い悪魔は女性で、絶世の美女だったそうだ。勉強家でもあり哲学や心理学、歴史や神学を好み「人間」の本質について色々研究していたようね。人間観察が趣味だったのかしら？また、彼女は非常にプライドの高い性格で誰の命令にも従わなかったとも言われている。…元々は戦闘兵器として研究・開発されただけに戦闘能力は相当なものだったらしいけれど、この性格のおかげで制御にだいぶ苦労したみたい。…俗に言う高飛車っ

てやつね。あとは…彼女の一番の謎、何故彼女は世界を破壊したかだよね。かつての世界…つまり旧世界は今ある世界とは比べ物にならないほどの科学力を持ち、繁栄を極めていたらしい。それを滅ぼすんだから…きつとよっぽどの理由があるに違いない。その理由はわからないけれど…かつて一つだった大陸を二つに引き裂いてしまふんだから、きつと相当な怒りだったんだろなあ…。なにせ文献によると、彼女から放たれた光線により大陸は分断され、彼女の体から振り撒かれた火の粉で全てが焼き尽くされたと…その他にも色々書いてあつたけど…恐ろしい限りだ…まるで生き地獄だね。

そう言えば…一つ気になることが記してあつたな…。彼女には…赤い悪魔には義理の弟がいたらしい…名前は…えーと…忘れちゃったともかくだ…これはあくまでも噂で本当のところはわからないが…赤い悪魔とその弟は恋人関係にあつたと言われている…もしかしたら…世界の破壊とこの弟は何か関係があるのだろうか？…うーん…考えれば考えるほどわからないことだらけだよ。赤い悪魔が何者かは未だによくわからないけれど私は彼女を連れて帰らなくてはならないんだ…成功して手柄を立てれば、きつと没落した我が一族を復興できる…なんとしても成功させなくては！

今に見てろよ赤い悪魔、お前がなんと言おうとこのくノイブキ様が成敗してくれるっ！…って、一度は言ってみたいけれど…そんなことしたら一撃で秒殺されるね…。瞬殺されないことを前提に交渉するしかなさそうだけど…肝心な本人がなあ…ロセッタ…いつたい何処で何をしているのだろうか…？

はあ…世の中ってやっぱり上手くはいかない…だからこそ頑張つて生きなくちゃいけないのかも知れない…。あと一時間ちよつとで夜が明ける…けれども…私達みんなが明日の朝日を見れるとは限らない…。こんな世の中だもの…村一つ、国一つ滅んだって不思議じゃないん

だ。…目の前に広がっている摩天楼の光の海も…もしかしたら明日にはないのかも知れない…。

《鎮魂歌と…》
レクイエム

バルコニーから見えるシランドの街の光…夜空に輝く星々の瞬き…いつもと変わらない真夜中の一時だ…。私がこの世に生を受けてから数ヶ月が経とうとしている…未だに変わったことは何も無い…。私は果たして何のために新世界ニューに存在しているのだろうか？生まれしてきた理由はわかつている…この世界を征服するための兵器ツールの一つとして生まれてきたに過ぎない…。でも…世界を征服し終わったら…私は何を糧に生きればいいのか？それを考えると夜も眠れない…。姉さんも今の私と同じ気持ちに違いない。きっと姉さんも自らの生きる理由を求めて、この世界の何処かをさまよっているんだ。…私にはわかる…コロツサルは千年前の復讐が目的だと言ってたけど…それは違う。姉さんにとって過去はそんなに重要なことではないんだ…ただ彼女は未来が欲しいだけなんだ…。だからこそ自らの未来の妨げとなるコロツサルを殺そうとしている…そんな気がしてならない。…私はまだ姉さんに会ったことはない。しかし、私の中には姉さんと同じ血が通っている…だから彼女の本質エッセンスはよくわかる。

…だが…姉さんの存在がある限り私は私自身の存在を誇示することはできないんだ…。何故ならば、姿形が違っていても…私と姉さんは全く同じ遺伝子を持つ複製クローン…認識的には同一人物となる。…つまり私自身は個人であって個人でないことになってしまふ。そんなのはイヤだ…生きる意味もわからないまま、個人すらも否定されるなんて…。その問題を解決する方法はただ一つ…もう一人の自分であ

る姉さんを永遠に葬り去ること…これしかないんだ。姉さんさえ消えていなくなれば…私は自らの存在を自ら初めて認めることができるんだ…。それに…いつまでも他人の道具のように生きるのも御免だね。どうせ役目が終わったら私は殺されるんだ…そう、かつてコロツサルが姉さんにしたように…！だったら…先にこちらから仕掛けてやればいい…奴らに教えてやるんだ、「私達は道具じゃない」…ってね。

…しかし…それにはまだ力が足りない…もう少し時が必要だ。だからもうしばらく奴コロツサルに使われてやるよ…そうやって少しずつ魔力を増幅させてやればいいからね…。それに…姉さんを殺すのも最後にしなくちゃね…彼女は強力な切札だから…。

…人間も…そして魔物もみんなバカだよ…だってさ…自らが創造したものに滅ぼされる運命にあるんだから……こんなに面白いことは他にはない……ふふふ…あはは、あはははははははははっ…！！

…時は限りなく近い…！永遠に後悔するがよい…我をこの世に誕生させたことを…そして…自らが招いた破滅の運命を…！

第三十一章 番外編 When…（後書き）

《??????》

…暗いなあ…狭いなあ…退屈だなあ…憂鬱だよ。

ココに閉じ込められてからもうどのくらい経つのだろうか？千年？二千年？…いや、一万年はゆうに超えているかも知れない。くっそー…なんでこの私がこんなめに会わなくちゃいけないのよ！今思っても腹立たしい！…いたい私は今…何処の世界にいるのだろうか？まあそんなことはどうでもいいや。誰でもいいからココから出して欲しいよ。

おーい！誰かいないのー！？

…やっぱり誰もいないみたい。

…暗いなあ…狭いなあ…退屈だなあ…憂鬱だよ。

…はあー…あと一万年はこのままなのかなあ…？

第三十二章 愛するが故に（前書き）

今回はちよっぴり甘くて切なくてエッチ（？）な恋の物語です。ア
クアとテイテイスのやり取りが中心ですが、物語の鍵となる会話も
多々出てきますのでお見逃しのないように！

それでは、ノスタルジア第三十二章をどうぞお楽しみくださいませ。

第三十二章 愛するが故に

「…本当にここであつてるのかロゼ？」

緑の髪の少女がバギーの助手席の赤い髪の少女にそう聞いた。

「間違いないよノアちゃん。…確かにここからアクアちゃんの気配と、わずかだけどティーちゃんの匂いがするよ」

赤い髪の少女がそう答えた。

「…ロゼツタがそう言うんじゃないよね…まさかココにたどり着くとは…夢にも思わなかつたけど…」

後部座席にいた白髪の少女が目の前の城壁を見上げながら言った。

三人を乗せたバギーは、マンファリの一番外側の城壁の前にたどり着いていた。…そう、ロゼツタの感覚を頼りに彼女らの足取りを追跡した結果、三人は再びマンファリへとたどり着いたのだ。

「マンファリか…この街の何処かにティティスが…！」

エレノアが固く拳を握り締めながらそう呟いた。

「…焦る気持ちはわかるけど…落ち着いて行動してねエレノア…きつと彼は見つかるから…」

「そうそう！ティーちゃんはそんなにヤワな男の子じゃないよノアちゃん！居場所が見つかったんだからティーちゃんを奪還するのは時間の問題だよ」

ロゼツタとミーシャの二人は、そう言ってエレノアを励ました。

「ああ…そうだな。とにかく街マンファリに入ろう。…話はそれからだ」

三人はマンファリの街へと入って行きました…まさかこれから大変な試練が待ち受けているとも知らずに…。

《捕われのティティス》

ここはマンファリの中央に位置する要塞と王のいる城が隣接して立

ち並ぶマンフアリ中心街：要塞の一室には一人の男が幽閉されていた。

「ふう…まだ午前中だったのに…表はずいぶんと騒がしいな」

白髪に金色の瞳の少年が、鉄格子のついた部屋の窓から遙か下の広場を眺めながらそう呟いた。彼のいる部屋のある建物の下の広場には、大勢の兵士や武器、戦車がいくつもあった。…どうやらかなり嚴重な警備体制のようだ。

「ここに閉じ込められてから3日目か…気がついたらここにいたけど…どうやら帝国軍の施設の中のような」

ティティスはおもむろに部屋の隅にあった冷蔵庫を開けると、中にあったよく冷えたコーラを取り出した。

「それにしても…この待遇はなんなんだ？この部屋…どう考えたって捕虜の入る部屋じゃねえよな…」

ティティスはコーラを飲みながら改めて部屋を見回す…。部屋は窓と扉に鉄格子があることを除けば一流ホテルのスイートルームとなんら変わりなかった。冷蔵庫には食料や水はもちろん、アイスやビールまで入っていた。トイレにバスルーム、テレビやラジオ、ご丁寧にミニバーまであった。おかげで彼はこの数日間、生活には何も不自由しなかった。…しかし、頑丈な扉には鍵がかけられ中からは開けられなかった。窓にも鉄格子が…そもそも地上数十mの高さにある部屋から脱出することは不可能だった。そこで、彼は仕方なくこの部屋で生活する他なかったのだ。

…ガチャツ…ギイ…誰かが部屋の扉を開けた。ティティスが扉の方に目をやると、見覚えのある水色の髪と瞳の少女が立っていた…。

「おはようティティス。昨日はよく眠れた？」

彼女は笑顔でそうティティスに言った。

「…ああ、おかげさまでぐっすりとな」

ティティスは特に驚くこともなく、アクアに優しくそう返事を返し

た。

「よかったあ！でも何かゴメンね、3日間もほったらかしにしちゃって…」

アクアが心底すまなそうにティティスに言った。

「別に構わないさ。むしろ俺が例を言わなくちゃ、こんな立派な牢屋を用意してくれたんだからな」

ティティスが苦笑いしながらそう言った。

「うふふ、ずいぶんと上機嫌だねティティス。私が言うのもなんだけど…この状況下じゃ普通もつと緊張しない？」

「まあ、確かにそうかも知れないけど俺の場合育った環境が環境だったからな、大抵のことには動じないんだよ」

「ふうん、意外とそんなものなんだ」

「ハハハ、それにな…待ってりや彼女達がいずれ助けに来てくれるから！のんびりそれを待ってりやいいだけだからよ」

「あら…随分と彼女達のことを信用しているみたいだね？」

「そりゃあな、一応仲間だからな。…あ、でもなあ…エレノア怒ってるかもだし…もしかしたら…！い、いやだっ！このまま置き去りにされちまうなんてっ！？」

「きゃはは、大丈夫だよティティス！見捨てられても私が可愛がつてあげるから！」

アクアがバシバシとティティスの肩を叩きながら笑ってそう言った。

「…まあ冗談はそこまでにしといてだ、これから俺をどうするつもりなんだよアクア？」

ティティスがさっきとは異なる、冷静な口調でそうアクアに聞いた。

「え？うーんとね…それは…」

「…アクア、お前まさか俺を誘拐したのは無計画の内だって言うんじゃないだろうな？」

「ごめん、そのまさかだよ。アハハ…」

「あのなあ…俺が言うのもなんだが、もうちょっと計画的に行動し

るよ。…あくまで俺らは敵同士なんだからよ、少しは自覚しようぜ？」

「確かにそうかもね。…だけど、女の子ってのはそれ以上に直感で動く生き物なんだよ！」

「はあ…まあ、言われてみれば確かにそんな気も…エレノアも口ゼツタも思いつきり行動派だもんな。ミーシャは…あれは不思議ぢやんだからよくわからないや」

「…だけどね…こうやって彼方テイティスと二人きりになったら…そしたらやるうって決めたことがあるの私…」

「ん？なんだよ、そのやりたいことってのは？」

テイティスは不思議そうにアクアに聞いた。

「…それはね…」

…アクアはそう言う…おもむろにシャツのボタンを外し始めた…

「！！！？？ア、アクア！？？」

驚くテイティスをよそに彼女は彼の目の前でシャツを脱ぎ捨て…ミニスカートを下ろした…

「…ずっと前からこうしたいと思ってた…そう…初ヴァージンは彼方に捧げようって…」

水色の下着姿のアクアがそう静かに言った。

「あ…いや…初めてって…そんな急な…ちよいまち…」

テイティスが戸惑っていたその時…アクアがテイティスに正面からよりかかり…そして彼を自身もろとも床に押し倒した…

「わっ！？」

テイティスは床に押し倒され、アクアに馬乗りにされるような体制になった。

「…ずっとこの瞬間を夢見てきた…夜が来る度に…私は彼方を想いながら自分の身体カラダを慰めたよ…でもそれも今日で終わるんだ…。もう人間とか魔物とか…敵とか味方とか…そんなのどうでもいい…ただ…私は彼方を愛して止まないから…ただそれだけだから…！」

…アクアはそう言う…唇をテイティスの顔へと近づけた…二人の距

離はどんどん縮まっていく…！

「わっ…ちよっ…え…」

もうここまで来てしまっただけは、ティティスに残された選択肢は一つしかなかった。…二人の唇はさらに近づき…そしてあと数mmで接吻…となるその時だった、

…ピリリリリリ！…脱ぎ捨てられたアクアのミニスカートのポケットから携帯電話の着信音が鳴り響いた…。

「…もう！せつかくいいところだったのに…」

仕方なくアクアはティティスから離れ、脱ぎ捨てたスカートから携帯電話を取り出した。

「た、助かった…のかな俺は？」

この時、ティティスが胸をなでおろしたのは言うまでもないが…。

「はい、もしもし…あつ…マルピーギ様！…え？今すぐですか？…

はい…ええ…わかりました。すぐにそちらに向かいます」

…ピッ！パチン。…アクアは電話を終えると、折りたたみ式の携帯電話をパチンと閉じた。

「…てなわけで、私は少し用事ができたから…あーあ、何もこんなタイミングで呼ばなくても…最悪…」

アクアが不機嫌そうに服を着ながら言った。

「ハハハ…そいつはドンマイだな。…お前の上司か？」

「そっだよ？マルピーギ様！…この国の大臣だよ」

「！？帝国の大臣だって！？…まさか…お前の上司ってことは…！」

「もちろん魔物よ」

「くそっ！なんてこった！帝国側にも魔物が潜んでいるなんて…！」

「そんなに驚くことじゃないよティティス？人型の魔物は結構あちこちに潜んでいるのよ？…もちろん、何処にどの程度いるかは私もわからないけれどね」

驚愕するティティスに対して、アクアはシャツのボタンを閉めなが

らさも当たり前のようにそう言った。

「うう…マジかよ…」

「アハハ！ま、人間って結構ニブチンだから…気づかないのも無理ないよね。…じゃ、また後で来るからね！ちゃんと覚悟しておきなさいよ〜！」

アクアはそう意味深な言葉を残すと、部屋を後にした。…もちろん、部屋の扉の施錠も忘れずに。

「覚悟しとけて言われてもなあ…まいったなこりゃあ…」
ティティスはただこの部屋でじっと誰かの来訪を待つ他なかった…。

《大臣の部屋　アクアの誤算》

…ココは軍の施設からそう遠くないところにある王の城の一室…そんな部屋の前にアクアの姿はあった…。

「わざわざ携帯電話まで使って呼び出すなんて…いったい何の用事だろう？」

そう少々疑問に思いながらも、アクアは扉をノックした。

…コンコン

「マルピーギ様、アクアです」

「…アクアか…わかった、入るがよい」

「はい…失礼します」

アクアが部屋の中に入ると、すぐ目の前の机に少々太った中年の男性がどつしりと腰を据えて待っていた。

「…御呼びでしょうかマルピーギ様？」

アクアが軽く会釈をしながら男性にそう聞いた。

「もちろん用事があるから呼んだのだアクアよ。お主、例の男…テイイスを捕えたそうだな？」

「えっ…！」

アクアは正直焦った。それもそのはず、テイイスを捕えたことは秘密の内に彼女が勝手に行ったことだからだ。

「何故このわしに報告しなかったアクアよ？」

「そ、それは…」

「…もちろんそんなことできなかった。報告すれば彼がどうなるか…アクアもちゃんと行く末を知っていた。それでも彼女が彼を連れて来たのは…彼をエレノアに取られるのが何よりも苦痛であったからだ。…しかし、愛するが故のこの行動がまさかテイイスを破滅させることになるとは…夢にも思わなかった。」

「…まあよいわ。既にコロツサル様には連絡してある。数日後には共和国側に引き渡されるだろう。…それまでの間の奴の管理はお前に一任する。よいな？あえて言うが…余計な気は起こすなよアクア？」

「…わかつておりますマルピーギ様」

アクアはそう静かにうなずく他なかった。

「クク…人間め…魔物に逆らうとどうなるか…身をもって味わがよいわ…フフフ…フハハハ…！」

《合流 イブキとロゼッタの取引》

「…どうだロゼ？…やっぱりダメか？」

「うん…さすがにこれだけ人がたくさんいると…なかなか特定の人物の気配だけを感じとるのは難しいよ」

「そうか…」

それを聞いたエレノアは少し落ち込んだ様子だった。

「…そんなに落ち込まないでよエレノア…この街に彼マンフアザイテイスがいることはわかってるんだからさ…ね？」

そうミーシャが優しくエレノアを慰めた。

「ああ…そうだな」

エレノアはそう答えた。三人がマンフアリに入ってから間もなく半日が経とうとしていた。広大な敷地と都会の人混みに阻まれ、ティイスの搜索は難航していた。

「…ん？この匂いは…？」

街中を歩いていると、突然ロゼッタの鼻が何かの匂いに反応を示した。

「どうしたロゼ？…何か美味そうな匂いでも嗅ぎつけたのかよ？」

「おからの匂い…」

「…はあ？」

「おからの匂いがするんだよノアちゃん！」

「おからの匂いって…私にはわからないよ」

ロゼッタの意味不明な発言にエレノアは少々困惑気味に言った。

「…でもこんな都会のど真ん中にお豆腐屋さんなんてあったっけ…？」

ミーシャが冷静なツツコミを入れた。

「でもこの匂い…前にどこかで嗅いだよーな…あっ！」

何を思い出したのか、ロゼッタは急に匂いの方向に向かって走り出した！

「わっ！？ちよつと待てよロゼ！」

「…急に走らないでよも……だるっ…」

慌てて二人がロゼッタの後を追いかけると…とある露店でピタリと彼女は止まった。

「クンクン…近い…この辺りにいるはず！」

ロゼッタが辺りをキョロキョロ見渡すと…すぐ近くの公園のベンチ

に見覚えのある人影が…
「あれ？あの二人は…」

「うーん、やっぱりおからは美味しいなあ」

公園のベンチで、黒髪の少女がお弁当のおからに舌鼓を打っていた。
「…まったく、赤い悪魔が行方知らずだつてのに…食い意地だけは一人前だなイブキ」

ベンチの下に座っていた白い狼が呆れ顔でそう言った。

「なによ〜シロ！見つからないものは見つからないんだからしょうがないでしょうが！ねえ、エリオット？」

「はは…確かにその通りかも知れませぬね」
メガネの少年はそう苦笑いしながら答えた。

「…何が見つからないのイブちゃん？」

「は？だから赤い悪魔に決まってるでしょ…！…てえっ！？わっ！」
イブキが驚いて後ろを振り向くと、そこにはロゼッタがニコニコしながら立っていた。

「えへへ、久しぶり！」

「お、驚かさないですよ…って、あなたがいるってことは…」

「んだよ、急に走り出したかと思ったら…いつしかのスリ野郎じゃねえかよ」

「…と、何故かエリオットも…」

ロゼッタに追いついたエレノアとミーシャが、イブキ達の姿を見てそれぞれにそう言った。

「先輩にロゼッタさんまで…何故ここが？」

エリオットが不思議そうに言うと、

「ああ！それはねえ、おからの匂いだよ。前にイブちゃんに会った時にもおからの匂いがしたから…もしかしたらと思っただけ」

…と、ロゼッタはそう答えた。

「そっか…私はいつもおからを食べてるから、きつと体にもその匂いが染み付いているのね！」

「何を言ってるんだか…呆れて物も言えんわ」

シロがため息混じりにそう言った。

「でもそのおかげでロゼツタさん達を探す手間は省けたんですけどね」

エリオットが言った。

「そうそう！…あれ？あのちょっとだけカッコイイ白髪の男はどうしたの？見当たらないみたいなんだけど」

イブキがティティスのことを聞くと…エレノア達三人は下を向いて黙ってしまった…。

「あ、あれ…？もしかして…聞いちゃまずかった私？」

「あの…ティティスさんに何かあったんですか先輩？」

エリオットがそうミーシャに聞くと…

「…実は…」

ミーシャは静かにここまでの経緯をイブキ達に語り始めた…。自分達が魔物達の陰謀を阻止しようとしていること…ロゼツタがそれに一枚噛んでいること…ティティスが魔物側の刺客に拐われたこと…そして彼がこの街にいる可能性が高いこと…把握している状況は全て話した。

「ふうーん…なるほどねえ…どうやらあなた達は相当複雑な状況下に置かれているみたいね」

イブキが言った。

「…うかつだった…まさかアクアがあんな行動に出るなんて全くの予想外だったよ」

エレノアがそう言った。

「…それで？取り返しに来たが場所がわからないと？」

「そうなんだよイブちゃん…この街のどこかにティーちゃんがいるのは確かなんだけど…」

「…街中探しても見つからないんだよね…」

イブキの問いにロゼツタとミーシャは揃ってそう答えた。

「街中…ですか。…あそこは探したんですか先輩？」

エリオットがミーシャに聞いた。

「…どこ…？」

「街の中心部…軍の施設や王の城がある街の中枢施設の周りですよ。

…あそこは何かと秘密の多い場所ですから…もしかしたらティティスさんもそこにいるかも知れませんよ？」

エリオットがそう言うと、エレノアが怪訝そうにこう言った。

「で、でもよお、ティティスを拐ったのはアクア…魔物だぜ？なんで魔物がそんな軍の施設なんかにな？」

「その件と関係あるかはわからんが…この国の王は半年程前に急死しているそうだな。聞いた話だと代わりに大臣が国を動かしているらしいが…王の死因は公開されていない」

エレノアに対してシロがそう言った。

「…つまり大臣が黒幕…魔物だと…？」

ミーシャが言うと、

「その可能性は否定できんな」

シロがそう答えた。

「そんな…帝国側にまで魔物の手が…！？」

「これがコロツサルのやり方だよノアちゃん。あいつは根はチキンだからねえ…様々な策略を常に考えてるんだよ」

驚きを隠せないエレノアにロゼツタがそう静かに言った。

「それで？あんた達はこれからどうするわけ？一つ言っとくけれど…あなた達だけであの要塞に行くのは不可能だよ？あそこは最新の

セキユリティシステムで守らてる…いくらあなた達が戦闘の玄人でも…彼女が赤い悪魔であつても…正面から行つたのでは最新の機械

兵には敵わないわよ？」

「…何が言いたいんだよスリ野郎？」

「イブキだよつ！…率直に言っとくよ…あなた達には私達の力が絶対に必要なだよ？」

「なんだと？」

「仲間を確実に救うためにも、侵入及び突入の際にはなるべく最短距離で行くと共に戦闘は最低限に抑えたいはず…そのためには施設の地図とそれなりの知識が必要になってくる。その点、私の職業は隠密でそうゆうのは専門だし、エリオットは勇者協会本部の図書館から施設の地図を手に入れることも可能だからね！」

「四の五の抜きにしないかイブキ？協力してくれるのか…それともしないのか？」

「じらすイブキに短気なエレノアが少しイライラしながら聞いた。

「もちろん協力したげるよ。困った人を見捨てるわけにはいかないもん。…ただし、条件が一つあるよ？」

「条件だと？」

「そう…条件よ。…ロゼツタにジパングに来て欲しいの」

「ロゼをジパングに…？いったい何故？」

「理由は私にはわからないよ。だけど、上司からの命令なの…赤い悪魔を連れて来いってね」

「そ、そんなこと言われても…ロゼは…」

エレノアが困った顔をしてロゼツタを見ると、彼女は一步前に出てイブキにこう話した。

「ノアちゃん達も一緒なら…わたしはジパングに行ってもいいよ」

「ロゼ！でもお前…連れてかれる理由もわからないのに…危険過ぎる…！」

エレノアがそう言うと、ロゼツタはこう笑顔で返した。

「危険なのは百も承知だよノアちゃん。…テイちゃんだけ^{テイちゃん}を救うためにはイブちゃん達の協力がどうしても必要なんだ。大丈夫、万が一ジパングで何かあっても…ノアちゃんやミーちゃんはわたしが守るから…！」

「ロゼ…お前…」

「…どうやら交渉成立みたいだね！ま、これからは仲間同士仲良く

やっけていきましょやー!」

イブキが少し嬉しそうに言った。

「…で、これからどうするんだ?何か名案でも?」

シロがイブキに聞いた。

「まあ、だいたいの作戦の目処は立ってるけれど…それを今から六人で相談するの!」

「何処でだ?」

シロが聞いた。

「もちろん…エリオットの家っ!」

「えっ!?それはちよつと…」

エリオットが渋ると…

「なによ、何か文句あんのエリオット?」

と、イブキが牽制した。

「いえ、何でもないですイブキさん…トホホ…」

エリオットは仕方なくこれを承諾した。

「じゃ、決まりね!立ち話もなんだから詳しいことはエリオットの家でね!」

「なんだかんだで世話になっちゃったな」

エレノアがちよつとすまなそうに言った。

「あ、そーだ!改めて自己紹介するね!私はイブキ、こっちの白いのが相棒のシロね!」

「白いのって言うな白いのって!」

シロがちよつと恥ずかしそうに吠えた。

「僕はエリオットです。え〜と…一応イブキさんに雇われてる勇者です。よ、よろしくお願いします…」

エリオットが少しおどおどしながらエレノア達に自己紹介した。

「私はエレノア、トレジャーハンターだ!」

「わたしはロゼッタ!よろしくねっ!」

「…ミーシャ…以上…」

エレノア達三人はそう一言ずつイブキ達に自己紹介をした。

「うんうん！これで役者は揃ったね！よおーしっ！気合いを入れて
ティーちゃんを救出しに行くぞおっ！！」

ロゼッタが拳を空に高く突き上げながらそう叫んだ。

「…ねえ、えつと…エレノア、一つだけ聞いてもいい？」

「ん？なんだスリ…じゃなかった、イブキ？」

「ロゼッタって…本当に赤い悪魔…なの？」

「さあ…そうなんだろうけど…私だって未だに実感わかないよ」

「ふうん…。で？彼女はいつもあんなにテンション高いワケ？」

「ああ、そうだよ。なあー、ミーシャ？」

「…だよなー…ロゼッタはいつもテンション高いよねー…私はもう
長いこと生きてるけれど…あれだけテンション高い生き物…正直な
ところ見たことないよ…ホント…」

「テンション高いだけならまだいいんだけどなあ…アイツは右に出
る者のいないトラブルメーカーだからなあ…」

エレノアが頭をかきながらそう言った。

「…あのさあ…私ものすごく不安なんだけど…」

「ああ、その通りだよイブキ。…私もミーシャも不安でたまらない
さ」

…エレノアは無邪気にはしゃぐロゼッタの姿を見ながら苦笑いして
そう言うのだった…。

《器の大きな人間》

夕日が地平線に沈み空とマンファリの摩天楼が闇と月と星々の光に
包まれる頃…ティティスは独り、有り余る暇をもてあそんでいた…。

「あーあ…つまらないなあー…アクアの奴、いったい何やってんだ

？」

テレビを見てみても…冷蔵庫の中の食べ物食べてみても…雑誌を
読んでみても…昼寝をしてみても…今のティティスには何をやって
も面白く感じることはなかった。いつもは楽しく騒げる仲間達がい
るのに…独りなってみてその存在の重さを彼は実感していた…何を
やっても満たされない…何をやっても埋まらない心の穴を彼は生ま
れて初めて感じていた。

「…そうか…独りぼっちって…こうゆうのを言うんだろっなきつと
…いや、迎えに来る可能性のある仲間がいるだけ独りぼっちとは違
う…か」

ティティスは窓の外に目をやった。…そしてほとんど沈んでしまっ
た太陽を眺めながらこんな独りごとを呟くのだった。

「…エレノアは自分はずっと独りで旅をしてきたって言ってた…口
ゼツタは千年もの間封印されていた…独りぼっちでな…性格が正
反対と言っても過言ではないあの二人が意気投合するのも…仲間を
想う気持が人一倍強いのも…彼女達が誰よりも孤独の恐ろしさを知
っているからなのかも知れないな…」
それからふと彼は思った…もしかしたら…アクアも同じ気持ちなん
じゃないかって…。

…トントン

「…ティティス？入っても…いいかな？」

扉の向こうからアクアの呼びかける声があった。

「はいはい、どーぞ」

…ガチャツ…ドアを開けて入ってきたアクアの顔を見たティティス
は、すぐに彼女があまり良くないニユースを持ってきたことを察知
した。

「…つかない顔してるぜアクア？何かあったのか？」

「あ…うん…ちょっと…ね…」

「隠してないで話してみるよアクア？…どうせ俺についてのことだろ？」

「…バレた…」

「は？」

「マルピーギ様にバレちゃったんだよ…ティティスのことが…」

「マルピーギって…この国の大臣って奴か？」

「そうだよ。実際は今国を動かしているのはマルピーギ様なんだけどね…そのマルピーギ様が…ティティスを共和国側に引き渡すっただって…」

「…コロッサルにか？」

「うん…」

「それで…俺はどうなると思う？やっぱ殺されるのか？」

「…」

アクアは何も言わずうつ向いてしまった…。

「凶星か？ま、当然と言っちゃあ当然だよな」

「…ごめん…」

「…は？」

「ごめんねティティス…ホントはこんなつもりなんかじゃなかった…別にあなたを危険な目に遭わせるつもりなんてなかったの…私はただ…あなたと一緒にいたかっただけ…なのに…私のワガママのせいでこんな…あなたの命を奪うような結果にしまつて…私は…私はなんて愚かな女なんだろう…私には…あなたを愛する資格なんて…もないよ…」

アクアが今にも泣き出しそうな顔でそうティティスに言った…。

「…バカ野郎…」

「…え？」

すると突然ティティスはアクアの肩に掴みかかり、そして…こうアクアに言った。

「いいかアクア？お前は何も悪くなんかないんだよ…誰かが誰かを

愛するのは当たり前のことだし、そのために行動することだって何にもおかしくなんかないんだ。…お前は自分自身で正しいと思ったことをやったんだ…それでいいじゃないか。生きるとはたいいていそんなもんさ」

「ティティス…」

「だ…だからってお前のことが好きとか…そ、そりやあどちらかと言えは好きだが…お前と肉体関係を持ちたいとかって話とは別だからなっ！」

ティティスが慌ててアクアの肩から手を放し、顔を赤くして照れながらそう言った。

「ありがとうティティス…私、なんだか少しだけ元気と自信をあなたからもらった気がするよ」

アクアがそれは嬉しそうにそう言った。

「…お前にそんな態度取られると…なーんか調子狂うなあー…」
ティティスが照れくさそうに言った。

「ねえ、ティティス…」

「ん？なんだよ？」

するとアクアはティティスの横にびったりと寄り添い…そしてこう言った。

「一晩だけでいいの…たった一晩だけでいいから…一晩だけはずっとこうやってあなたの側にいさせて…」

「…ああ…いいよ…」

…ティティスはそうアクアに答えた。…都会の真ん中で、静かな夜はゆっくりと時を刻んでいました…。

…ここはエリオットが住むアパートの屋上…そこに一人の女性がいた…。彼女の長い黒髪は夜風になびき、赤い瞳は月明かりに照らされて闇の中で血潮の輝きを放っていた…。

「やれやれ…ただでさえ狭い部屋なのに…あんな大人数じゃ落ち着いて眠れやしない」

ロゼリアーヌが少し不機嫌そうに言った。

そう、独り暮らし用のエリオットの部屋で六人が寝泊まりするのは少し無理があった。

なんとかそれぞれの寝場所は確保できたのだが…

「まったく…ミーシャの寝相には困ったものだ…あんな可愛い顔してんのにあの寝相…うう…もろ溝おちに入りやがってえ…：…今晚は寝れそうにないな」

ロゼリアーヌはそう言って大欠伸をするのであった。…白く輝く牙が顔を覗かせる…。

「おやおや…赤い悪魔ともあろう者が欠伸でちゆか？ずいぶんと呑気なんでちゆねえ…」

「…誰だ？」

ロゼリアーヌは特に驚くこともなく、冷静に声の方に視線を向けた。すると、そこには道化師の衣装に身を包んだ小さな女の子が立っていた…口には何故かおしゃぶりをくわえて…。

「なんだこのガキは？」

「ガキじゃないでちゆ！…：…私たちはジプシー！サキュバス様の使い魔でちゆよっ！」

ジプシーが腕をブンブン振り回しながらそう言った。

「！」

その言葉にロゼリアーヌは反応を示した。

「まずは復活おめでとう…：とのサキュバス様からの伝言でちゆ」

「…それで？まさかそんな祝辞のためだけに奴が使いをよこすわけ

はあるまい？」

ロゼリアー又が薄笑いを浮かべながらそうジプシーに言った。

「…はいでちゆ。サキユバス様はぜひもう一度あなたに会いたいとおっちやってまちゆ」

「やっぱりな…奴は既に魔界ブルートからこつちの世界に來ているのだろう？」

「…その通りでちゆ」

「ふん…最近どうもムカムカすると思つたら…奴の発するムカつく波動のせいだったのか。帰つてサキユバスにこつち伝える。…話がしたいなら直接わたしに会いに來るがよいこのカス野郎…とな」

「う…は、はい…わかりまちたでちゆ…」

ロゼリアー又のあまりの迫力に、ジプシーは慌てて夜空の向こうに飛んでいきました…。

「…サキユバスめ…ついに千年越しの計画を実行に移す気が…ちつ

…このクソ忙しい状況ときに…！」

ロゼリアー又は自分の手の甲に牙を突き立てながら呟いた…彼女の手の甲から真つ赤な血が滴り落ちる…。

「…もうお遊びなんて言つてられないな…これはもう…魔界ブルートとの全面戦争になるのも時間の問題だな…。どうやらこの戦い…コロツサルを倒しても終わらないかも知れん…」

ロゼリアー又は静かに空を見上げた。…そして、血で滲んだ手のひらと天空の月を重ね合わせて、静かにこつち呟いたのだった。

「だがたとえどんな状況になつても…わたしは戦い続ける…それが我が意思に反することでも…故にそれが赤い悪魔である我が宿命なのだから…」

第三十二章 愛するが故に（後書き）

さてさて、物語の終盤に何やら物語の長期化を示唆するような会話もありましたが…？次回からはいよいよティティスの救出作戦が実行されます！次章も楽しみに待っていていただければ幸いです。ごさいます。

…それでは、またの機会にお会いしましょう。

第三十三章 障壁（前書き）

人間とは何の為に生きるのでしょうか？その答えは人それぞれだと思いません。楽しみのため、愛のため、自分のため、お金のため…人の数だけ答えがあるでしょう。…しかし、作者は思うのです。人生が持つその意味を人間の創り出した学問や理屈で説明すること自体が不可能ではないかと。…そもそも「生物」とは一体何なのでしょう？科学的に見ればただの有機物の塊に過ぎないのにも関わらず、生物には特別な位置付けがなされています。それは生物が他の有機物とは全く違うからです。そして、生物がこの世界に生まれてきたこと自体が奇跡であり偶然の産物に過ぎないのです。…こんな根本的なことを考えると、今の人類は果たして幸福なのか不幸なのか時々わからなくなります。もしかしたら、幸せや不幸とゆう概念そのものが間違いなのかも知れませんが…。

第三十三章 障壁

「いい？マンファリの城壁は二重になって、街は一番外側の城壁のすぐ内側にあるけど…軍や国の重要な施設はさらに内側の城壁の中にあるの。…問題はここをどうやって突破するかね。中に入ってさえしまえばたいしたことないのかも知れないけど…」

イブキがマンファリの地図を指差しながらそう言った。

昼下がりのエリオットの部屋で、五人の少年少女…と一匹の狼がマンファリの地図を睨みつけながらティティスを奪還するための作戦会議を開いていた…。

「中の守りの方はどうなってるんだ？」

エレノアが質問した。

「昼間はもちろん兵士がうるついで近づけないけど…夜間は機械中心のセキュリティシステムに切り替わるの」

「機械中心って…機械が人間の代わりをするのか！？」

「ま、そうゆうことになるわね」

イブキがそう答えた。

「…そんなに驚くことはないよエレノア…時代は変わった…今じゃ警備するのも戦争するのも人間じゃなくて機械ガーディアンの役割だよ…おかげで犠牲は少なくなっただけど…きっと機械の軍隊同士が衝突したら大変な戦争になっちゃうだろうね…」

ミーシャがそう言った。

「でも、わたし達にとってはそっちの方が都合だよ！何せ相手は機械と言えど所詮は鉄クズ。命あるものと違っていくら壊しても心配はないからね！…もつとも、わたしとしては鮮血を拝めないのはちよつと残念なんだけれどねえ…！」

…ちよつぱり不気味な笑みを浮かべながらロゼッタはそう言った。

「それじゃあ、突入は夜間で決定ですね」

エリオットが全員に確認するように言った。

「ああ、わかったよ。…で、これからどうするんだ？まだ真つ昏間だぜ？」

エレノアが言った。

「別に夜まで自由にしていいのでは？…これと言った作戦や準備があるわけでもあるまいしな」

床に伏せていたシロがそう言った。

「ん、それもそっか！じゃ、私はちよっくら街をブラブラしてくるけれど…お前らどうする？」

「あ、わたしもノアちゃんと一緒に行くー！」

「…私はここにいるよ…お昼寝したいから…」

「僕もちよつと遠慮しますね」

「私もちよつと忍として昏間はあんまり…」

「…俺は寝る」

「わかったよ。多分すぐに帰ってくるから心配なく。…行こうか口ゼ？」

「はあーい！」

こうして、ロゼッタとエレノアの二人はマンファリの街へと繰り出して行きました…。

「あの…先輩？」

お喋りな二人が居なくなつて少しだけ静かになつたところで、エリオットがミーシャに何か聞きたそうに声をかけた。

「…何…？」

「あの…今更こんなこと聞いたら怒られるかも知れないんですけど…」

「…ちゃんとハッキリ言いなさいよエリオット…別に怒つたりなんかしないから…」

「はい…正直、この戦い…僕達に勝目はあるんでしょうか…？」

「何言つてんの！そんなの勝てるに決まってるでしょ！？」

弱気な発言をしたエリオットにイブキが言った。

「はん…確かにエリオットの言う通りだな。現実問題こっちは六人、向こうは軍隊丸々一個大隊…こっちは赤い悪魔がいるとは言え…果たして勝てるかな？」

「う…それは…。…そこんところはどくなのよミーシャ？」

イブキがミーシャにそう聞いた。

「…ま、正直なところ…シロの言う通り勝てる自信はないよ…」

ミーシャがそうキツパリと言った。

「えええ！？そんな無責任なっ！？」

イブキが驚きのあまり飛び上がって言った。

「そ、そんな…いくら仲間を救うためとは言え無謀過ぎますよ先輩
！」

「お前らは正気か！？」

エリオットとシロも口を揃えてそう言った。

「…ふふ…ふふふ…あはははは…」

すると何故かミーシャは珍しく急に笑い出した。

「な、何がそんなにおかしいのよ…？」

ミーシャの突然の笑いにイブキがちょっと引き気味に言った。

「…あはは…ごめんごめん…自分でもどうしてこんな無謀なことをしようとしているのかわからなくて…おかしくてついつい笑っちゃったよ…」

「だったらなんでさっき反対しなかったんだよ？…お前の言うことは矛盾だらけだぞ？」

シロが怪訝そうにミーシャにそう聞いた。

「…確かに私の言うことは矛盾だらけだね…だけど…もし…エレノアとロゼッタがいなかったら私は…いや…私じゃなくてもこんな無謀なことはしないだろうね…でもね…なんでだかはわからないけれど…あの二人と一緒にいると…何でもできちゃうような気がするんだ…だってあの二人ときたら…どんな危険な状況下にあっても平気で冗談言って笑ってたもん…それにどんなに強い敵が相手でも…絶対に弱音は吐かなかった…エレノアとロゼッタ彼女達はどんな時も絶対に余裕を忘れ

なかった…今だって…明日を生きて迎えられるかもわからないのに…きつと今頃は街で買い物したりアイスクリーム食べたりしてるに決まってるんだから…だから今度もきつと上手くいく…そんな気がするんだ…」

ミーシャは静かに、そしてわずかに微笑みを浮かべながらそうイブキ達に言ったのだった。

「そっか…なんとなくだけど…あんたみたいな冷静でぶっきらぼうなヤツがあの人と一緒にいる理由わけがわかったような気がするよ」「イブキはそう苦笑いしながらうなずくのであった…」。

《…根回し…》

ここはマンフアリからそう遠くないある森の中…今は誰も住んでいない豪邸の敷地に不気味な人影があった…。

「…それで？ロゼリアーヌには会えたのかしらジプシー？」

豪邸の荒れ果てた庭園の真ん中にあるテーブルで、一人の女性がティーカップの中に注がれた紅茶の香りを楽しみながらそう言った。

「そ、それが…赤い悪魔には会えたことは会えたのでちゅが…」

ジプシーがかなり困ったように答えた。

「どうやらその様子だと私の言う事は聞いてもらえなかったみたいだわね」

「も、申し訳ありまちなんサキユバス様…赤い悪魔はこちら側から会いに来いと…」

「ふふ…まあいいわ。あのプライドの高い女のことだもの、こうなることも想定の内…何ら問題ない」

サキユバスが余裕とも取れるようなそんな発言をした。

「はあ…それで…これからどうするんでちゆかサキユバス様？」

「まあそう焦らないでよジプシー…あなたも紅茶を一杯どうかしら？…なかなかの上物よ？」

そう言つて、サキユバスはカップに紅茶を注ぐとジプシーに奨めた。

「は、はあ…それでは…ありがたくいただきますまちゆ…」

ジプシーは少々戸惑いながらも、差し出された紅茶に口をつけた。

「それより…マリアとドラードの姿がないんでちゆが…」

ジプシーが紅茶をすすりながらサキユバスにそう尋ねた。

「ああ…あの二人にはあなた同様にお使いに行つてもらつたわ」

「お使い…？…いつたい誰のところに行かせたんでちゆか？」

「ふふ…それはね…私の計画に必要な人物達よ」

サキユバスがそう不気味な笑みを浮かべながら言つた。

「…！」

そんなサキユバスの不気味な笑みに、ジプシーは息を飲んだ…！

「…まあ、とりあえず赤い悪魔にはそのうち私が直接出向くわ。いくら彼女ロゼリアヌと言えどこの私を容易く殺すバラことはできないだろうからね

…。それに…まだまだ調べておかなくちゃならないことが山のようにあるし…何より『闇の香炉』が何処にあるかが一番の気がかりだ…。ま、焦つても仕方ない…見てなさいコロッサル…『ガイア』を牛耳るのはあなたではなくこの私だとゆうことを…近々教えてあげるんだから…！ウフフ…アハハ…フハハハハハハハ！！」

…暗い森の中…不気味な笑い声がまるで悪魔の合唱のようにこだまするのであつた…。

《秘密の勧誘》

「もう間もなくですねアクア」

「何がよシヤクマ？」

「日暮がですよアクア…連中は性急ですから…おそらく今晚にでも攻めてくるでしょうな」

「…それで？要は赤い悪魔は自分の獲物だから手を出すなど言いたいわけ？」

「もちろんそのつもりですよアクア…」

ここはマンファリの城のとある部屋…シャクマとアクアがテーブルを挟んで何やら会話をしていた…。

「ま、ぶつちやけ赤い悪魔にはあんまり興味ないし…好きにしてよね」

アクアがそうシャクマに言った。

「ふふ…感謝しますよアクア…それでは私は忙しいのでこれで」

シャクマはそう言い残すと、部屋を後にした。

「やれやれ、シャクマの執念には困ったものだよ…それにサイコとドリーマーもカードキーを探しに行ったきりだし…私がつかりしなくては…」

アクアがため息混じりにそう呟いた。

「…おやおや…珍しくため息なんかついちゃって…いったいどうしたのかしらあ？」

「！？」

アクアが驚いて窓の方を向くと、窓枠に綺麗な服を着た金髪で青い目をした美しい少女がちょこんと座っていた…。

「…マリア…！」

「あら、覚えていてくれたのね？嬉しいわ」

「サキユバス様の手下のあなたがこの私にいったい何の用？」

アクアはマリアを睨みつけながら聞いた。

「職場の同僚に向かってそんな聞き方はないんじゃないやなくてアクア？」

「あんたみたいな性悪女の同僚になった覚えはないんだけどマリア？」

「…まあいいわ。今日はちょっとアクアに聞きたいことがあった来

たの」

「聞きたいこと…?」

「そ!…ねえアクア、あなたサキュバス様の下で働く気はない?」

「…!?!?」

「クスクス…そんなに驚かないでよアクア…これはサキュバス様直々のお考えよ?受け入れて損はない」

「つまり私にコロツサル様を裏切れと?」

「うふふ…別にそうゆうわけじゃないよ」

「何?」

するとマリアは不適な笑みを浮かべてアクアにこう言ったのだ。

「言い方を変えましょうかアクア?どうせコロツサル様は赤い悪魔には勝てない…もちろんあなた達もね。冷静に考えてもみなさいよ、世界を滅ぼした化物にとつては魔物一匹消すことなんて簡単なこと…そう、例えそれが魔界の四天王の一人であつてもね。だとすればあなたの未来はこのままじゃあ確実になくなるよねえ?…そんなのもちろん嫌でしょうアクア?」

「…だからサキュバス様に味方しろと?」

「そゆこと!サキュバス様はコロツサル様よりも遥かに強いお方ですわ…赤い悪魔を倒すことも夢ではありませんことよ?もちろん、あなたの将来も保証してくれますわ。…さあ、どうするのアクア?あなたの答えを聞きましょうか…!」

アクアはしばらく考え込んでいたが、やがてこうマリアに答えた。

「確かにあなたの言う通りかも知れないけど、私は自身の主人を裏切るわけにはいかない…少なくともコロツサル様が生きている限りは私はコロツサル様に尽くすつもりだよ」

「…そう…それは残念だわ…ま、強制じゃあないしね。仕方ないわね。…ああ、そうそう…もしあなたが断つたら言うようにサキュバス様から伝言を預かつてるわ」

「…伝言?」

「…いずれお前は必ずや私の元サキュバスにやって来るだろう…だってさ!伝

言、確かに伝えたわよアクア。…じゃあねアクア、また会えるのを楽しみにしているわ…！」

マリアはそうアクアに言い残すと、スウーっと静かに消えていきました…。

「行っちゃった…マリアは…いや、サキュバス様はいつたい…何を
お考えになつておられるのだろうか…？」

…アクアはなんだかとても嫌な気持ちになつていた…。そう…マリアの言つていたことが現実になるんじゃないかと…。

《突入の時は来たり》

「…準備はいいか？」

エレノアが言った。

「うん！もうばっちりだよ！」

ロゼツタがそう答えた。

…時刻は午前一時…エレノア達一行はマンフアリ中心部にそびえる
軍事施設の入口に来ていた。城壁に囲まれた施設の唯一の出入口は
夜間とゆうこともあり、厚い防護扉に閉ざされていた。

「あの魔法使い…ちゃんと上手くやつてくれるのかしら？」

イブキが少し心配そうにそう言った。

「大丈夫ですよ。…先輩はああ見えてやる時はやりますから」

エリオットがそうイブキに言つたのだった。

…作戦はこうだ。まず、ミーシャが飛行能力のあるワニガワとヤキ
トリを使って城壁の上側から中に侵入する。前庭の敵はミーシャと
召喚獣に任せて内側から出入口の扉を開けてもらい侵入するとゆう
寸法だ。

「…魔法使いが中に入ってから10分…そろそろ来る頃だと思っただが」

シロが言った。そうやって五人が待っていると、やがて静かに重たい防護扉が開いた…！

「…開いた！行くぞ！」

エレノアの合図と共に五人は扉の向こうに駆け込んだ！敷地の中は広々としていた。いくつも建物が立ち並び、道路がまるで網の目のように走っていた。…いささか、小さな大都会と言ったところだろうか？建物の多くはどうかやら倉庫や武器庫のようであったが、それに混じって何棟か大きな屋敷のような建物もあった。

「…や、遅かったね…」

防護扉を入ってすぐのところまでミーシャとヤキトリが5人を待っていた。

「あれ、あのバカでかいトカゲは？」

イブキがヤキトリにそう尋ねると、

「ああ、ワニガワならあそこに…ほら」

そう言っただけでヤキトリは左を向いた。ヤキトリの視線の先を見ると、ワニガワが一台の装甲車にかじりついてじゃれあっていた。そして、その近くで数人の兵士が気を失って倒れていた。

「…ま、あれだけ大きな魔物を見れば気も失うよねそりゃ…」

ミーシャが苦笑いしながら言った。

「…で、これからどうするんだよ？」

シロが聞いた。

「そうね…とりあえず警備のようすはどうなのミーシャ？」

イブキがそうミーシャに尋ねた。

「…とりあえず何人かは気絶させたけど…ガーディアンがいつどこから出てくるのかまでは…」

「ガーディアンはやはり油断できませんね。それより…この広大な敷地内をどうやって探すんですか？」

エリオットが言った。

「仕方ない、三つにチームを分けよう。イブキ達は向こうの大きな建物、ミーシャと召喚獣達はそこから辺の倉庫を片っ端から探してくれ。…私とロゼはあそこを探す！」

エレノアはそう言っただ敷地の奥にそびえる背の高い建物を指差した。「わかったわ。…あの建物は王の城、つまり帝国の中心だから警備も相当なはず…くれぐれも気をつけてねエレノア」

「ああ、わかったよイブキ」

エレノアがうなずいた。

「あんまりのんびり話てる場合じゃないよ。…無理に防護扉開けたんだから、そろそろ敵も来る頃だよ？」

ロゼツタがそう言った。…どうやら彼女は既に何者かの気配を感じているようだ。

「そうだなロゼ。それじゃみんな、後で街で落合おう。健闘を祈る…解散っ！」

エレノアの掛け声を合図に、三つのグループはそれぞれの任務につくのであった。…今ここに戦いの火蓋は切って落とされた…！

《ガーディアン強襲》

各グループに分かれた後イブキとシロ、そしてエリオットの三人は大きくて頑丈そうな建物の前に来ていた。

「この建物は…？」

「どうやら軍の司令塔が何かのようですねイブキさん。…既に僕らが侵入したことに気がついたのでしょうか、なんだか慌ただしいみたいです」

三人は気付かれないように静かに建物の裏側に回り込んだ。小さな

窓からそつと中を覗いて見ると、多くの兵士が慌ただしく動いていた。部屋にはいくつかの複雑そうな機械が並び、兵士がスイッチをいじったり通信機で連絡を取り合っているようであった。

「…まずいな、気付かれるのが早すぎる！」

シロが焦りながらそう言った。

「そんなのわかってるわよシロ！とにかく、ここには彼はテイテイスいないみたいだから…早いとこ離れましょう！」

「わ、わかりました！」

三人が慌てて建物から離れようとした…その時であった、

…ウウウー！！

辺りにけたたましいサイレンが鳴り響いた！！同時に、敷地のあちこちをサーチライトの光が照らす！

「！！！！？」

イブキはびっくりして飛び上がった！

「ほら見る！これで兵士共が血眼で俺らを探しに来るぞ！」

「と、とにかく何処か安全な場所に逃げましょうイブキさん！」

「わ、わかってるっ！走るわよ！」

三人はとりあえずその場から逃走した。…しかし、建物から離れ暗く人気のない所を探して右往左往していたその時だ、何者かが三人の前に立ちはだかった！

「…ガーディアン！」

そう、三人の前に現れたのは軍が所有する戦闘用ガーディアンだった。三対のタイヤを持ち、上半身は人のような姿形をしていた。…そしてその左腕には機関銃を装備していた…！

「…どうやら見つかったちゃったみたいだね」

イブキが言った。

「ど、どうするんですかあゝ！」

エリオットがおどおどしながら言った。

「どうするもこうするもないよ…もう戦うしかない！」
イブキはそう言つと手裏剣を懐から取り出した！

「うう…やっぱりそうなっちゃんですな…」

エリオットも今にも泣き出しそうなのを堪えながら鞘から剣を抜いて身構えた。

「やれやれ…少々厄介なことになりそうだな」

…シロが鋭い犬歯をちらつかせながらそう言うのであった…！

《地獄からの復讐者》

…その頃、ミーシャと召喚獣達は鳴り響くサイレンの中でも特に慌てる様子もなく、片っ端から倉庫の防犯シャッターをワニガワの怪力でブチ破つて中を調べていた。

「なんだか騒がしいんツスけど…大丈夫なんですか？」

「…心配ないよヤキトリ…あれだけ派手に扉を破壊して侵入したらこうなるのは当たり前だからね…」

ミーシャが懐中電灯を片手に倉庫を覗き込みながらヤキトリに言った。

「…ふう…ここもハズレか…ま、いくらなんでもこんな倉庫に彼をテイテイス監禁するわけはない…か…」

ミーシャがため息混じりにそう言った。

「エレノアさんやイブキさん達が無事にテイテイスさんを見つけてくれればいいんですが…」

「…そうねヤキトリ…だけどこの騒ぎだからどうかしら…？…とにかくもこの倉庫には用はないから…次に行こうかワニガワ…」

ミーシャが倉庫の外で待っていたワニガワにそう声をかけた。

「ギャルルル…！」

しかしどうしたことだろうか？ワニガワは一点に鋭い視線を注ぎながら唸り声を上げていた…！

「…ワニガワ…？…誰かいるの…？」

ミーシャはワニガワの視線の先に目を向けた。…そして目の前の状況に我が目を疑い、一瞬言葉を失った…そこには見覚えのあるスーツに身を包んだ男が立っていた…！

「これはこれは…誰かと思えば貴方でしたか」

男は不適な笑みを浮かべながらミーシャにそう言った。

「…シャクマ…！」

「お知り合いなんですかミーシャさん？」

「…ええ…できればあまり知り合いたくなかったけれどね…！」

ミーシャはそうヤキトリに言った。…彼女の頬に一筋の汗が流れた。

「ふふ…せっかくわざわざこちらから出向いたと言うのに…あんまりな言い方ですなあ…！」

「…わざわざだと…？」

「そうですよ？…実は貴方^{ミーシャ}にどうしても会いたいと言う方がいるんですよ」

「…私に…？」

ミーシャは怪訝そうに顔をしかめた。

「…来なさい獅子蔵！」

シャクマがそう呼ぶと、すぐ隣の倉庫の陰から巨大な双頭の獣の骸骨がその巨体を揺らしながらミーシャ達の目の前に現れた…！

「ぐぐぐ…久しぶりだなあミーシャよ…！」

双頭の内の一つがミーシャに向かってそう喋りかけた。

「…その声は…獅子蔵…！？…何故ここに…！？」

ミーシャは思わず両手を口に当てて驚いた。…彼女が驚くのも無理はない。何せ彼女の目の前にいるのはジパングで倒したはずの獅子蔵の変わり果てた姿だったからだ。

「…こちらもお知り合いでミーシャさん？」

ヤキトリが恐る恐るミーシャに聞いた。

「…ええ…ジパングでぶつとばしたはずなんだけど…まさかこんな形で再開するなんてね…！」

ミーシャはそう答えた。…その表情からは薄笑いすら見受けられた。「そうさ…忘れもしない昨今の出来事だ…よくもこの獅子蔵を殺してくれたものだ。だが、この通りシャクマの力で俺は地獄から生き返った！…積年の怨み、今ここで晴らさせてもらうぞミーシャ…！」獅子蔵はそう言うと、その二つの頭を天に向けておぞましい雄叫びをあげるのであった。

「そうゆうことだそうですねミーシャ…他の二匹も覚悟はいいですか？」

シャクマが不気味に微笑みながら言った。

「…ヤキトリ…」

「はい？」

「…あなたはそっちの男シャクマの方を殺りなさい…骸骨野郎は私とワニガワで殺るわ…」

「…了解です」

「グルル…」

ミーシャの指示に、ヤキトリとワニガワはそう頷いた。

「…いいこと獅子蔵…このミーシャがもう一度…貴方を地獄に送り返してあげるわ…今度は二度と蘇らないように…骨の髄まで残らず灰にしてあげるんだから…！…！」

《悪魔の余裕？》

「…ねえ、大丈夫なのノアちゃん？」

「は？…ああ、私なら大丈夫だけど？」

「いや、ノアちゃんじゃなくて…入口にいた見張りの人達のこと」

「へ？」

「だって、ノアちゃんのパンチとキックが直撃してたから…てゆーか、あの喧嘩まがいの体術はどこで覚えたわけ？」

「そんなもんは一人旅でもしてりゃあ勝手に覚えるさ」

「ハハ…」

ロゼツタは苦笑いした。エレノアとロゼツタの二人は王城の入口の番兵を殴って気絶させた後で、城の中をあちこち駆け回っていた。途中、行く手を阻むように出現する人型のガーディアンをエレノアの44マグナムとロゼツタの鋭い爪で撃破しながら部屋とゆう部屋を片っ端から搜してみるも、なかなかティティスを見つけれずいた。

「やれやれ…それにしても、さすがは王城ってことだけはあるな。

廊下に飾られた絵画や彫刻はもちろん、部屋の置物も超一流物だよ。

…こんな状況じゃなかったら持つて帰りたいくらいだよ」

エレノアがぼやいた。

「キャハハ、そしたら一晩で億万長者だね！」

ロゼツタが笑いながらそう言うのだった。

…にしても、とにかくバカデカイ城だなあ…まだ四階までしか搜索してないのにえらい時間かかるしな。帝国の支配者の住みかとしては意外と古風なものにも驚いたし」

「確かに！…でもまあ、まだまだ上の階があるからね、油断大敵だよノアちゃん！」

「わかってるよロゼ」

二人は王城の四階を搜索したが、特に変わった点は何も無かった。

「ふう…ここにもティティスはいないか。仕方ない、上に行くぞロゼ！」

「りょーかい！」

エレノアとロゼツタの二人は階段を駆け足で上がって行った。…城にはエレベーターもあつたのだが、どの階にティティスが捕えられているかわからない以上、階段を使って一階ずつ虱潰しに探す他な

かった。

「…何気にしんどいくないノアちゃん？」

「それって階段を駆け上がりながらも喋れる余裕のあるやつが言うセリフかなあ…」

正直、この時の二人にはまだ余裕すらあった。敵もさほど強くはなかったし、何より楽観的な二人にとっては今の状況は大して苦にはならなかったのだ。しかし、階段を上りきったところで二人の足は同時にピタリと止まった。…そして二人の余裕もそこで消え失せた。

「ふふ…遅かったな、赤い悪魔と聖なる血を受け継ぐ者よ。待ちくたびれたぞ？」

五階の階段のところで二人を待ち受けていた太った男がそう言った

…！

「お前は…？」

エレノアが男に言った。

「我が名はマルピーギ…コロツサル様の手の内の者だ」

「…！」

「ふふふ…話には聞いていたが…まさかこんな小娘共だったとはな。人間と組むとは赤い悪魔も落ちぶれたものよ」

「うるさいな…なるほどね、アンタが魔物だつてのはよくわかったよ。…目的は何？」

ロゼツタがマルピーギを睨みつけながら言った。

「目的だと？…これから死ぬ連中がそんなこと聞いてどうするのだと言っただけ？」

マルピーギが薄笑いを浮かべながら二人を嘲るか如くそう言った。

「なんだとキサマツ…！テイティスは何処だ！」

エレノアがすごい剣幕でマルピーギに怒鳴った。

「ああ…あの男ならばこの城の最上階に行けば会えるさ…もっとも、そこまでたどり着ければの話だがな…！」

マルピーギが不適とも取れる笑顔でそう答えた。

「…ノアちゃん？」

「なんだロゼ？」

するとロゼツタは真剣な眼差しでエレノアにこう告げた。

「ノアちゃんは先に最上階に行つて…^{マルピーギ}雑魚はこのわたし一人です十分だから…！」

「！？で、でも…そんな…お前を置いてなんて…」

戸惑うエレノアに、ロゼツタはさらに自分の意思をこう説いた。

「心配しないでよノアちゃん。こんな奴に負けるほどわたしは弱いから！それにノアちゃんが先に行かないで他の誰がティーちゃんを助けられるつて言うの？…さ、わたしのことは構わないで…もう行つてノアちゃん…わたしもケリがつき次第すぐに行くから…！」

「お前…すまない…！」

エレノアはロゼツタにそう言い残すと、マルピーギの立っていない階段の横の方の廊下へと走り去つて行つた…。

「上手く逃がしたつもりだろうが…所詮は無駄なことだ赤い悪魔よ人間ごときにこの城のセキュリティをかくぐれるわけではない」
マルピーギがそうロゼツタに言った。

「さあ…それはどうかしらマルピーギ？人間つてのは意外性に富んだ生き物だからねえ…事実、奇跡を起こせるのは人間だけだよ」
ロゼツタがそう言葉を返した。

「ふん…戯言を！赤い悪魔と言えどその強さは既に過去のこと…このマルピーギ様が今ここで貴様を喰らうてくれるわ…！」

するとマルピーギはみるみるうちに醜く巨大な蛙の化物に姿を変えた…！

「ちっ…ついに本性を表したか。…ならばこちらも同じ対処を取らせてもらうよ！」

ロゼツタがそう言うとはほぼ同時に、彼女の体を赤く淡い光が包み込んだ。…そして、本来の長い黒髪をしたロゼリアーヌとしての姿を表した…！

「…ククク…蒲蛙め…雑魚の分際でこのわたしを侮辱したことを地

獄の底まで悔やむがよい…！」

ロゼリアーヌは薄笑いを浮かべ、鋭い爪をかざし、真紅の瞳を爛々と輝かせながらそう言うのであった。彼女の表情からは、もはや喜びすら感じられた。…彼女がこの戦いに何を求め、そして何をしようとしているのか…それは誰にも知る予知もなかった…。

第三十三章 障壁（後書き）

作者は理系の人間なので、作中にも様々な理系の考え方や用語が出てきます。人造人間に代表されるように、現在の世界でも問題視されている遺伝子操作やクローン技術を応用して創り出されたキャラクターも何人か登場しています。この作品には魔法などの現実的ではない設定もありますが、基本的には現代の科学技術を参考に構成されていることを忘れないください。科学は素晴らしい学問です。科学があつたからこそ我々人類は豊かな文明社会を手に入れることができました。…しかし、科学の力によって多くの人命が失われたのも事実です。素晴らしいものほど悪用された時の損失も大きくなることを我々人類は忘れてはならないのです。

第三十四章 交錯する想い（前書き）

当初よりだいぶシビアになってきましたが、この物語は元々こんな感じですのでご了承ください。

それにしても、作者自信も書いていて時々切なくなります…。そろそろ楽しいお話も取り入れないと…？

第三十四章 交錯する想い

マンファリの中心部に位置する、軍の施設などの国の重要機関が集中する国家の中枢…そこでは今まさに、世界の行く末を決めると言っても過言ではない戦いが始まるうとしていた…！

《武器庫前の戦い》

帝国軍の所有する武器庫群のほぼ中央部…武器庫の間で一人の魔法使いと二体の召喚獣が魔物達と睨み合いをしていた…。

「クク…さて、どうやって殺してやるうか？」

獅子蔵がそう言った。

「…どうやって殺すのかは勝手だよ…無論、死ぬ気はないけど…」
ミーシャはそう獅子蔵を睨みつけた。

「はっ！ほざけ！そんな小さな体でこの俺に勝てるかっ！」

「…誰が私が相手するって言ったの？」

「何だと？」

「…アンタの相手はこっちだよ…」

そう言っつてミーシャが片手を振り上げると、ワニガワが唸り声をあげながら獅子蔵の前にズイツと進み出た。

「グルルル…！」

「…アンタみたい巨大大で怪力の獣系の魔物には同じような性質のドラゴン系の魔物が一番有効なのよ…もともと、ドラゴン系の魔物の方が幾分能力的には優れているけれどもね…」

ミーシャがそう静かに獅子蔵に言い放った。

「ぐっ…」

獅子蔵はワイバーンの迫力に思わず後退りした。

「ギシャアア！」

ワニガワは唸り声をあげて獅子蔵に向かって飛びかかった！

「グルガアー！」

獅子蔵もすかさずワニガワに応戦する！互いの鋭い爪がぶつかりあって火花が飛び散る！二匹の巨大な魔物は牙を剥き出しにしてもみくちやになりながら、辺り一面に砂埃を舞上げすさまじい格闘を始めた。

「…お願い…頑張つてワニガワ…！」

二匹の壮絶な戦いを、ミーシャはただ見守ることしかできなかった…。

…一方、少し離れた所ではシャクマとヤキトリの睨み合いが続いていた。

「仲間が戦っているのに随分と冷静ですねえ？」

シャクマがヤキトリに向かって静かに笑いながらそう言った。

「飛龍フイバーンとは今の主人ミーシャと出会う以前からの長い付き合いなんでね…あんな奴になんぞ負けないことくらい俺にはお見通しなんだよ」

ヤキトリがそう言った。

「なるほど…しかしながら、グリフォンと云えば数ある召喚獣の中でも誇り高き魔物だと聞きますが…何故にあのような小娘をマスターに？」

「はん…俺にだってわからないしお前に語る義理もない。強いて言うならば、俺は長いこと生きてきたが…あんな変わり者の主人マスターには出会ったことがないとゆうことくらいさ」

ヤキトリは鋭い視線をシャクマに向けたままそう言った。

「ふふふ…どうやら貴殿方召喚獣とあの小娘には不思議な絆があるようですね」

「もちろん。…そうじゃなきゃあんな無口で怠け者で生意気な魔法使いになんか使えられんがな」

「…なるほど。妙に納得できますよ」

シャクマがそう言った。…それから、静かにこう続けて言った。

「どうやら貴殿と魔法使いの小娘の関係は、赤い悪魔とあの短気な小娘との関係に似ているように見受けられます」

「…?」

ヤキトリは首を傾げた。

「あれほどの能力ちからを持ちながら、何故赤い悪魔はあのようなつまらない人間なんぞの肩を持つのか：ずっと気になってました。もしかしたら何か運命にも似た特別な力が働いているのかも知れませんね…さて：お喋りはここまでですよ？そろそろ行かせていただきましようか？」

シャクマがそう言うと、地中から無数の魔物の骸骨達が沸いてきた！骸骨達はヤキトリを取り囲むようにして次から次へと際限なく地中から這い出てくる…！

「ちっ…あんだだけフレンドリーに話といてこの待遇かよ！」

ヤキトリは翼を広げ毛を逆立てて戦闘体制を整える…！

「…さあ…貴殿グリフォンも私のコレクションに加わるがよい…！」

シャクマがそう不気味に言い放った…！

《あっけなく…?》

「…それで？これからどうすると?」

シロがイブキとエリオットにそう聞いた。

「どうするもこうするも…あんな化物相手にどう戦うつての!？」

「同感ですよ…」

イブキとエリオットは揃って首を横に降った。…実は、最初は威勢良くガーディアンに立ち向かおうとしていた三人であったのだが、相手が悪すぎた。ガーディアンは装備したガトリングガンで容赦なく攻撃してきたのだが、こちらの飛び道具はイブキの煙玉とクナイのみ。例えて言うならば戦車と軽自動車みたいなもの。当然、相手に近づくことはおるかガトリングによる射撃を避けるのがやっとで

三人は戦意喪失、あっさりと敵前逃亡したのであった。…で、結局三人は敷地の外にいたのである。

「まだ中にエレノア達がいるのに…ああ…私達はどうすりゃいいのよ」

イブキはそう言って頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。イブキ達がそうやって困惑している間にも、彼女達の目の前では高い壁に囲まれた敷地の唯一の出入口は軍隊によって封鎖され、真夜中にも関わらず騒ぎを聞き付けたマスコミが集まり始めていたのである。

「これでもう中には入れないな」

シロがそう言った。

「そうですね…」

エリオットが静かに頷いた。

「だが、これはこれでよかったのかも知れんな」

「どうゆうことですか？」

エリオットはシロにそう尋ねた。

「…この戦い、結果はどうであれ帝国政府から見ればこのような騒ぎを起こした我々は重罪人だ。後に拘束され、それなりの罰を受けることになるだろう」

「な…そ、そんな…」

「それが国家の持つ悲しい性質なのだよエリオット。どんなに善をしてもなかなか理解されないものなんだよ。…我々は途中でこの騒ぎから離脱したから罰せられる可能性は少ない。…俺がさっき言ったのはそうゆう意味だ」

シロはそう説明した。

「…」

エリオットは黙って歯をくいしばった…。

「おい、お前も少しは反応したらどうだ？」

シロがさっきからうずくまって黙ったままのイブキにそう言った。

「…最低だ」

「は？」

「最低の人間だよ私は」

イブキがこう言う…

「中で仲間が…せっかく友達になりかけた人達が一生懸命に戦っているってのに…それを私は裏切ったんだ。こんな恥ずかしいことはないよ…」

イブキは今にも泣きそうな顔をしていた。

「イブキ…」

さすがのシロも、この時ばかりは慰めの言葉を思い付くことはできなかった…。

「…いいえ、まだ諦めるのは早いですよ」

エリオットが突然そう言い出した。

「え？」

イブキが少し驚いた表情で彼を見た。

「…勇者協会の会長に話をつけるんです。あのお方は政府の高官でもあります。きっと何か解決の糸口が見つかるはずですから」

「た、確かにそれは名案だけど…そんなお偉いさんにどうやって会うつもりなの？」

「イブキの言う通りだ。いくらお前が協会の人間であっても協会のトップに会うのは難しいはずだが…？」

すると、エリオットはこんなことを言ったのだった。

「心配ありません。会長は僕の父ですから…！」

《意外な強敵》

その頃、敷地のほぼ中央部にそびえ建つもつとも背の高く巨大な建物…王城であり政府の重要機関が設置されている通称『マンファリ・セントラルタワー』の五階の通路では、ロゼリアーヌと異形と化したマルピーギが互いに睨み合っていた…。

「ふふ、どうだ？この建物を見ての感想は？下の階は昔からある古城をそのまま使用しているが、この五階から上は最新技術を駆使したハイテクタワーだ。まさに過去と現在の美を合わせ持つ芸術的な建物なのだよ」

マルピーギが得意気にそう言った。

「はん、何を言い出すのかと思えば…貴様なんぞの美学に興味はないわ。それより殺す前に聞きたいことがある」

「…なんだ？」

「お前がここにいる目的はなんだ？前の王を殺してまでお前が帝国を仕切りたいその理由がどうしても解せんのだが…？」

ロゼリアーヌがそう怪訝そうに聞いた。

「ほほう…さすがは赤い悪魔、いい推理をしよるわい」

「…質問に答えるマルピーギ」

「まあそう焦るな。そう、確かに前の王を殺したのはこのマルピーギだ。そうやってこの国の政権を握り、共和国との戦争をほのめかすのが目的なのだよ」

マルピーギはそうロゼリアーヌに答えた。

「…??？」

ロゼリアーヌは首を傾げた。…どうやら、彼女にはマルピーギの言うこの目論見があまりにも非合理的に思えたらしい。

「納得できんようだなロゼリアーヌ。…このようなまわりくどいやり方をしなくてはならないのはお前のせいなのだが？」

「なに？」

「バベルの件にしたってそうさ。貴様らはどうやらサテライトに行きたいようだが…我々にはもっと別の目的がある」

マルピーギが言った。

「まさか…空間を歪めて魔界との通路を作るつもりなのか？」

「ほほう…お前は何でもよく知っておるのだな赤い悪魔よ」

「バベルは前に一度見たことがあるからな。あれがどうゆう装置か

は大体予想がつく」

ロゼリアーヌが言った。

「…そう、あれは元々空間を自由に制御できる装置だ。あれを使って魔界との入口を開き、魔界の軍隊をこちらに送り込むのさ」

マルピーギがそう言う。

「なるほどな」

ロゼリアーヌが頷いた。

「無論、コロツサル様やこのマルピーギがこちらの世界にいるように、小さな空間の歪みを使って自由に異世界を行き来する技術は既にあるわけなのだが…軍隊を移動できるような巨大な空間の歪みを作り出すことはできないのでな」

「ほうほう…」

ロゼリアーヌは淡々と話を聞いている。

「…コロツサル様はお前を恐れておられる。魔界の軍隊も全てはお前に対抗するためのもの。もう一つの障害である人間には互いに潰し合ってもらい…とりあえずお前を倒すのが目的なのだ」

マルピーギはそう眉間にシワを寄せながらロゼリアーヌに語った。

「なるほどな…アンタのおかげで大体話は飲み込めたよ」

ロゼリアーヌは若干薄笑いを浮かべながらそう言った。

「くはは！…ならばもう心残りもあるまい！大人しく地獄に落ちるがいい赤い悪魔！！」

マルピーギはそう吐き捨てると、巨大な手の平をロゼリアーヌに振り降ろしてきた！！

「ちっ！」

ロゼリアーヌはとっさに後ろに飛び跳ねてマルピーギの攻撃をかわす！マルピーギの鋭い一撃は空を斬り、凄まじい地響きと共に床に大きなひび割れを作り出した…！

「かわしたか…早々に死ねばいいものを」

マルピーギはそう残念そうに言った。

「ぶざけたこと言ってんじゃないよこのクソガエルが！地獄に逝く

のはキサマの方だ！」

ロゼリアーヌはそう言うなり鋭い爪でマルピーギに切りかかった！彼女の鋭い爪がマルピーギの皮膚を切り裂く…はずだったのだが、なんと彼女の爪はブヨブヨした厚い皮膚に弾かれてしまった！

「!？」

「ふはは！痒いわっ！」

マルピーギはそう笑いながら、右腕でロゼリアーヌを思いつきりはねのけた!!

バシィッ！ザザザア！

「ぐう！」

マルピーギの一撃を喰らって飛ばされたロゼリアーヌだったが、両足を踏ん張り鋭い爪を床に付き立てなんとか壁への激突は避けた。

床には、彼女がつけた鋭い爪の跡が残っていた。

「ちっ…ただのデブガエルじゃなさそうだな。こいつぁ、少々厄介な相手になりそうだ…」

ロゼリアーヌは口から垂れた血を右腕で拭った。

…そしてこう呟いた。

「…久しぶりに…血に対する欲求不満を解消できそうだな…」

《二人の少女》

「あー！！畜生！ティティスはいったい何処にいるんだよっ」

ロゼリアーヌとマルピーギが五階で戦っている頃エレノアは八階にいた。彼のいる最上階に行くにはもちろんエレベーターを使うのが一番だったのだが…どうやら夜間は動いていないようだった。しかし、幸いながらここまでの間エレノアは敵と遭遇することもなく無

事に九階へと向かう途中であった。

「はあ…さすがに足がもう痛いよ。最上階って…あとのくらいあるのだろうか？」

エレノアが額の汗を拭いながら階段を登って行くと…八階と九階の間の踊り場に見覚えのある人影が立っていた。

「ちやお！久しぶりだねエレノア」

踊り場にいたアクアがエレノアにそう言った。

「アクア！お前…っ！」

エレノアはとっさに銃を抜こうとしたが…

「ちよ、ちよっと待ってよ！あなたが怒る気持ちもわかるけど…こないだのことはとりあえず謝るから、そんなに恐い顔しないでよ！」と、アクアは相当慌てて憤慨するエレノアをなだめた。

「はあ？」

エレノアはアクアの態度に首を傾げた。

「ゲフン…あー、ところで？エレノアは最上階に行きたいんだよね？」

「え？まあそうだが…」

よくわからないが、アクアに敵意は無いようなので、エレノアは銃から手を放してそう答えた。

「まさかずっと階段で行く気？」

「ああそうだよ！他に方法があんかよ！エレベーター動かないしな！」

エレノアがイライラしながら言った。

「でもさあ、ここ最上階って55階だよ？大丈夫なわけ？」

アクアがさらりとそう言った。

「うっ…」

…エレノアは黙ってしまった。確かに体力には自信があったが、さすがに厳しいものがある。

「ああ、だけど心配しないで。コレがあればエレベーターを自由に動かせるから」

アクアはそう言って、ミニスカートのポケットから鍵を取り出した。
「え!？」

「さ、急ぎましよう?いつガーディアンに見つかるかもわからない
し」

アクアはそうあっさりと言うと、エレノアの横を通り過ぎて階段を
下り始めた。

「ちょ、ちょっと待て!テメエいったいどうゆうつもりなんだよ!
?」

エレノアがアクアに向かって怒鳴った。無理もない、アクアは彼女
達の敵なのだから。

「どーゆーつもりって…ティティスを助けに行くんじゃないの?」
「そうゆう意味じゃねえっ!なんで私の助太刀をする!?ティティ
スを拐ったのはお前で、私はそれを取り戻しに来た人間なんだぞ!
?」

エレノアがそう言うと、アクアは次のように彼女に答えた。

「…私だっばかげてると思ってるよこんなの。だけど、こうでも
する他ないのよ」

「…どうゆうことだ?」
エレノアが聞いた。

「…このままだとティティスは殺される」
アクアはそう言った。

「なんだとっ!?!」
エレノアは驚かずにはいらなかった。

「コロツサル様はティティスにお怒りだ…近日中に間違いなく殺さ
れる」

アクアは一呼吸するとさらに続けてこう言った。

「こうなったのも全て私の責任だからね…だからティティスをあな
た達に助けてもらうの。そうすればとりあえずティティスは死なず
に済む。…だけどこれだけは言うておく。私が協力するのは彼のた
めであって決してアナタのためではない…!」

…アクアはそうエレノアに言った。

「…そうか。そうゆうことなら、確かにお互いに協力するしかなさそうだな」

エレノアはそう答えた。さっぱりとした性格の彼女には、もはや相手が敵だろうが魔物だろうが関係ないようだ。目的が一致している今、互いに協力してティティスを助け出すのが得策だと彼女は考えたのだ。もちろん、アクアも同じように考えていたからの行動だったようだ。

「それじゃ、今だけはお互いに協力し合うとゆうことで決まりね。

エレベーターはこつちだから、急ぎましよう」

「ああ、わかったよ」

二人は互いの意識を納得したところで、一時的に協力することにした。

エレノアがアクアについて行くと、三機のエレベーターが並んである所についた。そして、アクアがエレベーターのボタンの下の鍵穴に鍵を差し込むと…ゴウン…とゆう音と共にエレベーターが起動した。

「ところで…」

エレベーターが来るのを待っている間、エレノアがアクアに声をかけた。

「ん？何？」

「お前その鍵どうやって手に入れたんだ？…まさか勝手に盗んだとか言っんじゃないやねえよな？」

「あら、もし他に良い方法があったら聞きたいものだね」

「おいおい、見た目によらず平気で悪いことすんだなあアクア」

「アハハ、それはお互い様だよ！エレノアだって、勝手にココに侵入したじゃん」

アクアが笑いながらそう言った。

「それもそうだな、何人かシメてきたしな！」

エレノアも笑いながらそう言った。

「…あ、来たみたい」

アクアがそう言った。エレベーターの上の表示には八階と出ていた。間もなくエレベーターの扉が開いた。エレベーターの中は広く、入って正面の壁は硝子貼りになっていた。そして、硝子の向こうにはマンファリの摩天楼が一望できた。

「わお、さすがは帝国の首都のエレベーター！」

エレノアが硝子に張り付き景色を見ながらそうはしゃいだ。

「ちょっとおおげさだつてエレノア」

アクアはそう言いながらエレベーターのボタンを押した。扉が閉まり、二人を乗せたエレベーターは上昇し始めた。

「さてと、後は55階まで待つだけだな」

エレノアが言った。

「そうだね」

アクアが答えた。

その後…二人はしばらく黙って小さくなっていく景色を眺めていたが、やがてアクアがこんなことを言い出した。

「ねえ…エレノア？」

「ん？」

「こんなこと言ったら怒られるかも知れないけど…私達って結構似た者同士なのかもね」

「どうして？」

「なんて言うか…ちょっと無鉄砲と言うか、小さなことにはあんまりこだわらないところとか…結構共通点が多いような気がする」

「ん…言われてみると確かに…今だって、互いに警戒すべき相手なのに平気で意気投合して喋ってるもんな」

エレノアがそう頷きながら言った。

「飯にお互いにこんな立場じゃなかつたら…もしかして意外と仲良くなれたのかもね私達。あ、恋の好敵手ライバルには変わりないだろうけどねきつと」

アクアが切な気にそう言った。

「そうだな。…あくまでファンタジー仮想世界での話になっちゃうけどな…」

エレノアが苦笑いしながら言った。

「…そうだよね…」

アクアがそう静かに言った。

「…ああ、そうなんだろうよ…」

エレノアもそう静かに答えた。

…二人はまた黙って硝子の向こうにある景色を眺めた。小さく見えるマンファリの夜景を見て、エレノアとアクアは何だか無性に切なくなつた。自分達ではどうしようもない、何か大きな壁の存在を改めて実感せざるを得なかつた…。

第三十四章 交錯する想い（後書き）

だいぶ切ない終わり方をしましたがいかがでしたか？
運命に翻弄されつつも懸命に生きる登場人物達を、どうか暖かい目
で見守ってくださると作者として幸いです。

第三十五章 ロングナイト・ダークネス（前書き）

いよいよマンフレリでのvsコロツサル勢も大詰めとなります。果たしてその先に何が待つのでしょうか…？

それがわかるのもう少し先のお話となりそうです。

第三十五章 ロングナイト・ダークネス

「ぐずぐずするな！戦闘班は配置につけっ！！」

「はっ！」

マンファリの中心部の軍施設では、深夜にも関わらず武装した兵隊達が慌ただしく動いていた。それもそのはず、数人が防護扉を突破し敷地内に侵入した上に所構わず暴れまくっているという情報が軍司令部に入っていたからだ。

「ガーディアンを全て起動させる！抵抗するなら殺しても構わん！司令官らしき人物はそう怒鳴った。

…今まさに、この敷地のあちこちで激しい戦闘が繰り広げられていた…。

《灼熱の悪魔》

「ぐはは！どうした赤い悪魔よ、キサマの攻撃はそんなものか？」

巨大な蛙の化物は、太ったお腹をポリポリ掻きながらそう嘲笑った。

「黙れっ！いちいちうるさいんだよっ！！」

ロゼリアーヌはそうマルピーギに向かって怒鳴り返した。

…ここはセントラルタワー五階、相変わらずロゼリアーヌとマルピーギ大臣の戦闘が続いている。

「ふはは、何とでも言うがよいロゼリアーヌよ。死ぬ前にふんだんに怒鳴り散らすがいいさ」

「きいーっ！とことんムカツク野郎だな！！」

ロゼリアー又は頭を掻きむしりじたんだを踏みながらそう言う。
「畜生、このクソガエルめ…打撃攻撃がダメなら魔法攻撃でねじふせるまでよ！」

ロゼリアー又はそう言うって左手に魔力を込める。

「…これでも喰らいやがれマルピーギ！^{エナジーショット}魔弾砲！！！」

ロゼリアー又の左手から放たれた赤い魔力の球は一直線にマルピーギに向かって飛んでゆく！！

「はっ！たわけが！^{マシクプロテクション}魔力無効壁！！！」

マルピーギがそう唱えると、マルピーギの前に光の壁が現れた！ロゼリアー又の放った魔力球は光の壁に衝突、大爆発を引き起こした！！

「ぐうっ…」

凄まじい爆風がロゼリアー又を襲い、辺りは粉塵に包まれた。

「ゲホゲホ…おのれマルピーギめ…」

ロゼリアー又が咳き込んでいると、少しずつ視界が晴れてきた。

「く…流石は赤い悪魔…だが問題はない」

視界が晴れ、ロゼリアー又の目にマルピーギの姿が映った。…爆風で壁や床、天井が激しく破損しているのにも関わらず、マルピーギは無傷だ。

「ちっ…厄介な魔法使いやがる」

ロゼリアー又がそう舌打ちする。

「爪も魔法も通用しないととなると、いよいよ勝目が無くなったようだな赤い悪魔」

マルピーギはそうロゼリアー又に言い放った。

「くっ…」

「ふはは！次はこちらから行くぞ！」

マルピーギがそう言った次の瞬間、マルピーギの巨大な口から長い舌がロゼリアー又に向かって伸びてきた！！

「うわっ！？」

ロゼリアー又はそれを反射的に避ける！長い舌は彼女の肩をかすめ、

床に激しく打ちつけた。しかし、舌はまるで鞭のようにしなりロゼリアーヌの右足に巻きついてきた！

「しまっ…」

ロゼリアーヌがそれを振りほどく暇もなく彼女は物凄い力で引つ張りあげられ、マルピーギの目の前に宙吊り状態にされてしまった。

「クク、無様な姿だなロゼリアーヌ」

「はん！こんなにも美しい女性を逆さ吊りにするとは…キサマの悪趣味には心底呆れる」

マルピーギに対して、ロゼリアーヌはスカートが捲れないように両手で押さえながらそう言う。

「あまり調子に乗るなよロゼリアーヌ！キサマを捻り潰すことなど作戦の一部を達成することに過ぎん！！」

マルピーギはそう言うって舌を大きくしならせ、ロゼリアーヌを思いきり硬いコンクリート製の床に叩きつけた！！

バガアーン！！！！

「ぎゃあっ…」

物凄い力で叩きつけられロゼリアーヌは思わず悲鳴をあげた。

「ふはは！お次はこれでも喰らえい！！」

さらにマルピーギはその巨大な右後脚でロゼリアーヌを踏みつけた！！

ドカツ！！バキバキバキー！！！！

「がっ…はっ…」

巨大な蛙の化物の全体重がロゼリアーヌに遅いかかる！彼女の体はコンクリートの床にめり込み、全身の骨は砕け内蔵が破裂する。そして口からはおびただしい量の血が吹き出た。もはや、まともな悲鳴すら出ない。

「あ…ぎ…ぐあ…」

あまりの痛みに、さすがのロゼリアーヌも苦痛の表情を浮かべる。

「さすがに苦しそうだなロゼリアーヌ…安心しろ、すぐに楽になる

…！」

マルピーギは薄笑いを浮かべながらそう言った。

「こ…のっ…」

ロゼリアーヌはすぐにも怒鳴りたかったが…もう声を出す力すら残っていないかった。

「ふははは！さっきまでの威勢はどうした？もう死ぬのか？ハハハ！」

息も絶々のロゼリアーヌを見て勝利を核心したのか、マルピーギは余裕の表情で笑っていた。

そんなマルピーギの様子を、踏みつけられたロゼリアーヌは虚ろな瞳で見つめていた。

…そして、こんなことを考えていたのだった。

「…ダメだ…体が動かない…声すら出ない…体中が痛くてどうにかなりそうだよ。…わたしは死ぬのか？…まあ、別にいいか…今更ながらだが、例えコロツサルを倒したところでカエサルは生き返らないし…世界が平和になってもわたしには関係ないしね…本来ならば千年前に死ぬ運命だったんだ…今死ぬならそれも運命なのだろう…）」

しかし、彼女がそう思いつつ目を閉じようとした時だった…彼女の脳裏にふとエレノアの顔が浮かんだ。

「…そうだ…わたしには…まだ…やるべきことがある…ここで死ぬわけには…いかない！」

ロゼリアーヌは最後の力を振り絞り、マルピーギの足の指にありつたけの力で噛みついた！！

「うおっ！！？」

マルピーギはその痛みと驚きで飛び上がった！そして、足が浮いたその僅かな隙にロゼリアーヌはマルピーギの足の下から抜け出した。

…ドサッ…

彼女は倒れてそのまま意識を失ってしまった…。

《仲間との再会》

「…ついたよ。ここがティティスの幽閉されてる部屋だよ」

「ここか…牢屋みたいにもっとごっつい部屋かと思ってたんだがな」

「彼は大事なお客様だからね、それなりの部屋は用意しないと」

アクアはそう笑いながらエレノアに言うのであった。

エレノアとアクアの二人はタワーの最上階、55階のティティスが幽閉されている部屋の前まで来ていた。特に警備の目もなく、辺りは不気味なほど静まりかえっていた。

「ところで、さっき下の階から物凄い爆発音が聞こえたけれど…あれは何だったのかしら？」

アクアがエレノアにそう尋ねる。

「ああ、あれね。多分だけど相方が暴れてるんだと思うよ。…とにかく無事を祈るだけだよ」

「?」

少し心配そうな顔をするエレノアを見たアクアだが、彼女の話はよくわからなかったようだ。

「まあ、正直私には関係ないみたいだね。…さてと、とりあえず私の仕事は終わりたいだね」

アクアはそう言って懐から鍵を取り出すと、それをエレノアに手渡す。

「これがこの部屋の鍵だよ。これでティティスを助け出せる…だけどあとは自分で何とかしてね」

「えっ!?!」

「あのね…私は一応アナタ達の敵側の人間なの。これ以上関わつたら上司にバレて私が殺されちゃうでしょ？」

アクアは少々呆れたように言った。

「ごめんごめん、すっかりそのこと忘れてた」

エレノアがそう言った。

「ふふ…ま、無理もないか…」

その言葉を聞いて、何故だかアクアも少し嬉しそうだった。

「…それじゃあねエレノア。今度会った時は敵同士だけれど…せめてその時までには死なないでおいでよね」

「その言葉そのまま返すぜアクア。…私が殺るまでお前も元気でいろよ」

「うふふ…これこそまさに女の約束ってやつね。…エレノア達がどこまで私達魔物と対峙できるのか…ちょっとだけ楽しみだよ」

「けっ、カツコつけやがって！」

「それはお互い様！」

…じゃあねっ、元気でねエレノア！」

アクアは最後にエレノアにそう言うのと、まるで海霧のように静かにスーッと消えていきました…。

「消えちまった…前からずっと思ってたんだが、ホントは結構いいやつなのかもなアイツ」

エレノアはそう呟くのであった。

「…さてと、ちゃっっちゃつとティティスを助け出すとしますか」

エレノアはアクアからもらった鍵を部屋の扉の鍵穴に差し込む。

…ガチャ…

扉の鍵が開けられる。

「…おい、いるのかティティス？」

確かに人の気配はするのだが…返事はないし暗くてよく見えない。

「真っ暗で何も見えねえな…えっと、電気は…」

エレノアは壁づたいに電気のスイッチを探す。

「…お、あつたあつた」

…パチン…

エレノアが電気をつけてみると…なんと部屋の置くにあるベッドの上でティティスは爆睡していた！しかもパンツ一丁で。

「だー！？あのバカ、人が苦労して助けに来てやってみりや何様だっ！」

エレノアはツカツカとベッドに近づき、

「起きやがれこのバカティティス！」

思いっきりティティスを蹴っ飛ばした！

ボカツ！ドスン！

「ほあ！？？」

不意を突かれたティティスはそのままベッドの下に落ちた。

「イテテ…なんだなんだ？地震かよ？」

「アホ！誰が地震だっ」

「えっ！？」

ティティスがびっくりして上を見上げると、そこには腕組みしたエレノアが立っていた。

「よーやく気付いたか、この能天気野郎」

「あらー、こりや地震と間違っわけだ」

「やかましいわっ！」

…助けに来たぜティティス、無事か？」

エレノアがそう改まって言った。

「おかげ様で。思ったより早かったね」

ティティスはそう元気そうに話した。

「当たり前だ！この私を誰だと思ってるんだ？」

「はは…天下のエレノア様ってか。恐れ入りました」

ティティスは少しだけ苦笑いする。

「とにかくだ、ロゼッタとミーシャが追手を食い止めてる間に脱出しないと…だから早く服着ろよティティス！」

「もちろんそのつもりだけど…もう手遅れみたいだぜエレノア？」

「え？」

エレノアが扉の方を振り向くと、十数人の兵士が扉の前で機関銃を構えていた…！

「大人しく武器を捨てて投降しろ侵入者！」

兵士の一人がそこちらに叫ぶ。

「ちっ…」

エレノアはとつさに腰のフォルダーから銃を取り出そうとした…が、そのエレノアの腕をティティスの腕が押さえた。

「…よせ、エレノア。機関銃相手じゃ勝ち目はない。悔しいかも知れんが、ここは大人しく武器を捨てて投降するべきだ」

「で、でも…」

「…心配するなエレノア、俺がいる限り何があってもお前には指一本触れさせねえからよ」

「…ティティス…」

ティティスが真剣な眼差しで言ったその言葉になんともなく安心したのか、エレノアは大人しく銃を床に捨てた…。

《因縁の決着》

バキヤアツ！！！！

「グゴツ…」

ワニガワの鋭い尾の一撃が、獅子蔵の頭蓋骨を粉々に砕いた！獅子蔵はそのままガラガラと音を立てて崩れ去っていく…。

ミーシャ達がシャクマと獅子蔵と戦い始めてから一時間以上が経過していた…そして、ワニガワと獅子蔵の戦いは体力の優ったワニガワに軍配が拳がった。

「よし！ナイスだワニガワ！俺も負けてられないようだなっ！」

ヤキトリはそう言って翼を激しく動かした！すると凄まじい風の渦

が巻き起こり、シャクマが呼び出したゾンビ達を吹き飛ばした！
「ちっ…思ったよりもやるようですね」

シャクマはそう舌打ちをした。

気付いてみれば、あれだけいたゾンビ達は全てヤキトリによってバラバラにされ、既に獅子蔵もワニガワの餌食にされており残ったのはシャクマ自身だけとなっていた。

「…どう？それでもまだやるつもり…？」

ミーシャがそうシャクマに言うと、二匹の召喚獣がシャクマにギリギリ詰め寄る。

「ふふ…まさか赤い悪魔以外にもこんな強力な相手がいるとは思いませんでしたよ。…先ほどマルピーギ様の気配も途絶えましたが、ここはもうダメですね。とりあえず大人しく本国に帰ってコロツサル様に報告することにしませう…」

シャクマはそう言い残すと、まるで煙のようにミーシャ達の前から消えていった…。

「…とりあえず勝ったみたいだね…二人とも大丈夫？」

ミーシャがワニガワとヤキトリに聞くと、

「まあ、大丈夫って言ったなら大丈夫ですが…正直しんどいです」

「ガルウ」

と、二匹は答えた。

「…ありがとう…二匹ともお疲れさまでした…ゆっくり休んでね…」

ミーシャがそう言うと、二匹はスーッと消えていきました。

「…さて…みんなを探しにいかないか…」

ミーシャは少々かったるそうに呟いた。

「…そう言えば…シャクマの言った言葉…ここはもうダメってどうゆう意味なんだろうか…？」

「…それで？彼女との交渉はどうだったのかしらドラード？」

「…今はノーコメントの一点張りでしたサキュバス様」

「うーん、やっぱりそうくるか…まあ、彼女にはコロツサルが存在があるからなあ」

サキュバスは少しばかりがっかりしたようにそう言う。

…ここはマンフアリからそう遠くない森の中にあるサキュバス達のアジトだ。その廃虚となった屋敷の中でサキュバスとその手下の三人は何やら話合っていた。

「ねえ、ドラード？」

「…なんだマリア？」

「レクイエムってどんな感じの奴だったのかしら？赤い悪魔の新型って噂だけど…」

「…さあな。とにかく俺から言わせりや普通の女だったよ」

ドラードはそう静かに答えた。

「それにしても、赤い悪魔にレクイエム、アクアまでにも断られるとは…この先どうするんでちゅかサキュバス様？」

ジプシーが不安そうにサキュバスに言う。

「ふふ、心配するな。どうせこうなることは予想済みだよ。…そのうち風向きも変わるさ」

不適な笑みを浮かべ、サキュバスはさらにこう続けて言う。

「とりあえずお前達には探し物をしてもらおうかな？…もちろん、コロツサルとその一味には見つからないように」

「探し物って…まさか例のあの…」

「…まさにその通りだよマリア。闇の香炉を…いや、闇の香炉に封印されし月の魔物…通称かぐや姫をね…！」

月の魔物…果たしてそれが何なのか…この時はまだ誰も知らなかったのだ…それがけっして手を触れてはならない狂気存在だとゆうことを…

第三十五章 ロングナイト・ダークネス（後書き）

なんだかよくわからない名前も出てきましたが…その人物が登場するのはまだまだ先のことになりそうです。

登場人物も多くなり物語自体も複雑化して参りましたが、どうぞ最後までお付き合いしていただければ作者としても幸いです。…それでは、次章にまたお会いしましょう。

第三十六章 Breathing period (前書き)

今回はぜひ登場人物同士の優しくも切ない人間模様注目してみてください
くださいね。きっと新しい発見があると思います。

帝国編も間もなく後編…先の展開も予想しながら読んでいただければ幸いです。

第三十六章 Breathing period

「はつくしよい！」

あゝ…さすがにパンツ一枚はキツイなあ…」

「当たり前だろーが！」

あのね…おかげで私さつきからずっと視線のやりばに困ってるんだからねティティス」

「ごめんごめん！そりゃあ、牢屋の中でパンツ一枚の男と一緒にいたら誰だつて嫌だよな。お前も一応女の子なんだし」

「…ホント、今更ながらなんで私はこんなやつ友達やってんだろっか」

気楽に笑うティティスを見てエレノアは思わずため息をついた。

…一体、城の帝国軍に拘束されてからのどのくらいの時間が経ったのだろうか？エレノアとティティスの二人が連れて来られた牢獄は敷地の端にあった。二階建ての建物で、中は暗くて牢屋がびっしり並んでいた。牢屋の鉄格子が付いた小さな窓からはわずかに光が差し込んでいた。…どうやら少なくとも夜は既に明けているようである。

「それにしても…ずっと気になっていることがあるんだけどエレノア？」

「何よティティス？」

「お前よく一人で俺のいる部屋までたどり着いたな？警備兵とかはいなかったのかよ？」

「敵は口ゼが引き受けてくれたんだよ。…後はアクアの協力もあったし」

「アクアが！？…なんだかアイツもよくわからんヤツだなあゝ」
ティティスは驚いたとゆうよりはむしろ呆れた様子である。

「結局、私がお前を助けられたのは口ゼとアクアのおかげってわけ

だ…」

エレノアがそう落ち込んで静かに言った。…無理もない、自分の無力さを彼女は痛いほどわかっていたから。

「おいおい、そんなに落ち込むなって！お前はもう少し自分に自信を持つていいんだからさ」

「え？」

エレノアは少し驚いたようにティティスに聞き返した。

「だってそうだろ？確かにロゼッタやアクアの協力のおかげとは言え、彼女達に協力して貰える人間はそうはいないぜ？何せ相手は赤い悪魔と敵の魔物なんだからよ！俺にもよくわからないけれど…エレノアには他人を引き付ける何か特別な能力があると思うんだ。…そうじゃなきゃ…」

…ティティスはそう言いつつエレノアを自分の方へと優しく抱き寄せた。

「えっ…ちよっ…」

そしてびっくりするエレノアにこう告げた。

「俺をこんなにも夢中にさせるはずはないから…告白するのがちよつと遅くなっただけれど…愛してるよエレノア…！」

「…！」

最初は急なティティスの告白に戸惑いを隠せないエレノアだったが、やがて彼の暖かい腕に抱かれながらこう答えた。

「…私も…私もずっと前からティティスのこと…大好きだったよ…！」

…それから二人は見つめ合い…そして熱い口づけを交わす…。

「…んっ…」

…口の中で互いの舌が絡み合う…まるで今まで溜っていた何かを解放するかのよう…そして…やがて行為は熱いままに終わる。

「…私…ずっとこうなること夢見てた…だから…とっっても嬉しい…」
エレノアがそう言った。

「俺もだよエレノア。何かとチャンスを逃してばかりだったが…さ

すがにここならあの二人に邪魔されることはないだろうしな」

「だね。…シチュエーションは最悪に等しいけれどもね」

「ああ、まったくだ」

そう言つてエレノアとティティスは顔を見合わせて笑つのであつた。

…まさか、この二人の行為を盗み聞きしている者がいたなんて夢にも思わなかつただろうに。

「…おやおや…こんな時にずいぶんとお熱いねえお二人さんは…」

エレノアとティティスが接吻の余韻に浸っていると、突然聞き覚えのある声がそう言つてきた。

「えっ!?!?まさかその声は…」

「…そのまさかだよエレノア。とりあえず無事にティティスと合流出来たみたいだね…」

「ミーシャ!お前なんでここに!?!」

ティティスがそう叫ぶと

「…それはこつちの台詞だよ。シャクマ達を追い払つたはよかつたけれど、すぐに兵隊共に見つかつちやつて…」

ミーシャはエレノア達のいる真上の牢屋からそう答えた。

「そうか…でも、とりあえずお前が無事でよかつたよ」

エレノアが言つた。

「…ふふ、ありがとうエレノア。エレノアもよかつたわね、ティティスに想いが通じて」

「えっ!?!い、いや…それはそのあの…って、ミーシャお前…まさかもしかして…」

「…もちろん、二人の諸行は全て聞かせてもらったよ。ま、さすがに見れはしなかつたけど」

「うう…まさか全部聞かれてたとは…恥ずかしいよなあエレノア」

「も、もうさ…私顔から火が出そう…」

ミーシャに全てを聞かれていたことを知つた二人が真っ赤になつて

しまったのは言うまでもない。

「…それより、ロゼツタは？エレノアと一緒にだったはずじゃ…？」
ミーシャはそう言って話題を切り替えた。

「実は…テイティスを助けに行く途中で敵に遭遇したんだ。その時にロゼが一人で敵を引き受けてくれたんだよ」

エレノアがそう答えた。

「そうだったのか…エレベーターで降りたからか、彼女には会わなかったし…ちよつと心配だな」

テイティスがそう心配そうに言った。

「ロゼはそんなに簡単には殺られないと思うけど…早く再会して礼を言いたいよ…」

「…いずれにしろ、ここから出ないことには先に進めないね…」

…三人がそんなことを話していると、突然建物の中に数人の兵士達が入ってきた。

「…上からの命令です。先ほどの非礼をお許しください」

そう言つて、なんと兵士達は三人のいる牢の鍵を開けたのだ。…「
丁寧なテイティスの服も持ってきて。

「は！？…あの…？」

エレノアが不思議がつっていると、

「我々に着いて来てください。軍病院でお仲間がお待ちです」

一人の兵士がそう三人に言った。

「病院つて…まさか…ロゼツタか？」

テイティスが服を着ながら言った。

「…とにかく行くしかないみたいだね」

上から降りて来たミーシャがそう言う。

「ロゼ…頼むから無事でいてくれよ…」

エレノアがそう祈るように呟いた…。

《傷だらけの悪魔》

「…ここです。それでは我々はここで…」
そう言つて、兵士達は去つて行つた。

エレノア達三人が案内されたのは牢獄からそう遠くないところにある軍病院の一室の前であつた。…もう朝の八時だとゆうのに、病院内は妙な沈黙に包まれていた。

恐る恐る二人が病室の扉を開けてみると…そこには顔馴染みの面子がいたのであつた。そしてベッドの上には赤髪の少女が横たわつていた。

「ロゼ！」

エレノアがびつくりしてロゼツタのもとに駆け寄つた。…彼女の頭や腕には包帯が巻かれ、わずかに血が滲んでいた。

「…安心して下さいエレノアさん。彼女の状態は安定していますから」

ベッドの横にいたエリオットがそう優しく話しかける。

「そ、そうか…よかつた…ロゼが無事で」

エレノアはホッと胸をなでおろした。確かに、よくよく見ればロゼツタは実に穏やかな表情で眠っていた。

「医者が驚いてわよ？この回復力は異常過ぎるって。おかげで誤魔化すの大変だつたんだから！」

同じくベッドの横にいたイブキがそう言う。

「はは、そいつは確かにご苦労様だな」

ティティスが言った。

「だけど…なんでさつきまで捕まつてたのに急にココに案内されたのかしら…??」

ミーシャがそう首を傾げながら言うつと、

「ああ、コイツの親父の計らいだよ。…なんてつたつて勇者協会の

会長の命令だからな」

シロがそう言っただけでエリオットを見ながら答えた。

「えっ!？」

エレノア達三人は驚いてエリオットを見た。

「そ、そんなに驚かないでくださいよ。いくら父でもこの状況を理解してもらうには骨が折れましたよ……ただ、ロゼッタさんと一緒に黒コゲになった魔物が発見されたんでだいぶ信用されたみたいですが」

エリオットは言った。

「なるほど、結局俺達が助かったのはエリオットのおかげってわけだな」

ティティスがそう言う。

「……で、再会して早々で悪いんだけど、私達と一緒に来てくれない? ……政府や軍の高官と色々話を付けなくちゃいけないみたいなのよ」

イブキがちょっとめんどくさそうに頭を掻きながらそう言う。

「俺達は証人ってか……そんなじゃあ仕方ない」

ティティスはあっさりとなだめた様子。

「……めんどくさいなあ……まあ、私も行くよ、色々文句もあるしね。」

エレノアはどうする……って、聞くまでも無いが。全員行く必要も無いだろうし、ロゼッタをお願いね……」

「ああ……そうするよ。なんかすまないな」

「気にしないでよエレノア。ちゃんと私達が話をつけてくるからさ……!」

イブキがそう言ってエレノアを元気付けるように肩を叩いた。

「また適当に顔出すつもりだけど……なんかあったらすぐ言えよ?」

「うん……ありがと」

エレノアはティティスの言葉に頷いた。

その後、ティティス・ミーシャ・イブキ・エリオット・シロの四人

と一匹は病室を後にした。

…病室にはエレノアと眠ったままのロゼッタの二人だけが残された。エレノアはロゼッタが眠るベッドに肘を乗せるような感じで床に座って陣取った。…静かな病室の中、彼女の寝息だけが聴こえた。

「…結局、また何もしてやれなかつたんだな…」

ロゼッタを見つめながら、エレノアは哀しげにそう呟いた…。

《二人の想い》

…その日の夕方、一通り政府高官達との話し合いを済ませたミーシヤは独り軍病院の屋上で沈み行く夕日を眺めていた…。

「…ふう…どうも堅苦しい話しはめんどくさくて嫌いだよ。ま、物分かりの良い連中で助かったけど…」

帝国の政府高官達は、ミーシヤ達の主張を快く信用してくれた。おまけに、旅の援助も申し出てくれたのだ。しかし、国家間の問題に発展しかねないため間接的な援助しかできない。…そこで、移動に便利な小型飛行艇を貸してくれることになった。これで移動は格段に速く楽になるのだ。もちろん、ティティスがいるから運転手の心配もないとゆうわけだ。…ちなみに、選挙で新しい王様が決まるまでのしばらくの間は政府高官達が協力して国を運営するそうだ。もっとも、この世界は非常に地方自治が発達しているため国全体が混乱する可能性は極めて低いのではあるが。

「…こうやってのんびり夕日を眺めるのも久しぶりだなあ…最近なんだかねで慌ただしかったから…」

ミーシヤがそんなことをぼやいていると…

「へえ…やる気のなさそうな顔して意外とロマンチストなんだ」

後ろからイブキがそう話しかけてきた。

「…この顔は生まれつきだよ」

「ふふ、ごめんごめん！あれ、他の仲間はず」

「エレノアとロゼッタは病室で爆睡中、ティティスは飛行艇のメンテナンスに同行してると思うよ。…この飛行艇で、約束通りジパングにロゼッタを連れて行けるわけだねイブキ」

ミーシャがそう少しだけ皮肉を込めて言った。

「そんな言い方しないでよ。大丈夫、危害は加えないから…たぶん」

「ま…ロゼッタに危害を加えられる人間はそうそういないだろうからその点はある限り心配無いんだけどね」

ミーシャは苦笑いした。

しばらくの間、ミーシャとイブキは黙って夕日を眺めていた。…やがて夕日が地平線に消え漆黒の夜空に星々の輝きが増す頃、イブキがこんなことを話し始めた。

「…知ってる？昔、私の師匠から聞いた話なんだけどね…赤い悪魔が世界を焼き尽くすよりも遙か昔に月から恐ろしい魔物がやって来て世界を滅ぼそうとしたんだって」

「へえ…初耳だよ」

「ジパングではよく昔話なんかに登場するんだけど…その時は様々な種族が敵味方関係なく力を合わせて戦ったんだ。…そのおかげでなんとか月の魔物を封じ込めることに成功したんだってお話だよ」

「…世の中には赤い悪魔よりもさらに恐ろしい存在があるのね…今度詳しく調べてみようかな」

無関心なミーシャも、どうやらこの話には興味があるようだ。

「今でも月の魔物はこの世界の何処かに封印されているらしいよ。

「師匠は確かこんなことも言ってたよ。…本当に怖いのは闇そのものではなく、闇を恐れる人の心だ…って」

「…深いね」

「最初は何を言ってるのか私には解らなかったけど…なんだか赤い

悪魔…ロゼッタと接してそれが何を意味するかちょっとだけ理解できたような気がする」

「…そうね…言われて見れば…なんだかそんな気もするわね…」

二人はまた黙って星空を眺めた…この時二人は何を想い、そして何を考えていたのだろうか…それは誰にもわからない…。

《それでも…》

「…ん…あ、こじは…」

…エレノアが気がつく、目の前ではロゼッタが寝息をたてていた。「そっか…確かロゼの看病のために病室に残って…いつの間にか寝ちまったのか」

ようやくうたた寝から目覚めたエレノアがふと窓の外を見てみると…既に日は沈み景色は真っ暗になっていた。

「もう夜か…ずいぶんと時間が経ってたんだな」

…エレノアはなんだか急に切なくなった。

「…よくやくお目覚めになったみたいだね、ノアちゃん」

エレノアが窓の外を眺めていると、さっきまで眠っていたとばかり思っていたロゼッタがそう話しかけてきた。

「ロゼ！お前、起きてたのか！？」

「つい一時間前ほどからね…ありがとう、ずっと側にいてくれて…」
ロゼッタは相変わらずベッドに仰向けに横たわりながらそう言った。
…なんだかいつもより声に元気は無く、瞳の赤色も薄く感じられた。
「何言ってるんだよ！私がお前の側にいなくて他に誰がいるんだよ？
…それよりも…傷は大丈夫なのかロゼ？」

「うん、だいぶ派手にやられたからね…確かに損傷は酷いけど治らないわけじゃないよ。明日になればいちおう動けるようにはなれる

と思う。…魔力の回復にはもう少し時間がかかるけど」

「そっか…すまないな」

「ふふ、何を謝っているのノアちゃん？そんなに気を使わなくてもいいって約束でしょ？」

「い、いや…でもよ…」

エレノアがすまなそうな顔をするのを見て、ロゼッタはこう静かに言う。

「確かに傷つくのは嫌だけど…昔みたいにただやみくもに他人を殺しまくってた時よりは格段にマシだよ。ノアちゃんと出会ってからしばらく後にね、実は決めたんだ。…誰かのために戦えるなら…わたしは喜んで傷つくって…」

「ロゼ…」

さらにロゼッタはこう続ける。

「傷は凄く痛いよ…でもそんなの治そうと思えばいくらでも治せるし、また元気を取り戻せる。

…だけれども…わたしは失ったら二度と取り戻せ無いものをよく知ってるから…」

「…」

「…不思議だね、ただの兵器として試験管の中で生まれ育ったわたしがこんな人生を歩むことになったなんてね…」

「…ばかやろう、人生は自分自身で決めるもんだろうが。もし誰かがお前の幸せを妨害しようものならば…そいつはこの私が絶対に許さん」

エレノアはそう言った。

「…ノアちゃん…」

「試験管で生まれようが何処で生まれようが…お前は自由なんだから、自由らしく振る舞っていいんだ。例え神がそれを承諾しなくても…私がお前の自由と幸せを保証してやる」

「…ふふ、ありがとうノアちゃん。ホント、胸はないくせに言うことはビッグなんだから！」

「あつ、こいつめ！」

「冗談だよ冗談！」

…さて、わたしはもう一眠りするよ。そっちの方が治りが速いからね。

いっぱい眠っていっぱいノアちゃんの美味しいゴハン食べて早く回復して…早く元気になって…またノアちゃん達と楽しく…お話ししたい…な…すー…すー…」

そんなことを言いつつ、ロゼッタは再び深い眠りについたのであつた。

「やれやれ…相変わらずマイペースなやつだなあロゼは…」

エレノアはちよつとだけ嬉しそうにロゼッタを見ながら言った。それから、再び窓の外を眺めながら独りこう呟いた。

「…言われてみれば…私も旅の道中でまさかこんなにもたくさん大切な仲間達と出会えるなんて夢にも思わなかったなあ…きっとこれが運命の出会いとか、かけがえのない出会いとゆうものなのだろうか…」

…この時、暗い夜空に輝く星々を仰ぎながら少女は様々な想いを繰り返して自身に問っていたのかも知れません…。

第三十六章 Breathing period (後書き)

今回は、久々に番外編を書かせていただくと思います。内容は…
テイテイスがまだエレノア達と会う前のお話し…とだけ紹介して、
お別れの挨拶とさせていただきますね。
それでは、次回にまたお会いしましょう。

第三十七章 番外編 奏でるもの、奏でられるもの（前書き）

…昔々、あるところに氷使いの少年がいました。

そんな少年はある日、とても美しい魔物の少女と出会いました。そして、少女と接するうちに大切なことをたくさん学びました。

しかし少年はある時、事件に巻き込まれて死んでしまいました。でも、少女が自らの命と引き換えに生き返らせてくれたので少年はなんとか命を失わずにすみました。

少年はその後、色々な人々と出会いました。でも…この時に出あった少女のことは決して誰にも話さなかったそうです。

それでも、少年の心の中にはいつまでも少女の存在があったとゆうことです…終

第三十七章 番外編 奏でるもの、奏でられるもの

ビブロン：それは東の大陸、共和国のほぼ中央に位置する何処にもある普通の町であった。しかし先日、町が魔物に襲撃されたと言う情報が共和国の首都シランドに入ってきていたのである。…そんな危険であるはずの町に、一人の少年がやって来ていた。

「やれやれ…ようやく到着したよ。魔物退治なんて面倒くさいことは俺じゃなくて攻撃系の姉さんがやればいいのに…ま、どうせ暇だったしな」

ホワイトカラーの髪と金色の瞳をした少年は町に着くなりそう不満を呟く。…そう、この少年こそ共和国特殊部隊『エフェクト』の一員であり今回の魔物騒動の調査と魔物討伐の任務を共和国政府から任されているのである。

「…にしてもだ、また随分とひどいさまだな」

少年が町に到着した時には既に町は廃墟と化し、人影も無かった。多くの人は近くの町に避難したそうだが、それも納得できるほどに荒れ果てていた。

「こいつはよっぽど凶暴な魔物の仕業か…あるいは集団か、いずれにしても原因調査が最優先事項だからな。相手を俺一人で殺れないならば無理しないで応援を呼ぶことになってるし…まあ、散歩がてら調査開始としますか」

少年はそう気楽とも思える台詞を言った。

少年は一人廃墟の町を歩き回ったが、当然誰もいない。焼け焦げた家屋と瓦礫の山がただあるだけだった。元々着いた時間が遅かったこともあり、町のほぼ全域を散策し終わる頃には既に夕方になっていた。

「結局、何も手がかりはなかったな…仕方ないと言えば仕方ないか」少年はそうため息をつく。元来、少年はこのような面倒くさいこと

は嫌いだったし人助けにも興味はなかった。もしもこれが命令でなければ、きっと少年はこんなくだらないことはやらなかっただろう。その命令を下した政府にだって別に好き好んで入ったわけではなかったのだから、少年のやる気はそれほど多大なものではなかった。

「あーあ…なんだかなあ、どうせなら明日の朝までに何もなかったらこのまま帰ってしまおうか？ああそうだ、きつとそうしよう」

少年はそう言った。…しかし、残念ながら少年のその考えはすぐに否定されることになった。

「きゃあ！やめてください！」

「大丈夫だってお嬢さん、その身に着けてる綺麗な服さえ渡してくれば何もしやしないよ」

「そうそう、ホラさつさと脱ぎな小娘！」

…少年のすぐ近くの瓦礫の山の向こう側からそんなやり取りが聞こえてきた。彼が瓦礫の山越しに声のする方向を覗いてみると、一人の少女が三人の小さな人のような形をしたものに囲まれていた。

「ゴブリンか…噂には聞いていたが見るのは初めてだな」

ゴブリンとは魔物の一種で小鬼とも呼ばれる下等な種族である。世界中に点在し、少人数で狩猟などの原始的な生活を送っているとされている。旧世界の時代には今よりもはるかに多くのゴブリンがいて小さな国家のようなものも構成していたらしいが、現在では稀な存在となっている。無論、少年もゴブリンを見たのは初めてだった。「ただでさえ最近は見ること珍しいゴブリンが何故こんな町中に…もしかしてこの事件と何か関連が…？」

少年はそう色々とあれこれ思考を張り巡らせていたのだが…

「おい！さつさとよこしな！」

「きゃー！」

少女の声で我に返った。

「…って、今はとりあえずあの娘を助けないと！」

少年は瓦礫の山を飛び越えると急いで少女とゴブリン達の所に駆け寄った。

「!!!」

「誰だてめえ!?!」

少年の突然の登場に驚いたゴブリン達は揃って身構えた。彼らの手には形の歪な棍棒のような武器が握られていた。

「おいおい、それはこっちの台詞だぜ?ゴブリン風情が何故ここに?」

ゴブリン達に対して少年は冷静に、そして少し小バカにしたように言った。

「う、うるせえ!やっちまいな!」

そう言つてゴブリン達は一斉に少年に襲い掛かってきた!

「野蛮だなあ、もう…!」

少年はため息をつくと手の平をゴブリン達に向けてかざした。すると、手の平から小さな氷の刃が無数に飛び出しゴブリン達に切りかかった!

「ぎゃあ!」

「いでででで!」

ゴブリン達は痛みと冷気にたまらずおののき後ずさった。

「どう?これでもまだやる?」

少年が余裕そうにゴブリン達に言う。

「ち…畜生!覚えてやがれ!」

「親分に言いつけてやるからなっ!」

少年に傷だらけにされたゴブリン達は捨て台詞を残すと、悔しそうにその場から駆け足で逃走していった。

「なんでえ、つまんないの」

少年はつまらなそうに頭をポリポリ掻きながら言った。

「あ、あのう…助けてくれてありがとうございます」

さっきまでゴブリン達に囲まれていた少女が深々と頭を下げながらそう少年にお礼を言った。

「え、まあ…人助けは基本だからな…うん」

少女のお礼に、少年は少々照れくさそうに答えた。…無理もない、

少年が落ち着いてよくよく見てみれば少女は今までに見たことのないような絶世の美少女だったからだ。白金に輝く長く細い髪はまるで金の糸のように、金色に輝く透き通った瞳はどんな宝石よりも美しく魅力的に見えた。そして、まるで雪のように白い肌と純白のドレスがその美しさをよりいっそう際立たせていた。…目のくらむような美しさとはまさにこのことを言うのであるうか。

「助けてもらって言うのもなんですが…ここは危険だと思うのではない方がよろしいかと」

少女がそう言うので、

「そいつはこっちの台詞だって。あんたこそ、何でこんな廃墟になった町にいるんだよ？」

少年はそう質問した。

「あ、それはですね…えーと…特に理由はありませんね。興味本意とでも言うっておきます」

少女はちよつとだけ申し訳なさそうに苦笑いしたのだが、その笑顔の可愛らしいことと言ったら。

「え…何その理由…信じられない神経の持ち主だな」

少年は呆れてものも言えない様子。

「ふふ、ごめんなさい。確かに過去には色んな人々に時々そのようなことも言われてましたね。…あ、申し遅れました。私、ねおん音音と申します」

「あ、俺はティティスって名前だ。えーと…音音はこの近くに住んでるのかい？」

ティティスは音音に何を話しかけていいのか正直わからなかったの
で、とりあえずそう聞いてみる。

「ええ、すぐ近くに。ティティスさんは？」

「俺か？俺はシランドから来たんだよ」

「首都ですか？懐かしいですね、あそこはにぎやかで良い所でした」
「知ってるのか？」

「はい、かつていたことがあるもので…でもなぜわざわざシランド

からこのビブロンに？」

「ああ、そりゃあ…政府の命令でこのビブロンを襲ったって言う魔物の調査に来たんだよ」

「政府の関係者なんですか？まだお若いのに…」

「あのな、俺はもう15歳なんだよ。だからそんな子供を見るような目でみないでくれよ」

「あ、すみません…背丈も私と大して変わらないものでつい…」

「だから…気にしてるんだから言うなって」

ティティスは顔を赤くしながら言った。

「それよりさっきの氷凄かったですね。魔法ですか？」

「いや、魔法と言うよりは生まれつきの能力と言うか…」

「それじゃあすごいんですね、ティティスさんは」

「まさか、別にこんな能力ちからなんて欲しくて得たわけじゃない。むしろこんな体、誰かと交換できるならそうしたいくらいだよ」

…ティティスはそう氷のような冷たい視線で言った。

「…」

音音はそれ以上何も言わなかった。

「…それよりもだ、今後の予定をどうするか考えなくっちゃな。もうすぐ日も沈む」

夕日で赤く染まる瓦礫の山を眺めながらティティスはそう言った。

「どこかに泊れるあてはあるのですかティティスさん？」

「はは、まさかこんな瓦礫の町で泊まれるような場所があるとでも？」

ティティスがそう嘲ると…

「…あります」

音音はそうキツパリと言い放った。

「は！？」

「私の家においでください。たいしたおもてなしはできませんが…せめて何かお礼をしないと」

「え、まあ…それはありがたいけれど、親御さんとかは大丈夫なの

？年頃の娘がこんなどうしようもない男を家に招いちやって？」

「あ、それなら大丈夫ですよ。私、独り暮らしですから」

「えー！？そうなの？」

「そうですが…何か変なこと言いました私？」

「あ、いや別に…（こんな美人さんでしかも年頃の娘が独り暮らしって…姉さんみみたいな野蛮人ならともかく、大丈夫なものかねえ…）」

「テイティスはそう首を捻った。」

「さつき近くと言いましたが、私の家は町外れにあるので少々お時間がかかりますよ。…それじゃあ、日が暮れてしまいう前に出発しましょうか？」

「あ、はい…そうします」

結局、テイティスは音音のペースに乗せられるがままに彼女の家に泊めてもらうことになったのでした…。

《忘れられた屋敷の主》

「…着きましたよ。ここが今の私のあるところです」

「はあー、でつけえお屋敷なこと！」

音音に連れて来られた大きな屋敷を前に、テイティスはそう感嘆の声をあげた。その大きな屋敷は、町の中心部から一時間程度歩いた所にある小さな林の中にひっそりとたたずんでいた。とても大きく立派で、さぞかし立派な人物が住んでいたであろうことは容易に予想できた。…しかし、屋敷の入り口に構える大きな門は既に錆びていて壊れており、庭の草木も伸び放題で荒れ果てている。屋敷の中には明かりも人の気配すらなく、まるで何年も前から人が住んでいないようなそんな感じだった。

「さ、中にお入りください」

音音は近くに置いてあつたらうそくにマッチで火をつけた後、静か

に玄関の扉を開けながらそうティティスに言った。

「あ、ああ……」

ティティスは不思議に思いながらも、音音に導かれるがままに屋敷の中へと足を踏み入れた。入るとすぐに、吹き抜けになった大広間とその天上から下がる光の灯っていない大きなシャンデリアが目についた。明かりは音音が持つろうそくだけのはずなのに、不思議と屋敷の中はそれほど暗くはなかった。そんな大広間を通り抜けて二階にあがる大きくて幅広の階段を上り、ティティスは二階にある一室の前に案内された。

「……ここが今晚、殿方がお泊りになるお部屋でございます」

そう言つて音音は部屋の扉を開けた。屋敷の外見同様、少々古い感じではあったが部屋は広々としていてキッチンと整理整頓されていた。洋服ダンスとシングルベッド、それに丸テーブルとイスのセットが一つずつ置いてある。

「大変申し訳ありませんが……わけあつてご夕食とお風呂はご提供できませんのであらかじめご了承ください」

音音はそう言った。

「わかつたよ。屋根がある場所で泊まれるだけありがたいよ」
ティティスはそう答える。

「それでは、また明日の朝お会いしましょう……おやすみなさいティティスさん。今日は色々とありがとうございました」

音音がそう言ったので、

「いいつてことよ。おやすみ音音」

ティティスはそう言った。

「……あ、一つ言い忘れてました。夜中はあんまり出歩かないくださいね。秘密を知られるのはいささか気まずいものなので……それでは、良い夢を……」

音音は笑顔でそう意味深な言葉を残すと、部屋の前の暗い廊下へと静かに消えて行きました……。

「……なんだか世の中不思議なこともあるもんだなあ……？」

当然ながらティティスはどうやら一連の流れに納得できない様子。

「お風呂ダメって、そこにバスタブあるじゃんか」

そう、ティティスが泊まるこの部屋の端にはちゃんとカーテンで仕切られるようになっていたバスタブがあったのだ。

「よっぽどケチなのかね、あの娘は…」

そう言っただけでティティスは蛇口をひねった…のだが、まるで水が出ない。

「あれ？故障かな…？」

しかし、割とこういつた仕掛け物に詳しい彼から見ても壊れた形跡は見つけられなかった。…つまり、最初からココには水など来ていないことになる。

「水が止められているのかこの屋敷は？だとしたらあの娘はどうやって生活を…？」

ティティスはふと部屋を見渡した。よくよく見れば、あちこち蜘蛛の巣だらけでほりも溜まっていた。…どうやらもう長年手入れされていないようである。

「…おかしい。おかしすぎるだろこの状況…もしかして、今回の町の一件と何か関係があるんじゃない？」

彼はしばらくそうやって何か考え事をした後に、部屋の窓の近くで足を止めた。そして、窓の外に広がる夕闇の景色を眺めながらこう独り呟く。

「この屋敷には何か秘密がありそうだな…彼女には悪いけど、色々探らせてもらおうよ」

《ゴブリンの要塞》

草木も眠るであろう丑三つ時…ビブロン町の町からそう遠くない森の一角にあるゴ布林達が作った木造の粗末な要塞の中で、三匹のゴ布林達が何やら一人の男と話していた。

「…で、本当なのだろうなその少年が氷を使って攻撃してきたと言

うのは？」

スーツ姿で巻き髭を生やし、方眼鏡とシルクハットを身に着けた細身で長身のインチキマジシャン風の男がそうゴ布林達に聞いた。

「へ、へい…間違いありませんですぜ。パナクエ様！」

「あいつく、めつちや強かったですよう」

ゴ布林達はそう口々に言った。

「く…能力者か、おのれ共和国政府め。まさかこんなに速く手を打ってくるとは計算外だった。…まあよいわ、相手は所詮子供…このパナクエ様の敵ではない…！」

男は自らの親指の爪をかじりながらそう言つのであつた…！

《ピアノの秘密》

真夜中、大きな古時計が午前三時を指す頃…ティティスは自分の泊まっている部屋をこっそりと抜け出そうとしていた。

「するなと言われると余計にしくなるのが人間の性ってもんだぜ。…さすがにこの時間はあの娘も起きてはいないだろう」

彼はそう自分に言い聞かせながら、屋敷の中を見て回ることにした。彼のいる二階には数多くの部屋があるようで、思っていた以上に複雑に入り組んでいた。

「くっそ…暗くてよく見えないな」

窓から差し込む僅かな星明かりを頼りに彼は薄暗い廊下を進み、見つけた部屋の扉を片っ端から空けてみる。…しかし、どの部屋も空っぽで何もなかった。床や壁には所々ぽっかりと穴が空き、天井には蜘蛛の巣とほこりの混じったものが縦横無尽に張り巡らされているだけであつた。

「…何も無さ過ぎていよいよ不気味になってきたな」

ティティスはそう身震いした。…何も無い二階を後にした彼は次に屋敷の最上階、三階へとやってきた。部屋数は二階ほど多くはなく、やはり空っぽの部屋ばかりであつたが一番奥にある部屋の扉を開け

てみるとそこには今までとは違った風景があった。

「ここは…もしかして書斎か？」

そう、そこは屋敷の主が一日の大半を過ごしたであろう書斎であった。大きな窓の前にはかつて主が座っていたであろう机があり、部屋の壁側にはぎっしりと書物がつまった本棚が隙間無く置かれていた。…ティティスはその本棚に近づくと、一冊の本を取り出して開いてみる。

「…どうやら音楽関係の本のようだな。それもかなり詳しく書かれている」

彼は他の本もいくつか開いて読んでみたが、そのほとんどの本が音楽に関連するものであった。

「この屋敷の主人は音楽家か…あるいはよっぽど音楽が好きな人物だったんだろうな」

ティティスはそう言っつて本を本棚に戻すと、次に机の上や中を見てみることにした。

「特に机上には何も置いてないな…引き出しの中は…ん？これは…」
ティティスは引き出しの中から一冊の古びたノートを発見した。中を開いて見てみると、屋敷で起こった日常的内容が途切れ途切れに綴られていた。…が、彼はその日付を見て驚いた。

「おいおい…これって80年も前の日記じゃねえか！…と言う事は、この屋敷に最後に人がいたのは80年前のことになるけど…それじやあ、あの娘は何者…？本当にただここに住んでるだけの人間なのか？」

そんなことを考えながらも、彼はさらに日記をよく調べてみた。…すると、こんな事柄が記してあるのを見つける。

「え〜と、なにに？ 年××月 日、我が家に新しいピアノが届く。今までピアノの無かったこの屋敷と私にとってはこの上なく嬉しいことである。何でも、このピアノはシランドの有名な職人が作ったという折り紙つきの一品で、その音色は奏でる者の心に反応して七色に変わるといふ幻の品だそう。幻のピアノとゆうこと

で名前もちゃんとあるそうだ。その名前は…」

…次の瞬間、その名前を読んだティティスの背中に悪寒が走った。

「マジかよ…こんな偶然ってあるものなのか？いや、これがもし偶然でないとしたら…」

その時だった、どこからともなく美しいピアノの音色が聞こえてきた。ティティスは我が耳を疑ったが、そのテンポの良い曲は確かに書斎の外、屋敷の下の方から聞こえてくる。

「こんな真夜中に一体誰が…？」

彼は急いで音のする屋敷の一階へと降りていった。…すると、一つの部屋の閉ざされた扉の隙間から光が漏れているのを見つけた。

「…間違いない、この部屋だ」

ティティスは静かにその部屋の扉を開けた。するとどうだろうか、部屋には大きなグランドピアノが置いてあり誰かがその前に座ってピアノを弾いていた。…それは紛れも無く音音であった。

「おや、夜中は勝手に出歩くなと申しましたのに…お恥ずかしいところを見られてしまいましたね」

彼女は両手を鍵盤から膝の上に移しながらそう言った。

「悪いな、俺は天邪鬼な性格なんでよ。…色々この屋敷のことについて調べさせてもらったぜ」

「そうですか。…何か面白いことはお分かりに？」

「もちろん。少なくとも80年以上この屋敷には誰も住んでいないこと…それに、お前が人間ではないこともな」

「…おっしゃっている意味がよくわからないのですが？」

「とぼけんなよ。日記を読んでいたら面白いことが書いてあったぜ？今お前が弾いていたピアノ、音音ねおんって名前なんだってな。お前の名前と同じ…いや、お前自身のことなんだろ？」

「…そうですか。ティティスさんは私の秘密を知ってしまったのですね。…おっしゃる通り、確かに私は人間ではありません。年齢300年のピアノに宿る魔物です」

音音はそう正直に話した。

「物質系の魔物の中でも特別なもの…物質本体とは別の姿形を持つエレメンタル系の魔物か…噂には聞いたことがあるが見たのは初めてだ」

ティティスはそう言った。

「あ、あの…魔物を間近にして怖くないんですか？」

「音が恐る恐るそう聞いてきたので、ティティスは少しムツとして、
「アホか！魔物退治は俺の専門の一つだ。そもそも、お前みたいな魔物が怖かったら昼間のゴブリン達なんて相手しねえって」
と、彼女に答えた。

「あつ…そ、それじゃあ…ティティスさんは私を退治しに来たのですか？ひ、ひどい…私まだ何にもしていないのに…せっかくお家にも招待してあげたのに…ひっぐ、えぐ…」

ティティスがあまりにも冷たい目線で色々言うので、とうとう音音は泣き出してしまった。これには、流石のティティスもかなり焦った。

「え、いや…ごめん、その…別にそんなつもりは…」

それでも音音はなおも泣き続ける。

「わかったわかった！俺が全部悪かったって！別にあんたが魔物だからって差別しないし、退治なんかしないよ！この通り誤るから、頼むから泣かないでくれよ」

もうティティスに男のプライドなんて関係なかった。とにかく、目の前で魔物とはいえ可愛い女の子に泣かれては彼の男としての良心がひどく傷つくからだ。

「グスン…本当ですか？」

音音はようやく泣くのをやめてくれた。

「もちろんですから！これからも仲良くさせていただきますって」
ティティスは必死に彼女にそう訴えた。

「よかったあ、ティティスさんが良い人で！私、そう言ってもらえてとっても嬉しいです」

音音は、まるでさっきまで泣いていたのが嘘のようなパーっと明

るい笑顔でそう言った。

「ああ、それを聞いてこっちも安心したよ。…はあ、もしかしてこの娘は今まで出会って来た魔物の中でも最強クラスなんじゃないかなるか…？」

ティティスはそうため息をついた。

その後、落ち着いた音音とティティスは寝るのもなんなのでお互いに雑談でもすることにした。音音の出してくれたクッキーと紅茶を話のつまみに、部屋に置いてあった小さな机とイスに腰掛けて二人は色々と話す。

「なあ音音、この屋敷の主人ってどんな人物だったんだい？」

「ええ、フロントーサ様はとてもお優しくて立派な方でしたよ。奥様と三人のお子さん、それにたくさんの従者に囲まれてそれは幸せそうに暮らしてましたね。それに、彼は音楽をこよなく愛する人物でもありました」

「あ、やっぱり。書齋を見たけどすぐに趣味が音楽だってわかったもん」

「フロントーサ様は生前よく楽器を演奏されていました。それにこんな口癖もありましたね」

「どんな？」

「…音楽に超えられない壁は無い。いつかこの音楽と言う素晴らしき宝を通して世界中の全ての種族が幸せかつ平等に存在できることを私は信じる…ってね」

「へー…そりゃあまた大きな願望だな」

「そうですね、確かに世間から見れば人間と魔物が分かり合えるはずなんてないと思われませんか。…それでも私は信じたいのです。いつか必ずご主人様の志は実現するんだと」

「ん、確かに不可能じゃないのかも知れないけど…」

「あら、どうしてそんなにネガティブなんですか？今だって、こう

して人と魔物が仲良く同じテーブルの物を食べて話し合っているじやありませんか？…全ては不可能でも、少なくとも今よりはわかりあえるはずです」

「むむ…確かにそうだけど、なんか納得いかないよ。だって魔物って人間を襲うイメージがあるし」

「…主人は音楽以外のことで、かつて世界を滅ぼしたことがある強大な魔物…月光院と赤い悪魔についても研究していました」

「…！」

「二匹の魔物は生きた時代こそ違いますが、多くの共通点があると主人は言っていました」

「共通点？」

「たつた一人で世界を滅ぼしたこと、二人が実は人工の魔物であった可能性があるということ、いずれも強大な魔力を持っていたこと…あげればキリがありませんが、その最大の共通点は怒りの感情です」

「怒りの感情…？」

「はい、二匹の魔物は何らかの出来事がきっかけで憤慨して暴走したと聞いております。詳しいことはわかりませんが…少なくともそれ以前は人間とも共存していたというのが事実です」

「なるほどね…あの月光院や赤い悪魔でさえもかつては人間と仲良くやっていたんだから、そんじょそこらの魔物と仲良く出来ないわけがないってか」

「…それでも、なかなか現実は厳しいって言うのが本音でもあったようですが」

「はは、そりゃそうだ。…ところで、音音は確かシランド生まれなんだよな？」

「はい、私はシランドでランドッグと言う名の職人さんに作られたんですよ。えーと、ティティスさんもシランド生まれなんですか？」

「…いや、違うな。俺は自分が何処で生まれ育ったか知らないんだ」「え？」「」

「俺には姉さんが一人いてな、二人とも何処の町かもわからない孤児院で育ったんだ。姉さんは覚えていても知れないが、少なくとも幼すぎた俺には両親の記憶は一切ない。俺と姉さんは生まれつき魔力の強い人間でな…俺は氷を、姉さんは炎を操る能力を身に付けていたんだ。ごく稀に生まれる能力者ってやつだが、おかげで人間のくせに魔力を持つなんて気持ち悪いと親には捨てられ、周りからは魔物のスパイとよくいじめられたもんだよ」

「そんな…ひどい…！」

「それが人間って生き物なんだよ。奴ら、自分と異なるものは何でも排除しないと気がすまないんだからな。だから魔物や他の種族、果ては同属とも平気で敵対できんだよ」

「…ティティスさんは、人間をお恨みになっっているのですか？」

「まさか、それが人間の当然の習性なんだから仕方ない。それに、奴らは使えるものは敵であろうと何でも使うんだ。この俺や姉さんも共和国政府にその能力を買われてこの仕事についたんだ。とにかく、魔物や反抗勢力レジスタンスを黙らせるにはもってこいの能力ちからだからね」

「そんな…まるでそれじゃあ…」

「そうだよ、俺はあくまで道具でしか過ぎないのかもしれない。それでもいいさ、今こうやって生きてるだけ幸せなんだから」

「そんなこと言わないでくださいティティスさん。私はピアノで道具にしか過ぎませんがあなたは違います、立派な人間なんです。…あなたを道具扱いする愚者はこの私が決して許しません…！」

「音音：意外とたくましい台詞を言うんだなお前」

「意外とって、ティティスさん…そんなに頼りなく見えるんですか私？」

「そうじゃないけど…昼間のこともあるしねえ」

「あ、そのことなんですけどね…さつき調べたらちよつと面白いことがわかったんです」

「何、その面白いことって？」

「昼間、町で私の服を盗ろうとしたゴブリンのことなんですけど、

食べ物ならともかく本来ゴブリンは自分達の利用しない人間の服や雑貨は盗まないはずなんです」

「へえ、なるほどそれで？」

「これはあくまで推測なんですけど…もしかして誰かがゴブリン達を誑かして悪事を働いているのではないのでしょうか？ビブロンを襲ったのがゴブリン達かはまだハッキリとはわかりませんが、可能性は十分あると思います」

「確かに言われてみると…そんな気もするな」

「あれ、魔物の調査に来ている割には淡泊な反応ですね…」

「そりゃあ、もう俺は眠くてしょうがないんだよ。俺はもう部屋に戻って寝るから…んじゃ、おやすみ音音」

「あつ、ちよつと…」

話が今回ティティスが町を訪れた理由の確信に入ると、彼はそそくさと部屋に戻って行ってしまいました。…まるで、何かを隠すかのよう。

「ティティスさん…絶対何か知ってる」

もちろん、勘の鋭い音音がこれを見抜けないわけはなかったが…。

《北の要塞》

「…雨でも降りそうな天気だな。こんな時に限って雨男が発揮されちまうなんてついてないよ」

…朝、ティティスは屋敷の玄関を出たところでそう嘆く。空は灰色に曇り、今にも泣き出しそうな空模様だった。

「昨日の町の様子…荒らされ方や足跡などからおそらく犯人はゴブリンと見て間違いないだろうな。足跡はほとんどが北の方向から続いていたから、それを辿れば事件は解決だ」

彼はそう言つと、早速屋敷をでることにした。もちろん音音には内

緒で…。どうやら、彼としてはこの事件と無関係だとわかった音音に無駄な心配はかけなくなかったようである。…しかし、屋敷の門に差し掛かった彼は思わぬ人物と遭遇することとなった。

「…おや、ティティスさん？こんな朝早くに何処に行かれるのですか？」

…音音だった。彼女がバイオリンのケースを片手に門の前に立っていたのだ。

「げげっ！？ね、音音！どうしてここに…」

「あら、私がピアノが上手いだけの魔物だと思ったら大間違いですよ？ティティスさんが何を考えているのか、私には全てお見通しなんですから。…手伝いますよ、一人で行くより二人で行った方が楽しいですよ？」

音音はそう笑顔で言った。

「…まったく、お前つてやつは…いいよ、どうせ断つても着いて来るんだらう？」

ティティスはそう仕方なく音音の同行を承諾するのであった。

ティティスが北に向かいたい意向を音音に伝えると、この辺りの地形に詳しい彼女は一番近くて安全なルートを教えてくれた。しばらく歩いてビブロンから北に伸びる道に突き当たると、ティティスの予想通りゴブリン達のものと思われるたくさん足跡が北に向かって付いていた。二人はその足跡を辿って北へ北へと進んでいった。…やがて、一時間程進んだ二人の前に突如奇妙な光景が広がった。

「これは…要塞ですかねティティスさん？」

「ああ、ちよつとお粗末だけだな」

二人の視界には木造の粗末な建造物が入っていた。単純な櫓や塀なども見受けられ、辺りをゴブリン達がうろついていた。…幸い、朝霧が出ていたおかげで視界が悪いのかゴブリン達は二人の存在にまだ気がついていないようだ。

「こんな所にこんなものがあるとは…いいよ今回の事件と関係あ

りそうだな」

「あれだけたくさんのゴブリンがいれば町一個襲えますもんね」

「ああ…さて、問題はどうかやって侵入するか…たぶん何処かに親玉がいるはずなんだが。奴らは烏合の衆だから親玉さえ叩けばいいんだが…どうしたもんだか…雑魚とは言え、さすがにあんなにたくさんのゴブリンは相手できないよ。…お前もいることだし」

「そうやってお荷物扱いしないでくださいよ。…いいですわ、これから起こることを見たらきつと前言撤回してくださいねティティスさん」

音音はそう言つと、おもむろにバイオリンとその弓をケースから取り出した。

「え…一体何を…??」

「…いいから見ていてください」

音音はそう言つて、呼吸を整えると静かにバイオリンの演奏を始めた。…その音色はまるでこの世のものとは思えないほど深く、優しく、そして素晴らしいものであった。そんなバイオリンが奏でる旋律が森中に響き渡る。

「なんだこの音色は?…あれ、なんだか急に眠く…ぐ…」

「これは…いつたい…何…ぐが…」

するとどうだろうか、まるで催眠術にでもかかったかのようにゴブリン達は次々と倒れこみ…いびきをかいて眠り始めてしまったではないか。

「…!」

その様子を目の当たりにしたティティスはただ呆然とするしかなかった。

「どうですか私の能力は?今は魔物の睡魔ちからを促す曲を演奏したんですが、曲目を変えれば人間も眠らすことができるんですよ。…これで前言撤回してくれますよねティティスさん?」

音音が笑顔でそう言つたのでティティスは、

「…参りました。俺が悪うございました…」

と言っしかなかった。…何はともあれ、音音のおかげで二人は寝ているゴブリン達の横を堂々と通って正面から要塞に侵入することに成功したのでした。

…まさか、後で二人にあんな悪夢が襲い掛かってくるとは夢にも思わなかっただろう…

《詐欺師の失策》

「くそっ！ いったいどうなっているんだ！？ おい！ 起きろこの役立たず共がっ！！」

その頃、眠ってしまい揺すっても殴っても一向に起きないゴブリン達の様子を見てパナクエは驚き焦っていた。

「畜生…こんな時にエフェクトの奴が攻めてきたら…！」

パナクエがそうやって要塞の中で右往左往していると…

「見つけたぞ、やっぱり親玉がいたんだな」

後ろからそう声がした。

「！？」

パナクエが驚いて振り向くと、そこには二人の少年少女が立っていた。

「まさか親玉が人間だったとはな…しかも誰かと思えばパナクエときた。どうやら頼りの手下が眠っちまって困ってるみたいだな？」

「え、知り合いなんですかテイティスさん？」

音音がテイティスにそう聞いた。

「パナクエ…政府のブラックリストにも載ってる極悪詐欺師だよ。」

その巧みな話術を駆使してこれまでに何度も重大犯罪に絡んでいる…おそらく、今回も上手いこと言っつてゴブリンを誑かしたのだろう。

金目の物を手当たり次第に略奪するって寸法だな」

「そんな…なんてひどいことを…！」
するとパナクエは、

「ははっ！何を言い出すかと思えば、騙されたゴブリン達が悪いに決まっているだろーが！…貴様らなんぞにこのパナクエ様の邪魔はさせんぞ…！」

そう言っただけからピストルを取り出した！…しかし、ティティスはいたって冷静だった。

「…お前は人間を…魔物をなんだと思っただけ？お前みたいな最悪なゴミ野郎に生きる資格なんて無えっ…！」

そう言い捨てると彼は氷の刃を放った！鋭い刃が一直線に宙を飛び、そしてパナクエのピストルを持った右腕を一刀両断に切り落とした！…切り落としたうでは地面に落ち、辺りに鮮血が飛び散る！

「うぎゃあああああああああ！！」

パナクエは恐怖と激痛で悲鳴をあげ、その場に座り込んでしまった。ザックリ切り裂かれた肩口からは血液がとめどなくあふれ出る…！

「…さあ、次はどうしようか？本来ならば本国の裁判で死刑にするべきなんだろうが、今ここで俺が殺してもそうは変わらないだろう…地獄に落ちるがよいパナクエ」

ティティスはもがき苦しむパナクエに凍りつくような冷たい瞳を向けてそう言った。

「ぐ、お…おのれえ…どの道地獄行きなら、貴様らも道連れにしてやるう…！」

そう言っただけ、パナクエは残った左腕を使ってポケットから何かを取り出す…手榴弾だ…！！

「…っ！！危ない音音！」

ティティスはそう叫びながら音を思いつき切り突き飛ばした！

「きゃあっ！」

「…ふはは！みんな死ねえっ…！」

…次の瞬間、パナクエは手榴弾のピンを引き抜いた。

…ドーン…!!

森の中に凄まじい爆発音が響き渡った…!

《ラスト最期の曲ナンバー》

「…ん…いてて… テイティスさんのおかげでなんとか無事みたいですね…」

…どのくらい気を失っていたのだろうか、音音が気がついた時には既に爆発があったことが嘘のように辺りは静まり返っていた。幸い、テイティスが爆発の直前に遠くに突き飛ばしてくれたおかげで彼女はかすり傷程度ですんだようである。

「…そうだ、テイティスさんは？」

音音が慌てて辺りを見回してみると、爆発の衝撃で壊れた木材やら巻き添えを食ったゴブリンの黒コゲの死体が散乱していた。…そして彼女はその中に、血まみれで仰向けになっているテイティスを見つけてしまった…!

「テイティスさん!!」

音音は慌てて駆け寄った…が、もう手遅れだった。体に大きな損傷こそ無かったが、彼の呼吸はすでに止まり鼓動もその旋律をもう奏でてはいなかった…。

「そん…な… テイティスさん… 私が… 私のために…」

…音音はその場に泣き崩れてしまった。大粒の涙がテイティスの体にあたって弾ける…しかし、それ以上何も起こってはくれなかった。…音音はしばらくの間泣いていた。しかし、やがてその金色の瞳に溜まった涙を腕で拭いこう呟いた。

「…いけない。こんなことしちゃいけない。ダメよそんなの…でも…それでも…私はこの人を…愛しいこの人を救いたい…!」

音音はそう言うのと近くに落ちていたバイオリンと弓を手にとり、こ
う祈りを捧げた。

「…我が偉大なる音楽の大精霊よ…我が全てを糧とし命無くしこの
者を救うことをどうかお許してください…！」

…呼吸を整え、彼女は演奏を開始した。その美しく神々しい旋律は
彼女によって時に優しく、時に激しく奏でられ、それと同時に二人
を暖かく優しい光が包み込んだ。…やがて、彼女は演奏を終え、楽
器を地面に置いた。…そして、奇跡は起きた…！！

「…う…あれ…俺は…」

…なんと、ティティスが息を吹き返したではないか！

「…おはようございますティティスさん。お具合はいかがですか？」
音音がそうティティスに聞いた。

「具合は…俺は確か爆発に巻き込まれて…」

「ええ、確かにティティスさんは一度お亡くなりになりました。…

でも安心してください、ここは天国でも地獄でもない現世ですから」
「え！？それってどうゆう…」

「…これでよかったです。楽器の幸せが演奏者の幸せであるよう
に…あなたの幸せがきつと私の幸せだから…」

…次の瞬間、音音はその場に崩れ落ちてしまった。

「音音っ！」

ティティスが慌てて倒れかけた音音を抱えあげる。

「…心配しないでください。あなたを復活させるために魔力を使い
切っただけですから…」

「なんだって…そんな…俺なんかのために…！？」

「…答えは簡単です…私は…きつとティティスさんのことを愛して
しまったからです」

「音音…」

「ふふ…バカですよね私…所詮はピアノの潜在意識体でしかない私
が人間の…それもあなたのような素晴らしい人を愛してしまっただけ
なんて…おまけに蘇生なんてゆう神の意思に反するような行為までし

ちやっただんですから…私は間違はなく地獄行きですね…」

「ばか…そんなことねえ…お前は世界一立派な魔物…いや、世界一誇り高きすばらしい楽器だよ…！」

「そう言ってもらえて恐縮ですよ…でも、もうあまり時間がないんです。魔力を全て使い切りましたから…間もなくこの身体も魂も消えて無くなります…あ、ピアノ本体はちゃんと残りますからご安心を。…今までにこんな幸せな時間はありませんでしたよ…短い時間でしたが…あなたと出会えて本当に嬉しかったです。…最期に…」

「ん？…なんだ？」

「…最期に…一つだけお願いをしてもよろしいでしょうか？」

「ああ…もちろんだとも、何でもお願いしてくれ」

…ティティスがそう答えた次の瞬間だった…音音は最期の力を振り縛って上半身を起き上がらせると、ティティスの唇に熱い口付けをしたのだった…！

「…！！」

「…さよならティティス…私が今までで唯一愛した人よ…」

…音音はそう言っただけで静かに目を閉じた…。

「…おい、おい音音ってば！死ぬなよ！おい！何か言えよ音音！」
ティティスがどんなに呼びかけても、もう音音は何も答えてはくれませんでした。そして、彼女の体は光の粉となって段々と薄くなり…やがて消えて行きました…。

さらに、それとほぼ同時に灰色の空から大粒の雨が降り始めました。

…少年は灰色に染まる空を仰いだ…もう、自らの瞳を濡らしているのがあの曇った空から落ちてくる雨粒なのか、それとも悲しみの涙なのか…彼にはわからなかった…。

第三十七章 番外編 奏でるもの、奏でられるもの（後書き）

…昔々、あるところに美しい魔物の少女がいました。

そんな少女はある日、とても格好良い人間の少年と出会いました。

そして、少年と接するうちにその少年のことを愛してしまいました。しかし少年はある時、事件に巻き込まれて死んでしまいました。でも、少女が自らの命と引き換えに生き返らせたので少年はなんとか命を失わずにすみました。

そのかわり、少女はこの事件で死んでしまいました。だから…彼女の存在を知る人はほとんどいません。

それでも、少女は最期に自らの想いを少年に伝えられたので今は幸せに天国で暮らしているそうです…終

第三十八章 雲の上を行く船（前書き）

今回は本編では久々の和やかな雰囲気の話です。最近の話の中では一番短いストーリーではありますが会話や雑談が多い分、人物達の価値観や考え方が表に出やすいのでぜひ注目してみてくださいね。

第三十八章 雲の上を行く船

「ねえねえティティス、ジパングまではどのくらいで着くの？」

「さあな、でもこの機体なら明日の昼までには着きそうだけ」

モニターを見ながらティティスはそうイブキに答えた。

「それにしてもよかったですね、自動航行機能の付いた最新式の飛行艇なんか帝国政府から貸してもらっちゃって。…おかげで操縦席の僕達はやることないんですが」

エリオットがそう言ったので、

「まあいいじゃないか、楽なんだし。あんたの親父さんのおかげで借りれたようなもんなんだしな」

ティティスはそう言った。

彼らが快適な移動をと帝国政府から提供されたこの灰色の飛行艇は小型ながらも最新式の機体で、自動航行システムを搭載し雲の上を飛行できる代物だ。二階建ての作りで一階にはコックピットと乗組員が寝泊りするのためのいくつかの個室があり、二階にはカーゴ室と展望台がある。機体の側面にはたくさんの小さなプロペラとジェットエンジンが搭載されており機動性は高い。おまけに敵を撃墜するためのレーザー砲まで装備されているから、旅の一行には心強い味方である。

「ところで、あの三人は何してるんですか？」

エリオットが聞いた。

「三人？…ああ、彼女達なら多分今頃シロと一緒に展望台にいると思うよ」

イブキがそう答えた。

「やれやれ、相変わらず呑気な会話でもしてるんだろうなきつと」
ティティスはそう苦笑いしたが、久々の穏やかムードに少し嬉しそう。

一行の目前には、波一つ無い穏やかな白い雲の海と果てしなく何処までも青い空が雄大に広がっていた…。

《空に馳せる想い》

「わぁー！すごい！わたし達雲の上を飛んでるよー！」

展望台の大きな窓の外に広がる純白の雲海を見て、ロゼツタが両手をブンブン振り回しながらそうはしゃいだ。

「そうはしゃくなよロゼ！また傷口が開くぞ」

エレノアが笑いながら言った。

「もう…本当に元気な娘なんだからロゼツタは」

ミーシャも呆れたように言う。でも、その顔は何だか少しだけ嬉しそうでもあった。本当は二人共、ロゼツタが元気であることが心底嬉しいのかも知れない。

「それにしても帝国のお偉いさん方はすごい物をくれたな。これだよやく母国に帰れる。もう長くて退屈な船旅はごめんだからな」シロが後ろ足で耳をかきながら言った。

「まあ、とりあえず帝国に潜んでいた悪党は退治したことだしな。

これで私達も少しは気が楽になったってもんだぜ」

「これで大国同士の戦争は回避できたしね。単純計算したって世界の半分くらいは救済したもんだよね」

「…何言ってるの。まだまだやることはいっぱいあるでしょ？バベルを起動させる鍵を見つけ出してサテライトに行って真実の鏡を手に入れて…めんどくさいったらありゃしない」

お気楽なエレノアとロゼツタにミーシャが呆れ顔でそう言う。

「そう言うなよミーシャ。だからこそ力を合わせて頑張ってきたんだから。あんまり細かいことは気にするなよ」

「そうだよ！これからもミーちゃんの活躍に期待してるよ」

「ま、それもそうね。四の五の抜かしても仕方が無い。あ、活躍できるかは別としてもね…」
「お前ら、よくまあそんなんで今までやってこれたな…ぶっちゃけ奇跡に近いような気が」
三人の会話を聞いていて、シロはつくづくそう思うのであった。

…その時、突然目の雲海が割け何かとつもなく巨大な物体がそこから湧き上がってきた！

「わっ！？なんだなんだ！？」

突然のことに驚きながらもエレノア達が窓に顔を近づけてよく見てみると、それはなんと巨大な空飛ぶクジラのような生き物であった。頭から尾の先まではゆうに100Mはあるであろうか。その体は雲と同じ純白で流線型をした美しい容姿であった。体の半分以上はあるであろう長いヒレをなびかせ、まるで大空を泳いでいるかのごとく艇から少し離れたところを並行して飛行しているのである。そして、さらに注意して観察してみるとその脇には小さなクジラもいる。

「驚いた、スカイホールの親子だ。大丈夫、体は大きいけども大人しい生き物だから」

物知りのミーシャがそう説明した。

「ほえ、でつかいクジラ！しかも空飛んじゃってるよ！」

「もうデカイとかそうゆうレベルじゃないだろこれは。でも…よく見ると目がクリクリしててちよつとカワイイな」

その生き物の黒くて大きな瞳には、大空の風景が反射して写っていた。…それはまるで『一つの世界』を見ているような、そんな気さえする。

「海のクジラは見たことあるが…これはもう規格外だな色んな意味で」

シロが思わずそう呟く。

「そうね、私も港町の育ちだからクジラとは縁が深いけど…まさか文献の中でなく現実にスカイホールに会えるとは夢にも思わなか

つたよ」

「そんなに珍しいのかミーシャ？」

「そうだよ。文献には一生に一度見られれば奇跡だって書いてあつたくらいだから。…しかも親子を見られたことを考えれば、私達は世界一の幸運の持ち主ってこと」

ミーシャはそう答えた。

「きつとわたしがいたからだだよ！だって、わたしのおみくじいっつも大吉だもん」

「…関係無いはずなんだけど…絶対に違うとも言い切れないのは何故…？」

無邪気に話すロゼツタを見て、ミーシャはそう苦笑いする。

…しばらくの間、彼女達は目の前を悠然と飛ぶスカイホエールの親子を黙って眺めていた。何に邪魔されることも無くゆっくりと、そして優雅に飛ぶ彼らの姿を眺めていると嫌なことなど忘れてしまいうようになった。ましてや、自分達の抱えている問題なんて実はほんのちっぽけな課題に過ぎないのでは…そう思えてしまうほどに。

…やがて、スカイホエールの親子はゆっくりと艇から遠ざかりやがて地平線の彼方へと消えてゆきました。そして再び、白と青のツートンカラーの静かな世界が目の前に広がった。

「…行つちまつたな」

シロがそう言った。…でも、三人は黙ってスカイホエールの消えていった方をただ眺めているだけであった。

「…。。…そうか、俺はもう行くぞ」

本当ならば無視されて怒るところだが、シロは黙って展望台を後にした。

彼にはわかっている。彼女達が普通の人間とは比べ物にならないくらい多くの、そして深い悩みを抱えていることを。それは彼女達が時折見せる悲しげな表情を見れば容易に予想できた。普段見せる明るい言動も、実は言い知れぬ不安と恐怖の裏返しだとゆうことも…。

「…そうか、あの娘達がいつも一緒にいる理由わけがなんとなくわかったような気がする…」

シロは一人静かにそう呟くのであった…。

《月と魔法使いと赤い悪魔》

「…今日は満月かあ…もう何度も夜空を眺めてきたけど…こんなに空高くから月を眺めたのは始めてかも…」

…真夜中、ミーシャは展望台から望む景色を眺めながらそう呟いた。天上に浮かぶ明るい満月が、辺り一面に広がる雲の海を白銀色に染めている。そのあまりの明るさに星々は息を潜め、まるで昼間と見間違えるほどに外は明るかった。強烈な月明かりが、展望台の大きな窓から彼女を照らす。

「…一度でいいからこんな幻想的な世界の中を飛び回ってみたい…って、私は何を言っているのだろうか？そんな夢物語が叶うはずもないのに…」

…ミーシャはそう言うと、また黙って月を眺めるのであった。

「あれ、ミーちゃん？こんな時間に何してんの？」

…突然、後ろから誰かがそう彼女に問いかける。

「…ロゼッタ…あなたこそ何を？」

展望台にやって来たロゼッタに、ミーシャはそう尋ねた。

「ううん、ちょっと眠れなくてね。月光浴でもしようかと」

ロゼッタはそう答える。

「…そうね、今日みたいな日は月光浴にはちょうど良いかもね」

「でしょ？」

「…他の人は？」

「みんな寝てるよ。ティーちゃんとエリちゃんは操縦席だと思っけど…あ、多分ノアちゃんはオナニーしてると思うよ。最近なんか回

数増えたよねー」

「…あ、そ…」

「ね、ミーちゃんもするのオナニー??」

「…まさか、あれは暇人のすることだよ」

「え、200年間一度も無いの?」

「…だからそう言ってるんじゃない」

「ふーん、なんかすごいねミーちゃんは」

「…ロゼッタはするの?…その…自慰は?」

「もちろんするよ!…時々だけけどね」

物怖じしないロゼッタが珍しく恥ずかしそうにそう言った。

「…そつか…そうだよ、それが普通だもんね…」

「しょうがないもん、女の子だし。なんでミーちゃんはしないの?」

「…めんどくさいし誰も好きな人いないし…とにかく無駄じゃんあれって。何かとてつもなく疲れるらしいしね…意味が解からない」

「相変わらずシユールな回答だねミーちゃんは…」

ロゼッタは苦笑いする。

「別にそんなじゃないよ…私はただ夢現の区別をハッキリさせた
いだけ。妄想は嫌いじゃないけど…現実をもっと大事にするべきだ
と思っただけ…」

「はは、ミーちゃんらしいや!」

「…でもね、最近は他人を愛することもそんなに捨てたもんじゃな
いって…そう思えるようになってきたの」

「あ、それわかるかも!」

「え?」

「わたしも昔は人間なんて大嫌いだったけど…ノアちゃんと出会っ
てから少しずつ人間のことを許せるようになったんだ」

「…なんだか私も彼女と出会ってから大きく変わったような気がする
…一体あの娘は何者なんだろうね?果たして、我々はこんなにも
一人の人間の影響で人が変わるものなのだろうか…?」

「さあ、でもノアちゃんはなんだか特別な感じがするのは確かだね」

…その後二人はしばらく黙って満月を眺めていたが、やがてミーシヤがこう言った。

「…満月って綺麗だよな。真ん丸くて明るくて…」

「うん、そうだよな」

「…でも、私は少しくらい欠けた月の方が好きだな」

「どうして？」

ロゼッタがそう聞くと、

「満月は明るすぎる…その完璧さ故に周りの星達の光を殺しちゃう。どんなに個人が光輝いていても…周りとの調和が無ければ真に美しいとは言えないと思うんだ。…本当はちょっとくらい不完全な物の方が、その物の美しさが強調される…よく言われる『不完全の美学』ってやつだね」

ミーシヤそう答え、さらにこう続ける。

「…不思議なものでね、人間ってのは時に不完全な物に心惹かれる。きっと、私達が彼女に惹かれるのはそうゆう心理からじゃないかな？彼女は確かに不完全で頼りないけど、完璧な満月と違って星々の輝きを殺さない…そう、私達みたいな存在を認めてくれる…彼女のそんなところに私達は知らず知らずの内に安心感や信頼感を抱いたのかも知れないね…」

「…そうかもねミーちゃん。試験管育ちのわたしにとっては…言い過ぎかも知れないけどお母さんみたいな存在だなんて時々思うの」
ロゼッタが言った。

「…ふふ、そうね。エレノアは面倒見が良いから…きっと彼女も私たちのことを自分の子供のように心配しているのかも知れないね」

「でも、わたしそんなに子供じゃないもん」

「…あー…自覚が無いって怖い…」

「え？何か言ったミーちゃん？」

「いや…何でもないよ。…それより…」

「それより？」

「…何で人間ってオナニーするのかね？」

「…きっと気持ち良いからじゃない？」

「…そうか…」

「ミーちゃんもしてみれば？」

「…」

「…ごめん、やっぱり何でもないや」

「…人間ってめんどくさい生き物だよね」

「いや、わたし人間じゃないから」

「…そんなスルーの仕方ってありなの…??？」

…満月の光が支配する夜の世界…時はゆっくりと流れていた…。

第三十八章 雲の上を行く船（後書き）

《コラム：少女達の変化》

当初からのメインキャラクターであるエレノア、ロゼッタ、ミーシャの三人の少女達。最初と比べて、物語が進行するにつれて変わりつつある部分も多々あります。ここでは、そんな三人の心の変化について分析してみましょう。

エレノア 基本性格は変わりません。しかし、やはり恋の力なのでしょうか、かなり女の子らしくなりました。元々さみしがりやなところはあったので、好きな対象ができたことにより甘えたいという願望が出てきたのかも知れません。

ロゼッタ 考え方が柔軟になりました。当初はかなり性格の表裏が激しかったイメージがありますが、最近ではそうでもないようです。物語が核心に近づくにしたがって、少し大人っぽくなった気がします。

ミーシャ 少しお喋りになりました。当初の無口キャラではなく、最近はシュールな毒舌キャラの方が読者の印象に強く残っているようです。考え方も、最初に比べるとだいぶ前向きになったようです。

三人の性格が変わった最大の要因は、お互いの相互作用ではないかと作者は分析しています。

第三十九章 ファクター（前書き）

この世界は様々な要因が複雑に絡み合って存在しているのではないかと思えます。理屈や理論を重んじる現代社会の在り方は正しいのかも知れませんが、それは何処か我々が創り出した「架空の」世界なような気がしてなりません。世界を見る方法は決して一つではありません。世界の真理とは何か…この小説を通して考えていただければ作者として幸いです。

第三十九章 ファクター

ジパング：それは東西の大陸に挟まれた小さな島国。かつては世界に一つだけだった巨大な大陸の一部でほぼ中央部に位置していたが、1000年前の赤い悪魔の暴走によって大陸が東西に分断された時に周りの土地は全て海に沈み、今の島国となったと言われている。何故、この土地だけが赤い悪魔の影響を受けなかったのか、それはこの世界ガイアにおける長年の謎であったが実はそれにはこの島に眠る大きな「因子」ファクターが関わっていたのである。しかし、そのことを知る者はあまりにも少なかった。

…もちろん、そんなことなど旅の一行が知る余地などなかった。旅の一行がそのことを知るのもっとずっと後のことになるのだから…。

《師匠！？》

「なあ、イブキ」

「何、エレノア？」

「お前の上司…殿つてのはどんな奴なんだ？」

エレノアがそうイブキに聞いた。

「殿つてのは役職の名前よ。名前は信長、この国で唯一の主よ」
イブキが答えた。

「…で、その信長がうちのロゼッタに何の用なわけ…？」

ミーシャが質問すると、

「さあ…？でもなあ、あの信長様の性格だからなあ……きつとろくでもない理由なんだろうな…」

イブキはため息混じりにそう語る。

「信長さんつてのはそんなに悪い人なんですか？」

「悪くはないがな、あれはあれで困ったところがある。ま、狼の俺には関係ないがな」

エリオットの疑問に対して、シロが他人事のように答えた。

「え、シロちゃんは大じゃないの!？」

「だーっ!!俺は犬なんかじゃないっ!!」

「まあ、そう吠えるなよワン公」

「あつ、ティティス!貴様まで」

ロゼッタとティティスの集中攻撃に、シロは終始吠えっぱなしであった。

エレノア、ロゼッタ、ミーシャ、ティティス、イブキ、エリオット、そしてシロの一行はジパングの首都エドから少し離れた海岸に着陸させた飛行艇から歩いてエドの町へと向かっていた。：やがて、一行が海風を背に松林の道をしばらく進んでいると向こうで手を振る二人の人物が彼らの目に入った。

「おーい!久々じゃのうティティス!!」

鎧に身を固めた大男がそうこちらに呼びかける。

「ベンケイ!？」

ティティスが驚くのも無理はない。そこに立っていたのは元同僚のベンケイだったからだ。一行は早足でベンケイ達の元へ向かう。

「久しぶりじゃのうティティス!エフェクトをクビになったと聞いて心配しておったんだが…元気そうで何よりじゃ。それと、大きくなつたなイブキ」

「はい、お久しぶりです師匠。頭領もご無事で何よりです」

そう言つて、イブキはベンケイとその隣にいた少々強面の男に深くと頭を下げた。

「え、何?師匠?頭領??」

エレノアが首を傾げたので、

「ああ、紹介するよ。こつちがベンケイ師匠。こちらがジパングの隠密隊長のハットリ頭領」

イブキがそう説明した。

「お前がジパングの隠密出身だったとは聞いていたが…本当だったんだなベンケイ」

「なんじゃ、今まで信用してなかったのか。そりゃあんまりでござるよ」

ティティスの台詞にベンケイは苦笑いする。

「…ご苦労だったなイブキ。して、赤い悪魔は？」

ハットリが聞くと、

「はい！わたしです！！」

…ロゼツタが元気よく答えた。

「…イブキよ。そなた何か勘違いしてはいないか？」

「…いいえ頭領、紛れもない事実なんですこれが」

「俺だつて信じたくねえけどしょうがないっすよ頭領」

イブキとシロがそう答える。無理も無い、こんな少女が赤い悪魔だなんて誰が信じるであろう。

「とにかく、彼女を信長様の所にお連れしよう。…もちろんそちらの方々も」

ハットリがそう言つと、

「一つ聞きたい」

エレノアが一步前に出て言った。

「なんだ？」

「ロゼツタは大事な親友だ。…絶対に危害を加えないと約束してくれ」

「…わかった。出来る限りのことはしよう」

エレノアにハットリはそう答えた。

「ま、まあまあ、とにかく立ち話もなんですし、早く行きましょう」
場の空気が少し険悪になりそうだったので、エリオットがそう取り繕った。

…こうして、一行はエドの中心にある信長の城へと歩みを進めることになったのであった。

《忘却の鬼》

「…ねえジプシー、ホントにこんな田舎に闇の香炉なんてあんのかしらあ？」

わずかにウェーブのかかる金髪に青い目の、まるで人形のように小奇麗な服を着た少女が並んであるく道化師風の小柄な少女にそう聞いた。

「知りまちなよそんなこと。サキュバス様がそう言ってるんだからそうなんじゃないでちゆかマリア」

ジプシーはおしゃぶりを銜えながらそうマリアに答えた。

…ここはジパングの東の端。家や人影は無く、何処までも果てしなく緑の草原が続いていた。サキュバスの差し金で手下のジプシーとマリアは闇の香炉があるとゆうこの地へとやってきたのである。目的は、遙か昔に月の文明を滅ぼしたと言われる闇の香炉に封印されし邪神『かぐや姫』である。

「結局、かぐや姫って何者なの？」

「それはでちゆね…え〜と、資料によると…」

そう言つて、ジプシーは懐からサキュバスにもらったメモ用紙を見ながらこんな内容のことを話した。

…かぐや姫とはこの世界が最も繁栄を極めていた時代、今から約10000年前に現れたとされる魔物のこと。当時、進んだ科学力を持つていた人類は月にも進出しそこに月の都を建設したと言われていた。かぐや姫は正確には『月光院ルナ』とゆう名前だったと推測され、この月の都で人間の手によって作られた獣人だと考えられている。その後の月光院の暴走で月の都は滅び、同時に地球の文明も大部分が消えたとされる。最終的に月光院は人々の活躍でなんとか魔法の香炉の中に封印され、その香炉は闇の香炉と呼ばれるようになった…

「…と、こんな感じでちゅ」

「ずいぶん曖昧な情報ね」

「仕方ないでちゅよ、大昔のことなんでちゅから」

「…で、その化物を封印した香炉がここにあると」

そう言つて、二人は立ち止まった。…目の前には、草原の真ん中にぽつんと不自然に立つ祠があつた。

「もう何年も手入れされていないみたいだね」

マリアがボロボロになつた小さな祠の屋根を撫でながらそう言つた。

「もしサキュバス様の言う事が本当ならば…これが闇の香炉でちゅよ」

そう言つて、ジプシーは祠の中から小さな香炉を取り出した。

「…これが？」

「なんか想像と違つでちゅ」

確かにその香炉は黒地に金色の美しい装飾が施されてはいたが、別段特別な雰囲気も邪悪な感じも醸し出してはいなかった。

「ま、とりあえずこれをサキュバス様にお渡しすれば任務完了ですわね」

「そ、そうでちゅね」

「まつたく…サキュバス様も人使いが荒いんだから。今は何処にいらつしやるのかしら？」

「さあ…赤い悪魔に会うとか何とか言つてまちたでちゅよ」

「…そう」

「どうしたでちゅか？浮かない顔して？」

ジプシーがマリアに聞くと、

「…この世界には化物が多過ぎる。これもアネリが残した産物なのかしらね？」

そう呟いた。

「あれは空想上の人物でちゅから…もう行きまちょう」

「…それもそうね」

こうして、ジプシーとマリアの二人は闇の香炉を手に草原を後にす

るのであった…。

《悪魔と殿様》

「…昔、本で読んだことはあるけど…実際に見ると聞くのとじゃ大違いね」

「ああ、そーだな…こんなヘンテコなお屋敷なんて見たこと無いぜ…信長のいる城に入ってからとゆうもの、エレノアとミーシャは終始こんな会話をしていた。

一行はハットリの案内の元、エドの町の中心に建つ城の中を進んでいた。大勢の着物を着た人々が行き交う城下町を通過し、いくつもの門をくぐり、大きな建物の中に入りそして階段を上へ上へと上って行く。そうやってようやく一番上の6階にたどり着いたわけである。

「ねえねえイブちゃん、あの煙を吐いてる大きな建物は何？」

ロゼッタがそう言って開いた障子の隙間から見える外の景色を指差す。

「あれ？あれはタタラ…鉄を作る所だよ」

イブキがそう答える。

「製鉄所ですか、なかなか豊かなんですね」

エリオットが感心して頷いた。

エレノア達には全てが新鮮だった。以前に訪れたとは言え、この国の文化は今までに見たこともないものばかりだった。久しぶりにエレノアの「探究心」は踊る。

「なあなあ、後で町を探索しようぜ？」

「おいおい、もうその話かよ。せっかちなだな」

エレノアの台詞にティティスは苦笑いする。

「なによ、いいじゃねえか別に。ちゃんとやることやってからって言うてんだから」

エレノアが頬を膨らませる。

「そうそう、ノアちゃんもティーちゃんと一緒にいたくてしかたないんだから！」

「ちっ、違っつて！別にそんなんじゃ……」

「はいはい、照れない照れない」

「ミーシャ！そんなこと言わないでフオーローしろよ！」

「心配すんなよエレノア、俺ならいつでも一緒にいてやつからよ」

「っ……」

エレノアの顔は恥ずかしいやら怒鳴ったわでもう真っ赤だ。

……その時、ハットリが急に足を止めた。

「……着いたぞ。ここに信長様がおられる」

そこには、金銀で装飾された見たことも無いような美しい大きな襖があつた。

「……さすがは一国の長。住まいも豪華だな」

ティティスがそう呟く。

「早々で悪いのだが、ここから先は赤い悪魔だけにしてもらいたい」
突然、ハットリがそう切り出した。

「えっ！？なんでだよ！」

エレノアが驚いてハットリをにらみつけた。

「……わかってエレノア、信長様はこの国の大切な主。外部の人間を
そう簡単に入れるわけにはいかないの」

今にもハットリに喰ってかかりそうなエレノアをイブキがそう宥める。

「……約束が違うわよイブキ。私達三人が一緒であることを条件にこ
こまで同行してあげたんだから。……勘違いしないで」

珍しく無口で無関心なミーシャが、鋭い視線でそう口を挟んだ。

「そ、それは……」

イブキが困ってベンケイの方を見たので、

「まあまあ、よいではないかハットリ殿。このような麗しい女子達
が会いに来てくれたんだから、きっと信長様もお喜びになるじゃろ

うに」

…と、上手くフォローを入れてくれた。

「…仕方ない。今回は特別にそっちの娘達も一緒に謁見するがよいハツトリがため息混じりにそうしぶしぶ了解した。

「…つて、ちよいまち！俺は！？」

ティティスが慌てて主張すると、ベンケイはこう答えた。

「すまんろう。信長様はあまり男が好きではないのじゃ。エレノア殿が心配なのは分かるが、お主のようなKYな奴がいると機嫌を損ねかねないんでな」

「…お前も俺に負けず劣らずのKYだぜベンケイ？」

ティティスは恥ずかしそうにそうベンケイに言い返した。

「ごめんね〜ティーちゃん」

「…ま、野朗はお呼びでないってか」

「ドンマイだなティティス」

入室を許された三人はそうティティスにねぎらいのメールを送った。

「…元気出して下さいねティティスさん」

「少年よ、挫けては駄目だぞ」

エリオットとシロもそう言っ彼を慰める。

「俺ってそんなに可愛そうに見えんのかな…」

ティティスはそう呟く他なかったようだ。

間もなくロゼッタ、エレノア、ミーシャの三人は信長のいる大きな部屋の中へと通された。人が100人は余裕で入れるであろう大きな畳張りの部屋で、その一番奥の一段高くなっているところに一人の男が胡坐を書いて座っていた。

「おお、お主らが例の娘達か！まあ近くによれ」

その男はとても殿様とは思えない質素な着物を着ていた。左目には刀のつばで作った眼帯をし、長い髪を頭のとっぺんで一つに束ねていた。確かに精悍な顔つきではあったが、殿様と言うよりはむしろ盗賊の若頭と言った感じだろうか。

「…なあミーシャ、あれが一国の主なのかよ？」

信長に歩み寄りながらエレノアがミーシャに耳打ちする。

「知らないよ。…とにかく、失礼の無いよーにね」

三人は信長の前まで来ると、その前に正座して座った。慣れないせいか妙な緊張感があつたのだが、信長は寛大だった。

「はっは、まあそう堅くならなくともよい。遠いところをわざわざご苦労じゃったな。…おお、そちらの赤い娘が赤い悪魔じゃな？思つたよりも可愛らしいではないか」

そう言つて、信長はロゼッタに近づき彼女をまじまじと眺める。

「え、あの…わたしに何のようで？」

ロゼッタが聞くと、

「うむ、特に用事と言つ用事はないんじや。ただな、赤い悪魔が復活したと言つ噂が広まつたんでその真偽を確かめたかつたし、何よりわし自信がこの目で実物を見てみたかつたんじやよ」

信長はサラリとそう答えたのである。

「え…それだけつすか？」

「うん、それだけ」

エレノアの問いにもあつさりそう返した。

「いやあ、この国もなんだかんだで大国に挟まれた危うい存在だからじやな。本当は赤い悪魔に用心棒をしてもらおうと思つていたのも事実なんだが…^{インキ}隠密から事前に受けた連絡を聞くとどうもお主等も大変みたいだしな、せつかくだから立ち寄つてもらうだけならまあ良かるうと…はっはっは」

彼はそう笑いながらさつぱりとした態度で三人に言った。

「あらら…良い人だけど、イブちゃんの言つてた通りだね」

「…とんだ無駄足だったわね」

ロゼッタは苦笑いしながら、ミーシャはため息混じりにそう言つた。しかし、彼は次にこんなことを言い出した。

「いや、無駄足でもないぞ。お主等が探しているとゆう鍵とやらはこの国にあるのじやよ」

「え!?!」

その言葉に、三人の目の色が変わる。

「なんでもな、大昔に聖人の一人が富士の洞窟に宇宙への鍵を隠したと古文書に書かれておるのじゃ。半信半疑ではあったが…どうやら本当のようじゃな」

「富士の洞窟？」

ロゼッタが首を傾げる。

「…ほら、ここに来る時に西の方角に頂上付近が雪に覆われた大きな山が見えたでしょ？あの山が富士山だよ」

ミーシャがそう補足する。

「そこに行けばお主等の探しているものが見つかるじゃろうて。相手は共和国…わしも本当はもっと協力してやりたいのじゃが、一国の主として国を危険な目にさらすことはできないのだ。これくらいの情報提供しかできませんが、どうか堪忍しておくれ」

「いえ、十分なんですそれで。後は私達でなんとかしますから…すまなそうな信長に、エレノアはそう言った。

…ようやく捜し求めていた物が見つかる…三人の胸は高鳴った…

《策士の狂い始めた齒車》

「ぐ…まさかマルピーギの奴がしくじるとは…これでは計画が台無しではないか」

プライベートルームで、コロツサルが齒を食い縛りながら言う。

「ここまで彼女達がやるとは…予想外に他なりませんな」
シユナウザーがそう相槌を打つ。

「…まあよい。共和国はもう我々魔物が乗っ取ったようなものだ。

そろそろお前にも働いてもらおうぞ將軍」

「…はい、もちろん喜んで」

…窓の外に見える夕焼けに染まったシランドの町並みを望みながら、

コロツサルとシュナウザーはそう不気味な笑みを浮べるのであった…

《イブキの家》

…その日の夜、城下町の長屋が連なる住宅街の一室が妙に明るく騒がしい。

「なんだよロゼッタ、さつきからイクラと玉子しか食ってないじゃんか」

「うう、そんなこと言わないでよノアちゃん。山葵はちよつと苦手なんだよう」

「あ、そうなの？ごめんね知らなくて…」
イブキがすまなそうに言った。

「…子供ねロゼッタは」
ミーシャが醤油をつけた大トロを口に運びながらそう言う。

そう、ここはイブキの自宅。エレノア達6人はイブキが出前で頼んでくれた江戸前寿司をちゃぶ台の上に広げ、畳の上に座ってそれを囲んでいた。この部屋に6人は少々無理があつたが、それでも誰も不平を言う者はいなかった。イブキは普段着の黒地に白百合をあしらつた着物であつたが、他の5人はこの国でも不自然に見えないよう彼女が貸してくれた着物を各々身につけている。イブキは一人暮らし。両親は彼女が幼い頃に病死しており、以後両親の同僚であつた隠密一味によって育てられてきたそうだ。

「その…ミーシャ？昼間はゴメンね。なんか嘘つきみたいになつちやつて…」

「…別に気にしてなんかないから心配しないで」

昼間のことを詫びるイブキに、白地に青い柄の入る和服を着たミーシャは静かにそう答えた。

「そーそー！ミーちゃん言葉を選ぶのがめんどくさいだけでホン

トはちつとも怒つてなんかないんだから」

ピンクの花柄をあしらった可愛らしい着物のロゼッタがそう笑う。

「…それでフオローのつもりなんだから、すごいよねアナタ」

ミーシャが茶を啜りながらそう皮肉る。

「でもよく、なんかこうフィットしないんだよね」

白地に若葉をイメージした和服のエレノアがそう愚痴をこぼす。どうやら、パンツスタイルが主流の彼女には股下の空間が気に喰わないようだ。

「いいじゃないかお前らは。見ろよ、俺とエリオットの着物なんてボロボロだぜ？」

テイテイスがそう着物の襟を触ってみる。

「ごめんね、家には女者の服こころしかなくて…仕方ないからお隣のおじいちゃんから借りたの」

イブキがそう苦笑いしながら顔の前で手を合わせる。

「まあ、色々お世話になつていて言えた立場じゃないんですけどね…もうちょっとなんとかして欲しかったですね」

エリオットがつきはぎだらけの自分の着物を見ながらそう言った。

「ま、まあいいじゃない、あはは…。それよりも、明日富士山に行くんだって？」

イブキがそうエレノアに質問する。

「ああ、なんでもお前らの長が私達の探し物がそこにあるって言うからよ。…まさかお前らも一緒に来るつもりじゃなかるうな？」

エレノアが箸でイブキを指しながら言った。

「そうよ。だってあの辺りは樹海やらなんやらで地形が入り組んでいて艇は降ろせないから、案内役が必要だけど？」

「むむ…まあ、そこまで協力してくれんだったら喜んで依頼するけど。なんか悪くないか？別にそっちの仕事はもう終わつたんだし」

「はは…、もうここまで来ちゃったら正直引きに引けないですよ、エレノアにエリオットが苦笑いしてそう言った。

「そうゆうことなら宜しく頼むよ」

テイテイスが言う。

「これでまたお友達が増えたね！」

ロゼッタが嬉しそうに言った。

「ははは、ところで…さつきから犬が見当たらないんだけど？」

エレノアがそうイブキに聞くと、

「彼なら頭領と隠家アソトにいるよ。…長屋は愛玩動物ペットは禁止なんだ」

彼女は甘海老を頬張りながらそう苦笑いした。

《野望の女達》

「…やれやれ、病み上がりだと言うのに…空を飛ぶのも楽ではないな」

暗く静まり返ったエドの町を眼下にロゼリアー又はそうぼやく。

彼女が向かっていたのは昨日飛行艇を泊めた海岸付近である。それというのも見覚えのある気配を感じたからだ。無論、彼女には当然翼があるから軽々と空を飛んではいるが連日の戦いで少々お疲れ気味のようなのである。もちろん、この事はイブキ宅で寝ている一行には内緒であるわけだが。

…その大きな翼を広げ長い黒髪をなびかせて飛んでいると、やがて海岸へと出た。やはりとゆうか、そこには見覚えのある緑色の長髪の女が立っていた。

「…あら、随分と早かったじゃない」

その女性は上空のロゼリアー又にそう言った。

「黙れサキュバス。…わざとらしい気配をさせやがって」

ロゼリアー又はそう言い返ししながらサキュバスから3mほど離れた所に降り立つ。

「久しぶりねアゲハ。千年ぶりかしら？」

「…この私を見捨てておいてよくもまあ…おかげで全てを失いかけた」

「ふふ、まあまあ。あの時はしょうがないでしょ？あなた自身にも非はあったんだし。…それにもう千年も前の話なんだから、水に流してよ」

サキュバスはそう言った。

「ふん：それで、今回は何のようだ？言っとくがわたしはお前のパシリにはならんぞ」

ロゼリアーヌが相変わらず不機嫌そうに問う。

「それはジプシーからも聞いたわ。私はね、ただアナタがコロツサルを殺してくれればそれでいいの」

「…で、その後はあのクソ親父に代わってこの世界を我が物にする
と」

「正解。今の魔王様はまだ幼いし、やりたい放題だからね」

「ふはは、よく言っぜ。どうせ先代の魔王とその妃に毒でも盛って殺したんだろう？そうすれば確かにお前はやりたい放題になるよなあ」

「ああ…さすがはアゲハね。私のやることはお見通しってことか」
サキュバスは不適な笑みを浮かべながらそう言った。

「…それで？わたしがコロツサルを倒したらお前はどうなる？少なくともわたしは味方にはならんぞ？」

「その時はその時よ。…とりあえずコロツサルを倒すまでは仲良く
しましようよ」

「…都合の良い奴め。まあ、わたしとしても今お前と戦ってメリッ
トは無い」

「でしよ？」
「コロツサル」
「…で、奴は今どんな感じだ？」

「そうね、私の情報だとかかなり焦っているみたい。アナタがマルピ
ーギを倒しちゃったから…裏を返せば、早くしないと行動に移っ
ちやうわよ」

「行動？」

「策士のコロツサルのことだから、他にも手は用意してあるはずっ

てこと」

「…そうか」

「他に何か協力することは？」

サキユバスが聞くと、

「…失せる、お前の手は借りん」

ロゼリアー又は赤い目で睨みつけた。

「…はいはい、せいぜいくたばらないように頑張ってね赤い悪魔さん」

そう吐き捨てる、サキユバスは緑色の煙となって夜の闇に消えていきました…。

「…ちつ、相変わらずムカツク女だ」

…ロゼリアー又は静かに空を仰いだ。月や星の光に照らされて雲がまるでオーロラのように怪しく不気味に輝いていた。いつもと変わらない夜の景色なのに、今の彼女には何か違って見えるような…何処か不吉な感じがする、そんな風に見えた。

「千年か…何を想い、何をしようとも決して時の流れには逆らえないな。…無常なものとはまさにこのことを言うのだろうか…」

彼女はそう呟いた…。

…波の音だけが、辺りに虚しく響き渡っていた…

第三十九章 ファクター（後書き）

毎度お世話になっていきます作者の塚原宏樹です。

この小説はファンタジーですが、物語よりもむしろ人物とそれらの関係を重視した作品として書かせていただいております。表面的な展開からいかに人物の心境を読み解いていくか…それがこの作品の醍醐味だと思っています。だからあまり細かいことは気にしていません。現代人が縛られ勝ちな「常識」や「概念」をあえて無視するような感じで書いていることを、今更ながら理解していただけると嬉しいです。

「常識」「概念」が大嫌いな作者ではありますが、次回以降も宜しくお願い致します。

では、いつかまたお会いしましょう。

第四十章 富士山ダンジョン・前編（前書き）

おかげさまでノスタルジアもついに40話目を迎えることができました。読者の皆様には心より感謝申し上げます。相変わらず文法等がヘタレな情けない作者ではありますが、どうぞこれからも暖かい目で見守って頂けたら幸いです。なんとか大学卒業時までにはこの物語も完結させたいのですが…いつになることやら見当もつきません。なので誠に勝手ながら、根気よく末永くお付き合いくださいませ。

…このままだとエレノア達に怒られちゃいますね。

第四十章 富士山ダンジョン・前編

「ずいぶんと地味な洞窟だなあ。ホントにこんな所にカードキーなんてあんのかよ？」

緑の髪と瞳の少女が疑いの眼差しでそう言う。

「さあ、でも木は森の中に隠せて言うしねえ」

深紅の髪と血の様に綺麗な赤色の瞳の少女がケラケラ笑いながら言った。

「…それ、意味違うけど…」

透き通るような白髪に青い瞳の少女が呆れて言う。

昨晚イブキの家で一泊した一行はシロと合流した後、彼女があらかじめ手配してしてくれた自動車に乗って富士の裾野に来ていた。一行の目の前には、宝があると言う洞窟がポツカリと大きな口を開いている。その真つ暗な穴は、まるで手招きするかのように風をゆつくり大きく吸い込んでいるようにも見受けられた。ここまでの運転と道案内はイブキがしてくれた。この国に車はミスマッチだとエレノア達は疑問に思ったが、イブキの話だと最近のジパングの科学力もろもろは大陸の科学力と大差はないそうである。しかしながら、この国が独自の文明を築き上げていることに変わりはない。幸いこの日の天候は良好で、エレノアにとっては絶好の冒険日和であった。…もつとも、夜更かしで眠たい口ゼツタとミーシャにとっては少々辛いところでもあるのだが。

「この先には何があるか分からないから気をつけて行かないと」

イブキはそう言って大きな懐中電灯を取り出す。

「え？フツーそこは提灯か何かじゃないのか？」

「お前ら…そんなに原始的な物未だに使っていると思うのか？」

ティティスにシロがそうムツとして言った。

「まあまあ、仕方ないですよ。僕達大陸側の人間にはこの島国の情報ジパングはなかなか入って来ないんですから」

エリオットがそう取り繕う。

「こんな所で喋っていても仕方ねえよ。そんじゃ、行きますか」

エレノアのその一言に促されるように、一行は洞窟の中に入っていた…。

《分断》

「うう… なんだか冷えるな」

「なんだよ情けないなあ。てゆうか、お前氷使つくせに何寒がってんだよ」

寒そうなティティスにエレノアがそう言う。

「それとこれとは別問題なんだよエレノア」

彼は鼻水をすすりながらそう答える。

「なんならノアちゃんが暖めてあげれば？ どうやってかって？ そりゃあ、もちろん…」

「… 黙れ口ゼ、晩飯抜きにすんぞ」

口ゼツタが何か余計なことを言おうとしたのでエレノアがそれを牽制したのは言うまでもないが。

洞窟の中は思いの他ひんやりとしていた。高さもあり意外と広々としていて、洞窟の天井がいつたいどこにあるのか窺い知ることにはできない。イブキの持つ懐中電灯の光だけが洞窟内を頼りなく照らす。その頼りない明かりだけを頼りに彼らは洞窟内を進んで行く。

「… クンクン…」

何故かシロがしきりに鼻をヒクヒクさせる。

「どしたのシロ？」

イブキが聞くと、

「いや… わずかだがこの先から魔物の臭いが…」

シロはそう答えた。犬… いや失礼、狼の嗅覚が優れていることは皆知っていたから、一行の緊張感は一気に高まった。

「…何か感じるロゼ？」

「うん…確かに魔物の気配は感じるけど」

ミーシャの質問にロゼッタは特に顔色を変えることもなくそう答えた。彼女が顔色を変えないとゆうこと、それは相手が彼女自身にとつてさほど脅威ではない証拠である。もつとも、彼女が顔色を変えるような相手はそうそういないのも事実ではあるのだが…。

「暗い上に足場が悪いですからね。用心して進みましょう」

エリオットがそう念を押した。

…その時だった、

…ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！

まるで地の底から湧き上がるような地響きが！

「わわわ！？なんだなんだ！？敵襲かつ！？」

「落ち着いて！地震よ、すぐにおさまるはずだから大丈夫…」

イブキがエレノアにそう言おうとしたさらにその時だった、天上が音を立てて崩れてきた！！

ガラガラガラガラガラー！！

ズズーン！！！！

「わー！！」

「キヤー！！」

突然視界は真っ暗になり、悲鳴と砂埃が洞窟内を駆け巡った。あまりにも突然の出来事に、誰一人として対応できなかつたのは言うまでも無いことであろう。自然の強大な力の前では、彼らは無力すぎたのだ。

…やがて、地震と落石は収まり洞窟内に再び静寂が戻ってきた。

「いてて、まいったなこりゃあ…おーい、みんな無事かー！？」

暗闇の中でエレノアの声が木霊する。

「大丈夫じゃねえけどとりあえずは生きているみたいだぜー」

すぐさま呼びかけに対してティティスがそう返事を返してきた。

「こつちもなんとか生きてますー！」

エリオットがそれに続く。

「わたしも平気よー！今明かりをつけるから待つて」

ロゼッタがそう言うと、再び洞窟内が薄明るくなった。どうやらロゼッタが魔力で手の平に火を灯したらしい。

「やれやれ…こりゃあ大事になったぞ」

再び視界が戻ったところで、シロが目の前の光景を見てそう言った。さっきの落石で目の前には瓦礫の壁ができていた。それはちょうど、一行の行く手を阻むように先へ続く道を完全に塞いでいる。…そして、もつと深刻な事に彼らは気がつく。

「…あれ？イブキさんとミーシャさんの姿が見えないんですが…？」
エリオットが辺りを見回しながらそう言った。その言葉通り、誰が何処を見回しても二人の姿は見えない。

「そんな…なんてこつた！おーい！返事しろミーシャっ！！」

エレノアが張り裂けんばかりの大声で叫んでみても、木霊が洞窟内に虚しく響き渡るだけ。

「まさか、二人共瓦礫の下敷きに…」

「大丈夫、それはないと思うよティーちゃん。このフロアからは二人の血の臭いはおるか気配すら感じないから。…たぶん…二人がいるのは…」

ロゼッタはそう言うて行く手を塞いでいる瓦礫の山に視線を移す。

「そうか…どうやらこの壁の向こうとこつちに分断されたんだな」

シロの言葉にロゼッタは珍しく黙って返事をし、さらにこう続けて言った。

「たぶんね…ホントは強力な魔法なんかでこの壁を壊せば話は早いんだらうけど、そんなことしたらまたいつ崩れるかわからないし…」
「地道にこの石をどかすしかないんですね」

エリオットが残念そうにそう結論づけた。

「くそっ…こんな時に…」

エレノアが歯を食い縛って言う。

「心配するなエレノア。ミーシャもイブキもきつと無事だから…今は彼女達を信じるしかないよ」

ティティスがそうエレノアを元気付ける。

「ミーちゃん、イブちゃんも…きつと無事だよ？わたし、頑張るから…お願い、助け出すまでミーちゃん達も頑張って。…お願い力エサル、二人を助けて…」

ロゼッタは目を閉じ、赤い石の首飾りをギュツと握り締めた…。

《魔法使いと忍者…闇を生きる者達》

「…ちょっと、いつまで眠っているつもり？」

少々不機嫌なその声にイブキはようやく気がついた。目を開けてみると、青い瞳に白髪の少女が眠そうな表情でこちらを見下ろしている。

「…ミーシャ？ここは…」

「もっ…寝ぼけてる場合違うよ。落盤ではぐれちゃったみたいなのよ私達？」

「えっ！？それ本当！？」

イブキはその言葉を聞くと驚いて飛び起きた。

「…この状況で私が嘘つく理由なんてあるわけないでしょう？…とりあえず、そんだけの元気があれば体の方は大丈夫そうね」

ミーシャが少し嬉しそうに言った。しかし、服の袖が破れたその左腕からは真っ赤な血が滴っていた。

「ほわあっ！！？ち、ちち、血が…！」

「…オーバーね、ただのかすり傷よ」

驚くイブキにミーシャが呆れ顔でそう言う。

「オーバーじゃないよ！ちゃんと治療しないと…」

イブキはそう言って懐から手拭いと何やら薬草らしき物を取り出した。

「はい、今から治療するからジツとしててね」

イブキはそう言つとミーシャを近くの岩に座らせる。

「…いやね、私魔法使いだからこれくらい治せるんだけど…」

「はいはい、つべこべ言わないの！擦り傷は傷口の面積が広くて化膿しやすいんだから」

ミーシャの言葉も聞かず、イブキは手際良く治療を始めた。何だかよく分からない薬草らしき草を傷口にすり込まれたときは沁みだが、そこは無関心のミーシャだからたいして苦痛ではなかったようである。…むしろ彼女にとつては少々照れくさいとゆう感情の方が大きかったのかも知れない。何はともあれ、最後に手拭いで傷口を優しく縛つて治療はものの数分で終了した。

「はい、おしまい！応急処置だからあんまり動かさないでね」

「だから魔法で治せるつて言ってるのに…まあ、いいか…」

ミーシャが照れくさそうに言った。

「そう言えば全然気がつかなかったけど、なんで私たちの周りだけ明るいのかしら??？」

イブキが脇に転がっている壊れた懐中電灯を見てそう言う。

「ああ…私が魔法で照らしてるんだよ。最初からこうすれば良かった気もするんだけど…」

「へえ、そうなんだ。すごいね魔法使いつて」

「…褒めてる場合じゃないよ。これからどうすんのさ?…どうしようもないと言えば仕方ないけど」

ミーシャが崩れて来た道を塞いでいる瓦礫の山を見てそう言った。

「どうするつて…みんな無事なのかな…?」

「…さあね、知らないわよそんなこと。少なくともそんなに簡単にくたばる連中じゃないよきつと…」

ミーシャはそう言つとゆっくりと立ち上がって洞窟の奥へと歩き出

す。

「え…ちょ、ちょっと！どうするつもりなのミーシャ!？」

「決まってるでしょそんなの。…カードキーを探しに行くのよ。こんな所で油売ってる暇なんてないんだから」

「で、でも…みんなは？」

「…自分のことぐらい自分でなんとかするよ。今は他人の面倒見る暇なんてないし、エレノアだってきつと同じこと考えてる。…別に嫌なら付いて来なくてもいいのよ？」

ミーシャはそう言った。しかし、それはいつもの淡々とした彼女の口ぶりや態度ではなかった。青い瞳は潤み、その声は淡白で冷淡な内容とは裏腹に心なしか震えていた。…本当は彼女だって仲間を置き去りにするのは嫌なのだ…しかし、彼女は今の自分ができる最善を選んだとゆうことは聞いているイブキにも解かった。

「…わかった…行こう」

イブキはそう頷いた。

洞窟内は相変わらず真っ暗で、ミーシャの魔法の光をもつてしても壁や天井の隅々までを照らすことはできなかった。足場もゴツゴツしていて、なかなか思うように前に進めない。二人は時折後ろを振り返るような仕草を見せたが、やがて進むにつれてその回数も減っていった。…後ろを振り返っても暗闇しかそこになかったから。

「…私ってひどい奴だろ？」

「え、急に何を言い出すのミーシャ？」

今まで黙っていたミーシャが突然喋ったので、イブキは驚く。

「…もしこれでみんなに何かあったら…それはきつと見捨てた私の責任ってことになるだろうからね…」

「そんなことないよ！あなたは間違ってるんじゃない」

「…それを今ココで証明できる？」

「う…そ、それは…」

ミーシャの問いかけにイブキは一瞬黙ってしまった。しかし、すぐにこうきりかえす。

「確かに他人から見たらそりゃあ酷いことをしたかも知れないよ。でもね、相手を信じてなければ絶対に出来ない決断だってあると思うんだ。きつと向こうだってあなたのこと信じている、それは見ていて私でもわかるもん。…だって、あなたみたいなのが彼女達と一緒^{エレノアとロゼッタ}に旅してきたなんて、よっぽどの信頼関係が無ければ成り立たないお話でしょ？」

イブキがそう励ますように笑って言った。

「…そうだよ、じゃなきゃこんな所にわざわざ来ないか」

ミーシャも笑顔でそう言った。…しかし次の瞬間、ミーシャの顔が曇った。

「ど、どしたのミーシャ？」

「…まいったね、困った知り合いに出会っちゃったみたいだよ」

イブキがミーシャの視線の先に目をやると、暗闇の中から二人の少年が現れた。一人は金髪、もう一人は銀髪で二人共人間とはまた違った不気味なオーラを放っていた。

「おや、誰かと思えばいつしかの魔法使いじゃないか」

「偶然ですね兄さん、こんな所でまた会うなんて」

二人がそう言うので、

「…あんたらが誰だとかどうやってここに来たとかそんなんには興味ないわ…こないだはよくも私の家^{ドールハウス}をメチャクチャにしてくれたね」
ミーシャがそう告げた。

「なんだよ、まだ根に持っているのか。俺達は今忙しいんだ」

「そうそう、カードキーがあるって聞いて来たんですけど…どうやらお互いにまだのようです」

それから一呼吸おいて金髪の少年がこう言った。

「悪いな、お前らに個人的な恨みはないんだが…俺達の邪魔をするなら消えてもらおうよ」

「…あ、そ。その言葉そっくりそのまま返すよサイコ。…イブキ、ちよつと聞いて」

「え？」

訳もわからずただ呆然としていたイブキにミーシャがこう言う。

「…あなたには二つの選択権がある。元来た道を引き返して命を大事にするか、それとも私と一緒にあなたには何の関係も無いこのバカ共と戦うか…好きな方を選んで」

もちろんイブキは、

「あたりまえでしょ？…あなたと運命を共にするわ！」

そう言つて短刀を鞘から抜いた。

「…そう…感謝するよ。お礼は生きていたら後で言うわね」

ミーシャはそう笑みを浮かべながら言った。

…真つ暗な洞窟の中、人間にして闇を持つ者と魔物にして人の姿を持つ者の戦いが今始まるうとしていた…！！

第四十章 富士山ダンジョン・前編（後書き）

《作者裏後援会の集い》

「いや〜、とうとう私達の話もここまできたな」

「そーだねノアちゃん！」

「…ふ〜んって感じだけどね」

「まあそー無関心になりなさんなミーシャ」

「そーそー、今回だつてミーちゃん大活躍の予感じゃん！」

「…で、へボ作者は今後の展開どうするつもりなんだろうね」

「さあ？ロゼは知ってるか？」

「まさか。今聞いてみれば良いんじゃない？」

「そうか。おーい作者〜！今後の展開は〜??？」

…シーン…。

「…何も考えてないなこりゃ」

「もー、ダメだなあ塚ちゃんは〜」

「…へタレ作者…」

…おしまい。

第四十一章 富士山ダンジョン・後編（前書き）

現実の世界でも仮想の世界の中でも、人間関係を常に円滑に保つのは非常に難しいことです。相手の心が見えない限りは「信用」「信頼」の元に人間関係を作っていくしかないからです。そして、最も肝心なのは人間が「嘘」をつける生物であることを常に自覚することです。相手をどの程度信用するのか、それをしっかりと自分自身で見極めなくてはならないのです。

第四十一章 富士山ダンジョン・後編

「…んん？この感じは…」

「どうしたロゼ？何かあったのか？」

地道に手作業で瓦礫の撤去にあたっていたエレノアが、何かを感じ取ったような仕草を見せるロゼッタにそう聞いた。

「いやね、誰かがこの先で魔力を使っているみたいなんだよ。…多分、一人はミーちゃんっぽい感じがする」

「ホントか！じゃあミーシャは無事なんだな！？」

エレノアはそう胸を撫で下ろす。

「って、一人はミーシャってことはもう一人はイブキってことか？
テイテイスが聞くと、

「いや、あいつは魔力の類は使えないはずなんだが」
シロがそう否定する。

「じゃあ、もう一方の魔力は一体…？」
エリオットが首を傾げる。

「ミーちゃんとイブちゃんが一緒にいる可能性は高いけど…どうやら別の、しかも人間じゃないのがあるみたいだね。とにかくここをなんとかしない限りはわかんないよ」

ロゼッタが珍しくイライラしながらそう言った。彼女にはわかってきた。ミーシャ達が誰かとおそらくは戦闘を繰り返しているだろうことを。それは体中に感じる激しい魔力の波動からも容易に予想できた。だからこそ彼女は焦っていたし、それを知らないみんなも焦っていた。本来ならば魔法なりなんなりでこんな壁は容易に破壊できるはずなのだ。しかし、それは新たな崩落の危機を招くからして手作業で丁寧に処理することしかできなかった。

…一行はただ黙々と作業を続けることしか仕様がなかった。

《無關心なりの信念》

その頃、洞窟の奥ではミーシャとイブキがサイコ、ドリーマー兄弟と睨み合いをしている最中であつた。…互いに出方を伺っているのか、なかなか手を出そうとはしない。

「先手必勝！！これでも喰らえっ！」

先に手を出したのはイブキだつた。懐から素早く三つの手裏剣を取り出し相手に向かつて投げつける。手裏剣は回転しながら勢い良く真つ直ぐに飛んでいく。このままいけば間違ひなく命中すると誰だつて思う。…が、相手もそう上手くはいかせてくれないようだ。

「はは、人間の作つたそんな武器で殺られる俺達じゃないぜ？」

サイコがそう言つて手の平を手裏剣に向かつてかざすと、それまで勢い良くこちらに向かつていた手裏剣は瞬く間にその勢いを失い、そして力無く地面に落ちた。…乾いた金属音が洞窟内に虚しく木霊する。

「ちっ…」

イブキが悔しそうに舌打ちする

「…なるほどね、以前会つた時の事と総合して考えるとあなた達は遠隔タイプってとこかしら？」

ミーシャがそう冷静に問いかける。

「ええ、そんなところだよ。今回は単純に貴女達を倒せばいいだけですから…前回のような中途半端な魔法は使いませんか？」

ドリーマーがニッコリ微笑みながら言つた。

「…最悪の展開ね」

「え？」

「…相手は2人共私と同じく魔法が得意な遠隔系…近接が得意なあなたと違って技のリーチが長い分近接に対しては有利なの。…しかもこの狭い空間じゃ空中戦を得意とする私の召還獣達は使えない」

「そんな…」

「…ま、その分私が頑張ればいいだけの話だけど」

そう言つて、ミーシャは相手に向けて両手をかざす。

「…兄弟もろとも削除してやんよ…アインストールダブル・ビーム……！」

ミーシャが呪文を唱えると、両手から七色に輝く光線がそれぞれ放たれた。2つの光線はまるで矢のように真つ直ぐに相手に向かつて進み一瞬の内に直撃し、洞窟の壁や床の一部が吹き飛ばされる！「やった！木っ端微塵だよ！」

イブキはそうガッツポーズをするが…

「…いや、残念だけどまだだね」

ミーシャはそう静かに言い放つ。

彼女の言う通りだった。巻き上がっていた砂煙が晴れると、ほとんど無傷の状態のサイコとドリーマーがさっきと同じ位置に立っていた。彼らの周りには薄青色のドーム状の魔法の壁が貼られている。

「…残念でしたね。眠らせるだけが僕らの能力ではありませんよ？」

ドリーマーがそう言う。どうやら彼がとっさにバリアーを張つてミーシャのビーム攻撃を防いだようだ。

「まったく、やる気の無さそうな顔してなんちゅう攻撃してくるんだ」

「…だから、この顔は生まれつきなんだって」

サイコの言葉に、ミーシャはそう半ば呆れて反論した。

「ああ、そうかい。だったら生まれ変わってもっとやる気のある顔に生まれてくるんだな！」

サイコがそう言つて右手を素早く振り上げるとミーシャ達に向かって5本の真空の刃が放たれた！！

「…だいぶカチンとくるねその言葉。…エアロプロテクション」

ミーシャがそう呪文を唱えると、2人を囲むように周囲に風の渦が巻き起こった。サイコが放った5本の真空の刃はその壁の不規則な大気の流れに阻まれ、その効力を失う。真空の刃はまるで白い煙のように、あっという間に形を崩され消えてしまった。

「風属性の技には同じ風属性で対抗したか…思ったよりやるな。だ

が、果たしていつまで持つかな？」

サイコが不気味な笑みを浮かべながらそう言った。

「え、それどうゆうこと……??」

イブキにはどうやらサイコの言っている意味が理解できないようである。

「…あのねイブキ、魔法を使う連中にとっては常識なんだけど魔力は無限じゃないの。このまま魔法戦を続けてたら魔力が0になっちゃう。…だけどあつちは2人、単純に魔力はこちらの2倍…意味分かるでしょ？」

ミーシャの説明を聞いてイブキは息を呑んだ。…それは自分達の敗北を予想させる説明だったから。

「な、何か名案とかは無いのミーシャ!？」

「…落ち着いてよイブキ。まあ…無いことは無いけど、あなた次第ね」

ミーシャがそうすました様子で言う。

「私次第??」

「…あなた、足は速い方？」

「は?ま、まあ…いちおう忍だし、自信はあるけれど……??」

「…そう…私ね、本当はあんまり他人の能力は信頼しないんだけど…仕方ないか。ちよつと耳貸してイブキ」

そう言つて、ミーシャはイブキに何やら耳打ちをし始めた。

「…ゴシヨゴシヨゴシヨ…わかった？」

「え!?む、無理だよ…そんな無茶なこと……」

「…お願いよイブキ、今は貴女だけが頼りなの。…大丈夫、貴女ならきつとできるって信じてるから……」

真っ青な顔をしたイブキの手を両手でしっかりと握り締めながら、ミーシャはそう優しく諭す。…普段の彼女を知る人間ならば誰もが驚くような、ミーシャらしくない優しく柔らかない声色で。

「…わ、わかった。やってみるよ!」

自分を頼りにしてくれている人がいる以上、イブキに断る理由は無

かった。

「…そうこないかね」

ミーシャもちよつとした笑顔でそう言うのであった。

「おいおい、何コソコソ勝手にやっつてんだよ」

サイコが不機嫌そうに言う。

「…いや、ただ今後の行末ストーリーを考えてたんだよ。…私達が勝つためのね」

「負け惜しみは止めましょうよ？どっちが有利かは貴女自身が一番分かっているはずですよ」

「うっさいわね！そんなのやってみなきゃわかんないでしょ！」

ドリーマーにイブキがそう怒鳴りつける。

「…そう、何事もやってみなきゃわからない…それが私がこの旅路で学んだ最大の教訓だから…。ブラックスモーク！」

ミーシャがそう唱えると、地面から勢い良く黒煙が吹き上げる！！

「ちっ…煙幕の類か。だが、そんなことしても無駄だ。この閉鎖空間では逃げる場所などありはしないのだからな！」

サイコはそう余裕とも取れる発言をする。

間もなく轟音を立てて地から吹き上げていた煙は止まり、段々と視界が回復してくる。…しかし、煙が晴れた先にいたのはミーシャ一人だけであった。

「黒い方がいない…！？」

サイコとドリーマーは驚いた。この狭い空間にも関わらず、視界にイブキの姿が全く無かったからだ。…しかし、この後すぐにその理由わけは明らかとなる。

「失礼な！ちゃんとここにいるよ！」

突然、ドリーマーの背後から声がした。驚いて振り向いた彼の目にはなんとイブキの姿が！！

「なっ…」

「遅いっ！これでも喰らえ！！」

そう言つて、イブキは振り向きざまのドリーマーに思いつ切り飛び

蹴りした！

「うわあ！」

イブキの会心の一撃が彼のみぞおちを的確に捕らえる。そのまま彼は飛ばされて壁に叩きつけられ、そのままうずくまってしまった。女の子のキックとは言え、華奢な彼にとっては十分過ぎるほどの威力があった。

「…っ、この！」

サイコもとっさに反撃しようとしたが無駄だった。彼が気が付いた時にはイブキの短刀の刃先が彼の喉元に突きつけられていたから。

「残念だったね。私は魔法も使えないし鋭い爪も牙も持っていないけど、素早さと喧嘩には自身があるよ？」

イブキがそうサイコに得意気に話した。

「ぐ…そうか、あの煙幕は俺達の気を逸らすためのおとりだったのか…！」

サイコが歯を食い縛りながら言った。

「…そう、遠隔系の魔法は確かに強力だけど、逆にあまりにも距離では自分を巻き込む危険があつて使えない。攻撃を何とか掻い潜つて格闘戦に持ち込めれば、イブキに勝機があると思つたの。…昔、本で忍者は武術も得意だつて読んだことあつたからね」

ミーシャがサイコに近づきながらそう説明した。

「…ふっ、相変わらず他の連中と違って冷静な判断力の持ち主だな。俺達の負けだ、殺すなら殺せよ」

サイコが覚悟を決めたように言うと、

「…戯言は許さないよ。負けたあなた達に今後を決める権利は無いんだから」

そう言つて懐から一枚の紙を取り出す。

「…なんだそれは？」

「…こないだの一件であんたらに壊された家の修理代の請求書。占めて38万5千6百円ね。明後日までに指定の講座に振り込んでおくこと…おつりは無いようにね」

そう言い放つと、サイコの手の平にその紙を握らせた。

「…これを俺らに払えと？」

「…何度も言わせないですよ。納得できないようだから説明しておくけど、彼女がその気になればあんたを殺すのは簡単。だけど、私にしてみりや弁償も済んでないのに死んでもらっちゃあ困るの。…ただでさえ大食いと水商売とKYと旅しててお金無いんだから」
そうサイコに対して淡々と言った。

「…はは、そいつはご苦労なこつたな。…次に会う時は必ず後悔するぜ？」

「…別に？次回は38万円どころじゃすまないけど？」

「はっ…ホント不思議と言うかよくわからん連中だよお前らはよ」
そうサイコが吐き捨てるように言うと、突然彼から白い霧のような物が噴き出す。すぐにそれは晴れたがそこにサイコの姿はなく、ドリーマーもいつの間にか消えていた。

「…まったく、どうやら人型の魔物ってのは逃げ足だけは速いんだから…」

ミーシャがホツとしたような、呆れたような溜め息をつく。

「か、勝った…」

イブキは極度の緊張状態から解放されたせいか、その場にへたへたと力無く座り込んでしまった。

「ご苦労様。…何はともあれこれで先に進めるよ。…立てる？」

「あ、うん…何とか」

ミーシャの手を借りてなんとか立ち上がるイブキだが、未だに体の震えが止まらない。

「…大丈夫？」

「うん…正直とっても恐かったけどね。ミーシャは…その…恐くなかったの？」

「…どうだろうね、私みたいに長生きしていると恐がるのもなんだかめんどくさくなっちゃうのよ」

「へっ…って、それ本当なの？」

「まさか、本当は恐かったよイブキと同じで。…ま、単に恐怖心の処理方法をしっているだけの話かな？」

「恐怖心の処理って…何それ？」

「うーん…そうだね…恐怖心に打ち勝てるだけの何か…目的とか目標を持つことなのかも知れないね」

「なるほど…やる気の無い顔して結構深いこと言うねミーシャ」

「…だからさ…これは生まれつきなんだって。なんか最近このネタばっかしじゃん…」

「あはは、ごめんごめん。それよりさ、さっき言ってた大食いと水商売とKYって誰の事なの？」

「ああ、それはね…」

無事に力を合わせて危機を乗り越えた二人は、他愛も無い様々な雑談も交えながらさらに洞窟の奥へと進んでいきました。その足取りは、今まで以上にどこか軽々としているようにも見えた。

《予想外な再会》

「はあ…ダメだ…手が痛えよ普通に」

珍しく気丈なエレノアが弱音を吐く。無理も無い。かれこれ落石から数時間、休まずに瓦礫をどかしていた一行にも流石に疲れの色が出てきていた。そこでつい数分前から休憩していたのだが、みんな力無く座り込み口数も少ない。

「イブキさんにミーシャさん…どうかご無事で…」

エリオットが半ば神に祈るように言う。

「バカ、神に祈っても仕方ないだろうが…たぶん」

シロの声にも元気は無い。

「ミーちゃん…イブちゃん…」

ロゼッタに関してはもう完全に沈んでいる状態だ。

「なんだよ、みんなで時化した顔してよ。まだ死んだって決まったわ

けじゃないんだし。それにあの影薄ミーシャのことだ、どーせまたひよっこりと姿を見せ……」

テイティスがみんなを元気付けようとしてそんな冗談を言おうとした…その時であった、

「…黙れKY。誰が影が薄いだよこのろくでなし」

突然瓦礫の山とは反対の方から聞き覚えのある声があったのである。

全員が驚いてそっちの方を見ると、そこには確かにミーシャとイブキが立っていた。

「ミーちゃん！」

ロゼツタはそう言っつてミーシャに駆け寄ると、そのまま彼女を思いつきり抱きしめた。

「ミーちゃん…無事でよかった。ホントによかったよう！」

「…わかった、わかったから…痛いってマジで」

ミーシャはそう言いつつも優しくロゼツタの頭を撫でてやる。

「イブキ！」

「イブキさん！」

シロとエリオットも慌ててイブキの元に駆け寄る。

「イブキさん、無事で何よりです。怪我とか大丈夫ですか？」

「うん、何とかね。心配かけてゴメンね二人共」

「まったくだ！もう、お前が帰って来なければどうしようかと…」

シロの声は怒っていたが、いつもにもまして大きく速く振られる尻尾がその嬉しさを物語っていた。

「心配したんだぜミーシャ？…無事で何よりだよ」

「エレノアこそ…私がいなくてもちゃんとしていられるのか不安で仕方なかったよ？」

「へっ…相変わらずシュールなやつだぜ」

そう言っつてエレノアとミーシャも抱擁しあつて互いに再会を喜んだ。

「おかえりミーシャ、ご機嫌いかがかな？」

「…そうね、もう最高つてところかしら？」

「ははは、そいつは嬉しいね」

ティティスとミーシャもそうやって笑顔を交わす。

「あれ、でもミーちゃんはどうやってここに？なんで洞窟の入り口の方から来たの??？」

ロゼツタがそう首を傾げた。

「…あ、それね。実は洞窟の先にもう一つ出入口があったの。私達が入ってきた入口よりもだいぶ小さくて目立たなかったけど…何処かのおバカさん達のおかげでだいたい予想ができたわ。…んで、そこから脱出できたってわけ」

「何処かのおバカさん??？まあ、ともかくおかげで助かったわけだ」

エレノアが言う。

「…もちろん、ちゃんと目的も果たしたよ」

そう言っつてミーシャは懐から金色に輝く一枚のカードキーを取り出して三人に見せた。

「これは…！」

エレノアがそれをまじまじと見つめる。

「…そ、バベルを起動させるための鍵。一番奥に置いてあった汚い箱に入ってたよ」

ミーシャがそう答える。

「じゃ、とりあえず目的の一つは果たせたってわけだな」

「やったあ〜!!！」

ティティスとロゼツタはそう喜びの声を上げた。

「ま、そうゆうことね。…それよりも…ちよつと聞いても良い?」

「ん?なあにミーちゃん??？」

「…私つてさ…そんなにやる気の無い顔してるかなあ…?」

「そう言われてみるとなあ、確かにちよつと目の焦点があっつていないような気もするな」

「キヤハハハ!確かにミーちゃんつてさ、なんだかいつつも眠たそうな顔してるよね!」

「俺的に言っつとだな、無表情つて感じがするキャラなんだよね」

「私…なんでこんな連中のために必死になってたんだろう…はあ…先が思いやられる…」

ミーシャは大きな溜め息をついた。それでも彼女は心の中で密かに満足していた、自分も大きく貢献できたんだと。…そして知らない間に彼女の溜め息は笑い声に変わっていた。何故ならば三人の顔が砂だらけであったからそれが何だかたまらなくおかしくて、そしてたまらなく嬉しかった。彼女にはわかっていただ。みんなが必死になって自分達を探してしてくれたことを、そしてその無事を信じていたことも。そうでなければ顔を砂まみれにしてまで瓦礫の山に立ち向かうことなんてきつとしないだろうから…。

…ミーシャの心は久しぶりに何か軽くて、そして明るいもので満ち足りていた…。

第四十一章 富士山ダンジョン・後編（後書き）

《コラム：ルビについて》

PCでお読みの方にはよくわかると思いますが時々作中には本来の読み方とは違う振り仮名、つまりはルビが振られています。これは、作者が会話や文章に深みや特別な意味を持たせるために使っている技法の一種で特にミーシャやロゼリアーヌといった教養の高いキャラクターの会話表現によく用いています。直接的な表現をあえて避け何処か回りくどいような表現を使うことによって、他のキャラクターとの知性の差をつけやすくなるからです。…というか、単に作者が単純な表現を好まないだけでもありますが。

第四十二章 Circulate (前書き)

今回は繋ぎの話である要素が大きいためやや文章が説明文っぽくなってしまった感があります。後半には少し考えて読んでもらいたい部分もありますので、そこは慎重にお願い致します。

久しぶりにエレノアのコンプレックスネタが復活しますのでお楽しみー！

第四十二章 Circulate

《シラント郊外・エリー邸二階バルコニー》

「…それで？ベンケイは何だつて？」

短い黒髪の、ちょっと大人っぽい服装の女性が言う。

「ティティス達は無事に目的を果たしつつあるって。ジパングには迎いの艇ふねを出しておきましたわ。…立場上、彼は直接この事例ベンケイに関われないしそろそろ帰って来てもらわないといけませんこと」

ウェーブのかかった金髪で、豪華なドレスを身に纏った女性が紅茶を上品にすすりながらそう答える。

ここはエリーの自宅、と言うか大豪邸である。エリーに招待されていたマーベラスは彼女と二階のバルコニーでお茶の時間をしていた。魔物騒動の前後から急にゲリラやテロリスト、さらには魔物の活動が減って暇を持て余していたからである。エリーの両親は生前、有名な実業家で莫大な財産を築いていた。両親の死後もその財力が尽きることは無く、一人娘だったエリーは父母の残したこの大豪邸に住んでいる。無論、彼女が政府特殊部隊エフエクトで働いているのは自分の類稀な能力を生かした人生を送りたかったからである。

「それにしても流石は実業家の娘。電話一本で飛行艇を呼んじやうなんてね」

「そうゆう言い方はやめてくださるマーベラス。あくまでも仕方なくそうしたんだから」

「はは、ごめんごめん。…ティティス、大丈夫かな？あの子、ああ見えて結構無頓着だから…ご飯ちゃんと食べてるのかな？ちゃんとお友達とは仲良くやってるのかな…なんて」

マーベラスが心配そうに言う。

「もう、あなたがすっかりしなくてどうするんですのマーベラス。弟ティティスが心配なのは分かるけど、他にもやらなくちゃならないことがあ

るはずですよ？」

「…うん、そうだよねエリー。いよいよ対決の時が近いみたいだし、何としても魔物の手からこの世界を守らないと」

「その意気ですわ。…そう言えば、昨日コロツサル様が小隊を西側の大陸に派遣したそうですね。おそらく、ティティス達と何か関係あるはず」

「西側か…最新鋭のステルス艇を使ったってことね」

「ええ、その通りですわ。それと…その艇には最新兵器が乗り合わせているとか…」

「レクイエム…とうとうその時が来てしまったのね…」

「私達のリサーチを持ってしても詳細は不明…でも、噂だとまだ未完成らしいですわ」

「とにかく、ティティス達との接触は避けて欲しいけど…」

二人は不安で一杯だった。共和国政府の誰が魔物でその戦力はどのくらいか、大統領の真の目的は何なのか…とにかく現状が複雑すぎて把握しきれなかったからだ。もちろんティティス達の安否も心配である。

政府内の大掛かりな人事移動、国に対するテロ活動の現象、そして大統領の不信な行動の数々…とにかく、この世界がとんでもない変革の中にあることだけは事実であるように感じた。

《ひと時のお別れ》

穏やかな日差し…静かな漣の音と潮風…和やかな雰囲気か辺りを包んでいた。

ここはジパングのとある海岸、エレノア達が飛行艇を泊めている海岸である。そして飛行艇に乗り込もうとしているエレノア、ロゼッタ、ミーシャ、ティティスをイブキとシロ、そしてベンケイとエリ

オットが見送りに来ていた。

「それではなティティス、気をつけていくんじゃぞ？マーベラスやエリーにはこのわしからよろしく伝えておくからの」

「ああ、よろしくなベンケイ。…シランドでまた会おうな」

そう言うと、ティティスは飛行艇のエンジンを起動させるために一人で先に艇へと乗り込む。

ミーシャとイブキのお手柄で一行がカードキーを入手してから既に2日が経っていた。その2日の間に後の行動はどうするべきかベンケイも交えて話し合われた。何でも、ベンケイは立場上の問題もありティティス達とは一緒に行動できないらしい。そもそも、彼がジパングにいたのは里帰りの一環でティティス達と出会う予定などなかったそうなの。そして、既に目的を達したイブキ達だが…これはもう腐れ縁と言うことで協力してくれることになった。以上の事を踏まえた結果、二手に分かれて行動することにした。ティティス達は当初の予定通りエンドラーズの待つエデンの花園に向かい、そこからカードキーを使って起動させてサテライトにある真実の鏡を手に入れる。イブキ達とベンケイは先にシランドに向かい、内部調査やコロツサルとの決戦に備えて作戦等を練る…と言うものだ。よって、今まで行動を共にしてきた一行にとってはしばしのお別れとなる。

「それじゃあな、どうせ後でまたすぐに会えるだろうが…いちおうお別れだ」

「まったね〜！」

エレノアとロゼッタもそう別れの挨拶を述べると飛行艇に乗り込んでいった。

「…しばしお別れねイブキ。あなたとだったらもう一回コンビ組んであげてもいいよ」

ミーシャが乗り込み際にそう言ったので、

「ありがと。でも組むならもつと平和的なことで組みたいな」

イブキはそう笑顔で返すのであった。

…やがて4人を乗せた飛行艇のハッチが閉まり、エンジンが大きな

唸り声をあげる。物凄い轟音と風が起こり船体を固定していた脚が地面からゆっくりと離れた。そのまま上空数十メートルまで上昇し、やがて水平に動き始める。そしてイブキたちが見守る中、飛行艇は遙か西の空へと消えて行きました…。

「…いつちやいましたね」

エリオットがそうしみじみと言いました。

「そうだな…今更ながら、連中とは出会えて良かったと思ってる。今度再開する時もきっとそう思うに違いないだろうさ」

シロが珍しくそんなことを口にした。…もしかしたら、彼は彼なりにこの出会いの価値を理解していたのかも知れない。

…イブキたちは飛行艇が見えなくなった後もしばらく西の空を眺めていました。真つ青な草原のように穏やかな青空が何処までも続いていた…。

《紫色の瞳が見る世界》

「あーあ…外出できるって聞いてたから楽しみにしてたのに、これじゃ結局研究所での生活とそんなに変わらないね」
アメジストカラー

紫色の髪と瞳の少女が船室の窓から景色を眺めながら言う。

「そんな素っ気無いこと言わないでくださいよスミレ。本当は嬉しいんでしょ？」

眼鏡をかけた白衣の研究員風の女性がそう言った。

「えー、何よそれ。一番楽しみにしてたのはリンリンの方でしょ？」

「あら、バレてましたか」

2人は互いの顔を見合わせてクスクスと笑う。

スマレとリンリンの2人が今いるのは共和国が誇る最新鋭の戦闘用ステルス飛行艇『ナイトホーク』の一室である。戦闘用の機体の部

屋にも関わらず、部屋には可愛らしいベッドや壁紙が貼ってあった。そこからもスミレがいかにか大切な存在であるかを窺い知れる。

スミレにとつてコロツサルの元での生活は退屈でしかなかった。研究所での様々な検査や実験はもとより、外出が厳しく制限されていたのが何よりの苦痛であった。それは付き人のリンリンも同じである。だから目的はどうであれ、外出できたことは大いに喜ぶべきことであつた。

「それにしても、今回はシュナウザーが指揮を取るんだつてね。…気に喰わないね。乗組員は全員人間に扮した魔物だし、何だか怪しげな機械はたくさん搭載されてるし」

スミレがそう不機嫌そうに長いもみあげを撫でながら言う。

「それは仕方ないですよ。今回はシュナウザー様が手がけている機械兵ロイドを使つての任務ですから。…あんまり悪口言わないでくださいよ、同乗してるシュナウザー様に聞こえますから」

リンリンが声を潜める。

「はいはい、わかつてるよ。…なるほどね、私は何かあつた時の保険つてわけか」

「まあ…そうゆうことになるんでしょうか」

「コロツサルは用心深いからなあ。…今回は果たして姉さんに会えるだろうか？ 気配が近づくのは感じるんだけど」

「アゲハのことですか…つかぬ事をお聞きますが、どうしてスミレ様はそこまで彼女にこだわるのですか？ 会つたことすら無いとゆうのに…」

リンリンが改まって聞くと、

「…さあね、理由なんて無いし必要いらさないよ。ただ姉さんと私には同じ血液が流れているのは確かだよ。とりあえず会ってみないことにはどうしようもない」

スミレはそう答えた。そしてさらにこう続ける。

「…ただ、もし自分と同じ物がもう一つ存在するとすればそれはあんまり気分の良いことじゃない。いずれにしろそこは白黒ハッキリ

決めなくちゃならないんだよ。そうさ、ジャッジメント審判を下すのはこの私なんだよ……！」

スミレはそう不気味な笑みを浮べるのであった。

果たして彼女の言うジャッジメント審判とは何なのか……この時はまだ誰にも解からなかった。しかし、それが決して平和的な意味で無いことだけは確かである……。

《本当の自分を認めてくれる人》

「……っと、まあこんなものかな」

エレノアが手入れを終えたマグナムをまじまじと見つめながらそう呟く。

ここは遙か上空を航行する飛行艇の一室、エレノアが寝泊りしている部屋だ。時刻は既に午前2時をまわり、船室の窓の外には月と数え切れないほどの星々が雲の海の上で輝いていた。

「なんだか昔を思い出すなあ……あの時もこんな感じで独り過ジャックフットごしていたものだ」

夜食の干肉をかじりながらそうエレノアは窓の外を眺める。静寂に包まれた慣れない部屋での時間は、かつて一人旅をしていた頃の夜によく似ていた。現在の状況からはとても考えられない寂しい生活であったのかも知れないが、今となつては良い思出メモリアルとなりつつあった。

「……ノアちゃん？起きてるう？」

エレノアがしみじみとしていると、その場の空気には似合わない元気な声が部屋のドアの向こうから聞こえてきた。

「なんだ口ゼか、起きてるぜ？入って来いよ」

「言われなくてもそうするよ」

そう言つて口ゼッタが部屋に入ってくる。鼻をしきりにヒクヒクさ

せているところを見ると、どうやらエレノアの夜食の良い臭いを嗅ぎ付けたいらしい。

「なんだよ犬みたいに鼻ヒクヒクさせやがって。食べるか？」

エレノアは愛銃をホルダーに戻し、手入れ道具を鞆の中にしまう。変わりに中から大きな干し肉の塊を取り出した。

「うん、食べる食べる！」

ロゼッタがそう言うので、エレノアはナイフで肉を小さくスライスして彼女に手渡す。ロゼッタはそれを嬉しそうに頬張るとすぐに飲み込んでしまった。

「お前さあ、前にこんな干からびた飯は食えないみたいなこと言っ
てなかったっけ？」

ロゼッタがあんまりにも美味しそうに肉を頬張るものだから、エレノアがそう半ば呆れて聞く。

「あゝ、確かにそうだったね。でもそんなのは気分なんだよノアちゃん」

「なんじゃあそりゃ。まあ、お前はいつつもそんな調子だからな」
エレノアとロゼッタはそう顔を見合わせて笑った。

…やがて、一瞬の沈黙の後にロゼッタがこんなことを言い出す。

「…ねえノアちゃん、昔まだわたし達が出会って間もない頃にわたしが『人間になりたい』みたいなこと言ってたの覚えてる？」

「ああ、もちろん覚えてるよロゼ？…それで、結局どうなんだよそんなことは？」

「うん…実は最近ね、あれはわたしの贅沢だったのかも知れないって思えるようになってきたの。だって、みんなが今あるこのわたしのことをちゃんとそれと認めてくれるんだから」

「ほお…で、つまりロゼは何が言いたいんだよ？」

「わたしは今のわたしのままで良いってこと。必要以上に変わることを望まれてはいないしわたし自身も望んではないから。…これがわたしなりに出した答え」

「…そっか。そうだよな、お前はお前でしかないんだからそれを誇

りに思わないとな。私もその答えは正しいと思うよ。だってそうだろう？大親友の回答が間違っているはずないからよ」

エレノアはそうニッコリと微笑みながら言った。

「ありがとうノアちゃん。だからね、ノアちゃんもずっと今までのノアちゃんできてね…約束だよ？」

「な、なんだよ急に…当たり前だ、いつまで経っても私は私でいるよ」

「…あ、でも一つだけ直さないといけないところが」

「は？なんだよその直さなくちゃいけないところってのはよ？」

「それはね…ここだ〜！！」

ロゼッタはそう言うなり素早くエレノアの後ろ側に回り込みそのまま抱きついた。…もちろん、その両手は的確にエレノアの乳を捕らえていた。

「な、なな！！？？なつ、何しやがる！！？」

「キャハハ、や〜っぱりボインには程遠いねノアちゃんのオツパイは！ペラペラの油揚げみたいだもんね」

「だっ…誰が油揚げだっ！！この野朗〜！覚悟しやがれっ」

そう言つて掴みかかろうとするエレノアだったが、ロゼッタには軽い身のこなしで交わされてしまった。

「ははっ、悔しかったら捕まえてごら〜ん！実は寄せて上げるブラ愛着のノアちゃん」

「きつ、きさま〜！待てこの野朗！その乳むしりとつてやるから大人しく捕まりやがれロゼ〜！！」

「わ〜、ノアちゃんが怒った怒った！逃げる逃げる！」

こうして2人にとっては恒例行事の追いかけてこが始まった。エレノアがどの程度本気で怒っているのかは定かではないが、2人からしてみればこれも単なる遊びの一種に過ぎないのかも知れない。いずれにしろ、久しぶりだったこともあり熱の入った2人は狭い部屋の中を一晩中走り回って彼女達なりに楽しんだのは事実である。無論、この子供っぽい2人の常識知らずの行動のおかげで翌朝のミ-

シヤが寝不足で不機嫌だったのは言うまでもないだろう。

飛行艇の下では雲海が、そして上には天の川がそれぞれ輝いていた。全く違う2つの輝きが夜空で交差する様はエレノアとロゼッタの關係にも例えられるほど不思議と自然で、そして美しいものであった。

…飛行艇はただ黙々と、夜の闇と光の織り成す美しく不思議で雄大な世界の中を飛んでいくのであった…。

第四十二章 Circulate (後書き)

いよいよ次回辺りからまた新たなステージに入りそうな予感がしてきましたね。まだまだ謎多き物語ではありますが、どうぞ最後までお付き合いくださいませ。

それでは、またお会いすることを楽しみにしております。

第四十三章 鏡花水月虚構（前書き）

いやー、内容が難しくなるにつれて一話一話の進行具合がどうしても遅くなってしまいますね。読者様からのご指摘もあり、当初よりも描写や内容のわかりやすさを重視しているためになかなか文が長くなってしまっわけです。これも作者の力不足ですね、精進しないと更新も遅いでしょう。もうない作者ですが、どうぞこの先も未永くご愛読していただければ幸いです。ごさいます。

第四十三章 鏡花水月虚構

「はい、ヤーちゃん！できたからこれかぶってよ」

そう言つて赤髪の少女が大きな鳥と獣が半分混じつたような魔物の頭に花輪を乗せる。

「キャハハ！似合つてる似合つてる！」

「ちよつと、止めてくださいよロゼツタさん。恥ずかしいじゃないつすか？これでも誇り高き召還獣なんすから」

満面の笑みで満足するロゼツタにヤキトリが心底恥ずかしそうに言つた。

「ガルガルウルル（似合つてるぜヤキトリ）」

フカフカの花々を布団代わりに近くで昼寝をしていたワニガワがその喉を鳴らす。

「黙れ、鞆にするぞこの野郎」

ヤキトリがいつそう頬を赤らめてワニガワに吠える。

「今度は首飾りを作ってあげるねヤーちゃん！」

「…絶対反則つすよその笑顔」

どうやら誇り高きグリフォンも可愛らしい微笑みには頭が上がりないうようである。

ここは神の山の山頂、通称エデンの花園。燦燦と降り注ぐ太陽の光の下、美しく何処までも咲き乱れる花畑の中でロゼツタと2匹の召還獣は寛いでいた。この時エレノア達他の3人は少し離れた所にあるエンドローズの家にいたのだが、ロゼツタがこの姿でのエンドローズとの謁見を嫌がったためにヤキトリとワニガワが彼女のお守をしているのである。因縁浅からぬ二人であるだけに慎重な対応が求められた。ちなみに、飛行艇はふもとの目立たない林の中の開けた草原に停泊させてある。

「ミーシャさん達はちゃんと話し合えているのでしょうか？心配です」

ヤキトリがそう言ったので、

「大丈夫だよきつと。交渉相手のクソジジイはこのわたしを倒した人間の一人だから、そんなにバカじゃないよ。…あー、木っ端微塵にしてこの花達のための有機肥料にしてやりたいねアレは」

ロゼツタはそう花の首飾りを作りながらサラリと答えた。その満面の笑顔と凶悪なオーラのギャップに、ヤキトリとワニガワが顔面蒼白になったのは言うまでもない。

《エンドラーズの家》

「なるほど、とにかく大変だったようだが…無事で何よりじゃったよ」

エンドラーズがそう茶をすすりながら言う。

「ま、これで問題は一つ解決したわけだしな。後はサテライトに行つて鏡を手に入れるだけだ」

ティティスがそう嬉しそうに言った。

「そう上手くいけばいいんだけどな…今までの事を考えるとちよつと心配かも。なあ、ミーシャ？」

「そうね、エレノアの言う通り敵や障害がまたあるかもね。…そして今まで通り排除すればいいだけの話だけだ」

エレノアの問いかけに、ミーシャは相変わらず淡々と答えるのであった。

ここは花園の片隅にあるエンドラーズの家。丸太を使ったログハウスの風の小さなワンルームの家で、部屋の中には整理されていない魔道書やらが山積みになっている。ロゼツタを除いたエレノア達一行とエンドラーズはテーブルを囲みながら今までの経緯と今後の予定を話し合っていた。

「サテライトに行くのは明日にするのがよからう。今日はゆっくり

休むと良い。…こんな汚い部屋で申し訳ないが」

エンドラーズが部屋を見渡しながら言う。

「お言葉に甘えさせてもらいますよそれじゃあ。他に何か特別気をつけなきゃいけない事とかは…」

エレノアがそう念を押すと、

「明日の事なら心配いらんよ、サテライトに行けばココアが全部面倒を見てくれるじゃろうて」

エンドラーズはそう聞きなれない人物の名前らしき言葉を口にした。

「ここあ？誰っすかそれ？」

テイテイスが疑問系で話しかけると、

「ここで説明するより明日直接会ったほうが早いじゃろうてな若いの」

そうエンドラーズは笑顔で答えた。

「はあ…」

テイテイスは何だか自分のせつかちを諭されたような気分になったようである。

とりあえず、一行は一晚をエンドラーズの家で過ごすことになった。全ては明日、サテライトに行くからの話となりそうである。幸いなことに今のところ、エンドラーズの話聞いていてもエレノア達にとつては何も心配なことなどは無かった。少なくともここ最近の間の話題では。

…ただ一人を除いて。

《変わりゆくもの、変わらないもの》

「…またか、こうもしょつちゅう見ていると有難味も無くなるな」
長い黒髪を靡かせながらロゼリアーヌが夜の空を仰ぐ。その目線の先では本来、極地でしか見ることの出来ないような美しく七色に輝くオーロラがまるで風をいっばいに受けて波打つカーテンのように

暗い夜空に靡いていた。

この地へ再び降り立ってから最初の夜が訪れていた。二匹の召還獣は昼間のお守りに疲労困憊したのであるうか、ロゼリアーヌのすぐ脇で仲良く隣り合って眠っている。しかし彼女は召還獣達のようには眠れなかった。色々な考え事をしているうちに眠れなくなるのはいつものことであり、復讐を果たす日が近づくにつれてその傾向はより一層のものとなっていた。

「…さて、この異変をお前はどう思うロゼリアーヌ」
後方から何者かがそう問いかける。

「エンドラーズか…エレノア達は どうしてる？」

「安心してよい。もう午前3時じゃて、全員ぐっすり眠っておる。みんな心配しておったぞ、お前が不機嫌なことを」

「…そうか。明日ちゃんと謝らなくちゃいけないな」

ロゼリアーヌが視線を足元に落す。もしかしたら、彼女は彼女なりに自分がみんなに心配かけた事を多少は悔やんでいるのかも知れない。

「…今日もオーロラが綺麗じゃのう。ここ最近よく出ておるわい」

「何を呑気なこと言ってるんだよジジイが。こんな南方の地でオーロラが見れるなんぞ前代未聞だぞ」

ロゼリアーヌが牙を剥き出しにする。

「まあまあ、そんなに怒りなさんな。確かにこんなのは今までになかった。少なくともわしが生きてきたこの千年間ではな」

エンドラーズが髭を撫でながらそう述べる。

「ふん、言われなくともわかってるよ。…ここ最近、わたしが目覚める前後から世界の魔力の流れが大きく乱れてきている。おそらくオーロラもその影響を少なからず受けているのだろう。何が原因かは知らんが、不吉な予感がする」

「それについてはわしも同感じゃよ」

「おや、珍しく意見が一致したようだなエンドラーズ？」

「当たり前じゃ、魔力を少しでも司る者なら何かしらの異変は感じ

るもの。ミーシャもティティスも同じことを感じておるようじゃった。それほどまでにこの異変は大きなものとゆうことじゃ」

…それから、エンドラーズはしばらく間をおいてロゼリアーヌにこう聞いた。

「ロゼリアーヌよ…おぬし、本当はわかっておるのではないか？この異変が何によるものなのかを」

「ほう、何故そう思うエンドラーズ？」

「お前は昔からわしらのいつも一歩も二歩も先の次元の事柄を知っていた。そして今回も、何も知らない人間の話す口調ではなかった」
エンドラーズがそう鋭い眼差しで問い正すと、しばらく知らん振りをしていたロゼリアーヌもやがて空の一方を眺めながらこんなことを話し始めた。

「…わたしにはわかるんだよ、何かが来るのが。それが何なのかはわからないけれど…とても邪悪で…強大な…まるで今まで誰も遭遇したことのないような殺気を放って…まるでわたしに付きまとうように…」

彼女は心なしか震えていた。空を見つめるその赤い瞳は恐怖と緊張で瞳孔がまるで糸のように細長くなっていた。こんなにも脅える彼女をエンドラーズは見たことが無かった。故にその『何か』がとてつもないものであることは容易に窺い知れたのである。

「…そうか。だが安心するが良いロゼリアーヌ。お前は独りじゃなのじゃからな。何かあっても助けしてくれる素晴らしい仲間がいるではないか？」

するとロゼリアーヌは、

「独りじゃない？フフ…ハハハ、笑わせんなよエンドラーズ。ああ、そうだろうね。わたしはもう独りなんかじゃないだろうさ、エレノアもミーシャもティティスも…変な話エンドラーズ、お前も含めて他にも沢山の仲間を得たさ。だがな、もしそんな掛替えの無い仲間を失ったらどうする？その時の喪失感はとても想像で語れるものではあるまい。そうやってわたしは千年前に大事なものを数え切れな

いほど失ったんだ。…一部、お前の手にもよってな」

そう鋭い口調で言い放った。…顔は笑っていたが、その瞳には今にも溢れ出しそうな涙が光っていた。

「ロゼリアーヌ…」

「これはわたしの戦いなんだよ。そうさ、あいつら結局自分達じゃ何にも出来ないんだ。邪魔な敵も全部わたしが殺してきたんだから。ここまで無事に来れたのも全部わたしのおかげなんだよ。でもそれでいいんだ、わたしが傷つけばそれでみんな助かるんだから。…もうほっといてくれ、わたしは今一人になりたいんだ。お前の顔など見たくもない」

「…そうか、わかった。明日の朝にはちゃんとみんなと合流するのじゃぞ。…それと一つだけ言っておくが、もしお前が『ここまで無事に来れたのは自分のおかげ』だと本気で思っているのならそれは大きな間違いじゃぞ。そのことをよく肝に銘じておくのじゃな」

そうエンドラーズは言い残すと、その場を静かに去って行った。

…静寂の中、再びオーロラの輝く夜空の下にはロゼリアーヌ一人となる。

「…わかってる、わかってるさエンドラーズ。本気でわたし一人のおかげでここまで来れたなんて思っちゃいけないよ。でもそれが理想なんだ。戦い傷つき、苦しい思いをするのはこのわたし一人で十分なんだ。そうじゃなきゃ…そうじゃなきゃ何のためにわたしがいるのかわかんないよ…わたしは今、いったい何がしたいんだよ…」

首飾りの赤い石を両手で握り締め、震える声で見えない何かに語りかけた。

…明けることを知らない漆黒の闇夜に靡くオーロラの下を、冷たい山頂の風が吹き抜けてゆく。そして彼女が流す大粒の涙が足元に咲き誇る花々を濡らしていききました…。

第四十三章 鏡花水月虚構（後書き）

私生活も忙しいですから…更新は相変わらず遅いと思いますが、頑張って技能の向上に努めて参ろうかと思えます。少しずつになるとは思いますが、物語が大まか全て完成した時点で全体の矛盾点を無くしたりして体裁を整えたいと思っております。…この物語が完成するのはまだ先のようですね。それでは、次回もお楽しみに。

第四十四章 エクリプス（前書き）

いよいよエレノア達が宇宙へと旅立ちます。…まあ別に宇宙戦争物ではないのでちょこつと寄るだけではありますが。僕も一度は行ってみたいですね宇宙に。いつかは人類が宇宙を自在に行き来する、そんな日が来ることを信じて待っています。そんな夢を馳せつつ、本編の方も楽しみながら読んでくださいな。

第四十四章 エクリプス

「いよいよこれから宇宙に行くのか…スケールがでかすぎて私には想像もできないけど」

「そりゃあね、ノアちゃんは小さいもん」

「…胸がねって言いたいんだろロゼ？」

「えへへ、ご名答だよ。でも心配しないで、ノアちゃん心の器は誰よりも大きいんだからさっ」

「…フォローになつてないよロゼッタ…」

エレノアとロゼッタのいつもながらの会話にミーシャが溜め息混じりでそう言う。

バベルの中の広間でエンドラーズが来るのを、何気ない会話を交えて4人は待っていた。

「っにしても遅いなあの爺さん。鍵さえ渡しておかなきゃ勝手に行くところなのに」

眠そうな顔でティティスがそう愚痴をこぼす。

朝から空は曇っていた。雨が降るわけでもなく、太陽の光が薄く差し込むような中途半端な雲が空をどこまでも覆っている。これからサテライトへと旅立つ4人にとっては少々心細い天気ではあったが、土砂降りの雨でなかっただけましなのかも知れない。

「…いやいや、すまん。年寄りになるとどうも時間間隔がおかしくなるようだ」

遅れたことを詫びるようにエンドラーズが慌ててやってきた。

「そんなもんっすかね…で、鍵は持って来たんですか？」

「もちろん、この通りちゃんと持ってきたぞ」

エレノアの間にエンドラーズは懐からカードキーを取り出して得意気に見せる。

「…あれ、その鍵…私が見つけたのとちょっと違う気が…??」

ミーシャがそう首を傾げると、

「い、いやあ、気のせいじゃろうて。ともかく、お主等は中央の魔方阵へ立っておるのじゃ。今から少し準備するから」

そう言つて、4人を魔方阵の中心に誘導するとカードキーを機械に差し込んだ。すると何やら不思議な音と光が機械から発せられ、エンドラーズがそれを色々操作し始める。

「うひゃ、まるでSFの世界の住人になつた気分だな」

ティティスがあまりにも興味津々な顔で機械を見つめるので、

「なんだよ〜ティティス、そんなに機械がいじりたきゃ私達だけでサテライトに行くけど？」

エレノアがそう彼をからかう。

「誰が機械オタクだ、俺だつて宇宙に行きたいんだよ。それに俺は機械よりもエレノアの方をいじりたいんだが…」

ティティスがそうにやけながら言つた瞬間、

バチコーン！！

…エレノアの右ストレートがティティスの顔面を鋭く捉えた。

「こんな時に何わけのわからないこと言つてんだよバカ！スケベ！

…もう、本当にデリカシーってもんがないんだから！」

「いてて…平手打ちならともかく、女の子でグーパンチは無いよ…」
怒つて頬を膨らますエレノアに、ティティスが痛そうに頬を両手で押さえながら嘆く。

「いいじゃんノアちゃん、オナニーと同じで別にティーちゃんとセックスしたつて何も減るわけじゃあるまいし！」

「な、なな、何言つんだよロゼツ！！言葉を選べよ言葉を！てゆー

かこんな場所でモロに禁用語連発するなよバカ野郎っ！！」

もうロゼツタの発言にエレノアの顔は真っ赤だ。

「…あー、言論の自由って怖いね」

ミーシャがそう冷静に意味不明なことを口走る。

「やれやれ、若いからつてあんまり無茶はいかんぞお主等」

機械の操作をほぼ終えたエンドラーズが呆れてそう言った。

「はは、そうゆうアンタだつて昔はかなり無茶してたよね？」

ロゼツタが嫌味のつもりなのだろうか、半分笑ってそう言う。

「…そうだな、あの頃のわしはとても愚かな男だったよ。お前にも酷いことをした。わしはイチのように寛大にお前と接することができなかった…それは今でも悔いてる」

そう話すエンドラーズを気難しい顔付きで見ているロゼツタであったが、やがてその重い口を開いてこう発した。

「まあ、正直あの時は仕方なかったんだって今ではそう思ってるよ…わたしは心の狭いやつだからコロッサルや過去のお前らの仕打ちを許すことができなかった…そんなわたしを許してねエンドラーズ」

「…ああ、もちろんそのつもりさ」

千年もの長きに渡り、決して今まで解かり合えなかった二人が僅かだが歩み寄りを見せた瞬間だった。

「ロゼ…」

「心配しないでノアちゃん、みんなのおかげでわたしは自らの暗い過去に打ち勝てる気がするの。過去に犯した過ちを正すならば今しかない…わたしはノアちゃん達のため、そしてこの世界のためにこの身を捧げるって決めたから。…お願いエンドラーズ、わたし達をサテライトへ」

「…わかった、気をつけてな…こんな俺を許してくれてありがとう
ロゼリアーヌ」

エンドラーズはそう言うと、機械の大きな赤いボタンを押した。すると魔方陣はまばゆい光に包まれ、辺りが一瞬真っ白になった。…やがて辺りから白い光が引くと、もうそこには4人の姿はなかった。「ロゼリアーヌ…本当はわかってる。悪いのはお前じゃないんだから…」

床に描かれた魔法陣を見つめるエンドラーズの瞳に涙が浮かんだ…。

「あゝ、暇ね…なんか面白いジョークでも言つてよサイコ」

「そんな無茶振りすんなよアクア。俺だつて退屈さ」

アクアにサイコがそう不機嫌そうに答える。

「あら、あなたのお兄さんつて相変わらず気の利かない人ねドリーマー」

「ははは…それはないですよマリアさん」

マリアの毒舌にドリーマーは苦笑する。

「ふん、余計なお世話だマリア。それよりいいのかよこんな所にいて？お前はサキュバス様の手下なんだし、コロツサル様に感づかれたらマズイだろうが」

サイコがそう尋ねると、

「まあそれもそうね。でもサキュバス様は趣味の骨董品いじりが上手くいかなくてイライラしてらっしやるから近くにはいたくないの。ジプシーはともかくドラードとも別段仲良くないし、久々に同期の昔馴染みに会いに来たんだからそれでいいじゃない。…大丈夫、コロツサル様は忙しくてサキュバス様がこつちに来てる事はまだ知らないみたいだから」

そう流暢な口調で回答した。

「相変わらず随分と余裕ねマリア。ま、私達も生真面目なシャクマといるよりは政敵ながらも馴染みの友人といたほうが気が楽なんだけどね」

アクアがそう言いながら笑う。

4人はシラント郊外の人気の無い小さな公園で戯れていた。仮に誰かが彼らを目撃しても、ただ楽しげに話しているだけの少年少女のグループにしか見えないであろう。昔からの知り合いである彼らは、異なる上司の元で働くようになってからもこうやって度々会っているのである。

「…それでえ？こないだの件については考えておいてくれたかしらあアクア？」

「だからさマリア、あなたがいくら仲良しの一人だからってそれは無理だよ。サイコもドリーマーも言ってるけど、私達は最後までちゃんと主人コロツサルに使えたいんだ」

アクアが少々強めの口調でそうマリアに答えた。

「それじゃあ逆に聞きますけど、マリアさんはどうして僕達をそんなにサキュバス様の傘下に入れたいんですか？手下ならもう優秀なのがいるでしょう？」

頭脳派のドリーマーが首を傾げる。

「そ、それは…」

「んだよ、ハッキリ言えよマリア」

マリアが口ごもるとサイコがそう詰め寄るので、彼女は仕方なく話すことにした。

「あのねえ…昔馴染みの誼で話しておくけど、このままだと殺されちゃうわよあなた達」

「…誰に？」

アクアが聞く。

「そんなの決まってるでしょう！？…サキュバス様だよ、あのお方はこの世界ガイアを手に入れるって野望を達成するためだったら同じ四天王でも容赦しないんだからあ。その手下のあなた達が生かされるわけ無いんだから、今のうちに媚を売っておいた方がいいって。…お願いよアクア、サイコ、それにドリーマー、私だってこんなお願いしたくないけどあなた達を失いたくはないのよ」

マリアが珍しく真剣な眼差しで懇願した。

「…そっか。お前の気持ちはわかるさマリア、俺達は言ってみれば親友だもんな。だがな、俺らも人型の魔物の端くれだ。どうしても譲れないプライドってもんがあるんだよ。もしもコロツサル様がいなかったら今の俺達だっていないかも知れないんだ。…悪いがその申し受けは受理できない」

サイコはそう丁寧に、しかしキツパリとマリアの願いを断った。

「…やっぱりね、あなた達ならそう答えると思ってたよ実は。人情

深いもんね私と違ってアンタ達って人は」

マリアが溜め息混じりに少し悲しそうな表情で言った。

「何言ってるのよマリア。あなただってこうやって身の危険をかえりみず私達に情報を教えてくれたじゃない。…あなたは最高の親友よ」

「アクア…うん、ありがとうね」

マリアはちよつとだけ嬉しそうに笑う。彼女にとって大親友アクアの励ましの言葉は何よりも特別な意味を持っているに違いなかったから。

「…あ、兄さん兄さん。あのお願いはどうするんですか？」

何かを思い出したドリーマーがさり気無くサイコの方を叩いた。

「え？あつ、そうだった。ちよつとすまないんだけどさマリア…お金貸してくんないかな？頼む！」

サイコがそう言っただけでマリアに手を合わせる。

「はあ…別に構わないけどお。…なんで？キャバクラにでも行ったのかしら？」

マリアがそう言うので、

「違うよマリア。こないだね、赤い悪魔の仲間の白い魔法使いと戦った時に以前壊した家の修理費を請求されたんだってさ！だから今は物凄く貧乏ってわけ、笑っちゃうよね」

アクアがゲラゲラ笑いながらそう説明した。

「笑うなよアクア！…クツソ、あの野朗めミィンヤ必ず倍の請求書叩きつけてやるっ」

対してサイコが物凄く悔しそうに言ったのはもはや言うまでもないことであるっ。

《サテライト…ココアと意外な鏡の行末》

「ふえ…くしゅん…」

「お？なんだよミーシャ、風邪でも引いたのか？」

「違うよエレノア。…誰か噂してるなこりゃ…」

ミーシャが右手の人差し指で鼻を嚙りながらそんなことを呟く。

いつしか気がついてみると、エレノア達は四方を白っぽい壁に囲まれた小さな空間に立っていた。バベルで淡い光に包まれてからの記憶は曖昧で、ここが何処なのかもよく分からない。

「それにしても何だか変な気分だよ。いったいどんなプロセスでここにいるのか…」

ティティスがそう首をかしげている時であった、突然目の前の壁が大きく稼動して目の前が急に開けた。

「…ようこそサテライトへ。あなた達のことは全てエンドラーズ様から聞いていますよ」

扉が開いたそばから、黒髪猫耳の少女が4人の目の前に現れてこう言った。

「…獣人？久しぶりに見たよ」

少しだけ驚きつつも、ロゼッタがそう珍し気に少女を見つめる。

「ええ、私はココア。このサテライトの管理人をエンドラーズ様から任されています」

まじまじと見つめるロゼッタと残りの三人に、ココアはそう尻尾を振りながら自己紹介をした。

「…で、私達はどうかやってここに来たわけだ？悪いんだけど説明してくれないかな管理人さんよ」

エレノアがそう問うと、

「それはですね、バベルは即ち空間を歪ませる装置であって小規模なワイプホールを人工的に作り出して立体的な時間軸のうんぬんかんぬん…」

そうココアが難しい理論を述べるのだが、ミーシャ以外の3人にはちんぷんかんぷんだ。

「…要はワイプしてきたってことですね地球から」

気難しい表情の3人を見てココアはこう最後に述べた。

「えっ、じゃあ今わたし達って宇宙にいるの!？」

ロゼッタが聞くと、

「もちろんですよ。…外をご覧になりますか？」

ココアはそう言うと言った壁にあった何かのスイッチを押した。すると四方を囲んでいた壁が全てスライドして目の前に神秘とも言える世界が広がった。

「わぁ…」

あまりの感動に一行は声を失った。黒い背景には無数の星々が散りばめられ、その真ん中で青い地球が一際輝いていた。…きっとこんな景色を見たことがある人物はそう多くは無いであろう絶景である。透明な壁がなければ今すぐにでも外に出てみたいと思うような、そんな壮大で雄大な空間が広がっていた

「…俺達が宇宙にいるってことは理解したよ。じゃ、鏡もここにあるんだろ？俺達が一番欲しいのはそれなんだが」

意外と冷静なティティスがそう目的を伝えると…

「あー…やっぱりそうきちやいます？」

何故かココアは苦笑いする。

「…ここには無いの真実の鏡は？」

不自然な態度のココアにミーシャが質問した。

「いや、あるにはあるんですけど…百聞は一見にしかずです、とりあえずついてきてください。詳細は後で説明します」

そう言ったココアの顔はどこか引きつっているようなそんな気がしたが、4人はとりあえず言われるがままに彼女の案内に従うことにした。

僅かに緑を帯びた白い壁で囲まれた広い通路を進んでいく途中には所々丸い窓があつて、そこからは相変わらず青い地球が望めた。…果たしてこの施設サテライトの全貌がどうなっているのか、エレノア達には見当も付かない。

「それにしても随分と待ちましたよ。…鍵はエンドラーズ様がお持ちになつていたはずですが？」

移動中にココアがそんな驚きの事実を告げたので、

「…あのクソジジイめ、予備のカードキースベアを持っていたくせにわざと探させてわたし達の実力を試しやがったな。今度会ったら100%殺す」

そうロゼツタが怖い顔をして憤慨した。

「まー、あの爺さんなら何となくやりそうな気もしたがな。だつてさ、ここにココアのための食料とか物資を運ぶ時にはどうすんだよつて話だもんな」

「なあにわかつてたような言い方してんのよ！最初に言いなさいよ肝心なことは」

さらりと言うティティスにエレノアがそうムツとした様子で突っかかる。

「…基本、魔法使いつてのは性格悪いんだよ。…私は違うけどね」

「うーん、ミーちゃんの場合それはわからないよ」
そうロゼツタが苦笑いした。

「…あ、到着しましたね。ここです、真実の鏡があつたのは」

ココアとエレノア達は一つの扉の前で足を止めた。ココアが認証システムに手をかざすと扉は静かに独りでに開いた。

「真つ暗な部屋だな…」

エレノアが目そう言つて細める。

「い、いいですか？これから灯りを付けますけど…お、怒らないでくださいよ？」

ココアが何故かビクビクしながら電気のスイッチを入れた。明るくなった部屋は何も無い殺風景でさほど広くなく真ん中に何やら台座のようなものだけが設置されており、その上には粉々になった何か光る欠片と綺麗に装飾が施された鏡の枠が置いてあつた。

「…なるほどなあ、ココアが言つてたのはこうゆう意味か」

一連の不信な言動の意味が解かったティティスが納得するように割れた鏡を見つめる。

「ごっ、ごめんなさい！実は私の不注意で割つてしまつて…ごっ見

えてものすごく不器用なもんでつい掃除の時に落としてしまつて…
エンドローズ様にも怒られるのが怖くて言えなくて…本当にすいませんでしたっ！」

そうココアが土下座しながら必死に謝つた。

「ははん、なるほどね…これで謎が解けたよ。わたしが封印から解放されたのは自身の魔力を封じ込めていた鏡が壊れたからだねきつと。だからノアちゃんみたいなへんちくりんでも簡単にカプセルから取り出せたんだ」

「オイコラ、誰が変ちくりんだ口ゼ。ま、要は謎がまた一つ解けたわけだな」

「でもなあ、あんな分かりづらい廃墟になんでノアちゃんがしかもあのタイミングで来たのかは解決できてないよ？」

「そんなのたまたまだろ？ 出会っちまつた後に四の五の抜かしてもしょうがないじゃん」

「まあ…それもそうだねノアちゃん！」

ロゼッタとエレノアはそんなことを互いに言うのであった。

「なくなっちまつたもんは仕方ないさ。この際鏡はキツパリと諦めて、さつさとシランドで仲間達と合流した方が得策だな。…手ぶらで帰ったら姉さんに何て言われるかなあ…」

ティティスが最後に苦笑いを交えながらそう提案する。

「賛成だね。…で、この後どうする？ もう帰っちゃうってのはちよつともつたいない所業だと思っただけだな…」

ずっと黙っていたミーシャがそう窓の外に広がる景色を名残惜しそつに眺める。

「それもそうだな、あんまりのんびりするのもなんだが一日くらいは別に問題ないだろうよ」

冒険心のわかるエレノアも、ミーシャが何を言いたいのか悟つたよつでそれに賛同した。

「そ、それでしたら一日ここに泊まっていかれては？ 部屋も必要な物は全部揃いますし…私自身、色々と荷物をまとめないといけない

んで。もうここに用はないですし、この施設サテライト自体が老朽化で既に墜落寸前の危険な状態ですから…明日にはあなた方と共に地上に帰ります」

そうココアが言った。

「じゃ、決まりだな。あゝ、久々の休暇だぜー」

テイテイスが嬉しそうに大きく伸びをしながらこの予定の決定を述べる。

「…ま、呑気に寝ている間に墜落なんかしなきゃいいんだけどね…」

「お腹減った」

ロゼッタとミーシャがそんなことを口にしたので、

「…お前ら…もう少し協調性つてものはないのかよ…？」

エレノアはそう思わず呟くしかなかった。

地上から遠く離れた宇宙においてもこの4人の在り方についてはどうやら不変のようである。これは…きつと百戦錬磨、あるいはただのお気楽思考の賜物なのかも知れない。

…しかし彼らはまだ何も知らなかった、これから地上で起こる惨劇を…

《降りかかる試練》

「ふう…もう夕方だと言うのに…ココアは何をやっているのだ？まあ、連中のことじゃろうから一日くらい向こうに滞在するつもりなのかも知れないな」

日が西に傾き始める頃、エンドラーズは独り家で椅子に腰掛けながら寛いでいた。ここ最近では老衰ですっかり気力が落ちてしまっていた彼は一日の大半を家の中か庭先でのんびりと過ごすことが多くなっていた。魔力の衰えも感じずにはいらなかったが、先日の彼女ロゼリアヌ

との戦闘でだいぶ無理をしたのが原因でその残り僅かな生命力の灯火も弱くなっていたのである。

「俺もすっかり年をとってしまったもんだ、もしもこんな姿を生前のイチに見られたらきつと大笑いされるに違いないだろうなあ……」
そう彼は哀愁たつぷりに呟く。かつてはイチと共に赤い悪魔討伐をした伝説の魔法使いも、今ではただの老人。そんなことを彼自身思っていたのかも知れない。

……そんな時であった、何処からともなく何かのエンジン音が聞こえてくる。それは段々と近づいてきて、ついにはすぐそこまで迫ってきた。

「な、なんだ!？」

エンドラーズが驚いて窓のところに駆け寄って外の様子を伺うと、彼のいる家の目と鼻の先に迷彩柄の巨大な飛行艇が今にも着陸しようとしているではないか!

「あれは……帝国軍の戦闘艇……くそっ、コロツサルか!」

予想外だった、まさかこのタイミングで奴等が来るとは思わなかったのだ。エンドラーズは焦った、もしバベルを制圧されたら……間違はなくエレノア達の身に危険が及ぶ。それだけは絶対に阻止しなければならなかった。彼は迷わず家を飛び出した。もちろん、右手にしっかりと愛杖ライフヘアラを握り締めて。

……やがて着陸した飛行艇の真ん中辺りにある大きなハッチがゆっくりと開き、中からは一人の軍服姿の男と3体の奇妙な機械兵ガディアンが降りてきた。

「これはこれは、わざわざお出迎えとは嬉しい限りだ。このシュナウザー、貴様の寛大な行いを称えますぞ」

そうシュナウザーが小馬鹿にするようにエンドラーズに言い放った。
……黙れ、お前がコロツサルの使いの者だつてことくらい分かってるんだぞ? 悪いがさっさとここから立ち退いてくれないか。……さもなければ強制的に排除する」

エンドラーズが鋭い視線でそう警告する。

「だったら話は早い、こちらも最初からそのつもりだからな。…やれ！」

シュナウザーが手で合図を送ると、ガーディアン達の両手に装備された機関砲が一齐に火を噴いた！六門の機関砲から発射される膨大な量の弾が生み出す弾幕がエンドドラーズを襲う！

「ちっ…アンチソリッドバリアー！！」

エンドドラーズがそう唱えると目の前に透明な硬い壁が構成され、飛んでくる弾を片っ端から弾いた。しかし後方にあった彼の家は弾幕をもろに受けてあつという間に穴だらけになり、やがて骨組みだけを残して全壊してしまった。…数十秒後、弾切れになったのかガーディアン達は一齐射撃をやめた。機関砲が空回りする音と灰色の煙が虚しく辺りを漂う。

「ははは、あんまり俺の作品を舐めるなよ？こいつらは戦争用に俺が開発した特別製だからな、そこら辺の遺跡に生き残っているようなポンコツとは違う」

そうシュナウザーは自ら開発した作品を自慢した。ガーディアン

「ふん、軍人ともあるう者がプラモデルごっこか。だったらその自慢の作品とやら、どの程度の耐久性があるのか試してやるわい。喰らえ、風鋭刃！！」

エンドドラーズが杖を振りかざすと大きな真空の刃が3つ現れ、真っ直ぐガーディアン達に向かって飛んでいった。そして風の刃は一寸の狂いも無くガーディアン達に命中し一刀両断に切り裂く！真つ二つになったガーディアン達は火花と煙を噴き出しながらその場にガラガラと音を立てながらまるで玩具のようにあっけなく崩れた。

「うむ、どうやらお主の作品はポンコツよりも酷いジャンクと言ったところじゃろうかの？」

髭を撫でながら、今度はエンドドラーズがシュナウザーを馬鹿にするように言う。

「…なるほどな。流石はかつて赤い悪魔に勝利した魔法使いと言ったところか。だが所詮は人間、老いた今はかつての偉業も過去のも

のさ。貴様ごとき我が敵ではない…！」

シユナウザーがそう言つと、メキメキと音を立てて見る見るうちに彼の姿はおぞましい魔獣の姿へと変わつてゆく…！！

「…！」

エンドラーズは思わず後ずさりした。彼の目の前には人間の姿を捨て変わり果てたシユナウザーの真の姿があつたからだ。その巨大な魔獣は鶏のような頭と鱗で覆われた胴体、そして蛇の尾を持つ恐ろしい怪鳥の姿をしている。まさに化物と呼ぶに相応しいであろう身の毛もよだつような恐ろしい容姿をしていた。

「…さあ来い人間の魔法使い。この嘴と爪で粉々に引き裂いてから喰つてやる…！」

怪鳥のその大きな赤い眼が足元に立つエンドラーズを見下ろす。おそらく、常人だつたらこの時点で気を失うであろう物凄い殺気が辺りを包み込んでいた。

「く…やはりそうくるか。だがここで引き下がるわけにはいかないのだよ…！」

エンドラーズも杖を構えて身構えた。ライフベアラ

もしかしたらこれが老いた自分にとって最後の戦いになるかも知れない…エンドラーズはそんな覚悟すらしていた。しかし彼ですら知らない事実が一つあつた。

…そう、飛行艇の小さな窓から無邪気に見つめる二つの紫色の瞳の存在を…アメジストカラー

第四十四章 エクリプス（後書き）

《バシリスク》

某超有名小説では巨大な蛇の化物として登場しますが、本来は欧米の伝説上の怪物（ドラゴンやユニコーンみたいな感じ）で蜥蜴や蛇や鶏が混ざったような姿をしているようです。この物語ではシユノウザーの真の姿として登場させています。∴鶏と言うと何だかあまり強そうなイメージがないかも知れませんが、その瞳に睨まれたり息を吹きかけられたりしただけで石になったり死んでしまうそうですから恐ろしい。もしかしたらミーシャの相棒のヤキトリ（グリフォン）と同じような想像上のキメラ生物的な存在なのかも知れませんがね。

第四十五章 紫色の恐怖（前書き）

さてさて、今回ようやくあの紫色の人（誰だよ？）がベールを脱ぎます（ちよっとだけね）。目的は？能力は？色々考えながらお読み頂ければ幸いです。

相変わらず更新が亀な作者ではありますが、何とぞ宜しくお願い致します。

第四十五章 紫色の恐怖

「…ブルー・プラネット…か。こんな景色を見られるなんてね、長生きはしてみるもんだよ」

時刻は間もなく午前4時を指そうとしていた。サテライトの片隅、人気のない暗い展望室の巨大な窓から見える地球を白髪の少女が食い入る様に眺めていた。

「あれ、時差ボケかなミーちゃん？こんな時間に起きているなんてね」

背後の暗闇からロゼッタが足音一つ無く現れたのでミーシャは、

「…驚かさないでよねロゼッタ。そっちこそ眠れないから起きているんでしょ？地上の一点と地球の周りを高速で周回するココとは時間がズレていることくらい知ってたけど…」
そう向きを変えて言った。

「ははは、まあね。…綺麗だね、こんな景色を見てると何だか全てが小さく見えるよ」

ロゼッタが窓に近づき手を当てる。…窓に映るもう一人の自分の姿を見ながら彼女は少し寂しげに笑っているようにも見える。その悲しげな赤い瞳が見つめる先には眩いばかりの青い地球の姿があった。
「…ねえ、ロゼッタ？あなたはそうやっていつも何を考えているの？」

ミーシャがそう口頃思っている素朴な疑問を投げかける。

「そうだね…ミーちゃんはどう思う？」

「…どうなんだろうね？わからないよ、あなたと出会った時からずっと考えてたけど。私なんかこんな性格だから何か考えているように思われがちだけど…本当にただボーっと景色を眺めていることが多いんだよ」

「うん、知ってる。あの死んだ魚よりやる気のないミーちゃんが目は何か考えている目じゃないから」

「私ってそんなに鮮度悪いの？」

ミーシャがそう切なげに呟く。…これだけ酷い言いようでも、ロゼツタが言うとは何故か納得できてしまうのは果たして彼女だけなのだろうか？おそらくそうでもないはずである。

「目はね、その人の本当の性格をよく表わすんだって。ノアちゃんみたいなちよつと強気な性格の人は視線も何となくしつかりしてる。ミーちゃんは淡白でめんどくさがり屋さんだから目もどこか力が無いし、ティーちゃんみたいなスケベは女の子を見る目が普段と違ってからすぐわかる。…あくまでわたしの主観だけだね」

「…いや、ティティスに関しては正解だと思うよ」

ミーシャがそう冗談交じりに肯定するが、ロゼツタは特に笑うことも無く悲しげにこう続けた。

「でもね、わたしの目はみんなと違うの。…とても冷たくて怖い…まるで全てを拒絶するような…そんな感じすらする。この瞳で景色を見ているとね、綺麗だなんて本当に心から思うことができないんだ。…何かもつと別の、上手くは説明できないけれど悲観的な気持ちになっちゃう。だからそんな時はとても苦しくなるんだ…わたしは一体何をそんなに恐れているんだってね」

^{ロゼツタ}彼女の赤い瞳は確かに窓に映った自身の向こう側の地球の姿をみているはずであった。…しかし、ミーシャにはその視線が何処か別の場所に向けられているような気さえた。それは常人には到底見えない、何かとても大きくて様々な感情が入り混じったものなのかも知れない。だが、それを知る術など誰にもない。

「…答えは得た。私はもう一眠りしてくるよ」

ここは一人にしてあげた方がいいと考えたのか、それとも本当に眠かったのか…ミーシャはロゼツタに背を向け、ゆっくりと歩みを展望室の出口へと向けた。

「ねえ、ミーちゃん？」

部屋を出ようとするミーシャに、ロゼツタが窓の外を見つめたまま声をかける。

「…なあに？」

ミーシャの返事の後、少しだけ間を置いてからロゼッタはこんな質問を投げかける。

「罪ってさ、いつかは許されるものだと思う？それとも一生償っていかなきゃならないものだと思う？」

ミーシャは少し考えた（素振りをしていただけかも知れないが…）後、こうロゼッタに告げた。

「…わからない。でも、最後に許されるか否かを決めるのは自分自身だと思う。あなたの犯した罪を許すも許さないもあなた次第だよ。…私はそう考えているから今ここにあなたと一緒にいる」

…そう意味深な言葉を残して、ミーシャは部屋を後にするのであった。

「許すも許さないもあなた次第か。…ねえ、あなたはわたしを許せるの？」

ロゼッタはそう窓に映った自分に問いかけた。

…窓の中の彼女は何も語らなかった。ただ悲しげな深紅の瞳がこちらを静かに見つめていた。

《怪鳥との死闘…そして降臨する最終兵器》

「…さて、少しは楽しませてくれよ人間？」

日が西に傾き空が薄暗くなる中、怪鳥と化したシュナウザーとエンドラーズは花畑の中で互いに睨み合っていた。シュナウザーは相手を威圧するかのごとく頭を下げ鼻息を勢いよく吐き出している。

「その言葉、そのまま返すぞ化物め。まずはこちらから行くぞ！」
そう言つてエンドラーズは杖を振り回すとそれを勢いよく地面に叩き付けた。途端に地面から火柱が吹き上がり、まるで衝撃波が伝わ

るようにシュナウザーの足元を目掛けて火柱が花々を焼きながら向かっていく！

「熱っ！小癩な！」

間一髪、向かってくる火柱をシュナウザーはをその長い脚を生かした素早い動きで横に飛んでかわした。そして、エンドラーズを鋭い眼光で睨みつける。

「さすがは赤い悪魔を倒しただけの事はあるか。…しかし気に食わん。何故に貴様は奴の味方をするのだ？かつての宿敵だったことを忘れたわけでもあるまい」

そのシュナウザーの問に関して彼は、

「わしは奴の肩を持っているわけじゃない。彼女も含めた彼らの味方をしているまでだ」

そう強い口調で答えた。

「なるほどな、随分と感えているじゃないか。ではもう一つ質問だ。そのお前が味方している連中は何処にいる？姿が見えぬが…」

「ふふ、それをこのわしが教えるとも思っのかいのお？」

「…確かに愚問のようだなエンドラーズ。俺は連中を抹殺するようにコロツサル様から命を受けている。もちろんそれを邪魔するお前も同じこと…悪いが、こちらの厄介な小娘が見学に飽きる前に死んでもらうぞ」

「厄介な小娘…？」

「お前が知る必要は無いさ。ここで焼け死ぬんだからな！」

そう言った次の瞬間にはシュナウザーの口から燃え盛る炎が吐き出されていた。赤々と燃える炎の帯が花々を焼き尽くしエンドラーズを包み込む！荒れ狂う炎と暗い煙が辺りを包み込んでエンドラーズの姿は見えなくなった。

「どうだ、我が炎の威力は？これでは灰になるしかあるまい」

シュナウザーがそう勝利を確信したように雄叫びをあげる。…が、その雄叫びのせいで僅かに炎と煙の隙間から聞こえてくる何かの呪文を唱える声を聞き逃したのが命取りだった。

「…水飛刃っ！」

突然、炎の中から白い煙と共に巨大な水の刃が飛び出してきた！
「……！」

避けようと身を翻したシュナウザーであったが、間に合うはずもなく近距離からまともに刃の一撃を喰らってしまった。水の刃が形を崩し飛び散りながらも彼の肋骨と内臓を容赦なく引き裂き、大量の血飛沫が黒く焼けた花畑を真っ赤に染め上げる。痛みあまりその場に倒れ込み、翼と脚を激しくバタつかせるがもはや体が言う事を聞いてくれない程の致命傷だった。

「…さすがに今のはやばかった。並大抵の結果だつたらとつくに焼き殺されているところだったが、人間相手に油断したなシュナウザー。生憎、わしはもはや人間とは呼べるところまでできてしまっているのだな」

そうもがき苦しむシュナウザーに言ったが、彼自身も無傷と言う訳にはいかなかったようだ。彼の左腕は激しく焼け爛れ、もはや原型を留めていなかった。その他にも服は破れ、そこから火傷が顔を覗かせている。息も上がり、相当なダメージを受けたことは間違いない状況である。

「ぐ…あ…おのれ…この俺がまさかそんな…」

シュナウザーが口から血を吐きながら息も絶え絶えにエンドラーズを睨みつける。

「…何か最期に言い残すことはあるかいの？」

エンドラーズがそうシュナウザーに杖を向けながら問いかけると、

「ふはは…これで勝ったと思うなよ…オーバーテクノロジー最新科学が創り出した恐怖の化身がお前を亡きもの…に…して…」

そう言つて怪鳥はやがて動かなくなった。

「…終わつたか」

気が抜けたのか、そのまま力無くエンドラーズはその場に座り込んでしまった。

「…あーあ、何だよも〜！機械兵はともかく、シユナウザー本人まで殺られちゃってさ。口ほどにも無いなあ…それにあっけないし、つまんないの〜」

停泊中の飛行艇の窓から一部始終を眺めていたレクイエムがそう溜め息をつく。

「あわわわ…そんな呑気なことを言っている場合じゃないですよスミレ！どうするんですこれから私達!？」

付き人のリンリンは予想外の展開にもうパニック状態だ。

「あのお、落ち着いてよリンリン。その気になればあなたの運転でいつでも離陸できるでしょーが。…ま、それじゃあつまんないよね？」

そう言うと、彼女は向きを変えて何処かに行こうとする。

「え？は？あのお…どちらへ？」

「決まってるでしょ？…ちよつと遊びに行つて来るんだよ」

そう言つてレクイエムはチラツと窓の外を見た。

「な、ななな！何を無茶なこと言ってるんですか!？相手はあのシユナウザー様に勝ち、かつては赤い悪魔をも倒した大魔法使いですよ!？それにコロツサル様には派手な行動は慎めと…」

「…いいことリンリン、私から言わせれば相手は単に手負いの老いぼれだよ？それにコロツサルの命令なんて知つたこつちやない。…何なら貴方^{リンリン}が代わりに遊んでくれるの…?」

レクイエムの鋭い紫色の眼光がリンリンを捕らえて離さない。その可愛らしい容姿からは想像できないような凄まじい殺気が辺りを包み込む。

「ひっ…」

あまりの恐怖にリンリンは腰を抜かしてしまった。…正直、このまま殺されるとも思った。しかし、幸いなことにスミレはすぐに機嫌を直してくれる。

「…冗談だよ、そんなに怖がらなくても良いのに。心配しないで、5分で綺麗にそのまま帰ってくるからさ」

それだけ言い残すと、彼女は足取りも軽く入り口のハッチへと向かっていった。それは明らかに機嫌の良い証拠である。

「あー…びっくりした。スマレ…なんか上機嫌だったような…？」
ホツと胸を撫で下ろしつつも、リンリンにはレクイエムが何故こんなにも上機嫌なのか分からなかった。

「…さてと…お手並み拝見でしょうか、お姉ちゃんを倒した魔法使いさん？」

ハッチに向かう途中、スマレはそう意味深な独り言を口にした…。

「…ぐ…クソ、これじゃあ左腕はもうダメだな…」

先ほどの戦闘で焼け爛れたエンドラーズの左腕は力無く垂れ下がり、もはやただ単に体に付いているだけの状態だった。まだ小さな炎があちらこちらで燃えていたが、ふと彼が空を仰いでみると日はすっかり暮れて星と月だけが静かに光り輝いていた。

「ああ…俺七年には勝てんか。日常なんて本当にあつという間のできごとなんだな…」

彼は何事も無かったように整然と並ぶ星の光を見て思わずそう呟いた。…何だか体の力が一気に抜けてしまったような、そんな感じさえした。

「…あれあれ…？そんなに何をぼんやり眺めているのかなあ？天国に召される夢でも見たの？」

突然の声に驚いてエンドラーズが飛行艇の方を見ると、誰かがこちらにゆっくりと向かってくるではないか。

「お前は…誰だ？」

僅かに燃える炎と星明かりを頼りにエンドラーズが目を凝らして見ると、そこには一人の少女が立っていた。身長は160cmより少し小さく紫色の髪は肩ほどでやや短かく、黒いゴシック風の可愛らしいフリフリのドレスを着ていた。何よりも、その紫色の眼差しがこちらを物珍しそうに見つめているのが彼の印象に残った。

「うふふ、私？みんなからはスマレとかレクイエムって呼ばれてる

の。初めまして魔法使いさん、別にさよならって言っても良いんだけどね」

何とも無邪気な笑顔で彼女はそう言う。

「レクイエムじゃと!?!?!まさか…完成した最終兵器がお前だと…それに、その姿…そんなバカなことが…」

エンドラーズは驚きを隠せなかった。コロツサルがこのとんでもない兵器を完成させたこともそうだが、何よりも彼女の容姿は彼の最も恐れる人物と瓜二つだったからだ。

「そうだよ魔法使いさん、あなたの予想は全て正解だと思うよ。今は髪の毛一本で色々できるからねえ…この私を生み出すのも難しくはなかった。さて、もうそろそろ良いかしら?あなたには色々邪魔だから消えてもらうよ?」

「黙れっ!貴様に殺される筋合いなどあってたまるか!これでも喰らえっ…クロスファイアー!!!」

そう言うてエンドラーズは杖に力を込め呪文を唱える。…しかし、何故か呪文が発動しない。

「…残念だったねエンドラーズ、あなたが魔法使いつてのはコロツサルから聞いていたから予め魔法の使えない結界を張らせてもらったよ」

「ぐ…いつの間にそんなことを…」

「ふふふ、安心してよ。今日は他に何もしないで帰るからさ、別にコロツサルの命令なんてどうでもいいんだし。単にお姉ちゃんに挨拶代わりに死体おみやげを置いていければそれで目標達成だよね」

「レクイエム…お前の目的は一体…!?!」

エンドラーズがそう苦し紛れに質問すると、

「目的?さあ、何だろう…私にもよく分からないや。でもね、弱い奴は大嫌いなんだよ…人間とか魔物とか、強くもないくせにそこにいるだけでム力つく。あとね、お姉ちゃんがいると私の存在価値が薄くなっちゃうの。だからお姉ちゃんはこの私が殺してあげるんだ」
彼女は悪びれる様子もなく笑顔で答えた。

「お前は…お前は狂っているレクイエム…」

エンドローズがそう言うと、彼女は先ほどの笑顔が嘘のような冷たい眼差しで彼を睨みつける。

「狂っているだって？それは私じゃなくて他にもつとと言うべき人がいるはずだが。…あんたが私を否定するならば、私は自身以外の全ての存在を否定するまでだよ」

彼女の不気味な言葉にエンドローズは声が出なかった。この何とも言えない恐怖感…それは千年前、彼が感じたあの時と同じような感覚であった。

「…さてと、前置きが長くなって飽きちゃったかなあ？私もやることないし、そろそろ終わりにしようか？」

再び笑顔に戻った彼女はそう言っただけで左手を彼に向けた。その左手に凄まじい魔力が集中し、バチバチと青白い火花を散らしながら光の塊が形成されていく…！

「心配しなくても大丈夫だよ、電撃は痛みや苦しみを感じる間もないうちに早く楽に逝けるから。…それじゃあねエンドローズ、きつとあの世でもお幸せにね？…バイバイ、安らかに死ね」

そして不気味な笑みを浮かべる彼女の手から凄まじい電撃は放たれた…！！

…真夜中の山頂を、龍のような稲光と轟音が包み込む

やがてそれが終焉を迎えると、辺りは再び静けさを取り戻す

沈黙の中で星々の瞬きだけが夜空を彩り、何も変わらない黒い世界だけがそこに横たわっていた…

第四十五章 紫色の恐怖（後書き）

《名前の設定について》

…ごめんなさい、基本的にテキストです（爆）

メインキャラクターの名前は皆様に覚えやすいようにと短めに名付けてありますが、一番大事なのはインスピレーションだと思っています。苗字の有無はあんまり意識していません。名前があれば問題ないと考えているので…要は固定概念に囚われない自由な発想を大事にしています。ロゼッタやレクイエムのように複数の名を持つ人物もいますが、本名とその他の異名やコードネームの区別は作中で明らかになっっていくと思います。…ややこしくて申し訳ありませんが（苦笑）

こないない加減な作品ではありますが、次回も楽しみにしてくだされば幸いです。それでは、またの機会にお会いしましょう。

第四十六章 Necrophobia (前書き)

人は常に死と隣り合わせに生きています。そして死を恐れ、その恐怖から逃れようとしてきました。かつての賢人達が不老不死の方法を求めて様々な思考を凝らしてきたように、人類は長い歴史の中で死を克服しようとしてきたのです。しかしながら死とは生まれながらに誰しもが背負う宿命であり、生と死は表裏一体で決して手切り離すことのできないものでもあります。死をどう受け止めるのか、受け止め方次第で人生は幸せにも不幸にも成り得るのではないかと僕は思っています。そう、時の流れには誰も逆らえないのです。今回はそんな死と時の流れについて少し掘り下げて書いてみましたので、いくつかのキーセンテンスに注目してみてくださいませいね。

第四十六章 Necrophobia

「…エンドラーズ様：何故このようなことに…私はこれからどうすればいいと言うのですか…？」

…黒色に変色した十字架を前に、ココアはただ座り込んで泣いている。彼女の心の中は、大切な人を失った喪失感と悲壮感に満ちていた。

エレノア達がサテライトから帰還して数時間が経過していた。日は既に高く上り、空は青く晴れ渡っている。しかし、その下に広がる山の頂上は一面の焼け野原と化していた。かつての花畑は見る影もなく、焦げ臭い臭いと死臭が辺りを漂っていたのである。

そして、彼女達はそこで変わり果てたエンドラーズを見ることになった。あまりのショックにしばらくは誰もが言葉を失い、何も行動できずにただその場に立ち尽くすことしかできなかった。やがて彼女達は辛うじて焼け残ったかつての彼の家の破片で十字架を作り、その下に彼の遺体を埋めたのである。

「可愛そうに…まさかこんなことになるなんて思いも寄らなかったんだらうな」

「それはわたし達も同じことですよノアちゃん？…何だか無性に悔しいよ」

ココアから少し離れたところで、下を向いて蹲ったままの彼女を見ながらエレノアとロゼッタが神妙な面持ちでそう言った。

「ココアのやつ、大丈夫なのだらうか？予定じゃ夕方にはここを発つ予定だったのに」

エレノアがそう言うと、

「心配ないよノアちゃん、こんな発言は不謹慎かもしれないけどココちゃんだって今やるべきことくらいは分かっているはずだから」
ロゼッタが髪を撫でながら答えた。

「ああ、そうだといいな。…私も荒んだもんだよ、人の一人が死ん

だつてのに驚きもしない。まあ、エンドラース彼とはまだ面識が少なかったからつてのもあるんだろうが……」

焼けた灰色の地面に座りながら、エレノアはそう切な気に空を仰ぐ。彼女は長い旅の間に多くの修羅場を乗り越えてきたから、当然のことながら多少の事では驚かない性格になっていた。しかし、それがいかに恐ろしいことを彼女自身が一番知っていたのである。

「うん、ノアちゃんは別に荒んでなんかないと思うよ。それこそ目の前の死を真に受けていたら精神が持たないし。…むしろ荒んでいるのはわたしの方だよ」

ロゼッタはさらにこう続ける。

「今でも時々あるんだ、何かを壊したり誰かを殺したりすることに快感を得ることがね。なのに自分は常に死を恐れている。そしていつつ後で気が付く、自分がやっぱり恐ろしい存在だつて。…わたしは自分が怖い」

…心成しか彼女の身体は小刻みに震えていた。

「おいおい、落ち着けよロゼ。別にお前はそんなんじゃないよ。お前がいなきや今頃、私もミーシャもとつくに死んでらあ。…安易に自虐するもんじゃねえ」

情緒不安定なロゼッタをエレノアはいつものようにそう宥める。

「うん…そうかもね、ありがとうノアちゃん」

ロゼッタはそう言っただけ黙り込んでしまった。

しばらく沈黙の時が続いた。青空の中を白い雲がゆつくりと流れ、気持ちの良い風が山の頂上を吹き抜け二人のサラサラの髪の毛を撫でていく。いつもの平凡な風景そのものだった。

…やがて落ち着きを取り戻したのだろうか、ロゼッタが再び口を開いた。

「…本当はもつとゆつくりエンドラースと話したかった。かつての敵も千年後の今となっては関係の無いことに等しいしね。全てが終わったなら友人のように親しくしようって決めてたんだ。…でも、それも叶わぬ夢になっちゃったね。なんでもつと早く許してあげられ

なかつたんだろうって…とても後悔してる、こんな気持ちは生まれ
て初めてだよ」

そうロゼツタがエンドラーズに対する本音を初めて語ってくれた。

「後悔…か。でもな、人生なんて後悔とトラウマの連続だと思うん
だよ。それに、死を恐れるのはみんな一緒さ」

「ノアちゃん…」

「私だって色んなトラウマを持っているし、もちろん死ぬのは恐い
さ。でも、だからこそ毎日を精一杯生きようと努力している。たっ
た一度きりの人生なもの、落ち込んでばかりいても仕方ない。大事
なのはどう壁を乗り越えるか、いかに前向きに生きれるかだと私は
思うんだよ」

そうエレノアはロゼツタを諭すように言った。その言葉に何を思っ
たのだろうか？ロゼツタはしばらくうつむいて黙っていたが、しば
らくすると少しだけ明るい表情を取り戻してこう返事を返した。

「…そっか、そうだよ。人生なんて理屈で通るようなものじゃ無
いか」

それだけ言うと、彼女はそのまま地面に仰向けに寝転がって空を眺
める。

「ま、要は気楽に行こうってことで決着だな」

エレノアもそう言ってロゼツタと同じように仰向けになった。

その後、しばらく二人が喋ることはなかった。空を眺める二人は何
を考えていたのだろうか？それは彼女達にしか分からない。しかし、
彼女達の顔はどこか清々しくそして希望に満ちているように見えた。

…相変わらず穏やかな青空がどこまでも果てしなく彼女達の頭上に
広がっていた…。

「…で、これをどう思うテイティス？」

「俺に聞くなよミーシャ。俺自身が聞きたいよ」

目の前に横たわる巨大な鳥の化物の死体を見て二人はそう口を揃えた。テイティスとミーシャの二人は比較的冷静な性格なので、先ほどから色々と辺りを探索してこの惨劇が何なのかを突き止めようとしていたのである。…しかし、謎は深まるばかりだった。

「ま、この仏さんが誰だかは大体予想がつくがな。…こんな物が落ちたよ」

そう言つてテイティスがミーシャに何か小さく光る物を見せる。

「…バツジ…？」

「そう、こいつは共和国の上官が身に着けているものさ。俺が思うにシユノウザーのバツジと見て間違いないと思う」

「シユノウザーってコロツサルの側近の？…じゃあ、この鳥は彼の成れの果てつてことになるわね」

ミーシャの言葉にテイティスが頷く。

「目的も俺らを殺すために来たつてことで相違無いだろうよ。死因がああのパックリ開いた傷つてこともな。…ただ、どうして黒焦げになっているのかが分からないんだよなあ」

そう言つてテイティスは首を傾げた。

「…エンドラーズ様が焼け死んでいたところや周りの状況を見るに、第三者がいてそれがこの惨劇の張本人つて考えるのが妥当だと思う」
ミーシャがしゃがんで地面を触りながら言う。

「だとしてもその第三者の目的は分かんないし、どうやつたらこんな広範囲に渡つて爪跡を残せるのか…あー！分かんねえことばっか
しだ」

テイティスは自棄になつて頭を掻きまぐる。

「まあまあ、考えても仕方ない。とりあえず、何が起ころるか分からない状況だから油断しないことね。…それが今できる最善の方法だと思つけど？」

「あ、ああ。そうだな、こんな時こそ落ちつかなきやいけないな」

ミーシャに宥められてティティスがそう言った。やはり彼女のよう
に200年も生きていると並大抵のことでは驚かないのか、あるいは
ミーシャだから常に淡泊でいられるのか…ティティスにとってそ
れが最大の疑問だったことは言うまでもない。そんな淡泊な彼女が
唐突にこんな質問をしてきた。

「ところで、ちょっと話が変わるんだけど…」

「ん？なんだよミーシャ」

「エレノアとはどこまでいったのさ？まさか接吻だけで満足してい
るわけでもないんでしょ？」

「…またこんな時によくもまあそんな話ができるなあ。仮にも知り
合いが殺されているんだぜ？」

ティティスが珍しくミーシャの場違いの言動に呆れてそう言うが、
「こんな時だからこそ聞いているのよ。…私だっていつ命を落とすか
分からないんだから、知りたいことは生きているうちに知っておか
なくちゃ。…死んだら何もできないんだよ…？」

そんな返答が返ってきた。なるほど、確かに言われてみればしっか
りと意図を得た回答である。そもそも、狡猾な彼女が素っ頓狂な質
問をすることなど無いに等しい…そんなことをティティスは改めて
知ることになったようである。

「そ、そりゃあ…あれからまだ何も進展はないぜ？そんなのお前だ
っていつも一緒にいるんだから知っているだろうに」

ティティスが恥ずかしそうに下を向きながら答えた。

「一応聞いてみただけ。…ちなみに何人目なのさ、エレノアは？」

「何人目って…俺だってそんなにたくさん女性の女性と付き合ってたわ
けじゃないよ。もちろん一連の流れは経験済みだけどさ、そこは聞
かないでくれって」

「…そうね、あんまり過去を掘り起こすのは私達の間じゃタブーだ
もんね」

「それに、こんなこと言うのもなんだけど…アイツはおそらく初め
てだろ？」

ティティスが声のトーンを潜める。

「…だろうね、消失してたら相当ビックリするけど」

「だから気を使うんだよ。以前に状況が状況だしよ、今は機会を待つのが男つてもんだ。…そりゃあ、普段からムラムラしちまうのは事実だが」

「仕方ないよ欲求なんだから。それでもティティスはよく我慢してると思うよ。確かにこの緊迫した状況で恋焦がれている場合じゃないしね。…でもね、あなただって明日死ぬ運命にあるのかも知れない。それはエレノアも同じこと…いつ誰が死ぬかなんて誰にも分からないんだ。…生きているうちにやりたいことの一つや二つくらいしたって良いんじゃないかなって思うわけよ、人生ただでさえ短く儂いものなんだから…」

そう少しだけ笑みを浮かべながらティティスにそう言った。

「そうか？じゃあ早速今晚にでも夜這いに…」

「行ってもいいけどきつとボコボコにされるわよ？あの娘は見た目と違ってロマンチストだからね、ちゃんと段階を踏んであげないと…それにエレノアとの関係に成功したとしても今度はアクアにボコボコにされるわね、随分と負けん気が強くて嫉妬深いらしいから。…いずれにしろ、当分の間はおあずけのようねティティス」

冗談半分のティティスにミーシャが笑顔で容赦なく言葉の釘を刺した。

「あつう…そんな言い方しなくても…」

「ま、モテる男は何とかってやつよ」

ミーシャがそう皮肉る。

「散々言われ放題言われてしまったが…お前はとうなんだよミーシャ？少しはお前の恋愛事情も話せよ」

ティティスがそう問い詰めると、

「特に話すことなんて無いわよ。…ま、少なくとも私は処女じゃないし恋愛経験もあなたの比じゃないってことだけは確かだけどね…」
ミーシャはそう不適な笑みを浮かべながら意味深にサラリと言った。

そして無言でティティスに背を向けるとゆっくりとその場を離れていくのであった…。

「…ダメだ、あいつの考えだけは理解できん気がする」

取り残されたティティスはただ呆然とミーシャの後姿を見つめることしかできなかった。

ミーシャ…彼女の謎が全て解明される日は果たしてくるのでしょ
うか？

その答えは神様ですら知らないのかも知れません。

《好敵手との別れ》一つの物語の終焉》

西日が赤味を帯び始める頃、エンドラーズの墓の横に座ったココアは相変わらずうつむいていた。もう泣いてはいなかったが、尖った小さな耳は力なく項垂れている。悲愴感のあまり、尻尾を動かす気力すら残っていない様子。…そんな彼女に近づくと一つの影があった。「コラ、いつまでメソメソしておるんじゃ！どんなに泣いても悲しんでもわしは生き返らんぞい」

突然、ココアの頭上から聞き覚えのある声が出た。彼女が驚いて頭を上げて見ると、そこには赤髪の少女が立ってこちらを見下ろしている。

「…って、^{エンドラーズ}彼が生きていたらこう言うだろうねきつと」
ロゼッタがそうニコニコしながら言った。

「ご心配なく、あなたが思っているほど私は弱くないですよ」

ココアが牽制するように強い口調で言う。ロゼッタの場違いの軽い雰囲気にかチンときたのか、ココアはいささか不愉快そうである。

「そっか、それを聞いて安心したよ。まだ泣いているのかと思ってたから」

ロゼッタはそう返す。ココアが怪訝な表情でそんな彼女を睨みつける。

「生前エンドラーズ様が言っていましたよ、あなたはよく分からない人だって。…いったいあなたは何をお考えになつているのですか？」
ココアが立ち上がりながらロゼッタに聞いた。彼女はしばらく考えた後、こう一言答えた。

「さあね、わたしにもよくわからないんだよ」
そしてさらにこう続ける。

「ただね、今のわたしにとっては既に彼は敵ではなくなつてたんだよ。そりゃあ、昨今の恨みが山ほどあつたから復活して最初に会つた時は八つ当たりもしたけど…本当は殺すつもりなんてこれっぽっちもなかったんだ。千年つて長い月日がわたし達の関係を修復してくれることは間違いなかつたはず…だからこそ彼の死に深い悲しみを感じている。…もう今となつては何を言つても手遅れなんだけだね」

そう苦笑いして見せる。しかし、その表情はどこか悲しげだった。

「…そうですか。きつとエンドラーズ様も亡くなる前にあなたと色々話したかつたでしょう。事あるごとに昔話であなたのことをお話してましたから」

ココアがそう言う。この時、彼女が自分達と同じ感情を抱いていることにココアは初めて気付かされた。…何故だか、悲しんでばかりいた自分の行為や想いが急に恥ずかしくなつた。

「ふふ、彼がそんなにわたしのことについて話していただなんてね。あの頃からは想像もできないよ」

ロゼッタは溜め息混じりにそう少しだけ笑つた。そしてエンドラーズが眠る十字架の前で跪き、彼との最期の別れの言葉を述べた。

「…安心してエンドラーズ、あなたの成し遂げられなかつたことはわたしが代わりにちゃんと果たすから。そう、かつてのイチがそうしたように…ありがとう、そしてさようなら我が愛しの友よ…どうか安らかな眠りを」

そう言つて十字架に口付けを交わす。様々な想いを込めた彼女の最後の挨拶であつた。

「…さ、もう行こつつか？みんな飛行艇で待つてるよ」

ロゼッタは立ち上がると先程とは打つて変わった明るい表情と口調でそうココアに言つた。それが彼女なりの別れの悲しみとの決別だつたことはココアにもちゃんと伝わつた。

「そうですね、皆様を待たせてはいけませんし。何せ彼らはせつちさうですから。…彼の死を無駄エンドラースにしないためにも前向きに考えていこうと思います」

ココアがそう穏やかな表情で言う。そして振り返ることもなく、やがて二人は連れ立つて山を降りて行つた。

…夕焼け雲が地平線の彼方まで続いていた。

夜の帳が支配する直前、空はいつにも増してその妖艶な輝きを醸し出すのであつた…。

《思い出の鰯雲》

「やれやれ…いつの時代も政治とは難しいものよ」

太陽が西の地平線に沈む頃、シランドの軍事施設内のある建物のバルコニーに一人の男性の姿があつた。その後姿には何処か元気が無く、そして寂しげな表情を浮べていた。

「こつやつて赤い夕焼けを眺めているといつも彼女のことを思い出す。…一体今何処で何をし何を思っているのだろうか？」

夕焼け空を仰ぎ黄昏ながらそうコロツサルは呟く。

「もしあの時、私が彼女を裏切つていなければたら果たしてどんな未来が待つていたのだろうか？…今となつては後悔しようにもそれすら叶わんな…」

深く静かな溜め息をつき、彼はバルコニーを後にした。

夕焼けで赤く染まった大空の中を仲良く泳ぐ鰯雲が何処までも続いていた…。

第四十六章 Necrophobia (後書き)

いかがでしたでしょうか？またまたなんか理屈っぽいストーリー展開となつてしまいましたね（そもそもこの物語自体が理屈っぽい気もするが…）。この作品は一応ファンタジーとは名乗っていますが、冒険物と言うよりはむしろ社会風刺的な要素の多い作品なのかも知れません。

…とにかくもっと精進しないですね（描写とか色々）。
それでは、次回もお楽しみに（してくれると嬉しいです）。

第四十七章 先の見えないブラックウイドー（前書き）

間もなくコロツサルとの直接対決の時が迫ります。ちょっと目的や動機が曖昧な箇所がありますが、後々明らかになると思います、多分。内容が複雑な感じがしますので、前の話とも照らし合わせて読んで頂けると幸いです。

第四十七章 先の見えないブラックウイードー

「遅いなあ…まだかなあ…？」

「そんなに心配しなくても大丈夫よイブキちゃん、もうすぐ来るってきつと」

心配そうに空を眺めるイブキをマーベラスが宥める。

空は綺麗に晴れ渡っていた。お昼前にもうすぐ到着するとの連絡がティティスから無線で入ったので、マーベラスの一行は町からは少し離れたエリー家の所有する小さな滑走路にて待つことにした。…

ここなら、首都シラントにいるコロツサル達にも悟られないと考えたからだ。「片田舎の私有地だから見つかる心配はないけど、それも途中で空軍に撃墜されてなければの話ですわ」

エリーが扇子を片手に扇ぎながら言う。

「えっ、そんな不吉なこと言わないでくださいよ…」

「大丈夫だエリオット、一緒にいてお前も分かっただろ？あいつらちよつとやそつとじゃ死なないと思うが」

シロが足元からエリオットに今更のように語り掛ける。

「そうとも、ティティスは必ず無事に戻ってくるでござす。…ほら、参ったようござるよ」

ベンケイが自信満々に空を見て指差しながら言う。彼の指差す方角には、青空に浮かぶ一つの黒い影があった。

やがてその黒い影が近づくにつれて、ゴウンゴウンとゆうエンジン音が段々と大きく聞こえてくる。姿を現した飛行艇はまるで意思を持った生き物のように正確にゆっくりと一行の斜め上に接近し、高性能のエンジンが生み出す勢いの良い風を伴いながら滑走路の上にその巨体を着陸させる。しばらくして回転数の下がったエンジンから白い煙を噴き出しながら機体のハッチが開き、中から見覚えのある人影が何人か降りてきた。

「ふう、長旅も楽じゃないな…って、なんか前に見たことあるよう

な人ばつかしじゃんか。よっ、元気にしてたみたいだなイブキ」
エレノアが気楽な笑顔でイブキに近寄る。

「全く…こっちは心配でしょうがないっつーのに。ま、無事だったから良しとしますか」

イブキもそう笑顔で彼女を迎えた。

「お、なんかずいぶんな大人数だねえ。これから戦争でも始めるのかな？」

「…だから大人数なんですよ、もう少し自覚を持ってよロゼッタ」
「そうですよ、大事な局面なんですから」

続いてロゼッタとミーシャ、そしてココアがそんなことを話しながら飛行艇から降りてくる。

「久々の故郷か…ただいま、今帰ったよ姉さん」

「おかえり、久しぶりねティティス」

ティティスがマーベラスの元に歩み寄ると、マーベラスが優しい笑顔で迎えてくれた。

「え、あ…あなたがティティスのお姉さんですか？」

エレノアが少し戸惑いながらそう聞く。

「そうよ、初めましてエレノアちゃん。あなたの話は弟ティティスから聞いているわ、いつも家のバカがお世話になってます」

「誰がバカだよ姉さん…」

「うふふ、弟はこう見えてオクテだから…あんまり虐めないであげてね」

「あ、はい…まあ…」

それを聞いたエレノアの顔が何故か少々赤くなった。

「コラコラ！エレノアも姉さんの言う事本気にすんなよ！」

ティティスも顔を赤らめて恥ずかしそうにそう叫んだ。

「なんか見え透いたお芝居だね」

「…もうお互いの気持ちに本当は分かっているくせにね、ちゃっちゃとやることやっちゃえばいいのに」

ロゼッタとミーシャがそうニヤニヤしながら言うので、

「だー！！そんなんじゃないって！私はもつとクールなのが好みなの！」

エレノアはさつきよりもさらに顔を赤くして反論する。…が、今となっては反論してもあまり意味の無いことだろう。エレノアとティイスがお互いにどう思っているかなど、ロゼッタとミーシャ彼女達にはとっくにお見通しなのだから。

「ほらほら、遊んでいる場合じゃなくってよ。とりあえず何処かで作戦会議でもしませんと」

エリーがそう手を鳴らしながらいう。

「そうね、とりあえずエリーの家に行きましょ？本部じゃ敵に見つかる可能性もあるし他にこれだけの人数が寝泊りできる広い場所もないし…自己紹介も兼ねて決めることは行ってから決めれば良いよ。この後のことについては何とかかなると思うわ」

「はあ…やっぱりそうなるのね。あなたのそうゆう真面目なのか樂觀的なのかよく分からない微妙なところにはいつも感心しますこと」
マーベラスの音頭に対して、エリーがそう苦笑いしたのは言うまでもないだろう。

「あれ、でも政府の特殊部隊がそんな勝手な行動して大丈夫なのか？」

エレノアが尋ねると、

「まあどうしてコロツサルが俺達の動きを黙って見ているのかは恐いところだが…元々管轄されているようで実はかなり自由度の高い組織だからな、細かいことは気にしなくて良いんじゃない？」

ティイスがそう答えた。

「え…そんな適当な…この先本当に大丈夫なんですか…??」

こんな状況にも関わらずこの危機管理能力…生真面目なエリオットが頭を抱えるのも無理はないだろう。

とにかく、一行はエリーの大邸宅へと用意してあった車で移動することにしたのであった…。

《変革の真髓》

…ここはシラノの地下にある巨大な秘密の研究施設、要はコロツサルの世界征服の要そのものだ。そんな施設の一角で二人の人物が何やら会話を交わしていた。

「数日前にターゲットがこの近くで確認されたらしいね？」

「はい、エフェクトとの繋がりもハッキリ分かっているようですよ。スマレの間にリンリンがそう答える。

「わっかんないんだよな！。なんでそこまで分かっているのにコロツサルは何もしないんだろっか？普通だったら手下を使うなりして攻撃すると思うんだけどな」

スマレはそう怪訝な表情で首を傾げた。

「まあ、一応手下は使ってますけど…なんか手緩いと言っか適当と言っか、どちらかと言えば時間稼ぎをしているような印象は受けま
すね」

リンリンもどうやらその意見には同感な様子であるが、その台詞は何処か棒読みだ。

「どうしたのリンリン？…何か私に隠し事でもあるの？」

勘の鋭いスマレにはリンリンの不自然な様子が何か隠しているように見受けられたようである。

「…先日、サキュバス様の使いの者があなたを勧誘しに来ましたよね？あなたはその申し受けを受理されるおつもりなんですか？」

「さあ、まだ分からないよ。でも、コロツサルが生きている限りは今のままでいるつもりだよ。…少なくとも現時点ではね」

リンリンの間に、スマレはそう不敵な笑みで答えた。

「そうですね、だつたらお伝えしておく必要がありますね。どうしてコロツサル様が本気でああなたのお姉さまを殺さないのかを。…それは彼女を殺してしまえばサキュバス様に対する大事な抑止力を失うことになるからです」

「抑止力…??」

「そうですね。我々の本当の争い相手は人間でもなければこの世界でもないんです。…戦争は今、魔界の水面下で静かに起こっているのです」

そしてリンリンは改めてこう事の真相を告げた。

「コロツサル様の本当の敵は…紛れも無くサキュバス様なのです」

《野望と助太刀》

「…さてさて、あの糞女がそろそろ来ても良い頃だな。今度は何の用だ？まさかこの期に及んでまた何か要求してくるんじゃないかな？」

草木も眠る丑三つ時、ロゼリアー又は一人シランド郊外にある小さな無人駅のプラットホームのベンチに腰掛けていた。

彼女達一行がシランド郊外のエリー宅に泊まってから数日が経過していた。エリーの家はお金持ちだから居心地に関しては問題なかった。しかし、肝心のコロツサル討伐に関してはなかなか作戦が決まらない。そもそも、個々で目的意識が微妙に違う上に曖昧な点が多過ぎて話がまとまらず仕舞いなのである。最大の問題はどこからコロツサルの元にたどり着くかであった。まさか正面からまともに突っ込むことはできない。国家が関わってくるからだから、できるだけ世間に混乱をきたすような行動は避けたいところだ。

…そんな中、再びサキュバスの気配を察知した彼女はこうして人気の無いところにわざわざ出てきたのである。ここならまず誰にも見られる心配はないからだ。

「…来たか…」

何かの気配を感じたロゼリアー又がベンチから立ち上がる。その視線の先の暗闇からサキュバスとその連れの二人が姿を現した。

「わざわざこんな所までご苦労様。調子はどうかしら未亡人さん？」

そうサキュバスが軽く嘲笑うように挨拶する。

「ほざけ、わたしはそんな戯言を聞きに来たんじゃないよ」

ロゼリアーヌが明らかに不機嫌そうな顔をした。

「…交渉の場で相手を不機嫌にするのは如何なものかと」

「ドラードの言う通りでちゅよサキュバス様：相手は凶暴極まりないでちゅから」

連れのドラードとジプシーが口を揃えて言う。

「わかてるって。行動を起こさないってことは…どうやらコロツサルの所に行くのに少々問題があるみたいね？」

サキュバスがそうロゼリアーヌに尋ねる。

「まあそんなところだな。で、今回は何を持ってきたんだ？」

「あら、話が早いわね。もちろん持ってきたわよ、今あなた達に必要なものを…」

そう言っつてサキュバスが一枚の地図らしきものをロゼリアーヌに渡した。

「コロツサルの方の本体は地下にある研究施設そのもの。地上の建物なんて彼にとっては人間を動かすための道具か隠れ蓑でしかない。…地下に行けば世間に知られること無く彼を消せるでしょうねきつと」

「なるほどな、これはその秘密のプライベート空間への糸口ってわけか」

ロゼリアーヌが地図をまじまじと見ながら棒読みで言う。

「私ができるのはここまで。後は何をするべきか、何が一番得なのか良く考えて行動することね」

サキュバスが不敵な笑みを浮かべながらそう言った。

「ふん、猫被りやがって。それもこれも自分の野望のためのくせに…お前が以前から魔王の椅子を狙っているのは知っている。それには魔王保守派のコロツサルが邪魔だともな。確かに今のわたしは奴が憎い。…だがわたしがお前の都合の良い様に動くと思うならそれは筋違いだ」

ロゼリアー又はまるで牽制するようにサキュバスを睨みつける。

「…もちろんそれは想定範囲内。ただ、少なくとも利害が一致している限り敵対したくないだけ。…けれど、こっちだっていざとなればあなたを殺せる準備ぐらいしてあるってことだけは忘れないことね。この私が龍姫様を魔王の座から引きずり落とすのはもう時間の問題よ。誰に味方するべきか、コロツサルを殺る前によく考えておくことだ。…行くわよジプシー、ドラード」

そう意味深な言葉を残してサキュバス達は再び暗闇の中に消えて行きました…。

「ちっ、相変わらずいいけ好かない野郎だぜ。…いよいよ先の展開が読めなくなってきた。どうやら何事も一筋縄ではいかんようだな」
先行きに暗雲が漂うことを嘆きながら、ロゼリアーもその場を後にしました。

…誰もいなくなったプラットホームには静けさだけが転がっていた…。

《いざ決戦の地へ…》

「…本当にここであっているのかよ？」

「ええ、まあ…地図にはそう書いてある」

エレノアの問いかけにマーベラスが頼り無さ気にそう答える。

一行はコロツサルのいる官邸に程近い国立図書館の地下一階にある書庫の一番奥の本棚の前に来ていた。ロゼッタが持ってきた秘密の地図によると、どうやらここがコロツサルの持つ地価研究所への裏口になっているらしい。正規の入り口は官邸内にあるため入るのは簡単ではないが、ここからなら入れないことも無い。無論、ここも本来は立ち入り禁止の場所だが図書館の従業員には内緒で入り込ん

だわけだ。

「だけどさ、どうやって入るんだよ？まさか本棚ごとどかせって言うんじゃないだろうな？」

ティティスが首を捻る。

「まあ焦らないですよ…こうゆうのは大抵意味深な仕掛けが…あ、これだな多分」

そう言つてミーシャは本棚の真ん中ぐらいに置いてあつた分厚い古びた本を軽く押し込んだ。

…ガコン…！

何かが外れたような音がしたと思つたら、小さな地響きと共に本棚が横にスライドし始めたではないか！…やがて、本棚が置いてあつた場所の奥に地下へと続く階段がその姿を現した。

「…意外とベタですね。しかし何故仕掛けのスイッチが分かつたんです？」

ココアがミーシャに尋ねると、

「ああ、それね。本の題名を見てみてよ」

そう言つて彼女は移動した本棚の中央を指差す。…先程彼女が触つた本の背表紙には『レッド・デビル』と記されていた。

「はは、なるほどね。コロツサルらしいや」

ロゼッタがそう思わず苦笑いする。

「おそろく向こうもこちらの動きに気が付いたはずでござすよ。急ぐでござる」

せつかちな性格のベンケイはそう言つと先頭を切つて階段を下り始めた。

「あつ、待つてくださいいよ師匠！」

「こら、勝手に行くなよイブキ」

それにイブキとシロが続く。

「僕達も行きましょう、離れ離れになるのは危険ですから」

「全くですわ。…こんなんで先が思いやられますこと…」
エリオットに促されて、エリーや残りのメンバーも階段を降り始める。

階段は狭い上に薄暗くて視界が悪かった。一行は慎重に降りて行つたが案外階段は短かったようで、すぐに別の空間に出た。そこは薄汚れたような色をした銀色の金属の壁で囲まれ、等間隔であまり明るくない電灯が付いていた。…そして、目の前にずらりと横に並んだ大型のエレベーターがあつた。エレベーターは全部で3機ありそれぞれ扉に番号が振られている。

「なるほどね、このエレベーターはそれぞれ別のフロアーに繋がっているみたい。侵入者に簡単には制圧されない構造システムってことか…」
マーベラスが地図を見ながらそう言った。

「うーん、そっかあ…どうするの？一つずつ回る？」

「いや、相手がこちらの動きを既に察知していると予想される以上ゆっくりと見学している暇は無い。組織のマニュアルにも書いてあるが、手分けして進むのがベターだろうな」

ロゼッタにティティスが珍しく真剣にそう言う。普段はラフなイメージの強い彼がそこまで真面目になるほど、今の状況が切羽詰っていることはここにいる誰もが感じていた。

「それは分かっているでござるが、どうやって手分けするでござる？」

ベンケイがそう疑問を投げかけると、

「まあ、こんな時だからこそ普段一緒にいる仲良し同士で組むのが良いんじゃないですか？その方が何かあつた時に迅速に行動できるでしょうし。…ちよつと不公平感があるのは否めないけど」

「確かにそうですね、私としてもそれには賛成です」

「だな、チームワークは大事だからな」

エリーがそう提案したのでココアとシロがそれに賛成する。

「じゃあ、決まりだな。私はいつものメンバー達と、エフェクトの三人は一緒に。それと…」

「僕達は残りのこのメンバーでつてことですか…」

「はは…要するに余り物メンバーってことだよね」

エリオットとイブキが互いを見てそう苦笑いしたのは言うまでもないだろう。

「この先に何が待ち受けるか誰にも分からないから油断は禁物よ。

あまり長いことは言いたくないけれど…何をすべきかは自分達で判断して行動してくれて構わない、けれども私達がこの世界を変えようとしていることだけは忘れないで。…気を付けてね、絶対に生きて帰ってまた皆で会いましょう。…解散！」

そのマーベラスの激励の言葉を合図に、各グループは一斉にエレベーターに乗り込んだ。

一行はエレベーターの誘いの下、暗い地下の空間へと吸い込まれていきました。

…それぞれの思いを秘めて…。

第四十七章 先の見えないブラックウイドー（後書き）

…何か、まだ先に我々の知らない事柄がありそうな感を醸し出していますね。今後のキャラクター達の発言に多いに注目してみてください。さい。先の展開の重要なヒントになっているかも知れませんが、作者の未熟さゆえに更新が遅くなることもしばしばですが、今後ともこの小説をどうぞ宜しくお願い致します。それでは次話でまたお会いしましょう。

第四十八章 番外編 モノトーン・レイン（前書き）

《菌類～自然の分解者～》

皆様は菌類と聞くとあまり良い印象を受けないかも知れません。確かに、食べ物や木製の物を腐らせたり時には人の健康に害を与えるようなものも多々あります。しかし菌類の1つであるキノコの一部は食用になりますし、納豆やチーズの製造には多くのカビの仲間が関わっています。また、病気を治療する抗生物質はこのカビの仲間から発見されたのです。このように菌類は人間の生活に役立つだけではありません。自然界で分解者として動物の死体や枯れた植物を土に返す役割も担っているのです。きっと菌類が存在しなかったら地球は死体やゴミだらけになってしまったでしょう。つまり、菌類の存在は地球に住む全ての生命にとって大変重要なものなのです。…今回はそんな菌類をモデルにした神様と、本編でもお馴染みのイブキが織り成すちょっと淡くて切ない恋物語を書かせて頂きました。

第四十八章 番外編 モノトーン・レイン

「もう梅雨も中頃だと言うのに…このまま雨が降らなかつたらどうなつちやうんだろう」

季節外れの強い陽射しに促されるように目覚めた私は、白い寝巻きの着物のまま縁側に出て空を仰ぐ。…相変わらず雲一つ無い青空が広がっていた。

「やっぱりまだ御神体見つかってないみたい。そりゃそうね、私を仲間はずれにしたバツよきつと」

もうこんな天気か2週間も続いている。本来ならば今頃ジパングは梅雨特有のシトシト雨に気分が憂鬱になる時期だが、どこぞの神社に祭られていた御神体が一ヶ月前に何者かに盗まれてからは一滴の雨も降っていない。盗まれた御神体は雨を司る神とされ大事にされていたからこれは一大事、私のいるエドの町だけでなく国中が大騒ぎだ。

…え？何故私が不機嫌かって？それは今私が自宅こゝにいるから。本当ならば私も忍者、つまりは国の諜報機関の一員としてこの一件に関与するはずであるしするべきである。でも、私の上司はそれを許してくれなかった。この私はまだまだ未熟だと、そう吐き捨ててエドでの留守を命じられた。確かに未熟なのは認めるが、私だってもう15歳で子供じゃないんだし…何より相方のシロだけを連れ出したのには納得いかない。これでは完全に邪魔者扱いではないか。

「あーあ…私が事件を解決すれば一晩でヒーローになれるのになあ。そうすれば、きっと今よりも生活も気分も良くなるだろうに」

そう思いながら縁側に腰掛ける。…快晴の天候とは裏腹な私の心、つつい溜め息が漏れた。

別に好き好んで忍びの道に入ったわけじゃない、物心ついたころから孤児だった私を引き取って育ててくれたのがたまたま今の頭領や仲間達だっただけの話である。それでも、この道で生きてきた私に

とってはそろそろ何かしらの手柄を取っておきたいところ。周りは私の事をちつとも分かっていないと言うか…何だか見下されているような、そんな気がしていたから。だから実力を見せればきつと私もみんなから認められる、そんなことを思い描いていた昨今に例の一件から外されたんだから心底穏やかではない。

「あーもうっ、こんなんじや100年修行しても足りないよっ！」
イライラのあまり思わず頭を掻き掻いた。

「…切なそうな顔したり髪を掻いたり忙しい娘だなあ…どうでもいいけど早くこの貧相なお尻をどけてくれないかなあ、オイラこのままじゃあ潰れちゃうよ」

「は！？今のは空耳か？いや、確かに私のお尻の下からその声は聞こえた。」

「あれ、もしかして…オイラのこと見えるの??」

私が慌てて立ち上がってさっきまで腰掛けていた所を見ると、そこにはネズミくらいの小さな人らしきものが仰向けになってこちらを見ているではないか！

「いやあ、助かったよ。でもすごいね、オイラの姿が見れる人間なんて滅多にいないよ」

その小さな人のようなものは私にそう感心したように言った。よくよく見るとなかなか高そうな着物に身を包み、精悍な顔付きをしている。瞳も髪も真っ黒で、髪はやや逆立った印象を受ける。…とにかく、大きさ以外は人間とそう変わりはないようだ。

「え、えと…あなたは??」

私が恐る恐る聞いてみると、

「あ、オイラ？オイラはシメジって言うんだな」

彼はそう答えた。

「シメジ？じゃあ、あなたは妖怪なの？」

「うーん、妖怪とはまた違うんだな。なんと言うか、まあ一種の神様だよ。オイラはカビとかキノコを司る神様なんだ」

神様？うーん…まあ、信じられなくもないことはないが…イマイチ

釈然としない。少なくとも、私のイメージする神々しさというものがこれっぽっちも感じられないのは否めない。少なくとも敵ではないようだが…。

「…で、その神様がなんで私のお尻の下にいたわけ？てゆうか、何も貧相なお尻なんて言わなくてもいいでしょ。結構気にしているんだから」

「ごめんごめん、それは悪かっただよ。オイラも普段は世界中の人里離れた山奥を転々としているんだけど…実は、ちよっと困ったことがあって町に下りてきたんだな」

「困ったこと？」

「最近めつきり雨が降らなくて…その原因を探っているんだな。ほら、オイラってカビとかキノコと同じで乾燥した環境には弱いんだ。本当はもつと体も大きいんだけど、雨が降らなくて乾燥しているからこのサイズを保つのが精一杯なんだな」

「ふむふむ、なるほど」

「このまま雨が降らないとオイラだけじゃなくてみんな困るんだ。だから、ここは神として何とかこの異変を解決しなくちゃいけない…とゆうわけなんだな」

ほうほう、つまりはこの神様が突き止めようとしている事と私が気にしている事柄とは全くの同じ事件ってわけだ。…だったら話は早い。

「じゃあ分かったわ。私も手伝ってあげる。丁度そのことで気になったたし…町中じゃあ私がいいた方が色々都合が良いでしょ？」

「え、本当に？それは助かるだなあ。それじゃあ頼むよ」

そう言っただけで彼は嬉しそうに笑う。まあ、私としても神様が一緒にいてくれた方がありがたい。もしかしたら手柄を立てるチャンス…とまではいかないかも知れないが、少なくとも少しはこの件に関して貢献はできるだろう。どうせ家にいても暇なだけだし、ここは一つ好奇心に身を任せてみるのも悪くはない。

とりあえず、普段着に着替えてから町にでも行って色々聞いてみよう

うかな？それにしても、カビの神様と行動を共にして水虫とかにならなきゃいいけど…。

《細く長く生きる》

「あー…結局何も情報は得られなかったなあ…疲れただけじゃん」
もう月があんなに高い…一日中シメジを肩に乗せて町中を歩き回ったものだから、私はすっかり肩がこってしまった。風呂上りにも関わらず、何だか体中の汚れが残っているような気さえた。結局、私達は何一つ情報を得られないまま家に帰ってきていた。すっかり辺りは暗くなつて、虫達が夜のコーラスを奏で始めていた。

「まあまあ、オイラは結構楽しかったよ。町つてのは変わったものがいっぱいあるんだなあ。…お、真ん丸なお月さんが綺麗だあ」
シメジは疲労困憊の私をよそに縁側ではしゃぎまわっている。彼と町を回るのは想像以上に大変だった。まず彼は私以外には見えないから会話をすれば白い目で見られるし、耳元であれこれキャツキャ言われた日にはたまらない。…まったく、少しはこっちの身にもなつて欲しい。

「はあ…またヒーローになり損ねた。これじゃあまたみんなに役立たずだつて言われちゃうよ」

私が溜め息混じりに言うつと、

「いんや、それはイブキの勘違いだよ」

そうシメジが言ってきた。

「何？神様のあなたに人間である私の気持ち分かるつての？…あのね、人間つてのは無力なんだよ。一部の優れた者だけが良い思いをする生き物なの。だから、私はヒーローになつて歴史に名前を残したい。ちよつと意味は違うけど、赤い悪魔がそうであつたように」
そうよ、あの赤い悪魔が名を残すように私も歴史に名を残したかつた。…もちろん、世界を滅ぼすとかじゃなくて良い意味で。それが

人生の最高峰だと、そう信じてやまなかつたから。

「まあそれは考え方しただけだ……オイラはそうは思わないだよ。オイラ達菌類はとつても小さくて動くことも何もできないけど、この世界に無くてはならないものなんだな」

シメジはケラケラ笑いながらそう語る。

「菌類ねえ、私にはあんまり良いイメージ無いけど……」

「確かに病気とかもオイラ達の仕業だったりするけど、世界全体から見ればそう悪いことじゃないだよ。人間が増えすぎるのを抑制してるからね。それにオイラ達自然の分解者がいなかったら世界は死体とかのゴミだらけになっちゃう。もちろん、納豆やチーズや鰹節なんて存在しないだろうなあ」

うっ……納豆がこの世からなくなるのだけは勘弁して欲しい。そっか……確かに人間が増えすぎないのは残念だけど病気とかの抑止力があるからなんだ。それに、カビとかキノコとかの菌類がいるから枯れ木や骸は土に返ることができんだよね。そしてまたその土が新たな命を育む、つまり全ては輪のように繋がっている……物知りなシロも同じ様なこと言ってたっけ。

「何も救世主ヒーローみたいなにならなきゃ良い人生じゃないなんてことはないんだ。大事なのは自分なりの存在価値を見つけることだとオイラは思うんだな。そして何より多くを望まない、欲張らないこと。そうすれば多くの偉大な神々が滅んでいった中でも生き残ったオイラみたいに長く幸せにいられるよきつと」

「多くを望まないか……要するに素朴に生きろってこと??」

「そうそう、小さな幸せと当たり前前の生活を続けられる人生が一番素晴らしいんだな。それにイブキはオイラにとっちゃ最高のヒーローだよ」

そう彼に笑顔で諭された。

「う、うるさいわねシメジ……お、お世辞言うなんてずるいよ……」

ひ、久々に褒められた……私は恥ずかしくて顔が赤くなったのが自分でも分かった。……気のせいかもしれないが、何だか彼が少しだけ格

好良く見えた。

「ふあ…もうオイラ眠いよ〜」

相変わらずマイペースな彼はそう言っただけで私の気持ちはそっこのけで大欠伸する。

「そうね、もう今日は遅いし寝ましようか。明日はちょっと思いあたる場所があるからそこに行こう」

そんなことを言いながら私が布団に潜り込もうとすると…

「あつ、待って。オイラも一緒に寝る〜」

なんとシメジが私の隣に潜り込んできたではないか。

「ちよつ…女子の布団と一緒に寝る不届き者がどこにいるのよ!？」

「まあまあ、硬いこと言わないでよ〜イブキ。オイラ達菌類はこうゆう暖かくてジメジメした所が大好きなんだなこれが」

「失礼な！私そんなに汗つかきじゃないわよ。…もう、仕方ないわね…きよ、今日だけなんだからね」

「ありがとー、じゃあお休みイブキ…スースー…」

気がつけば、彼は既に夢の中。本当にマイペースな神様だ。まあ確かに明日も忙しくなりそうだし、私も彼を見習って早く寝るとしよう。

もちろん殿方と寝るのは初めてだけど…正直、彼みたいならまあ良いか…なんて考えちゃったりしている私がここにいた。

《黒松の砂丘》

「なあなあイブキ〜、オイラこんな砂っぱい所嫌だよ〜」

「ワガママ言わないでよもうっ！私だってこんなしょうもない所になんか来たくないわよ」

「イブキ…もしかして朝のことまだ怒ってるの??」

「あたりまえでしょ!…もう、本当にあなたって人はデリカシーないんだから」

そう、まず朝起きて一番驚いたことは通常サイズに戻ったシメジが私の隣で寝ていたこと。…まだそうゆう経験のしたことのない私にとってはこの上ない辱めと言うかなんと言うか…慌てて彼を叩き起こして聞いたところ、どうやら私の寝汗による湿気で大きくなつたらしい。そこまではまだ仕方ない。…が、問題はその後だ。嫁入り前の女の子に向かつて『良い臭いのする寝汗だったね』とか『きつとイブキは水虫菌に好かれるね』とか…普通言うかそんなこと！？しかも、通常サイズに戻ると一般人にも見えるようになるみたいで…ここに来るまでに色々言われた。何を言われたかはご想像にお任せするよ、並んで歩く若い男女に言うことなど決まってはいるが。おかげでもう朝から最悪の気分だ。

…そう言えば前まで小さくて気が付かなかったが、シメジの腰と帯の間には一本の脇差が挿してある。それは何かと問えば『使わないことを祈る』とだけ答えた。とても剣が達者な様子には見えないのだが…??

「ええつと…一応目的地には到着したようね」

「この場所と無くなった御神体とは何の関係があるんだなイブキ？」

「…シメジ、雨が振らなくなって特をする奴って誰だと思う？」

「うーん、小説の締め切りが間近なのにスランプ状態の誰かさんとか??？」

「いやね、確かにそれも正解なんだろうけど…そうじゃなくて、根本的に雨が嫌いな奴よ」

「そんな人いるのかなあ？」

「そう、そこよ。みんなこれは誰か盗人の仕業だと言う固定概念の下で御神体の行方を追ってる。でも、親方たちその道のプロがこれだけ探しても見つからないとゆうことは…」

「人間以外の誰かの仕業ってことなんだな？」

「そうよシメジ。それに物を盗めるってことは相当な知能がないとダメってことね。その線で色々調べた結果、一匹だけ該当する妖怪がいたの」

「妖怪？」

「…雨が嫌いで乾燥した土地を住処にしている妖怪、砂鼠よ」

砂鼠、私が調べたところによると数十年前から江戸の海岸に程近いこの黒松の林に住み着いているらしい。体は小さいが高い知能を持ち、極端に水気を嫌う。もちろん盗んだとゆう確証は無いわけだが…『灯台下暗し』とも考えられる。まさか江戸とゆう大都会のすぐ近くにこんな狡賢い妖怪が住んでいることなど誰も考えられないだろう。…ああ、ちなみに私は自他共に認める妖怪・モンスターマニアだからこんなことも知っているわけだが。

「でもなあイブキ、その砂鼠って妖怪なんだから強いんじゃないの？」

「本当にそれが神様の言う台詞かいな…大丈夫よシメジ、砂鼠の妖力は大了ること無いの。ほら、手裏剣とか短剣はちゃんと持ってきてるし私の実力でもってボコボコにしてさっさと事件解決よ」

「…コラコラ、黙って聞いてりや随分な言いぐさじゃないかこの小娘が」

突然、目の前の砂の中から子猫くらいの砂色の毛をした獣が飛び出してきた。その両手には青く輝く玉が抱えられていた。

「あー！それは…」

「見事な推理だったよ。そう、御神体を盗んだのはこの俺だ。理由もお前さんが思った通りさ。バカな人間どもの中にも少しはマシな野郎がいたか」

「あはは、良かったねイブキ。なんか褒められているみたいだよ」
「だーっ！そんな褒められ方あるかっ！やい砂鼠、おとなしく御神体を返せっ」

「嫌だね、雨が嫌いな砂漠の生き物は俺だけじゃないんだぜ？悪いがお前には死んでもらうよ小娘。来い、サンドボア！」

砂鼠がそう言うと、その足元から巨大な砂の山が盛り上がる。砂鼠を天辺に乗せたままその砂山はどんどん大きくなり、その砂山の中

かな巨大な大蛇が姿を現したではないか！

「…っ、サンドボア…！？」

その砂色の鱗一枚一枚、鋭い2つの眼光が私を睨み付ける。…私の頭の中は真っ白になった。こんな化け物に敵うはずがない。あの大きな口で噛み殺されるか、長い体で絞め殺されるのがオチだろう。あまりの恐怖に冷や汗が噴き出し、体が大きく震えているのが自分でも分かった。…私はここで死ぬのだろうか？

「こらー！イブキに手を出すなー」

恐怖で動けない私の前にシメジが立ちはだかる。

「なんだお前？」

「無理に御神体を返せとは言わない。だから、彼女の命を奪うようなことはしないで」

「健気だが、秘密を知った以上そうはいかないよ。じゃあ、まずはお前からだ小僧！」

砂鼠がそう吐き捨てると…

「…仕方がない、殺生は好かんが背に腹は代えられんか…では見るがよい、我が真の姿を」

次の瞬間、シメジの周りを凄まじい魔力が渦巻き彼の黒かった髪がみるみる白髪に変わり瞳の色も黄緑色に変化した。今までのほんわかした印象とは全く異なった、まさに神の貫禄をしたシメジが私の前に現れた。

「シメジ…あなた…？」

「…心配するなイブキ、私が付いてる。…一振りで切り伏せる」

彼は振り返らずにそうとだけ言った。

「調子に乗るなよ小僧！噛み殺せサンドボア！」

「シャアアアアー！！」

砂鼠の掛け声と共に、サンドボアがその鋭い牙を剥き出しにしてこちらに飛び掛ってきた！

「では言わせてもらおう…妖怪の分際で調子に乗りすぎたな、神を見縊ったお前の負けだ砂鼠。喰らえ必殺の奥義、ブラックパウダー

バーン・ブラスト！！」

シメジは素早く脇差を引き抜くと間髪入れずに大きく一振り、同時に黒い粉状のものが衝撃波となりまるで幾重にも重なった巨大な津波のようにサンドボアと砂鼠に向かって襲い掛かり周囲の松の木と共に全てをズタズタに切り裂く！！そうかと思えば、飛び散った肉片や木片に黒い粉が取り付きあつという間に腐らせ後には砂煙と地面に落ちた御神体しか残らなかつた…。

「…！！」

あまりに一瞬の出来事に、私はただ呆然とする。

「この神剣アスペルギウスは切断したものを片っ端から腐らせる恐ろしい武器なんだよ。よって、蛇やワームのような再生能力の強い相手にも有効なわけ」

刀を鞘に納めながらシメジが振り返ってそう私に言った。…まるで別人のような雰囲気、私は驚くしかなかった。

「はは、ごめんよ驚かせてしまったようで。一応こつちが私の本当の姿なんだ。だけど今までイブキが見てきた私も偽者ってわけじゃなくて、菌類が様々な姿形を変えるように私もいくつかの人格があるんだ。本来の人格じゃちよつと付き合うのに堅すぎると思ってたね」「何よそれ！？こつちの方が断然良いじゃない！詐欺よ詐欺！」

神々しくも飾らず紳士的な彼は、おそらく私じゃなくてもすぐに心ときめくほど素晴らしい男性だろう。…いつしか、彼に惹かれる私があった。それは今の彼だけではなく、今までの素朴な彼に対してでもあつた。

「まあまあ、目的は果たしたことだし…これは君の手柄だよ」
そう言つて彼は砂に埋もれていた御神体の青い玉を拾つと私にそれを持たせた。

「え…でもそれはシメジが助けてくれたわけで…私は何も…」

「そう落ち込むことはないよ。神は気紛れだからね、誰のためにも動いてくれるわけじゃない。君は私の良心を動かした、それだけで凄いことさ」

彼はそう言つと、私に背を向けてこう続ける。

「さあ、もう行かなくちゃ。私は自らがいるべき世界に帰るよ。今回は少々人間の世界に長く居過ぎた」

「えっ、待つてよ。私：まだあなたと一緒にいたい…」

シメジの急な別れの言葉に、私は思わず本音が口から出た。

「…残念だがそれはできない。前にも言ったように我々菌類は人間の役にも立つがその命を脅かすこともある。私とて例外ではない、ましてや神だ。一緒にいるだけで周囲に影響を与えてしまう。これ以上一緒にいたら君も水虫になるだけでは済まないだろう。…我々と君とでは住む世界があまりにも違い過ぎるんだ」

彼は振り向かずにそう言つた。…正しいことをちゃんとやっているはずなのに、その言葉が私には妙に冷たく寂しく感じられた。

「…そつか…そうだよ。…ねえ、また会える…かな？」

私がそう問いかけると、

「君がそれを望むのであれば…そんな日が来るのかも知れない」

彼は最後に少しだけこちらを振り返つてそう言つた。やがて彼はゆつくりと松林の中に吸い込まれるように歩を進め霧のように消えていきました。

…なんとも言えない虚無感に包まれ、私はしばらくその場から動くことができなかつた…。

《梅雨の心》

季節通りの激しい雨音に促されるように目覚めた私は、白い寝巻きの着物のまま縁側に出て空を仰ぐ。…相変わらず灰色の空から大粒の雨が降り注いでいる。

「はあ…もうあれから何日経つたんだろうか。シメジ…元気にしてるかなあ」

御神体を無事に祠に戻してからとゆうもの、ご覧の通り連日の雨。

梅雨本来の姿を取り戻し人々にも安堵の表情が戻っていた。今回の一件で私の活躍は高く評価され、親方からも任務への参加要請が頻繁に来るようになった。現に、今も私以外のほとんどのメンバーがまた別の任務で出払っていた。

…え？何故私が自宅（じゅう）にいるかつて？それは今私が不機嫌だから。本当ならば私も忍者、つまりは国の諜報機関の一員としてこの一件に関与するはずであるしすべきである。でも、私の気分がとてもしうはさせてくれなかった。だから、強制ではない今回の任務は丁重にお断りしたのである。

何故だろうか…こんな気持ちになったのは初めてである。何をする気にもなれない、何をしても虚しい…果たしてこれが恋とゆうものなのか、私には分からない。仮にそうだとしても私は失恋したことになるだろう。いずれにしろ、私の心に空いた穴はすぐには埋まりそうに無い。

意中の彼は素朴に生きることを私に言っていた。最初はその言葉をそのまま素直に受け取っていたが、別れるときに彼が言った『我々と君とでは住む世界があまりにも違い過ぎる』とゆう言葉に引つかかった。…もしかして、彼が本当に言いたかったのは『人間は神にはなれない』のような感じの意味だったのかも知れない。人間の愚かさは神も呆れる程とゆうことか。それでも、彼が人間に対してそう思っていたのかは疑問である。でなければ私にあのような態度は取れないだろう。あくまでも、そう認識してほしいとゆう警告的な意味なのだろう。さもなければ…これ以上は何も言っまい。

…さあ、もうすぐ梅雨の季節も終わることだろう。そうしたら、私の灰色に染まった心も再び晴れ渡るようにしようじゃないか。きつと、その先に何かが見えるはずだから…。

第四十八章 番外編 モノトーン・レイン（後書き）

《神と新世界》

赤い悪魔が世界を滅ぼした後、神の多くは姿を消しました。神が世界に多大な影響を与える時代は終わったのです。しかし、そんな新世界にあつてジパングは異例の存在と言えます。ジパングは旧世界の名残を多く残しており、神への信仰と保護が厚い地域です。よつて多くの神々が未だに存在しており、今回登場したシメジもその一人です。大陸から隔絶され独自の文化を築いているジパングの特徴の一つでしょう。

第四十九章 今昔幻想物語・その1「告白」（前書き）

いよいよ敵の本拠地に乗り込んだ一行。ロゼッタの過去の清算とこの世界の未来を賭けた戦いが幕を開けます。今まで謎だった過去との繋がりも明らかになってきます。赤い悪魔を巡る過去と現在のしがらみをテーマに書いていく今昔幻想物語シリーズ、最後まで目が離せません。

第四十九章 今昔幻想物語・その1「告白」

「…そう言えば、まだわたしのことについて何も話してなかったね」
地下へと降りていくエレベーターの中、赤い瞳の少女が思い出すように言った。もうどのくらい経ったのだろうか、エレノア達を乗せたエレベーターが駆動音と共にどんどん降りていくのが肌で感じられた。もしかしたらこのまま地の底まで行ってしまふのではないかと思えるくらいに…それでも時が意外と進んでいないことはここにいる4人が一番分かっていた。そして、その心境ゆえに短い時間をものすごく長く感じてしまっていることも。

「なんだよロゼ、急にどうしたのさ？」

エレノアが急な彼女の発言に少し戸惑いながら言う。

「いつかは話そうと思ってた。今がその時なのかは分からないけど…ノアちゃん達にはどうしても話しておかなくちゃならないことがある」

ロゼツタが言った。

「…あなたの生い立ちのことでしょ？」

ミーシャの言葉にロゼツタは黙って頷く。

「生い立ちって…でもそれは今話すことじゃあ…それに…」

「まあ待てエレノア。ロゼツタが話したいって言っているんだ。…黙って聞いてやるのも仲間の務めだと思っせ」

戸惑うエレノアの肩にティティスが優しく手を置く。エレノアが戸惑うのも無理は無い。ロゼツタの過去については絶対に触れてはいけない領域だから。そのあまりにも辛すぎるであろう過去の記憶をロゼツタはずっと心の奥底に封印していたに違いない。それはティティスもミーシャも承知だし、最も付き合いの長いエレノアは尚更知っていた。ここまで一緒に衣食住を共にしてきた仲間内にさえ語るうとしなかった辛い過去を自ら話そうとしているロゼツタを黙って見守ってあげようとティティスとミーシャは考えたのである。

「…わかった、話してくれロゼ」

エレノアがそう言った。ロゼッタのこの行為が、まるで呪われた自らの運命を変えようとする決意に感じられた。だからこそ、エレノアも彼女の真実を受け止めることを決心した。

「みんな…ありがとう」

ロゼッタが安堵の表情を浮かべた。そして自身についてこう話し始める。

「わたしはコロツサルに作られた人工生命体、彼の研究施設の中で育った。当時は実験と言って虐待に近いようなことも受けた。腕とか脚をもがれたり変な薬を打ち込まれたり…でも、それはわたしにとって苦痛ではなかった。いつもそれは科学と自分のためだつて彼コロツサルに言い聞かされていたから。幼かったわたしにはそれを疑う余地はなかった」

彼女は視線を少し逸らしてからさらに続ける。

「そんなある日…確かわたしが10歳になるくらいだったかな、施設内でいつも孤独だったわたしのためにコロツサルが孤児院から遊び相手として一人の少年を連れてきてくれた。…それがカエサル。少し年下だった彼はとても優しく、わたしのことを姉さんと呼んで仲良くしてくれた。それからの日々は楽しいものだった、わたしとカエサルは常に一緒に行動し喜びも悲しみも分かち合った。まるで本当の家族のようにね。…やがてわたし達は恋に落ちた、体の関係も持った。そしてとうとうわたしが20歳の時に結婚した。種族の壁など関係なかったんだよ、この時には…」

一呼吸してからさらに彼女はこう生い立ちを話す。

「…あの頃が一番幸せだった。良い夫と良い部下にも恵まれ何一つ不自由しなかった。今でも身に着けているこの彼のくれた赤い石の首飾りはわたしの大事な宝物。…でも、そんな幸せも長くは続かなかった。わたしがコロツサルの右腕となって世界征服のために暗躍していることをカエサルは知らなかった。やがてそれを知ったカエサルは人間の側に付く。魔物側のわたしと最後には対立せざるを得

なかった。でも、そんな最中にわたしもカエサルも共にコロツサルに裏切られて殺されそうになる。…理由は分らない。そしてカエサルは瀕死状態になり、わたし自身も重傷を負う。…わたしは死にたくなかった、だから彼を殺した。彼の生き血を吸って自身のリミッターを外し全てを開放した。…何もかもが許せなかった。目の前に見えるもの全てを破壊したい衝動に駆られ、怒りと悲しみに任せ、て暴れまくった。…でも、最後は伝説の勇者イチとの戦いに敗れ封印された…」

そう一通り話しきつた後、彼女はこう最後を締め括った。

「みんなはわたしのこと赤い悪魔って言うけど…そんなんじゃない。要するに親を裏切り夫を殺し、勝手に世界を破滅させようとして失敗し勇者に封印されたどうしようもない未亡人ってことだよ」
そう自らを罵った。

「なるほどね…あなたのその首飾りには深い意味があったわけだ」
ミーシャがいつものように淡々と言うが、その表情は明らかに悲しげである。ロゼッタの境遇がミーシャの想像以上のものだったことは間違いないだろう。

「…」
テイティスはただ黙っていた。普通の人間であればそうすることしかできないほど、彼女の生い立ちは残酷に感じられたから。

「だから…初めてノアちゃんと会ったときは衝撃的だったよ。こんなわたしを本気でここまで信用してくれる人間がこの世にいたなんてね、とても信じられなかった」

ロゼッタがエレノアを見て言うと、エレノアからは意外な返答が返ってきた。

「…バカ野郎、そんなんじゃないよ」

「え？」

「私に言わせればお前が過去に何をやらかしたかなんて問題じゃない。大事なのは未来を信じる事だって、大事なのは未来を切り開く自分を信じる事だって…お前自身が私に教えてくれたことだろう？」

「ノアちゃん…」

さらにエレノアはこう続ける。

「過去の事柄についてはもちろん同情するさ。でも、お前になら自分のかつて侵した罪を払拭できるって私は信じている。第一、そうじゃなきゃあここまで一緒に付いてこねえよ。…だから細かいことは気にすんな、今できることをしろ。私が必ずお前を過去の鎖から救い出してやる」

それはロゼッタを心から信用し尊敬するエレノアならではの励ましの言葉だったのかも知れない。

「…だつてさ、良かったねロゼッタ。幸い、ここにいるお人好しな3人は同じようなことを考えてるけど」

「そうそう、俺達にとっては今のロゼッタが俺達のロゼッタなんだから」

ミーシャとティティスもそう励ましの言葉を掛ける。二人にとってもロゼッタの存在はかけがえのないものだから。

「…みんな…わたしのことを…」

みんなが自分のことをこんなにも愛おしく思い支えてくれようとしていることを思っただけで、ロゼッタの瞳から自然に涙が零れ落ちた。

「ほおら、なにシケた面^{ツラ}してんだよロゼ。これはお前の戦いでもあるんだからしっかりしろよな！」

「…涙は最後まで取っておきなさいロゼッタ、それが女つてもんよ」「そうだよね…ここまで来たんだ、わたしはもう引き下がらない」エレノアとミーシャの言葉にロゼッタが涙を拭いながらそう決意を新たにする。…その時、まるで彼女達の決意表明を待っていたかのようにエレベーターが止まった。さっきまで硬く閉ざされていた扉が開き、目の前にコンクリートが打ちっぱなしの大きな空間が現れた。

「まるでSF映画に出てくる巨大秘密基地って感じだな…こりゃあ想像以上のことになりそうだ」

テイティスがそう本音を漏らす。

「何が起ころうと関係ないよ、私達が成すべき事はただ一つなんだから」

エレノアがそう言った。かなり広そうな空間だったが、特に脇道があるわけでもなさそうなので4人はとりあえず前進するしかない。もう引き返せないことは全員が覚悟していた。

「コロツサル…あなたとわたしが犯した過去の過ちを今、わたし達が正す…！」

エレベーターを後にする際、ロゼツタはそう呟く。この戦いが世界と自身、そして仲間達の運命を左右することをロゼツタは強く感じずにはいられなかったに違いない。…心なしか、彼女の瞳がいつもより赤味を帯びていた。

《ナイトメア・ドラゴン》

「…ねえマーベラス？正義って何だと思う？」

薄暗い廊下を進む中、エリーが唐突に切り出す。エフェクトの3人が他のグループと分かれて数十分が経過していた。エレベーターを降りてからというもの、不自然に広いコンクリート打ちっぱなしの単調な通路がどこまでも続いていた。

「え？どうしたのエリー、急にそんなこと言うなんて珍しいわね」
マーベラスが少々驚いたように言う。

「ううん、何でもありませんわ。…赤い悪魔の行動がどうしても理解できなくて」

エリーには、ロゼツタが何をしたいのかがいまいち解せなかった。無理もない、かつては世界を滅亡へと導き、今度は世界が魔物の言い成りになるのを阻止しようと自分達と戦っているのだから。

「それは私にも分からないけど、きつと彼女には彼女なりの考えがあるんでしょ？変な話、私達だってどうしてコロツサルの政府体制

に反旗を翻したのか微妙なところだし…もちろん、魔物に国を乗っ取られるのが嫌だからだけど乗っ取られたからって何がどう変わるのか分からないじゃん？」

マーベラスがそうあまりにもさらりと言うものだから、エリーは呆れ顔だ。

「相変わらず前向きなのか能天気なのか…まあ、そのくらいの気持ちじゃないとやっていけないのかも知れないわね」

マーベラスに対してエリーがそう感心と呆れを半分ずつ感じさせる口調で言った。

「二人とも、戦いの前に士気を落とすようなこと言わないで欲しいでござるよ…」

生真面目なベンケイがマーベラスとエリーにそう言う。

「まあそう言わないでよベンケイ。よく言うでしょ、仕事は楽しみながらやるべき…」

マーベラスがそう言いかけた所で3人はピタリと歩みを止めた。目の前が行き止まりになっていたので理由はそれだけではない。

…そこに見覚えのある男が立っていたからだ。

「おやおや、やはり来ましたか。国に反旗を翻すなど重罪中の重罪ですよ？」

「シャクマ…お主やはり魔物だったか」

化けの皮を剥いだシャクマの姿を見てベンケイが驚きを堪えながら言う。

「何も驚くことはないでしょう？死んだジャックもコロツサル様でさえも魔物なんですから。…世の中に魔物が人間と同じ数だけいても不思議ではないでしょう？」

「ああ、なるほどね。要するに全てはやっぱりティティスの言う通りだったわけだ。…なぜ私達に手を出さなかった？こっちの動きは知っていたでしょうシャクマ？」

余裕のシャクマにマーベラスが同じく余裕気な口調でそう質問する。
「…それは何とも答えられない質問ですな。コロツサル様の意向です

ので。何も世界と言うものは一つで動くとは限らないですよ？」
シヤクマが意味深な表情で言う。

「なあに解り難い表現してるんですの！？はつきりおっしやい」
短気なエリーが金切り声でシヤクマに怒鳴った。

「要するにコロツサル様としてはあなた方はともかく赤い悪魔に死んでもらっては困ると言うことですよ。…あの方を抑制する駒が無くなつては困つたことになるとお考えのようで」

「なんですって…？」

シヤクマの言葉にエリーは耳を疑うが、それ以上何かを考える余裕は無かった。

「いずれにしろあなた方にもう用はありません。コロツサル様の邪魔をするならここで消えて貰うことにしましょうか…ふふふ…あはははは！」

笑い声と同時に見る見るうちにシヤクマの体が黒い半透明の霧状の雲となつて広がり、それが巨大な龍の形を形成する…そして3人の目の前に巨大な黒い龍が姿を現した…！

「完全に化けの皮剥いだようね。だけど…いくら敵とは言え同僚は同僚…ネチネチ攻め立てるのは嫌いだからここは私が一撃で…」

マーベラスが腕まくりをして攻撃態勢に入ろうとすると、
「よすでござるマーベラス。このような狭い所でお主が技を使うのは危険過ぎる。…わしらに任せておけ」

マーベラスの方に手を置きながらベンケイがそう言った。

「ベンケイの言う通りよマーベラス。…気持ちは分かるけど、ここは属性的に安定でコントロールがしやすい私達の技で攻めた方が賢明ですわ」

エリーも一歩前に出てそう言う。

「エリー、ベンケイ…わかったよ。でもいざとなつたら私が援護するから無理しないで」

少し心配しながらも、2人を信頼してマーベラスは数歩下がった。
それでも、いざとゆう時のために鋭い視線を異形と化したシヤクマ

から外すことはしなかった。

「めんどろうだわ、一気に決めるわよベンケイ」

「分かったでござすよエリー」

そう言つて顔を見合わせた後、エリーとベンケイは攻撃態勢に入る。「昔っからあんたの考え方が気に食わなかったのよ。これでもくらないさい、スパークビーム!!」

「すまんシャクマどの。これも定め!切り裂け、かまいたち!!」
エリーの放った電撃とベンケイの放った風の刃が龍と化したシャクマの体に確かに命中した…が、その攻撃はシャクマの黒い体をすり抜けて反対側の壁に当たったではないか。轟音と地響きと共に頑丈な壁が少し崩れる。

「はっ!?!?どうなっていることですか!?!?」

あまりの驚きにエリーの声が裏返る。次の瞬間、何事も無かつたかのように落ち着いた様子のシャクマが突然大口を開けて冷たい息を吐き出した!細かい氷の弾丸がエリーとベンケイに襲い掛かる!

「あぶない!ソフトウォームウインド!」

間一髪、後ろで待機していたマーベラスの発した暖かい風が冷たい風を打ち消した。このターン、結局お互いの攻撃によるダメージは0だ。

「あ、ありがとうマーベラス…それにしても、一体どうなっているのですか?」

攻撃が透けたことにエリーは戸惑いを隠せないようだ。

「あれは…おそらく半物質的な何かなんじゃろう」

「半物質??」

ベンケイに背後のマーベラスがそう聞く。

「そうじゃ、不定形で密度が低い物質の塊で…ようするに幽霊ゴーストみたいなイメージじゃ。だから通常攻撃だと貫通してしまつてダメージを与えるのは難しいでござす」

「なんですその反則的な性質は…とりあえず向こうの攻撃はマーベラスが防いでくれそうだけど、こっちの攻撃も効かないんじゃない?」

「要するに平行線ってことじゃな。だが戦わないことには仕方ない
…少なくとも何か糸口を掴むまでは」
通常攻撃ではダメージを受けない幽霊龍ナイトメアドラゴン：果たして3人はこの強敵
を倒す糸口を掴めるのだろうか。いずれにしろ、選択肢は勝って先
に進むか負けて死ぬかの二者択一であることは確かである。

《禁断の研究》

「…ねえシロ、ここは一体何の部屋だと思う？」

「さあな、少なくともあまり良い趣味とは言えないな」

イブキ、シロ、エリオット、ココアの4人は人ほどもある大きなカ
プセルが十数個も規則正しく並べられた異様な部屋にきていた。カ
プセルの中は透明な緑色の液体で満たされていて、下からゴボゴボ
と気泡が吹き出ている。…そして、その中に見たことも無いような
不気味な生き物が浮いていた。

「これは…キメラモンスター？」

「キメラ？何それココア？」

「はい、キメラとは複数の生命体を人工的に融合させたような生き
物です。キメラは融合前の生物の特徴を受け継ぎますから、色々な
特性を持たせることができるんです」

ココアがイブキにそう説明する。

「要するに、より強いモンスターを作ることでもできるってわけだ」
シロが言った。

「でも、そのキメラがなぜこのような場所に…？」

エリオットが首を傾げた。…その時、

「…おやおや、どうやら部外者ねずみが紛れ込んだようですね？」

4人の前に突然、白衣の女性が現れた。

「…何者あんだ？」

「ふふ、侵入者が言えた台詞ではないでしょう？…私はリンリン、

このプロジェクトの中心人物の一人です」

イブキの問いかけに対してそうリンリンは答えた。

「プロジェクト…一体何の話だ」

シロが声を荒げてそう質問する。

「あなた方に話す価値があるかは分かりませんが…まあ良いでしょう。要するにかつてのバイオテクノロジーの復活と研究開発を進め完璧な生命体を創造する…それが通称『オメガ計画』です。クローン、キメラ、遺伝子改造…あらゆる分野を駆使してね。ここにあるのはその研究過程で出た産物…まあ失敗作の数々ですよ」

さらにリンリンはこう続けて話す。

「…そう、1000年前に赤い悪魔を作り出したこの技術を使ってもう一度赤い悪魔すら超える可能性を持った神のごとき生命体をコロツサル様と我々研究者は成功しました。…それがレクイエム、彼女こそ最高最強の存在であり絶対の強さの象徴…」

「なんだって…!??」

4人は驚きを隠せない。衝撃の事実を突きつけられ、同時にこの地下空間で行われていた研究の恐ろしさを知った。

「おっと、ちよつと喋りすぎましたね。さあ、もうお仕舞いにしましょうか？今日は非番でほとんど研究員はいないんですが…私に会ったのが運の尽きです」

そう言つてリンリンが指をパチンと鳴らすと、突然カプセルのいくつかが割れ中から気味の悪い液体と唸り声を上げるモンスターが出てきた！

「…あなた方のような雑魚キャラを消すのにはこのくらいで十分でしょう。せいぜい早く死んでくださいね、この後スミレ様の所に行かないといけませんので」

リンリンが不敵な笑みを浮かべながら3人と1匹を嘲るように言う。
「くつ、人を雑魚呼ばわりして…何とか後悔させてやるんだから」
イブキがそう言いながら脇差を抜く。

「舐められたもんですね、私にだって魔法くらいは使えるんですよ

？」

ココアがそう言って上着の袖を捲くる。

「うう…2人と女性なのにずいぶんと血の気が多いですよ」

今にも泣き出しそうになりながらも、エリオットは何とか剣を構えた。

「相手はキメラ4体…一人一匹殺らないとこっちが不利だな。久々に狼の血が騒ぐぜ」

シロがやる気満々で牙を剥き出しにする。

見習い忍者、犬みたいな狼、弱虫勇者、おっちょこちょいな獣人…決して一人一人は強くないことを4人はちゃんと分かっていた。しかし、旅と触れ合いを通して自らの役目に自身を付けた4人に戦いをためらう理由など無かったのかも知れない。

…それぞれの『大切な仲間を守る』ための戦いが今、始まった…！

第四十九章 今昔幻想物語・その1「告白」（後書き）

《エフェクトの能力》

マーベラス 炎、高熱を操る。攻撃範囲の広い強力な技が得意だが、炎系は制御が難しく酸素などの限られた狭い空間では使うのに不向きとされる。

ティティス 氷や雪と冷気を操る。攻撃の他に、壁を作って相手の攻撃をガードしたりと応用が利く能力。ただし、金属属性の魔物など凍らせるのが難しい敵には不向き。

エリー 電気や電磁波を操る。電撃で攻撃する他に電磁波で機械の計器を狂わせて相手の情報網を妨害することもできる。比較的弱点の少ない属性だが使える人物や魔物は少ないようだ。

ベンケイ 風や大気の流れを操る。攻守のバランスの良い属性で、攻撃と同時に強風で相手の攻撃を弾き返すこともできる。ただし、物理攻撃に対する防御力の高い相手には効果が薄い。

第五十章 今昔幻想物語・その2「アンビギユアス」(前書き)

何だかんだでこのノスタルジアもついに五十章を迎えることになりました。これも読者の皆様のおかげです。今後も引き続きよろしくお願ひします。

…さて、今回は物語の背景と言うか根本に触れるような表現がいくつか出てきます。赤い悪魔とコロツサルの関係の背後に一体何があるのか：まだ見ぬ人物やその関係も気になるところです。一つの物語の終わりは新たな物語の始まり：となるのでしょうか？もう少し読み進めないとハッキリしたことは分かりませんが、今回のストーリーでそのスケールの大きさが伺えると思います。今昔幻想物語シリーズ2作目、アンビギユアスをお楽しみください。

第五十章 今昔幻想物語・その2「アンビギユアス」

「あーあ、遅いなあ…こっちは色々話したいことがあってうずうずしてんのに」

水色の髪を手の指の間で撫でながら少女がそう言った。

ここは地下の秘密研究所の最深部へと繋がる連絡通路の図書館地下側の末端である。この場所と総理官邸の真下にある地下研究所の本部へは電気機関車で移動するシステムになっており、今アクアがいる地下駅ホームには一台の黄色と黒の縞模様の電気機関車が停車していた。ホームはけっして明るくはなかったが、それでもホームから伸びる通路や線路の向こう側よりはずっと明るい。

「コロツサル様は一体何をお考えになっっているのだろうか？…まあ、だいたい予測はつくけど、ティティス達はあのことを知っているのかしら？」

アクアがそんな風に色んなことを考えていると、静寂を破るかのように薄暗い通路の向こう側から複数の足音がぎやかに聞こえてきた。

「あら、どうやらようやく来たようね」

アクアがそう言って今まで座っていたベンチから腰を上げるとほぼ同時に、彼女が何度も見たことのある4人組がホームに足を踏み入れてきた。

「…ちつ、こりゃあまた厄介なのがお出迎えだな」

エレノアが顔を合わせて早々、喧嘩腰にそう言う。

「なによりエレノア、この前ティティスを助け出す時に協力してあげたのを忘れたの？」

ぶつきらばうな態度のエレノアにアクアが少しムツとした様子で言い返した。

「久しぶりだねアクちゃん。早速で悪いんだけど、コロツサルの所へはどうやって行けば良いのかな？ちゃんと教えてくれれば悪いよ

うにはしないよ。もつとも、教える気が無いのであれば話は別だ
ど」

ロゼツタがそうアクアに問いかけた。顔こそ笑っていたが、それは
爪をチラつかせるなどアクアに対する明らかな脅迫に他ならなかつ
た。

「分かった分かったよ、まだ私だって死にたくないんだからちゃん
と教えるよ。…その電車に乗っていけば地下施設の本体へと行け
るし、コロツサル様もそこにいるはずだつて」

アクアは意外なほどあっさりそう白状した。見た目は可愛いロゼ
ツタも、赤い悪魔と知っているアクアからして見れば敵わぬ相手で
あることは理解しているようである。

「だけどただでは通さないよ。その気になれば列車を破壊すること
もできるんだからね。一人くらい残していきなさいよ」

今度はアクアがそう脅しをかける。列車を失えばコロツサルのもと
にたどり着けなくなる恐れがあることを彼女は利用したのだ。

「めんどくさいことになったわね…で、誰が残るの？」

ミーシャがそう言いつつもティティスのほうを見るので、

「あー…分かったよ。俺が残るよ、まあ適任と言えばそうかも知れ
ないからね」

ティティスも空気を読んでそれを了承した。ロゼツタをコロツサル
に会わせる事が目的の一つであるし、ここはアクアとの戦闘経験の
ある彼が適任だとミーシャは考えたのだ。しかし、エレノアはやは
りと言っか納得できない様子。

「いんや、ここは私が残るべきだ。…欠けても戦力には影響がない
だろうからね」

そう投げやりとも取れる発言に、ティティスがこう彼女を諭す。

「良いかエレノア、お前は一番欠けちゃいけない人間なんだぞ？こ
こまで俺達を引っ張ってきてくれたのもお前のおかげだし、お前の
存在が俺やロゼツタやミーシャの支えになってるんだ。そりゃあ…
確かに俺は浮気性だしお前の心配も分かるが、こんな一大事に軽率

な行動を取るほど俺は腐っちゃ無いよ。お前は先に行つてあいつらを正しい方向に導いてやる使命があるじゃないか。…俺を信じろ、お前の信頼を裏切つたりはしない」

「…分かつたよ。そんなに言うならティティスの言う通りにする」
ティティスの真剣な眼差しにエレノアもようやく首を縦に振つた。

「はは、大丈夫だつて。帰つたらイイコトいっぱいしようなエレノア」

「だーかーらー！そうゆう所が心配なんだつて…もう」

彼は場を和ませようとしたのだろうが、純なエレノアにとってはただの下ネタにしか聞こえなかつたのは言うまでもないだろう。

「ちよつと！私を差し置いてなに勝手に良い感じになつてるのよ！行くなら行くでさつさと行つちやつてよ」

大好きなティティスがエレノアと仲良くしているのが気に食わないアクアがそう言った。

「アクアの言う通りね。続きは帰つてから。…この電車がせるエレノア？」

「おう、任せとけ！行くぞロゼ」

「うん、わかつた。…気をつけてねティーちゃん、ノアちゃんのために絶対無理しないでね」

「心配するな、ちゃんと加減するさ。…お前らも無事でいろよ、きつと約束だからな」

エレノア、ロゼツタ、ミーシャは一時のティティスとの別れを惜しみながらも電車に乗り込んだ。まもなく3人を乗せた電車はゆつくりと動き出し、速度を上げながら通路の奥深くへと消えていきました…。

「相変わらず仲間思いなのねティティス」

電車のライトが見えなくなるのを見計らつたようにアクアが言う。

「まあな、自分でもどうしてこんなことしているのか理解できないけど。…それよりもどうゆうつもりだアクア？わざわざこうゆうシチュエーション作つてよ？」

ティティスがそう疑問を持つのも無理はない。ちょっと考えれば分かるが、アクアはあえてティティスと一対一になるように言葉巧みに仕向けたのだから。

「あらら、やっぱり分かってたんだ。良いじゃない、久しぶりに二人つきりになっただしそれこそ私とイイコトしようよ」

「アホ、冗談言っつなよアクア。そんなことのために俺を残そうとしたんじゃないだろう?」

「そりゃあそうだけど…もうちょっと遊んでくれたって良いじゃない。どうせ互いに戦う気なんて微塵もありやしないんだから」

「それを言っつな…。で? 用件はなんだよ、要するに何か言いたいことがあるんじゃないのか?」

ティティスがそう問いかけると、アクアが真面目な顔でこう切り出した。

「今ならまだ遅くはないわ。お願いだからこれ以上コロツサル様と赤い悪魔のやり取りに首を突っ込むのはやめて」

「おいおい、どうしたんだよアクア…急にそんなことを言われてもあまりにも唐突にそんなことを言われたのでティティスは半笑いで聞き返した。

「これは笑い事でも何でもなくて真面目な話。あなた達は今、とんでもないことに巻き込まれかけているの」

いつものアクアなら笑って返事をして良さそうなものだが今は違う。その真剣な表情が事の重大性を物語っていた。

「…何が言いたいんだよアクア、はつきり言っつてくれよ」

ティティスもそのことによつやく気が付いたのか、真面目にそう聞く。

「私も立場があるから詳しくは言えない。でもこれだけは言っておく、もしコロツサル様が赤い悪魔に倒されるようなことになったら…きつと大変なことが起こる」

「大変なこと…?」

ティティスが首を傾げるので、

「要するに赤い悪魔やあなた達は愚かこの世界そのものに重大な影響がでるってこと」

アクアはそう少しだけ噛み砕いて説明した。さらにこうも続けた。

「コロッサル様と赤い悪魔の因縁はあなた達が思っているほど単純じゃないの。上手くは言えないけど…もっと大きくて強大な因果や権力が背後で蠢いている。それにティティスが少しでも関係していることがサキュバス様に知られたら…」

「サキュバス？そいつが何か関係してるのか？」

「そ、それは言えない…ダメよ、お願いだからこれ以上この件を散策するような真似はやめて！もしティティスが死ぬようなことがあったら私…私どうにかなっちゃうよ」

「わ、分かったから落ち着けて！俺はそう簡単には死なないよ」

アクアが取り乱し始めたので、ティティスは彼女の両肩に手をかけて顔を見ながらそう言った。

「なによ…あなたは何も分かっていない。世界のことも…私のことも」

アクアはそう言ってティティスの手を軽く振り払うとベンチに座り込んでそのまま黙り込んでしまった。

気まずい空気になってしまい、ティティスはただその様子を見つめることしか出来なかった。そもそも、原因が自分にあることを考えればなおさら取り繕うのが難しく感じたのは言うまでもない。同時に、アクアが言っていた言葉が終始気になってはいたが…彼がその言葉の意味を理解するのはまだ先の事となりそうだ。

《メタル・ソルジャー》

「ティティス…大丈夫かな…？」

小さな電気機関車に揺られながら運転席のエレノアがそう呟く。

「まあ、心配なのは分かるけど…相手がアクアである限り殺される

「ことはないだろうね、浮気されることはあっても」

ミーシャが何とも微妙なフオローをする。

「ティーちゃんならきつと大丈夫だよ。…たぶん」

ロゼツタが珍しく曖昧な表現を使って言う。小さな窓の外に延々と見える灰色の壁を見つめる彼女の赤い瞳はどこか別の意味で不安気だ。

そんな釈然としない雰囲気が漂う中、やがて前方にホームらしきものが見えてきた。エレノアはゆっくりとブレーキをかけたつもりだったのだろうが、結構な急ブレーキになってしまったところから察するにやはり心中穏やかではないようである。いずれにしろ、無事にホームに到着した一行は足早に電気機関車から降りた。

「なんだろう…不気味な感じだよ」

ロゼツタが思わずそう呟く。

特に何も変わつたところの無い単調な通路を進んでいくと、目の前に突然大きな空間が現れた。その空間には見たことも無いような大きくて頑丈そうな機械仕掛けの獣のようなものが何体も格納されていた。

「昔、まだ一人旅をしていた頃に風の噂で聞いたことがある。共和国が軍事強化の一環としてロボット兵の開発をしていたって。…無駄に血を流さないための兵力としてね」

2人に聞かれる前にすでにこの事実を薄々知っていたエレノアがそう簡潔に説明した。

「…へえ、なかなかよく知ってるな。だが知識だけじゃ俺達には勝てないぜ？」

聞き覚えのある声に一行が驚いて辺りを見回すと、一体のロボット影から金髪と銀髪の二人組みが姿を現した。

「…やはり現れたね、順番的にこうくると思ったよ」

「その取って付けたような言い方やめてくれませんか？僕らだって舐めてもらっちゃ困るんですが」

ミーシャの粗暴な言い方にドリーマーがそう言い返す。

「その様子だとアクアは男の方フィテイスに任せたようだな。女だけでそうそ
うできることなど多くはあるまい」

サイコがそう嘲笑うかのように言った。

「黙って聞いてりや随分と言ってくれるじゃない。本来ならばこ
の場で袋叩きにしたいところだけど…エレノア、ロゼッタ、あなた
達は先に行きなさい。ここは私一人で十分だから」

「えっ、でもミーちゃん一人じゃあ…」

「そつだよ、お前一人なんて無茶すぎるぜ。私も残って戦う」

そう言うロゼッタとエレノアだったがミーシャはあえて冷たい口調
でこう言った。

「バカね、ここであなたが死んじゃったら意味ないでしょうが。」

「さあ、もう行きなさい。私がここまで頑張つてあげてるんだから、
途中で死んだら承知しないわよ」

「ミーシャ…すまねえ、必ず生きて戻つてこいよ」

「ありがとうミーちゃん…絶対に死んだりしないから」

最愛の友の思いを胸に、ロゼッタとエレノアは次のフロアへと続く
通路へ向かつて全速力で走つて行く。…一度も振り向かなかつた、
それが彼女達の信頼の証にも思えた。

「健気だねえ…でもその傲慢さが命取りとなる」

そう言つてサイコが指を鳴らすと、今までただの鉄の塊に過ぎなか
つた機械仕掛けの獣達が一斉に動き出したではないか！サイコの能
力の一つは念動力であり、無生物を意のままに操れるのだ。

「僕が兄さんに魔力の一部を供給しているからこんな大掛かりなこ
ともできるんですよ。…もっとも、本来は亡くなったシユノウザー
様が開発に携わっていた魔力電池で動かす機械兵なんですけどね」
ドリーマーが自慢気にそう補足する。どうやら、この機械兵達はも
ともとエンドラーズに敗れたシユノウザーが残した遺産らしい。

「多勢に無勢と言つたらそれまでだけど…こつちだつて助つ人の2
匹くらいはいるんだから」

ミーシャはそう言つて、いつの間にか床に書いていた魔法陣から召

還獣のワニガワとヤキトリを呼び出した！

「呼び出されてみたは良いが…こいつは随分と不利な条件ですなご主人殿」

ヤキトリが目の前の機械兵の数を数えながらそう言う。

「グルルル…」

ワニガワも頭を低くして威嚇の唸り声をあげる。

「文句言わないのヤキトリ、私だって何でこんなことしているのか分からないのに…とにかく、連中を片付けないことにはどうしようもないよ」

「分からないって…それならどうしてそこまでして仲間を救おうとするんだ？」

ミーシャが辻褃の合わないことを言うのでサイコがそう聞くと、彼女は淡々とこう答えた。

「…それが人間って生き物の一番愚かで美しいところなのよ」

その台詞を皮切りにヤキトリとワニガワが機械兵の群れに突っ込んでいく。機械兵も装備した剣やハンマーで応戦し、いよいよ大乱闘となった。

ミーシャには分かっていた、自分が今していることは自分自身にとつては単に無駄な行為に過ぎないことだと。しかし、それでもやらなくてはならなかった。自身を犠牲にしても守りたいものがあったから…揺らぐことの無い堅い信念が彼女を突き動かしていた。

第五十章 今昔幻想物語・その2「アンビギユアス」(後書き)

まだまだ多くの謎を残した形の展開となりました。謎が解き明かされる一方でまた新たな謎が生まれてくる…この物語はその繰り返しです。全ての謎が解けるのはもつとずつと後のことになりそうです。複雑な人間関係と時代背景が織り成すファンタジーワールドを今後も楽しんで頂ければ作者としても幸いです。

第五十一章 今昔幻想物語・その3「時の綺羅と幻想」(前書き)

いよいよロゼッタとコロツサルの因縁の対決も大詰めです。対決の行方も気になりますが、この小説の「テーマ」である物事に対する登場人物の考え方や感情の行方などにも注目してみてくださいね。きつと、僕らの住む現実世界にも通ずるものがあるはずです。

第五十一章 今昔幻想物語・その3 「時の綺羅と幻想」

「…もうあれから千年も経つのか…変わるものもあれば変わらぬものもあるのだろう」

ロゼリアーヌがそのようにポツンと呟く。気が付いてみれば、薄暗い通路を進むエレノアの横にいた親友はいつの間にか本来の黒髪の美女へと姿を変えていた。

「なあロゼ、お前は本当にこれで良いのか？そりゃあ私はお前の過去はよく知らないけど…コロッサルは仮にも生みの親なんだろう？」

「さあね…わたしにも分からないよ。でもね、もう後には引けないんだよエレノア。一度動き出した運命の歯車はそう簡単には止められない。…例えばそれがこのわたしでも」

エレノアの意味深な問いかけにロゼリアーヌも同じく意味深な答えを返す。もはや何のためにここににいるのか…二人にはそれすらよく分からなかった。もともとハッキリとした目的など希薄だったし、長い旅の間に全てが変わってしまったのだから。世界平和のため、そんなことにはあまり感心の無い二人であるからなおさらだった。

…気が付いてみれば、二人は一枚の扉の前に来ていた。

コロッサル
「奴はこの中にいる。…わたしには分かる」

ロゼリアーヌがそう言い終わるか終わらないかの時、扉が自動的に開いた。中の部屋はかなり広いが薄暗く、少しのパソコンや分析機器が置いてあるだけであった。…しかし、既に彼女の赤い瞳は部屋の真ん中に立つ一人の人物に照準を合わせていた。

「…久しぶりだなアゲハ、実に千年ぶりと言ったところか」

白衣を着た細身で長身の男が不敵な笑みを浮かべながらこちらを見る。短めの黒髪と口髭に白髪がわずかに混じるどこにでもいそうな感じの男だが、エレノアはその姿をTVで何度か見たことがあった。…そう、彼こそが共和国大統領であり千年にもおよぶ赤い悪魔と世界の因果に関わってきた張本人である。

「ああ、久しぶりだねコロツサル。相変わらず…とりたいところだがさすがに年を取ったようだな、白髪も顔のしわも随分と増えたじゃないか。もっとも、千年間も平気で生きられる高等魔族の気が知れないが」

ロゼリアーヌも皮肉たつぷりの笑みと言葉をコロツサルに投げかけた。

「ふふ、ちゃんとお前と一対一さしで会えるように計算して余計な従業員その他に非番を与え、その上で邪魔な取り巻きを足止めするべくアクア達を配置しておいたはずなんだが…どうやら君は運が良いらしい」

コロツサルがそうエレノアの方に視線を移しながら言う。

「なるほどな、それでこんなただっ広い研究施設にも関わらず全然警備の連中や科学者達もいなかったわけだ。それはそれはご丁寧にもどうも大統領閣下。でも悪いけど私達はあんたの思い通りには動かないよ、私達の仲間みんな優秀なんでね…アンタの手下なんかには負けないよ?」

エレノアは施設の警備体制が手薄なことにずっと疑問を感じていたが、その違和感もこれでようやく解けたようだ。

「なるほどな…エレノアと言ったね?この私が察するにここまでアゲハが来られたのは君の活躍が大きいらしいね。アクア達から君の活躍は聞いている。君がああイチの血を受け継ぐ者と言うのも強ち嘘ではなさそうだ。そうでなければ気難しい彼女を従ロゼリアーヌえることなんて到底不可能なことだからね」

コロツサルは以外にも興味津々にエレノアを見ているようだ。まるで先生が生徒に話しかけるような口調でエレノアにそう話しかける。「おいコラ、エレノアにこれ以上気安く話しかけるな…わたしが何をしに来たのか、分かっているんだろ?」

コロツサルの紳士的な態度が気に障ったのだろうか、ロゼリアーヌが明らかにイライラしながら言った。

「…もちろん、この俺を殺しに来たのだろうか?」

「そうじゃねえよクソ親父！殺すのは後だ、その前に聞きたいことが山ほどある。…なぜあの時裏切った？どうしてわたしを殺そうとした？なんでカエサルをも手にかけて？」

「簡単なことだ。お前達は危険すぎた、それだけだ」

「ふざけんやつ！このわたしが何をしたと言っただけだ！？20年間もお前の手足として忠実に動いてきたこのわたしが！」

コロツサルに対してロゼリアーヌが物凄い剣幕で怒鳴り散らす。その迫力のあるやり取りをエレノアはただ息を飲んで見守ることしかできなかった。

「お前は確かによく働いてくれたよ、それは事実だ。…だが、それ以上にお前は俺にとつて脅威だった。お前はもともと賢い娘だったし何より強かった。それがカエサルが人間側に付いたんだから妻であつたお前が人間側に付く可能性も十分に考えられる。だから…：そうなつて俺の計画が潰れる前に殺してしまおうつて、そう考えたのさ」

「サキュバスにそう言われたのか？」

「…なぜそう思うアゲハ？」

「サキュバスがこの世界を狙つて^{ガイア}いるのは昔から知っている。コロツサルは知らないだろうが今でもわたしにお前を殺すように仕向けているんだぜあいつ。…本当はそうなるのが恐ろしかっただけなんだろう？」

何故かロゼリアーヌの物腰がいつの間にか柔らかくなつていた。本人が意識していたかどうかは定かではないが、少なくとも一時的に敵対心が薄れているのは明らかだった。

「…その通りだよアゲハ。俺は確かにサキュバスにお前の危険性を指摘されたのだ。だがそれでもお前に手を下したのは他でもならないこの俺だ。…事実が変わらない」

コロツサルが少しうつむき加減に言う。

「そっか…でも良かった。違っていたらわたし…どうしようかと思つてた」

この時、エレノアはこの二人の親密さを感じていた。互いに憎み合
いながらも心の中ではどこか憎みきれない、そんな心情すら伺えた。
それが例え血の繋がりの全く無い義理の親子でも、共に長い時間を
過ごしてきた表れだろうか。コロツサルがわざわざ彼女と二人つき
りで会いたがるのも無理は無いのかもしれない。

でも、そんな時間は長くは続かなかつた。

「確かにお前はわたしの生みの親であり育ての親であり誰よりも恩
人だ。でも、それでもわたしはお前を殺さなければならぬ。も
はやこの戦いはわたし自身のものではなくなりつつあるから。もう
後には引けない」

ロゼリアーヌが血相を変えてそう冷たい視線でコロツサルを睨みつ
ける。

「そうか…では仕方ないな。俺もここで死ぬわけにはいかないのだ
よアゲハ。…もう少しで世界を我が掌中に収められたのにそれを邪
魔するなんて。どうやらお前の存在は俺にとって最大の壁だったよ
うだ。もう遅いかも知れないが…アゲハ、製作者としてお前を消去
する」

『もはやこの戦いはわたし自身のものではなくなりつつある』…ロ
ゼリアーヌのその意味深い言葉の意味をコロツサルも理解したよう
である。もはや戦うことの意味は当初の憎悪からくる怒りではなく
なりつつあった。

「ちよ…ちよっと待てよロゼ。そんな…どうしてだよ、どうしてそ
こまでして戦わなくちゃならないんだ。これが…これがお前の望み
なのかよ？」

エレノアは戸惑いを隠せない。無理もない、会話の内容にしる雰囲気
気にしる絶対に戦わなくてはいけないような緊迫した状況ではなか
った。確かに彼女にはコロツサルを殺す十分過ぎる動機があるのは
事実。それでも、関係の修復は可能だと考えていたエレノアにとっ
てはシヨツクな展開だった。

「…ごめんエレノア。わたしにはこうするしかないんだ、自らの運

命に抗うことはできない。運命は変えられるってよく言うけど…例えどんなに運命を変えたとしても結果的にはこうなってしまうのだから。…今こそわたしはケジメをつけなくてはならない」

真実を知って決定的動機が薄れた今となっては戦う意味など無い、そのことは彼女自身ロゼリアヌが一番わかっていた。それでも戦う道を選ぶしかなかった、それが運命だと信じていたから。

「心配するな。わたしは負けない、守るべきものが多すぎるから。…さあ、ここからはわたしの戦いだ。後ろに下がっていきたくれエレノア、きつと激しい戦いになる」

「…わかった。私にはお前を信じることしかできない。けれども、お前は一人じゃないってことだけは忘れるなよロゼッタ。…絶対に死ぬな」

ロゼリアーヌに促されるままエレノアは離れた壁際へと後退するしかなかった。

…思えば初めてロゼッタの封印を解き放った時から運命の歯車は再び動き出したのかも知れない。だとすればその引金トリガーを引いたのは自分とゆうことになるのではないか？そんな考えがエレノアの脳裏を過ぎる。それなのに自分は最愛の友人として彼女の過酷な運命を何一つ変えてやることができなかつた…そんな後悔の念がエレノアの心を締め付ける。唯一の救いと言えば、彼女自身が運命を悲観せず、に多少は受け入れたことくらいだろうか。

「…準備は整ったようだな。では始めようかアゲハ、生死と未来を賭けた戦いを…！」

そう言うのとロツサルは見る見る間に巨大な化物モンスターへと姿を変えていく。その細長く巨大な体は薄い水色で体中から粘液が滴っている。首の辺りからは何対かのエラのような突起が飛び出し、目の無い面長の顔にある大きな口とそこに並ぶ白く鋭い牙が異様に目立った。しかし、手足はその巨体に似合わず小さく華奢で飾り程度にしか付いていない。その何とも奇怪な姿は蛇とサンショウウオを足してちよっとアレンジを加えた感じと言ったところだろうか。

「まさかこの姿をお前に見せることになるとはな…夢にも思わなかった」
完全に異形と化したコロツサルが鎌首を擡げながらロゼリアーナの頭上から不気味な声でそう言った。

「ああ…わたしもお前の正体がこんな化物だったとは夢にも思わなかった」

コロツサルの変わり様にさすがのロゼリアーナも息を呑む。

「な、なんて醜い姿なんだ…コロツサルの正体は両生類のお化けだったのかよ…」

離れた壁際から遠巻きに見ていたエレノアの額から汗が滲んだ。部屋全体に生臭い臭気が漂い、辺りは異様な空気に包まれる。…戦いの火蓋は切って落とされた。

「シャアアアーツ!!!」

コロツサルがその細長い体を伸ばしてロゼリアーナに喰らいつこうと大口を開けて襲い掛かる!

「ちっ…!!」

ギリギリのところでもコロツサルの攻撃を見切ってジャンプでかわすロゼリアーナ。しかし、着地と同時にコロツサルが身を翻して再び襲い掛かる!

「コイツ…視力はないが振動や音で相手の位置を把握することができなのか…?!」

変身後のコロツサルには目が無い。したがって視力も皆無なはずだが攻撃は正確に彼女に向かってきている。つまり視力以外の、例えば相手が動いた時の音や振動を敏感に感知して攻撃目標の位置を判断していると彼女は踏んだ。

「要するにいくら逃げても無駄か、ならばこっちから仕掛けてやる！」

そう言って彼女は間髪入れず右手から赤味を帯びた光線を放つ。光線は一直線にコロツサルの顔面にヒットし爆発と共に灰色の煙が部屋中を包み込んだ。

「うつ…くつ、なんて野郎だ…これが魔力の違いかよ」

爆風に吹き飛ばされないように身を屈めながらエレノアがそう呟く。これほど強力な攻撃を短時間で繰り返せるのは圧倒的な魔力を誇る彼女だからこそ成せる技であることをエレノアはよく知っていた。

それと同時に、爪や牙を使わずに最初からビーム攻撃を繰り返したのが彼女の本気である証拠とゆうことも。

「…いや、まだだな」

ロゼリアーヌがぼつんとそう呟く。その言葉通り煙が晴れるとその中から無傷のコロツサルが姿を現した。

「ククク…残念だったなアゲハ、俺はそう簡単にお前の攻撃は受け付けない」

コロツサルが鋭い牙を剥き出しにしてそう言った。

「（そうか…奴の体中から出る粘液は特殊攻撃を無効化するのか。」

危険だが接近戦に持ち込んで物理攻撃を仕掛けるしかなさそうだな）

瞬間にコロツサルに特殊攻撃が効き難いことを悟ったロゼリアーヌは鋭い爪を振りかざしてコロツサルに飛び掛る！しかし、コロツサルは巨体に似合わない素早い動きでその攻撃をかわし細長い体をくねらせて彼女の後ろ側に回り込む。

「しまっ…」

ロゼリアーヌが次の行動に移る暇も無く、気が付いたときにはコロツサルが華奢な彼女の体にその太い胴体を巻きつけていた。…まるで大蛇が獲物を締め付けるときのように。

「まったく…未だにお前の考えが理解できんよアゲハ。絶大なる力、そして半永久的な若さと美しさ…誰しもが望み羨む物を持っているお前がなぜ人間のようなくならない生き物の助太刀をするのだ？…人間の味方なんぞしなければこんな苦しみを味あわずに済んだものを…」

そう言っつてコロツサルはきつく胴体を締め上げた。

「ああっ…ぎゅぐゅ…」

体中をきつく締め上げられたロゼリアー又は苦しそうに顔を赤らめ歯を食いしばる。反撃しようにも、内臓が押しつぶされそうで声を出すことすら儘ならない。

「お前は昔からそうだった。傲慢で意地っ張りで…しかし本当は臆病でいつも何かに怯えていた。そうさ、お前は孤独を恐れ何かを失うことを恐れ憎んだ。…だがもうそれらを気にすることは無い、死ねば全て忘れる」

苦しむロゼリアー又には追い討ちをかけるように彼女の肩にコロツサルが躊躇無く噛み付いた！多数の鋭い牙が彼女の肉に食い込み骨を砕き、鮮血が噴出し滴ると同時に激痛が彼女を襲う。

「うあああああああ…！！！」

腕が食い千切られそうな痛みにとまらずロゼリアー又は悲鳴をあげる。その悲鳴も辛うじて搾り出すような声で悲鳴と言うよりはむしろ呻き声に近かった。

「フッフ、痛いか？そうだろう、だがお前が殺してきた奴らの痛みはこの程度ではあるまい」

コロツサルは噛み付いた口をいったん彼女から離してそう言ったあとさらにこう続けて言う。

「…お前が独りでどう足掻こうが運命も世界も何も変わりはないのだよ。それにお前の存在はこの世界にとって脅威以外の何物でもない。お前が死んで初めてこの世界は本来の姿となるのだ」

「黙れ…黙れよクソ野郎が。勝手にこのわたしを作っておいて最後にかける言葉がそれかよ…ふざけんな、運命とか世界とか勝手なこゝとぬかしやがって…だったら生きてお前が言うことが本当なのか否か確かめてやるっ！」

大量の出血で意識が朦朧としながらも、コロツサルの言葉に怒り心頭のロゼリアー又は最後の力を振り絞って思いっきりコロツサルの白くて柔らかい皮膚に噛み付いた！

「グアッ！」

不意を突かれたコロツサルは思わず締め付けていた力を弱めた。そ

の隙間からまるで人形のように力無く落ちたロゼリアー又はそのまま硬い床に叩きつけられるが、すぐに起き上がってコロツサルから大きくしなやかなバツクステップで距離をとった。

「はあはあ……」

激しく息切れするロゼリアー又。コロツサルに噛み付かれた右肩はもはや原型を留めておらず、右腕が不自然にぶら下がっている。肩から胸にかけての損傷に加えて出血も激しく、彼女の意識は朦朧としていた。

「く……そつ……わたしは……わたしは負けるわけにはいかないんだ……生きる喜びを、人生の楽しみを再び知ってしまったから……もうこれ以上わたしから大切なものを奪うなあああ……！」

彼女は大きく息を吸い込んだ後、燃え盛る炎を口から吐き出した！しかし、無情にもコロツサルに到達した火柱は水気を帯びた彼の粘膜によってあっけなくその勢いを失い白い煙と共に消えてしまう。

……そもそも、炎属性がベースの彼女が水属性のコロツサルに勝てるはずがなかった。

「無駄なことを……可愛そうに、何かを愛おしむことは罪なことなものだ」

そう言つてコロツサルは口から凍りつく息を吐き出す！無数の鋭く小さな氷の欠片が彼女の皮膚を傷つけ、突風のような冷気に吹き飛ばされた彼女は壁に叩きつけられた。

「ぐはっ……あ……」

壁に叩きつけられた彼女はそのまま力なく床に倒れこむ。痛みと寒さが彼女の体力と気力を大幅に奪い、もはや立ち上がるのさえ困難な状態だった。

「勘違いするなよアゲハ。お前は常に独りだ、誰かを理解することも誰に理解されることもない。……それがお前とゆう生き物だと、創造主である俺からそう言っておこう」

そんなことをロゼリアー又に語りかけながらコロツサルはその巨体を引きずって徐々に彼女に近付いてくる。そして攻撃範囲の射程ま

で来たところで一度止まり、彼女の頭上からこう言うのであった。

「最期に一つ…お前は俺が裏切ったと言っていたがそれは違う。裏切ったのはお前の方さアゲハ。なぜならば俺は誰よりもお前のことを愛していたから…お前はその愛を裏切った。そう、例えばお前が生きようが死のうが裏切りの罪は消えんのだよ。だから…せめて悩み苦しむことのないように永遠の眠りにつくがよい。…フフフ…ハハハハツ！死ぬっ、ロゼリアー又！！」

コロツサルが首を高く擡げその鋭い歯の並んだ大口を開ける。

「（嫌だ…まだ死にたくない…恐い…死にたくない）」
噛み殺されることを覚悟しながらもまだ死にたくない気持ちで一杯のロゼリアー又は恐怖で震えながら目を閉じる。しかし、そんな気持ちもよそにいよいよコロツサルが彼女の頭に噛み付こうと頭を下げた。

…その時であった、

「永遠の眠りにつくのはお前の方だコロツサルッ！！」
ドゥーン！ドゥーン！ドゥーン！

…エレノアの叫び声と共に重たく乾いた銃声が部屋中にこだました。エレノアの愛銃^{マグナム}から放たれた三発の銃弾は全てコロツサルの頭部を突き抜け、エラの一部を吹き飛ばし大量の鮮血が中に舞う。

「ギヤアアアアアアアアアアアアア！！」

頭を撃ち抜かれたコロツサルはこの世のものとは思えない悲鳴をあげながら床に地響きをたてながらひれ伏した。さすがに急所を銃で撃ち抜かれてはのた打ち回って反撃する暇さえない。

「…はは、やっぱりこうなるか…エレノア…ありが…とっ…」
コロツサルが頭から血を噴出して倒れる様子を見届けたロゼリアー又はそのまま気を失ってしまった。

「ぐ…はあ、バカな…この俺がこんな小娘なんぞに…」

「やっぱりな、特殊攻撃に対しては無敵でも物理攻撃に対しては特

に強いつてわけでもなかったようだね」

息も絶え絶えのコロツサルにエレノアが歩み寄りながらそう言った。そう、さっきの戦闘で攻撃をほとんど避けなかったコロツサルがロゼリアーヌの爪による攻撃をあえて避けたことでエレノアはコロツサルの弱点が物理攻撃であると予想したのである。事実、その考えは正しかった。

「手を出すなみたいなことをロゼに言われてたから黙って見ていたけど…さすがに目の前で親友を殺されるには耐えられそうにない。ロゼには悪いけどピリオドは私が打つことにする」

エレノアがマグナムの銃口をコロツサルの脳天に向けながら憂鬱そうな表情で言う。

「…ピリオドだと？何を戯けたことを言い出すかと思えば…。所詮、この俺を殺したところで世界は何一つ変わらんよ。少しばかり恐怖による支配が先延ばしされるだけのこと。お前達のやってきたことは全ては無駄な足掻きに過ぎなかったのさ。残念だが…俺を殺したところでお前達の負けは変わらん…フッフ…ハハハッ、アハハハハハ…貴様らは単なる哀れな…」

ドウンツ！

銃声と共に銃弾がコロツサルの脳天を貫く。…そして、その瞬間コロツサルは永遠に亡き者とされたのである。

「…バカ野郎、そんなんじゃない。私はただ、ロゼッタ彼女にこれ以上罪を犯させたくないだけだ。…ちくしょう…」

…シャアアアアアアアアアア…

さっきの戦闘の騒ぎのせいだろうか、突然に火災防止用のスプリンクラーが作動し天井から大量の水が雨のように降り出す。

「なんでだよ…なんでこうなっちゃったんだよ…果たしてこんな結末を誰が望んだのだろうか…私は…私はこんなことのために旅をしてきたとも言っただろうか…解らないよロゼ…」

コロツサルとの勝負には勝ったはずなのに、どうしてもエレノアは腑に落ちなかった。コロツサルの最期の言葉…あれはまるで自分達は最初から負けていた、そんな意味にすら聞こえた。この先に何か待ち受けているとでも言うのだろうか？…それは今の彼女達には分かるはずもない。

降り注ぐ細かな水滴が作り出す水溜りと血液で床は真っ赤に染まっていた。そして、その真っ赤な水溜りに映った自分の泣き顔を見てエレノアは思ったのである…本当に人は何かを失わなければ幸せになれないのだろうか…。心に満ちるのは勝利の喜びではなく、悔しさと悲しみが入り混じった複雑な感情だった。

…しかし、エレノアは涙を拭うとこんなことも呟く。

「…そうさ、未来なんて不確定なものなんだ。だから幸せになるとは限らない、でも不幸になるとも限らない。何も悩み苦しむことなんてしなくて良いんだ。私はただ…私達の未来と可能性を信じて行動すればそれで良いんじゃないのか？…でなきゃ生きている意味は無いよな、うん」

気が付けばエレノアの顔にかすかな笑みが戻っていた。どんな時でも明るい未来や希望を信じることの大切さを彼女エレノアは自分なりに学び、解釈してきた。…そしてそれが間違っていないかったことを今ここで確信したのである。

…そして、最後にエレノアは天を仰いでこんなことを嬉しそうに言った。

「あははっ、私達は何も負けちゃいないじゃないか。だって…私もロゼッタもまだ生きているんだから」

第五十一章 今昔幻想物語・その3「時の綺羅と幻想」（後書き）

《コロツサル》

ロゼリアーヌ（ロゼッタ・アゲハとも）の生みの親。魔界ブルートの四天王の一人とされ、バイオテクノロジーが専門分野である。長年に渡ってこの世界ガイアの支配をもちろんできたが、千年前の時にはロゼリアーヌが赤い悪魔と化しその暴走で失敗している。その正体は体が蛇のように細長い巨大な両生類であり、水系の魔物で炎や電気などの特殊攻撃に対して強い。あまり好戦的な性格ではなく、支配は力ではなく頭脳で行う典型的な参謀タイプ。部下に対して優しい面もあり、実はとつても良い人らしい。

第五十二章 今昔幻想物語・その4「終焉のプレリユード」(前書き)

一つの終わりはまた何かの始まりに過ぎない…そんな表現は良く使われます。言い換えれば、何が始まりで何が終わりなのかを定義付けることはナンセンスです。何故ならば森羅万象、つまり全ての事柄は何らかの形で輪のように繋がっているのですから…。

第五十二章 今昔幻想物語・その4「終焉のプレリユード」

…人はいつも底知れぬ暗闇に翻弄される。今、わたしの目の前に広がるこの暗闇もわたし自身の力ではどうすることもできない。しかし、同時に暗闇は心の救いになることもある。耐え難い憎しみや悲しみが心に突き刺さっても暗闇がその苦痛を見えなくしてくれからだ。わたしはいつもそうやって暗闇の持つ魔力に身をゆだねてきた。そして今も…

「…おい、おいロゼ。大丈夫か？」

ロゼツタが静かに目を開けると、そこには緑の髪と瞳をした見覚えのある顔があった。

「ん…ノアちゃん…」

朦朧とする意識の中、ロゼツタは座ったエレノアの膝の上に頭を乗つけて仰向けになっている自分のことをようやく認識した。そして意識が少しずつ回復してゆく過程でいつの間にか少女の姿に戻っていることも。

「そつか…わたし生きてるんだ。それに…最後の最後に助けられちゃったね、ホントは自分自身でケジメをつけるつもりだったのに…」

ロゼツタが視線をエレノアから逸らしてそう言った。意外なほどロゼツタの記憶にはコロツサルと戦った記憶が残っていないかった。感情の向くまま翻弄された結果なのだろうか、とにかく気を失う前のことに関してはさほど何かを想うこともない。ただ、すぐ横で息絶えているコロツサルの亡骸だけがこの戦いの結果を物語っていた。

「いや、その…なんて言ったら良いのか…これがお前自身の戦いだつてのは重々承知だったさ。けどな、目前で親友の死を易々と見ていられるほど私は…んっ」

エレノアがそこまで言ったところでロゼツタが優しくエレノアの口

に手の平を当てて口を塞ぐ。

「…もういいんだよノアちゃん。全ては終わった、もう何も思い残すことは無い。千年の因縁の鎖から開放されたんだ、結果はどうであれ。…ありがとう、わたしはもう大丈夫だから」

ロゼツタが笑みを浮かべて言う。…でも、その眼は泣いていた。

本当はロゼツタにも色んな思いが、言いたいことがあったに違いない。しかし、過ぎたことについてどんなに考えても言っても時間ときが取り戻せるわけではない。辛い過去を背負い、それを払拭しようとした拳句の納得のいかない葛藤と結果：怒りや悲しみを超越した混カ沌オスと感情が彼女の中に渦巻いていた。それでも今、自分が生きていくだけで幸せだと思いたかった。この心の傷が一生癒えることのないことを悟り、悲劇を心の引き出しの奥深くに閉まって生きていくとそう誓ったのである。そのことをエレノアも何となく理解したに違いない。

「…ああ、そうだな。もう終わったんだ。これからは自分の信じた道を生きていけるさ」

エレノアがそうロゼツタに優しく語り掛けた。

「ふふ、そうかも知れないね。…もう疲れちゃったよわたし、難しい話は後にしよう。今はただ何も考えず眠りに…」

全てが終わるすっきり安心したのか、ロゼツタはエレノアの膝の上で再び気を失う。でも、その口元には確かな微笑があった。

「やれやれ、何もこんな所で眠らなくても…やっぱりこいつは私がいないとダメだな」

そんな愚痴を言うエレノアであったが、その顔には晴れ晴れしい笑顔が浮かんでいた。彼女ロゼツタの心の傷は決して浅くは無い、体の傷のようには治らないかもしれない。それでもエレノアはロゼツタの心の痛みを少しでも和らげようとそう自分自身に約束した。それが親友としての自分の役割だと信じて止まなかったから。笑顔はその役割を自分が果たせる自信の表れだったのかも知れない。

「…あらら、まさかコロツサルが殺られるなんて。どうやら私は今から完全に自由行動みたいだねこりゃあ」

その聞き覚えの無い声で場の雰囲気はガラリと変わる。エレノアがびつくりして顔を上げると、少し離れたところに一人の少女が立っていた。

「お前は…!？」

「人は私をレクイエムともスマレとも呼ぶね。まああえて後者の呼び名を推奨するよ、うん」

エレノアの問いに少女はそう答えた。レクイエム…エレノアにはその名前に聞き覚えがあった。

「レクイエムって…確か政府の作り出した最終兵器とか何とかじゃ…」

「まあ、表向きはそんなところだね。実際にはコロツサルの趣味の作品に過ぎないけど。もう少し深く言えばお姉ちゃんカスタムバージョンの改良品つてところかな？」

そう言つて彼女スマレはエレノアの膝の上に横たわるロゼッタを指差す。

「…お姉ちゃん？お前、ロゼとは一体どうゆう関係なんだよ。ロゼに妹がいたなんて聞いてないぞ？」

急にそんなことを言われても、エレノアにはさっぱりだ。

「そりゃそうだよ、お姉ちゃんだって私の存在はまだ知らないんだから。…ま、いずれ分かることなのかも知れないから細かい話はあえて今はしないでおくよ」

スマレはそう不適な笑みを浮かべる。その紫水晶アメジストのような透き通った瞳はまるで全てを見透かすかのようだった。

「お前…」

「ふふ、そんなに恐い顔しないでよ。そうだ良いこと教えてあげる身構えるエレノアに対してスマレはこう続けて言う。

「コロツサルはね、自分が死んだ時のためにある仕掛けをこの施設全体にしたんだ。自分の研究を外部に漏らしたくない研究者としての性でさ。…そう、自分の魔力が途切れると地上の大統領府もろと

も研究施設が爆発するようにね！」

「は！？何だつて！まさかいくら何でもそんな馬鹿な……」

エレノアがそう言い終わるか否かその時だった、上の方から大きな地響きが伝わってきた。

…ズズズズズズズズズズーン！！

「！！！」

「…これでもまだ信じられない？もう起爆装置が作動して上の方から順次爆発しているんだ。あと数十分もすれば最深部のここも無かつたことになる」

爆発音に恐れ戦くエレノアに至つて落ち着いた様子でスマレは告げた。さらにはこんなアドバイスも。

「そうそう、壊されるのは下層のエレベータータームまで。君達が侵入に使った図書館の秘密の入り口までは完全に爆破されならしい。今から急いで来た道を戻ればもしかしたら助かるかもね」

「ちょ…待てよ。こんな時に言うのもなんだが、どうしてそこまで親切に色々教えてくれるんだよ？お前は私達の敵じゃないのかよ！？」

エレノアがそう聞く。当たり前だ、さっきからのレクイエムの行為はまるで自分達に生きろと言わんばかりだから。

「残念だけど味方ではないよ。でもね、今は死んでもらっちゃ困る。ゲームの駒は多い方が面白い…サキユバスがどう動くか楽しみだ。ま、いずれ分かることだよ。じゃ、そろそろ私は別の脱出口から出るとするよ。ちゃんと生きていたらいずれまた会うことにしましょエレノア、そしてお姉ちゃんも…」

スマレは不敵な笑みでそう言い残した。気が付けば、いつの間にかエレノアの視界からスマレは消えていた。エレノアはまるで幻術にでも掛かった気分だったが今はそんなに色々と考えている暇は無い。とりあえず呑気に膝の上で眠っている口ゼツタを叩き起こす。

「おい起きろロゼ！悪いが寝ている場合じゃねえぞっ！」

「うっん…なあにノアちゃん？妊娠でもしたの？」

ロゼツタが寝ぼけ眼でそんなことを言う。

「そんなわけないだろうバカ！早くここから脱出しないと爆発しまうんだよっ！」

「…え！？そっか、コロツサルめ。相変わらず手の込んだ仕掛けを…分かった！早く逃げよう」

エレノアのただならぬ様子と経験からか、事態の重大さを飲み込んだロゼツタは飛び起きる。傷口はだいぶ塞がっていたが、回復に魔力を使ったせいなのだろうかいまいち動きにいつもの切れがない。

「走れるかロゼ？」

エレノアが心配そうに聞く。

「大丈夫、人工生物は頑丈なのが取り柄だからね」

ロゼツタが笑って答える。こんな時にでも冗談を言えるほど余裕を保てるのはエレノアを信用してのことかも知れない。

「よっしゃ、来た道に戻って早いところ地上へ出るぞ！こんなところで死んでたまるか」

「おっけー、急ごうノアちゃん！」

ここからは時間との勝負、二人は急いで来た道に戻る。

その道中、エレノアの脳裏にはずっとスマレの言葉が浮かんでいた。そして隣を走るロゼツタとスマレの横顔が重なる…生きてここから出られたらこのことを話すべきか否か、わずかではあるがずっとそんなことを考えながら出口を目指していた。

《決着！》

…ズズズズズズズズズーン！！

「な、何事でござるか！？」

ベンケイがそう驚く。突然の大揺れにエフェクトの三人とシャクマの戦いは一時的に止まった。天井や壁には無数の亀裂が走り細かい瓦礫が頭上から降り注ぐ。

「これは…まさか研究所の自爆装置が発動したんですわ。噂には聞いていたけど本当に爆発するなんて…」

エリーは驚きながらもそんな状況説明をする。地下研究所の存在と自爆装置の噂はエフェクトのメンバーも知っていたが、まさかそれがこのタイミングで爆発するとは夢にも思わなかったのである。

「まずいわね…こうなった以上さっさと逃げ出したいところだけど肝心の彼がそうはさせてくれないみたい」

マーベラスがそう言う理由はシャクマの動向にあった。このままでは確実に瓦礫の山に埋まる運命の中でシャクマは一步もその場を譲らない。下手に背中を向けて逃走を図れば攻撃の的となるのはシャクマの鋭い眼光を見れば分かった。どうやら、シャクマは自らもろともエフェクトの三人を道連れにするつもりのようなのだ。シャクマから言わせれば今までの戦闘のように互いの攻撃が相殺し合う様な場合、相手を倒すにはピッタリのシュチュエーションなわけである。

「…仕方ないよね、本当は反則技なんだけど。エリー、ベンケイも先に出口に向かって走って。アレを使う」

マーベラスの表情が急に恐くなる。

「アレってまさか…無茶でござるよマーベラス！」

「悪いこと言わないからおよしなさいマーベラス、そんなことしたら…！」

「でも他に妙案は無いよ。大丈夫、その辺はなんとかなる」

マーベラスは静止を促すエリーとベンケイをそう短い言葉で納得させる。

「絶対に無茶は禁物でござるよ。…頼んだでござるよマーベラス」

「ちゃんと加減はしなさい。あなたを待っている人がたくさんいるんだからね」

エリーとベンケイはそう言うと同時に背を向けて出口に通じるエレ

ベーターに向かって走り出す。

「ギシャアアアアー！！二・ガ・サ・ン！！！」

それを見ていたシャクマは猛り狂ったように背を向けた二人に突進してくる。しかし、その前にマーベラスが立ち塞がった。

「この際だから最期に言っておくわ、私はアンタみたいな変に紳士ぶっている男が大嫌いだってね！！…煉獄の炎で昇華せよ、フラッシュ・バツク！！！」

マーベラスが両手をかざすと凄まじい熱風が続いて灼熱の炎をまとった爆発が一瞬でシャクマの体を包み込み霧状の体を構成していた分子を全て焼き尽くす！！黒味を帯びた地獄の炎がまるでシャクマの体と断末魔を飲み込むかのように燃え盛り、同時に周りの天井や壁もが真っ赤になってドロドロに溶け出し崩壊を始める。

「うっ…この技は魔力消費が激しい上に密閉空間では酸素を一気に消費、さらには壁や天井をも破壊するから簡単には使えないんだよね」

そんな独り言を細々と呟きながらマーベラスは急いで二人の後を追いかける。彼女がその場を離れると同時に天井が大崩落し、シャクマは火達磨のまま大量の溶けた瓦礫の山に埋もれてしまった。…皮肉にもここが彼の墓穴となってしまうたのである。

《決着2》

…ズズズズズズズズズズーン！！

「…どうやら自爆装置が作動したようですね。このタイミングで爆発とは私もまだ運が良い」

リンリンが額の冷や汗を拭いながら不敵な笑みを浮かべる。

目の前の床には4体のキメラの骸が無造作に転がっていた。つい今しがたイブキ達の手によって葬られた連中である。リンリンの予想

とは裏腹にイブキ達の戦闘能力やチームワークは非常に優れている。4体もキメラはそれほど時間も掛からないうちに倒されてしまった。そんな状況下に晒されリンリンが焦っている最中の爆発音と振動だった。

「あわわわ…今度は一体何なのよ!？」

手裏剣を片手にイブキは驚き慌てる。

「研究所の自爆システムが作動したんですよ、もうじきこの場所も焦土と化すことでしょう。…要するに主であるコロツサル様がお亡くなりになったと言うことですが」

リンリンが親切にもそう説明した。

「おたくのボスが殺されたつてのに随分と冷静なんですね？」

ココアがそう聞くと、

「そりゃあ残念極まりないですけど、研究者とゆう生き物は研究費さえ出してくれれば誰でも良いのですよ。幸い、もう次の融資者が名乗りをあげてくれています」

リンリンはニッコリ笑ってそう言った。

「何よそれ、感じ悪い女」

信頼や絆と言った人情に近い関係を重んじるイブキがそう怪訝な表情をする。彼女が生まれ育ったジパングでは主人を裏切るとは死ぬことよりも恥とされているが、国が違えば文化も考えも異なることを改めて思い知らされる。

「そ、それより早くここから脱出しないと…皆さん生き埋めになっちゃいますよ！」

エリオットが顔を真っ青にしてそう言った。でもそれは正論である。「エリオットの言う通りだ、今はここから逃げることを最優先にしよう」

シロもそうエリオットに賛同する。彼の口の周りの白い毛はキメラに噛み付いたときに付いた血で真っ赤に染まっていた。

「わかったよシロ。…でもその前にリンリンとか言ったね、一つ忠告しておきたいんだ」

イブキがそうリンリンの方を見る。そしてこう言った。

「私は科学者が嫌いだから言うけど、全てを科学の力で制御しようと考えないことね。いつか必ずその罰当たりな行為の報いは返ってくる。」

「…その言葉、心に深く刻んでおきましょう。そして、いつかその言葉が偽りであることを証明して見せますよ。ふふふ、それでは私はこれで…」

イブキ達にそう意味深い台詞を告げると、リンリンは床板を一枚剥がしてその穴へと飛び降りた。…どうやらこの施設には秘密の通路が幾重にも張り巡らされているようだ。しかし、それを探している暇はイブキ達には無い。

「さあ、僕たちも早く逃げましょう。さっき来た道を戻ればきっと大丈夫です」

エリオットがそう言った。こうして三人と一匹は急いで来た道を引き返すことになる。

《決着3》

…ズズズズズズズズズズーン！！

大きな地響きを伴った轟音がミーシャ、そしてサイコ・ドリーマー兄弟達のいる空間に響き渡る。

「な…何が起こっているの？」

流星のミーシャも突然の異変に動揺しているようだ。

「くそ…コロツサル様が負けたと言うのか…もう引き上げ時なようだドリーマー」

「そうですね兄さん、無念ですが…」

サイコとドリーマーが顔を見合わせてそう残念そうに話す。

「ちょっと、今の話は本当なの？コロツサルが死んだってことは…」

「ああそうだよミーシャ、お前のお友達が勝ったってことさ。…今この場で戦う意味はもう無い。俺達の役目もひとまず終わりってことだな」

ミーシャの質問にサイコがそう強い口調で答えた。気が付けばこの戦いで互いにボロボロになっていた。機械兵のほとんどはスクラップ状態になり、ミーシャや召還獣達はもちろんサイコ達兄弟も傷付き魔力を消耗しきっていた。…考えてみれば、このタイミングでの停戦は適切だったのかも知れない。

「そっか…ロゼッタとエレノアが勝ったのね」
正直、ミーシャは身震いした。

「残念ですが僕たちの負けも等しいです。…でも、全てが終わったわけじゃない。それだけは忘れなください…」

ドリーマーがそう意味深な言葉を言い終わるか終わらないかの間に兄弟は霧のようにミーシャ達の前から姿を消した。部屋には機械兵の残骸と静寂だけが残される。

「…今の台詞をどのように思われますか？」
だいがボロボロになったヤキトリがそうミーシャに尋ねた。

「さあね。ただの負け惜しみと捉えるかそれとも…。とりあえず今日はご苦労様、あなた達はゆつくり休んで」

ミーシャがそう言いながら指を鳴らすとヤキトリとワニガワは煙のように消えていった。それとほぼ同じタイミングで背後から何者かの聞き覚えのある声ミーシャが彼女の名前を呼ぶ。

「おい、大丈夫かミーシャ？」

「ミーちゃん！生きてる〜？」

「…まあね。とりあえずその緊張感の無い呼び方はやめてよ」

ミーシャは駆け寄るエレノアとロゼッタにそういつもの冷静な口調で言う。

「そう言うなって。それより怪我してるみたいだけど…大丈夫か？」
エレノアがそう聞くと、

「大したことないわよ、ちょっと服が破けただけ。それよりもさっ

きの凄い音は何？いや、むしろコロツサルが死んだって…」

ミーシャが逆にこう聞いてきた。

「コロツサルは死んだよ。あの野郎、自分が死んだらこの施設ごと吹っ飛ぶように仕掛けをしていたんだ。早くティーちゃんを拾って出口までいかないとしき埋めになっちゃう」

ロゼッタがそう簡潔にミーシャの質問に答える。

「そう…そうゆうことだったの。わかった、とにかく今は急ごう」
ミーシャが大まかな状況を飲み込んだところで、三人は急いで列車に乗り込む。運転手役のエレノアがレバーを大きく傾けると列車は勢い良く走り出した。列車の中にも後方から施設が崩壊するような不気味な音が響き渡るのが分かった。…もう残された時間はわずかしかないことを感じずにはいられない。

《決着4》

…ズズズズズズズズズズーン！！

もの凄い地響きが辺りに響き渡った。

「ああ…コロツサル様…残念です、最期に私が力になれなかったことを謝りたかったです」

その爆発音が何を意味するのかアクアは知っていた。

「お、おい。一体何が起こっているんだよアクア？」

長い沈黙から急に悲しそうな表情をするアクアにティティスが困惑しながらも尋ねる。

「…コロツサル様が赤い悪魔に負けたのよ。その拍子にコロツサル様が亡くなった時に全ての研究結果を抹消するために仕掛けられた自爆装置が作動し始めたんだ」

「！」

「ふふ、そう驚かなくても今から来た道を戻れば間に合うわよ。さ、

行きましようか？」

そう言つてまだ状況を飲み込めていないティティスの腕をアクアが引つ張る。

「は！？ちよつと待て、なんで俺がお前と一緒に逃げなきゃなんないんだよ？」

「なによー、私と一緒に不満なの！？」

アクアがちよつと怒つてそうティティスに言つた。

「いや、別にそうゆう意味では…俺はその前にエレノア達を待つてなきゃならない。それに主人が死んだのに切り替えがちよつと速過ぎはしないかい？」

ティティスはそんな率直な意見をアクアに言う。するとアクアはこつ静かに答えた。

「実は…もしかしたらこうなるかも知れないとゆうことは前からコロツサル様に聞いてたんだよ。あのお方は非常に賢明だからね。

要するに今回のことも想定の範囲内、何も驚くことじゃあないつてこと」

「なんだつて…それじゃあ、コロツサルは自分がロゼッタに殺されることを初めから予測していたつてゆうのか…！？」

驚くティティスにアクアはさらにこつ付け加える。

「そうよ。あのお方は最初からあなた達の動きも結果的にこうなることも全て予測していたんだから。…それにこれからどうなるのかもね」

それを聞いたティティスはただ愕然とするしかなかった。自分達がここまで頑張つて切り開いてきた道が、実は相手側の思惑通りの筋書きを辿つていただけだったなんて…例えコロツサルが死んでもそれは自分達の勝ちではなく引分ドコ、下手をすれば自分達の負けなのかもしれない。

「まあ、流石に残された私達部下にどーこーしろとまでは言い残さなかつたけどね。…元気出しなよ、生きているだけで幸せだよアンタは」

アクアはそう言ってティティスの肩を叩いて慰めてあげる。彼は気が付いているのか否か微妙なところだが、アクアが以前から彼に単なる好意を超えた感情を抱いていることだけは確かである。

「確かに：お前の不幸に比べたら何も落ち込むことはねえよな」

ティティスも何故かアクアの慰めに納得した様子。

そんなことをしているうちに二人のいるホームにももの凄い勢いで電車が入ってくる。電車が急ブレーキにも近い感じで停車すると、中からお馴染みの三人組が転がるように降りてきた。

「ハアハア：おいコラ！なあに二人してのんびりしているんだよつ、早く逃げんぞ！」

エレノアが電車から降りてくるなりそう怒鳴る。正直、ティティスとアクアの距離が異常に近いことが気に食わないだけのようなのだが。

「やあエレノア、それにロゼツタも。まずはおめでとう、これで晴れて目的は果たせたわけだ」

アクアが電車から降りてきた三人に向かってそう挑戦的な言い方を
する。

「そりゃあどうも。こっちはもう嬉しくてね、危うくイツちゃいそ
うになったよ」

ロゼツタがそう下ネタを交えた皮肉で返す。

「冗談ごっこはそこまでよみんな。：こっぴつた以上、もう私達と
戦う気は無いんでしょアクア？」

アクアはちゃんと事情を知っていると踏んだミーシャが冷静にそう
尋ねる。

「ええ、もちろん。立ち話をしている暇はないし。悪いけど他に出
入り口が無いから図書館に続く秘密の出入り口まで私も一緒に行か
せてもらうよ」

そう言いつてアクアは隣のティティスの手を握りながらエレノアに
ウィンクしてみせる。

「ぐぐ、こんな時じゃなければとっくに撃ち殺してやりたい……」

「まあまあ、抑えて抑えてノアちゃん」

本気で悔しそうなエレノアをロゼツタがなだめる。

「…とにかく、もう時間が無い。後は生きて地上に出られたらゆっくり続きをすれば良いわ、もう行きましよう」

ミーシャのこんな冷静な一言を合図に五人は急いでエレベーターを目指す。

その道中、ティティスはずっとアクアの『それにこれからどうなるのかもね』とゆう言葉が引っ掛かっていた。仮にコロツサルが自分達の行く末を予測していたとすればそれは何を意味しているのか…何か嫌な予感がティティスの脳裏を過ぎり続けた。

第五十二章 今昔幻想物語・その4「終焉のプレリユード」(後書き)

世の中には思いもしなかった展開が待ち受けていることが多々あります。他人が何を考えているのか、それは最後まで分からないものです。自分ではその人を理解しているつもりで実はそうでもなかったり…案外、人と人の繋がりとはいんなものなのかも知れません。

第五十三章 今昔幻想物語・その5「tomorrow」(前書き)

過去のトラウマを吹っ切るのは誰にとっても容易なことではありません。しかし、それを乗り越えて初めて成長することができるとも考えられます。過去と未来をどう上手く繋げていくか…そんな試行錯誤を繰り返すのが人生なのかも知れませんか。

第五十三章 今昔幻想物語・その5「tomorrow」

「…ねえ、ノアちゃん」

「なんだよロゼ？」

「良かったんだよね、これ以上どうしようもなかったんだよね？」

「ああ…きつとそうだと信じるしかないだろうよ」

ロゼッタの問いかけにエレノアは視線の方向も表情も変えないでそう答える。

地下の秘密の研究施設から爆発前に脱出した一行は図書館を出てすぐのところでも多くの通行人達と共に爆発・炎上しながら崩壊していく大統領府の姿を遠巻きに眺めていた。どうやらあの仕掛けは真上の大統領府もろとも消し去るように設計されていたようで一行が図書館の秘密の出入り口から出てきた時にはすでに外は大騒ぎになっていたのである。

「やれやれ大事になっちゃったわね。本国に帰ったら何と報告すれば良いのやら」

イブキがそう悩ましげな表情を浮かべていると、

「あら、私なんて上司を殺されて明日からどうすれば良いのか教えてもらいたいよ」

アクアがそう皮肉をこめた横槍を入れる。その作り笑顔が何処か切なかつた。

「明日ね…生きてりゃ何とかなるって話か」

ミーシャがそう呟く。彼女なりにロゼッタやアクアを気遣ったの言葉だつた。

しばらくの間、野次馬と共に一同は目の前の惨劇を眺めていた。しかし、大騒ぎする民衆とは対照的に当事者の誰もが静かだつた。色々と考えることが多過ぎたに違いない、それだけは明らかである。

「これはこれで良かったのかも知れないね。わたしは生みの親を殺した、それだけを見ればバッドエンドだけど…全体的な流れを見れ

ばハッピーエンドに等しい、少なくともわたしが生きてる時点でね」
ロゼッタがそんなことを言う。口元は笑っていたがその赤い目には
薄っすらと涙が浮かんでいた。

「ハッピーエンドね、私にはバッドエンド以外の何物でも無いけど。
さて、こんな所においても無駄だし私はそろそろ行くよ。…身辺整理
が忙しくなりそう」

そう言っただけで何処かへ去ろうとするアクアにティティスが思わず声を
かけた。

「アクア、その…上手くは言えないけど元気だな。…またそのうち
会えたら良いな」

「…ふふ、心配しないで。こう見えても精神的にはタフだから、あ
りがとね」

そう健気な笑顔を見せるとアクアは野次馬に紛れて消えていった。

「なんか可愛そうだなあいつ…大丈夫かな？」

エレノアがそうアクアの行く末を案じる。恋のライバルであり敵側
であっても何気にちよっとした友人関係ができつつあったからであ
る。

「さあな、分からねえよ。あいつを信じることしか今の俺たちには
できない」

ティティスはそう答えるしかない。この戦いで誰が幸せになったの
か、そう考えるとティティスは少し後悔していた。しかしその問い
かけは胸の奥深くにしまっておく他無い、戦いが終わった後にその
意味を問うことがどれだけナンセンスでありタブーであるかを彼は
知っていたから。

「これで私達は完全に失業ってわけか…もっと貯金しとくんだった
よ」

「そんな呑気なことをよくもまあ平気で言えることねマーベラス。

…まあ、そのくらい能天気な方が精神の健康には良くてよ」

深刻な空気の中で呑気な発言をするマーベラスにエリーがそう言う。
しかし、もう過ぎたことを悔やんでも仕方がないのはこの場にいた

誰もが本当は分かっていた。肝心なのはこれからなのだ。

「失業でござるか…では仕方ないでござるな。拙者は一度ジパングに戻るとするか」

ベンケイが冷静な口調で言った。

「私も師匠と一緒に国ジパングに戻るよ。あ、もちろん落ち着いたらまた会おうね」

イブキがそう念を押して言うのはどうやら仲間意識の表れらしい。

「必然的に俺も帰ることになるわけだ。エリオットはどうするんだ？」

「僕ですか？まあ…この際ですから一度実家に戻りますよ」

シロの質問にエリオットはそう答えた。

「みなさん揃いも揃って里帰りですか。確かにこの混乱が収まるまでしばらく静かにしていた方が得策かも知れませんが。私もエントラーズ様の墓前に一部始終を報告しに行きますよ」

ココアがそう述べる。とりあえず全員が里帰りしてこの混乱が収まるまでは静かに身を隠す、場の空気と言うか方向性はそんな感じになったようである。

「…だつてさ、エレノアはどうするの？私は悪いけど自分の元の家に戻る気は無いよ。あなたが決めてちょうだい」

そうミーシャが言う、どうやら彼女はエレノアの行き先に付いて行くつもりようだ。そしてもちろんこの人も。

「残念ながらわたしの故郷はもう無いに等しいからね、ノアちゃんがわたしの心の故郷だもの」

そんな洒落の効いた台詞をロゼッタが言った。

「え、ああ…そりゃあ私は里帰りなんかしないさ！前みたいにまた三人で旅したって良いし私にはきつとそれが似合ってるんだと思うよ。でもさ…その…なんて言うか…」

エレノアはそう言って恥ずかしそうにティティスの方を見つめる。

「え、俺？いや、一緒に行きたいのはそうなんだけど…姉さんを一人にするわけには…」

ティティスの視線はエレノアとマーベラスの間を行ったり来たり。するといい加減二人の様子を見かねたマーベラスがティティスにこう言った。

「私のことはいいから一緒に行きなさい。…あの娘にはあなたが必要なんだから」

「姉さん…」

この一言で全てが決まった。ティティスはエレノアのもとに歩み寄る。

「まさかこんな長い付き合いになるとは夢にも思わなかった。でもな、やっぱり俺には君が必要みたいなんだ。…その…これからもよろしく頼むよ」

そう照れくさそうに彼は言った。

「うん、私もまたティティスと一緒に旅ができて嬉しい。…ありがとう」

エレノアも頬を染めて嬉しそうに応えた。

「はあ…良いね恋って」

その様子を見ていたミーシャが思わず呟く。

「そうだね。誰かを愛することの大切さはあの二人が証明なのかも知れない…」

ロゼッタはそう言った。でも、いつものようにエレノアを茶化すようなことはしなかった。楽しげに話す二人の姿をロゼッタは優しい眼差しで見守る。

「…生きてて良かった、本当に」

そんな言葉がロゼッタの口から自然とこぼれた。

《展開を見つめる者》

「コロッサルめ、洒落た仕掛けをしてくれるじゃないか。科学者っ

てのはだから嫌いなんだ」

炎と煙に包まれる大統領府を人気の無い公園から見ていたサキュバスがそう愚痴をもらす。

「要するにロゼリアーヌが勝ったんですね、これで良かったのですか？」

「ふふ、案ずるなマリア。全ては順調だよ、これで私の目的を妨げる邪魔者が一人消えたのだからね。…ロゼリアーヌには感謝しないと」

マリアの質問にサキュバスはそう不敵な笑みで答えた。サキュバスはまるでこうなることを初めから分かっていたかのような表情である。この場所にだってついさつき着いたばかりだと言うのに…付き添いで付いてきていたマリアにはそんなサキュバスの全てを見通したような態度が不気味に思えてならなかった。

「さてと、これでこの世界に留まる理由は無くなった。後は向こうに戻って予てからの計画を実行する準備をせねばな。ああ、闇の香炉は魔法使い協会にでも預けようか。結局、封印解除には至らなかったし…もう少しやる必要があるからね」

サキュバスの計画…この時、その存在と計画の恐ろしさを知るものはまだ少なかった。

《心の整理・過去との決別：背負うべき十字架》

真夜中、星明りだけが地表を照らす世界…シランドからほど近いカプチ湖の畔に赤髪の少女がいた。友人達が宿でぐっすり眠っている間、明日からの新たな旅立ちを前にある誓いを立てるために。

「もう終わったんだよね。…でも全てが無くなったわけじゃない」
そうロゼッタはかつて夫に貰った赤い首飾りを手に取りそれに語りかける。

「わたしは罪を犯し、そしてまた罪を重ねた。不思議だよ、罪を償うことだけがわたしの使命だとずっと信じていたのにね。…でも、やっぱりその考えは違ったみたい。今までの旅を通して学んだよ、わたしが過去に縛られていたんじゃない…わたし自身が自らを過去に縛り付けていたんだって」

そう言う手と手に握っていたその赤い首飾りを思いつきり湖に向かって投げた。首飾りは遠く離れた湖面に着水し水の波紋が星明りを反射し輝きながら大きく広がる。

「さよならカエサル、わたしの愛した人。これからは自分の幸せと未来を探す旅に出るよ。わたしはもう逃げない、十字架を背負ってでも生きることが誇りに思うから…」

そう言い残すとロゼッタは真っ赤な翼を広げて空高く舞い上がった。目下に見える湖が段々と小さくなっていく様を見ながら、彼女は風を切ってエレノア達のいる宿を目指す。

…彼女の流した涙が流れ星のように空に散っていきました…。

第五十三章 今昔幻想物語・その5「tomorrow」(後書き)

とりあえず一区切りが付きそうな展開であり、また新たな旅の始まりを予感させるような展開でもあります。過去と現在、そして未来…… 壮大なスケールは世界の広さだけではなく時間軸の広さも重要な要素だと考えております。登場人物の時間軸にも注目してみるとよりいっそう面白いかも知れません。

第五十四章 番外編 魔法デパート（前書き）

《とある宿屋の一室》

「あーあ…雨の日の宿屋ほど退屈なことあったらありやしない」

とある宿屋の一室、降りしきる雨を窓ガラス越しに見ながらエレノアが恨めしそうに呟く。確かに、宿屋の中には大して面白いものなど何もないから彼女がそう言いたくなるのも無理はない。エレノア達四人は例の一件が片付いてからしばらくの間はほとぼりが冷めるのを待つために人気の少ない田舎を転々と旅していた。その道中、立ち寄った宿屋で暇を持て余していたのである。

「まあまあそう言わずに。ノアちゃんもティーちゃんみたいにゲームでもすれば良いのに」

「うーん…あんまり気分じゃないんだよな、今みたいに別室にこもってTVゲームに熱中しているティティスにはどうにも近付き難い」
ロゼッタの言葉にそうエレノアが苦笑いした。

「…なんだか暇そうねお二人さん、よかつたら買い物にでも行く？
あまりにも暇そうな二人を見かねたのだろうか、珍しく上機嫌のミーシャが一枚のそこそこ大きな布切れを持ってやってくる。」

「何？それ？なんか書いてあるけど」

「魔法陣だよ、魔法デパートに行くためのゲートを開くためのね。」

…じゃ、行きたい人はこの上に乗って目を瞑ってね」

そうエレノアの問いに答えると、ミーシャは説明もそこそこに魔法陣の書かれた布切れを床に広げた。

「へえ、面白そう！わたしは行くよー」

「置いてけぼりはごめんだぜ、ロゼとミーシャが行くなら私も行くさ」

場の流れでミーシャを筆頭に三人は魔法陣の上に足を踏み入れる。全員が目を瞑り、ミーシャが何やら呪文を唱え始めると眩い光と共に

に何処かに落ちていくような不思議な感覚に彼女達は包まれた…！

第五十四章 番外編 魔法デパート

《魔法デパート》

「…もういいわよ」

そうミーシャの声が聞こえる。エレノアとロゼッタが恐る恐る目を開けてみるとそこは別世界だった。

「こいつはスゲエな…」

「ほえー、広いねー。天井が見えないや」

辺りを見回した二人は目を丸くしながら言う。無理もない、今自分達が立っているのがデパートの中だとは思えないくらいに明るく広々とした空間がそこにあっただからだ。両脇にはたくさんのお店が軒を連ね、その列が何処までも永遠と続いている。上を見上げればそこは吹き抜けとなっていて、ロゼッタの言う通りその天井を見ることができないほど永遠と上層が続いていた。そしてその中を様々な格好をした人々が歩き回っている。まさに果てしなく広がる超巨大シヨッピングモールワールドである。

「ここはね、いわゆる異世界パラレルワールドのものなの。だからここがどのくらい広くてどのくらいのお店があるのか誰も知らない。それにいつも店の数も位置も変わるからね。この世界には色んな別の世界から様々な人達がやってくる。ここでは世界の違いなんて関係ない、ただ一つ言えるのはみんなこの世界にとっての住人であり客であるってことだけかしらね」

ミーシャがそうサラッと解説するが、あまりにスケールの大きい話なのでちよっとしっくりこない。

「そう言われれば出入り口とか窓も一切無さそうだし…世界そのものだから外とか中って規格は通用しないか」

エレノアがそう頷きながら内容を整理しようと一生懸命に独り言を呟く。

「ねえ、あれは何なのミーちゃん？」

ロゼッタが近くの店の脇に立つ黒いローブをまとった人のようなものを指差す。勘の鋭いロゼッタはそれが人間ではないことを本能的に察知しているのか、誰なのかでは無く何なのかと尋ねたのだ。

「ああ、アレには近付かない方がいいよ。知っている人はアレを死神とか皮肉を込めて呼ぶんだけどね、要するに一種の法律だよこの世界の。ここで悪さをする死神に粛清されちゃうんだ。しかもアレは察しの通り生き物じゃないから殺せない、つまり絶対に勝てない。だから誰もここじゃ強盗や万引きをしようとは考えないわけだ」

「ふーん、じゃあ万が一犯罪を犯したら？」

「…噂じゃ生気を吸い取られてミイラみたいにされて殺されるって話」

ミーシャがそうロゼッタに不敵な笑みを浮かべながら脅かすように言う。

「うわ、意外と物騒な所だな。銃刀法違反とか大丈夫だろうな…？」

エレノアがそうガンホルダーを気にしながら言った。

「どうせ当たらないから平気だよノアちゃんの場合は」

ロゼッタがそう冗談を言う。

「あのな、そう言うノーコン発言はやめろよ。せめてそこは貧乳ネタで攻めてくれ」

予想に反した新しいロゼッタの冗談発言にエレノアはちょっとだけ動揺した様子。いつも一緒にいるだけあって急に変わった態度を取られると反応に困ることはよくあることだが。

「ま、とにかく買い物しようか。とりあえずこの辺で何か面白いお店でも探しましょう」

ミーシャがそう場を仕切る。何せこれだけの広さ、店をなるだけ多く見回すためには時間の有効利用は欠かせない。比較的慣れしているミーシャを先頭に三人の仲良し少女達はこの不思議な空間で買い物をすることにした。

《シャルル魔法不動産》

「それじゃ、まずはエレノアとティティスの将来を見据えて不動産とでもいけますか」

ミーシャがそう言いながら一軒の店の前で足を止めた。小奇麗なその店の看板には『特別な住まいをお探しの方に、シャルル魔法不動産』と書かれている。

「ちょ、別にティティスと私が結ばれる前提で話すなよ。そ、そりゃあ嫌じゃないけど……」

「クスクス、ホント素直じゃないんだからノアちゃんは」

顔を赤らめるエレノアを見てロゼツタは笑わずにはいられない様子。店の中にはショーケースに入ったミニチュアハウスが綺麗に並べられ、何人かの客がそれを見ていた。ある者は真剣な眼差しで、ある者は羨ましそうにショーケースの中身を眺める。店の主人と思われる人物はカウンター近くのテーブルで何やら客と契約を交わしているのか忙しそうに話していた。

「わーっ、ねえねえこの家なんて素敵じゃない？あ、こっちも良いなあ〜」

店に入るなりロゼツタはショーケースに張り付くようにして楽しそうにはしゃぐ。その無邪気な姿はごく普通の女の子と何も変わらない。

「ただのモデルハウスの展示じゃないよ、展示してあるミニチュアハウス自体が商品なんだ。…要するにいつも使っているドールハウスを取り扱う店であの家もここで買ったんだよね確か」

ミーシャがそう説明する。なるほど、確かに一緒に売っているオプションの家財道具等も全てミニチュアサイズだ。

「ああ、ノアちゃんにピッタリの家があった。子沢山の人にオススメだって、12人までOKだってさ」

「おいおい、私は一体何人の子供を産めばいいんだよ！」

ロゼッタにエレノアがそう恥ずかしそうに言った。処女の私に子作りの話などそうそうするもんじゃない、エレノアは本当はそう言いたかったのかも知れないが。

「まあまあ、実際に買うわけじゃないんだからいいじゃない夢くらい見させてあげても。値段を見れば夢も覚めるわけだしね…」

そう言ってミーシャは近くに置いてあったカタログを差し出す。ロゼッタとエレノアがカタログの値段のところを見ると、そこには桁を数えるのが嫌になるような価格が記されていた。

「…ごめんノアちゃん、やっぱり子供は4人くらいが適切みたい」「いや、だからそーゆー問題じゃないだろロゼ」

ロゼッタの感覚のズレにはさすがのエレノアもお手上げである。現実離れた値段を目の当たりにして少々テンションの下がった三人は大人しく店を出ることにした。ただでさえこれまでの無茶な長旅で資金難だと言うのにそう簡単に高い買い物はできない。

「やっぱさー、もっと現実的なお店に行こうよ。そうだ、わたし新しいシャンプーが欲しい」

いつものように思いつき任せにロゼッタが言う。でもその提案は今の状況を考えれば適切かも知れない。

「まあ日用品ならある程度の量を買っても平気か。ドラッグストアにでも行くか？」

エレノアがそう提案すると、

「賛成だね。その前に移動しなきゃいけないけど…ちょっと付いてきて」

そう言ってミーシャは歩き出す。言われるがままに二人が付いていくと、通路の端に書かれたマンホール大の魔方陣に案内された。その魔方陣はこの世界に来た時のものに少しだけ似ている。

「この世界の中を移動する時には各フロアに点在するこの魔法陣を使うの。これを使えばあとは最も適した行き先に勝手にワープしてくれるわ。ささ、乗って乗って。…あ、度々で悪いんだけど目を瞑るのだけは忘れないで」

ミーシャがそうめんどくさそうに手早く説明した。

「はあ、便利な所だなホント」

感心と不思議が半分ずつ混じったような表情でエレノアが言った。とりあえずこれまたミーシャに言われるがままに三人が小さな魔方阵の中に身を寄せ合って立つ。三人が目を瞑ってミーシャが何やらブツブツ唱え始めると、先ほども感じた宙に浮くような不思議な感覚になると同時に目の前が一瞬真っ白になった。

《ワースドラッグストア》

「…さ、もういいわ」

ミーシャに促されエレノアとロゼッタが目を開けてみると、そこには先ほどとは雰囲気も全く違った店が軒を連ねていた。気が付けば、すぐそこにドラッグストアの看板があつてたくさんのお客がその店の自動ドアを潜っていた。

「ありやま、もう目的地かい」

エレノアがそう言う。誰だつてこつ瞬間移動すればそんな反応になる。もつとも、あまり細かいことを気にしない大胆不敵な性格の三人はそのままごく自然な様子で店に入っていくのだが。

「いらつしゃいませー」

レジカウターの若い女性の店員がそう優しく声を掛けてくる。当たり前前の光景も変な店の多いこの世界では新鮮だ、そうミーシャは思った。

「んー…なんだか変な色の薬ばっかり並んでるねココ」

商品棚に所狭しと並ぶ怪しげな薬品のボトルを見てロゼッタが顔をしかめる。

「そりゃあ魔法の世界だもの…普通の商品の方が珍しいのよこじやあ」

ミーシャがそう言った。

「そう言えば、ミーシャって薬品とか使うのか？ 魔女って不気味に笑いながら変な薬を大鍋で混ぜているイメージなんだが」

「ずいぶんな偏見ねエレノア…確かに昔はそんなこともやってたかも知れないけど今はそんな古典的なやり方は流行ってないよ」

エレノアの古典的で何の曲折も無い偏見にミーシャは苦笑いするしかない。

「ねーノアちゃん、ついでにこれも買っつけていこうよ」

いつのまにかシャンプー片手にロゼッタが持ってきたのは…妊娠検査薬だった。

「…あのさ、私何か悪いことでもしたのかな？」

「ううん別に、未来への投資だよね一種の」

やや本気で怒るエレノアに対してロゼッタは慣れた様子でそうサラリと答える。確かにロゼッタの冗談も強ち間違いではないような気もしなくはないが…。

「ああ、そう言えば飲むだけでバストアップする妙薬とかあったっけ？」

ミーシャがそう思い出したように言うと、

「なに！？ そんな女神のような薬があるのか！」

急にエレノアがその話に喰いついた。

「…あ、もちろん冗談よ。そんなに世の中甘くないんだから」

「え…あ、そう…」

してやったりの表情のミーシャ。一方エレノアは怒るに怒れない、逆に話しに本気で乗ろうとした自分が恥ずかしいのか顔を真っ赤にして俯いてしまった。ミーシャのジョークにはロゼッタの冗談とはまた違ったシニールさがあるようだ。

「ふっ、まあいいさ。世の中には大器晩成とゆう言葉があるのだよ諸君」

エレノアがそんなことを言うので、

「まーたわけの分からん開き直りを…そもそもことわざの意味が違うよそれ」

「きやはは、ノアちゃんの国語は赤点だね」

そんな調子で三人は顔を見合わせて笑った。どんな内容の話でも最後は笑いに繋げてしまふのが三人の凄いところと言えそうなのかも知れない。

「それでだ、次の行き先なんだけど向かいの店がちよつときになつてな…どう思う？」

エレノアがそうガラス越しに見える通路を挟んで反対側の店を見ながら言った。看板には『つるべ屋』と書かれ店先には何やら見たことのない小動物の皮を剥いだ肉塊が無造作に吊るしてある。どうやら料理が趣味の彼女エレノアにとっては何故かそれが素晴らしい食材に見えた様子。

「ノアちゃんが行きたいならわたしも行く」

「オカルトの店…つてわけじゃないか。別に良いんじゃない」

得体の知れない肉の塊が吊るしてあつてもこの二人ロゼッタとミーシャにしてみればそう驚くことではないのか、そう快くエレノアの提案を承諾してくれた。

ドラッグストアのレジでロゼッタが買ったこれまたよく分からない香りのシャンプーの清算を済ますと、三人は自動ドアを潜って向かいの精肉店と思しき店に言ってみることにした。

《つるべ屋》

「これなんだろうねノアちゃん、爬虫類みたいな臭いがするけど」

「さあな、見た目はともかくソテーにでもしたら美味そうだが」

店先に並ぶ見たこともない動物の生皮を剥いだ肉塊にロゼッタとエレノアは興味津々の様子。

「…ちよつと私にはキツイかも、グロイ…」

対するミーシャは視線を肉の塊から逸らす。どうやらミーシャは鼻を突く生臭い臭いが苦手なようだ。軒先に限らず店には所狭しと様

々な肉が陳列されている。客は三人しかいないようだが『予約承ります』の張り紙を見る限りそこそこ繁盛しているようである。

「やあ、いらつしゃいお客さん。何か探しものかい？」

三人が店の前でウロウロしているうちに奥の方から店主らしき人物がひよつこり現れた。その人物は人間ではなく、真つ黒い子供くらいの背丈をした人型の塊で黄色い真ん丸な瞳を持ち真つ白いコック風の帽子と服をしている。無論、三人にとって見れば相手が人間でないことは大した問題ではないようだが。

「いや、ちよつと気になってね。なんですかこの肉：と言うか動物は？」

そう言つてエレノアは軒先にぶら下がっている生皮を剥がされた動物を指差す。

「ああ、それね。それはビーツって小動物だよ、バスバロナクつて世界にたくさんいる美味しい獣なんだ」

そう店の主人は答える。その顔は無表情だが声のトーンから何となく機嫌の良さを窺うことができた。

「そうなんですか。じゃあせつかくだし一匹いただきますよ」

「まいどー。ビーツはシンプルに焼くのが一番美味しいよ、グリルとかソテーとかね」

店主はエレノアからお金を受け取ると慣れた手付きで袋に入れたビーツを渡してくれた。

「せつかく来てくれたんだし、もうちよつと見て行かない？君たちには特別に良い物を見せてあげたいんだけど…」

気を良くしたのか、店主はそう良いながら店の奥のほうにある扉を指差した。好奇心旺盛なエレノアはその提案を喜んで受け入れるつもりだった。しかしエレノアが『ハイ』のその一言を発する前に今まで黙っていたロゼッタが急にこんなことを言い出す。

「ダメだよノアちゃん、ミーちゃんの気分が優れないみたいだし…もう行こうよ」

そう言つてロゼッタは何故か両手でそれぞれエレノアとミーシャの

腕を掴んで店の奥に入ろうとする二人を半ば強引に引きずり戻そうとする。

「いや…別に私は平気なんだけど…」

本当はミーシャも店主の言う『良い物』が見たかったのだが、ロゼッタの手はそれを許そうとしない。

「あーっ、もう！分かったよ、行かないから手を離せってロゼ。…

あはは、それじゃあ失礼致します」

ロゼッタに根負けしたエレノアは店主にすまなそうに会釈する。エレノアとミーシャはちよつと複雑さと気まずさが混じった感情のままその場を後にするが、ロゼッタだけは一瞬ではあるが店主を一睨みしてからその場を立ち去った。一連のロゼッタの行動が何を意味するのか二人には理解できなかったが、まあいつもの彼女の気紛れ程度にしか思わなかったのである。

「…あーあ、行っちゃったかあ。もうちよつとだったのになあ…あのくらいの若い女の子のお肉は高値で売れるのに。あれだけ愛想良く振舞ってみても見破られることもあるんだよね、あの赤い娘には完敗だよ」

店を離れていく三人の背中を見つめながらつるべ屋の店主はそう呟く。

「それにしてもなんであの赤い娘は店の奥の扉の向こうが肉の処理部屋だつて分かったんだろう？部屋から漂う人間の血と肉の臭いで…いや、まさかね。きつとまぐれさ、次に来た時には必ず捌いてみせるよ」

そう言っただ店主は後ろ手に隠していた巨大な包丁を眺めて笑うのでした。そして最後にこう後悔の一言。

「こんなことだったらビーツの売値をもっと高くしておくんだつた…」

《おやつ休憩》

「当たり前の話だけどき、きつとこの世界は一生掛かっても全てを
みることはできないだろうな」

エレノアがソフトクリームを食べながらそう言う。三人はちよつと
したフードコートテーブルに座り軽食を食べながら休憩をしてい
た。さすがに体力自慢のエレノアやロゼッタも慣れない所では疲れ
が溜まるのが早いようである。その一方で、物珍しい体験を通して
会話に花が咲く。

「まあそれに関しての話なんだけどね、この世界と私達の世界では
時の流れが全然違うの。時の流れはこっちの方がずっと速いから、
私達が向こうに帰っても実際には数分程度しか経過してない。逆に
言えば私達の世界の一日はこっちの世界の数百年から数千年分に相
当するから、今見ているこの風景はもう二度と見られない。…まあ、
簡単に言っちゃうと逆浦島太郎みたいなものかしらね」

途中で説明がめんどくさくなったのか、ミーシャはそんな微妙な例
えを出してコーヒーを啜る。

「要するにわたし達がどんなにのんびりしていても夕食までにはテ
ィーちゃんを待たせることも無くお家に帰れるってわけだよ」

一人だけがつつりラーメンを食べるロゼッタがそう箸で宙に円を描
きながら言う。

「その通り。…もう一つ言っておくと私はここにしょっちゅう来る
けどあなた達がそれに気が付かないのはさっき言った時の流れの差
のおかげってわけ」

ミーシャはそう珍しく得意気に言った。きつと時間の使い方が二人
よりも上手いことを自慢したかったのだろう。…それからしばらく
間を空けて、ミーシャがいつもよりもさらに上の空でこんなことも
言った。

「でも不思議なものね…今までは一人で自由気ままに行動すること
こそが私の幸せの全てだったのに、今じゃあそれも果たしてどうな

のこなつてそう思えちゃうんだから。昔の私だつたらあなた達と一緒にシヨッピングするなんて考えもなかったでしょうね」

「あー、なんかその気持ち解る気もする。私も最初の頃の一人旅と今とじゃ感覚がまるで変わっちゃったからな」

何か思い当たる節でもあるのだろうか、エレノアがそう話す。

「良いんじゃないの、わたしは今のみんなが好きだし今のわたしが好きだよ。楽しいし、困った時にはみんなで助け合えるから」

ロゼッタが屈託の無い笑顔で言った。

「まあ、世の中には最後に自分を救えるのは自分自身だけなんて言葉もあるけど…言われてみればあれは教訓と言うよりは単なる僻みとも取れるわね」

ミーシャがそういつもの調子で皮肉る。その言葉の裏では自分が今まで助けてもらった数々の出来事を彼女なりに思い出していたのかもしれない。

それからしばらく無言の時間が続いた。三人は各々の飲み物や食べ物や口にしながらもその瞳は何処か遠くを見つめているようにも見える、きつと何か複雑な思いで考えごとでもしていたのだろう。

「…さあて、次は何処に行こうか？」
ハンバーガーを食べ終わったエレノアが沈黙を破るようにそう言った。

「そうだねー、せっかくだから洋服屋さんにも行かない？」

「まあ…オーソドックスだけでも悪くはないね」

ロゼッタの提案にミーシャはそう賛同する。女の子三人で行く店としては悪くない。

「じゃあ決定だな、私も丁度新しい服が欲しかったんだよな〜！んじゃ、ちゃっちゃと行きますか」

いつもの調子でエレノアを先頭に三人はフードコートを後にして目的の店を探すことにした。

年も経歴も全く異なるこの三人がこれだけ親しくなれることがどれ

だけ奇跡的なことが、彼女達は知らないしそれがかえって彼女達の絆の源なのかもしれない。

《特別な部屋》

「えへへー、どう？似合う？」

「ああ、もちろんさ。基本的にロゼは何を身に着けても可愛いと思うよ。」

とある服屋に寄った帰り道、黒いニット帽を自慢するロゼツタにエレノアがそう言う。確かに、赤を基調とした彼女に黒いものはアクセントとしてよく似合っていた。

「それにしてもなんでホットパンツばかり着も買ったのエレノア？…次の旅先は南国だったっけ？」

「え、あ…そ、それは…」

急なミーシャの質問に何故かドギマギするエレノアの横からロゼツタが容赦なくこう突っ込む。

「違うよミーちゃん。実はノアちゃんに頼まれて聞いたんだよ、もしたらティーちゃんが脚フェチ…」

「わーわーわーっ！！次の目的地はうんと暑いところにしようかなっ、ああそうしよう！」

慌てたエレノアは周りの人が振り向く位の大声とオーバーアクションで何とかロゼツタの台詞を阻止した。まさか試着室の中で下半身ばかり気にしていたなんて恥ずかしくて口が裂けても言えない。

「…？」

エレノアのそんな様子を見たミーシャはただ首を傾げるしかなかった。

「それにしても下着とかもけっこう買ったよねーわたし達。暇だし後でティーちゃんを審査員にして三人でランジェリーのお披露目会でもやるうか？」

「アホ、そんなんで優勝しても微妙だぜ」

ロゼッタの冗談に対してエレノアも半分冗談で返す。洋服にしる下着にしる、普段から未開の地を探検しそこで遭遇するザコモンスター雑魚敵との戦闘等の荒行事をこなす三人にとって見ればけっこうな消耗品である。数回も着れば長い方で下手をすると一回着ただけでポロポロになることもしばしばだ。だから買える時にはある程度まとめて買うようにしている。

…そんなことを話しながら歩いていくうちに三人は移動用の魔法陣の前に到着した。この時、三人の中ではもう宿屋に戻ることは決まっていた。ミーシャは少々申し訳無さそうにお決まりの台詞を言う。

「じゃ…そろそろ帰ろうか？くどいけど、いつも通りと言うかね」

三人は先程からと同様に目を瞑り体が宙に浮くような不思議な感覚が収まるのを待つが、何だかいつもよりも少しだけそれが長かったような気がした。やがて不思議な感覚が収まったのでもう宿屋の自室に着いたものだとばかり思っただけで目を開けた三人は目の前の光景に驚くこととなる。

「…は？なんだよここは？」

エレノアが思わずそう言ってしまうのも無理はない、目の前には見たことのない空間が広がっていたからだ。

「ありやまあ、博物館か美術館みたいなところだね」

こうゆう時に意外と冷静なロゼッタが周囲を見渡してそう言う。三人が辿り着いた空間はロゼッタが例えた通り歴史ある由緒正しき博物館のような高貴で独特の雰囲気か漂っていた。ただっ広いホールの中には様々な展示物が綺麗に並べられており、高い天井からは大きな飛行機や動物の骨格標本が吊り下げられている。

「間違いない…噂には聞いたことがあるがまさか生きている間に見ることができるとは…」

「お、おいミーシャ、ここは一体何なんだよ？」

普段は死んだ魚の目よりもやる気のないミーシャの青い瞳がまるで海のように輝く様を見たエレノアは少し驚きながらもミーシャにそ

う尋ねた。

「選ばれし者だけが入ることを許された特別な部屋だよ。魔法デパートを初めて創った人が趣味で集めていた品が納められている空間って噂で…まあ一種のコレクションルーム兼VIPルームってところ」

「選ばれし者…？」

「その辺はよく分からない、でも噂じゃ世界に何らかの多大な影響を与えたかこれから与える人物ってことらしい。…いずれにしろ、ここに来れることはとても名誉なことだけは確かだね」

首を傾げるエレノアにミーシャがそう重ねて説明した。もともと、ミーシャにもなぜ自分達がこの空間に招かれたのか全く理解できなかったのだが。

「それで、その創始者って誰なの？」

ロゼツタがそんな素朴な疑問をミーシャに尋ねる。

「それがねえ…よく分かってないのよ。何処の誰かは愚か何の目的でこの世界を創ったのかも。ただ…一説には遙か遠い昔に物凄く高位の魔術師があるチャリティーの一環として創ったらしいとは言われているけど本当のところは誰にも分からない」

根拠の無い推測を嫌うミーシャだが、遠慮がちにそう答えた。要するに今となつてはこのデパートの存在自体が謎と言うわけである。せっかくなので三人は各々にこのコレクションルームを見学することにした。品数は多いが想像よりも空間自体の奥行きが無かったのと、そもそも展示物にさほど興味を持てなかつた物が数多く合ったこともあつてか意外と早く見学会は終わった。

しかしエレノアとミーシャが早々に展示物に飽きた頃、ロゼツタだけは何故か一枚の白黒写真の前で足を止めその写真を複雑な表情で見つめていた。

「ん？どうしたんだロゼ？…誰だこの人？」

エレノアがそう尋ねながら近付くがロゼツタは答えない。壁にかけられたそのさほど大きくは無い写真には凜々しく精悍な顔付きの女

性が笑顔で映っていた。写真の下には『時の勇者』と書かれたプレートが張ってある。

「…うふふ、まさかこんな形で再会するなんてきつとお互いに想像もしなかっただろうにね。勇者だなんて大袈裟だよって生前のあなただっただら笑って言うかも」

「…??？」

まるで写真の人物に親しげに話しかけるようなロゼッタの行動にエレノアはただ首を傾げるしかなかった。ただ、ロゼッタだけはその写真の人物が誰なのかを知っていたことには間違いない。

「さて、もう気は済んだかしら？…最後に面白い催し物があるみたいだけど」

ミーシャが二人に歩み寄りながらそんなことを言った。

「面白い催し物って？」

「さつき出口となる魔法陣の前で見つけたの。…まあとにかく来てよ」

ミーシャはエレノアの質問に対してそう答える。正直なところ、ミーシャは早く帰りたくて仕方がなかったようだ。ミーシャに言われるがままに三人がその魔法陣のところまで行ってみると、『お帰りはここから』と書かれた立て札の横にある机の上に一冊の分厚く古めかしいノートが置かれていた。

「ははあん、どうやら来客帳みたいだな」

エレノアがそのノートをパラパラと捲りながらそう言った。紙面には様々な言葉で様々な名前が綺麗に隙間無く書き込まれていて、それがここに来た人達の唯一の痕跡であることは確かだ。

「ここに名前を記すことが名誉だと言われているから驚きだけど…実際に見てみると歴史の重みを感じるわね、半永久的にその名前が刻まれるんですもの」

無関心なミーシャもこの来客帳の価値はそれなりに理解している様子。

「本当に大事なものは目に見えないし形に残らないとも言っけどね、

まあ書いて損はないから良いけど」

ロゼツタはそんなことを言いながらも既にその来客帳にペンを走らせているから驚きである。エレノアとミーシャもロゼツタに続くようにして来客帳に名前を記した。ただ、三人とも普段から呼び合っているいわゆる『愛称』的な名前を記す。そう、誰もフルネームを書かなかった。それが意図的なものなのかは定かではないが、三人の生い立ちがいかに複雑で紆余曲折的なものであったかを物語っていた。少なくとも、三人にとっては過去の生い立ちも本当の名前も人物評価に大事な要素ではない。

「ロゼツタ、エレノア、そしてミーシャ：履歴書だったら間違いないNG扱いだね」

ミーシャが三人の名前が刻み終わった来客帳を見て苦笑いする。どうやら彼女には誰一人としてちゃんとした名前を書いていないことくらいお見通しのような。もちろん、自分も含めて。

「ま、これで私達も何故かは解らんが英雄の仲間入りってことだな。向こうに帰ったらティティスの野郎に自慢してやるっ」と

エレノアがそんな冗談を言いながら笑う。彼女の場合、ファミリィネームは既に捨てたも同然だったから別に後ろめたいことは何も無い。

「ふふ、それが良いわね。：それじゃ、もう帰りましょうか。またいつでも連れてきてあげるから」

ミーシャのその台詞に促されて三人は魔法陣の中に足を踏み入れてスタンバイする。そんな時、ロゼツタがこんなことを呟く。

「今日はすっごく楽しかったね。：でも、楽しい時間っていつもあつと言う間。そう考えるとなんかちよつと悲しいな」
するとエレノアがこう一蹴り。

「バーカ、何言ってるんだよロゼ。そりゃあそつかも知れないけれど：時間ってのは有限だからこそ価値があるんだよ、長けりゃ良いつてもんでもないのさきつと。今を大事にすればこそつてな」

「ノアちゃん：そうだよ、明日のための今日じゃないもんね」

ロゼッタがそう言い終った直後、魔法陣から発せられる淡い光に包まれまた三人は不思議な感覚に陥りました。

三人がいなくなった部屋はまた元の通りの無機質な静寂に包まれる。何故、彼女達がこの特別な空間に来ることができたのか…それを彼女達自身を知るのはもっとずっと後のことになってからののです。そう、あの写真の人物『時の勇者』がかつてそうであったように…。

第五十四章 番外編 魔法デパート（後書き）

《とある宿屋の一室》

気が付くと、いつの間にか三人はもといた部屋に戻ってきていた。相変わらず窓の外は暗く雨が降っている。時計の針もほとんど進んでいないようであったが、三人の手に持った大荷物がさっきまでの出来事が現実であったことを物語る。

「楽しかったけど…やっぱりあつと言っ間だったな」

エレノアが荷物を床に置きながら言った。

「確かに時間の有効活用にはなつたけど…結局のところ時間が進んでいないんじゃ要するに暇つぶしにはならないってことにさっき気が付いたよ…」

ミーシャがそう時計の針を見て嘆く。確かに、結果的には彼女の言う通りになってしまったようだ。しかし、ロゼッタは笑顔でこう言う。

「でも、なんか冒険がわたし達に与えてくれる無限の可能性を肌で感じた気がして良かったよ。もっとも、夕飯まで何をして遊ぼうかこれから考えるのは大変だけどね」

ロゼッタのその言葉に三人は顔を見合わせて笑う。なんだかとっても幸せな気分になれた気がした。

第五十五章 明烏（前書き）

ある物事の終わりはまた別の物事の始まりに過ぎないなんて言葉がありますが、この物語にはそんなニュアンスが度々出てきます。旅の終焉は何処へやら…また新たな目的を持った旅がはじまりそんな臭いがしてきます。

第五十五章 明烏

《魔界の異変》^{ブルート}

「コロツサルが死んだ…なんと由々しきことだ」

ここは魔界^{ブルート}の某城、ガイアでコロツサルが死んだことを知ったルーインは絶望に打ちひしがれていた。

魔王直属のいわゆる四天王はそれぞれがいくつかのアジトや軍隊を有しており、各々に役割を分担してこの世界^{ブルート}を統括している。

ちなみに彼の役割はまだ幼い魔王に代わっての政治や国の運営等のコントロールである。

「これもやはりサキユバスの策略か…あの野望の亡者め。このまま何も起こらなければ良いのであるが…我が軍を魔王城本城にできるだけ集めておく必要があるがそうだな」

暗く曇った空を窓越しに見上げながら彼はそう呟く。かつての同士の死を悲しんでいる暇は無い、一刻も早く手を打たなければならなかった。

きっと大変なことが今この世界で起ころうとしている…彼の勘はそう言って止まなかった。

《世界の平穏》^{ガイア}

「みんな今頃何してんだらうなー？」

「まあ、そう心配するなエレノア。やつらのことだから上手くやっているだらうよきつと」

「とりあえずイブキとシロとベンケイはジパングに里帰りして…それからエリオットは実家、ココアはバベルに残ってるんだよね。エリーとティティスのお姉さんは？」

「ああ、姉さんならエリーと一緒にエリーの親父さんの経営する会社で働くことになったそうだ。これで相変わらずニートやつてるのは俺達だけになっちまったわけだな」

テイティスがそう苦笑いする。お昼過ぎ、とある人里離れた丘の上：エレノアとテイティスは二人揃って丈の短い草が一面に生い茂る地面に座って空を眺めていた。

とても良い天気だった。青い空の中をゆっくりと白い雲が流れ、心地よいそよ風が二人を撫でるように通り過ぎてゆく。ちなみにロゼツタとミーシャは『野暮用がある』とか何とかでここ数日は別行動である。

「もうあれから一ヶ月近くも経つんだよね…ロゼの傷心も癒えていればいいんだけど」

エレノアがそう草を手で軽くむしってみながら言った。世話好きの彼女としてはやはりロゼツタとコロツサルの件に関して心配な様子。「俺達是可以るだけフォローするしかないよ。後は彼女自身の気持ちの問題だからな、さり気なく見守ってやろう」

テイティスがそう言う。あの娘があまり人から物事を言われるのを好かないことを二人はよく知っていた。同時に彼女が意外と悩みを抱え込んでしまう性格であることも既知だったから、その辺が少し心配だった。しかし、今の二人にできることと言えばごく自然に彼女と触れ合うことを心がけるくらいなものだ。

「うん…そうだね」

エレノアはそう静かに返事をした。

「心配と言えばアクアやあの兄弟のことも気になるよな。まあ、そんなに柔な連中じゃないとは思うが…従うべき主人を失ったんだ、しばらくはまともに顔も合わせられそうにないな」

「だよー…今度アクアと会ったらなんて話せばいいのやら私」
二人は揃ってため息をついた。今まではあれこれ必死すぎて気が付かなかった相手の心情などを考えると少しは落ち込みたくもなるもの。しかし、それは不可抗力的なものでどうしようもない。

「これからどうしようか私達？」

しばらく風に当たって間を空けてから、エレノアが話題を変えるようにそうティティスに尋ねた。さすがにこの空気はまずいと思ったのだろう。

「それはあれかい？この先の旅の予定なのか？それともこれから何をしようかってことかな？」

ティティスがそう意味深な笑みを浮かべながらエレノアに詰め寄った。

「ばつ、バカ野郎…急に何を言い出すんだよお前」

彼はちよつとからかったつもりなのだが、当の本人はだいぶ顔が赤い。ここまではいつものことなのだが、今日は二人を邪魔する人物が誰もいないところが違っていた。

しばらく間があつてそれからエレノアが恥ずかしそうに、でも勇気を振り絞つてこう切り出す。

「ティティスが私達と一緒に旅をしてくれるって言ってくれた時…ものすごく嬉しかった。これでまた好きな人と一緒にいられんかって」

「エレノア…」

最初は冗談半分だったティティスも、エレノアの様子を見て真剣な顔付きに変わった。エレノアはさらにこう続ける。

「最初はあなたのこと好きになるなんて夢にも思わなかったんだ。でも、ひよんなことから一緒に旅することになってさ…気がついたらあなたのことばかり気にしてた。その…あんまり格好良いことを言うつもりはないんだけど」

「それは俺に対する告白って捉えていいのか？」

「い、いや…別にそうゆうつもりじゃ…ただ、言いたいことは今のうちに言っておかないとなつて思つて」

ティティスの核心を突いた発言にエレノアはさらに赤面する。告白…確かにそうかも知れなかったが、エレノアはそれを認めるのが少し恥ずかしかった。でも彼のことが好きなのは隠しようのない事実

だったし、もうそれを隠していられないほどに彼女の彼に対する心は膨らんでいたのである。

「俺もまさかこんな展開になるとは想像もしてなかったよ。まあ…ぶつちやけ恋愛経験は人並みにはあるけど長続きしなかったし。上辺だけの付き合いじゃなくて、お前みたいに本音でぶつかってきてくれるやつがいてくれて嬉しかった。俺もあんまり上手くは表現できないが…エレノア、お前が好きだ」

そう言い終わるか終わらないかの間に、ティティスはそつとエレノアを抱き寄せるとそのまま彼女の口元に優しく口付けする。エレノアもそれがあるがままに受け入れ、しばらく二人だけの特別な時間が流れた。

…それからどれくらい経つてからか、接吻を終えまだ興奮が冷めあらぬうちにエレノアがこんなことを言う。

「極限状態で育まれた愛は長続きしないってよくいうけど…あれって本当だと思う？」

「例えそうだとしても、俺達そんなに極限状態ってわけでもなかったんじゃないか？」

「ああ、それもそうだったかも」

ティティスの言葉にエレノアは妙に納得した様子で頷く。それから何が可笑しかったのか自分達でも分からないまま、二人で大笑いしたのであった。

《野望と陰謀》

「とりあえずレクイエムと元コロッサルを取り巻きの一部は味方に付けたとしてだ…これからどうする？俺達がやるうとしてしている事はクーデターみたいなものだぜサキュバス」
グレーの髪と瞳の男がそう問いかける。

「クーデターね、それは違うよネビュラス。これは世直しさ、平和ボケしたこの魔界を以前のような強大な軍事国家に戻すだけのこと。平和路線だった先代の魔王もコロツサルも今はもういない…残るルーンを叩き潰せばもう私たちの邪魔をする者はいなくなるだろうよ」

サキュバスがそう余裕の表情で言った。

サキュバスとネビュラスの二人はとある作戦を実行に移すための詰めの協議を魔界にあるサキュバスの秘密の隠れ家で行っているところである。実はこの二人、いわゆる四天王になる前からの親しい仲でしかも気が合うことは周囲には意外と知られていない。そんな二人が企てていたの一言で言えば国家の乗っ取りである。

「軍と関連の事柄は全て準備万端だ、平和ボケした魔王軍に勝つのはそう難しくないだろうよ」

「油断は禁物だネビュラス。先代の魔王の時代から私達が進めてきた計画だ、そう簡単に失敗はできない。だが心配も無用…万が一のために強力な兵器をいくつか用意してあるからな」

サキュバスがそう不敵な笑みを浮かべる。

「ふっ…相変わらず抜け目が無いなサキュバスは」

「実行の時は近いよネビュラス…もうすぐこの世界は私たちのものになる。フフ…アハハッ！」

《終わらない不穩》

「まったく…いきなり押しかけて来てコーヒーはやだ紅茶がいいなどとは随分ですね」

ココアが少し不機嫌そうにミルクティーをすすする。

「しょうがないじゃーん。連絡手段とか無かったし…まあエンドラーズの墓参りが終わったらすぐ帰るからさ、ミーちゃんの用事もあるしね」

相変わらず能天気ニコニコしながらロゼッタが言った。

ここはバベルの塔のすぐ近くに立てられた小屋。その小屋の主はバベルの塔を守る役目をエンドラースから引き継いだココアである。謎の襲撃者事件で殺されたエンドラースの墓参りにロゼッタとミーシャは来ていたのだが、事件の時は一面の焼け野原だった大地に何事も無く咲き誇る花々を見てちょうど切なくなっていた頃であった。もともと、一番の目的はこの後に控えているミーシャの一件なのだが：墓参りはついである。

「とりあえず一区切りついたから挨拶がてら来てみたらこの様ね：時の流れは残酷ってことかしら」

咲き誇る花畑を窓越しに眺めながらミーシャは溜息をつく。

それから三人は他愛も無い世間話をしてから、外へ出てエンドラースの墓の前で手を合わせた。無言の中、静かで雄大な風の音だけが辺りに響き渡る。

「エンドラース：もっとゆっくり話したかったよ」
ロゼッタがそうポツリと呟く。今となってはそれももう叶わぬ夢と
なってしまった。

「あなた方のご活躍をエンドラース様もきつとお喜びになると思います。：それからこれはあなたが持つべきでしょう、お預け致します。魔法使いは杖の一本くらい持ってないと勤まりませんからね」
そう少し笑って言いながらココアはミーシャにかつてのエンドラースの愛杖、ライブベアラを渡した。

「ありがとうココア：きつと役立てるよ」
ミーシャもライブベアラを力強く受け取った。

しばらくエンドラースの墓前で三人は考え事をしていた、それが思い出だったのか後悔の念だったのかは誰にも分からないが：。やがてロゼッタとミーシャはココアに別れを告げ、次の目的地であるマソファリへと急ぐのであった。

この時のロゼッタとミーシャは移動にワニガワを使っていたので何

処にでもすぐに飛んで行ける。午前中にココアの家を飛び立ってからもその数時間でマンファリの上空に到着することができた。

「…ちょっと、着いたわよロゼッタ。飛行機じゃないんだから寝るのやめてよね」

ワニガワの背中で猫のように丸くなって眠っているロゼッタをミーシャが起こす。相変わらずこのロゼッタとゆう生き物には緊張感が無いようだ。

「ふにゃ…ん、もう着いたの？」

「そうよ。…寝返りうって落ちないか心配してたんだから
いつものようにミーシャがため息混じりに言った。

「へー、そうなんだ」

そんなミーシャに対してロゼッタがあっさり、でも何故か嬉しそうに言う。

「な、なに…？」

それを不思議に思ったミーシャが聞き返すと、

「ミーちゃん最近ちょっと変わったよね？」

ロゼッタはまた何故か嬉しそうにその一言だけ言った。

「…あんたらといれば嫌でも変わるわよ。それに私はそんなに善良な女じゃない」

珍しくあからさまにミーシャは恥ずかしそうな表情。そんなミーシャの様子をこれまたニコニコしながらロゼッタは見るだけであった。その後すぐに魔法使い協会の屋上に直接ワニガワを降ろし、いつものように召還を解くミーシャにロゼッタがこう質問する。

「あれ？いいの直接乗り付けちゃって？」

「ああ…まあ呼び出したのは向こうだしね。めんどくさいじゃん」
ミーシャはそうあっけらかんと言う、ポケットから高そうな紙で作られた招待状を出しながら。

「あ、それが例の招待状？」

「むしろ出頭令状だよロゼッタ。…このタイミングで協会に呼び出されるなんてただ事じゃないね。ま、迎えが来るまで屋上で待って

ろって指示だから今は待つしかないけど」

相変わらずそう淡々とミーシャは言う。しかし、この呼び出しがただ事でないのはいつもより口調の速いミーシャの様子を見ればすぐに分かった。

そんなわけでとりあえず屋上で待つことになった二人。さっきまで晴れていた空はいつのまにか灰色の薄雲に覆われている。二人は体育座りをしてそんな灰色の空を眺める。

「…ねえ、ロゼッタ」

珍しく無口なミーシャの方からロゼッタに話しかける。

「なあに？どうしたのミーちゃん？」

「さっきあなたは私が変わったって言ったけど…あながち間違いじゃないと思うよ」

「？」

「…ま、きつとそのうち分かるわ。私の過去を知ればね」

なんだかよく分からないって表情を浮かべるロゼッタにそう意味深な笑みを浮かべるミーシャ、その意味を間も無く知ることになるうとは夢にも思わないだろう。

それからすぐ後のことだった、下の階から屋上に繋がる階段の扉が開きそこから典型的な魔法使いの衣装を纏った初老の男が姿を現した。

「パラミス…」

その姿を見るなりミーシャはそう男の名前を呟く。

「しばらくぶりだなミーシャ。魔法使い協会のトップが直々に来てやったとゆうのに随分とうかない顔だな？」

パラミスはそうミーシャに語りかける。まさか魔法使い協会のトップがこんなところで登場するとは流石のロゼッタも少々驚きの様子しかし、ミーシャはまるでそれを分かっていたかのように冷静そのものだった。

「久しぶりだねパラミス、手紙の差出人は協会になってたけど…蓋を開けてみればやっぱりって感じね」

「ふふ、呼び出される心当たりが全く無いってわけじゃなさそうだな。…その様子じゃまだ本調子でもなかるうに？」

「ご心配どうも。けれどもこれは付き合い上の都合…既に元の姿に戻れるだけの魔力はもう蓄えてある」

パラミスとミーシャはそんな会話を交わすが、その様子を見る限りどう考えても仲が良いとは思えない。もつと言うならば過去に何かあった間柄を臭わせる。だが、ロゼッタにはそれよりももつと気になる言葉があった。

「元の姿…？どうゆうことなのミーちゃん？」

ロゼッタがそうミーシャに問いかける。その表情は不安とも放心ともつかない微妙なものだった。

「…そうね、百聞は一見にしかず。まずは驚かないでね…」

静かにミーシャがそう告げると彼女の体は淡い光に包まれ、可愛らしい少女の姿から麗しい大人の女性へと姿を変えた。その長い白銀の髪と青い瞳はよりいっそうの輝きを放つ。

「ああ…なるほど、ミーちゃんもそうゆうあれだったんだ」

「ごめん、隠すつもりはなかったのよ…でも言い出すタイミングがなくてね」

何となくだがロゼッタもミーシャの現状というか状況を把握したようだ。理由はともかく、まさかミーシャが自分と同じように魔力の制限により子供化していようとはロゼッタも夢にも思わなかっただろう。

「ははん、なるほど…その様子じゃお前が過去に犯した大罪についても話してはいまい。もつとも、赤い悪魔にその話をしたところで果たして罪の重さうんぬん言えるかは別だがな」

「罪人呼ばわりされるとはわたしも腐ったものね。…ま、ミーちゃんの事については後で聞くことにするよ。それよりも、わたしの事を知っているってことはあなたもサキュバスの知り合いか何かってところかな？」

ロゼッタはパラミスが自分のことを知っていたことに何かピンと

感じた様子。さらにこう続けて言う。

「おおかた、ミーちゃんを呼び出しといて取り引きするなり半殺しにするなりしてこのわたしをサキュバス側に上手く引き込むように仕向けるつもりだったんでしょ？ミーちゃんを人質にしてね。…でもまあこの際だから言っておくとその件に関しては断固拒否だよ。

確かにサキュバスとは昔は仲が良かったかも知れないけど今は違うしそれはお互い様だからね」

「ふん、まあ確かにその通りさ。…そうか、サキュバス様の味方になるのがそんなに嫌か？」

パラミスが改めてそう聞くと、

「嫌だね、理由はちよつと考えれば分かるだろうよ」

今度はちよつと強い口調でロゼッタがそう言う。

「諦めなよパラミス、この子は一度言い出すと聞かないから」

ずつと微妙に分からない話を聞いていたミーシャもしびれを切らしてそう言った。しつこい議論はミーシャにとって退屈以外の何物でもない。

「なるほどな、それでどうする？もしこの場で俺がお前らを殺してもサキュバス様の前に引きずり出すとでも言ったら？」

「もちろん決まってるよ、あんたを殺してそのまま立ち去るだけだね」

「…せつかくもらったこの杖をライフベアラー試しに使うついでにあんたを殺るのも悪くはない」

パラミスに対してロゼッタとミーシャは好戦的な態度でそう言った。この状態で負ける理由が無いことを二人はよく知っていたし、パラミスもすぐにそれを理解したようだ。

「まあ…この状態では俺とて相打ちには持ち込めるだろうが勝算は皆無だろうな。分かったよ、お互いにこれ以上干渉することもないだろう。俺はこれ以上何も言わん、もつともサキュバス様は自らの夢を諦めるようなことはしないだろうがな。もう帰れ、無駄な戦いを避けたいのはお互い様だ」

パラミスはそうため息混じりに言う。わざわざこんな危ない連中を相手にするのは何の利益にもならないとそう思ったのだろう、あっさり諦めた。

「その選択は正解だよパラミス、じゃなかったらとつくとくに死んでるからね」

ミーシャが少しだけ柔らかい表情でそう皮肉った。

「俺も暇じゃないんだ、サキュバス様から預かった物の得体の知れない封印を解くように依頼されたからな。闇の香炉とか言っただけな、まああんまり開きそうにないのだが」

「相変わらずサキュバスは人使いが荒いというか上手いな。ま、せいぜい頑張ろうねお互いに」

そうロゼッタが労いとも皮肉とも取れるような台詞を言う。

「ふっ…お前らもあのお方には気をつけることだな。逆らうとろくなことにならんぞ」

パラミスはそんな捨て台詞を吐くと、静かに背を向け建物の中に戻って行った。

「なんだかなあ、もっとスリリングな展開を期待してたのに」

パラミスのいなくなった屋上で爪をいじりながらロゼッタがそう言う。

「いいじゃない、何事もなかったんだから」

そう言うミーシャはいつの間にかちゃっかり見慣れた少女の姿に戻っていた、もう危険は無いと悟ったのだろう。こんな街中の大きな建物の屋上でドンパチやらかすと後が大変だっただろうに、それを避けられたのは久しぶりだし非常に大きい。

「まあそりゃそうかも知れないけどさ、あれだけ怪しく臭わせとい
て…」

ロゼッタとしては不穩の芽はこの場で潰しておきたかったようだ、それが特にサキュバス絡みのことならなおさらの様子。どうやら彼女はサキュバスに何かトラウマに近いものがあるようだ、これはまだ聞いていないから誰にも分からなかった。

「とにかくあまり気にしないことねロゼッタ、こつちに害がなければそれでいいんだから。…きっとこの後色々と話したいでしょうから今日はどっか食べに行こう、私がおごるから」

「本当にミーちゃん？最高級ステーキとか食べても？」

「…行く店は私が決めることにするよ、ロゼッタの胃袋が相手じ金と命がいくらあっても足りないからね」

変なところで意気込むロゼッタにミーシャはそう苦笑いするしかなかった。

《それぞれの道》

「まさかあんたがルーイン様側に転じるなんてね、ちょっと驚きだよ」

「うっさいあー…私の勝手でしょマリア？」

ここは魔界某所のファストフード店、仕事終わりにアクアとマリアが色々話し込んでいるところであった。

「コロツサル様のことは残念だったしあなたのコロツサル様への忠誠心は分かるけど…時代の流れを考えればサイコとドリーマーの言う通りサキユバス様とかネビュラス様の側に付くのが利口つてもよ。噂じゃもうすぐ内戦が始まるって言うし…」

「あの二人にも同じこと言われたわ。でも、私はコロツサル様のお考えに背くような派閥に加担はしないって誓ってるの。…マリアやサイコやドリーマーが怒るのを覚悟でね」

半ば説得気味のマリアにアクアはそうキッパリと言った。アクア、マリア、サイコ、ドリーマー…昔の仲間同士、同じ派閥の仕事場で仲良くしたいと全員がそう思っていたに違いない。でも、そんな中でアクアは自分の仕事に対する『裏切らない』とゆうポリシーを捨てることはできなかった。魔王やコロツサルと同じ穏健派であるルーインに比べ、コロツサルの意思を継ぐことを彼女は選んだ。しか

し、それは同時に複雑で悲しい結果を生み出すことも彼女は受け入れなければならなかった。

「そう…昔っから一途で頑固なところは変わってないのね。私達がサキユバス様の配下である以上、あなたと公の場で仲良くすることはもうできないでしょう。…でも安心して、私達の友情はそんなに簡単には揺るがない。なにか困ったことがあつたらいつでも相談して頂戴」

マリアはため息混じりではあつたが、そう優しい笑顔で言った。正直なところ、彼女はアクアの性格をよく理解していたからこれ以上の説得は無駄だと判断したのだろう。

「うん、ありがとう…派閥が違つてもずっと友達だよ私達」

「まあそんなに重たく考えないでよアクア、何だかんだで大丈夫だつて。それよりも例の人間の子と何か進展があつたら教えてね」

「そう言われちゃうと調子狂うな！…ティティスはティティスでよく分からないんだよね」

アクアとマリアはそう顔を見合わせて笑った。

少女達は世界に蔓延る権力の流れの中で必死に生きようとしている。

第五十五章 明烏（後書き）

友人関係とは難しいもので、その距離が近すぎても遠すぎても上手くいかないものです。時と場合によってはある程度の距離を置くことも大切でしょう、互いの信頼関係があればこそその友情なのですから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0435b/>

ノスタルジア

2011年10月3日16時14分発行